Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

七月號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

七月號目次

兒童の世紀（翻譯）　一　山田わか
眞實の心より（小說）　一五　濱野雪
斷章（詩）　四一　齋賀琴
處女作（小說）　四四　千原代志
幕間になる迄（戲曲）　五五　岡田ゆき

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

獸性と人間性に就いて（論文）　六五　原田皐月

青疊（小說）　七四　五明倭文

五月の末より六月へかけての芝居　九〇　岡田八千代

偶感　一二三　九七　野枝

編輯室より　一〇五　野枝

表紙　奥村博

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

兒童の世紀――エレン、ケイ――山田わか譯

第一章

兒童の兩親を選擇する權利

過去の悲しい追懷と未來に對する熱切な希望に滿たされて、人は世紀交代の日を待つた。そしていよ〳〵十九世紀の最後の鐘聲が報ぜられた時、彼等は數限りなき、言葉に云ひ現す事の出來ない前兆を感じた。彼等は、新世紀が少なくとも平和を齎す事は確かであらうと感じ、又は、意識的に或ひは無意識的に現に努力して變化の過程に貢獻して來た人々も其の變化のうちに何等新たな發達を見る事は出來ぬであらうとも感じた。

世紀の移變にあたつての世の狀態は、新世紀をして、恰も、今や地上に降らうとしつゝある、赤裸の小さき小兒の如き觀を與へた。彼は地上に近よりはしたが、武器で刺だらけになつた此の世界の有樣に怖氣て、後退りしなければならなかつた。新たに生れた世紀のためには、足を踏み入るゝに、一寸の自由の地を見出す事の出來ないやうな世界であつた此の殺氣だつた光景の意義に付いて、人は思考せねばならなかつた。經濟上の鬪爭及び戰

爭が、如何に、人類の劣等な、あらゆる惰性をそゝるか、又、十九世紀中の驚くべき文明の發達にも拘らず、何故人類の生存競爭の仕方は少しも改善されなかつたか、又、何故此の狀態が猶續かねばならぬかに付いて彼等は硏究した。けれども其の結果の彼等の解釋は區々である。或る人はこう斷言して安じて居る。飢餓、生殖及び富、權力に對する慾望、此等の人間性が昔と同樣今も存在して居て世界の進路を支配して居るのだから、社會の狀態に變化があらう筈はない。と 又、他の人は、こう、信じて云ふ。世界の進向を變へやうとしての一千九百年間の教訓が無益であつたとしても、其れは外面だけなので、實は、いつか、其れが人間の靈魂のうちに生きた實體となつて現れる。そして劍は剪枝刀と變る時が來る。と

けれども私の確信は其等とは丁度反對である。社會の狀態は、人類の性質に變化が起るだけ、其れだけづゝ變遷して行くものである。そして、その人類の性質の變化は、何時、來るかと云ふと、其れは全人類が基督教徒になつた時ではない。けれども全人類が『子孫の神聖』を自覺した時である。そして此の自覺は、子供の出生其の起原、其の取扱ひ、及び其の教育を社會の中心事業とする。そして、凡ての道德、法律、及び凡ての社會的設備は、此れを標準として成立し、排列され、あらゆる問題はこれを標準に解決されるのであ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る。今日迄にも、教育は國家の最高の職務であると、學校的演說や、教育上の論文に於ては、唱導されて居た。けれども實際には、家庭も學校も又國家も、全然、別な要件を旣定して居るのである。人類が『子孫の神聖』と云ふ見解を信じるには、彼等が基督敎的人生觀を全く抛擲して、そして數千年も前に生れて居たが、やうやく此の十九世紀中に頭を擡げ始めた、人生觀をとらねばならぬ。

發達と云ふ觀念—人類を其の最後の、そして最高の點に置く—は過去、數百萬年間の世界の經過を說明するのみならず、猶、又、我々の未來をも輝して居る。則ち、我々人類は肉體的に心理的に常に進化しつゝある事を其れは證明して居る。往時は人類を肉體的に心理的に固定した現象として看做して居た。其の性質は完全には導き得るけれども變化さす事は出來ないものと信じて居た。が、今日では、人は自身を改造し得ると云ふ事が知られて來た。墮落した人と云ふ代りに我々は未成人と云ふ。彼は將來、無限の時間のうちに無數の變化を經て、一人の新人と生れ替る事が出來るのである。殆んど每日のやうに新知識は報道され、從來不可能と見做されて居た事を可能と呼んで居る事は確かに心理的に生理的に人類の力の擴張を證明して居る。內界と外界との密接なる關係、疾病驅除の術、靑年期及び生命の延長、又は生理的及び心理的の法則を洞察する力の增進等、かくの如き新報

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

告は絶へず我々の耳にする處である。又、不活の盲者に一種の視力を與へ、死者を甦らすなぞと云ふ主張は、今は未だ、單なる假説に過ぎぬけれども心理學者及び物理學者は此れをも可能なるものゝ中に數へて居る。とにかく、人類が未だ人類に至らなかつた時代からの其の變化を回顧し、解剖すれば、今日の狀態が、決して、人類創生の最後でない事が充分明らかである。人類の性質は常に同じで變化するものではない。其れは、人類が生れてから、僅か二三千年の間に、彼等が自身を知覺し始めた頃と丁度同じであると、今日、宣言する人があるとすれば其の人の考察力は、ユラ期に於ける鰐魚の其れと大差ないものである。其の頃の鰐魚は確かに今日の人類進步に付いては夢にも想像し得なかつたであらう。けれども人類が絶へざる進化を通じて今日に至つた事は、未來に於ける人類發達の可能、則ち、より高尙な人類になり得る事の證據である。人間の意志は動物界及び植物界を思ひのまゝに改良して行く。けれども我々人類の事になると、人間は其の改良及び向上を唯偶然の結果のやうに思ふて居る。人間は今日迄、唯、盲目な刺戟によつて無責任に行動して來たのだが、文明は其の行動の目的及び責任を自覺させなければならない。實に文化は、動植物界に驚くべき發達を現したにも拘らず、人類を新たにし、向上せしむる點に於いて最も後れて居る。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

古代の人間のもつて居た、肉體の意義に關する純直な確信を、今日、再興するには、人間に對する科學的見解の力を全部用ひねばならぬ。古代の末期に於ける、ソクラテス及びプラトーの敎へは靈が肉體を卑しめ、そして文學復興時代は靈肉の合致を計つた。けれども其の盡力は不幸にも充分眞面目なものにならずに終つた。勇氣を缺いて居たのではないけれどもゲーテの云へる如き嚴肅な目的をもつて大膽に近よらねばならぬ業を、其の當時は仕遂げ得なかつたのである。我々は、如何に靈と肉が共同に造られてあるか、或ひは又如何に靈と肉が相互ひを裏切つて居るかを知る故に人類は今、再び肉體の權利及び其の神聖を認め、其の不淨ならざる事を主張し始めたのである。

結婚は二個の人間が共同生活をするため、偶然に出來た、唯、社會上の形式で、本當のかくべからざる道德の要素は其の形式ではなく、二個の人間の生活の仕方である事を人が知るや否や、モーセの十誡のうちの第七條が如何に無意味になつたかは、或る「でんまるく」の著者が指摘して居る。道德は、命令及び强制の客觀的原則から、行動を生み出す主觀的基礎に、置き替へられつゝある。倫理は品性の倫理となつた。其れは性格の素質を取り扱ふ。我々は各個人の內的素質によつて、要求もし、寬恕もし、判斷もする。客觀的の見解から、法律に背く行爲を我々は直ぐに不道德と云はぬ。各々の場合ひに各個人の內部の事

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

情に從つて事を決定する。此の見解から、今日の結婚法を見ると、此の形式は、其れが、兩性關係に對して適當な處理法であると云ふ保證を與へて居ない。眞の意味の兩性關係は形式結婚以外にも亦以内にも存在する。高尚な眞面目な人々は、形式結婚よりも、もつと遙か道德にかなつた兩性の關係を選む。其の結果、前述の十誡のうちの第七條の意味が變つて來る。此の誡は明らかに結婚以外の凡ての兩性關係を不道德として居るから。けれども人々は既でに結婚以外の共同生活の經驗を始めて居る。彼等は兩性關係の新しい形式を求めて居る。凡ての此等の問題は今や討論の種となつて居るのである。

人類は此の點に付いて、多くの發見の餘地をもつて居る。彼等は、今や、兩性の凡ての關係は如何に復雜な問題であるか、如何に危險の伴ふものであるかに付いて、益々目を開いて來た。個人に對し、子孫に對する兩性關係の意義に付いては絕へず新しい觀察が試みられて居る。此の渾沌たる狀態の中に漸々と光を衝す事は人類のため、最も要用な仕事である。故に文學は此の範圍に最大自由をもつべきである。けれども現今の傾向は丁度其れとは反對で、文學の此の自由は大ひに制限を加へられて居る。前述の兩性關係の見かたの傾向に付ひては、異議はないが此所に特に注意して置きたい事がある。人類の起因及び性質に付ひての基督敎の見解は此の問題を自由に論ずるに大なる障碍物である。墮落からの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

唯一の逃れ道は基督を信仰するにあると云ふ、此の見解から、西方歐洲に於ては、種族の繼續に關するあらゆる事柄は淫猥である、出來得る限り抑壓せねばならぬ、がもし抑壓出來ぬとならば、少なくとも其等の事柄に付ひては沈默を守り、曖昧のうちに覆ひ隱して置かねばならぬ、と云ふ輿論が出來上がつた。基督敎の信仰によると、此の世の生命ではなく天上に於ける永遠の生命に重要な原動力がある。そして、此の生存の二元主義は、人間の生來の刺戟を高尙ならしめやうとはせず、却つて制慾主義をもつて第一に其の刺戟を除去しやうと試みる。此の見地が、今日、猶一般に受け容れられて居る事は、文學及び美術に於ける裸體を法律が禁じ得て居る事でも明瞭である。

兩性關係は汚辱なものだが、解除を許さぬ結婚によれば神聖になると云ふ基督敎の見かたは或る時期の間、人類發達の上に大なる直接な影響を與へた。其れは靈の生活を向上せしむる、自治の精神を涵養した。愼しみ、家庭生活、誠實が其のために鼓舞された。そして此等が他の無數の勢力に伴つて愛の刺戟を增進した。もし人間の愛に此等の情緖がなかつたとしたら、人間も動物も同等なものである。

配偶者間の愛情は常に人から遠ざかり、及び隱し立てを要する事、又人間の築いた貞節の心が人間を動物から區別して居ると云ふ事は差し支へないが、併し之に關する重要な諸問

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

題を徒らに羞ぢ、沈默のうちに葬り去り、或ひは戯言や廉恥心を引き起すものとして曖昧のうちに取り扱はうとする、此の種類の考へは人間の心の根底から取り去られねばならぬ。

此等の問題に對しては、各人が彼等の幼年時代から、彼等の發達の度に從つて適當な眞面目な敎へを受けて居らねばならぬ。かくして彼等は彼等自身、男としての或ひは女としての、天性を悟り、そして未來に於ける相互の關係に付いての責任を深く、感ずる事が出來る。人は此の問題に付いて、眞面目に考へ、眞面目に話す事の習慣を養はなければならない。かくの如くにして、始めて、高き道德と共に高尚な性的關係の存在を見る事が出來るのである。

ブジエルンソンが其の著『トーマス●レンデレン』に於て、若年者に自然の法則を知解せしめ、清廉の心を養はしむべしと、論じた時、私は彼の著作に反對した。其の理由は、彼の說も基督敎の云ふ清廉と同じで、自然の情慾を高尚化しやうとはせず、其れを抑壓するのが主意だからである。ブジエルンソンが二つの新しい見解――肉體の健康と性的關係の向上――を呈出した事は私が指摘して置いた如く確かである。彼は基督敎の主張する如く、此の問題に付いて、精神及び人格の方に偏しはしなかつた。此の點は確かに有意義である。何故ならば、此れは一致共同の感情が生んだ愛他主義に個人主義を結び付けたから。ブジ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

エルンソンの大目的は、遺傳的の性情を、道德に對する態度に關係ありとして、改善しやうとするのである。其故、彼は完全な、幸福な、新たな子孫を造り、今日の性的不調和に起因する、あらゆる苦痛を社會から取り去らうとするのである。そして彼は、學校は此の目的をもつて生徒に性的關係の知識を授け、且つ人類の義務として、彼等自身及び其の子孫を如何樣に庇護すべきかに付いて、敎へねばならぬと、主張したのである。

此の計畫にも私は反對した。此くの如き知識は學校が授くべきものではない。家庭に於て母が氣長に、注意深く敎ふべき事柄である。學校は、唯、理論の基礎を敎授する處である。猶、大なる缺點は彼の貞操說である。彼は積極的理想ではなく、消極的に、單に、肉體の淸淨を眼目として、此の問題を扱つて居る。けれど貞操に對する熱望は、戀愛の理想のみが其の覺醒を促すものである。そして物語歷史、及び美文學のうちに、かやうな理想の根底は造られねばならぬ。此の問題に關しての生理學上の知識は、思想及び感情が其の同じ方向に働くにあらずとは、甚だ不充分なものである。思想及び感情は、丁度、基督敎の敎訓に感化されないと同じやうな、自然科學や肉體の操練から、影響を受けるものではない。

我々は自然科學の基礎の上に、古代人のもつて居た、肉體の力と美さに對する崇拜心、

及び種々の繼續の神聖に對する尊敬心を、更に新しく、更に高尙ならしめなければならぬ。そして此れに、近世の自覺した理想的愛の精神的幸福を結合しなければならぬ。かくして初めて、眞の貞操に對する要求が、人類を、其の性的不調和、及び墮落の苦しみから、救ふ事が出來るのである。往時、婦人は種族繼續の役目を負ふものとして神性視され、又基督敎に於ては聖母として婦人が神性になつた。此の事實は深大な意味のある事である。此の古代及び基督敎の婦人觀が結合し、高尙にされて、婦人は女性としての尊敬を受けねばならぬ。古代の愛、近代の愛、感覺の愛、精神の愛、此等が結合し、高尙にされて、人類は男も女も等しく愛の神を全能なものとして崇拜せねばならぬ。

戀愛の意味を輕んじ、賤しむべき肉慾主義だとして其れに反抗したからとて、人類が高尙になるわけではない。却つて其れは人類を貶下する。何故なら、性的生活は動物性の特徵だとして人類が羞恥を感じて居る間は、其の生活は其れだけ低級である。種族繼續の業も下等な義務として考へられ、いや〳〵ながら營まれるならば此れも、亦、其れだけ低級なものである。

リカーガスの法律が、一國の力は强壯なる婦人の懷に養はる、と斷言した時に古代は現代に勝つて居た。それ故、スパルタに於ては婦人の體育を男子の其れと同樣に注視した。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

そして結婚年齢は健康な子を生み得る程度で定められた。猶太教は生殖に付いて嚴肅な概念をもつて居る事に關しては、上位に置かるべきである。此の確信は、史上に明らかな、あの嚴重な衛生に關する法律のうちに明白に現れて居る。他の東洋の法律の如く、「ゆだや」の法律は自然の法則及び疾病を精密に觀察した結果の飲食並びに性的道德の上に其の基礎が置いてある。此等の問題に付いての新道德の基礎は、人類が舊約全書的の敏捷及び嚴肅な態度をもつて、基督教の理想主義が精神化したけれども同時に貶下した、人生問題を取り扱ひ始める迄は、築く事は出來ないのである。

此處に云ふ新道德は、不健全なる子孫を造り或は子孫の發達に惡影響を及ぼすやうな結合でさへなくんば、如何なるかたちの男女の共同生活をも不道德と云はぬ。故に此の問題に關する十戒は宗教建設者の手ではなく、科學者によつて規定されねばならぬのである。併し、今日迄は、かやうな事柄に付いては、一部分は曲解の愼の結果、科學は人種改良の根本に於ける、生理的、心理的條件を充分に觀察する事が出來なかつた。

フォン●レヴエンホック及びグラーフ等に提唱された個體發生論(Ontogeny)は確に現世紀に於ける新科學である。此れは千八百二十七年フォン●ベールが其の基を建設して置いたものである。けれども此の新科學に付いては意見の違ひ、新學說の發見等、續出して何

時果つべしとも思はれぬやうな、今は、有樣である。純科學的見解が、社會的、生理的、又は倫理的見解と混合されて居る。母の食物を變更する事によつて胎兒の男女を定め得ると主張したり、或ひは又天才の五分の三は初腹の子である事を證明しやうと企てなどした。

子供の上に、兩親の年齡が如何なる影響を與へるかに付いて研究された。兩親のあまりに若年は、あまりに老年と同じく子供のために不利である。あまり若い母の兒は虛弱であるのみならず母自身が未だ子供時代にあるのだから、彼女は母たるの喜びを感ずる事も出來ず、且つ又彼女にとつては生理上、心理上、子供は大なる重荷である。强壯な發育のためしかな子を得るには婦人の結婚年齡を延ばさなければならない。北方諸國に於ては法律によつてゞなくとも、少なくとも習慣によつて婦人の結婚年齡は二十歲頃と定めねばならぬ。さすれば若い婦人は數年の間何の繫累もなく其の靑春を樂しみ、自己啓發を計り而して母たるに適した身體の發達に達する事が出來る。最も早くて二十歲頃とは定めても實際にはもう數年遲れた方が結婚生活並びに子供のために幸福である。しば〳〵見る所の夫婦間の葛藤は、多くは、婦人が未だ其の人格も出來ず選擇の力もない時に、一生の運命を定めた事から起るのである。通常男子が愛の對者を選むが、選まれた婦人があまり若年だと、彼女は愛される幸福と、愛す幸福との區別がつかない。そして後には悲劇に陷るやうな事に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なるのである。遺傳及び自然陶汰に關する諸問題に關聯した一ツの問題がある。其れは最も性質の隔絶した男女の間に最も強い牽引力があると云ふ事實に付いて、自然の目的の意味を觀察する事である。此の牽引力は、往々、結婚生活中、嫌惡の情に變化する事がある。そして其の原因は、以前には彼等の心を強く引きつけた對者の特徵が鼻について怺へきれなくなつたのである。此の場合の自然は、彼女の目的を仕遂げるために、個人〳〵の幸福を大いに奪ふ事になる。が、併し兩親の相異る性質は彼等の間に生れる子供のうちに、よく調和されて現れる事もあるし、又時には全く對立して不調和に遺傳される事もある。勿論此の二ツの場合に例外も度々ある。此等の事柄に付いて滿足な解決を得るには未だかず〳〵の研究を重ねなければならない。

後天的特性が遺傳されると云ふダーウィンの說と、遺傳は先天的特性に限ると云ふ、ゴールトン及びワイズマンの說との間に論戰はなか〳〵盛んである。そしてこれに伴つて血族結婚の問題が起つた。或る論者は、血族結婚は其れだけで有害だと說き、又他の論者は血族結婚其のものには害はないが、血族である以上は兩親のうちに同一の特性がある事は度々である。そして其の特性は子の上に二重に強くなつて現れる。たとへば兩親が生來近視眼であるならば。子の上には其の度が高まつて盲目となり兩親の愚鈍は子の白痴となり

兩親の憂鬱症は子の發狂になると云ふやうな恐れがあると說いた。

（つゞく）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

眞實の心より——濱野　雪

その手紙を受取つた刹那に、私の心はたゞ直覺的に『さう〳〵』と叫んだ。まるで豫期してゐたものゝ如く、最後の手紙といふ事がはつきりと意識されたのである。私は暫時の間ぢつと身を固くして、見慣れた藍色の封筒を見詰めてゐた。それからしづかに封を切つた何か怖ろしいものにでも觸れるやうに、私の手がぶる〴〵と慄えた。でも、私は割に落着いてそれを讀む事が出來た。最初から行を追ふて、しつかりと讀んで行つた。

（その時のその態度を思ふ度、私はしみ〴〵と涙ぐむ。悄い自分ではあるけれど、矢張り泣いてやりたくなる。）

私は妙な卑怯者であつた。戀人から手紙を受けた時、夫が何か事件の起つてる時なれば尙の事、一方ではじり〳〵する程それを待設けながらも、亦一方では寧ろ恐れ戰いてた。この矛盾した二つの心が、いつも私を苦しめて、私は自分にさへも愧ぢ乍ら、そつと、そ

つと、宛名とそして終りの五六行とを慌てゝ讀む。――丁度夫に依て吉凶を占ふやうに。そしてやつと安心して、初めて最初から讀出すのが癖であつた。だのに、其夜に限つてしつかりと最初の行から讀んで行つた。――その心持を、私は自分ながら哀れに思ふ。それ程までに自分から求めた、この戀の苦しさに疲れ果てゝゐたのである。この生き乍らじり〱と生血を絞られるやうな、苦惱に疲れ果てゝゐたのである。

中程まで讀んで行つた時、私の眼がぴつたりと吸ひつけられたやうに動かなくなつて了つた。私の眼は同じ文字の上ばかり一心に眺めた。すると急に涙が湧いて來た。私は齒をくひしばつて泣いた。泣いた。

泣き乍ら、それでも最後までしつかりと讀んで行つた。それから『これはほんとうに考へなければならない』と、勵ますやうに自分の心に呟いた。烈しい惡寒を感じ乍らもう一枚羽織を重ねて、再度きちんと机の前に坐つた。十二時近い頃である。家中で私一人が目覺めてゐた。そして私一人が考へて居た。

初め私が直覺したやうに、世間並の戀の最後のやうに、只別れるといふだけの事ならば私は決して泣きはしなかつたであらう。また決して考へはしなかつたであらう。けれどIは、只別れるとは言はなんだ。『戀人としての昨日までを棄て去つて、新らしい友としての生活に生きやう』と言つて來た。其心持に泣かれたのである。其處に私は私より更に深切なるIの苦惱を見た。そして泣いた。其涙は感謝の涙である。悔の涙である。

ほんとうに私は考へなければならぬ。

斯う思ふて、短いと言へば短く、長いと言へば長い、五月餘の戀の經路を虚心に顧みた時何よりも先づ私は私の不誠實であつた事に愧ちた。Iに對して。又自分に對して。

不誠實――

この醜い呪ふべきしみが、二人の戀の記錄のどの頁の裏にも、まざまざと異黑な痕を殘して居る事を知つた時、私は慚愧と悲痛に戰慄した。しかも或場合には、意識しつゝ尙夫を行つた事を思ふて、私は恐怖と苦惱に聲をあげて泣いた。こんな醜い、こんなあさましい心を持つた女が、他にまたとあらうかと、私は自分で自分が憎くてたまらなくなつた。

（實際私は恥かしい卑怯者である。自分のこの醜さあさましさを自覺して、耐らなく自分を憎み初めつゝも、まだ夫を人に知られる事をひどく怖れた。口惜しいとも考へた。けれど遂に私は懺悔せずには居られなくなつた。奈何しても書かずには居られなくなつた。夫を私は眞に喜ぶ。弱く卑怯であつた私の心の一隅に、よし僅でも斯る強さが芽ぐんで來た事を眞に眞に私は喜ぶ。

その目覺めたる眞實の心より、又僞らぬ懺悔の心より、私は血と涙を以て之を書く。

最初私がIに近づいたのは、決してIに對する戀を意識した爲では無かつた。たゞ其頃の私はやたらに寂しかつた。前の男と別れてから三年の間、佗しい孤獨の生活に飽き果てて、もう誰かの手にすがらなければ一日も安んじては居られぬ程、強く愛に饑ゑてゐた爲である。あながちIに限られた事では無かつた。私のこの我儘な愛を受けて與れる人でさへあつたならば、きつと私は奈何な人の許へでも走つたであらう。（それを私はほんとうに恥かしい事だと思ふ。けれど夫が眞實であつた。）そしてまた其頃私は病氣をした。毎月の事ではあるけれど、其度に些細な事にも昂奮する癖の病的な心理が、殊に烈しく動搖して居た。私は毎日熱臭い床の内に居て、涙を流したり、溜息をついたり、又は本を讀んだり

した。或日私は久しぶりでIの作物を讀んで見た。と急に私は不思議な程昂奮して來た。堪らなくIがなつかしく思つて來た。そして殆ど發作的に手紙を書いて了つた。――夫も眞實であつた――。

(茲にも私は私の不誠實を見附ける事が出來る。何の顧慮も無しに、たゞ一時の感激に任せて、あゝした手紙を書いたといふ事が、自分一人のみかIまでをも、苦しむ事のどん底まで苦しめて了つた。永久に消えぬ悔と悶へとを殘して了つた。私は心から自分の不誠實であつた事を、憎み且呪ふ。)

Iはその作物を見るやうにほんとうに柔しい人であつた。可成波瀾に富んだ過去を持ち乍ら、たしかに私よりは純な美しい感情に生きて居た。男の我儘と見得は強くとも、少くも不誠實では無かつたと思ふ。たゞ最後には矢張弱者であつた。夫に私は泣かされる。

Iが私の僅二三本の手紙にも直ぐ動かされて、戀といふ字を筆する程、感激し易い若々しい男だと知つた時、私の胸は妙に波立つた。一時の昂奮は消えて了つたけれど、其代り愛

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に餓ゑた心と、もつと其男を能く知りたいといふ好奇の心と、漸次に濃くなつてきたなつかしみの心とで、ぐん〳〵其方に動いて行つた。しかも私は思はせ振りな手紙のみ書いてなるべく何時までも逢ふまいとした。夫には逢ふて互の美しい幻影の、無慘に破れる事を悲しむ思も元より有つた。まだ〳〵さうした恭の朧夜を往くやうな情調を、懷かしめるだけ懷かしみたいといふ、初心なこどもらしい願望もあつた。けれど――

私は斯うして逢はずに居れば、もつともつと男が熱く成つて來るといふ事を、いちばんに能く知つて居た私はIの感情を、又自分の感情を弄んで、密に喜んでゐたのである。少しでも自分が强者の位置に在る事を意識して、そして誇としてゐたのである。

ほんとうにさうである。逢ふまでは、たしかに私に强味が有つた。併し只一度逢つたその後は――常にIが强者であつた。私は私の靈も肉も、全てが男の手に握られて了つた事を知つた瞬間に、何とも言へぬ苦痛を感じた。そして男を憎む心持が徼に發して來た事を感じた。又同時に、矛盾した幸福をもはつきりと意識した。

私がIに對して動き初めてから丁度二月目の、二月の十七日であつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『豫期して來なかつたか』と言つた、Iの一言が、想ひ起す每に毒針のやうに鋭く心を刺して、其度に私の頰は深い羞恥に新らしく燃える。

愛を囁いた男と二人で、世間に隱れて相遇ふたのである。『豫期して來なかつた』と誰が言へようぞ。さらば『豫期して來た』と答へ得るか。夫にしてはIの熱烈な抱擁を受けた時私は餘りに醜く周章てた私を見た。

（玆にも私の不誠實を認める事が出來る。私はたゞ唇を嚙んで冷たく泣く。）

（一度でも全てを許したといふ事實が、どれほどの强い力を以て男に結びつけたかといふ事をしみ〴〵考へる。）

Iには同棲してゐる女があつた。Iは『たゞ過去が二人を縛りつけてゐるのだ』と言つたさうした家庭の慘めな事をも苦悶しつゝ語つた。けれど、とにかく現在同棲しつゝ在るのである。其事實も私の苦痛と憎みとを濃くした。しかも私は男から離れ得なんだ。――といふよりも、寧ろ其爲にと私は言はう。その不思議な自分の感情に醉ひ乍ら、殆ど每日のや

うにIに逢ひに行つたのである。たゞ逢つて、僅の時間を倶に歩み、倶に語るといふ、それだけの果敢ない逢ふ瀬に滿足して、そして逢ひに行つたのである。

若し、この私の一時の愧づべき昂奮から生れた、苦がい悲しい戀の記錄の中に、少しでも愛すべくなつかしい顏があるとすれば、夫はこの一月餘りの私の和かゝつた感情である苦痛と憎みに打克つて、熱いIの愛に醉ふ事の出來た、幸福な私の其時分である。

たしかに私は幸福であつた……。

でも、斯うした淺い幸福が何時まで續くものであらうぞ。私は直ぐに苦しくなつた。直ぐに動搖して來た。Iも同じやうに苦しがつて來た。矢張り動搖して來た。二人はもつともつとしつかりした位置に立つて、もつともつと切實な、突き詰めた愛のうちに生きたいといふ、燃ゆるやうな慾望が、日に日に二人の胸に生長して來た事を、明らかに意識したのであつた。

そこで先づ二人は、私が私の家庭から、兩親の手から離れる事に苦心した。可成幾多の困難を經た後に、夫は奈何にか成功した。私は毎日いそ／＼として、私一人の住むべき明るい家を求めて歩いた。丁度夫は四月の半の、花ぐもりの空のみ續く頃であつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私は私達二人の住む家を求め得なんだ事を、涙ぐまれる程悲しく口惜しく思ふ。私の愛が最も純に燃えてゐた其頃は、夫でも甘んずる事が出來たであらう、けれど、遂には夫が破綻であつた。私は私の兩親から離れる事が出來た。IはIの女から離れる事が出來なんだ。事情が許さぬとIは斷言した。

（よし夫がどれほどの複雜な事情に絡まれてゐるにもせよ、事情は果して絕對的なものであるだらうか。私は今冷靜に之を考へたい。）

でもとにかく其頃の私は、Iを戀ふる心でいつぱいであつた、飽かず家を求めて步いた。併しさうした場合にも尙我儘を棄て得なんだ私は、住む家に就ても餘りに多くの期待を抱いた爲に、何時までも何時までも求めて步かねばならなんだ。十日と經ち、二十日と空しく暮す中に、私はだん〳〵にいら〳〵して來た。飽き易い、疲れ易い私の感情が、何時の間にか疲勞を覺えて來たのであつた。そしてじり〳〵と人には言へぬ妙な腹立たしさに、冷たい淚を嚙み乍ら、寢られぬ夜が幾日も續いた。さういふ時、私はきつと考へた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

何故Iは I の女から離れる事が出來ないのであらう。

何故せめても一緒に家を探してやらうとも言つて呉れないのであらう。

私はIとIの女に對する嫉妬をば、日に日にはつきりと意識して來た。同時にIの愛に醉ふ樂しさよりも、苦痛と憎みに惱む事の方が多くなつた。Iの女の事に就いて、私が屡Iに言つた言葉は、最初の間は冗談を多く含んだ輕い皮肉であつた。Iも私も微笑を以て應答してゐた。夫が漸次痛い皮肉に變つて行つた。二人とももう笑へなくなつた。私は私の言つた痛い皮肉が、自分の心をも烙くやうに苦しませた事を覺える。

其時である。

私は私の一人の子が危篤だといふ報知を受けた。

此世に唯一人の自分の子、夫は三年前に別れた男との、これも苦しかつた戀のかたみであつた。生れ乍らにして呪はれた運命を持つ哀れな子、母は有つても無い可哀想な子、其子が死に瀕して居ると聞いた刹那、私はたゞたゞ泣いて泣いた。直ぐにも飛んで行つて、その冷たい小さな軀を熱い涙で霑はしてやりたい。頰に胸に火のやうなキスを與へて、新ら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しい生命に甦らせたい。斯う考へて、私は直ぐに出發しようとした。けれど――

私は遂に行かなんだ。

行つて、子といふ絆が私を昔の生活へ引戻す事を怖れた。Iと直ぐ離れる事を怖れた。

私は生命を削らるゝ如き苦惱と鬪ひつゝ、三日の間惱み伏した。そして少し落着いてから、Iに遇つた。遇つて打明けて、その熱い愛の手にさへ縋れば、この苦惱から、この悲痛から、全く救はれるといふ事を堅く信じて。

遇つた。語る私はひどく昂奮して居た。聽くIはひどく冷靜だつた。私が昂奮すればする程、Iは反對に冷たくなつた。之がまた私の豫想して來た態度だらうか。私は口惜しさと憎さに溢れる涙をじつとこらへた。とうとう最後に私は斯う言つた。『行くも行かぬも貴方の言葉一つに任せる』と。しかも其時私は三日がゝりで決心した。『行かぬ』と言ふ覺悟を一層堅く心に誓ひ乍ら、なほ且さう言つたのである。と、Iは言下に、『母ならば、無論行くが至當だ』ときつぱり言つた。『では行きます』と私は答へた。そして二人は冷たく別れた。――

何の未練も無げに遠ざかる素氣ない後ろ影が、どれほど憎く思つた事だらう、私は賑か

な巷に、人目も愧ぢず血の涙を流した。

夫から三四時間の後、私は黑く流れる大川の畔の、薄暗い寺の塀に添ふて佇む私を見出でた。暴風雨の後のやうに亂れた胸が、掻裂いて摑み捨てゝも了ひたい程、じり〳〵と重苦しく惱ましかつた。私はじつと唇に血を滲ませ乍ら、戸の隙間洩る二階の燈を見詰めて居た。彼所にIが坐つて居る。强く冷やかに、宛然王者のやうな態度をとつて私と別れたIが、あの女と倶に坐つてゐる——。

斯う思つて、私はたゞおろ〳〵と泣いた。泣いて二階の燈を見詰めた。

知らぬ間に小雨が音も立てず降つて來た。涙のやうなその雨に濡れて、私はしほ〳〵と親の家へ歸つて行つた。二百里離れた田舍に病伏す小供の事など、殆ど心から消えて居た

この日程、Iを憎いと思つた事は無い。

この日程、Iを戀しいと思つた事も無い。

一夜を惱み明かした曉に、Iへ書いた手紙は、遂に戀ふる心に負けた私の眞情を訴へる苦しい告白であつた。ひねくれた私の我儘は夫を奈何に口惜しく思つたであらう。夫程にも弱くなつた、Iに負けた自分を、齒痒く憎んだ事であらう。でも私はIから離れ得なん

た。Iを戀ふて、私は殆ど熱狂して居た。死身になつて戀ひ戀ふて居た。

私は今死身になつて、熱狂して、と言つた。夫はたしかに眞實であつた。併し、その眞實は一面に於ての――といふ事も否めない。

(私は斯る場合に於てすら、不誠實であつた自分に對して、深い〳〵憎惡と羞恥を感ずる。さうして、斯る恥かしい事實を記さねばならぬあさましい哀れな自分を、泣くにも泣けぬ苦しみを以て眺めて居る。)夫はIに對して大きな虛僞を持つてゐた、といふ事の爲である。

私はIを欺いて居た。ほんとうに嘘を語つてゐた。今はもう自由な身として兩親の許に在る事を秘して、法律上には倘前の男のものであると告げた。そして、其事の爲に動搖するIの感情の波を、不思議な興味と喜悅とで眺めて居た。

(ほんの氣紛れな、併し恥かしい不眞面目から生れた其いたづらが、どれほどの苦しい結果を見るやうに成つたかを思ふと、私は怖ろしさに戰慄する。)

Iは私に對しては强者であつた。けれど、Iは自身及び世間に對しては可成弱者であつた。法律といふ字が強く其心を嚇した事は、其日の言動に依つて一層明らかに裏書される。

（後にIが其日の態度に就て語つた時は、只私が一時でもI以外の事の爲に動搖して、Iを棄てゝ他に走らうとしたのを、戀に生きる女といふ事を忘れて、母としての情に生きようとしたのを、心から憎んだ爲である。とのみ語つた。其心持は私にも非常に嬉しいものとして肯かれる。けれど其他に、今言つた恐怖の心持もたしかに強く動いて居た事を私は信じる。Iも決して夫を否定するまいと信じる。）夫が私を苦しめた。自分の不誠實が、之程までに自分を惱ます事を知つて、苦痛の爲に悶へ泣いた。しかも卑怯な心は自分を憎むと供に、より以上にIを憎んだ。私はとにかく此世に只一人の子さへ捨てた。だのにIは王者のやうな強い冷たさを以て報いた。子の危篤といふ報知を受け乍ら、三日捨置いた私である。Iがたとへ行けと言へばとて、今更行き得るものであつたらうか。Iは何も彼も承知してゐる。如何なに一時動搖しようとも、決してIを棄て、戀を棄て、母としての情に生き得る私では無い。といふ事を、憎い程知り悉して居ながらも、尙冷靜に行けと命じた。その態度、その心持が憎くて〳〵たまらなかつたのである。

　けれど私は戀ひしさに負けた。そして熱狂して手紙を書いた。夫程の手紙であつたものを、まだ私にはその虚僞を懺悔して、Iの宥しを請うだけの勇氣が無かつた。若くは誠實が無かつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

（私はほんとうにIに對して自分の罪深い事を感じ、その贖ひの爲ならば、如何な侮蔑も苦痛も甘んじて受ける丈の覺悟をした。それだけの覺悟が出來た事を、如何なに喜んでゐるだらう。）

併し其頃の私はさうでは無い。意識しつゝ尙虛僞を懺悔する勇氣が無かつた。それ程弱い私は、それだけ尙强く苦悶したのである。二重に三重に私の心を讀みつけて、ぐいぐいと食ひ入る深刻な苦痛が、いくつもいくつもの重なり合つた惱みが、片時も私を落着かせては置かなんだ。私はせめて華かな明るい空氣に醉ふて、暫時なりとも苦しい自己を忘れようと努めた。そして每日每夜芝居や寄席の群集に交つた。併し夫が何程の慰藉を與へて呉れようぞ。私はたゞ空しい疲勞に、以前にも優る苦惱をいだいてうなだれた。

しかしIは、期待した以上に溫かく再度私を迎へて呉れた。二人は矢張り二人だつた。『要するに、淙々と流れて居た水が一時淀んだものに過ぎぬ。元の流れにかへれば夫で何事も無いのだ』とIは言つた。私も夫を肯いた。幾日振りかでやつと笑へるやうな、和らかい心持に成れた事を感じて、しみじみと更に新しくIに對する愛が湧いて來た。私はひ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ごく昂奮した。今更のやうに愛を誓ふ、男の言葉を求めたりした。

『私は何も考へなくともよいのだ。たゞ男の抱擁のうちに生きてさへ行けば』

斯う幾度も私は心に囁いた。そして、その日から再度家を求めて出歩いた。日數を言へば僅十日餘りの事に過ぎぬけれど、眞實生命を削らるゝ苦しみに疲れた私は、この愛に依つて甦り得た事を切に〳〵感謝した。二人は矢張り二人だつたといふ事を、恍惚と嚙みしめるやうに味ひ乍ら、涙ぐんで喜んでゐた。こんどこそ、春は永遠に二人の上に輝くものと信じてゐた。

けれど、夫も唯一時の幻影に過ぎなんだ。一度淀んだ水はもう决して、元の通りに淸んでは流れなんだ。

私はあの日から急に眼に見えて、Ｉが强味を見せて來た事に、直ぐ惱み初めたのである。私がもう片時もＩを離れては生き能はぬと言ふ事を、此度の事件によつてはつきりと裏書された時、Ｉは私に絕對の服從を强いようとして、態度にも言葉にも露骨に夫を示して來た事に對し、私は直ぐ壓迫を感じ初めたのである。

男の我儘としては夫が至當であつたかも知れぬ。又所謂女らしい女ならば、當然の事と

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

して受けたかも知れぬ。しかし私には非常な苦痛であつた。まともには男の面も仰ぎ見させぬ重苦しい壓迫を受けて、私の心は殆ど本能的な反感に燃え立つて來た。反感は軈て一時眠つて居たIに對する憎みと嫉妬とを、更に烈しく強く喚起した。私はもう泣くにも泣けぬやうに成つた。Iを憎み、自分を憎み、以前に增した憎みの底に毎日もがいた。漸次Iに逢ふのを避けたくなつた。

でも時々は發作的に、熱狂的に、たまらなく逢ひたくなる事があつた。さうした時、逢ひに行けば、逢つてる中はたまらなくIが戀ひしくて、Iの爲とさへあらば、どんな犧牲にでも喜んで成らうと、不思議な程しほらしい感情にひたる事が出來た。そして自分と自分に感激して、顫へたり涙を流したりした。しかも別れて了へば、矢張り元の荒んだ感情に苦しみもがいて、咀はしい夜晝を送らねばならなかつた。

私はすつかり疲れ切つて了つた。

『何故私は、私達二人の爲の家を求める事が出來ないのであらう』

疲れ切つた頭腦で繰返し〳〵考へたのが之であつた。

全く二人で生きる事の爲ならば、まだ私にもどんな苦痛にも打克つだけの覺悟はあつたと、私は眞實の心を以て斷言し得る。けれどIは他の家庭の人であつた。

Iは言ふ。

『たゞ三年の後を待て』と。

亦、言ふ。

『彼女は將來の生活に對する安定さへ與へれば、夫に滿足して直ぐ離れて行く女である。しかも現在の自分としては、滿足する丈の十分な保證を與へる力を持たぬ。玆に三年とい ふ時間に俟たねばならぬ必要が生じる。そして二人は其日まで慘めな生活を續けねばならぬのである』と。

これがIの謂ふ『許さぬ事情』であつた。

私はもう一度重ねて考へたい。『事情とは、果して絕對的なもので有らうか』といふ事を――。

ほんとうにそこには些かの妥協も許されぬものであらうか。

私はIの誠實を疑ひたくはない。夫を全で男の見得に歸して了ひたい。夫にしても何故

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Ｉは『お互の未練の爲に』と厳まず語る事をしなかつたのであらう。

私は私が只一つ此事に就て、Ｉを責め得る强味を持つと信じて居る。

私はほんさうに疲れて了つた。奈何にもあがきの附かぬどん底まで落ちて、苦しむ事にまで疲れて了つた。私はもう家を求める事もせず、遇ひに行く事もせず、うつらうつらと病み伏して居た。餘りに堪へ兼ぬる其時は、愚な自分を嘲り乍ら、後の悔と惱みを意識し乍ら、なほも一時の刺戟を求めて、再度華かな群集の裡に逃れた。

斯うして、逢ひもせず、手紙も書かぬ日が十日續いた。私は一人が苦しんで居るものとのみ考へて居た。あれ程私を壓迫してゐた强者のＩに、同じ苦惱が有らうなどとは、夢にも思ひ及ばなんだ事である。或時はＩを思ふて憎さに泣いた。或時はＩを思ふて戀しさに泣いた。矛盾した二つの思が間斷無しに私を責めた。しかも私の胸裡に映るＩの面影は、常に王者の衿持と强さに冷たく微笑して居たのである。

『奈何にでも成れ』

最後に玆まで行詰まつて、私はもう泣かなんだ。そして落着てあの手紙を受ける事が出

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

來た。それだのに――

（私はもう一度繰返す。）

讀んで私は狂ほしいまでに身を責めて泣いた。ありたけの涙を血を絞つて泣いた。初めて知つた自分より以上の切實な、深刻な、Ｉの苦惱に、奈何謝罪したらよからうか、奈何感謝したらよからうか、奈何自分を處置したらよからうか、と、物狂ほしくもがいた。

そして私はやつと目が覺めた。自分の醜さを明らかに知る事が出來た。私は私の目覺めたるをほんとうに喜ぶ。Ｉの愛に依りて救はれたるを、眞實の心を以て感謝する。

苦しい戀から脫れて、友としての愛に生きようといふ。人は『卑怯な妥協』として、その弱さを冷笑するかも知れぬ。しかも私はその弱さ故に、なほ一層Ｉのなつかしい事を思ふ何故なれば――

若しＩが最後まで强者であつたならば、決して『卑怯な妥協』へ脫れようとは考へなんだであらう。きつと少しの未練も無しに私を棄てゝ、斯かる煮切らぬ苦痛に煩はされる事

を避けたであらう。隨つて私もこの『救はれたる歡喜』を味ふ事を得ずに、何時までも醜い自己に執着して、慘めな生活を續けて行つた事であらう。

斯う考へて來て、私はしみ〴〵Iに感謝した。自分の罪深さを省みては、この贖ひの爲なれば、身も心も投げ出してゞも、Iの爲の幸福を求めねばならぬと、堅く决心した。その時、ふと私はこれまでに覺えぬ。ほの〴〵と温かい新らしい愛が、幽に心の底に萠え初めて來た事を感じた。

私は今はつきりと、自分が精神上の或不具者であつた事を思ふ。戀を戀する事しか出來ぬ、哀れな女であつた事を思ふ。

私の戀の悲劇の根は、常に其處から生じたのではあるまいか。

(私は如何なる場合にも除き去る能はぬ、二つの刻みつけられた俤を、心の底の底に抱いてゐる。)

一つは私が『こゝのつの頃』といふ追憶に書いた、秀雄と假に呼ぶ俤である。丁度私が女になつた十五の春、ふとその昔の記憶が新らしく甦つた。私は不思議にその記憶に惹き附

けられた、たゞさめ〴〵と泣いた事を覺えてゐる。そして其日から私の心にその俤が刻まれた。逃へば逃はれる人を故意と避けつゝ——或は私の記憶は空想が生んだ夢であるかも知れぬ。けれど夢としては、餘りに明るく鮮かだつた。

も一つは、其少し以前から知つた、Kと呼ぶ人の俤である。Kは舞臺に生きる人であつた。そして今も尙舞臺に生きて居る。私はそのKの持つてゐる、しみ〴〵と胸に食ひ入るやうな、人間の純な涙が何時も何處かに滲んでゐる、突きつめた藝の力に魅せられて、つい倶に泣き倶に笑ひ、何も彼も忘れて舞臺の情調に同化して了ふのが常だつた。それ程私はKに惹き附けられてゐた。十餘年前の其頃から今日まで、少しも變はる事無しに。

私はこのKに對する心の動き方を、戀であるとは斷言し得ぬ。又、戀で無いとも斷言し能はぬ。たゞ私は、舞臺以外のKに對しては殆ど何の要求も感せず、時折逢ふて語るといふ、夫だけに十分滿足して來たのであつた。決してより以上近づかうとは考へもしなかつた事である

（しかし、心の底の俤は、常に溫かく抱かれて居た。）

私は奈何しても、純眞な戀をする事の出來ぬ、哀れな不具者である事を自覺した。徒らに人をも自分をも惱まし苦しめるばかりの戀は、全く私の心から棄て去らう。もう決して再度戀といふ事は思ふまいと、堅く〳〵自分に誓つた。眞實に誓つた。

永遠に戀を棄て、永遠に戀から棄てられた女の寂しさ。私は今眞の孤獨の寂寥を知り得る――。

あの事のあつてから、友としてのIと初めて相見た時、私は一層その感を深くした。私は二人の間に急に遠い〳〵距離を生じたことを、しみ〴〵とした思で眺めやつた。ふと話の途切れる時など、私はしみ〴〵とIの横顏に見入つた。けれど、さうした寂寥の中を流れる安らかさが、ともすれば涙ぐまれる眼を和らかく拭ふて呉れる事もあつた。『二人は友としての溫かい愛の中に、永久に助け合つてたゞ樂しく、苦しむ事無しに生きて行かう』と誓ふやうに語り交はした。そして只何事も無く、これまでのやうに別れて歸つた。私は感謝と懺悔を持つて行つた筈である。だのに其事に就いては何事をも語り得ず、空しく別れて歸つて來た。

何處まで卑怯者であらう、打ち附けにIに面しては、妙な羞恥が口を開かせなんだ。不

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

思議な未練が躊躇させた。夫を私は重ねて愧ぢる。そして別れた其夜から、語り得ぬ懺悔を懺悔したい、抑へ切れぬ眞實心に責められて、戰き乍ら書き初めたのである。――

茲まで書いて來て、ふと私は或る強い恐怖に襲はれた。

Iは私がこれ程にも、醜いあさましい女と知らなんだ爲に、『卑怯な妥協』にも甘んじようとしたのであらう。すれば夫を悉く知り得た曉にも、なほ以前と變らぬ心持で接して呉れる事が出來るであらうか。

萬一――さう考へて、私はほんとに堪らなくなつた。泣いても泣いても涙が込上げて、私はじつと唇を嚙み乍ら突伏した。

しかし、夫も皆自分から求めた報ひである私はどんな答をも受けねばならぬ。

或は眞實に最後であつたかも知れぬ、その日のIの俤をしつかりと抱きつゝ、私は、徹にこの恐怖を意識して、『若し、友といふ事にさへも堪へられなくなつたなら』と、そつとIを仰ぎ見て自分を想ひ起してゐる。『――私は大丈夫だけれど』と、強く呟くやうに繰返

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

した自分をも想ひ起して居る――。

私はたゞ私を泣いて遣りたい。

私は今疲勞の極に在る。一週間に渉る高度の發熱と、絶えざる苦惱とに、めちや／＼に昏亂した頭腦は、到底冷靜に物を考へ、夫を纒める餘裕を持たなんだ。しかも私は書かねば成らぬ。苦しみつゝ、昂奮しつゝ、夜も晝も机に對つた。五日かゝつてやつとこれだけの物を書上げた時、私はもう物も言へなんだ。幾度危く昏倒しようとした事だらう。私はほんとに私の血を以て之を書いた事を思ふ。

その惱みの深かつたそれだけに、懺悔の後の疲れた心に、さびしい、けれど懷かしい、しみ／″＼とした平安が訪れて來た。そして夫と倶に、ほの／″＼萠え初めた新らしい愛が、漸次濃く深く根を下して來た。

この美しい愛の心。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

今まで私の知らなんだ、純な温かい愛のこころ。

何卒この愛の温かさを以て、Iをしつかりと抱擁したい。何卒この愛の力を以て、Iを少しでも幸福に導きたい。——夫が私の生きる唯一の途である。

ほんとうに私は、私の此後をして、只この愛を生長させて行く事にのみ、あらゆる力を盡さねばならぬ——。

（四、六、十三）

（眞實の心より、この懺悔をIに捧ぐ。）

大分落着を得て來た心で、再度讀返して見た時、私は私があまり昂奮したゝめに、ひどくしどろもどろな、矛盾したやうな、物の言方をした事に氣附いた。いつそ書直してとも思つたけれど、亦思ひ直して其儘にする。——とにかく、それが其折の『眞實の心』であつた故である。

私は、私がほんとうに心の平靜を得た折、もう一度之を書いて見たいと、切に切に希ふて居る。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

斷章

齋賀琴

金色の光うすれて
又やみは海をおそふ
遠山は波間に消えて
打そよぐ風もさびし
海ぞひを今日も行けば
わがかげの砂上にしみぬ

忘れ得ぬ戀人よ
火と燃えにし功名の思ひよ
つかの間の夢はさめて
今は只、只獨り世を偲ぶ
これやこの若きうれひ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

鬱憂の心重く
たど〱と砂上を行けば
あはれ夜はおごそかに
おごそかに我に迫る

∴

はる〱と海をこえて
ひとりすむこの島
椰子の風すゞしき岩に
やすらひてものをぞ思ふ
るり色の空のかなた
椿咲くふるさとよ
ほとゝぎす啼く山里よ
いとしきわが子はいかに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

國を出でてすでに三とせ
わが病未だいえず
最愛しきわが子はいかに
波高く海鳥啼けば
わが袖も潮に濡れぬ

戀人よ、いとをしき戀人よ
君はいづこ、わが魂は
只せちに君をこそ呼べ

はれやかに笑みたまひて
わが方を見たまへ
春の夜の淡き夢に
涙含むわれを見給へ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

處女作―千原代志

翌る日は日曜日だつた。

客分のYさんを除いて、ボイドさんの家の誰彼は皆、教會の日曜學校のために八時半から出かけてしまつた。寢坊したYさんは九時過に床をはなれて十時の禮拜に間にあふ樣に仕度してゐると、突然留守居の小母さんの取つぎで、M牧師の來訪を告げられた、Yさんは一寸驚いた。大急ぎで袴を着けながら、部屋に通す樣に小母さんに言つた。

外面的な挨拶をすませて火鉢を中に對座した時Yさんは、來訪の意味をたづねる樣に牧師の顏を眺めた。牧師は躊躇もなしに「是非お相談したいことがあつて來ました。」と前置して、それでもそれから先は口ごもりがちに、

「妻が氣をわるくしましてね。」

「え丶？奥樣が、それはお氣の毒でござひましたのね。」

「昨日蘆の浦へ行つたのを、「Yさんと一緒でせう」つて言ふから、虚言は言はれないので「え丶」つて言つたもんですからね。」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

牧師の言ひ方と、そのしほれた様子が可笑しくつてYさんは思はず笑ひながら。

「さうですか、それがどうしたと仰有るのでせう、私は誰にもあなたと一緒に參つたなどとは申して居りません。」

「だつてさうたづねられて、まさか虚言は言はれませんしね。」

「それや勿論ですわね。それで奥さんが大變斜なんですか。」

「え丶僕はすつかり決心したんです、昨日あなたに申上る筈だつたんでした、僕はもう我慢が出來なくなりました、別府へ行かうとおもひます、別府には僕の伯母が待合を開いて居ります。あの土地では可成にやつて居ります、それに仲々解つた女ですからい丶様にして呉れるでせう、でなくば熊本にも矢張親戚で藥種問屋をやつてるのもあります。どちらだつて必さうまく計らつて呉れませう、一時さうするのが一番い丶方法だと思ひます、別府だつてこれからは實にい丶とこですよ、それであなたの御意向を承りに來ました。あなたもいろ〳〵御考や御都合がおありでせうから、明晩までに手筈を、それとも御意向を定めて置いて下さい。」

「あ丶先生一寸お待ち下さいまし、明日迄など申上なくとも私にも決心がございます。」

「では一緒に行つて呉れますか。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「…………………………。」

「さう決心して頂ければ、僕は直ぐ決行する迄です。」

「私にはそれは出來ません。」

「出來ません？じやどうなさらうつてんですか、成行に任せますか。」

「……… ………………。」

「あなたはそれでいゝかも知れませんが、私の立場としてそれは出來ません、到底不可能です、どうか將へ直して下さい、明晩迄に。」

「私の決心はたゞ一つなんでございます私はあなたを知らなかつたと思ひませう、精神の牧者として人々から信用のあついあなたをして少くもそれ程迄に動搖おさせ申し、何の理解もない、惩う申しては失禮ですが、お氣の毒な奥樣に迄そんな御苦痛をお與へしたことは、私として懺愧に堪えられません。私は私の道を行きます、先生もどうかお心をお鎭め遊ばしてもとくごほり奥樣を御勞りになつて敎會のために御つくしなさひまし。」空涙ならぬ雫が彼女の頰を傳ふてはらくと膝の上に落ちた。

「………、あなたの御決心はそれですか、僕は…………僕は今が今迄さうとばかりは思ひませんでした、今更僕として…………。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「これほど儘ならぬものとは思ひも寄りませんでした、私は決して再び先生の御心に煩を殘す事は致しません、決して。」

「あなたはそんなにお考へになる事が出來ますか、僕は今あなたと別れたとて、僕の苦痛は永久に…………。」

「私が××へ歸つちまへばそれまでじやございませんか、それに私はまだ、遼遠な前途を有つて居ります。お互の爲にはどうしても一時の感情を犧牲にしなければなりません。」

「ご最もです、前途あるあなたをして犧牲を强いるに忍びません、お構ひなくあなたの道をお進み下さい、僕も蔭ながらあなたの御成功を祈ります。」

「有難うございます、私もこんなことにならうとは思ひもかけませんでした、ではどうぞ惡く思召さないで下さいまし。」

「何の少しも惡くなど思ひは致しません、時間も迫つて來ました、僕は一足先に失敬します。」

銷然として去る牧師の後姿を玄關に見送つたYさんは、部屋に歸つて倒れる樣に机に突伏すと暫く身動もしなかつた。軈て抽斗から昨日彼から受取つた、手紙を取り出して今一度讀み反した。直に平靜に歸ると靜に起つて、敎會に途をいそいだ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

教會は萬事例日の通りだつた。信者等も例日の通り眞面目だつた。若い技師の夫婦も例日の通り睦しさうだつた。恐らく此數日來に醸された出來事を知るものとては牧師とYさんとより外無かつたらう。牧師の夫人は此日出席しなかつた。例によつてヒステリー症でふて寢をしたのだとは後になつて分明した事實だつた。無知な信者や鈍感な教會員等の熱心さと、內におそるべき反逆をつゝむ若き牧者の、殊勝氣な態度との對照は、Yさんにとつてはあまりに露はに過ぎて解き難い謎であつた。寧ろ解き難い人世の解剖圖の樣でもあつた。現代の曖昧極る精神上の要求、靈の銷沈と墮落と妥協、見えざる神に賴るもよし、醜は成る可く見ざる樣、見ても見ぬ振をして、自己の本心を迮僞つて、くだらぬ遊戯に安心の道を得やうなどゝあせる衆俗の慘めさ。

人世に、絕體善もなければ、勿論絕體惡もない。善惡の差別を審判する權威者が何處にある。そして罪惡から解き放つて、よく救ひ得るものが何處にある。形式的な祈禱や禮拜や讃美歌の間、Yさんの頭には絕えずこんな懷疑や冷嘲が往來しながら牧師の一擧一動をも尙見遁さなかつた。

牧師は說教をなすべく聖座の正面の位置に立つた。憂鬱な顏、とりすましたわざとらしい態度、內に胚胎する危險極まる思想、衆人の眼は今や語り出さうとする牧師の顏に集つ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。きつと凝視したYさんの眼がはからずも牧師の眼とかちあつた。牧師の唇には微かな笑が漂ふた。Yさんの唇にも冷笑が漂つた、しかしこんな微妙な點に迄誰も氣附くものはなかつた。

孤獨の人、觀照の人、氣無性な我儘な思索家、可危しい喬答摩の追隨者！彼女は他の聽衆と異なつた意味で、彼の說き出すところに聽き耳を立てた。

* * * * *

「視よ作夢者來る」と、（創世記三十七章十九節）彼ヨセフは容貌美しく、ことに父イスラエルの老後の子であれば、父の愛はいたくも他の十一人の異母兄等の誰にも勝りて彼に注がれたのであります。イスラエルは彼にのみ色彩豊麗な紅の衣を製つて着せました。これらの事は自から十一の兄等の心を快しとしませんでした。かてゝ加へて今一つ無智な兄等の嫉妬を煽るものがありました。

生れつき性怜しきヨセフは、夢によつて豫言する靈能を享受しました。即此事は十一の異母兄の嫉視を買ふ大原因の一となりました。しかも彼のこの靈能は彼をしてその一生涯を織りなす波瀾重疊の經緯とはなつたのであります。

彼の兄等は、「彼を惡み、彼に向つて穩和に物言ふことを得せざりき。」（三十七章四節。）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とあります。彼がまだ、カナンの父の下ににあつて、その兄弟とともに、羊を牧つて居る頃、一日夢を見て兄弟に告げました。

「我畠の中に一つの禾束を結び置きしに、わが禾束起き且立てり。汝等の束禾環り伏して拜せり」と、この夢と言とは兄等の妬みと憎惡とを益々募らせました。又或時、

「月と日と十一の星、我を拜せり」と、之には父イスラエルすらも驚き戒めました。

「我と汝の母と汝の兄弟、實にゆきて地に鞠み汝を拜するに到らんや。」と、

ヨセフは父より遣はされて、その十一の兄弟が羊を牧ひ居れるシケムの谷に往き、兄弟等が既に其處に居らざるを見て、ドタン迄追ひ往きて、漸くその兄弟に會ふ事を得ました。

「視よ作夢者來る。」これがこの時兄弟相かへりみて、耳語いた嫉妬と嘲笑の言であります。彼等はヨセフを捕へて穽に投げ入れ、猛獸に喰はれて死んだ樣によそほはんと議し合ひました。彼は特に父より着せられた彩れる衣を剝ぎ取られて穽に投げ入れられました。幸に穽には水が溜つて居りませんでした。玆に兄弟の中ルベンのみは彼を殺す事を憫み、水なき事を知つてひそかに救ひ出さんとしましたが、又兄弟の中或者の發議によつて再穽より引出され、折から通りかゝつた、イシマエルの商人に賣り渡されたのであります。即ヨセフの身は銀二十枚に代へられて、奴隷となるべく、イシマエル人ミデアンの旅商に携へら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

れ、幾日かを駱駝の脊の上に、香物乳香沒藥など丶共に運ばれて、軈てエジプトに着き、エジプト王パロの侍衛の長ポテパルの奴隷に賣られました。

いまいましきヨセフを退けてしかも思はぬ銀を得一擧にして兩得せし十一の兄弟等は、形見の採れる衣をとり、牡山羊の子を屠り、その血を塗りつけて、父イスラエルのもとに到り、汝の最愛の子ヨセフはかくして猛獸の餌食となつたのだと、まことしやかに告げました。父の嘆き哭く樣は眼もあてられず喪を表すに「その表を裂き麻布を腰にまとひ、久しくその子のためになげけり。」(三十七章三十四節)とあります。

然るにポテパルの家にあるヨセフは如何といふに、彼はエホバに愛せられて、其祝福を受け「エホバ常に彼と共にあり」享通者となりました。ヨセフの容麗、人才はポテパルの寵と信を得て、軈て近侍に進み遂に家宰にまで擧げられました。美しく年弱き彼の手には、ポテパル家の全財産が托せられたのであります。此時よりして、エホバの祝福はヨセフのみならず、このエジプト人の家に迄及んで榮えにさかえたと書いてあります。

か丶る時にこそ得て誘惑は現はる丶もので、玆に主人ポテパルの妻、ヨセフの優容に想をかけて日々に言ひ寄つて止みませんでした誘惑は日毎に猛烈でしたがヨセフは斷乎として斥けました。遂に淫猥なる彼女の怨を得て、主人ポテパルに讒訴せられました。この樣

様はバイブルの方に委しく載つて居ります。ヨセフに對するホテパルの信と愛があつかつただけそれ丈、その怒りは猛烈でありました。直ちにヨセフは捕へられて獄に投せられました。けどもエホバのめぐみは尚ヨセフの上にありました。ヨセフの温柔は獄卒の同情と信用あつく遂に典獄として獄中の囚人は悉く彼の手に委ねしめられました。

其後の或時パロ王の酒人と膳夫罪を犯して侍術の臣ポテパルが獄に、ヨセフ等とともに繋がれました。一朝酒人と膳夫は各々その昨夜見し夢について物憂に沈むで居るのを見たヨセフは、之を解き明しました。（中略）（創世紀四十章七節以下を視よ）

ヨセフの夢判斷は適中いたしました、そのためにこそ酒人の長は生命を全うして、以前の職にかへつたのでしたが彼はヨセフとの約束を忘れて、ヨセフの寃をパロにつげ、ゆるしを乞ふ事をしてやりませんでした。

二年の後パロ夢視る事あり。（四十一章）エジプトの法術士と博士と雖も流石にパロ王の此不思議なる夢を解くに由ありませんでした。この時始めて、ヨセフは酒人の長に思ひ出でられて、王の夢を解き、七年に亘るの豐年に續いて來る七年の饑饉を豫言して此時年三十にして既にエジプト全國の宰に任せられ、名もザフナテパネアと改めオンの祭司ポテパルの女アセナテを妻とし、身を以て國家の財政にあたり、その國難に備へしめひいてその

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

彼を陥れし十人の兄弟の糧を需めんため遙々故國より來るにあひ之を救ひ、終末で久しき父イスラエルにも會ひ互に抱擁して幸福な生活に入るのであります。(中略)彼の生涯は實に波瀾極りなきものであります。幼なくしてヘブルなる父の家をはなれ、遠くエジプトに奴隷として賣られたのが、却つて身をたて、家を起す基となつたのです彼自身でも言つて居ります。神汝等の後を地につたへんため、又大なる救をもて汝の生命を救はんために我を汝等の先に遣はしたまへり。」(四十五章七節)

有爲天變とも言ひ、人間萬事塞翁が馬とも申します。ヨセフの生涯にも之を表すものがあります。然るに彼ヨセフは如何なる境遇に身を委ぬるも、その內に終始一貫する、堅固なる信念は常に失ひませんでした。例へば奴隷に賣られた場合にも彼は神の攝理を信じて些も怨みませんでした。勿論德は自身にありと言ひながら、家宰にまで擧げられ而して主人の美しき妻の誘惑があつたにも拘はらず、斷然之を斥けました。そのために再び獄屋の生活までする事になりました。しかし神は知り給ふ、彼遂にその使命を全うするを得ました。ヨセフは幼なくしてその父母をはなれ異邦に漂らふた。現代の若き男女の中にも志を立てゝ家を出づるものが多くあります、甚しきはその父母や兄弟の讃同を得ずして、之に反抗してまで、故郷を後に家を出づるものが頻々としてあると聞きます。之は止むを得ざ

る時代の要求だらうと思ひます。ヨセフの家出と漂ひと、結局おなじ意味です。たゞ一時如何なる境遇に遭遇するとも、一貫する自己の信念の上に、萬難を排して進むだけの勇氣と覺悟が必要であります。

牧師の說教は右の樣であつた。始めは面白く聽いたが、終りの落で皆は烟に卷かれた氣味で呆然した。Yさんだけには少くも了解ざれた。彼女の唇から苦い冷笑が洩れた。

――(續　く)――

幕間になる迄――

岡田ゆき

人物

直也　青年作家
晴江　直也の妻
清子　直也の戀人
勝子　清子の友
其他劇場案内女など

現代　初夏の夜

ある劇場の廣場

舞臺正面は鎖されたる、ボックスの後を見せ極く右手にオリーブ色の扉の出入口がある。やゝ左寄りに石の低い階段があつて、小砂利の敷いてある廣場へ來るやうになつてゐる。その出口を中に右と左に、開けられた、大きなガラス窓が並んで、そこから廊下の電燈が光りを薄く投げて居る。廣場の右手、窓下よりやゝ離れた所にベンチが一つある。

幕が開くと、今、場内では演劇中の心にて、時々とぎれ〳〵に臺詞が聞える他、廊下はひつそりと靜まりかへつて、居て、時たま案内女が用ありげに、往つたり、來たりする。

やがて、清子、（二十二三位。面長な

美しい容貌。中肉中丈。髪は上品な束髪に、翡翠の大きな簪を無造作にさしたきり、何の髪飾もない。華美な御召の袷に、帶は、黑地に金と銀で色紙を散らし刺繍にしたのをしめて、白金の細い鎖を首からかけてゐる。)オリーヴ色の扉より、小さな、扇を胸の所で、輕く動かしながら、靜かに登場。淸子に續いて、勝子、(二十位。容貌はそれ程美しい方ではないが、何んとなく、人を魅する處がある。髪は、根下りに、大きく束髪に結ひ、眞紅のビロードの芥子の花を、三輪左の後方にさしてゐる。大柄な縞御召の袷に、白茶の厚板の帶をしめて居る。左の手に金の腕時計をしてゐる。笑ふ時、指で突いた樣に靨がいる。)が出て來る。

勝子。(廣場へ出る階段の處迄來る。)淸子さん、少し、出ませうか。

淸子。え、さうしませう。(右手を勝子の肩に置きながら、階段を下りて、廣場へ出て來る。

勝子。淸子さん何をそんなに考へていらつしやるの。今夜は考へるために此處へ來たのでせうか。私はお芝居を見に來た心算よ。(始終口元に微笑が漂ふ。)

淸子。眞實に勝さんにはすまないわ。けれど、私、まさか、彼が來樣とは、思

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

はなかつたのよ。さつきから、彼の目は、舞臺に、向いてやしないのですもの。私だつてぢつとしてゐられなくなつたの。

勝子。おかしいのね。今夜はいつもの貴女ぢやない樣な事をおつしやるわ。

清子。え、私どうかしてゐるわ。(廊下の電燈が横顔を照らす。)もう私はすつかり、彼の事は忘れる筈なのに。そしてあの時あれ程徹底して、考へた心算だつたのに。(獨語の樣に云ふ。)ねえ、勝子さん、私は今、見たあのヴエアトリッチエの樣に、刹那的の戀を、もてあそぶ女ぢやないのでせうかね。

勝子。オホヽヽヽ、そんな馬鹿な事があるもんですか。貴女は直也さんと、お別れなさる時に私に何んておつしやつて。私はもうこんなに、つきつめて考へたのだ。そして是れ以上、自分が行ふ事も考へる事もない程、徹底してから別れる事になつたのよつてねえ。

貴女だつて未だ覺えていらつしやるでせう。それだのに今になつて、動搖する貴女の氣が知れないわ。徹底したとおつしやりながら貴女はやつぱり嘘なのね。と私は云ひたくなりますよ。(ぢつと清子を見る。)

清子。眞實に貴女のおつしやる通りですわ

（云ひながらベンチに腰を下す。）私は只徹底した、心算に過ぎなかつたのよ。未だどうにかする事が出來たに相違ないのだわ。勝子さん、私胸が妙な氣持ちになつて來ましたわ。（袖で胸をおさへる。）

勝子。（空を仰いで。）清子さん、お星樣が貴女を笑つて居てよ。大きな御なりをして何ですつて。オホ、、、。

清子。（誘はれた樣にニイーッと笑ふ。）貴女は超人だわね。何んでも超絶する事がお出來なさるのよ。

勝子。恐らく他人の事だから、澄ましてゐられるのよ、人間は皆、自分以外の事は眞劍になつて考へないものですわ。でもねえ、（眞顔になつて。）彼の方の心を貴女に再びかへす事は、たやすく出來ると思ふわ。

清子。さう、どうして。

勝子。だつて貴女、直也さんの、愛は貴女にあつたのに、彼の周圍のために、やむなく、結婚をなすつたんでせうそして貴女がお別れになつたのも、その結婚のためなのですもの。きつと、直也さんは貴女にかへつてゐらつしやるわ。貴女達お二人はもと〱離れるべきものぢやないと、第三者の私でさへ思ふ程の力強い愛で結ばれてゐたのですもの。

清子。（何か思ひ出した樣に。）勝子さん少

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

し私一人で居たいわ。靜かに靜かに考へたいのです。未だなか／＼幕ぢやないでせうから、見ていらつしやいな。

　此の時場内に拍手おこる。

勝子。さう、それぢや、私、見て來ますわ貴女、お好きになすつていらつしやいね。（場内に入つて行く。）

清子。（輕く吐息して、ベンチの後へ寄りかゝり、顏を袖で掩ふ。）

　何處からともなく、忽然として心の影、（頭より爪先まで闇黑色の衣服で掩はれた、瘦せて高き者。右手に血の滴の樣な色の薔薇の花を一輪持つて居る。）が現はれる。

心の影。（あたかも、風にもてあそばれる木の葉の樣に翩々として舞ひながら。）

　靜かなる戀心、
　いまし目さむ、
　愛のさゝやき、
　汝もきけ、汝もきけ、
　あら面白の女心、
　あら面白の女心、（異樣の節にて歌ふ。）

清子。（驚いて立ち上り、又目を瞠りながら靜かに腰を下す。）まあ、お前は誰れなの。

心の影。（清子の言葉に頓着なく、尚も舞ひ且つ歌ふ。）

　眞紅なる戀心、

再び生れ來ぬ、
燃ゆる思ひを、
汝もきけ、汝もきけ、
あらおかし女心、
あらおかし女心。

うるはしき戀心、
再び君にさゝぐ、
血のしたゝりを、
汝もきけ、汝もきけ、
あら優し女心、
あら優し女心。(歌ひ終りて夜の扉に吸ひ込まれる樣に、引込む。)

清子。(目さめた樣に立ち上り。)私は夢をみて居たのかしら。いえ、眠つてゐたのぢやない。(忽ち思ひあたつた樣に。)おう、さうだ。あれは私の心の影に相違ない。私の心に再び目さめた愛のさゝやき。それを幻に見たのであつた。………。(空を仰いで。)星は冷く瞬いてゐる。あの星の光を私は感ずるけれど、光が此處に屆いた今、その星の存在は解らないと云ふことを私は聞いた。おうそれも彼から聞いたのであつた。私の心は彼の手にかへらうとしていら〳〵して居る。しかも私の心の一隅では親の反對世間の嘲笑などに、びく、びくしてゐる。私の愛はそんな事に氣兼ししてはならない。世間が氣になつたり、親

が恐ろしくて何にならう。此の胸に燃える思ひが强ければ。此の戀におどる心の波が高ければ、そして私の靈が何處迄も眞實であればそれで好いのではあるまひか。あゝ直也さん直也さん。(ぢつと足元に目を落す。)

舞臺は靜かで、場内よりとぎれ〳〵に臺詞がもれて來る。清子はやゝ暫く動かずに立つて居る。

直也、(二十八九位、頭髮を中央から分けてゐるのが、黑ビロードの樣に見える。容貌は色白く、目は落ちついた輝を持つてゐる。全體きちんとして居る青年。薄茶色の背廣を著てゐる。)がオリーヴ色の扉より登場。

直也。(何か探し求める樣で、つか〳〵と廣場へ出て來て、清子を凝視する。)

清子。(何心なく面を上げた時、佇立する直也が目に入つたのでハッとする。)まあ貴方出ておいでになつたのね。

直也。僕はぢつとして舞臺なんか見て居られやしない。貴女に話す事があるのです。

清子。(默してゐる。)

直也。僕は再び貴女にかへつたのです。貴女なしには生きられないのです。清さん何とか答へて吳れ給へ。

清子。(ぐつたり腰を下す。)けれど貴方は今、奧樣がお有りではありませんか

直也。私は駄目よ。眞實に駄目ですわ。

直也。僕は貴女と別れてから……さうだ去年の春以來、始終自分をあざむいて暮して來たのです。どんな事があらうとも、僕等は堪えて行かねばならなかつたのです。兩親の不同意位で別れてしまふべき二人ぢやないんだ。淸さん、もう一度僕の胸にかへつて呉れませんか。(淸子の肩に手をかける。)

淸子。私達はどうすれば好いのでせう。直也さんあんな美しい奥樣をお持ちなすつたのに。

直也。彼女は美しいかも知れない。然し、僕にとつて、豚に眞珠を與へたと同じ事なんです。愛のない泥人形の樣な女と同棲して居たのは眞の自分ぢやない。世間を憚かる心がさせたのです。たとへ短い月日とは云へ、よく貴女に逢はないで居られたものだ僕等はもつと、もつと強くならねばならない。

淸子。(直也の手を取る。)眞實ですか。直也さん。

直也。え、僕は貴女の氣のすむ樣にします二人を世間が入れなければ、何處へでも行きませう。此處ばかりに日は照りやしない。よく淸さん考へて呉れ給へ。

淸子。私の心は燃えてます。直さん、忘れ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ないで頂戴よ。貴方と一所なら何處へでも行きますわ。

直也。ありがたう。(清子の手に接吻する。)

清子。私は何だか夢をみて居る樣な氣がします。未だ幕はしまつたのぢやないのでせう。誰れか來るといやですわ。

直也。貴女は未だ他人が恐ろしいのですか眞の愛を握つて居る二人は誰れの前に出たつて耻ぢない筈ですよ。

清子。さうねえ。誰れが來てもかまはない筈ですね。(微笑する。)

直也。(輕く笑ふ。)

案內女二三人、美麗な花環と花束を持つて廊下を通る。

清子。これから、私達はどうしませう。

直也。僕は今の生活を打ち毀して、新らしく貴女と同棲する考へだから、少し待つて居て吳れ給へ。二人は始めから、さうならねばならなかつたのだ。

清子。でもさう出來るでせうか。

直也。僕を信じて、待つてゝ下さい。

清子。貴女さへその御心なら私はいつ迄でも待つて居ますわ。

直也。どうかさうして吳れ給へ。二三日內にゆつくり逢つて話したいがなあ。

清子。場所と時間さへ知らして下されば、私どうにか都合しますわ。

直也。それぢや必ず知らせるから。

清子。えゝ、きつとよ。

此の時、場內に一時に拍手おこる。

直也。もう幕だとみえる。ぢや清さん忘れないでね。（再び清子に接吻する。）

場内どよめきて、晴江（二十四五。年よりは地味なつくりであるが、美しき容姿。丸髷に赤い手柄がよく似合ふ。）登場。

晴江。（直也を探す心にて、階段の所迄急ぎ足に來り、廊下の電燈の光に照らされた、廣場の直也と清子の樣子を見てはつと驚き輕くよろめいて階段の柱につかまる。）

静かに幕。

大正四、五、二四

獸性と人間性とに就いて

原田皐月

人間の正道は必ず一夫一婦であるべきであると云はれた。又男子は本來多妻的で女子は一夫的であると云はれた。

女性の一員たる自分は男子の實經驗を持たない事は云ふ迄もない。從つて男性に就いては推斷以上に何物も云ひ得ないのである。否女性全般に對してもさうである。自分は自分以外の何物をも知らない人間である。知り得てをる凡ては殆ど自分自身である。故に試驗管內に現はれた自分自身以外自分の言動の根本をなすものはないのである事を、云はんとする前に斷つて置きたいのである。

人間は何の爲に戀愛し、何の爲に結婚するか。今更ら此疑問を誰も顧るものはない。凡そ生物と名の付く以上、創造の時に於て天から繁殖の能力を賦與されないものはないのである。生物一代の生存は殆ど種の繁殖の爲にのみ有意義であるかの觀さへある。單細胞體から最も進化した人類に至る迄、一見繁殖が全部の目的で生存がある樣に見える。中には產卵を終ると亡び行くものさへもある。人類も生物である以上、男女相愛し結合するのも

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夫等定められたる拘束内にある所以に外ならないとして、何人と雖も這義を狹むものはないのである。然も人間の男女相愛し、結合するに當りて其間に實に微妙な心理狀態、意識世界が展開する。各個人は是等微妙界にあつて種の繁殖などを意識して居るであらうか？必然的に表れる結果としてのみ人は首肯し得るのではあるまひか？人間は意識に依つてのみ知る事を得るのである。知つて始めて行ひ得るのである。行ふて始めて價値を生ずるのである。自己の意識し得ない事は暫く置く。意識し知り得る範圍から出發するのが人間の思索ではあるまひか。意識界以外の約束に迄立入る思索力は人間には與へられて居ないのである。從つて結果から見た推斷から逆に出發點に向けて論及する前に、內部から外部に考究すべき多くが殘されて居る樣に思ふ。此の意味に於て自分は結果から來た斷定は暫く置いて內側から性的の各方面を考察して見たいのである。

完全なる生育を遂げたる男女に於て、生殖機能が性慾の勃發となりて、現れる事は、完全なる消化器が食慾を感じ、完全なる肢體が運動を欲するのと同樣の作用に外ならない。否それ以上無意識的である。何故なれば饑餓に當つて滿腹を願ひ、勞働の後に休息を欲する等、人間の意識はそれ等慾望中に明かに或結果を豫期し期待し得れども、獨り性慾にありては其慾望に對して意識し得るのみで、其瞬間忘我の絕對境にありては結果を豫期するは

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

恐か、結果に就いて思考する隙もない程意識全部が慾求中に浸つて居るのが人間性慾の常態である。性交其物の滿足以外に齎らす重大なる結果には意識は何の働きをもなし得ない。何故に凡てに意識的であるべき筈の人間が性的方面にのみ斯くて、又何故に性的方面にのみ斯くある事を吾人は怪しまないのであらうか。人智が其處迄發達しないうちに、決して豫側しなかつた結果が動かすべからざる證跡を殘して夫等の疑問に打勝つて了つたのではあるまいか。單に表れた結果に於てのみ野獸と相違點を見出し得ぬ事を恥ぢて、突入つて考究する事を避け乍ら徒らに性慾を以て獸性と卸け去りて自ら尊がつたり、外面的の道德の幕を張り渡して其蔭から蔑視を投げて高尙がつたりして、閑然として居るべき問題ではない事を切に思ふのである。

然らば人間の性慾と獸性とを如何に區別するか。私はそれに答へて戀愛の附隨しない性慾のみの性的亢奮をさして獸性となし、戀愛の附隨した場合の性的亢奮を人間の性慾と云ひたいのである。何故ならば性的慾求丈けの性的亢奮其物の中には人間としての特種の閃めきを何處にも見得ぬからである。古往今來獸性として蔑まれた所以である。人間の性慾はそれ等本能に最も意識的の戀愛を加へて其處に人格の融合がなければならない。性的のみに拘らず凡ての本能を野火の燃えるに任せ置く事は人間としての全價値を抛つた事であ

る。意識界の伺ひ知る事の出來ない本能は、又よく意識界に於て批判し適所に導いてこそはじめて尊いものである。本能界に一歩も食ひ込み得ぬ意識もその發するに當つて手綱を取る任務を持つのである。然かして本能が適所に驀進してこそはじめて尊いのである。又人間の尊さである。一見戀愛が非常に崇高に全く心的に見られる處から純然たる靈性であつて全然靈的に立脚し、獸性なる性的慾望とは根本から相違のものなる事を說く論者がある。其性慾と結び付く事を非常に汚辱と心得居るものさへある。恁うした人間の小さな偉らがりが人間生活の至る處に轉々たるを悲しむものである。戀愛が如何に靈的なるものにしろ本能の慾求に醒めたものである事は何人も否み得ない事實である。然して異性間の牽引である事も事實である。又肉的要永が異性間にのみ意義ある事も事實である――同性間に同樣のものを間々見る事あるも、そは異性間に起るべきものゝ變體たるに過ぎない――この意味に於て完全戀愛は不具者に非ざる限り肉的要求を伴ふべきであると云ひ得るのである。如何に潔く尊く純潔に見ゆると云はれても、靈的方面に廣がつた性的亢奮の片割としてのみ戀愛は有意義であると思ふのである。然かして肉的性慾と結び付いて始めて戀愛が戀愛として意識的なる價値を生じ、人間性慾として意義ある所以である。然し時に戀愛に於ても甚しく强度の性慾避忌を見る事はあるが、そは生理的缺陷者に非らざる限り悉く凡

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

てが性慾の變化である事は生理學者に由つて屢々說かれた事である。

此處に至つて自分は人間の性的要求中に獸性を離れた戀愛を見出した事を喜ぶものである。然らば何故に生慾の片割の戀愛が而く人間としての誇りを感せしむるか？ 最も意識的なる戀愛は自己擴張の最も強い表れであるからである。散漫な自己、游離してゐる自己を探求し統合する事は獨り戀愛に於て、對者の中にのみ求められる現象である。自己自身の放射を對者中に統合し、自己を擴張し、完成するのが戀愛の靈的方面である。如何なる場合にても戀愛は悉く自己中心である。如何にそれが愛他的、對他的に見ゆる場合と雖も翻つて自己を見る時、其處に自己の滿足を見出さない事はない。如何に他から變體に見えても變體それ自らが戀愛者の滿足であるべき筈である。一見非常に不滿足なるべき時でも戀愛者自身にはその不滿足が滿足の場合は隨分見受ける事である。人間は、戀愛を抱き、對者を得て始めて一箇人格を完成し得るのである。然かして散漫した游離した自己の統一が出來るのである。靈的に自己を把握してこそ始めて肉の何物なるかを知り得るのである。靈肉渾融の絕對我の神境は其處に始めて表れるのである。此處に至りても猶はこの人間性慾を野獸性と蔑すみ恥ぢる徒を見出し得るならば、私は云ひたい。自己が不眞面目で、自己が獸的で、自己を人間として取扱ふ誠意と努力を全々放棄した憐むべきものなる事を。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

然し此處に解けざる疑問がある。何故に各箇人自身が各箇人自身を自己內に獲得し得ずに對者に俟つのであるか？人間は何故に性慾を有するかと云ふ疑問に答へ得ぬと同樣、この不思議な、而して微妙な働きに答へ得る能力を未だ持たないのである。啻種の繁殖と云ふ結果の表れに肯き得るのみである。自分は人間の意識が性慾の結果と迄働き得ぬ不完全を喞ち乍ら、其際の來らん事を切に願ふものである。

人間の正道は必ず一夫一婦たるべきであると云はれた。又本來男子は多妻的で女子は一夫的であると云はれた。然し自分は上述の理由から押して戀愛は一時に、一箇人に自己の全要求を充し得ぬ場合がある事を首肯し得るものである。田村俊子氏の炮烙の刑の女主人公の樣な場合は隨分多く有り得る事に思ふ。否一人の對者に自己の凡ての要求を充し得る場合は極めて少數であるとも思考し得るのである。けれども現在同時に二人以上の愛者を持ちつゝある人の少いのは單に因襲道德から許りでなく、戀愛者の多くが一人の對者に注ぐ愛が第二者に及ぼす餘裕を持たないからである。自己の要求の充されない不滿足は愛の充實に打消されて居る場合が多いのである。眞の戀愛に於て人間は愛の過剩に耐えられるものではない。必ず如何なる時でもあらん限りの愛を與へ、あらん限りの愛を得んとするものである。故に此處に對者の一部人格に愛の過剩若しくは欠陷を見出した時、それが第

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

二者に及ぶ事はあながち不自然とも眞要求の破壞とも云ひ得べからざる場合がある。然し此處に一言云ひたいのは人間は始めから愛の分割を願ふものではないのである。一人者に依つてのみ全き愛の要求を充さんとするのが自然であらねばならぬ。第二者に渡つた時必ず一人者に對するより以上の散漫を免れないからである。然して一人者に全き愛の要求を充し得ぬ場合、其欠陥を補ふ爲の努力は又當然惜しむべからざるは云ふ迄もない。愛の分割は其後に來るものである。破壞するには猶愛の存在を承認し、愛の全部要求を充するは愛の欠陷を感ずる場合のみである。然して分割に對する不滿、苦痛は又當然の事である。人間が性的方面の慾求、機能を持して生をこの世に殘した以上は、然かして速に人間にして神ならざる以上は對者を求めて自己を完成せんとする以上は悲慘なる事實には相違なくも又止むを得ない事である。此處に至りて私は暗夜に物を索むる人間の運命を思はずには居られない。即ち人何萬人の中に眞によく自分に結付くものを求め得るものが幾人あるであらう。吾人は常に轉々と迷うて猶求め得ず、中途に引掛つて懊惱してる輩を見るのも止むを得ぬ事である。然し往々には以上述べたことと似て非なる現象がある。始めより戀を二三にし、戀を分割して戀の統合に些の努力をも持たないものがある。自分は其樣な愛は斷じて戀愛と云ひ得べきものでなく、單に遊戲と視做す外別に意味を見出さないのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一夫一婦は愛の至極境である。多妻多夫は不如意戀愛の必然道程である。然して男女に於て相違を見出さないのである。

歷史に徵する時、男子は多く多妻的で、女子は多く一夫的であつた。然し是れに依つて女子が常に完全戀愛をなし、男子が常に不如意戀愛に陷つて居たのでない事は言を俟たない。只男子は强大な體力から來る生活力の安心があるに反し、女子は弱小な體力――其始めより弱小であつたのか分娩育兒等の爲にいつか體力の消耗を來たして了つたものか自分には判斷が付かないが――から來る生活力の缺乏に加へて分娩育兒に對する本能及び責任觀に捕らへられて、戀愛の完全要求を充す慾望を自ら沮害し來つたのが第二の天性を爲し、又道德を形造つた觀がある、一方男子にありては生活力の安心が戀愛にも生的にも慾望の上に贅澤の翅を伸した結果、殆ど擽惑的遊戲に出發點を見出す程の不眞面目さが生じた爲、益々多妻的傾向を帶ぶるに至つたのであるらしく思はれる。然かしてもと〳〵生理的にも體力的にも全部受働的の女子は、稀薄な生活力を男子の擽惑的遊戲の能動力に訴へて、此處に尤も悲慘な職業、性交性慾の賣買が女子の上に表れる樣になつて來たのである。女子にありては其處に職業的欲求の外他にあり得ない樣に思はれる。男子の多妻的欲求に對する多夫的欲求の現れでない事は疑ふ餘地のない事である。然かして女子の多夫的傾向

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は例外を除いては永く葬られた觀がある。

　內に醒め、自己の眞實欲求を不斷に求めて止まない是れからの女性にありては戀愛も今迄の樣に單純に片のつくものではなく、雜多な眞理作用が縱横に織り込まれた複雜な形に表れて來る事であらう。然かして其處に今迄の道德標準から押して判斷する事の許されない場合も生ずることであらう。

　これ等を考究し來る時、自分は始めて至極の戀愛境に身を置いて居る幸福を思ふものである。殆どそれ等を意識して居ない程自分の身邊は一人者に依りて全部充され盡してる異數の幸福を思つて筆を擱く事にする。

青疊―五明倭文

三

椢や櫻の深い緑色の葉蔭から鴨居に垂れた青い簾を通して、涼しい風が絶えず心地よく吹き入る六疊の居間に床を延べて横になつた枝美は、感傷的な眼を爽やかな朝の空氣に彩られた庭に抛げて靜と思に耽つてゐる。眞中から分けて結んだ束髪はそゝけて迫つた額や窶れた頬にかゝつた柔かなおくれ毛は、折々風になぶられ、それが如何にもやぶたさげに見えた。

「田舎へ歸る！」

太い溜息と共に恁ふ呟いて、それは迚も彼女に堪えられないと、云つたような暗い色を細い眉の邊りに現はしたが、枝美はそのまゝ眼を閉ぢて朝の間の靜かなタイムを己の掌にしようとした。けれども其枕元の文机に乘せてある小さい置時計の、針を運ぶせわしないセコンドの響は、彼女の胸を徒らに焦々させる許りで、絶え間ない心の動搖は暫らくも靜止することが可能なかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

田舍暮らしの數年、それは彼女にとつて忘るゝことのできない痛であつた。彼女はつとめて郷里のことを頭に畫くのを避けようとした。粗野な田舍人のいぎたなく人を罵る下卑た言葉や、樣子は思ひ出してさえ慄然とする。

「どうして田舍へなど歸られよう！」

枝美は恁ふ思つて復た深い吐息をしたが、側に擴げたまゝ拋つてあつた新聞紙の、激しく風に煽られてばさ〳〵する音に眼を開け、思ひ出したように枕の下から一通の手紙をとり出した。それは今朝姑の名でお豊から來た歸國せよとの手紙であつた。文面は別に特異の點もなかつた。唯姑が先月の法事から氣分が勝れず、それに精は遠方へ行つてるので、何かと心淋しくもあり又子供にも久し振りで會い度いから、都合して是非歸れと云ふのであつた。が、之を讀んで枝美は此筆に現はれた丈の單純な書信として虚心平氣にそれを讀むことは出來なかつた。

「お前の秘密、それは凡べて曝露した」

恁ふ云ふ囁きの何處からともなく聞ゆるような心地がして、彼女は吾知らず其の手紙をずた〳〵に裂いてまるめた。そしてそれを手の中に握つたまゝ、復た眼を閉ぢて遣る瀬ない胸の悶えを抑えようとした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

過ぎ去つた數年間の生活の痕は、フヰルムのように頭の裡を通つて、苦しかつたこと悲しかつたこと悦ばしかつたことの樣々な影は、濃く淡く種々な色彩を帶びて眼に映る。

人は何の爲めに結婚しなければならないのだろふ。唯束縛される爲め、苦痛を味ふ爲めそして獨りねの寂しさに堪えねばならぬ爲めだろふか。且つて田舍に居て離婚問題のやかましかつた時、別家の叔母が「もふ跡取りの二人も出來たのだからあんな嫁は、出して仕舞つたつても可い」と、云ふような言を座敷で姑に云つてゐたのを、襖越しにちらと耳に入れたことがあつた。

結婚は唯祖先の祭りを繼ぐべき者を得むがため許りなのだろふか。

枝美は自分の結婚生活を顧みて、それが遂に何んの意義を有つて居るのか理解することが可能なかつた。江戸の敵を長崎で討つ的のそこに何の根據もない固陋な因襲的思想から責むべき理由もないのに責め、鞭打つ道理もなくて鞭打ち、徒らに絕對の服從を強いようとする無理解な人々のみに取りまかれて居た彼女は、獨り精に依つて生きて行かふとした。

精はまた深い同情と理解とを以つて彼女を庇護した。けれども功名にいそがしい彼は、新婚後愈々その歡樂を味ふと云ふ間もなく西と東に別れ獨り無意味な壓迫に苦しむで來た其妻の、激しい同棲の慾求を深く思ふ遑もなくさらにまた海外へ向つた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「之れから眞實の生活に入るのだ」恁ふした希望と喜悦とを以て、世帯を持つたのも、枝美に取つてはほんの束の間の幻に過ぎなかつたのである。

枝美は二人の子供を相手に淋しい夫の留守を守つて、尠くも月に一度は屹度來る遠い國からの音信を何よりの慰藉としてゐた。

折々は又　の情を罩めたペンの跡に、美しいカードや繪端書が同封してあることもあつた。そう云ふ時、彼女はそれを机の上に並べて、

「これがお父さんの今いらつしやるお國なの、お父さんはこの奇麗な公園を通つては毎日お役所や學校へお通いなさるのだよ。曠ちやんや明ちやんもおとなで克くお母さんの云ふことをきくと、今に屹度お父さんから皆で來てもいゝと云つて下さるだろふ。」などゝ二人の子供に云つてきかせては、發作的に襲はれる心の奧のさびしさ物足らなさを虐げようとした。

父に對する觀念のまだ割合に淡い子供等は、珍らしい建物や人の美しく彩色された繪葉書を見て、母に説明される時、僅かに父と云ふ名を小さい軟かな頭に浮べる外は、滅多に「お父さん」とさえ呼んだこともなくて、只管我を通すことにのみ囚はれて居る。其僞りのない、天眞な子供の容子を見るにつけても枝美は、自分を僞り人を欺いて行かねばならぬ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

浮世の苦しさを思ふのであつた。

月に一回來た精の音信は二月に一回、三月に一回、それも初めとは違つて公務に忙しい身、學事に沒頭されてゐる身の音信のないのは無事でゐる故と思つて、決して案じて呉れるな、それよりも自分を大切に子供の教育に意を注いでくれと云ふような簡單なものになつた。

枝美は都に孤獨りさびしい春秋を三度送り迎えした。

三月の、彼岸櫻が上野の山に咲き初めて長い間縮かまつてゐた人々の心にポカ〳〵と溫かい感情が解けて流れて、何となく若い血潮を湧き立たせるような日であつた。

枝美は子供も連れず一人で日暮の方に幼な馴染みの友達を訪ねて行つた。其日、友達は相憎留守であつたが、それでも折角來たものを暫らく待つてくれ、と云はれて、かねて案內知つた二階へ昇つてゆくと、そこの座敷に一人の年若い男が居た。思ひがけない女客が這入つて行つたので、男は驚いたように慌てゝ立つて階下に降りて行つた。

婢が茶や菓子を階下から運んで來て、何かともてなしをした。枝美は暫くの間、見晴らしのいゝ二階の窓に近く倚つて、御行の松の邊りから新らしい貸家の殖えてゆく郊外のさまを見やつてゐたが、友達はなか〳〵歸つては來なかつた。

其時先刻の男が復た昇つて來た。座敷に這入つて、此度は丁寧に挨拶をしてから二コ〱と、愛嬌笑ひをして、

「嫂は今日少し歸りがおそくなるかも知れませんが………」

と、云つて女客の顏を正面に見た。

枝美は其時、男の驚く程美しい白い肌の色を見た。瘦せた、けれどもよく發達した肉體の男らしい肩の邊りを見た。黑い涼しい切れの長い眼を見た。そして純な、何處となく賴もしげな若々しさを有つてゐる一人の青年を知ることが出來た。友達は直きに歸らぬと聞いても枝美はそのまゝ歸つて仕舞ふのが殘り惜しいように思はれた。そして妙に娘のような落ち付かない態度でゐた。男は氣輕に打ち解けた風で話をした。男は友達の夫の弟であること、鄕里は紀州で和歌の浦の月夜の絕景や、紀三井寺の眺めのいゝことなど、おもしろく話して聞かせた。歸る時、枝美は玄關迄送つて出た男に、自分の家へも是非遊びに來てくれとも云つたのだつた。

それから一週間許り經つて後、枝美は復た友達の家に行つた。てつきり居ると思つた男は、もふ谷中の或る寺に下宿して居たのである。枝美はその時自分の胸に此頃から芽ざした、かつて味つたこともない云ひしれぬあやしい悶えの謎をとくことが出來たのであつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

美しと見る間もなくて花は散つた。其惜し氣もない落花の風情を春のおぼろの月影に照らす狂など、枝美は上野の森を拔けて本郷の家に歸つて行くこともあつた。そして黑い高い一人の影がいつも枝美を庇ふように、その肩と肩とを打寄せて樂しげに囁き交して行くのであつた。

枝美は其頃から、精を思ふのが一種の苦痛となつた。精を思ひ遣る時、彼女は形容し難い責苦と烈しい胸の惑亂とを感ぜずには居られなかつた。けれども彼女はそれが爲めに精を自分の腦裡から奪つて了ふことは可能なかつた。また時として其責苦、其惑亂がいつの間にか以前のなつかしさに變つて居ることさへあつた。

「私は矢張り精を嫌つて居るのぢやない」

恁ふ自分で自分の心を辯解するように、呟くこともあつたが、併もHに對つて灑ぐ熾烈な愛情の流れは堰くことも阻むことも可能なかつた。彼女はもふ自分ながらどうすることもできないのを感じて唯此上は感情の奔るがまゝに委せるより外に自分の行くべき道はないと思つた。それにつけても恁ふした不安な狀態がいつまで續くだろう。そう考へてはまた更らに心のあわたゞしさを覺えるのであつた。

精によつて充たされなかつたものたりなさは、遂にHとの戀を生んだ。自分に對して深

い同情と理解とを有つてゐる精は決して一途にこれを責めはしなかろふ、恁ふ枝美は考へて居たのであつた。

「田舍になどどうして歸られよう………」

枝美は復た恁ふ繰り返して深い〳〵太息をしたが、蓬のように結ぼれた沈默の、心の惱みは、遂に彼女を凝として措てはおかなかつた。

枝美はいら〳〵したように床の上に起きて靑い疊へ眼を落した。白い縮みの浴衣に水色繻子の半巾帶を締めた細々とした身體の、重苦しそうな呼吸ざしは、其處の邊りにしるく見られた。

「母さん！」

恁ふ呼んで椽側の方から曠が驅けて來た。

枝美はその晴しい無邪氣な顏を見やつて、

「まアこの汗は………今迄何してたの？」

恁ふ云つて枕邊にあつた自分の手拭を取つて、赧々と陽にやけた曠の額の邊りを拭いてやつた。

「何してたつて、僕母さんが御病氣でつまらないんだもの………母さんもふ御病氣はいゝ

の？癒つたの？」

と、訊いた。枝美はニッコリ點頭いて見せたが、復た何か思ひ沈んだ色を浮べて、曠の手をソット取り乍ら、

「曠ちやんお前ね、母さんがもし居なくなつたらば何とお思ひだえ？」

曠は母親の傍へすり寄つてその顏をのぞくようにして、

「母さん居なくなるつて、噓だア、そんなこと、ね？母さん、だけれど母さんは父さんの處へいつか早く行き度いつて云つてたのね、行くの？僕も明ちやんも皆でね？」

曠は無心に母親の肩を動かした。枝美はそう云ふ吾が子の可憐しい顏を眺めて居たが、ムラ〳〵と悲しさ果敢なさが胸に迫つて、そのまゝ默つて曠を引きよせて抱きしめた。

四

枝美は別家の叔父に連れられて直ぐにも田舍へ歸らなければならなくなつた。

精夫婦を疎んじてゐた叔父は今迄は上京しても餘り訪ねると云ふこともなかつたのであるが、さる夜、欣造が上京して鄕里の人々からの傳言を以て枝美を訪ねた時、枝美は當分田舍へ歸らぬように洩らした爲め、叔父は突然柳田から荷物諸共枝美の一家を驚かせたのである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「俺もこの年をしてこの暑い時に東京へ出て來るといふはどうしてなか／＼のことではありしないがな、お嫂さんがその、一日も早くお前さんにも歸つて貰ひ、また孫達の顔も見たいと云ふのでな。」

叔父は枝美の姑に頼まれてわざ／＼恁ふして迎ひに來たのだと云つた。そして常から冷たい、鋭い其眼の光は一層枝美には無氣味に輝いて見えた。案外にやさしいその態度は鋭い針を眞綿で包むと云つたような、何か恐ろしいたくらみを密かに胸に畫いて居るのではあるまいかと思はれた。叔父はたゞ枝美の歸國をいそがせた。

「後々のことは柳田へみんな任せてゆけばよいから明日にも歸ることにしやう、それからお前の荷物も殘らず持つて行くがよい、それあ、また東京へは來るのだがな」

恁う云つて枝美の心をうかゞひ、その一擧一動に注意深く監視するのであつた。

曠や明、二人の子供達は喜んだ。留守勝ちな、でなければいつも浮々したことのない母親とのさびしい家にも倦き果てゝ、いとゞ無聊に苦しんでゐ折からであつたから。

久し振りで田舍の祖母に逢はれると云ふのが第一、澤山の伯父さんや伯母さん達にも逢ふことが出來る、そしてまた裏の果樹園へ出て精蜜桃や林檎の枝なりを取つて食べよう、久作爺に頼んで釣針をつくつて貰ひ川へ沙魚つりにも行かふ、水浴びにも行かふ、どれも

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

これも樂しいことと許りであつた。

子供達はこの大叔父さんの迎ひに來たと云ふことを、何にもわからずにたゞ喜んだ。そして母親にせがんで一日も早く／＼田舍へ歸らふとさわぎたてた。

枝美は一人惑つた。苦しんだ。かふ云ふ時せめては精が居てくれたなら、どんなに自分は心强くも思ふだろう！と矢張り夫が慕はれるのであつた。併しもう歸るより外に仕樣もなかつた。子供達の夢中になつて喜ぶのを見て枝美はそれでもと、頑張つては居られなかつた。兎に角叔父の手前、枝美はあれこれと衛をまとめにかゝつた。

その間にも絶えず枝美の胸に閃いてゐたのは、Hのことであつた。彼はどうしたらう、この間田舍へ歸る時電報を出しておいたぎり、まだ何の音信もしなかつた。來月になつたら直ぐ歸つてくれと賴んだ。彼も初旬にはきつと歸京すると云つた。それからもう幾月にもなる、どうしたと云ふのだらう、多分私からの手紙を待つてゐるのかも知れない、手紙を出さう、だが何處へ？紀州からもう歸つたつたのだろうか、けれども私のこの苦しい胸の痛みを、此方のことをみんな打ち明けたら、まあ失望するだらう、歎く／＼だらう、きつと私のために泣いて、泣いてくれるだらう、あゝ逢ひ度い、も一度、併しもう暫くは逢はれないのだ、いゝえ、もう永久に、そして、そして私は私一人丈の行く道がある………

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

枝美は播くものは苅ると云ふ言葉をまたしても胸に囁いたのである。

明日は發たうか、明後日はと、只管叔父に責められて、やう〳〵叔父が來てから五日目

婢は柳田へ一時遣はし、家は欣造の先生といふに貸すことにして、明日はどうでも發たね

ばならぬやうにそれ〳〵準備も整つた日の夕方、枝美はやつれた顏をして一人椽側に腰を

おろして、暮れてゆく庭の薄暗い中に葵の眞紅な小さな花が今にも吸ひ込まれて了ひそう

なのを見てゐた。そして四邊を憚るように、ソット懷から白い洋封筒の二つ折にしたのを

取り出した。それは先刻計らずも自分が出て受取つたHからの手紙であるのだ。

枝美は厚く重ねて疊んだ薄葉を展げて復た繰り返してそれを讀んだ。――

私はこの手紙が無事に貴女のお手に屆くかどうか、それさへが案じられるのです、けれ

ども私は敢えてその危險をおかしても私は私のこの甕えくり返つてゐる胸の念を貴女に訴

え、また貴女のその温かいみ手に抑えられずにはもう一時も居られないからなのです、併

しこの手紙が貴女のお手に渡らぬとしたら、その時手紙の運命はどうなるでせう、私はそ

れを思つては、云ひしれぬ不安と恐怖に慄然とせずには居られません、枝美さん、手紙を

御覧になつたら直ぐに御返事を下さい、否、直ぐ御目にかゝりたいのです、日に夜に通ふ

幻ではなくて全く貴女にお別れしてから今日で何日になるでせう、私はもふ百年も千年も

逢はないような氣がします、枝美さん、私はこの頃さらに落ちつきと云ふものがありませんですからこの手紙も、とても充分に私の今どんな心の狀態で居るか、それを表明することは出來ますまゐ、けれども私は今から丁度一週間許り前の夜のお話を申上げませう、

枝美さん！あの夜の、蒼い空に鏡のように照り渡つたあの美しい月を御覧になつたでせうか、丁度月は七日許りの片われでした。私はあの日、夕月の面から例の思ひ出の多い日暮里の反圃を散歩して歸ると、私の居る、貴女もよく來て下すつた寺の廣い書院の窓に近く身を横たえて、遣る瀬ない胸の憂を靜かに抑えようとしました。けれども遂に私は堪えられなくなつて復た起つて寺を出ました。そして池の端から知らず〳〵切通しの方へ歩いて來ました。本郷には緣日の夜店商人が燃やす不快な臭氣のする燈火の中を、ゾロ〳〵と黑い影が群がつて續いてゐました。私はそれ等の人達の中を急いで拔けようとして、肩と肩とが摺れ合つたりするのにも妙に癇癪が起りそうでした。好きな盆栽や鉢植えの草花にも眼は一向つきませんでした。流行の浴衣に派手なメリンスの帶を高く締めた娘達が、私の先にキャッ〳〵と乾藻いで行くのさえ、たゞ五月蠅くてつき倒してもやり度いような氣分でした。そして私は貴女のお住居の近く、あの空橋の傍迄行つた時、西片町邊りにて適はしい何處の垣根越しにか、床しい琴の音を耳にしてやゝ心も靜かになりました。月はそ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の時丁度お住居の裏庭の柳の葉かげに隱れました。私は貴女の寢間だと思ふ邊りの燈火の洩れる垣根の前に立つて、ふと藤村の落梅集にある黃昏を思ひ出しました。垣の月見草は薄暗にその淡いさびしい花の色が一層私の心を悲しくさせたのでした。そして私の頰には堰止なく冷たい淚が傳はりました。小さい、併し大きな生物をよく苦しめさせる蚊が幾つも〳〵私の生血を吸ひに來ました。それでも私はおとづれもせず、去ねもせず、張りさけるような苦しい胸を抱いて戀しい門邊をさ迷つてゐたのです。そして私はやう〳〵にして貴女の、片時も忘れることの出來ないなつかしい優しい聲を聞くことが出來ました。おぼろげに、―私の心は急に晴れやかになりました。

そして貴女は笑ひましたね、私はこんなに苦しんでゐるのに貴女はまあ、何がおかしくてあんな聲が出るのだらふと思ひました。

その次ぎに私の耳に這入つたのは、男の聲でした、若い、其聲は、それから絕えず私も耳につきまとふのでした。私は復た何とも云はれぬ暗い、重たい氣分に襲はれて了ひました。誰だらふ？Ｓ君だらふか、誰だろふ？

枝美さん宥して下さい、私はあの時、烈しい情熱の亢奮と、惑亂の中にする〳〵と卷き込まれてゆく自分を、どうしても抑えることが出來ませんでした。私は遂に、潜り戶の啓

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

くのを待ちあぐねてゐて、あの若い痩せた男の後影を見えがくれにつけて行きました。

けれども直きに、あの大銀杏の邊へ行つた時、私はとう〳〵その黑い影を見失つて了つたのでした。枝美さん、貴女はこれを御覽になつて何とお思ひになるでせう！今改めて云ふまでもなく貴女はよく、私のこのつけばほとばしるような血潮の、たぎり去つてゐる若い胸の中を察して下さることが出來ませう、

貴女を慕つて盲になつてゐる私は、もふ片時も貴女と離れては居られません、先月の末にも私は貴女に手紙を上げましたね、お鄕里の方へ宛てゝ、それだのに貴女は、貴女の此頃の態度、それが私をどんなに辛い朝夕を送らせることでせう！どうか幸にしてその手紙を御覽になることが出來ましたならば、直ぐにも來て下さることをお賴みします。――

枝美は讀み終つてホッとしたように太息をつき、それを懷に納めて復たチット念に沈んだ。

家の內は森としてゐた。子供達は叔父に連れられて柳田へ行つてゐなかつた。婢は勝手もとでおそくなつた夕餉の仕度に忙しかつた。

茶の間の時計を見ると、まだ七時に間がなかつた。

「一寸、一寸逢つて來る時間はある、今夜叔父達はそう早くは歸るまい、そうだ、矢張り

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

行つて來よう」

枝美は恁ふ思ふと、氣もせくようにそゝくさと押入から仕立おろしの絹絞りの凉しそうな浴衣を出して着替え、髮のほつれをかきあげて錢入を懐にすると、大事なものゝ入れてある簞笥には一々錠をおろした。玄關へ下りてコルキ草履を探がすため下駄箱をガタ〳〵させてゐる時、初めて氣のつゐた婢は水の手を振り〳〵飛び出して來た。

「奥樣、何方へかお出かけになりますので………」

枝美は一寸當惑したが何氣なく、

「あゝ一寸そこ迄で買ひものに行つて來るよ、いゝえ、直ぐ歸るのだから………」

恁ふ云つて枝美は逃げるようにして遂に、家を出た。

その夜、瑠璃色の空に星は無數に輝めいてゐた。宵に隱れた月影の夜更けて下界を照らす頃になつても、枝美はまだ家に戻つて來なかつた。(終)

四、六、一三

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

五月の末より六月へかけての芝居――岡田八千代

五月の末より六月へかけての芝居の中、一番私が面白かつたと思つたのは三崎座で興行された新時代劇協會の「街の子」と「銀の箱」とでございました。この連中は人も少なし大道具なども一ツものをいろ／＼に工面したり、又小道具衣裳等も如何にも間に合せものではありましたが、それだけにこけおどしの處がなく、これ丈の芝居をするについての人々の苦心、努力と云ふものがよく見えてゐたと思ひます。例へば「街の子」の第三幕の穀物小屋の壁を「銀の箱」の第二幕のジョンスの貧家の壁に用ゐたり、横文字の新聞を見るのが至當でありさうに思へるのを日本の新聞で間に合せたり――それらはやつてつけと云はれゝば云へるやうなものゝ、舞臺に表はれた人々の努力は、これをやつてつけと見せぬほどに眞面目なものでございました。私はそこを買ひたいと思ふのでございます。さう云ふ處におのづから人々の力が顯はれて一つの興味ある芝居が形づくられたのではないかと思うのでございます。殊に登場俳優諸君の中でも宇田氏の技術の巧なのには今更感じ入るばかりでございました。どうかすると上手過ぎる個所のあるのが恨みな位でございました。上

手過ぎると申しますのは即ち調子がとゝのひ過ぎると申すのでございます。例へばそれが畵であつて高尙なものでなければならぬのに、さうではなく只實物を鏡に寫したものに過ぎないと思はれる節があるのを云ふのでございます。とは云へさだめし近頃は旅から旅を重ねて來られた事と思ひますのに、上手過ぎると云ふ事をおいては、一向に藝に荒んだ處のないのは何と云ふたのもしい事でございませう、私は宇田氏によつて力づけられた事が少なくないと思ひます。「銀の箱」の父親などにおいても無造作な中に我子に對する愛の働きを顯はす表現なども巧みなものだと思ひました。宇田氏に次いで努力の跡の見えたのは村田實氏でございませう。「街の子」に於ける書生はさしたる事もありませんでしたが、「銀の箱」のジャックはなか〳〵好く演出されてをりました。しかしまだお父樣のフロックコートを着て大きな絹帽子（シルクハツト）をすつぽりと冠つたゞけで大人になつたつもりで澄してゐる坊ちやんと云ふ氣持がございます。しかしそれだけに無邪氣な努力のあるのを嬉しく思ひました。小笠原氏は一座の中で一番多く役をしてそしてどれも相應にこなされてをりましたのは何と云ふ器用な事でございませう。中でも「銀の箱」のマーローは役も好いのですけれど、親切な舞臺振でございました。日疋氏は樂人よりは「銀の箱」のジョンスを賞めたいと思ひます。しかし此お方はかなりの技量はあるのですが、餘りに下卑て造られるので如何

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かすると舞臺の人として不愉快に思はれる處がありますのは誠に殘念な事だと思ひます。神林氏は「銀の箱」の裁判長の方が「街の子」の父親よりも本役らしく見えました。青山氏は「銀の箱」の代理辨護士が心持よく演ぜられました。風采において妙に調子外れの處はありましたけれ共。

淳子氏の「街の字」のゾフィイはハンスを失なつて空しく叔父の許に淋しい暮しをしてゐる處女としては少し色つぽくはないかと思はれました。しかし樂人の話しの中に今其處へ尋ねて來るのがハンスと知れた時の驚きと悲しみとの表情の中には可憐な優しさが見えてをりました。そして此人の癖でもあるらしい左へ首を傾げる樣子が又なく娘らしいあどけなさを示してをりました。榮子氏は「街の子」のハンスの妻よりも「銀の箱」の見知らぬ女の方が適つてをりました。ゲルトルウデは通して隱氣なとりなりが觀者に淋しい內氣な女性の趣きを見せてくれましたが、それがかなり巧みに演ぜられるのにもかゝはらず、何處かのんびりとしない處が見えたのは、見知らぬ女が隨分樂にやりこなしてゐながら、眼に觀るだけ以外になほ或る興味――親しみ――と云ふやうなものを感ぜしめたのに比べて、此お方はあゝした陰氣な役よりもかうした云はゞ傳法な肌合のものゝ方が向くのではあるまいかと思はれました。しかし、あの傳法が適る人にゲルトルウデがあの位に――此優のし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ぐさで泣かせる程に――演せられるのは確かに技量のある優だと云ふ事が證せられるのであらうと思ひます。愛子氏は「銀の箱」の下女の惡びれぬ處をとり度いと思ひます。惜きずにお演りになる事を願つておきませう。英子氏のバルスウキック夫人は演技法に於ては帝劇女優の菊枝氏に類似してゐて、あれでも結構なのではありますけれ共、俳優と云ふものは只此役はかう云ふ風に演じれば夫でよしと云ふやうな事では決して舞臺好果の表はれるものではなくてさう云ふ心掛けでゐますと、菊枝氏にも此優にも表はれるやうな、其役に不必要な自分が出て、其自分と云ふものが好いにしろ惡しいにしろ、何となく厭味な或る物がその役につき纏つて、觀者にとつては此上もなく、其劇を味はふのに邪魔になるのでございます。俳優はまづ自分の性格と役の性格とを比べて考へ、その後に其役に邪魔になりさうな自分の性癖を除く事につとめ、さてその後に其役の完成をくはだて、其完成と現代の觀者の中の最も高くそして正當な考へを持つ人々の眼識をも比べて其舞臺上の好果の如何を考へて後演ず可きではなからうかと思ひます、何にあつてもさうではありませうが殊に俳優の演技は一人で定める譯に行かず、演技者と觀者との裕和、又演技者と演技者との統一など、忘れてはならぬ要件であらうと存じます。歌子氏のジョンスの妻は、此お方の出世藝の一ツとしても好いと思はれました。此役で此優の特色と見えましたのは、自然に演

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

せられる細かい科でございます、例へば、バルスウイツク家の室の掃除をする時の注意の細かさともの靜かなとりなり、呼び出されて身の上を尋ねられる時に、手持無沙汰な手が、常にみぢめな着物の前を引きつくらう事を忘れなかつた事等でございます。そしてその頭に良夫と子供とがことを忘れずに入れられてある事が感ぜられた事なども細かさの一ッであらうと存じました。

さて此面白かつた芝居に次いで美しかつかと思ふ芝居は有樂座に於いて演ぜられた「茨木屋幸齋」でございませう。然し演技者にあつては東儀氏を除いては村田みね子氏の太四郎妻の懸命なのと大村氏の浦上の眞面目なの位が取柄でございました。あとの人々にはどうしてもトラはれてる處が見えて倦きたりませんでした。同時に演ぜられた「棟木」も面白い芝居の一つには違ひございますまいが、あまりに演技者が只脚本の白を其儘口うつしにしたと云ふ處がございました。特に里人を演ずる人々に於いてさう云ふ難がございます、もつと詩的に――幽玄に――自ら觀者をしてさう云ふ事もあらうかと思はして――醉はして終ふ丈の力が足りなかつたかと思ひました。

次に、俳優自身の力によつて好く演ぜられたものをあげて見ますと、市村座の菊五郎氏の「文屋」と本郷座の左團次氏の入鹿の父と、羽左衛門氏の辨天小僧とであると信じます。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

この三つについては類と眞似手がないと云ふ事が云へさうでございます。菊五郎氏は中幕の重次郎でも美しい優しいそして勇氣のある若武者を演出して遺憾はないのでございますが――殊に「殘る蕾の花一ツ」でしを〳〵と去つて下手の木戸の處に立ち、刀と一處に持つた下緒をハラリと落す科など――呼吸もつけぬと云ふ心持は後の文屋の方にあるやうに存じます。しかし氏にあつても、「ちんが、ちがちが、大つめた」の邊で手を叩く觀者の低級と同時に「衛士の焚く火は――澤邊の螢」邊の微妙な演技を見のがす觀者のうかつとを憎まれなければならぬと思ひます。私が氏の所作でいつも感じますのは、背景になる處の三味線と唄とを、踊と共に活かして行くと云ふ處でございます、その例として、これでは「傘を、かたげて丸木橋おつこあぶない」の邊を差し度いと思ひます。さう云ふ處は丁度巧みなコンダクタアが動かす小さな鞭の先から偉大な管絃樂が生れて出るやうな感じがあると思ひます。左團次氏の入鹿の父は、ひとへに此優の力で演活かしたと云つても嘘はあるまいと思ひます、「雨が降つて來た」と云つて狂はしく舞臺を左右に走け廻る邊などは、何とも云へない崇高な處があるのに感じ入りまして一層此優を尊敬せずには置かれぬ樣な心持がいたしました。羽左衛門氏の辨天小僧は、今迄私が見た中――と申しても極く狹いものでせうが――では一番好いと思ひます、その中にも駄右衛門に「確かに女」と云はれて「え丶」さ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ごつちつかずに驚き、刺青を差されて、「や」と全く男になる、あの段取が全く私の氣に入りました。それから女の着物をぬいでから、あの着物をこの變裝男子を良彩る道具にしやうとした作者の心持も又好く此優によつて活かされたと思ひます。裝つてる中は全くしをらしい女性と見え、脱いでからは、とてもそんなものは似つきさうもない男と見え、しかもその脱いだ花やかな着物が此男を飾つて一つの繪とする作者の働きが少しの無駄もなく活きて行つたと思ひます。——今迄私の見た優達のは、どうも繪にならなくてはならないで居ながら繪になりませんでした、そしてあの着物が只だらしなく纒はりついて形になりませんでした。又さもない時には顏にも腕にも足にも男性になり切らぬ處が見えて物足りませんでした——緋縮緬の上へ大名縞の南鄕の羽織を着た形も、誠にきび〱とした好い辨天小僧でした。まづ近頃での氏の傑作と思ひます。

此外に帝劇の舞臺協會の「父親」「ヹニスの商人」等がありましたが、小宮さんの初陣としてあまりに力ないものと存じましたから一寸御遠慮いたして置きます、私の尊敬する此協會の俳優諸君をいたづらにけなし度くございません爲めに。

（四、六、二三）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

偶感二三　野枝

子供が發育して行く樣子をぢつと見てゐると恐ろしくなつて仕舞ふ。彼等の小さな頭には何事でも知らうとする注意と熱心で一杯になつてゐる。特異なものに感ずると大人の氣付がない木の葉の一片にでも熱心な注意を向ける。そうして、あらゆる事を知り、そしてそれを自分のものとなしおふせる迄は幾度でも根氣よく同一のことを繰り返し〳〵やつて見たり或は云つて見てゐる。そうしてはまた直ぐと次の事柄に向つて同じ熱心をもつて向つてゆく。さうして次から次へとうつつてゆく熱心さには何物も立ち防がることが出來ないやうな強い力をもつてゐる。

さういふ樣子を染々見てゐると私は子供の敎育について多くの理想をもつてそれを子供の上に强ひやうとしてゐる人を氣の毒に思ふ。殊に子供が外に多く居るやうになつて來ると更に多くの事を見聞する、さうして大抵のことは自分ひとりで考へて仕舞ふ。

所謂、敎育方針と云ふものゝ爲めに子供に對しての考へがまるで子供自身の爲めにでなくて敎師自身の爲めに多くの型にはまつたものが作へられてあるがために子供は勿論、敎

師自身も苦しまなければならない。

私が今のすべての教育の一番間違つてゐると思ふ點は、教育者が何時でも無條件で自分を多くの幼き被教育者よりも優れた者てあることを主張しやうとしてゐることだ。その事は子供の正直な眼からは却つて何の權威をも認められないことになる。そうして彼等は子供等より自身を一段高くおかなければ教育する事は出來ないと云つてゐる。それからもう一つは、物の善惡と云ふものは容易に決せられるものも多少はあるが先づ容易に決せられるものではないのだ。然るに彼等はそれを容易に決しそれを動かす事の出來ないやうに眞理として子供の頭につぎ込んでゐる。これは恐ろしいことでなければならない。善惡と云ふよりは寧ろ具體的に表はれた一つのことについてどう解釋すればいゝか、と云ふやうな大切な根本の智識について教へて貰ひたい。彼等の頑迷無智な頭腦とそれ等の人に依つて出來た教科書に依つて教育されるが爲めに小さき人達の大半は偏狹な道德家となつてゐるかさもなければ巧妙な虛言吐きである。今の學校教育は子女をよくするものでなく小さき彼等を苦しめ害ふものでなくて何であらう。私は私の大切な子供のために眞の意味に於いて教育家の自覺を待つものである。教育は畢竟人間の意志や理想でどうにもなるものでないと云ふことを知つて貰ひたい。只子供の先輩としては子供自身が自分を育てゝゆくに必要な

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

智識を與へる事丈けで澤山だ。

自分の眞實を裏切られる位踏みつけにされることは又とない。よしその眞實が再び生き返らうとも一度裏切られたと云ふ事實は何處迄も消えはしない。自分の眞實が尊いものだと云ふ信念がつよい程それは忘れることの出來ない痛手である。尚もそれが身も心も捧げつくした愛の眞實に至つては更に深い痛手でなくてはならない。

自分に與へられてゐるものだと信じてゐるもの、自分ひとりが握つてゐると思つたものが何時の間にか、他へ向つて與へられてゐるとわかつたときに直ぐに自分が與へてゐるものをも取り返すことが出來るならそうしてそれで單純に形づいて仕舞ふならこんな樂なことはない。けれども愛はそれ程簡單な差引勘定でおしまひにすることが出來るものではない。よしまた打算的一方で形をつけやうとしても知らずに自分丈けが與へてゐた間丈けの損失をどうして取り返すかと云ふ問題だけでも一寸は形がつかない。

對者の愛が既に自分から外れたと思つたとき直ぐに對者に對する愛が醒めさへすれば世の中には何のかなしみもない。私はそれが出來るならさうもなり度い。けれども何時でも何につけても矛盾はかなしく私たちをつけまはす。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私は何をしても何を考へてもいゝ加減で止めたくない。終りまで乾度追求しないではゐられない。それは時にとつては私に、大變な結果を持つて來る。かうかしら、あゝかしらと考へてゐるうちに熱心に、それからそれへと持つて行つて終に自分で氣がつく頃にはそれは空想ではなく實際のことのやうに私は一生懸命に考へてゐる。そして自分で考へまいとする事柄に向つてはなをさうである、それは私のかなしい性癖である。やうやく痛みを忘れかけた頃になるとまた何時かしら思ひ出して考へ〳〵丁度そのときに受けたと同じ絶望の處へ自分を導いて行つてきた我と我が痛みをつゝいては思ひ出し〳〵何時までたつてもそれを忘れる事が出來ない。けれども私にはかう云ふことは滅多にない、併し此度だけはさうしないではゐられなかつた。今も私はそれを續けてゐる。月日はずん〳〵去つてしまつても私はそれ丈けは忘れることが出來ない。そうしてはまた自分が對者を愛してゐながら信じやうと努めながらその事に向つて丈けはどうしても信を向けられないのをかなしんでゐる。一番二人にとつて大切な信をおく事が出來ないと云ふのは何と云ふ悲しいことであらう。そして而も私は對者を愛してゐる。その愛はだん〳〵に喰ひ入るやうに深くなつてゆく。そうして私の眼前に彼がある間は私はすべてを忘れてゐる。けれども彼が私の傍から去ると私はぢつとしてゐられない程不安になる。さうして私はたゞ彼を信じたい

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ともかく。然しそれはどうにもならない。遂には私の信を奪つた、踏みにぢつた彼の行爲を染々情なく思ひ出すより他はない。そうしてはまた、私はふれてはならない瘡口にさはらないではゐられなくなる、こうしてだんだん私の空想が深くなつて眞實らしくなつてゆく。私はひとりでゐる時に氣が違ふのぢやないかと自分でも思ふ位だ。それでも私は私自身の彼に對する愛で何時の間にか縛られてゐる。けれどもそれを意識すると同時に、私は彼の虚心な顏を思ひ出す。彼は私がどんなに苦んでゐやうと何事もなかつたやうな顏をしてゐる。それが私を苦しめる。彼には私、彼女には他に愛の對象たる男がある。さうして、ひよつとしたはづみに二人は私を裏切つた。彼は私の愛人としてまた良人としての愛を、彼女は私のうとい肉親の中の唯一の者として愛した從姉の愛を、また男に對する愛を。それは私には二人のふとした出來心であるとして、二人の過ちにしやうとした。併し私の穩かな顏色を伺つた二人は却つて二重に私を踏みつけた。私の眞實を踏みにじつたことに對して二人は何の感情も表はさない。私の苦しみは極めて安價に眺められてゐる。それは私をどうしても二人の愛がさうした一時のいたづらな出來心からでなく本物でなければならないと云ふ結論に導いてゆく。もしさうならば彼が再び私にかへつて來たと見えるのは虚僞でなくてはならない、私たちはそれによつて、どうにか解決をつけなければならない。併し彼

はそれを否定する、さうして私もその否定を受け入れてはゐるけれども私の不安がすつかり落ちついて仕鉾ふやうな力強いものを彼は決して私に與へやうとはしない。そうして私はそれを強ひて彼に求めたくない。それはまた決して強ひて求むべき性質のものではない。それが與へられさへすれば私はすつかり落ちつけることがわかつてゐる。けれども私はどうしてもそれを要求することは出來ない。彼自身から氣がついて與へてくれる迄は私はおなじ苦しみをつゞけなければならない。何時までも〳〵。そして私の愛は、不安であればある程だん〳〵深みへはいつてゆく。私はぢつとして自身のすがたを見つめてゐるのだ。

私が私の良人よりも多く名を知られてゐると云ふことの爲めに私達の關係について屢々侮辱が加へられる。

一體名を多く知られると云ふことがどれ程その人の價値を高めることになるだらう。私が名高いと云ふことの爲めに、私が何も良人の價値を蹴落しはしない。私は私の名が出たと云ふやうなことにつけても日本の社會の淺薄さを思はないではゐられない。私は何の人に卓越した智識もなければ技能も持つてはゐない。私はたゞ私の僞らない感想を筆で書くと云ふこと丈けしか出來ない。それは誰にでも出來ることなのだ。それなのに、そう云

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ふことを書いて發表する人が少數だと云ふことの爲めに、ひとり私のやうなものが名高くなると云ふことはあまりに意味のないことである。もつと〳〵卓越した婦人が出る時が來なければ私の本當のねうちは分らない。私は少からず買ひかぶられてゐる。今に私の本當のねうちが分つて來るやうになると人達は屹度あんな平凡なつまらない女と云ふやうにしかなりはしない、私は名聲とか地位とか云ふことに對しては何の野心もない。たゞ私がはやく平凡な女だと認められるやうになりさへすればいゝ。即ち、今はあまりに一般婦人の內生活のレベルが低くい爲めに、少しばかり私があたりまへなことを考へてその感じたりしたことを書けばそれが珍らしがられるのだ。けれど一般の婦人が其處まで來る時は私自身はどうなつてゐるかそれはわからない。併し兎に角私には格別の智識も才能もない事丈けはたしかだ、たゞいくらでもさうした智識を得やうとする欲望は持つてゐる。けれどもけ私の生活がたゞ他の人々の生活にくらべていくらか眞實を多く持つてゐると云ふことしかちがつてゐないやうに、私の書くものはたゞ虛僞をまじえないと云ふこと丈けは自信と誇りにもなるけれども他の點は平凡すぎる程平凡である。

それだのに世間の人は、私の名が出てゐると云ふことの爲めに何時でも何を見ても良人には何時も輕い侮辱の影が投げられてある。私はそれに何時も不快を感じさせられる。私

は自分よりも低いものや同等のものを戀愛の對象にしたくない。私の家庭に少しはいつて來た人は屹度彼を私よりも低くねぶみをする人はあるまいと思ふ。彼は世間的の地位や名聞に對して非常に冷淡で、何時でも自由を欲してゐる爲めに自由を拘束されるやうな位置や名聞は却つて邪魔な位に思つてゐる厄介と云へば厄介な強情な人間である。彼等は未知の人に對してあまりに禮を失してゐる。私が彼よりもずつと淺い小さなものでありながら名が多く知られてゐると云ふことに對しては實際苦しんでゐる。それは事實である。といつて私は決して彼のもつてゐるものが光らないからと云つて彼のねうちを輕く見る程無理解ではない。彼がそのまゝそれを握つたまゝ死んだとしても彼のねうちは少しもちがはない。よく知りもしないくせに彼是云ふこと丈けはつゝしんで貰ひたいと思ふ。知らないことは何處までもわからないのに違ひない。それにつまらない憶測をしたり、よくわかりもしない人から聞きかぢりを面白さうな讀み物の種にすると云ふ人々の態度を憤らずにはゐられない

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

編輯室より

□先月號は風俗壞亂と以ふ名の下に發賣を禁止されました。忌憚にふれたのは原田さんのらしいのです、他には何にもそんなのはありませんから。私は少しもそんなことを考へずに、可なりさうした考へが誰の頭にも浮ぶことを思つて立派な一つの問題を提供するものとしてのせました。けれども私は不注意な編輯者としてしかられました。けれども私は可なりあの墮胎とか避姙と云ふことについて男の人たちの意見は聞きました。けれども女の意見は聞きませんから知りたいと思つたのです。今でもその考へはあります。

□それで、私は早くからかういふことについても考へてゐたのです。此雜誌に出る作品は大抵何かしら問題をもつたものが一つや二つありますので、それを考へる方はまじめに考へられませうけれど氣づかずに過すことが可なりあると思ひますので毎月前月號に出たものゝなかから、その出た月に、どれを問題にすると云ふことを極めておいて皆でいろんな方面から研究してこの次のか次の次のかで發表することにしたらと思ひます。それはたゞ一人々々ですん／＼よんでおもしろかつたと云ふ丈けよりも更にもつといゝ何かしらを得ることになると思ひます、それで前號にも申ましたやうに八月は一月やすみまして九月の紀念號からしつかりしたものを出したいと思ひます。丁度いゝ機會ですから九月から初めやうと思ひます、それで九月號には墮胎避姙についてのお考へを成べく多數の方から伺ひたう御座います、これも前月に申ました日記や感想とおなじに、たゞもうお考へになつたことをそのまゝお書き下さればいゝのでしてどんなに永くても短かくてもかまひません、何卒讀者諸姉のまじめなお考へを伺ひたいと思ひます。

□今迄は原稿の〆切がかなり後れましたが以後は十五日には屹度集めてしまひたいと思つてゐますから右の原稿をどうぞそのおつもりでお願ひいたします。但し此度は八月號をやすみますから七月一杯か、おそくも八月十日までにはお送りを願ひます、頁がふえますから印刷所にはやくまはさなければ間に合ひませんから。

□私は七月中旬迄には一度九州の實家へかへらうと思つてゐます。九月號の原稿は七月十日過ぎならば左の所あてにお願ひいたします。

福岡縣糸島郡今宿村　伊藤野枝

□今月は先月の禁止の埋め合はせをするつもりでゐましたが廿日頃まではいろ／＼な印刷所をかへたり何かする用事で原稿がかけないで廿日すぎてからは每日のやうに氣分がわるかつたり何かしてすつかりおくらして

仕舞ひましたので何にも書けませんでした。九月號には七月一杯かゝりで少し立派なものを書きたいと思つて居ります。九月にはどうかしていゝ雜誌を出したいと思つてゐます。

□平塚明氏は四ッ谷南伊賀町四一にお越しになりました。

□可なり苦しい遣繰りをしてゐましたのに此度また發賣禁止を喰ひましたので大分困つて居ります。購讀費の切れた方は何卒お拂ひ込み下さいますやうお願ひいたします。

□今月はまたおち／＼本をよむことも出來ませんでした爲めに新刊紹介を思ふやうにすることが出來ませんでした。何卒あしからず。九月號からは屹度いたします。

□大杉榮氏は小石川區水道端二ノ十六に佛蘭西文學研究會をおいて毎週土曜の夜高等科では一回讀み切りの小說脚本、講演等を講義し猶別に初等科をおいて佛語を初歩から教授なさるさうです。

新刊紹介

ゲオルグ ブランデス 十九世紀文學の主潮（上卷） 吹田順助譯

有名なブランデスの傑作である。本書には第一卷移民文學、第二卷獨逸の浪漫派が收められてゐる。この書に一八七一年、著者が長途の旅から歸國しコーペンハーゲン大學の講師として最初に講演したものである。彼は文學の比較研究と云ふ新方法で、十九紀前半に於ける歐洲文學の運動を聽衆の前に展開した。そして自國の文學が依然として非現實的浪漫主義の迷夢を辿りつゝある事を痛論し、又文學は人生の爲に存するものでなければならず人道主義の自由な開展でなければならぬ事を力說した。著者は又本書の卷頭に「この著述に於て予の企圖するところは歐洲文學に於けるある主要なる集團と運動との研究によつて、十九世紀前半の心理の綱要を示さむとするに有る」と云つてゐる。この書は譯者の云ふ如く單なる文藝批評と云ふよりは寧ろ人生批評、文明批評であると云ふ點に於て、その獨特なる價値を持つてゐる。眞に文學を理解しようとする人は先づこのやうな第一流の書物を精讀すべきである。吹田氏の譯筆も亦極めて明晰嚴正である。（定價三圓五十錢内田老鶴圃發行）

寄贈書籍

お菊さん ピエル、ロテイ作 野上白川氏譯 新潮社發行定價九十錢

最近の文藝及び思潮 生田長江氏著日月社發行 定價壹圓

トルストイ人道主義 加藤一夫氏著天弦堂發行 定價五十錢

ロマン、ロオランの思想と藝術 内藤濯氏著 天弦堂發行定價金五十錢

瞑想錄 タアゴル著 加藤朝鳥譯 福岡書店發行定價七十錢

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雜誌規定

一 毎月一回一日發行

一 定價一册金貳拾五錢(郵税壹錢五厘)

一 前金購讀料(四ヶ月分)壹圓(六ヶ月分)壹圓五拾錢 八ヶ月分)貳圓(十ヶ月分)貳圓五十錢(一ヶ年分)參圓

一 廣告料(一頁)特三十五圓、一等二十圓、二等十五圓、三等十圓、(半頁)七圓

一 振替貯金口座は(東京二一一一六青鞜社)に拂込まれたし。

一 郵券代用は一錢五厘切手に限る(但し一割增のこと)。

一 編輯事務、圖書雜誌、新刊寄贈申込、廣告申込、交換廣告は青鞜社へ。

一 雜誌購讀に關する一切の事務は青鞜社へ。

一 原稿〆切期日は毎月十日限とす。

大正四年六月三十日印刷納本
大正四年七月一日發行

禁轉載

東京市小石川區指ヶ谷町九十二番地
青鞜社内
編輯兼發行人 伊藤野枝

東京市京橋區弓町十二番地
印刷人 柴田杠一郎

東京市京橋區弓町十二番地
印刷所 千代田印刷株式會社

發行所 東京市小石川區指ヶ谷町九十二 青鞜社 振替東京二一一一六番

發賣所 神田區表神保町三番地 東京堂 電話本局二五六一番 振替東京二七〇番

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

婦人の開放・女權の擴張

想界の羅針盤

反響叢書

藝術界の基調

平塚らいてう女史著

（『青鞜』讀者は定價一割引）

第二編

評論集 現代と婦人の生活

▼四六版三百餘頁・定價八十五錢（送料入）

土曜新聞評して曰く

其容貌に於て、其思想に於て、其文才に於て、所謂、新しい女の中の女として最も優れて居るのは雷鳥平塚明子氏である。單に好奇心の眼を以て見るも明子氏は明治の末から大正の時代へかけて世を騷がした名物女の一人であり、更に之を思想上より見れば來る可き何物かを暗示する日本婦人の先驅である。而して本書は、明子氏が世間の侮辱と賞讃との間に立つて奮鬪せる行進曲を集めたるもの、其言論には未だ徹底せざる所もあり、多少奇矯に走るものもないではないが、其大體に於て惻々人に逼る力の潜んで居る事は爭ふ事が出來ない。世には食はず嫌いの人が多い。一口に新しい女と言ふ誤られた代名詞に咒はれて、思想界に現はれた傾向を見逃す事があれば、後日必ず悔を貽すに違ひない。

發行所 東京本郷元町二丁目二十五 日月社 振替東京二八九一四 電話下谷三二〇六

森田草平氏譯
カラマゾフ兄弟
ドストイエフスキイ作

紙裝木版七度刷
總頁數約六百餘
一頁六號五百字

定價金九十錢
假綴分册六十錢
送料各金八錢

本書はドストイエフスキイが永眠前一年（一八八〇）に完成した作、トルストイの「戰爭と平和」と共にロシア文學の二大平行線だといはれて居る。主人公たる三人の兄弟ハ中イヴンは西歐羅巴を、ミチアは現在のロシアを、アリヨトシヤは全人類を包括すべき將來のロシアを體現したるものと稱せられてゐるそれ故本書は過現未のロシア、最も大膽に藝術的に表現したものである。日本でもこの書の譯が二三出てゐるがまだ完結してなかつたり、あまりに單簡すぎる梗概譯ばかりである。本書はその中の最も完全なものである。

（諸新聞雜誌及文壇名家は悉く本書を激賞せり、好評三版出づ）

▲著者卷頭に序して曰く。メレシユコフスキーは次のやうにいつて居る。ドストイエフスキイの作はその人自からを見るやうな作である。ドストイエフスキイは人生を苦しんで生きた人である。生きた、苦しんだ、そして泣いた。其自分の苦しい生涯を藝術として現した人である。啻に藝術として鑑賞する許りでなく、讀者はその作物を見ると實際作者の泣いてゐる姿が見える。作者は苦しみを訴へて居る。只讀んで居るのではなくて作者と一緒に苦しみ、一緒に生きるのである。心臓の鼓動を共にするやうな心持がする。ドストイエフスキイに同情するといふだけではどうも物足りない。その生活の中へ捲込まれて、主人公と一緒に生活する。でかくまで讀者を引きつける特長は何かといへばその主人公の心理を描くことが優れてゐるからである。どんな複雜な飛離れた心理でも明細に顯微鏡で覗く樣に描いて見せる。人間の内部生活を其儘擴げて見せる。從てどうしても主人公と一緒にしてしまはなければ置かない。ドストイエフスキイの作がインテレクチユアルだといふのは主として緻密な何處迄行つても止まないやうな解剖にある。尤も只分類したり綜合したりすると言ふ意味ではなく、本當に創造するのである。ドストイエフスキイは單なるインテレクチユアル・マンではない。もそつと眞實に物を見、物を摑まへて來る人である、智的ではあるが同時にクリエテイーヴである。オリヂナルである。

發行所 東京市本郷區元町二丁目二十五番地（振替東京二八九一四 電話下谷三二〇六）日月社

Google

花袋全集

第壹巻

大形四六版約七百頁
總クロース箱入美本
總九ポイント活字
一頁約八百字詰

定價壹圓八十錢
郵税十二錢

少し早いやうな氣もするが、自分の生存中に全集を出して置いた方が、完全な理想的なものが出來ると言ふ花袋先生の考から、先生自身資を出して、内容に於ては後世に殘して恥かしからぬもののみを選び、裝幀、紙質等に至るまで凡て先生の嚴重な監督の下に此花袋全集が出版されることとなつた。全六巻を以て完成し、發行の順序は新しきものより順次に古きに及び、年二冊の豫定を以て發行される計畫である。敢て大方讀書子の深厚なる同情に依る盛なる歡迎を希ふ。

内容　春雨　髮　殘る花　代表的長篇三篇

本書に收めたる三篇は、花袋先生が**女性を研究し、戀愛**を描かんが爲めに、特に筆を執られた三部曲とも見るべきもので、**共に藝妓を主人公**とした最近の作に係る長篇である。現文壇の巨人の圓熟渾成せる筆致を見るに缺くべからざる代表的作品として敢て江湖に推奬する。

東京市外代々木百卅二番地
發行所 **田山花袋方**

麴町區三番町八十四番地
發賣所 **植竹書院**
振替東京一二九五三番

創刊號

九月一日發行

科學と文藝

定價廿五錢 郵税二錢

■農奴開放を中心として見たる露國文化……昇曙夢
■セザンヌの畫室（ヴォラール）……高村光太郎
■小さな反抗（小説）……吉田弦二郎
■新しき試み（小説）……ストリンドベルヒ
■あの女（小説）……岡田八千代
■雜感……武者小路實篤
□近代劇の「櫻の園」
■感想……木村莊八

詩歌

與謝野寛　與謝野晶子
加藤一夫　大川與四
田邊若男　フオーフアノフ
長瀬先司　高橋綾子

科學

■藝術の科學的起原……小酒井學士
■生物と光との交渉……藤浪博士
■ジプシーの話……辻潤
■ありぢごくの一生……S，T，K
■未定……仁木博士

挿繪

□一面の畑及肖像……木村莊八
□自畫像……岸田劉生
□夕日の丘……石井柏亭
□風景……岡田三郎助
□静物及人物……西村伊作
□愛の晩餐……ゲエイ
□勝利者……ウエレスチヤギム

■トルストイの宗教及宗教觀……加藤一夫
■リーチ氏の陶器論に就て……石井柏亭

吾儕の望みは新文明を生まんとなり

東京牛込區西五軒町

天弦堂書房

振替東京貳九五九

九月號の壯觀を見よ

新公論

一部二十五錢 稅二錢

世界の大勢……社說

- 偉人を思ふ　上下盛に經綸を行ふの時機……社說　上野岩太郎
- 自殺の增加を如何……安藤枯山
- 現內閣の前途を見む……淺海蠻塊
- 戰後の財政問題……目賀田男爵
- 一日一不平……谷本博士

戰局善後の經濟論……社說

- 政界の腐敗と選擧權擴張……岡愽治
- 平沼檢事總長……鵜崎鷺城
- 宗教家を教育家とせよ……西倉吉
- 實業界の解剖……小島秋峯
- 居据れる幽靈內閣……高島米峯
- 宗教時感……廣池博士

萬報一覽

軍事外交　哲學倫理　思潮文藝　家庭衛生　世界珍聞　人物逸話

産業經濟　宗教教育　美術音樂　料理嗜好　時事笑話　雜聞雜件

三面記事評論

八月中の諸新聞三面記事の主なるものを拔萃して諸家が評論感想を執筆す

森田草平　生田長江　高島米峯　淺海蠻塊　安藤枯山　公論子等

- 再び安倍能成氏に……三井甲之
- 心臟の囊（飜譯）……森田草平
- 一夜（森田氏に推薦によれる小說）……住吉の女
- 幼兒に與ふ（短歌）……藤井黎白
- 月見草（俳句）……松宮寒骨
- 性慾と宗教……松の里人
- 半獸主義者の家庭……安藤枯山
- 公園に寢る人々……K B 生
- 在米同胞生活の暗黑面……歎憂生
- 振袖和尙傳……放浪役僧
- 短歌俳句社會欄の原稿を募集す
- 人身電氣健康法……松里

文藝圖書目錄　進呈

萬葉集選

窪田空穗著
中村不折裝

菊半截二八〇頁　絹地柯彩色美本　四十五錢　郵稅四錢

續萬葉集選

窪田空穗著
中村不折裝

菊半截二〇〇頁　絹地柯彩色美本　五十五錢　稅六錢

▲完成せる日本民族代表的歌集の評釋!!

讀賣新聞評　萬葉四千餘首中特に價値あるものを選び、簡單なる註解と評語とを附したり著者は古典の新鑑賞者として當代に類なし。其標準の極めて妥當にして藝術上の權威あること此小册子をして千金の重みあらしむ。

前編は短歌のみを收め、續編は短歌に長歌と「萬葉集の中心思想」てふ解題とを加ふ。

東京市本鄕區元町二丁目二十五番地

日月社

振替東京二八九一一四
電話下谷三二〇六番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

生田長江氏の新論文全集

最近の文藝及び思潮

四六版四百頁
布裝美本箱入
金一圓稅八錢

著者は權威ある文壇の高等批評家である。文壇の巨星森田草平、島崎藤村、夏目漱石、田山花袋、正宗白鳥の大物を爼に載せて手際よく庖丁目を入れて行く冴えは見上げたものである。著者の頭は鋭いがイラ／＼せず論理的であるがパッションを失はない。加ふるに其筆にデリケートなウイットを滴らしてゐる。尚「不正直なる沈默」以下十數篇は著者の自己及文壇に對する見識の正直且つ大膽なる告白で前の人物評論と合せて最近の文藝及思潮の精髓を窺ふに足る。（世界新聞）

森田草平氏傑作煤煙續編

縮刷 自叙傳

菊判四百餘頁
布裝美本箱入
九十錢稅八錢

粗き布のポツトリとした裝幀なり、此作は云ふまでもなく作者の興味ある生活をさながら打出せるものとして「煤煙」と共に有名なり、安倍能成、阿部次郎兩氏の評を附す。（萬朝）

同じ著者の「煤煙」と共に眞面目に一生懸命になつて書いた作で、世をして驚嘆せしめ作者の地位を固めたものである。今や「煤煙特製」と同形同體裁の縮刷となつて現はれた。更に愛讀者を增すことであらう。卷末に著者の友人の評が收めてある。（讀賣新聞）

江部鴨村氏の新研究解說

タゴールの思想及宗教

四六版二百頁
美裝優雅箱入
七十錢稅八錢

タゴールの思想を消化し問題の要點を把握して自在に之を說明し去つてタゴールの內生命を紹介せんとしたる所は其の特色なり、タゴールを語るもの丶中大體を領せんとするものに手頃の書として推薦す。（朝日新聞）

印度の哲人タゴールの思想と宗教との大體を何人にも解るやうに極めて平易明快に說てやがて來朝の噂ある哲人を迎へんとする我讀書界に資し及我等が思想生活を豐富ならしむる一冊たらしめた良書である。（國民新聞）

高濱虛子氏作 長編 附錄 子規書翰

子規居士と余

四六版三百頁
クロース美本
九十錢稅八錢

子規と著者は同じく伊豫の土に生れ同じく俳名を一世に擧げ其交情師弟の如く兄弟の如く親友の如きものあり、著者故人を懷ふ事深く玆に此書あり更に故人の寄せた書翰百數十通を添へて之に江湖に示せり。（時事）

或時代の生める特異の文學者之を圍繞せる一團の青年が其清き文藝憧憬の念、是等が率直に叙述されてゐる一篇の作品と見るべく子規氏の傳記とも云ふべく而して又一面明治文學史の一部とも稱し得べし。（報知新聞）

發行所 東京本鄕元町二丁目二十五 （振替東京二八九一四 電話下谷三二〇六） 日月社

即位式御大典紀念 法學博士 廣池千九郎先生謹著

大隈伯爵閣下補教
文學博士故井上頼圀先生序
文學博士井上哲次郎先生序

伊勢神宮と我國體

四六二倍版總洋布特製三百頁
定價二圓送料內地十六錢臺灣樺太卅五錢鮮、淸國四十五錢

廣池博士宗教的信仰を獲得するや忽然我國體の淵源に關して、大發見をなし先輩の贊同を得て舊著天覽「伊勢神宮」に神宮中心國體論を加へ改題發行するに至れり。

【神宮中心國體論】▲神宮を中心とせる國體論發生の沿革▲我建國の基礎的精神▲神宮皇居の分離▲天祖の御位置と歷代の御聖德▲我國體の淵源と我國運發展の方法

【伊勢神宮】▲伊勢神宮と我國體▲神宮創立の理由▲豐受大神宮創立の理由▲兩宮の御稱號御社格▲內外宮と支那の宗廟社稷▲兩宮神殿の御建築法▲神宮の御威德と教育事業▲神宮の大祭典と皇室及び國民▲神宮の神聖▲歷代天皇の神宮御崇敬▲明治天皇の神宮御崇敬▲神宮と學校教育並に軍隊教育等

【伊勢神宮附說】▲神宮御創立に關する古書の杆格に就ての考證、神宮古記錄の日本書紀古語拾遺等より確實なる理由▲皇大神宮の宮地の變遷▲神宮の沿革▲古代より維新前に至る神宮官衙の組織▲現時に於ける神宮諸官衙▲兩宮御祭典▲勅使及儀仗兵▲遷宮制度歷史▲大嘗及曆▲行幸並皇族縉紳の參拜▲庶民の參拜並御蔭參り▲兩宮相殿の神▲別宮攝社末社等、其他數十項略【附錄五章】【補說三十六章】

神社崇敬と宗教

菊半截總洋布製三百頁定價五十錢
送料六錢（宗教叢書五篇分）

【緒言】予は今日まで各地に於て始終神社の崇敬地方自治制青年修養等に關して講演を爲したのであるが其中にて神社崇敬の事が一番地方人に分つて居らぬやうであるから今回之に關する極めて大體の事を示す事にしたのである尤も此企は各地の神職諸君からも度々要求せられたのが一つの動機と爲つたのである。ほんにこれは通俗的にて且概說に過ぎねど幾分なり神社崇敬の趣意が一般國民に正解せられて其實際上の効果を收め得るやうになる一つの手引ともならば洵に國家の幸であると考ふ。

【目次】▲總論▲祖先崇拜と家族制度▲神社の歷史的性質▲國法上に於ける神社の性質▲神の實質と人心の訓練▲神社崇敬に關する國民の心得▲神社崇敬實行上の施設參考資料▲宗教的神道の信仰▲神道教會の必要▲普通的宗教と神社▲予の天理教教育部に於ける施設の一斑▲神官神職の神社奉仕法并に其修養法▲町村長の神社崇敬の心得▲氏子の神社崇敬の心得【附錄一】官國幣社一覽表【附錄二】神祇に關する和歌

發行所 東京本郷元町二丁目 宗教叢書新公論發行 電話下谷三二〇六番 振替東京二八九一四 日月社

Digitized by Google UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

御大典奉祝の御用意は

三越に限ります

大禮服、御紋服、その他御正裝用附屬品一式は特に奉祝の意を體して御調製申上候。その他縮緬羽二重の模樣ものを始め瓦斯羽二重袖下模樣は申すに不及國旗、團体旗其他の必要品各種準備仕居候間御注文下され度、御照會次第早速詳細の御見積可仕候。

三越呉服店

東京駿河町

泰西文藝思潮の淵源

近代思潮叢書

菊半截美本 貳百五十頁 ―― 定價各五十錢 ―― 郵送料六錢

第五編

印象主義の思想と藝術

高村光太郎著

（愈々發賣）繪畫は勿論近代のあらゆる思想藝術の基調をなせる印象主義の最も忠實嚴肅なる研究書始めて日本に出現す。藝術に眞の領解を得んと欲する者は來れ。

第八編

オイケンと現代思潮

稻毛詛風著

（最新刊）オイケンに關する述作の祭物として喧傳せらる、時代は過ぎたり。彼の思想を通じて複雜多端なる現代思潮を究明し精神生活の妙境に到達せんとする士の一讀を俟つ。

第九編

トルストイ人道主義

加藤一夫著

（忽再版）人としてのトルストイは勿論、彼の思想生活の全部に渉り著者の最も力強き同感を共鳴と理解とを以て紹介批判せられたるもの本邦唯一のトルストイ研究書たるは疑はざる所なり。

重版復重版

- 第一編 ニイチエ 超人の哲學 生田長江
- 第二編 惡魔主義の思想と文藝 岩野泡鳴
- 第三編 個人主義思潮 相馬御風
- 第四編 未來及立體派の藝術 木村莊八
- 第六編 タゴール 聖者の生活 吉田絃二郎
- 第七編 ロマン、ロオランの思想と藝術 內藤濯

東京市牛込區東五軒町三五 **天弦堂書房** 振替口座東京貳九五五九番

■高濱虛子著 附錄 子規が虛子に宛てたる書翰全集

子規居士と余

四六版三百數十頁
クロース製頗美本
九十錢 税八錢

松山城下の野球（ベースボール）の遊びから子規の風丰を敬愛し初めた著者が文壇に英名を馳せ名士と交りホトトギスを經營し最後の病床に子規を看護した迄の順序を小說風に書いたもので附錄も教訓に滿ちた興味深いもの

窪田空穗著
中村不折裝

萬葉集選

菊半截形極彩色絹裝
正編四十五錢稅四錢
續編五十五錢稅六錢
正三百頁續三百餘頁

本書は萬葉集を讀まうとして、その大部なのと、やゝ難解なのに煩ばされてゐる人に對して、それに評釋を加へて、なるべくたやすく萬葉」といふものゝ大體を會得させやうとするのを目的としたものである。選をするに就ては、もとより私の好むところによる外はなかつたのであるが、しかし捉へられてゐる境そのものよりも、それを捉へた作者の心境と、その捉へられた境と如何に融合してゐるかといふ點を主とした。即ち作者の心實が如何に表現されてゐるかといふ點を主としたのである（著者序文）

■生田長江先生著

最近の文藝及思潮

（反響叢書第五編 著者自製美本
四六四百餘頁 金壹圓 送料八錢

著者が最近に於ける重要なる評論は悉く收めて本書中にあり。文藝を好む人々に一讀を薦む。著者は文藝批評殊に人物評論に於ては文壇の重鎭たり。

■森田草平先生著

縮刷 自叙傳

（「煤煙」續編再版）
布裝七度刷美製
箱入六號四百頁
金九十錢 稅八錢

「煤煙」と共に著者の出世作として名あるもの、安倍能成阿部次郎兩氏の合評と著者の批評的自序とを加へ、「縮刷煤煙」と同型體裁にて出づ。一讀を望む。

發行所 東京市本郷區元町二丁目二十五番地 日月社（振替東京二八九一四 電話下谷三二〇六）

昭和44年10月30日発行　　【第7回配本】

青　鞜　第5巻　7月号

編　著　者　平塚　らいてう
発　行　者　藤　原　正　人
発　行　所　(株)明 治 文 献
印　　　刷　江　明　印　刷
製　　　本　(株)三 高 製 本

【分売はいたしません】　定価 4,500円

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
PL
756
S45
v.5
no.7

University of Colorado at Bould[redacted]

[redacted]4 6746547

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

明治四十四年八月二十八日第三種郵便物認可 第五卷

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

大正四年九月一日發行（毎月一回一日發行）第八號

青鞜

第四週年記念號

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

第五卷

第八號

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

紀念號目次

感想

個人としての生活と性としての生活との間に於ける爭鬪に就いて(一)　らいてう

別居に就いて思ふことども(三)　岩野清

墮胎に就いて(三〇)　山田わか

詩歌

森の大樹(三九)　與謝野晶子

百首歌(四三)　三ヶ島葭

わがあやまち(五三)　茅野雅

山にて(五四)　齋賀琴

八月の歌壇より(五六)

小說

初戀のなりゆき(五八)　岡田八千代

お隣のおくさん(七〇)　小林かつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お小夜(七)　原田皐月
或る家(九三)　山田邦子
姉(一〇九)　久保田富江
青鞜詠草(一二二)
村の精神病者と生兒(一二三)　生田花世

日記
七月末の日記より(一三三)　濱野雪
折りにふれて(一三九)　岡野雪

手紙
私信(一四二)　野上彌生子
病衣を脱ぎて(一四八)　岡本かの子
九州より(一五四)　野枝
編輯だより(一六五)
新刊紹介(一六七)
表紙　奧村博

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

個人としての生活と性としての生活との間の爭鬪に就いて（野枝さんに）

――らいてう

野枝さん。

あなたが近頃「青鞜」や「第三帝國」で御發表になつた感想によつて、子供を產むことや、子供に就いてのあなたの御考や、それに關聯して避妊や墮胎といふことに就いてのあなたの御意見もほゞ知ることの出來たのを私はうれしく思ひます。

何故なら、私自身が此頃漸く是等の問題を、今迄のやうに只傍觀者としてではなく、又單なる思想上の婦人問題としてではなく、自分自身の問題として、自分の實生活そのものと直接の交渉ある問題として眞劍に考へられるやうになつて居るからです。いえ、考へずにはゐられないやうな境地に私自身が今持ち來されて居るからなのです。私は今、女としての十分な自覺の上に立つて、是等の問題を考へねばなりません。私の頭の中には是等に就いての色々の考へが晝夜渦のやうに湧き上つて居ります。そしてこれがあなたのあの感想や、早月さんの墮胎事件を取扱つたあの創作に對して特殊な注意と興味とを感じさせる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と同時に、こんな手紙をあなたに宛てゝ書かずにはゐられないやうに私をさせたのです。

野枝さん、もう二年前のことになりますね、あなたの第一の御姙娠の時は、その頃、私はあなたの近くにあつて、あなたとよく逢つて、色々のことを話しあつて居ました。けれど私は遂にあなたからあなたのお腹の中のお子さんに就いて、又は近くあなたが母となられることに就いて色々感じさせられたり、考へさせられたりしてゐられるのだらうと私には想像されたことに關してはあなたから何も直接に伺ふことが出來ませんでした。時として私はあなたのお顔付や、ふとした言葉の端々によつて、あなたが此の姙娠といふ動かすことの出來ない事實の前に立つて、ひどく恐れていらつしやるやうな、いやがつていらつしやるやうな、苦しんでいらつしやるやうな、困つていらつしやるやうな或ものを讀むことがありましたけれど、といつて、私からもすゝんであなたに御尋ねすることを妙に差し控へて居りました。それはあなたの中にもまだ世間の多くの婦人が始めてこの事實に出逢つたとき、他に對して本能的に感ずる羞恥の念や、又はいやなことには、怖いことには成るたけ觸るまいとする臆病な心が正直な發言を憚らせてゐるのではあるまいかとか、年こそ上でも、性的生活の經驗や、性の方面の發達から言へば、どう考へても年少者らしい、しかも一個の獨身婦人である私に（その當時はさうでした）あなたのこの新しい、貴い經驗

をお話しになるのはおいやなのだらう、それは無理もないことであるなどとも考へたからでした。

併しあなたのあの「動搖」を讀んだ時、正直に言へば私は多少の失望と共に、或る疑問に打たれずにはゐられませんでした。何故なら第三者の私にはあの事件の背景としてあなたの妊娠といふ事實を忘れることが出來ませんでしたから、あの時のあなたに生理的にも心理的にも非常な影響を與へてゐたに相違ないこの點を、出來る丈の反省をもつて明にお書きになつたなら、もつと確な、もつと眞實な、もつと意義多い、もつと深いものになつたらうにと思はれたからです。そしてさう信じて居たからです。然るにあなたは矢張り始めから終りまで、どの點でも只の一言も此事に言ひ及ぶことさへなさいませんでした。それはなぜだらう。矢張り羞恥の念か――殊にあなたをたとへ瞬間にしろ誘惑し、あなたをあれまで動搖させたその相手の男に對していふに堪へないものがあつたのだらうか、もしさうだとすればそれは意識してか、しないでか、或は當事者といふものは實際は却てかうも自分自身の胎內の子に對して無頓着で、無責任で、否々全く意識的には無關係、沒交涉の狀態で生きてゐられるものなのだらうか、しかも一般婦人と比較すれば常に自分自身に就いて、自分の生活に就いて考へてゐられる自覺あるあなたであつて。これが、私の「動搖」

を許するときの最初のそして最後までの疑問なのでした。そして私はこのためにどれほど批評の筆を鈍らされたか知れませんでした。

野枝さん。

私は其當時あなたの極近くにゐるものの一人として、あなたの御姙娠や、御出産や、續いて母親となられたことや、その結果としてあなたの生活の上に、又は思想の上に俄に大きな變化の現はれて來たことを目擊しながら、わけても御子さんの成長と共に、あなたの御心の中にも次第〳〵に成長して來た到底計り知ること出來ないほど深い、そして他のために己れの僅たりとも容易に犧牲にしないあなたが御子さんに對してはどんな犧牲も、矛盾も、苦痛も煩はしさも殆ど感じてはいらつしやらないのかと思はれるほど大きなその母としての本能的な愛情に寧ろ驚異の眼を見張りながら、種族と直接關係をもつた女性の生活言ひかへれば種族に對して有つて生れた女性の使命と個人として又は、社會の一員としての婦人の魂の生活や仕事や、職業などとの間の矛盾に就いての色々の問題が自然と頭に上つて、考へさせられることの多かつたのは事實です。併しそれは傍觀者としてにとどまつてまだ私自身の問題とは容易になつて居なかつたことは前申した通りです、のみならず

其當時の私の中には、まだ私自身に何の批判力もなかつた早い時代に、無條件に取り容れられてゐた何といつても其根柢に於ては禁欲的な東洋思想――殊に佛教の思想が、その思想の殘骸が、最早思想としてといふよりも感情として私の心の一隅にこびりついて居たのと、今一つには、私共の周圍の到る處で見受けられる結婚生活の中にゐる多くの婦人達のあまりに虐げられた奴隸生活に對する公憤と、自分のさういふ生活さへ氣付かずに滿足してゐるらしい婦人に對する憎惡と侮蔑から來た反動と、なほ私一個の戀愛の經驗、もつと正確に言へば私自身の戀愛の成長發達の仕方なども手傳つて所謂「性」としての婦人の生活に對して今思ふと私には可成りな偏見がありました。そして性としての男子に對して憎惡と反感とを抱いて居りました。この偏見と憎惡と反感とが婦人の生活を正しく理解し、解釋する上に或は婦人問題を健全に導く上に一つの障害となつて居たことは少なくなかつたのは事實です。

野枝さん、あなたのやうな情熱的な、忽ち感激の中に己れの全てを投げ込むことの出來る種類の婦人には、私の過去の戀愛經驗は或は了解して頂けないかも知れませんが、または少くとも不眞面目なものとばかり見えるかも知れませんが、戀愛といふものは或時期の私には異性に對する單なる、しかし强烈な好奇心としてのみ現はれて居りました、しかも

それは可成り長い間續いてゐました。私はその好奇心のためには今思ふと呆れるほど向ふ見ずな冒險でも、どんな損失でも、嘘つくことでも、時には罪惡と言はれるやうなことでもやり兼ねないのでした。かういふ異性に對する愛情と性欲のまだ現はれて來ない前の（少くとも私自身の意識に現はれて來ない前の）戀愛は一見パッショネートなものに見えながら、そこには何の深い執着と云ふべきものも伴ひませんでした。相手に對する愛の要求も、獨占欲も、嫉妬もはつきりとしてはゐません。從つて共同生活の要求や子供の問題などゝは全く無關係なものだつたのはいふ迄もないことです。どうして其當時の私にこの好奇心が他日私の中にもまた現はれて來るべき愛情の先驅であらうなどゝいふことが分りませう。この眞理を始めて私に敎へてくれたのはHに對する私の愛でした。Hに對する私の愛はその成長とともに始めて共同生活に對する要求となつて私の中に現はれて來たのです。そして私は遂に今の生活を撰ぶやうになりました。それはあなたも御承知の通りです。かうして戀愛といふことが私にとつて漸く人生の、いえ私自身の嚴肅なそして重大な問題となつて來たのです。私は今迄とは全く別な眼を開いて、この問題を見直さなければなりませんでした。今まで殆ど無視してゐた女性としての、愛の仕事を營むものとしての側の婦人の生活の眞の意義や價値に就いて新に考へて見なければなりませんでした。あなたは私の狂

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

道を乾度お笑ひになることでせう。けれど私の歩いた道はかうだつたのです。そして私は人間としての、又は個性あるものとしての婦人を解放するのみならず、女性として婦人を解放せねばならぬといふ問題が自分の前にまだ手も觸れられずに殘されてゐたといふことに今更の如く氣付き始めたのでした。この時、私の思索の上に、また實生活の上に、色々の暗示や材料を與へ、私の行き惱んでゐる思想をひき出したり、導いたりしてくれたのは、又は私の歩もうとしてゐる道の方向を見出す助力ともなつてくれたのはエレンケイの著書でした。

野枝さん。

ふたりの愛は共同生活にはいつた當時に比較すると僅二年足らずの間に隨分成長もし、變化もしました。そして私の中にまだ何といつても渾沌としてゐた、といふよりも寧ろまだ目醒ずにゐた女性としての自覺を日毎に明にして行つたのは事實です。併しそれと同時にこの愛の生活は人間としての、また個人としての私の内部生活、私の孤獨な魂の要求に基く仕事との爭闘とならずには止みませんでした。

そして今また私は避け難い困難な問題として子供を產み且つ育てるといふ現實の問題に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

眞ともに突き當つて仕舞いました。

エレンケイは現代の歐洲婦人中に起つてゐる最も重大な鬪爭は健康と疾病、發達と退化との間に存するものでなく、等しく强健にして、美しき生活の二形式なるソールライフとファミリーライフとの間に存するものだと言つて居ますが、これはまた私達が今現に經驗しつゝあるそして今後益々多くの日本婦人によつても經驗さるべき運命を有する大問題ではないでせうか。

野枝さん、ほんとうに私達の今日の生活ほど多くのディレンマの上にあるものはないでせうね。そりや男子の生活の上にでも定めて多くの矛盾爭鬪があることとでせう。今ちよつと考へて見た丈でも妻子家族を扶養する生活費を得るための勞働と、その人自身の人間としての、または個人としての魂の生活が營む仕事との間の矛盾位はすぐ想像することが出來ますもの。併し自分自身の仕事や研究と生計のための職業との外になほ一方で、愛の生活を營むものとして家庭をつくり、子を産み、子を育てやうとする婦人の生活に比較すればどうでせう。

あなたは私がいつも子供を怖れ且つ避けてゐたことは御存じでせうね。併し私とて何もさう無暗に怖れてゐたわけではないのです、そこには私としてのまた相當の理由があつた

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のでした。今その主なものをあげれば、第一、現在の自分にとつて何と言つても一番大切なことは自分自身を敎養し、人間としてのまた個性あるものとしての內生活を築くことである、そしてそのためには出來る丈多くの、そして落付いた思索の時間と勉强の時間と、仕事の時間と、又それらに注ぐべき出來る丈多くの力とが欲しくもあり、必要でもあつたこと。第二に、ふたりの愛の中には子供に對する欲望や、親になりたいといふやうな欲望はどこにもまた少しも見出せなかつたこと。そしてたとへ愛の必然の、しかも不任意な、寧ろ偶然の結果だとしても、自分達に於て何等の欲望も意志もない子供を造るといふことは親たる第一資格を欠くものとして自分に對しても、子供に對しても罪惡でもあり、無責任なことでもあるやうに思つてゐたこと。第三に、現在の自分達の其日暮しの貧乏生活は子供の維持敎育に不適當な境遇で、到底親としての十分の責任を盡せまいといふ不安などでした。そして私は色々の困難と戰ひながらお子さんを育てゝいらつしやるあなたを見るにつけ、今子供が出來ては大變だ、あなたの健康と、あなたのあの精力と、あなたのあの或種の無頓着と放任とをもつてしてもああなのだから……と心に思ふのがいつものことでした。

　私がかう言へばすぐ人生に對する卑怯な消極的態度だと非難する人があるかも知れません。併しそれは私達の實際生活を知らない、門外漢の空想的な「から元氣」だと私は言ひた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いのです。何故なら人がもち得る時間と精力には元來制限があります、そして人は同時に二つ若しくは二つ以上のことに自分の魂の總てを與へることは出來ません、餘程特異な人でない限りは。ですから或る一方の生活を深め且つ擴めやうとすれば、勢他方の或る生活に何等かの制限を加へなければならなくなるのは當然のことでもあり、またよりよく生きる上に必要なそして賢い方法ではないでせうか。その態度が積極的だとか消極的だとかいふこと丈で「いゝ」とか「わるい」とか「正しい」とか「正しくない」とかいふべきではなく、實は何に對して積極的だが何に對して消極的だか、何に價値をおき、何を撰擇し、何を抑へ、何に制限をおくかといふやうなことが私共の考ふべく、論ずべき問題なのだらうと私には思はれます。また苦痛や困難を避けてはならないといふやうなことをよく世間の人は言ひます。けれどそれも要するに一面の眞理であつて、もしそれが私共の生活を高め、私共の生命力を增大してくれないことには苦痛そのものに何の價値がありませう、それはいふ迄もないことです。この意味で私は十分の思慮ある撰擇を經ないで、苦痛困難の渦中に飛び込む或る種の勇者を無條件に賞讚する譯にはいきません。そしてこの點で私は人間の知力、理性といふものゝ必要とその價値とをも相當に認めやうとしてゐるものです。

　次にまた或人はそんなに子供を產むことに不安と恐怖とがあるならば、避姙法を行へば

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いいぢやないかといふかも知れません。あなたも或意味で避姙を是認していらしたやうですね。(併し私はあなたのお書きになつたもの丈ではその是認の理由として內容ある何ものも殆ど見出せませんでした。否寧ろあなたが墮胎を只單に非常に不自然なことだ、自然を侮辱し、生命を輕視した行爲だといふ理由から「何處までも許しがたい罪惡である。」と斷定なさつたその見方で行くならば、避姙も亦當然あなたにとつては五十歩百歩の罪惡であるべきだと思はれます。何故なら人工をもつて生命の可能力を奪ふ不自然な行爲なのですから。さもなければ避姙はまだいゝが墮胎は惡い。墮胎はまだいゝが見殺しは惡い。といつたやうな感情論や常識論以上に出ないもののやうにも私には見えます。)私も避姙を決して罪惡だとは考へて居ません。のみならず、そこに正當な理由があつて、(といふのはその人が子供を產むことが、その人自身か種族か、又はその兩方の向上發展を害する場合、また例へば人口過多のため生活難といふ現象が起り、その結果、國民の疲弊、退化を來した時、一般に兒數を制限するやうな場合)そして有害でない方法によつて行はれる避姙なら、寧ろ知力の進歩した文明人の特權であり、義務であるとさへ考へて居ます。そして私もまた或時は避姙の實行者でした。然るに何事でせう。避姙といふことを主觀的に見た私の感情は、私の內的な實感はこれとは全然相容れないものがあるのです。といつてそれは

罪悪感ではありません、併し實際にあたつて瞬間的に感ずる烈しい醜悪の感です。野枝さん、あなたはどうお思ひですか、私達戀するもの等の二個の異れる人格が結合、融和し、自他の存在を忘却する靈肉の法悦、絶對の境地の前に立ちながら、同時にその結果として現はれるかも計り知り難い未來の子供のことや、その種族に及ぼす影響などに自分達の瞬間の全き意識を分ち與へて、しかも或用意をするといふやうなことを。これは私にはどうしても自分自身を侮蔑し、ふたりの愛を汚辱する墮胎よりも寧ろ或意味で恐るべく、厭ふべき醜い、そして苦しい行爲としか思はれません。そして私はこの點に於ても常に人間の矛盾を感ずると共に皐月氏が「自分は人間の意識が性欲の結果に迄働き得ぬ不完全を喞ち乍ら、其時の來らんことを切に願つてゐる」と言はれたのに同情せずにはゐられないのです。

野枝さん。

私も自分がいよ〳〵姙娠したのだと氣付いた時は、前に述べたやうな色々の理由から、ふだん子供をもつことに對して抱いてゐた不安と恐怖とを今更の如く一層明にそして突き詰めて感じました。と同時にあなたや皐月さんが（皐月さんのあの創作は姙娠中の氏の或時の夢から暗示を得られたものださうですが）姙娠中に一度は囚はれたと同じやうな、墮

胎の空想に矢張り第一に襲はれたのでした、それはほんの最初の短い間のことでしたけれど。併し茲に私達をこの同じ墮胎といふ一つの考へに導いた不安、恐怖の原因に關しては多少の相異あることは認めなければなりません。といふのはあなたにしろ、皐月さんのあの創作にしろ、少くともあそこに現はれてゐる丈で判斷すれば、その原因は貧困、即ち生活難といふ一事に盡きてゐるかのやうに見えます。あなたは現に「若しも私がその頃決して困つてゐなかつたらそんな考へを起しはしなかつたらうと思ふ。」と言つていらつしやいますし、また皐月氏の創作中の女性は頻りに自分は親としての資格がない、親としての責任を果すことが出來ないといふことを說いてゐますが、何故その資格がないのか、また何故その責任が果せないのか、その理由としては矢張り貧困といふこと以外別段これといつて具體的な、そして意識的な、內容あることに言ひ及んでは居りません。果しておふたりはほんとうに「性」としての婦人の生活——種族に對する婦人の天職——と「個人」としての婦人の自分自身の生活との間の矛盾衝突には左程苦しんでいられなかつたものなのでせうか。個人としての自覺なく、自分自身としての生活といふべきものを少しもまだもつてゐない在來の又は一般の日本婦人なら知らず、また何の敎養もない食べるといふことが生きることの全部である所謂下層社會の勞働婦人なら知らず、おふたりの如き婦人の上にこの種の

爭鬪を見ないのは私には却て不思議に感ぜられます。思ふに貧困から來る不安、苦痛、恐怖があまり大きいため、他の總てのものがそのかげに隱れてゐるのでせう。それともおふたりには、私の中になほあるやうな斯ういふ「個人」と「性」との間の爭鬪などは最早過去のものと化して今はそこに何か一段高い生活の中に兩者の調和統一を實際に於て獲得してゐられるからなのでせうか。私だつて何も貧乏といふことに無頓着でゐられる譯ではないのです、私達は今現に何の職業といふべきものもない、從つて一定の收入もないものですもの、そして私はかういふ絕え間ない生活の不安を一日だつて忘れたことがないのですもの、しかも私はあなたのやうに只漠然とした運命といふやうな都合のよささうなものに依つて、自分の不安と恐怖と當然自分が負けねばならぬ責任とをしばらくにしろまぎらしたり、またあなたの一種の教育無能論（このお考には多少の眞理を含むのを私も拒みませんが、同時に人間生活と動物生活との區別を無視した多くの誤謬を含むものだと思ひます。）によつて親たるものが子供の教育に對して當然有つべき大きな責任から逃れやうとするやうなことも出來ませんもの。（私はあなたがああでもお考へにならないことには到底堪へられなかつたほどお苦しかつたのだらうと察し得ないほど同情のないものでもないのです、併しそれが自己の責任に堪へられないものが自から意識せずして自己を欺く、云

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

はゞ女性的な、弱い、そして可愛い一種のあきらめであるやうに私には思はれるのです。青鞜六月號七七頁參照）併しなほ矢張り私は貧困に基く不安の外に、否それ以上の不安として、個人としての自身の生活の向上發展を、自分自身の教養を妨げやしまいかといふことを忘れることは出來ません。もしまた私がこの上、教師とか、新聞雜誌記者とか、醫者とかいふやうな職業的な又は社會的な所謂公生涯なるものを有つてゐたとしたら、またこの方面に於て屹度今一つの抵觸を經驗しなければならなかつたことでせう。

次にあなたは親になる資格として、「本當に深く考へれば考へる程、私は未成熟のものでない限り、また或は缺陷を持つてゐる者とか、無能力者、白痴、狂者など、或る種の疾病をもつもの以外に、即ち普通の生活に堪へ得るものであつて生理的にも充分發育を遂げたものならば先づ資格はあるものにちがひないと思ひます。」と言つていらつしやいますが、生理的生活の外に心理的生活をもつた人間、殊に複雜な心理生活の外に或る社會關係と經濟事情の中に生きてゐる近代の婦人で、只これ丈けの資格を自身に具有してゐる丈でよく親たり得る十分の資格あるものとして安んじてゐられるものが實際あるでせうか。私にはこれ迄の婦人が自分の肉體の生命を助けるためや、小さな利己心から、又は貧困のためや、所謂それが不義の關係の結果であつた場合、世間に對する不面目や羞恥心などから墮胎し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たのとは全く違つて、あなたがお示しになつたやうな親たる資格には缺けるところのないにも拘はらず、なほ親たる資格のないことゝ、その責任を果し得ないことを自覺して、または私が先にあげたやうな一自己の內なる異なれるそして相容れない二つまたは二つ以上の方面の生活間の鬪爭の結果、或る思慮と落付とをもつて靜に墮胎を行ふやうなものが、現代の若しくは將來の婦人の中には隨分あり得べく、また考へらるべきことのやうに思はれます。歐米の所謂解放されたと稱する婦人の中にはそれが正しいにせよ、正しくないにせよ、また婦人自身にとつて幸福なことにせよ、不幸なことにせよ、自己の藝術生活のために、或る科學的な研究のために、或はまた社會的事業のために――それが個人としての自分の精神生活を高めるのみならず、文明にも何等かの貢献をするものだといふ信念のもとで――避姙したり、墮胎したりしたものが既にこれ迄も少なからずあつたことだらうと私は想像します。かういふ原因や理由から行はれた墮胎をも只それが生命を侮蔑した不自然なことだからといふおほざつぱな理由から、一般的にそして絶對的に許しがたい罪惡であると斷定し去ることはどういふものでせう。寧ろ今日の正しい文明は益々生命を重ずるが故に、それを自然のまゝに放棄し、只それが存續や數を增すことのみをもつて足れりとせず、却てその數を減じて迄もその質をよりよくすることによつて、生命そのものゝ進化

向上に努力してゐるのではないでせうか。

併し、あなたのこの墮胎否定説若しくは罪悪説を何のしつかりとした根據のないをほんの其場のお意見として左程の價値も置き得ない私も、あなたが、皐月さんのあの墮胎肯定説に何がなんでも反對せずにはゐられなかつたその止みがたい強い感情は十分に認めて居ります。そしてその感情のよつて來るところはあなたが仰有るやうなそんな不自然だからとか、生命を侮辱してゐるからだとかいふやうなものではなく、實はあなたの半ば無意識な本能的な母としての子に對する烈しい愛情そのものの現はれだといふことを私は見逃すことが出來ません。――なほ其外にあなた自身の反省をまだ經てゐない因習的な一般道德感情も含まれてゐるやうに思はれます――そしてあなたは既に母としての愛情を十分經驗された婦人であり、皐月氏はまだ母としての經驗のない婦人であることを思ふときそしてそこからおふたりの意見の相異が來てゐることを思ふとき私はその點に寧ろ或大きな興味と意味とを感ずるものであります。

野枝さん、私は自分の心に墮胎といふことが浮んでゐたときも、あなたが御感じになつたといふやうな「良心のいたみ」は私にはありませんでした。それが日本の法律に於て、犯罪行爲、（併し墮胎といふことを無條件に犯罪とするならば國家は同時に、他方に於て、母

と子供とを保護する法律をも有つべきだと思ひます、或はまた育兒院とか養育院とかの設備を社會をして完全にさすべきでせう。さもなければ大變片手落ちなことだと私は思ひます。）とされてゐることや、肉體を害するといふおそれが伴ふといふやうな點に就いての多少の不安が何處かに動いてゐたことは認めますけれど、私の心に一番問題となつて懸つてゐたのは矢張り、今子供を否定することが、自分達の現在及未來の生活全體のために果して最も正しいそして賢いことだらうか、自分は現在の不安や恐怖のために、一時の感情のために全體と未來とに亘る十分の考察を缺いてゐるやうなことはあるまいか、そして他日悔いるやうなことはあるまいかといふやうな寧ろ根本的なことなのでした。

そして私はかういふ自分の智慧の完全性に對する不信の中で、色々な困難な問題を心に繰り返しながら、その儘幾日かを經過しました。

然るにその間に私は次のやうなことをだん／＼意識し始めるやうになつて來ました。今が今まで自分の中には全くないものと信じきつてゐた子供に對する欲望や、母たらむとする欲望が實は自分の愛の中にも潛んでゐるのである、只他の欲望の大きいため、また多いがためそれに蔽ひ隱されて表面に現はれて來ないといふ迄で。否々ふたりの愛の憧憬そのもの、中にすでに／＼最初から子供を欲する意志が藏されてゐたのではあるまいか、只自

分自身それを明に意識し得ずにゐたといふ迄で。そして私は自分の内部に於ける欲求も、意志もなくして、子供を產み、母となるものを、母たる第一資格さへ有たないものとして一種罪惡であるかの如く思ひもし、またそれを人間の意志と自然の結果との間に存する大なる矛盾であるかのやうに感じてゐたことの、反省と考慮に於てまだ至らないところのあつたことを感ずると共に、一たび愛の生活を肯定し、そして自から選んでこの共同生活にはいつた自分が、しかも、今その愛に生き、その愛を深め且つ高めることに努めつゝあるその同じ自分が、その愛の創造であり、解答である子供のみをどうして否定し得やう、それはあまりに矛盾した、不徹底な行爲である、もし子供を拒まうとならば、愛の生活全體をまづ拒むべきであると。なほまた私はこんなことも考へました、よし自分は自分の他の方面の生活のために、自分の魂のすべてを子供の世話や敎育に與へることが出來ないにしても、そしてそれは成程自分にとつては苦しいことであり、子供にとつても不幸なことであるにしても、それでもなほ全く無自覺な無智な劣等な女から、しかも愛なき結合の中から生れ、さういふ母の無責任な手によつて育てられる今日の日本の多數の子供に比較すれば、それは乾度より優れた、そしてより幸福なものに相違ないと。

かうして私の心からは、いつか墮胎といふやうな考へが全く消え去つて仕舞ひました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

不安と恐怖と限りなき責任感と共に、一歩、一歩近づきつゝあるこの未知の世界に對して、新しい人生に對して、私は一種の貪欲心と、不思議な希望と期待と歡びとさへ經驗し始めたのです。のみならずふたりの愛の結合はこれによつて一段の深さと、眞面目さと、確實さとを增したやうにも思はれて來ました。野枝さん、私がエレンケイの The Renaissance of Motherhood を讀んだのは丁度この間から、この後にかけてのことでした。時が時だつた丈、私は色々考へさせられずにはゐられませんでした。併しこの限りある手紙の中でその思想の紹介をしてゐる譯にはいきませんから止めませう、只、私は今私の心に浮んだそして同じ書に引用されてゐた、ロバート、ブローニングの左の句を此處に書き付けること丈にして。

Womanliness Means only motherhood; all love begins and ends there.

併し野枝さん、

これで私の生活の中に起つてゐる、あの爭鬪が解決された譯では決してありません。また忘れられたわけでも、まぎらされた譯でもありません。寧ろ人生に於ける子供の重大とそれが女子の生活に於ける意義と價値とを考へれば考へるほど、そして Motherhood の尊

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さを知れば知るほど、従つて子供の世話や敎育を只社會や國家に、又は他人の手に委ねて安んじてゐらるべきものでないことを思へば思ふほど却てその鬪爭は慘ましさを增すばかりです。あなたはほんとうに今度のお子さんはお國へ殘していらつしやる御考なのですかそしてもうさう御決心がついてゐるのですか。私は自分で育てやうか、それとも他に托さうかと實は今まだ迷つてゐる最中です。併したとへそのいづれにしても、今後は私の生活は分裂の苦痛を經驗せずにはすまないでせう。私の魂と私のもち得る限りある時間と精力とは自分の敎養と、仕事と、生活のための職業と愛人と、子供と、家庭との上にどのやうにか分け與へられて行かねばならないことでせう。そして私は私にとつて欠くべからざる第一要件である精神集注を今後は一層亂されもし、減じさせられもして行くことでせう。

ミセス・ギルマン一派の婦人論者は、婦人を今日の家庭生活に於ける雜務から脫せしめ、社會の人として經濟的獨立を有するものとしなければ、そして育兒、敎育、料理などは總てそれ〴〵の專門家の手に任せるやうにしなければ婦人の生活には眞の自由も解放も來ないといふやうなことを言つて居ます。ところがエレン・ケイは是に反して、是等の所謂解放せられたる婦人を再びその家庭に引き戻し、愛の生活の中に、就中母たることのなかに最も高く美しき統一と調和ある婦人の眞生活を發見させやうとして居ります。彼女の所謂「大

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

戀愛」こそ人間生活の根柢に横はる相容れない諸力を、對立せる二元を調和統一するところのものなのです。

それはともあれ、私は今私自身の生活の中に存するこの色々な方面や部分をいかに撰擇し、統一し、調和し行くべきか、これが私の前に横はつてゐる、否私自身の生活の中に含まれてゐる重大なそして困難な、眞に意義あり、内容ある具體的な婦人問題なのです。私は今後の私の生活をもつて、この大きな問題を解決して行かねばなりません。しかもこれは決して私一個の問題ではない。今後の日本婦人の多くの上に蔽ひかかつてゐる共通の問題だと私は信じます。

以上

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

別居に就て思ふ事ども――岩野清

今度私と岩野泡鳴氏とは別居をする事となりました。そして岩野は私の家に雇つてゐた筆記者蒲原英江と云ふ婦人と同居する事になりました。私は病氣でまだ一月位は醫者の手を離れる事は出來ない身體ですが、かうした突發した事件の爲に、後始末や、考へなければならぬ事や種々雜多な事が內面からも外面からも蝟集して來たので、病氣の事もそれ切りとして、かうして居りますが、夜はまだ安眠が出來ません。然し私は一體に感情的にはならない女のやうです。これまで冷靜に考へても來たし、今も靜かに理性で行動してゐるのでございますが、まだ纏めて原稿に書くことが出來ません。で、斷片ですが、兎に角話したいとおもひます。

岩野がその女との關係を自白したのは先月の二十五日でございました。その自白の要點を申しますと、自分は今度、蒲原英江に對して愛を感じた。しかしあなたに對する尊敬には何等の變化もない。つまりあなたに得られないものを、他の婦人から補ふばかりの事で、

根柢に於ては何らの動搖もない。それであなたが愛を絕對に所有しなければならないと云はなければ現狀は維持する事が出來る。と云ふのでありました。

この自白の內容は岩野泡鳴氏の從來書いて來たものとは恐しい程矛盾してゐる事です。それで私はその甚しい矛盾を詰問しました。ことにその女との關係は、最初新聞記者にむかつては、淸子の決心をきいて別居する事となつてから始まつたのだと白々しい噓を申してゐますが、實は、六月の頃から、さうであつた事は私が知つてゐるのです。同時に二人の女を持つてゐたその不純な態度を私は質問しました。

それに就いて單に、岩野は、自分は今考へが變つて來てゐるので、昔云つた通りに今日では思つては居らない。兎に角、一人の女から得られないものを他の女から補つてもいいと考へる。それに對して、自分は何ら疚しい事もないとかういふのです。

この自白を聞いたのが前にも申す通り二十五日の晩でしたから、丁度それから十日の間私は私としてのしつかりした解決をつけるまでは、二人の行動に對して、際立つた干涉はしないと云ふ事を考へて、それを岩野にも話しました。それには兎も角も女と一言申さねばならないと思つて、二十七日の朝いつもの通り來た時に、呼んで話しました。私がもう

岩野からさうした二人の間を聞いてゐると云ふ事は、女も亦岩野から聞いてゐるに相違ありませんでしたけれども私からも話さうと思つたのです。そして私は、この際私はあなたに對して普通女の云ふやうな怨み言も云はなければ、又妨害もしなければ、元よりあなたと愛を爭はうとも思はない。今まで波瀾もなく、純一に保たれて來た私の家庭が、あなた方によつて破壞されたと云ふ事は、私に取つて取り返す事の出來ない痛恨ではあつたのだが、もう事件がかうなつたからは私としては何も云ひたくない。しかしあなたは弱い女であつた。もとより今度の事は男から誘惑されて、あなたが弱いために、それに應じたまでであらう。誘惑の前に立つてあなたに何等の反省のなかつたのが殘念であるが、しかし、かうなつて見れば、どうすることも出來ない。あなたは最近私を避けるやうに〱としてゐるが、そんなにする事もない。やがて私も私としてしつかりした解決をつけようと思つてゐると申しました。

女は暫く默つてゐましたが、重々申譯がありません。私が東京に來なかつたならば、こんな不幸な事は起らなかつたでありましたらうにと申しました。

この事件の解決をどうつけるかと云ふ事は隨分苦しい事ではありましたが、自分の事は

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自分でするのでなければなりませんし、また、この場合私としてはどうしてもいい加減には出來ませんので隨分考へたのであります。そして私の考の成立した頃、平塚さんを訪問して、大體の話を致しました。

男とその女とが自白以前からさうした事になつてゐたのを私が默視してゐたのは、私としては二人に反省の時をあたへたのであります。かう私が申しますと岩野は、これは自分の欲求だから反省する餘地はない。勿論罪惡ではない。自分は家庭なんかを始めから考へてはゐないとともに、自分の生活が二つのものから補ふことの必要を感じて來た以上、その必要に從へばいいまでで、强いて自分から外形を破壞することはいらないと思つた、と申すのであります。

私たちが一緒になり、共同生活をするやうになつたのは五年まへでありました。その時の私の考では、自分の戀愛は先づ靈でなければならない、そして同居してゐる中にその自然な經路のもとに靈肉一致する時、はじめて純一なる戀愛となり、眞面目な生活がいとなまれるやうになる、それとともにもし男が他の婦人に對して愛を感じた時、たとへそれが普通の婦人であらうが、醜業婦であらうが、毫末なりとも愛が分けられる時、その時が我々の愛の生活の最後である。あからさまに、その時は云つて貰ひたいと云ふ事が二人の中

には約束されて居りました。

戀愛の撰擇は自由でありますが、そこには理智と反省とが働かなければその戀愛は下劣なものであつて、絕對の自由に盲動するものは禽獸の慾であり、それには高い價値のありやう筈はない。その戀愛が盲目であると云ふ事は尊敬すべき事ではない。殊に私の思想では、戀愛は靈から肉に及ぶべきものであつて、肉に始まつて、漸く靈の目醒めるやうな結合は在來の無智な習慣どほりの事であつて、私どもにはそんな無自覺な事は耐へられない私はそんな風に成立する戀愛をいいとおもふ事が出來ません。

この意味で、岩野とその女との戀愛が本當の純一な、本當に眞劍な、自覺のある、靈から入つてゐるものとすれば、二人に對して私は尊敬を惜しむものではありません。

しかし、よく〳〵考へて見るとどうもさうではない。殊に其後の二人には、益々私の心から二人に對する尊敬と友情とを奪つてゆく行動が現されてゐます。少くともあんな生活には何の權威と確信と立派さと眞面目とがあるであらうかと疑はしめるばかりでなく、輕蔑の念をまで起させます。

岩野の先妻の子供が當年十三歳でこちらの方で引取つてゐたのですが、これを岩野と私とのどちらにでも行かうと思ふ方に行くがいい。もう一人の人間としての判斷力も持つてゐるであらうから、自分の意志に從つて去就を定めるやうにと申しますと、私の方に止まりたいと申しますので、私の方に居らせる事に致しました。あの子は父親に馴染んで居りません。

私は離婚したのではありません。これが、あやまり傳へられてゐるかはしれませんが離婚はしないのであります。別居をしたと云ふまでであつて、戸籍は動かしません。

さて愈々泡鳴氏の出ると云ふ事に解決した時に子供から父を奪ふといふ事がいかにも殘酷なやうには感じられましたが、しかしまた一面から見れば父親の不純と不眞面目から暗くされる家庭の空氣の中で子供を育てるよりも、たとへそれがどんなに苦しい痛々しい事であつても、「生活の眞面目」を知らせるには、私一人の愛情で、子供はよく育つてゆくと信じて居ります。

私は斷じて妥協をしません。また屈從をしません。自分の力に就いて、自分と云ふ意識

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のはつきりしなかつた時代には、女はかういふ場合、かうした男の不道德に對して泣寢入をしたことでありませう。けれども自分と云ふものの力を認めるものに取つては、たとへ倒れるまでも自分の人間として生きて行くべき純一なる生活に生きて行くのが本當ぢやないかと思ひます。兎に角、私は、自分が弱いであらうか、強いであらうか、自分一人の力で、戰つて見ようと思ひます。そして、これを動機として、更に男子に對して、私の一層考へたり云つたりしなければならぬ事もありますから。

解決して了つてからは、ただもう自分が戰へばいいので、大變安らかな明るい氣持が致して居ります。經濟の方面にも、心の方面にも、五六年前の元氣な活動が致して見たいのです。

私はまだ岩野の新しい家へは一度も參りません。近所へもあまり出ません。下らぬ誤解を生じて、私の態度を忖度されるのは嫌ですから、何事にも愼重に致して居ります。

（八月十八日）

此一編は岩野淸氏が巣鴨のお宅に訪問された生田花世氏が、その時の談話を書いて下すつたものです。

墮胎に就て――山田わか

（松本悟郎氏の『青鞜の發賣禁止に就て』を讀んで）

幸福を得たい。此の心が私達人間の心を刺戟し私達を働かせます。けれども人間は四六時中幸福を求めて居ながら何故世の中には不幸が絶えないのでせう。それに付いて私はこう思ひます。「人が自然の法則に逆つた行爲をするからだ」と。

今日の文明は人間が自然界の法則を會得し、そして其の自然の力を人間に都合のいゝやうに支配した處にあるのだと云ふ事は誰でも知つて居ます。が併し此の文明がほんとうにあらゆる人間に幸福を感せしめて居るかどうかは分りません。目の弱い私などは、ジー〳〵音をたてゝギラ〳〵する瓦斯や電燈の下で細い活字を讀まなければならない時、又は疲れた目をチカ〳〵さゝれるやうに感じる時、いつでも夢のやうに覺へて居る行燈の灯をなつかしく思ひ出します。柔い其の火影でおばアさんが下女を相手に平和らしく糸をぶん〳〵紡いで居た、其の光景がたまらなく戀しくなります。と云つて私は文明を呪ふわけではありません。よしんば瓦斯や電燈が私の目をつぶすやうに私を苦しめ、さいなまうとも其れは病的な私の目が惡いのだから、つまり與へられた力以上に無理に目を使つた、則ち自然

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の法則に逆つた結果なのだから、何とか工夫してこれ等の燈火と自分の目との調和をとればいゝので、これを理由として一般の人が大きな利益を蒙つて居るこれ等の燈火を否定する事は出來ません。要するに世界はどう／＼と進歩して行きます。其の進歩に歩調を揃へて行く事は確かに一ッの幸福です。だのに偶々病的な人が自分の缺點を忘れて、進歩の潮流を無視しようとしたり、逆つたりします。それでも、それが其の病的な人、一人で云つて居る間はまだしもですが、時とすると大勢の人が其れに雷同して、大きな眞理でも發見されたやうに騷ぐやうになつては沙汰の限りです。

私達は人智の及ぶ限りを盡して自然の法則を發見し其の法則に素直に從つて生きて行く處に無限の幸福を得られます。けれども自然の法則に素直に從ふと云ふ事は、やがて私達の奮闘の原因になります。私達が自然の道だと信じて其處を進んで行かうとする時に、其の途中に立ちはだかつて居る邪魔もの——偏見、惡德の類——を私達はどうしても爭つて取り除いて行く必要があります。宗敎も哲學も科學も要するに此の自然の法則を發見する又は此の法則の働きを妨げる障害物を取り除く道具に過ぎません。

けれども、凡ての事柄に付いて、これが自然の法則だと絕對に定める事は、今日の人智では未だ出來ません。宗敎、哲學、科學によつて先づこれだらうと朧ながらも思惟し得た

道を、道德と云ふのです。ですから千古不變の道德なぞは先づ今の處では無いと云うてもいゝ位ひです。道德は人智の進むに從つて着々變更されねばならぬ運命をもつて居ります。

處が複雜極まる現代に生きて、昨日の惡は今日の善、今日の善も明日は惡と絕えず變遷して行く中に居ても、私達は太陽が萬物を暖め育てゝ行く如く、母の愛が人類をうるほし育てゝ行く事の大きな力、及び其の善なる事の動かすべからざる事實を疑ふ餘地はありません。愛人に對する女の愛は隨分力强いものですが、併し子に對する母の愛程、深くはありません。ほんとうの「女らしさ」は母に始まると有名な詩人は歌つて居ります。あらゆる道德は母の愛から出發したとエレン・ケイは云つて居ります。

動物の境を未だ脫しきれないやうな人間が自分達には仕末をつけきれない程、澤山の子を生み並べて、地獄のやうな家庭をつくつて居るのを、私達はあまりたび〳〵見せられるので、子を生む事を輕んずる傾きがありますが、これは間違つて居ります。中世紀の歐洲の智識階級は俗衆が、むやみに、無反省に、澤山の子を生み出す、淺ましい有樣を見て、寺院に逃れたり、獨身生活を送つたりしたそうですが、其のために次の時代は下等な人間の子計り殘つて社會は大分退步したと云ふ話しです。

ですから、いつの時代でも、智識階級が精神的の人間が、今、自分の肉體となつて現れ

て居る、小さな自分計りを見て居ないで、自分と云ふものを、もつと廣く、もつと長くして見なければなりません。其處に、又、個人としての無限な喜び幸福があるのです。此の頃、自我と云ふ言葉が大分はやるやうですが、此の自我とは一體なにでせう。自我は貴いものには相違ありません。世界を得ても自分を失つては何にもなりませんから。けれども人間が昔の穴居者であつた時代はどうであつたか、又超人に達した曉にはどうであるかは分りませんが、先づ、今日の處では、私達は社會によつて育てられ、又社會のために働かねばならぬやうに、つくられてあります。絶對の自我と云ふものはありません。勿論一人々々に與へられた生命及び天分は他の人の犯すべからざるもの、一個の威嚴ある人格には相違ないのですが、それでも私達人間は時間的に空間的に大部分他の人のお世話になつて生きて居るのです。我と云ふ人間が出來るには、第一、兩親と云ふ、二個の人間が必要でした。二個の人間の向ふには四人、其う向ふには八人と云ふやうに。そう云ふたからとて其の人達が有り難いと云ふ意味ではないのです。そう云ふ風につながつて居ると云ふ事です。空間的に云つてもそうです。社會から、全く、きりはなされた個人などと云ふものは想像出來ませんが、かりに無理に、そう云ふ人間があつたとしたら、その人は野獸と等しいものでせう。何と云ふても今日の人間は、今日の社會に育てられたのです。今迄、あま

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

り個性が踏附けられて居たから、其の反動で自我と云ふ言葉が大へん勢ひを得ました。けれども各々の天分をきづゝけられずに育てゝ行かれゝば、社會がそれを妨げさへしなければ、そう自我を叫ぶ必要はないのです。要するに、前にも申ましたが私は絶對の自我の存在をみとめません。自分が社會にくッついて行くか、自分が社會をひきいて行くか、どつちかです。つまり、自分一人を守つて社會を無視して居たのでは、人間が生きて居る目的なる、幸福を得る事は、とうてい、出來ません。だから私達のどんな小さな行ひでも、其れが社會によつて又天上の神によつて批准されると信じる時、私達は如何なるインスピレーションを受けるでせうか。其の悦びは、それを實驗した人でなくては、恐らくは、分らないでせう。

こう考へて來て、私は墮胎も避妊も等しく大きな罪惡だと申ます。個人の幸福、並びに國の榮を破壞する大きな不德です。配偶を持つのは自由、天から附與された、人の權利なのですが、併し權利は享有して、其れから必然わいて起る結果を處理する義務を逃れようとするのは最醜惡な卑怯です。

「それはそうに違ひありません。大體としては。けれども此の複雜な社會の一人々々の場合ひに付いて考へて見たなら、そう計り云つて居られない時があるでせう。たとへば、今

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自分の收入が、いくら、きりつめても自分一人食べるだけしかない。子供を持つたら、二人とも飢へなければならない時はどうします」

と、私が私の意見を云ふた時、私の尊敬して居る友人は注意してくれました。が、親になる資格がないならば、配偶を持つ前に、其の資格を先づつくるのが人の義務です。周圍の狀態が子を育てるに不適當ならば、其の狀態を避けるか又は改良するのが順序です。

「そんな事を云つて居たら、若い盛りを禁欲で過さなければならないではないか」

と云ふ人があるかも知れません。けれども、子を育てるに適當な狀態及び資格をつくるには、(その程度に、きりはないが、少なくとも墮胎の避妊のとさわがなくてもいゝ程度の)何にも何十年とかゝるわけのものではありません。又子供の持つて生れた天分をひき出してやる事は、あながち、物質の力ばかりではないでせう。其の資格をつくる間の自制力すら缺いて居るやうな不德義な人間なら、とても話相手にはなりません。私はそう云ふ人間をどし〳〵罰する法律がほしいと常に思つて居ります。法律は殊に刑法は下級な人間を制裁する機關です。ですから、智識階級は刑法などには、とつくに、超越して居る筈です。處がたとへ一言半句でも社會に對してものを云ふ位ひの位置の人の中に權利は主張して義務はまぬがれやうなぞとする橫着者が多いから、社會は複雜に複雜を重ね、罪惡が罪惡を

生むのです。

「けれども配偶を持つ時には、育てられる見込みがあつても、不時の出來事のために窮した場合ひには？」

と問はれるなら、そう云ふ場合ひには、何事を打ちすてゝも、食ふために働かねばなりません。よし、乞食をしても子の生命をつないで居ます。と答へます。

「食つて生きて居るだけが、人間の目的なら、それでいゝでせうが、それで滿足が出來ますか。子は自分よりは利口にするのが親の義務ではないですか？」

子はなほの事自分だつて利口になつて行かなければならないですが、其の場合ひに、とにかく食う事がさきです。そうして居るうちに、だん〴〵餘裕をつくつて行く事が出來ます。

「さきの事は分らない。もし何時迄も餘裕が出來なかつたら？」

全くさきの事は分りません。子があつてもなくても。唯、私達は與へられた生命を大事に保存して、其の瞬間のベストを盡して居るのがほんとうの生き方だと思ひます。

「まア、私達はそう云つて居られるとして、下層社會へ行つたらどうでせう。悲慘な生活をして居る彼等に墮胎を一がいに罪惡ときめて、しまつたら、可哀想な場合がいくらもあ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

るでせう。母子が食ふ事が出來ない場合はこうとか、幾人以上の子を持つた時はあゝとか國家が保證を與へて居ればだが、それがないから。のみならず不健全な子供を澤山殘されるより、墮胎さしてしまつた方が、よかないかしら？」

追付、國家はそう云ふ設備をしなければならないでせう。が、さしあたり其れがないからと云ふて、人間以上の力がつくつた生命を殺し、のみならず親の生命をも危ふするやうな事柄を、人命財産の保護を標榜して立つて居る國家が、正當として許す事が出來ませうか。盜みは大體として惡い。けれども盜みをする一人々々の心のうちへ這込つて見たら隨分同情の涙を流す場合が多い。だから困つた場合には盜んでもいゝと公然許して置けるでせうか。不完全極まる現社會の富の分配法は隨分不公平には相違ありませんが、それだからと云ふて、盜みを自由に許して置いたら、群民の制裁がつかないではありませんか。子の事に付いても「出來たら下せ」主義で、性交をほしいまゝにされたら其の結果はどうでせう其の悲慘な狀態は、或る資格の出來る迄配偶を持たせないのが酷である處の話ではないでせう。そして、不完全ながらも、今日迄向上して來た人間が、又後もどりして、野蠻時代に歸る事になるのではないでせうか。

勿論私の云ふて來た事は通則です。變則の場合はいくらもありませう。此の變則の場合

にこそ、それ〴〵處置をする方法を講じなければならないでせう。が變則の場合を標準として大體を誤まつてはなりません。

必要は道德をも法律をも超越した威嚴をもつて居ます。道德と云ひ、法律と云ひ、要するに之れは人類の幸福を增進せしむる、てだてとして存在するものなのですから、或る場合に大の幸福と小の幸福とが衝突したならば、社會は人類の幸福と云ふ立場から、小を殺して大を救ひます。親の生命を救ふために胎兒を殺すのと、墮胎とは、結果に於ては同じでも、其の動機はまるで違ひます。ですから、道德及び法律の上からは全く性質の違つたものなのです。

生命の可能性たる精蟲を無益に殺すやうな事柄や施設が公然許されてあつたからとて、其れが正しいからではないのでせう。人間が未だ全く無智であつた、何千年の昔から、地上に根強く、はびこつた此の猛烈な力を今日の施政者はどうする事も出來ないのです。それで餘儀なく姑息な制限をほどこして許してある迄です。宗教家にしても、道學者にしても、其れを罪惡と認めないのではなく、唯、其れに對抗して行くだけの大きな力の準備が未だ出來ないのだと私は思ひます。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

森の大樹——與謝野晶子

ああ森の巨人、
千年の大樹よ、
わたしはおまへの前に
一人のつつましい自然崇拜敎徒である。

おまへはダビテ王のやうに
勇ましい拳を上げて
地上の赦しがたい
何の惡を打たうとするのか、
また、おまへはアトラス王が
世界を背中に負つて居るやうに、
かの青空と太陽とを

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

兩手で支へようとするのか。

そしてまた、おまへは
どうやら、心の奥で、
常に惱み、
常にじつと忍んで居る。
それがわたしに解る、
おまへの鬱蒼たる枝葉が
休む間なしに汗を流し、
休む間なしに戰くので。
さう想つておまへを仰ぐと、
希臘鬪士の胴のやうな
おまへの逞しい幹が
全世界の苦痛の重さを
唯ひとりで背負つて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

永遠の中に立つて居るやうに見える。

或時、風と戰つては、
おまへの梢は波のやうに逆立ち、
荒海の響を立てて
勝利の歌を揚げ、
また或時、積む雪に壓されながらも
おまへの目は日光の前に赤く笑つて居る。

千年の大樹よ、
蜉蝣の命を持つ人間のわたしが
どんなにおまへに由つて
元氣づけられることぞ。
わたしはおまへの蔭を踏んで思ひ、
おまへの幹を撫でて歌つて居る。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ああ願くは、死後にも、
わたしはおまへの根方(ねがた)に葬られて、
おまへの清らかな樹液(セエツ)と
隠れた熱い涙とを吸ひながら、
更にわたしの地下の
飽くこと知らぬ愛情を續けたい。

なつかしい大樹よ、
もう、おまへは森に居ない、
常にわたしの魂の上に
爽(さは)やかな廣い蔭を投げて居る。

（一九一五年八月作）

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

百首歌——三ケ島葭

かにかくに生きむと思ふいつよりかかかる心とわれなりにけむ

今日をなほうしといふなりいかばかり後をたのめるおのれなるらむ

しばらくはそのかなしみをわすれけりわれに流るるなみだをばみて

世界みなとどのひはててわれひとり衣もつけぬ今日にあらぬか

君がため身をも忘れて走りゆくそのおろかさもくやしからまし

いまさらにかへすすべなきそのかみを忘れざるこそくやしかりけれ

こひしさにいのち死ぬとも君がため祈ることなどなかれとおもふ

夏來る夏花咲くと時ならぬ花さくごとくおどろきにけり

死ぬばかりわれは妬ましいかばかり君はかの子の戀しからまし

山の井の釣瓶をおもふ青あらし青葉の中に竿のすべれば

ひとりゐて君を思へば初夏の若葉に强き風の音する

かなしさもなほこひしさのごとからむ美しからむ別れてあらば

可愛ゆさのはてしなき人さながらにわが子の如くはてしなきひと

おのづから君に怖づるやわがこころうれしき人を見れどをどらず

休むまもたのしむひまもなかりけりおのれまことに人をめづれば

あぢきなく心はたえず眠るなり身の苦しさは歎かざれども

くるしさを忍ぶがごとき姿してただゆくりなくものを思へる

何ごとも知らであらまし君とわが異ることも知らであらまし

いそいそと門の内掃く一人の囚徒ありけり鎖なかりき

待たるれば明日の糧なきまづしさも忘れてひたにゆかまほしけれ

眞中なほ赤き薫火の黑髮におほはるるごとく灰となりゆく

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

変りの深しといふもみ心のただみ心のふかきなりけり

何よりもわが子のむつき乾けるがうれしき身なり春の日あたり

世に生きて甲斐なきなげき忘れまし子には尊き母の身なりし

ただに子の眠ればこころ何事かなしをへしごと安らふなりけり

おもふこと日にかはりゆく身となりぬいのちは斷たぬわれと思へど

あぢきなき身とも思はずいそいそと厨に立ちぬ客人のため

君と子とすこやかなればみづからの病もいつか忘られにけり

わけ入れば雜木の林ことごとく楓の如き芽を吹きてをり

かたはらの君に怖ぢてか足らひてかわれの心はさゆらぎもせず

一日を一日とだに思ひえず何をなしつつ暮す身ならむ

添寢する身に木蓮の花見えて病む子も今は睡りたるかな

おのれまづ髪など梳かばありし日によみがへりつつ歌ひうべきか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

心あるわれにもあらでわが子をばなほいけにへの如く思へり

子の泣くにすべなく起きて朝月のかげふみゆけば道に花咲く

おとなしくいねてまつとも汝をおきて我れ徒づらにいづちゆくべき

あめつちのひろきをめでんやすらかに眠りたる子のたまものとして

爪(つめ)立てゝ我をつかめる手の力ゆるぶが如し子の眠りつく

ものたらで泣きたるあとのわが心おもはゆきまで明るくなりぬ

夕靄のなかになげきて立ちをれば狂ひてひとり吠えたつる犬

かにかくにおそかりしかなあやまちと今知ることは悔しからねど

命をば命とおもふさばかりに寂しく生くる心となりぬ

かなしさに身をも忘れていでし家をわれとしもなくかへりみにけり

求めむか君と別るるかなしみのなかにいささかひそむいのちを

ゆるされし今もなほそのあやまちのおそろしくして口になしえず

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

君がため涙にくれてあることも君をおもへばかたりかねつつ

心よりうすきあかりのさしそめぬ眞暗の道を静かにゆけば

やうやくにとりなほされしみこころにまた新らしく涙わくかな

朝の空流るる水のここちしぬ梢の若葉風になびけば

今更に思へばこころこそばゆしわが子を眺めわれを母かと

缺くるなき愛もはかなき心地しぬ思ひめぐらす時のなければ

まことには子のする咳におどろきてなげうつ筆を持てる身なりし

この子などわれの命を奪ふべきわれいたづらに身をば疲らす

まづ何をおぼえそむらむ負はれてはかまどに燃ゆる火など覗く子

あるときの心にかへる束の間はたへがたきまでものなつかし

みづからを忘れたるまのこころよさ忘れがたさに物思ひする

相あれば君が心をわれとなくよそになすべきおのれなるらむ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わがこゝろ人を妬むにさきだちてののしりのこゑあぐるなりけり

このうれひわが身一つにかかるなり今はただかくおごそかにいふ

美しき夢とこしへたたへましはかなくせしはおのれなるゆゑ

わが愁ややうやく消えぬかく思ふいとまあらせず心ゆるびぬ

あまりにも眠るをさな子いねすぐることはなきやとまた憂ひつつ

安らひてわがなすことをなしうべきそのゆたけさをまづねがふなり

やうやくにひとの心のなごむとき別れんとこそ言はまほしけれ

何となくすさべる影の目にうかべまことやすらふ身とは思へど

君にえしおのがこころの靜けさも味ははずして何を思はむ

さびしさにさまよひ來しと知らるるは口惜しけれど去りがたきかな

大いなることなしはてし時のごとまづ悲しみを歌ひいだしぬ

あやまれる戀のみをせし我なるか今こそ戀のこひしかりけれ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

君思ひいねがたかりし夜のごとく家のことのみ心にかかる

歯入屋の殘して去りし鋸屑を軒ばに見るもはらだたしけれ

こともなきけふに足らへるわがこころ呪はしうして悶えそめけり

親のかほけさやうやくに見いでたる瞳はいまだ水のごとしも

可愛ゆさにわれを忘れてあやす顔雲のごとくも子にはうつらむ

打ちつづく塀の棘死の色よりもあざやかなりし囚人の服

ふとみればおのが身に曳く鎖をも忘れしごとく土を運べり

よきおもひ湧くにさへ似てわが心ふるきことのみ思ひつづくる

疲れはて歌も書きえぬ憂き身よりうれしや乳のほどばしること

わが道を開くが如くしたまへる君うらめしき夕まぐれかな

まづわれのかなしき心まぎらはす子守歌ともなりにけるかな

しみじみと身の甲斐なさをおもへども涙もいでず立つすべもなし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あはれにも怒るよしなき身となりぬいささかものを言はせたまへば

何なればわれはなしつるなげうちて今やうやくに憂しとつぶやく

つと湧ける涙のうちにみかへれば夢とうつつのさかひだに無し

やうやくに落ちつくこころは心また人戀しさにえたえざらまし

悲しさに涙ながせどなほ我は泣ける人とはおぼえざるかな

はしたなきものとおもへどみづからはなげうちがたきみづからのこと

醉ひしまま君がこころに醉ひしまま思ひがたきやみづからのこと

恥をさへ忘れはてたる身のあはれ人の中をばうなだれてゆく

埒もなく使はるるをばうしとせず身のせわしさを興がりぬわれ

新らしくおのがむかへしけふの日をまたみづからのさまたげとする

膝のうへ兎のごとくはねあがる子をば抱きてものを思へり

何とせむおのがなやみを押しかくすそれにすぎざるわれのさとりを

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

飽きはてて別れはしつれわが怒りつのれば更に逢はまほしけれ

いつとなく君に馴れけりかなしみになるる心も悲しきものを

日もすがら母の涙にひたる子の夕べとなれば父に抱かる

鈴ふればその鈴の音を食はむとするにやおはれわが子口あく

戀にさへ倦めるかあはれわが心いま子のほかに何ものもなし

初夏の光の白さめざめたる束の間はなほいのちありけり

詠草

青鞜社詠草として、ひろく短歌を募る。

毎月十五日までに日月社編輯部へ、青鞜詠草と朱書してお届け下さい。

わがあやまち

茅野雅

一瞬のあやまちよりか戀人をしらぬ遠世に放ちやりけり

足ばやに通り過ぎむとねがふ日のひと月ばかりつゞくかなしさ

わが心漸く火とも炎ともならむとすなり神も手ふれそ

秋よ秋よものを思へるわが肩に手かくるごとく口づくるごとし

秋の來ていたづら臥しもやうやくにものはづかしくなれる頃かな

すさまじくかき亂れたる空のいろ見るだにせちに人の戀しき

君が手を放ちし時のたよりなきもののさびしさに似て秋の來ぬ

自からのなげかひごとの隅隅に黄金の針をうちてとぢめむ

戀人は遠き世界に遊びつつ歸らずなりぬいかにしてまし

ダリヤダリヤ心しりてかこのあした眞紅にさけり口づけをせむ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ひそひそと語らふ聲と瀬の音とまじる河原の星あかりかな

わが寢屋の簾の端にうすいろの蝶のあそべり君や見に來し

火と水の境にすめる悲しさは物も云はれず命あやふし

秋の來てやうやくわれに靜かなる心を與ふ深く見よとて

戀人の夢より來しやなつかしき朱のいろの蝶水いろの蝶

手も足も冷たく凍り命なき蠟のごとくも見ゆる朝かな

ダアリヤの花よりほかにわが心しるものなしと秋をつぶやく

わが心漸く神にちかづくと思ふことさへいやさびしけれ

いたづらにこころいらだちわが帶のとけたるをさへしらでつまづく

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

山にて　齋賀琴

山々にとり圍まれし上つけの温泉の宿に來て秋風を聞く

温泉の宿の欄にもたれてたそがれの赤城をとほく眺めやるかな

蒼然とたそがれて行く上つけの山々見ればこゝろ淋しも

窓あくればかなたの山に姫百合の一もとあかく鮮やかに見ゆ

霧はるれば山の姿のほのみえて日はうら／＼と峰に映れり

秋近き深山の奥に女郎草香を吐くころを温泉の宿に來ぬ

秋草の爛漫として咲き揃ふ山路を過ぎて湖に出づ

この山のこの靜けさよ寂しさよわがさきの世のふるさとに似る

女りんの桔梗さしたる温泉の宿に晝しづけくも一人あるかな

温泉の宿の二日三日は昏睡の夜にも晝にも打つゞきけり

山に來てしみじみさびしそのかみの別れし人に消息を書く

きりぎしに夕日かぎろひ薄色の山紫陽花のうなだれて咲く

見る限り山あぢさゐの咲き匂ふ谷間に出でぬうつつともなく

谷合の岩に座りて嚴として聲なき山をふりあふぎけり

日輪は赤城の山の頂きに金泥流ししづみゆくなり

温泉の宿に秋風立ちぬしかすがに京のたよりのなつかしきころ

御料地に花火あがると打つどひ避暑の子供らざわめきてゆく

御料地も森も社も湯の宿も只一面の霧のわだつみ

旅に來て怪しき夢をみる事のいや繁きにぞ心うれひぬ

旅に來て人の情の美しき温泉の宿をこそなつかしみけれ

湯の香の岩にひびけば何となくなつかしくして去りも得やらず

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

八月の歌壇より

砂山のゆふぐれの風髮ふきてくろ雲ぞゆくわがうしろより(萬朝報)　與謝野晶子

きよらなる素肌の人のはしりゆくここちするかなはつ秋の風　同

大いなる緋のダリヤさくその前にたてばいちごになきたくなりぬ(潮音)　茅野雅子

たぐりたる蔓の先にも赤き花あはれにさけり初秋のころ

あそびはぐれひとりし吾子はないてくる甘藷畑の一すぢみちを　若山喜志子

めづらしく心明るし渚よりかへらむとしてあふぐ海面

君が唇へ巧になよる盃のなまめかしさにさびしくなりぬ

ままならぬ世になれつつ物思ひなくなりゆくがみゆるこのごろ　同

おもひきはまりぬ野にきたり野のしづけくも果なき暮にうたれはてけり　山田邦子

我心祈りてやます野をこえて夜ぞ漆黒くうれりくるかも

街の灯を水の面にうつし隅田川片かげくらく海にいるなり　四賀光子

大川の水にうつろふ灯影にし淋しかりけり生てしあれば

ひつそりとみ下す底に光よりすいれんの花動きたるみゆ

あをみごろあかるくすけばかあをなる魚のあたまはむらがりてみゆ　同

雨はれぬにはかに眉をうちひらきわが許にくる君にはあらぬか(帝國文學)　岡本かの子

夕ざればさびしくひさのわが門にたつけはひして月見草さく　同

からかさの油の香さへ身にしみてさびしく雨の夜をわかれきぬ　同

月に三度三度の文をまちわびて三度の老をするここちする(水甕)　長岡さみ

つれなしとうらみしころの思ひ出もまぢりて夏は人のこひしき　同

よくものにおもひふけりし君なりきかたれかたれさいなみしき　同

ひそやかに涙ぬぐひぬ紀の川の船にゐこぞる人のなかにて　水町京子

このあたり目じひの魚やすむならむあまりさびしき河の流よ　同

ただひとり花などうゑてあらましとまたあたらしくおもふなりけり　同

大比叡の山をよろしとのたまひぬ山ごもりする君のかなしさ　松平みさ子

今宵はも比叡のみ山の山ごもりこもりつつ君なにおもふらむ　同

王朝のものがたりめき御僧めき山ごもりする君のよろしさ　同

まろまろと肉づきてゆくさびしさや心にうれへなき人のごと　同

ふとおもふわが東京に一人きてやがて五年にならむとするを　同

たそがれのしじませまれば吾しらずひざまづきつつ一人いのりぬ　長谷川清子

おぞましや心一つにたもちかねわがかなしみをかたりにしこと　同

停車場の歩廊のしたの東京のまちうすぐもりみゆる朝あけ　岡本都夜子

雨はれぬ傘をたためば緑玉がくろ髪にちる森のひるすぎ　荒木龜子

とき肌に風なよりきぬするすると縮緬の帯をときし束のま　同

おぢさゐにうす水いろの小雨ふる朝なりかろきつかれおぼゆる　同

水の上よぎりゆく蛇ひとすぢの水路つくりてかなしませけり（詩歌）　川端千枝

すがるべきよすがもあらず野の草の蔓と蔓とがまつはりてをり　同

夏むしのとぶはかなしもまひるまをとぶはかなしとわがなみだすも　同

むかひ山いまさらめきてつくづくとみいりてありぬ雨ふりきたり　同

土にうもれいきをる虫のあはれさとおもひあはせてうちもだしけり　小谷清子

みもしらぬ國のゆふべの落日の眞紅にもゆるその大きさよ　同

筆とれば筆にいだせばいつはりとなるがわびしさこのおもふこと（國槃）　矢澤孝子

かくうらめばやさしき心のがれさり惡女の相となるをおそれぬ　同

あきらめのすゑはひじりの心もてひとゝゆるしぬわれもゆるしぬ　同

風ふけば野は一つらにゆれなびきゆれてびきわがたゆき梭の手　若山喜志子

川底に石うつひびき敢切はひれもすなけどすがたみえなく　同

ものあらふと背戸にいづればおもはゆの君が紙べに引はゐるかな　同

湖近き高木の山は檜わか葉いよいよしげりかつこう鳥なく（アララギ）　久保田ふじ

ほのあかき躑躅の花のさきみだれかすみながれてゆく山べかも　同

梅雨の雲からりとはれて水田の光の中をたまむしとぶも　同

人すまでひさしくとぢし家の内疊つめたくおりきてみるも　森山よしの

梅雨晴の庭にいづれば夕あかり苺の葉には露たまりをり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

初戀のなりゆき——岡田八千代

「初戀と云ふものは男の方にとつてはどんなものかは存じませんが、女にとつては、ほんとに一生の門出のやうなもので、隨分この初戀のなりゆきに依つて、女は自分の一生を清くもむさくも、美しくも醜くゝも、正直にも不正直にも送るやうになりはしないかと思はれます。たとへその戀は成就しないまでも、もし無邪氣に過ぎたものか清く通つたものか、樂しく見返らるゝものか、なんにもせよ、振り返つて見てそれに温か味のあるものであつたなら、必ずそれは女にとつては幸福なものとしていつまでも殘るでせう、けれ共、もし、それが、思ひ出すたびに俄かに氷の風にでも逢ふやうなものであつたなら、さてどんなに女の一生を不幸にさせるものでせうか、女はその爲めに、妻となり母となり、又祖母にならうとも、なほその胸には、何物をもつても滿しかねるある空虛を見出しはしないでせうか。なぜならば、それほどに、女の初戀——あだに動く戀心とは間違へちや困ります——は無邪氣な可愛らしい正直なものですから。私だとても、もし私のあの初戀が、總ての人から、も少し温か味をもつて取り扱はれたのだつたら、決して今かうして、御覽のやうなこんな淺ましい墮落の淵に落ちて居はすまいと信じてをります。それはあながち戀人にばかり責任のある事ではありません、私はもし、子の母と云ふものが、もう少し子供と云ふものを尊重し、その言葉になり擧動になり、又は風俗にまでも、細心の注意を拂つて呉れるものであつたら、世の多くの墮落女も、自殺男も、どんなにか救はれはしまいかと思はれるのです。女學生が墮落した、青年が自殺した、それはみんな學校の敎育が惡い、小說が影響した。かう一がいに云つてしまふ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のは、どんなにその人達を悲しませるものかは分りはしません。私は子供の母に、第一の責任を背負し度いと思ひます。結果にばかり急がずに、もつとゆつくりと子供と足並を揃へて、母親　自分の幼時を思ひながら、少しでも自分の幼時の時の苦痛を子供には繰り返させて貰ひ度くないものです。けれ共、大方の母親は、

「母アさんの若い時はさうぢやなかつた。」

と云つて自分の幼時の苦痛を子供に再び強ひようとします。戀に就いても結婚についても彼等は平氣で同じやうな事をやります。母親と云ふものは、なぜ子供の苦痛を取りのぞかうとはしないで、自分の子供の時の苦痛を再びさせて、自分の復仇をしやうとはするのでせう。私にも、もつと温かい母があつたなら、かうして、こんな裏長屋のせんべい蒲團にくるまつて、苦しい咳をしながら、こんな昔話をお話し申すつらい運命にも逢はなかつたかもしれません、ホヽヽ思はず愚痴になりました。まア聞いて下さいまし。」

女はかうした長い前置をしてから、靜かに次のやうな話しをしだした。

一

私が一番始めにその男子に注意するやうになつたのは、まだ國の小學校にゐる頃で、ある日の運動時間の時でした。もつともその時分は男も女も同じ敎場で敎はる制度でしたから、その子が私と同級で、誰れよりも弱々しい身體付をしてる位の事は私にも氣がついて居ました、それにその子が學校へ上つた時から、あんまり友達もつくらうとはせず、一人別になつて遊んでるのが何だか高慢ちきのやうに思はれて、云はゞ「面が憎い」と云ふやう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

な感情に常に押へつけられてゐるやうな氣がしてゐたのでした。その時もその子はたつた一人で運動場の眞中にある大きな櫻の木の下で遊んでゐたのですが、私はなんだかその子が何をしてるのか見てやりたいと云ふやうな氣がしたので、始めは何の氣なしに側へ寄つて行かうとしたのでしたがその子も私の方を見てゐてそれと氣取つたと見えて、急に私を避けるらしい素振りで、櫻の太い幹を、私の行く方とは反對の方へ、そろ〳〵と廻らうとするのです。私も又それに直ぐ氣がついたのです、早く私の向きをかへて、今度わざとその子の廻る方へ逆に廻つてその子に逢つてやらうとしました。すると、その子はひどく狼狽へたやうな氣色で、又逆に歸らうとしたのですけれど、そのときはもう私も櫻の幹の近くに來てゐましたから、さうはさせまいと云ふ腹で意地惡くどうしてもその子に打つからなくては濟ませないと云ふやうな樣子を見せますと、如何でせう、その子は何と思つたか身をひるがへして今度は櫻の木に上りはじめたぢやありませんか、私はそのやり方があんまり意表に出たので留める事も出來ず、あつけに取られてその子のする〳〵と身輕に上つてゆくのを下から見てゐるより外は仕方がなかつたのでした。そこは子供だつたのでございますね、云はゞこつちの計畫をひつぱずされたやうなものですから、もう少し年でも積つてゐたならば、向ふの木昇りに對して何か反抗的にこつちも女相當な事を考へさうなも

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のなのですが、そんな事には一向氣が付かずにぼんやりとその子のどこまでもどこまでも昇つてゆくのを見てゐたのです。

處が、運動場に遊んでゐたものは、私とその子と二人きりだつたわけぢやありませんから、いつかその子が木昇りをはじめた事が、運動場にゐた者の目に觸れたものでせう、一人寄り二人寄り果ては運動場にゐた者大方全體はこの櫻の木の下に寄つて來ました、そして子供の常として默つてはゐません、「もつと昇れ」とか「下りて來い」とか「石をぶつける」とか「先生にいつける」とかさん〴〵な騷ぎになつてしまひました。けれども、妙にこの子に向つて慘忍な心を持ちたくてゐる私には、それが自然に私の勝利になつたやうな、好い氣味で仕方が無いやうな氣がして、私も外の子達と一處になつて、出來るだけの聲をしてわめき始めたのでした、する中にその中の一人が一際聲を高めてこんな事を云ひはじめました。

「やア、みんな次郎さんを見な、女のやうな腰卷をしてるよ。」

さア騷擾は一層烈しくなりました、それに此一言が酷く次郎さんを凹ましたと見えまして、今まであの上で小さくなつてゐた次郎さんが、急に下り始めやうとしたので、下の囃し聲はなほも强まつて、遂には、柏子を揃えて次郎さんをなぶり出したのでした、無論そ

の中にはをとなしい子もあつて、「お止しよお止しよ」「やめろやめろ」なぞゝ云ふ聲もしない譯ではありませんでしたけれど、私はなんだか、私のしはじめた小さな仕事が俄かに大きくなつて、しかも勝利を得たのですから、酷く感激してしまつて、「やめろ」とか「止せ」とか云ふ子の口の端をつねつたり、押へたりしてその混雜の中を歩き廻つて、もう夢中になつてゐました。

その中に誰れか先生に注進をしたと見えまして、二三人の先生が敎員室から駈け出して來るのを見ると、まるで甘いものにあつまつた蟻のやうにたゞ一本の櫻を取り卷いてゐた小さい者達は、俄かに水でもかけられたやうに、時の間に逃げ散つてしまひました。しかし、逃げてからもまだ遠卷きに次郎さんのなりゆきを見てるものが幾人かありました、私もその中の一人でした。しかも他の人のやうに無意識に見てゐるのではなくて、私の心には根强い意地惡と、嘲弄と、歡喜とが踊つてゐるのでした。

けれ共、間もなく先生に助けられて下りて來た次郎さんを見た時、最も深い驚きに打たれたのは恐らく私が第一番であつたらうと思はれます。

次郎さんは全で病人のやうな蒼い顏をして殆んど人心地の無いやうにぐたりとして先生に抱かれてゐるのです。此有樣を見た子供達は又一勢に其處へ駈けよりましたが、それは

直ぐ他の教師達の爲めに遮ぎられて、次郎さんは其儘教員室の方へ擔ぎ込まれてしまひました。

さア私の心配は一方ならなくなつて來ました。二三人跡を追つて教員室の方へ行つた子供もありましたが、私にはその勇氣もありません、多分私の顏も次郎さんのと變りなく蒼ざめて居たらうと思はれましたから。

他の生徒達は又直きに元の遊びに歸つてしまひましたが、私一人はたゞ呆然と次郎さんの事ばかりが氣にかゝつて、授業始めの鐘が鳴るまで遊びに歸る事は出來ずに立ちつくしてをりました。

それでも授業のある中は混れてゐましたが、さて遊び時間になると、又次郎さんの事が氣になつてしきりに次郎さんをあの櫻の上へ追ひあげた事が後悔されてなりませんでした。しかし、他の友達などが、ともして「次郎さんはどうしたらう」などゝ云ふのを聞くと、私の意氣地は又込み上げて來て、「いゝ氣味だわ、いつでもあんまり澄してるから罰があたつたのよ。」などゝ云はずにはゐられませんでした。

二

間もなく學校が引けて歸る時間になりました。すると私は又急に淋しいやうな心持にな

つたのでした、それは、次郎さんの家は私の家よりもちつと先で、いつも學校が退けると私と次郎さんとはあとさきになつて道を行くのでした。けれども、私は例の片意地から、次郎さんに一處に歸りませうと云つたこともなければ次郎さんも又私の側へ寄らうとしませんでした。けれ共、しひて先へ行つてしまふのでもなく、後になるのでもなく、たゞ二人は往來の向ふ側とこつち側とを別々に歩いて同じ道を私の家の前までゆくのが例になつてゐるのでした。そして私が自分の家へ這入つてしまふと、次郎さんは一散に駈け出すのがお極りだつたのです、さアその人が居ないのです、私は始めてもの淋しさを覺えました。たしか一葉さんと云ふ小説家の小説の中にもかう云ふ時の心持に、「ある時はありのすさびに憎かりき」と云ふ歌が引いてあつたと思ひますが、私もはじめて見慣れた人の見えぬと云ふものはこんなにも淋しいものかとその時はじめて心底から、惡い事をした、なんで私はあんなことをし出かしたのだらう、今頃は次郎さんは大方學校から小使にでもおぶさつて歸つてうん〳〵うなつてゝも居やしないだらうか、それにしてもどうして木の上であんなに蒼くなつたのだらう、などとこり留めもないことばかり考へられて仕方がありませんでした。けれ共、又あんなに自分を恐れて、自分から逃げたいばかりに櫻の木へ昇つてしまつた次郎の心根が恨めしいやうな憎らしいやうな、又そんなにも厭はれた自分が辱か

しいやうな心持になつて、處々の町の角々などで外の子供の「さよなら」「さよなら」と別れてゆくのなども上の空に聞きながして歩くのでした。

私はその時フト思ひついたことがありました。それは私の家が醫者だつたので、若し次郎さんがほんとに病氣なら、きつと診察して貰ひに來るだらうと云ふ考へでした。私はそれに思ひ當ると急に何もかもがそれで解決のつくやうな氣がして、俄かに足を早めて家へ飛び込んだのでした。

私は「只今」と云つて玄關へ鞄を投り出すと一處に茶の間へ走け込みました。

「母アさん、今日ね、家へね、次郎さんて人來ない？」

と私は息せき尋ねました。

母は丁度こゝんで仕立物をしてゐましたが、呆れたやうな顏をして、

「なんですね、『只今』もしないで」

と恐い顏をするのです、私は直ぐしよげましたけれど、一生懸命に勢を盛りかへして、

「『只今』はしました。」

「いつ。」

「今、お玄關で」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「お玄關で？誰れに」
「誰れにつてみんなによ。それよか母アさん、今日ね、學校で病人が出來たのだけれど、その人來なかつて？」
「なにしにさ。」
「なにしにつて診て貰ひに。」
「いゝえ、そんな人は來なかつたやうだよ、何年位の人だい。」
「私の級。」
「いゝえ、そんな子供は來なかつたやうだよ。」
「あら、どうしてゞせう、だつて家はお醫者樣でせう。」
「さうさ。」
「なら、家へ來なくちやならないのにね。」
「どうしてさ。」
「だつて何處の人だつて病人はみんな家へ來るのぢやないの？」
「そんなことがあるもんかね、お醫者さんは何處にだつて幾らもあるんだもの、家ばかりへ來るとは限つてやしないのだよ。」

「あら、さうなの、お醫者樣は家ばかしぢやないの。」

「さうさ、お醫者樣は此町ばかしでも五人位はあるだらうよ。」

母はかう敎へてくれましたけれど、私はそのために大變失望してしまつたのでした、同時に次郎さんの消息の知れないのが何より氣になりました。私は夕方までに何度か次郎さんの家の前まで行つて見やうかと思つたかは分りませんでした。けれ共、いつもは、よく其邊りまで鞠をついたり繩飛びをしたりして行く事もあるのに、その日に限つて何となく氣が咎めてどうしても行つて見る氣にはなれませんでした。

その中に夜が來ました、私は母に連れられて町まで買物に行く事になりました。したがそれには自然私達は次郎さんの家の前を通らなければなりませんでした。

「あら母アさん。あつちから行きませうよ。」

「何故。」

「何故でも。」

「母アさんはどんな譯もないのに遠廻りをするのは厭ですよ、御用が遲くなりますからね、こつちから行きませう。」

「だつても。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「それぢやお前は御留守番をなさい、母アさんは急いで行つて來ますから。」

私の母はその頃から、大變に冷たい人でした。それは好く云へばつまり良妻であり賢母であつたのかも知れませんでしたが、しかし子供にとつては寄り處の無い温か味の無い母親には違ひありませんでした。

「でも私行くわ。」

私は是非なくすたく〳〵と歩いてゆく母の後について、間もなく次郎さんの家の前を通らうとしました、すると、其處に思ひがけず、一臺の車が小ぢんまりとしたくゞり門の處に置かれてあるのです、町とは云へ、田舍の事ですから、車で歩くものはまア私たちには御醫者様位にしか考へられませんでした。

「あら、母アさん、次郎さんの處に車がある、父うさんなの。」

「馬鹿な事をお云ひでない、父うさまは御家にゐらしたぢやないか。」

「でも車がある、御醫者様ぢやなくて。」

「あゝさうらしいね。」

かう云つて母はだん〳〵にその車に近づいて行きましたが、梶棒の處に置かれた提灯の紋を見て、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「あゝ△△さんだ、S町の御醫者樣だ。」

と云つたきり又ずん〳〵歩くのです。

「母アさん、△△さんて御醫者樣上手なの。」

私は一生縣命に母と一處に歩きながら聞きました。

「さア、……まだ若いからね……」

と云つたきり又ずん〳〵歩くのです。

私はもつともつと根掘り葉掘り聞きたかつたのですけれど、あんまりしつこくして叱られる事と、その理由を尋ねられる事を恐れたので、その儘默つて歩きました。(未完)

お隣のおくさん——小林かつ

お隣りのおくさんは「虫はなち會」を「ほうちゆう會」と云ふ人です。そのおくさんとこのまあるい顔にぱつちりした黒い眼のみひらいてゐる四つになる男の子と、そいから今年の二月に生れたといふ可愛らしいさかりの赤ん坊とを、ひま人な若い志村のおかみさんは窓から首を出しては、あやしたりからかつたりよくしました。

子供達は、その若いおかみさんの顔をみるのがみんなすきでした。間がなすきがな、

「おとなりのおばちやん、何にしてらしやるの」

と上の子は聲をかけました。

「おとなりのおばちやん」

「はあい。坊ちやん」

「はあい。おばちやん」

といふ會話は若いおかみさんの御亭主をくさ〳〵させる程、一日にいくどとなくくりかへすことがありました。

氣にむらがあつて、わがまゝをいふ若いおかみさんは、本でもよんでゐるときにつくづくうるさいとは思ひますけど、その男の子のまわらない口でおしやべりをするのをさすがににがい顔も出來ませんでした。――その男の子が窓に首を出すときつとそのあとからおくさんが赤ん坊をつれて、

「へいおばちやん」

と出て來ます。そうすると若いおかみさんは少し、閉口したらしい顔色を、うつかり眉の間へ出して了ふことがあります。

「ねえ、おくさん、裏の中村さんの女中衆はそりや無神經なんですわね。枝豆のごみは、そこら中水口にちらかしぱなし、お魚の骨はほゝり出しぱなし、そりやきたないんですの」

話はまづ裏にゐる中村といふ家からきつとはじまります。その家の女主人は、若いおかみさんがどうしても見た顔で、そうして、名の思ひ出せない人なのです。公園の活動の女優だといふのと、おそろしい大がたの絞りのきものとが、方々のおくさん達の注意をひいて、何かと云ふと、その女は噂のまとになる女なのでした。

とりわけて噂を云ひたがるのは、そのおくさんでした。やれあの方は、お湯屋へおこしも

しめずにくるの、お白粉が年のわりにこいのと、若い志村のおかみさんをつかまへてよく話しました。

ある時――志村のおかみさんと、その主人と、二人のお友達の若い洋畫家とが、窓下で話しあつてゐるとき、とん狂に聲を立てゝ、

「ねえ、おくさん」とおとなりからよびました。だまつて、志村のおかみさんが窓をあけると、おくさんは、もゝ色のおこしを、お尻はしよりに下から見せて、たすきをかけたまゝ、――黄い――と云ふよりどす黑いうでをむき出して、竹格子につかまつて、ゐました。

「あのね中村さんのあの人ね、今魚屋へ行たんですよ。そしてね、そこにあつた鯛のあたまを、いきなりひねくりまわして、これいくらだいつて、まあこうきいたもんです。とね魚屋で、いくらとか云ひましたの、とね、ぢやすぐもつて來ておくれ、中村だよ、知つてるだらうと云つて、つんとして魚屋を出て來ましたわ」

おくさんの話はそれだけなんでした。

「おやまあ、そうでござんすか」

志村のおかみさんは云ひやうがないんでそう云いました。若い洋畫家は、小さい聲で、

「少し、誰れかに、にてるね」と云つて、おかみさんの顔を見ました。おかみさんは、東

京ものなのと、淺草そだちなのと、生れた家が書きといふごく自由あけつぱなしな家なのとで、ていねいな言葉がつかへないやうな人なんです。ですから、
「まあまるで、あの人は男子みたいですね、いけぞんざいで」と、おくさんに云はれたとき人知れず、冷汗をかいた程でした。
そんなことからそのおくさん――お屋敷づとめをしたといふおくさんと、話すことはおかみさんに、いつか壓迫を感じさせました。
「おとなりのおばちやん、」とおくさんの聲で話しかけられて、ぞつとする程、おかみさんはいやな事がありました。
「何をしてゐらしやいますの」
「え、本をよんでゐますの」
「小說ですか」
「えゝ」
「何と申しますの、――やつぱりハイカラもんですか」
とこうのべつにきかれると、おかみさんは困つて了つて、兩方の頬の赤くなるのをおぼえます。それに、おかみさんは、じぶんのもつてゐる病氣から一種のわがまゝがてつだつて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゐるので、よけいです。

「そんなにお仕事をなさると、いけませんわ。この暑いのに」

おかみさんがせつせと、どつかへ行くために着物をつめてぬつてゐるときなんか、かう云はれると、ほんとうにいやんなちまひます。

三越に見切りの賣出しがあると云つては、きずものを、やすくそこの旦那はよくかつて來ました。

その度に、見せられて何とか云はなければならないのはずいぶん、おかみさんにとつて、難儀な仕事でした。

うるさいと云つておこるわけに行かず、――と云つて一緒に話してゐることもいやだし、そのおくさんには、ほんとうに、つくづく困りました。

ある時は、ほんとうにひつこして了はうかと、志村の夫婦は相談することもありました。

人が訪ねて、かへつて行けば、

「お客様でしたね。どちらの方。お姉さんですか」

きつときゝます。それが、とんでもない人でゝもあれば、おかみさんは忽ちある侮辱を感じます。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「だれでも女でさへありや姉さんだつてきくわ」

ふつと夫婦は顔を見合して笑ふのでした。

「あなた方はほんとうにお氣樂ですわね。あたし達はちよつと二人で出るたつて老人の前がありましてね」

散歩をしたり、買物に出たりする志村の夫婦におくさんはいやみらしく云ふこともありました。おかみさんは持前のかんしやくを一度そとで危くはれつさせそうになつたことがありました。

「何、色ぢやなし戀ぢやなし馬鹿ぐ〳〵しい」とお腹の中でぶつ〳〵云いながら、都々逸みたいな節でうたふお隣りのとしよりのカチユーシヤ節をおかしくつておかしくつてたまらなくきいてゐたこともありました。

どうかするとおくさんはすこしまわらなすぎると思ふ程、人の氣にとんちやくない人でした。

「ねえおばちやん、ねえおくさん」と云つた調子で、臺所の話、煮物の話、お主人の話、——どうかするととんでもなく、若い志村のおかみさんの顏を赤くさせるやうな色ぱい、しかも、きたない色ぱい話を、半日ぐらい窓で話しつゞけることがあります。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

無神經でなくつて、神經質でないおくさんの御ていねいなねちくした話を、暑いのに座つてゐるおいどをいたくしてきいてゐる志村のおかみさんは、つくづくをくさんののんきな太平樂な氣をうらやむこともありました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お小夜 ——原田皐月

一

お小夜は荷物一切を幾つかの茶箱に詰め込んで懇意の家に一先づ預け、ほんの手周りの道具丈け持つて、婆やと二人切りで二三日前に極めて來た貸二階に落付く事になつた。氣まぐれ者だのお尻が落付かないのと皆に云はれる中で平氣で貸二階迄尋ねて、愈々小粋なこの世帯を疊むと云ふ處まで運んでは行つたもの丶さて今日となるとお小夜にもこれ迄のこの家の生活が懐しく顧られるのであつた。

日が高く昇つて障子の中硝子から派出な夜着の裾にかん／＼當る頃漸々お小夜は寢間着の裾を引ずり乍ら茶の間へ出て、其處にべたりと坐ると猫板に肘を凭せて永い間敷島を吹かして、それからやつと湯殿に立つのが毎日であつた。そして新聞を見い／＼朝の御飯を濟ますとお風呂へ出掛けて、綺麗に整へた顏や髮に一日中の氣分を立て直して歸ると、婆やを對手に無駄咄しをしたりお茶を呑んだりして居るうちにもう夕方になつた。其頃になると若い靑年は會社の引けをいつも此處へ廻る事になつて居た。お小夜に一つ年上でさる

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

會社の重役の息子と云ふ事で、若い乍らもお小夜には少しの不自由もさせなかつた。

お小夜は半年の間殆ど毎日斯うして日を暮らして居た。此儘居たら一生も斯うした日が續く樣にも見えた。お小夜はいつか髮を結び乍ら中挿の兩天をこぼれる程多い自分の眞黑な髮を見て、若い年が何時迄續くでもない、いつかこの毛が眞白になる時もあらうのに、今から斯うした不自由もない代り面白味もない暮らし方に老い込む事が自分乍らつく〳〵勿體なく思はれた。そして今更らに斯うした無事なお圍ひ者の月日を半年も送つて來た事に不思議な氣がするのであつた。

お小夜は知つて居る丈けの人に浮氣者だとか水性だとか云はれて居る程放浪性の強い女であつた。それが半年前から斯う音なしく身を落付けて居るので、逢ふ限りの人が羨み乍らも此度こそはいつ迄もこの幸福を取逃がさない樣にと云ひ云ひするのであつた。けれどもとうとお小夜は皆の羨んだ幸福を今日限り見棄てるのである。そして何處迄行つても同じ事を繰返す丈けの生活から又もとの放浪の世界へ戻らうとして居るのである。

「全く私位落付かない人間もないはね。其内腰が曲つて了ふ位が落ちなのかねえ」

お小夜は片づけの指揮し乍らしみ〴〵云ふと、

「姐さんにや御無理もありませんよ。今の内ですもの。尤もお金の重みで腰が曲るかもし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

れませんけどね」

婆やは斯う云ひ乍ら瀬戸物類の詰め合せをして居た手を止めてお小夜の顏を振仰いだ。實際婆やはこれ丈けの器量と若さと手腕とを持ち乍ら、獨りの旦那のお圍ひ者位ぢや不足の筈だと思ふのだつた。

「其麽事云つたつて姐さん年にや勝てませんぜ。その面にも皺のよる時が來まさあね。其事だつてちつとは考へなくちやあ」

茶箱に繩を掛けて居た荷物を預つて呉れる事になつた亭主も口を出した。

お小夜は田舍から出て來た時汽車の中で乘合はした丈けの緣故で、今でもこの人の世話によくなつて居た。其頃お小夜は耐えに耐えて居た夫の亂業にほと〳〵愛想が盡きて一刻も止まつて居る事が出來ず、と云つて嚴格一方な生家には自分から好んで嫁入つたのであつて見れば怎うあつても歸る事が出來ず、とうと思切つて丸つきり手賴りのない東京に逃げて來たのであつた。行く處は幾等もあり乍ら追手の恐しい處許りなので行く事もならず幸心切なこの人の世話で兎に角呉服店の店員になる事が出來たのであつた。お小夜は僅か許り通つてるうちに人目の多いのを恐れて其處を出ると屋敷奉公でもしたいと思ひ乍ら山の手邊の口入屋を步き廻つてるうちに夫のお友達に居處を嗅ぎ出されて了つたので、其儘

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

無斷で其處を出て了つた。その時お小夜は泌々孤獨を感じた。今迄も小夜は誰を手頼る事も出來ず、周圍凡てが仇の樣な中に起臥して幾度となく孤獨に泣いた身ではあつたが、其時はもう涙でまぎれる樣なものではなかつた。其棄鉢の孤獨がとうとうお小夜に生活を與へて此處迄導いたのであつた。此麽生活の中でお小夜はこの親切な亭主夫婦を煩はさなければならない樣な色々の出來事に打突かつて來た。其度に夫婦は必ず若い時が何日迄續くものでない事を說いては早く身を固める樣に繰返した。

「姐さんも辛棒の續く人だと怎んな運でも摑まへられるものを、あゝ落付きがなくちやあの器量も仇だねえ」

お神さんもお小夜の動く度にこんな事を亭主と云ひ合つて居た。實際心切な夫婦はお小夜の身の早く極る樣と骨を折つて呉れた事も一再ではないのであるが、かんじんの當人が一向氣がないので話はいつもお流れになつて了つた。初めのうちこそ傍の人も扼鬼となつて何の彼の云つては居たが、今ぢやもう又かと樣に何にもお小夜に云ふ人はなくなつて了つたのでお小夜は結句氣樂に思つて居た。

荷物を車に積み込んだ頃、今日一晩を名殘りに、何處か明るい巷で過したいと云ふ心持から、自働車を馳らせて來た男が、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「女は浮氣と相場が極まつたものだけど、此奴の樣なのも珍らしいものだ」
手傳ひの人を顧みて笑つた時、
「そりや誰のせいだか知れやしない。貴方がさピンからキリ迄惚れさせて置かないと云ふのも人間の情のない處だはね」
「情けないい處だね。お前の樣なのは。まあ一生野良犬つて格だね」
「野良犬でもいゝや。毎日同じお膳に向つて同じものをつつ突いて居るよりや、其處等中の塵溜めからでも勝手なもの丈け選つて歩ける方が余程いゝは」
お小夜は斯う云つて皆と一緒に笑ひ崩れた。そして荷物萬端を人任せにすると、
「さあ野良付かうぢやないの」
と云つてさつさと出て行つた。

二

お小夜は障子を明け拂つたお座敷の敷居際に塗枕を持出して、濃い綠に一杯に日の照した庭に背を向け乍ら氷々と横になつた。
「此麼にして貴方と居るのはほんとにいゝ持だはね」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お小夜は貰に火をつけて男に渡すと、男は、
「今迄の家ぢやお氣に召しませんかね」
「家が怎うの斯うのつて話ぢやないは」
「ぢや友染縮緬の布團でなくちや御寢に適ひませんかな」
「へえ、まあ其邊ですね」
と云ふとお小夜は全く調子をかへて、
「だけど群内の夜具ぢや全く世帶臭い譯だつたはね」
男はぷつと噴笑し乍ら身を起して、
「へえ。お前でも世帶臭い事があつたかい。怎んな匂ひか後學の爲に嗅がして貰ひたいねお別れの印に」
「ウフ、、、。だけど貴方ほんとに店が極つたらちよく〳〵は來て下さるはね。嘘ぢやないでせうね」
「ちよく〳〵でなくちやいけないだらうね」
男が何も彼も茶化して了ふのでお小夜はむつとし乍ら、
「冗談ぢやありませんよ。だけど私やほんとに怎う云ふ性分なんでせう。男と見れば人一

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

倍惚れて了ふ癖に、ぞつこん惚れ込む事は又怎うしても出來ないつてんですからね。これがほんの浮氣つてんでせうね」

言葉半ばでつく〴〵お小夜は寂しい氣になつた。そして男の顔をしげ〳〵と見入ると、

「まあ其麽處でせうなあ」

お小夜は男が一向取合はないので先刻から翫具にして居た男の手をいやと云ふ程打ち乍ら、

「たまに人が眞面目に話してるんぢやないの。少しは貴方も眞面目に聞くものよ」

さう云ふとお小夜はから〳〵笑ひ乍ら庭下駄を突かけて池の周りに蹲つてる蛙を一疋々々追廻して居た。

お小夜は男を送り乍ら式臺の上に立つて、

「ぢや家が極り次第お知らせしますからね。屹度來られるでせうね」

と幾度も繰返して居た。そして遠退いて行く男の車を見送つて了ふと、新らしい部屋の様子などが急に見たくなつたのでお小夜もこの家を出た。

お小夜は撒き水に濡れた道を歩いて居ると輕い風が絣絞りの裾を嬲るので、其度に向脛に快い縮緬のしぼの肌觸りが傳つて何處迄も斯うして歩いて居たい様な心地となつたので

家へは寄らずに此儘心當りを廻つて見る事にした。

　お小夜は小さくてもいゝから待合を出して見る氣で居た。男はそれに就いて別に何にも云はなかつたが兎に角別れる時は過分の金をお小夜は貰つて居た。前から心當りを頼んでも置いたし、一二ヶ所話がないでもないので今日は其方へ行つて見る氣になつたのである。お小夜は川の多い町へ出て其處の柳の川風に靡いて居る下を歩いて居ると、途先きの十字街を橋を渡つて停留所の方へ急いで居る男の見覺えのあるのに思はず足を速めた。お小夜の下駄の音が相手の耳に屆く頃男が振り向くと、

「やあ」

　さそつと立ち止つた。

「矢張り貴方でしたのね。暫くでした」

「此頃ぢや大變に落付いてるつて話だが怎んな工合なんだい」

「駄目、又謀叛起しちやつたの。近いうちに一軒出しますから何分御引立てを」

　お小夜が輕く頭を下げると、

「そりや有難いね。此度はどの邊だい。まさか又彼處ぢやあるまいね」

　お小夜は廿三の去年迄淺草に女を置いて店を張つて居た。其頃まだ男は學校に通つて居

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たのであつたが、學校を出ると同時に兜町へ乗出して仲買ひを始めたけれど、其頃お小夜はもう其處の店を閉ぢて居たのでずつと逢はなかつたのであつた。
「立咄しもをかしいからまあ歩かないか」
二人は川口添つて歩き出した。風が少し強くなつたので薄い羽織が胸元から後へずるつこけるのをお小夜は氣にしい〳〵話しつゞけた。
「園部さんは怎うなすつたでせう？」
「さうしては始終思ひ出すんだらうなあ。園部はあやかり者だよ。彼奴今保險に居るんだがね、待合を出すなんて聞いたら喜ぶだらうよ」
「どうぞね、宜敷く御披露を願ひます」
「嫌やだぜ。君子は危きに近寄らす」
「まあ」
お小夜は道行く人を振り返らす程大きな聲で笑つた。
「燒かれた日にや事だからなあ。然し改めて伺つて置きますが何方が一體正賓だつたのだい」
「どちらも」

「さうさ。金を出して遊んで行く馬鹿野郎はな」

「さう云ふ馬鹿野郎は大事なお客で大事な人ぢやないんですよ。貴方達は人の方よ」

お小夜は其頃より二人が落合つては兩方とも面白くない顏をして歸へつたりした事を思ひ出した。

「貴方達は全く贅澤だはね。世界中にや自分獨りより男がない樣な顏をしてるんですもの女にかけちや。さうは行きませんよね。あばたも靨つて事があるけど私にや怎んな好いた人のだつて矢張りあばたはあばたよ」

お小夜は皮肉の笑を相手に投げて居た。

「さうぢやなくつて？それが正直な人情でせう。だから貴方のあばたの目に付く日には外の人の靨を待つて居るし、園部さんのあばたの見えるには貴方の靨が見たくなる譯ぢやありませんか」

「成程浮氣哲學だね。處で今日はあばたか靨か何方だいと何方にしても斯うして歩いてる丈けぢや疲れる許りだ。乘らうぢやないか」

「私のは憚り樣ですが浮氣とはちつと許り違つてますからね。貴方達が充分なら誰も浮氣はしませんよ、足りないのは其方樣でせう」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「おや〳〵。其方の腕ぢやなかたかなあ」

「大きに。來世からは捜ね鉢で男を捜ね直す腕を貰つて來ませうや」

何處へ行くともなく電車に乘つた二人は菖蒲の廣告から氣まぐれを起して蒲田へ行く事にして停車場へ迄のつた。けれども汽車の出る頃は國府津迄の切符を持つて二人ともにこ〳〵して居た。

箱根へ着くとお小夜は婆やに丈け葉書を出した。

「余程彼の婆やが大事だと見えるね」

「私がほんとに大事にするのは彼の婆や位なものね。居なくなると直困るもんだから。あとは出て面白い時丈け入用な人許りよ」

お小夜は横目で相手を見乍ら輕く笑つた。

「おや〳〵。御挨拶だね。」さう云ふ果報者とは知らずに箱根三界迄お伴仕つた鼻の下の長きには自分乍ら諦れるよ」

「なんかつて貴方なんかが遊ぶ時外一生懸命になる時のない人ぢやないの」

お小夜は先のつかへた様な昨日迄の生活から急に扉の開かれた嬉しさに無暗と燥ぎ廻るのであつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

三

昨夜お少夜は更けてから呼んだ藝者達の中に這入つて、はめを外づして騒ぎ廻つたのと輿に乘じて飮んだ酔醒めのだるさとに日の暮方迄床の中に腹匍ひになつたまゝ、傍に寢たり起きたりして居る男に憎まれ口をきゝ乍ら莨許り吹かして居た。

「おい。少し歩かないか。お前の口だからいゝ樣なものゝさう喋りつゞけの呑み續けでは大抵口が堪まるまい」

「堪らないのは貴方でせう？　何しろ一風呂浴びて來るから待つてね」

お小夜は手拭を口に銜へると、長く引いた水色のしごきをくる／＼貸俗衣の腰に卷き乍ら廊下へ出た足を又返して、

「私は天迄も行かれる樣な氣がしちやつてよ。ほんとに伸び／＼して馬鹿に世の中が廣々して了つたは。怎うも私は獨りつきりの男なんかにこびり付いちや居られない性分だはね」

首を縮めて舌を出すと、とんと一つ廊下を高く踏み乍らばた／＼と馳けて行つた。

四

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

婆やは新らしい部屋に只獨り待ち疲れて、もう口小言も出なくなつてべたりと火鉢の傍に座つて居た處へ箱根から葉書が着いたのであつた。

「二三日中に歸へるからね、待つてゝおくれよ」

と書いてあつた丈けなので婆やはいざ別れとなると矢張り未練が殘るのも人情だらうと思つて、下駄屋へ嫁入てる姪の家へ遊びに行つたり、淺草の知つた家をおちこち歩き廻つたりして日を消して居た。約束の二三日が又三日も過ぎた日の午後婆やは湯上りの緩み切つた筋肉を、明け拂つた椽側の前に伸してうと〳〵して居る處へお小夜は歸へつて來たのであつた。そして婆やを見るといきなり笑ひ出して、

「私つたら箱根から歸る積りで國府津へ出たんだらう。それが又熱海へ行つちやつたんだもの中々歸らない譯さ。おゝ暑い。めつきり暑くなつて了つてね」

お小夜は珍しさうに新らしい部屋を見廻して居た。婆やは着換を持つて行かなかつたのを氣にし乍らもとうと送る事も出來なかつた事を繰返しながら、お小夜の不斷着を揃へて居た。

「誰と行つてたんだか當てゝ御覧？」

「おや檀那ぢやないんですの？」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お小夜は婆やの迂散臭さゝうな顔を見てにや〳〵笑ひ乍ら、横坐りの儘羽織を脱いで帶止めをはづして、帶を解き出した。

「分らないだらう？」

「吉岡の梶那ですか」

濱町の席亭の爺で前からお小夜を物にし樣として居た男の名を云はれて、

「馬鹿におしでないよ。彼麼狒々爺のもんかね」

「分りませんね」

「太田さんなんだよ。驚いたらう」

「へえ、珍らしいぢやありませんかそれは又。ですけども何處でお逢ひになりましたの」

「まあ緩り話すはよ。サイダーがない？。ぢや上り花でもいゝから苦い處を一つ。甘いものは何があるの」

お小夜は伊達卷のまゝ長々と伸ばした足を兩手で叩いた。

「何處からも何とも云つちや來ない事？」

「まだ參りませんよ。私ゃ深川へ行つて來ようと思つては居たんですけど、何しろ今日はお歸りか明日はと思つては毎日家に許り居てとうとまだ行かなかつたんですよ」

「私はこれから一二軒行つて見樣と思つてるの。婆やも都合がよかつたら深川へ行つて見て頂だいな」

お小夜は茶を飮み乍ら此四五日の話しをし出した。

「ほんとに呑氣だつたぢやないの。何だか世の中が變つちやつた樣な氣がするよ。今迄だつて何も窮屈な思一つしたわけぢやないけれどね」

お小夜は時に自分が馬鹿にふしだらな者に見えて自分乍ら愛想の盡きる樣な事もあるが其那氣も直世の中の女に對する憐みの心に變つて了ふのであつた。

皆よく唐變木見たいな男を抱へて一生平氣で小供や亭主の番がして居られたもんだ。あれで文句がなけれあそれこそ牢間だし、文句があつても云へないとなれやこれも意氣地のない話だし……此麽事を考へては自分許りが完全な生活をしてる樣な氣になつたりするのだつた。

「太田さん立派になつたたゞせうね。何しろあの男前ですもの」

「それに商買の方も景氣のよさゝうな口振りだつたよ」

「園部さんは慥うなすつたんでせう」

「保險の方へ出たとかつて話だつだよ。さう云ふ連中を尋ねて始めの日にや皆來て貰ふん

だね」

お小夜は手拭の模様や菓子折の趣好迄をもう考へて居るのだつた。

「婆やも名前を考へてお呉れな。姓名判斷に早く頼んで置いた方がいゝからね」

「まあそれもさうですが家の方を先にしなくちや」

二人は顔を見合はして笑ひ出した。（未完）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

或る家——山田邦子

ガラ〳〵と門の戸が開いたので弓子は慌てゝ立つて玄關へ飛び出して見たがそこには誰れも立つて居なかつたので、

「政次さんよ」と明るい調子で座敷の夫に聲をかけると飛ぶやうにして座敷の前の縁に走り出した。そこへ植木のかげから白い浴衣を着た政次さんがニコ〳〵として現れた。

政次さんは弓子の家の二軒先きに家を持つてゐる、弓子の遠い親戚にあたる光代さんといふ人を妻君にしてゐる文學士である。此政次さんと弓子とは、光代さんが許婚の頃から大の仲好であつた。そしてお互に結婚してからも不思議と近處に住むやうになつたので、政次さんの夫婦と弓子とは勿論昔からの仲好であるし弓子の夫も人なつこい方なので、今では兩家が非常に仲好くなつてゐる、それで政次さんは門の戸を開けると、玄關の横を通つて直ぐ座敷の椽の方に廻るくせになつてゐるのであつた。

「いゝ天氣ですなあ、君」政次さんはいつもの輕口な調子で弓子にからかふやうにかう言つて這入つて來た。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「今日は朝から家に居たの？何故來なかつたの？待つてゐるのに」弓子は丸で一年も逢はなかつた兄弟に逢つたやうに、もう飛びつくやうな調子で政次さんのあがる方へついて行つてなつかしさうにたてつゞけに聞いた、いましがた夫と二人でお茶を飲みながら「政次さんは何してゐるだらう、出て來ればいゝのに」「きつと用事に行つたでせう、でなけりや今日は日曜だから來るはづですもの」と、いふやうな、噂をしきりに言つてゐた矢さきであつたから、弓子はじつとしてゐられない程政次さんの來たのが嬉しかつた譯で、時には折角政次さんがやつて來ても、ちよつと目を其方へ向けるきり笑ひ顔もせずに本を讀んでしらん顏してゐる時などもあるのである。弓子は政次さんに對しては可成り遠慮なく思ふやうに振舞つた。

「暑いね君、今君の噂を言つてゐましたよ」

「さうですか」

弓子の夫と政次さんとかう言つて挨拶をした、弓子は飲みあらしの茶道具をいそ〳〵と片付けて、葛餅の葉ばかりになつた菓子鉢を引きながら、

「十錢お出しなさい」とそこらに聞える位の程度の小聲で夫に笑ひかけた。

「どう〳〵取るな」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

弓子の夫は其財布から十錢玉を一つ出して弓子に渡した、弓子はそれを受取るとそは〳〵と自分の部屋に這入つて小さい自分の「がまぐち」から更に十錢の銀貨を一つ出して勝手口から井戸ばたの「しづさん」を呼んだ。

「も一度お菓子を買ひに行つて來て下さいな」

「先程と同じものでよう御座いますか」

「エヽ」

さうして弓子は瓦斯に又鐵瓶をかけた。

座敷に歸つてくると政次さんと夫とは丁度碁盤を持ち出した處であつた。

「アラ、政次さん私と一席圍みませう」

「バカ、下手が又出て來る」

「何んでもいゝのよ」かう言つて弓子はぐん〳〵黒い石を盤の上に置きはじめた、せい目四つ目風鈴といふ大變な石の置き方である。

「ヘン、又百五十ばかり勝つてやるかな」

政次さんは笑ひながら敷島に火をつけた、弓子の夫も可笑がつてあは〳〵笑ひながらそばに座りこんだ。

勝負は勿論百三四十も弓子の負けであつた。

「あゝつまらない、碁なんて面白くも何んともないものだわ」

「だんく面白くなつて來るよ」

「さうですね、少し分り出すとたまらなく面白くなりだしますね」こんな事を言ひながらやがて政次さんと夫とは碁盤に向つた、弓子はお勝手へ出て來て買つて來させた菓子包を受取ると「今日も亦これで三十錢お菓子を買つてしまつた」とはつと胸を打たれた、けれども其時座敷の方からアハゝゝとたまらなく可笑さうな二人の笑ひ聲が聞えて來たので弓子の心は直ぐに其なかにたあいもなく引こまれて全身をどるやうに、

「何があつたの！」と菓子鉢を持つて座敷へ飛びこんで行つた。

碁を打ちながら三人は暫く無駄話をしたり輕口を言ひ合つたりしてゐた、やがて又門が開いて此度は玄關に案内を乞ふ人があつた、三人はハッとしたやうに耳をすましてゐると「しづさん」が名刺を持つて這入つて來た、それは弓子の夫への來客であつたので弓子は慌てゝあたりを片付けだした、政次さんは歸りさうにして立つた。

「まあ君遊んでゐらつしやい、いゝんです遠慮のいる人じやないから」

「いゝでせう政次さん、私の室の方へ行きませう、あそんでゐらつしやいな」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

弓子は取りちらした茶道具を片付けて間の襖をしめながら政次さんを呼び止めた、それで政次さんは又あそんでゆく氣になつて弓子の室の方へやつて來た。お茶を出すやうに言ひ付けると弓子は室にかへつて來て政次さんと二人で今年弓子が行かうとする避暑地の選擇などそれからそれと盛に話し合つた。

鹽原にしやうか木曾にしやうかと弓子は迷つてゐた、政次さんは信州の高遠といふ處が非常によいと言つてそこらを見廻して七八枚レターペーパーをかりとぢのやうにしてある粗末なものを手頃と思つたかして机の上から引おろしてそれにエンピツで地圖を書かうとした。

「アラ、それはいけないこれでも今月の簿記よ」

「アハヽヽ、君がそんなものをつけるのかね」

「今月からはじめたのよ、さんざん叱られて」

「つけたつて駄目だよ、君は金を持ちさへすれば使ひたくつてもぢく〳〵する人だもの」

こんな事を言ひながら政次さんは外の紙きれをさがしだしてざつとした地圖を書いて其町の說明をはじめた、町のすぐ横が斷崖のやうになつてゐて其下を眞蒼な山の水が流れてゆくといふ事や、日本南アルプスが町から向ふにクッキリと見えるといふ事などが弓子の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

氣を一度に引付けてしまつた。

「ア、よかつた、やつと定まつたわ、私高遠へ行きませう」

弓子は安心して定めこんだやうな樣子であつた。政次さんは弓子の性急な調子を可笑がつてアハヽヽ大きな聲を出して笑つた、すると次ぎの間から弓子の夫が

「何を盛んに大きな聲をして話してゐるの、政次さん出て來給へ、遠慮の人ではないから」

と聲をかけた、弓子はちよつと肩をすぼめて、

「行つちやあいけない事よ」と小聲で言つた、政次さんは矢つ張り笑つてうちわを用つてゐた。

お客さんが歸つてから夫はあくびをしながら出て來た。

「大きな聲で又例の田舍行きか、どこに定めたつて?」

「大將はね、僕が高遠といふ町の話をしたら「もうそこに定めたわ」なんて言つてよろこんでゐるんですよアハヽヽヽ。」

政次さんは笑ひ笑ひ便所へ這入つた、弓子の夫も氣嫌の好い顏をして笑つてゐた、と、弓子は此時だ!と瞬間に思つて二日も前から氣にかゝり通しに氣にかゝつて、しかも言ひ出す折がなくて――其言ひ出して好い折は弓子には直覺的に分つた――笑つてゐてもなん

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

でも此一つの事だけは心の底にこびり付いてゐた重荷の始末をつけるべく、さつきの高遠の地圖の書いてある紙きれのはしに「六」といふ字を書いて、

「取つて置いた方のがこれきりになつたの」と甘えたやうな困つたやうな調子でかうさゝやいた。

「どうして、俺は知らないぞ」と言つて夫はまだ笑つてゐる、弓子は心のなかでまづ安心と思つて机の上からさつき政次さんから取りあげた粗末な紙のつゝり合せを取つて夫の前に置いた。

「これを見て頂戴」

「まあ後さ」

政次さんが便所から出て來たので此話はこれで尻切とんぼになつた。」

夕方近くやつと政次さんは歸つた、お夕飯をすませてから弓子はハタ〳〵とうちわをつかひながら打水をした庭に向つて籐椅子に腰をおろした、そこへ夫がやつて來た。

「さつきの帳面を見せてごらん」

「おこるの？」

「おこりはしないがずゐぶん分らないな、あれだけ渡しておいた金をみんな使つてしまつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て又あの臨時費の方まで用ひこむなんて」

「だつてかゝつてしまつたんですもの」

此一句を弓子は自分でもなさけなささうに悄れ切つてつけ足した、そうして今まで生々として𛀆た顔が急にかうも變るかと思ふ程白らけた顔になつてしまつた。帳面を持つて來て橫になつてゐる夫の前に置くと急に子供のやうな、ふざけたやうな、其くせ意地になつたやうな妙な表情をして夫の瞳を見つめたまゝだまつてゐた、夫は少し笑ひ出しさうな顔をして弓子を見てゐたが「困つた奴だ」と獨言を言ひながら帳面を見はじめた。

「おや、此間しづさんを連れて行つた費用は二圓の筈じやあないか」

「だつて二圓じやあ足りなかつたんですもの」

「それ、それだ、あんなに言つて出て行つたじやないか、此度こそこれだけでして見せるつて獨言にまで言つて出て行つたじやないか、そして又何故こんなにかゝつたんだ」

「だからそこにくわしくつけてあるわ」

二人の聲はだん〴〵いら〳〵して來るのであつた。

それは此度田舍からたのんだ「しづさん」が、藪入に行くのに東京には別段親戚もなし一人で遊びに行きたいにもまだ東京の勝手が分らないといふので三越と淺草に弓子が連れて

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

行つてやる事に夫と二人で相談した。毎日毎日の天氣で暑いから朝早く出かけて三越へ行つてそれから淺草へ廻つて活動寫眞でも見せて三時頃片日影がついてから歸るといふ豫定で、電車賃が幾何、お晝飯が幾何、活動が幾何と計算して二圓あれば間に合ふと弓子は受合つた、さうして家を出る時は弓子は「此度こそこれでやつて來る」と自分で自分に誓ふやうにして三ッになる一人娘を連れてしづさんと一緒に出かけたのであつた。三越の門をくゞつて、二階に行くまではまだ其心持が心を領してゐた、三階へ登つて玩具の並んでゐる處へ行くと弓子は急に子供に玩具を買つてやりたくなつて來た。

「鈴ちやんおもちやがほしいの？どれがほしいの？」

此母親らしい言葉と其實行が、弓子の心をいかにも快くそゝるのであつた、子供は嬉しがつておもちやを選り分けた、弓子の心には其子供の嬉しい心持が直ぐに響いて來て一緒になつて踊るやうであつた、さうして自分も夢中になつてあれこれと玩具を選り出して、其なかゝらこれとこれを鈴ちやんに、と思つてゐるうちに政次さんの家の松ちやんを思ひ出して、こんな玩具をやつたら又どんなに喜ぶだらうと思つて別に一つ松ちやんの玩具も選り分けたのであつた、さうしてそれを買つてしまふと弓子の心はいかにものんびりと愉快になつて漸く遊びに出て來たやうな樂しさを感じはじめて來るのであつた。さうして其

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

明るい光線の下に並べられた種々の髪かざりだの色どりの美しい半襟だのを見せて其まゝ其所を出てゆくのが何んだか若い「しづさん」に對して可哀さうな事のやうに考へられてせめて流行の束髪のかんざしなと一本買つてやろうと前後を忘れたやうな心持でかんざしを一本買つてやつた、四階へ行つてアイスクリームをのんで外に出た頃にはもう數入にとゐてた二圓の金は勿論すんでしまつてゐた。

「アヽ私は又熱を病む人のやうになつてゐる又何をするか分らない」快くふわ〳〵と醉つてゐる心の一方にさゝやかな小さいつぶやきが起りはじめた、さうして例のやうにそれがやるせない快樂に醉ひひたつた心にひや〳〵と觸れて、どうする事も出來ない其熱に浮かされながら、はつきりとそれが悲しくて仕方ない心持を又味ひながら上の温室に無意識的に足をはこんで行つた、じり〳〵と暑くなつてくる十一時頃の日ざしを受けたガラスばりの室のなかに這入ると明るいサボテンの花の強い光が瞳を射たので弓子は全身勞れてしまつた、さうして其室から力の死んだやうな心をして出て來ると「アヽいやだいやだ、わづかかんざし一本、おもちや二つ三つ買つた二圓足らずの、金の爲にこんなに心配してこんなに自分を苦しめられて、又苦しんで行かなけりやならないなんていやだ、一度に百圓も買物をする人だつて今此人たちのなかに有るに違ひない」とかういふ考へがむら〳〵と湧

きあがつて弓子は何となくまわりのうよ〳〵した人を見廻した、さうして自分に線を引かれた物質生活といふものがいかにもみすぼらしくあはれになさけなく感じられた、けれども窓によつてエレベーターを待つてゐる間に、腦貧血でたほれた人の顔色が漸々なほつて來るやうに、其何んとも言はれない暗い、不平な心は自然に生々として來て「二錢だつて二圓だつて二百圓だつて「使ひやう」といふもの丶上からいつたら同じ理屈であらうから二圓ばかりの金でなんてそんな考へ方は愚だ、……そうして金の事でいろいろ苦しむよりも自分にはもつと苦しんでゐる事がある、又苦しまねばならぬ事がある」とそんなふうな心持が湧きはじめて、今迄の悲観してゐた自分が可笑しく思へたので青い勞れたやうな顔にちよつと苦笑ひが現れた、然し又其次ぎに、「買物をする面白さ」は今こそかくおさへ付けられて寵を失つた女のやうに力なくひそんでゐるけれど、これが此もの丶永遠の滅びではない、又いつか――恐らくは近く――猫のやうな忍び足で、そろりそろりと頭を持ちあげて、ついには一時身の内のどのやうなものも其勢力の下に虐げられてしまふ程の暴力をふるひ出すといふ事は、あまりにはつきり弓子の心に分つてゐた。さうして又、そこまで行つてからでなくては眞實の心持にどうしても歸る事の出來ない自分が思はれて弓子は思はず涙ぐんだ、どういふ自分なのだらう、かうした苦しい同じ事を幾度も幾度もくりかへし

て來た、さうしてまだ此先きおそらくは死ぬまで此くりかへしは續くであらう、それはたゞに金づかひの事ばかりではない、弓子の生活は一切が此循環である事を思つた、はしやいで騷いで止むに止まれない發作のやうな心で輕はづみな行爲をして、そこまで馬鹿を知りながらつくして、さうしてそこで毒瓦斯を吐き出した後のやうな淸らかさと嵐の去つた後のやうな恐ろしい程の靜かさ淋しさにかへつて、自分を打つて打つて打ちのめしたく、悔と恥と責めとにさいなまれ、新らしい聖い考へ深い生活をたてなほさうと心から振ひ立つのであつた。多くの事に吃驚する程從順に、毎夜の祈りにも全身打ち出して唯神の御心のまにまに導き用ひ給へと長い祈りを捧げるのであつた、それだのに、何の連絡もなく時々に、もう全身どうする事も出來ない力をもつて發作のやうにはしやぎたつ心がおそつて來る、さうして弓子は又かと深い絶望の底に沈みながら其魔力にかゝつて自由を失つてしまふのであつた。百年の難行苦行ももろく一瞬にくつがへされてしまふ、其宗教的物笑ひのそれを弓子は自分の内外生活の凡べてに苦く持つてゐるのであつた、シヤヴンヌの繪に心靈を打たれて見入る心が眞實にあるのになほ歌麿の繪は時に弓子の魂までも赤いまぼろしに掩ふてしまふ、それをどうする事も出來ないのを弓子は深く悲しんでゐるのであつた。

かうして弓子は其日にもそれからもう制する事の出來ない心持で淺草へ廻つてお晝飯を

すませて水族館に這入つたり活動を見たりして五時近くに家に歸つたのであつた。そして費用は五圓をこしてゐるのであつた。

「ほんとにどういふんだろう、お前は馬鹿か？……ちり紙まで通帖でとつておきながらそれで毎月の小使が十五圓も二十圓もかゝるなんて、こんな小つぽけな家でこんなに小使を用ふ家が有るか聞いて見い」

弓子は口を結んで椽の柱によりかゝつたまゝうなだれてゐた。

不思議と其晩は風がサヤ／＼と吹いて何んだか秋の夜のやうな感じのする夜であつた、丸い月が明るく家のなかまでもさしこんでゐた、弓子は自ら何んともしれない涙がポタリとおちた、夫が又いつものやうに經濟といふ事について、又主婦の勤めについて本を讀むやうに説いてゆくのを聞いてゐるのが如何にもつらい事であつた、それらの事は皆弓子自身も讀んだり聞いたりして知つてゐた、けれども其、夫の考へ方は餘りに古く、弓子みたやうな女にあてはめようとするには滑稽な程舊式の事であつた、弓子の夫も日頃はそれ程までに弓子に實行を求めはしないのであるが一つ何かの事が有つて弓子を責めはじめると定つて「女大學」のやうな事を求めたり説いたり始めるのでそれが弓子を心服させなかつた、さりとて弓子は今の自分を決して善いとは思ふのではなかつた、自分の足りないだらけの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

家政には自分で愛想がつきはてた、例へば一日、或は半月、つゝましやかに送る事が出來たとしても、一度沙漠嵐のやうな發作がやつて來る時、一切は根こそぎくつがへされてしまふ、それを思つて弓子はやるせない涙が止め度もなく流れるのであつた、人に言はれるまでもなし、自分で自分が其爲に始終苦しめられ苦しんでゐるにも拘らず何故彼の發作は自分の身の内に底知れぬまで深く喰ひこんで根をはつてゐるだらう、自分はもう到底さういふ生れつきの人間でそれを正す事は出來ないのだらうか、と弓子はこゝまで考へた時、「罪を犯さゞらんが爲には自分のやうなものは死なゝければならないのではないかしら」といふ事が眞面目に考へられた、さうして太い溜息をついた。

弓子の夫はそれが自分の言葉が多少でも弓子を感心させたと單純な考へ方をして一層熱心に婦道といふやうなものを說きだした。

弓子はそれを輕蔑する譯ではなかつたが、かうまで奇形な神經を持つてゐる自分といふものに本よみのやうな婦德などを說いてそれでそれが正されるものと思ひこんでゐるらしい「夫」といふ人を思ふと、あまりに理解のない心と心の寄り合つてゐる其「家」といふものも非常に淋しくなさけなく、弓子には自分自身も夫も、從つて家といふものもみなそれ〴〵にたまらなく絶望なものに思へて來るのであつた。

いくら言つて聞かせても返事をしないで弓子がだまつて考へこんでゐるので夫は又此度は自分の言葉に反抗してゐるのかと思つて直ぐ腹を立てゝしまつた、さうして強情な女、反省のない女だといつて罵しつた、弓子はそれもなさけなかつた。

「お前の終りはきつと悲慘だよ、おれはさう思ふ」

夫はしまひに投げ出したやうにかう言つて横になつた、弓子は夫はどういふ意味であれを言つたゞらうと思つたが、どんな意味にしろ弓子はそれは事實であらう！とさう思はれた、もう自分が長生きをするならば、自分の老年は悲慘なものだらう、少くも此まゝでゐるならば確かな事だと思つて弓子は暗い心にとぢられた、到底自分には家庭は持てないと絶望的にかう思つてもう默つて此まゝ此家を出て山のなかでお寺か何かへ行つてしまはう、さうして苦しむとしても樂しむとしても自分一人の心にまかせてまがりなりにも自分の心の道を歩いて行かう、それはお金もないし今よりもつとみぢめな生活に相違ないけれど、こんな自分を此家に養はれるのは夫に對してはすまないし、自分の心もためきれないで苦しい型にはまれない、もつとみじめな生活でもこんな離れ〴〵のものを合せやうとして合はない家に人を苦しめ自分も苦しんでゐるよりまだよいやうに思はれて來るのであつた、然しそれではどうしてそれを實行しやうかと思ふに至つて弓子の心には子供の事や

思ひがけない程入りまじつてしまつた其他の心持が思ひ切つてさあそれでは「今」、といつて立ち上れさうもないのに氣がついた、弓子は苦しく自分のどちらに行くにも生地のない心に怒りが燃えた「こんな自分は何の爲に生れて來たのだらう、何の必要あつてかうして生てゐるのだらう」といふ心が一杯になつて來て弓子は目を据えて指をかんだ。

夫は眠つたふりを裝ほひながら時々細い目をあけて弓子の樣子をぬすみゝをしてゐた。ヒヤ〳〵した風が時々二人の間に投げ出されてある例のレターペーパーの帖面を吹き動かしてゐた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

姉—久保田富江

半年振りでお盆の夜實家の閾をまたいだ姉のお美代を、お久が玄關に迎へた時、何も云はず目を見張つて突立つてしまつた。

お美代は妹の前でも怖づ〳〵した容子をして笑つて居た。

「まあ。來たの……」

とお久は漸く斯う云つてから初めて笑顔をして、姉の脊に縛り付けられた男の子を見遣つた。其の子は面長の目付の好い子だつた。

「誰だい？」

奥の火鉢の傍からかすれた母の聲が聞えると、お久はちよつと姉を押えるやうにして急いで奥に驅け込んだ。

「誰だい？」

母は今一度お久を見上げて聞いた。お久は中腰になつて母の耳に口を寄せた。

「米田のが來たんですよ」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「おや！さうかい」
皺の多い母の顔に意外の色が漲ぎつて、浮腰になつたが直ぐ冷めたい目色をすると落ち付いて煙管を取り上げた。
「姉さん此方へ來ると好いわ」
お久は母の顏色を見い〳〵其所に立つた儘呼んだ。
「お無沙汰しちやつて……」
と癖のやうな笑ひ聲を出し乍ら、大きい包みを下げて入つて來たお美代を見ると、流石に母は顏色を柔げて、
「來たかい」
「どうも御無沙汰しました」
「はいお暑くなりました。どうしたい？子供等は……今日は一人限だね。おゝ大きくなつた。おや〳〵此の子は好男子だね。雪夫より倘好い子だ。何ていふ名だつけね」
「豐つていふんです」
「あゝさう〳〵。豐ちやんかい？お前は好い男だよ。おんりしな。おんりしな」
母は獨りで景氣好さ相に饒舌つてお美代の顏は故意と見ずに子供をあやして居た。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「暴ん坊で困つちまふの！」

と子を下ろし乍らお美代は始終愛想よく、そしてハラ〳〵して物を云つた。包みから中元の砂糖袋が出された時母は、

「そんなことしなくても好いのにさあ」

と嬉しくもなく云つてのけた。

お久は其の袋に（米田欽三）と姉の亭主の自筆で書いた紙切れの張り付けてあるのを見て不圖不思議な淋しさを覺えた。そしてお美代の背立つて貧相な顔を見詰めて居た。髪が引詰めの銀杏返しでバサ〳〵してゐる。燒けたやうな素顔の目が大變窪んで、何だが病み上り見たいだ。それでも綺麗な縮みの着物を着て、子供にも上等の風をさしてあるのが、いくらかお久の若い心を安心させる。

お美代は他にせんべい袋と、お久にと束髪の簪の箱を取り出した。

「まあ美しい！」

お久は氣の毒げに受けて箱を開けて見た。ぷんと好い匂ひが鼻を打つ。

「何？好い香り」

「鶴香水が殘つてたからかけて來たの」

「あら道理で……好い匂ひだ」
とお久はにつこりして丁寧に机のひき出しに仕まつて來た。
母はまとまりの付かない世間話しなどして、空つぽ向いた心持をまぎらして居た。
お美代は只出る暇がなかつたもんだからとばかりを幾度も、辯解らしく云つた。お美代に抱かれた豊は未だ口もきけないでちよつと人見知りをする。父や大きい兄の前では氣詰りでならない樣をしてゐるお美代は、子を皆に親しませようとして汗を流して居るのが、お久には氣の毒でならなかつた。
父も兄も、お美代の子供達を深く愛さない理由も知つてゐる。ちよつとばかり呵責めるやうに弄かつて其所をどいてしまふのが、却つて輕い安息を吐く位だつた。お久はまた麗々と書いてある米田欽三の四字を見た。いく度見ても變な氣分に襲はれる。其のあとにはきつと、姉が氣の毒とも母の素つ氣ない容子するのが無理ぢやないとも考へられる事を思つた。
母の心はお美代と逢ふ前まで、過去のある憎しみでいつぱいになつて居た。
――それは去年の暮れのことであつた。
お美代の亭主は極く氣の強い意固地な男で、お美代が嫁いでから家は間もなく殁落して

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しまつたが、强情な欽三は決して他人に便らうとはしなかつた。殆んどあらゆるおちぶれた商賣を行つて見て、一つも思ふやうにならずにしまつたが、どうしても成功して見せると口癖のやうに言つて居た。その勝つた氣性は賴母しかつたけれど四五年前迄は、やゝもすれば苛酷な眞似をしてお美代が泥濘に髮の毛を掴んで引きづられたと、夜中に泣いて來たことも幾度かあつた。そんな度每にあとで母が愚痴つぽく、お美代の總領の雪夫に、「お前の母ちやんはお祖母ちやんの大切な娘なんだよ、お靜叔母ちやん見たいに若くて綺麗な時分、澤山着物を持たしてお前の所へやつたのに、父ちやんは皆なくしてしまつたらう？そして何時でも打擲つたり何かして非道い目に合せるから、あの母ちやんをお祖母ちやんとこに返しておくれ」

などゝ其頃五つばかりの子に斯んなことを聞かせた。悧巧けて利巧な雪夫は大きな目にいつぱい涙を貯めて默つて居た。

そんなことは忙はしい母の胸から何時となしに消えるやうに忘れて行つた。欽三も貧に馴れたしお美代の苦勞して來たことを想つてすつかり氣が折れて、大變お美代を大切にするやうになつた。其の後はどんな辛い苦しい事があつても、お美代は實家に心配を掛けには來なかつたし、漸く此の節盛り返して來たので、皆はつと一息した。それでも實家から

受けた世話は一通りぢやなかつた。

欽三の心中は今迄他人から見くびられて居たのにモヤ〳〵苛立つて、景氣付く程昔の豪慢が更び戻つて來初めた。何時かお美代の父から借りた金が、何年たつても返せなかつたのを、少し都合の好い道を見付けたら手に現金を握らないうちに、馬鹿に氣が強くなつて今にも叩き返して遣ると云はないばかりの有樣だつた。恰度折も折、不圖した事からずつと以前に雪夫に對して母が云つたことが欽三の耳に入つて大きに憤慨してゐると、或る者の話に依つてお美代の實家にうるさいことを傳へた。それは母一人に對して欽三の曲解から罵りがかゝつて居るといふ。

「何でも雪夫が饒舌つたんだらうよ。こんな事云つてたつて。お前の母さんは家の子だから着物も何も返しておくれつて……そんな事云はなくても好い、そりあお袋のことで家に來てもお靜の亭主の惡口を言ふ位だから俺れの事などどんなに他で惡く云つてるか知れない。どうせそんな事を氣にしやしないが、一度嫁けて米田家の者になつてるものを、着物を返せなんて云つてくれちや困る。殊に彼んな小さい者に云つたと、米田の方ぢや大騷ぎだとさ」

と或る者から聞いたお美代のすぐの兄がこう云つて告げた時、母はそんな覺えは無いと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

不思議想にした。

「有つてよ、有つてよ。着物を返せとは云はないけど母ちやんを返してくれつて、お母さん確に云つたわよ」

お久は其れを幽におぼえて居たので母が思ひ出すやうに口を添えた。

「左様だつたかね。そんな事で怒つてるんかい」

「それだけぢやない。何時か借りた二十五圓もね、もう直きに何百圓とか他から工面する事になつたから、出來たら第一にお袋の顔に叩き付けてやるつて云つてるとさ」

「へえ。まあ彼奴は一體何を恨みに思つてるんだらうねえ。それつばかりの事で……えそりあお前、娘等の亭主にろくな者はないから何方かうまく納まつて居る方へ行つて愚痴を云ひたくなるぢやないか。彼奴だつて以前の事を考へたらそんな生意氣はいはれた義理ぢやないよ」

母の顔には老いた者を苦しめるなんて情ないといふやうな色が浮んで居た。そんないさくさが毎日の樣に家中に繰り返されて母は欽三を此の上なく憎み出した。母の憎しみは第一物質上恩を着せたことから初まつて居る。長兄はそんな卑しいことは云ふなと何時も叱りつけてゐたけれど、母にはこんな事でもいふより他欽三を遣り込める工夫がなかつた。

「金を返して呉れゝば有難いやね。今のやうな渇して居る時には十圓でも好いと思つてる位だからね。叩返されたら左樣ですかと受け取つとくよ」

と負惜しみらしい言葉も蔭で漏らした。

暮れにお美代が歲暮を持つて遣つて來た時、

「何だつて？欽三が威張つたさうぢやないか」

と長兄はだしぬけに聞いた。母はもう耐えられぬやうに馬鹿にしてゐるあんまりだとお美代を責めた。

「いゝえね。別に金を叩き付けるなんていひはしないけど、返さないうちは何も云ふ事が出來ないから今のうちは何事も我慢してるつていふんですよ」

「何を我慢する事があるんだらう。隨分私のことを惡く云つてるさうぢやないか。今迄散々世話して遣つたことを忘れてさ」

「そりあ世話になつたわ。世話になつた事は」

「それに欽三は金さへ借りなきやどんなことでも恩ぢやないつていふさうだね」

「だから金を返した上でなくつちや云はれないつていふの!! 欽三だつてそう云つてるわ。

安田の親父や兄貴はまことに好い人間だけれど、お袋はどうも彼あした人だから例へ何と

いはれてもかまやしないけど、小さい子にあんな事を敎へてくれなくても好いつていふんぢやありませんか」

お美代は泣き出し乍らつけ〳〵云つた。

母もお久も此の時は寧ろ呆れてそれを眺めて居た。父も兄も沈默つてしまつた。

「それだが私が欽三のことを他へ行つて惡くいふなんて飛んでも無いこつた。四五年も以前ならいざ知らずね、今ぢや賞めて居る位なんだよ」

「いえ昔はいろんな事は有つたけれど、今になつて云はないでも好いつて……」

「何時私が何と云つたい?」

母も聲を震はして口惜しがつた。

お久は此の時許りは姉が憎くつてならなかつた。

「そりあおつ母さんがお靜姉さんところの人のことを惡く云ふのも、皆此の姉さんの時の事を忘れてるからでせう? 仕方がないわ」

とお久は何方とも付かずに斯う云つた。

「あゝさうさ。忘れてるから仕方がないのさ」

とお美代は涙を拭き乍ら其の話を切り上げた。其の日は何となく打ち解けない氣分で、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

晝の間にお美代は歸つてしまつた。

「もういくら肉身の娘でも、あゝなつちや親に情も何もありやしない」

「すつかり亭主付きになれるんだから駄目ですね。あの權幕たらどうでせう」

父と母はほつとしてあきらめたやうな心を顏に表はした。

後にまた或る者から、

「お美代がそんなに遣り込めて來たなら、俺れは來春になつたら笑ひに行かうかな」

と欽三が誇り切つて云つたといふことを兄の口から傳へられた。然し欽三は兎も角お美代も子供も遂に一度も來なかつた。

「態あ見ろ。何たつて怖くつて來られないだらう。馬鹿者共つ」

と安田の者等は嘲笑つて居た。お久のすぐ上の兄は麻布迄使ひに行つた途中、米田の家の前を通つたら、雪夫が居たので呼んだら白眼めて中に引込んだと、プン〳〵怒つて歸つて來た。

「ほんとに親があゝだと子供まで憎くなる」

と皆が一しよになつて云つた。――

そんな理由で無音で居た今日である、お久は姉にちやほやする事も出來なければ、母の

素つ氣ない樣に同化することも出來ないで苦しんで居た。
それでも母はお美代に壽司を取つて遣つたりして、しまひにはホイ〳〵云ふやうになつて來た。
「久ちやんは今裁縫してる？」
とお美代はきいた。
「いゝえ。何もしないで此の節は書物ばかりよんでゐるわ」
「此の子はお靜の所からも賴まれてるし、家のも澤山つかへてるんだけれどちつともしないんだよ」
母はちよいとお久を白眼る眞似をしたので、お久はついと立つて自分の部室に行くと、本箱から原稿を澤山引出してすぐ戻つて來た。
「これだけ書いてあるの」
「それぢや作家になるつもり？」
お久は美しく笑つてうなづいた。
お美代は頁をバラ〳〵と繰り乍ら、今度ゆつくり見せて貰ふといつてお久に返した。そして晩いから歸ると立ち上つた。

豊を手傳つて負はせてやつて、お久は母と共に格子口までお美代を送つて出た。

「久ちやん遊びにおいでね。ほんとに」

「えゝきつと行くわ」

お美代は歸りかけてはいろんな言葉を振り返つて殘す。それを何時までも受けて引き止めて置きたいのは矢張り姉妹だとお久は思つた。

格子を閉めても物を云つてゐる。お久も母も奥に入つてしまつた。

「お前に遊びに來いといつても私にや云はないね」

と母はつぶやくやうに不滿な聲を出した。お久は鼻先で笑つて居た。

「治ちやん。治ちやんちよいと……」

とまた表でお美代が呼んだ。お久の弟はぬーつと表へ出て行つたが、暫くごちや〳〵云ひ合つてる聲がすると弟はニコ〳〵して戻つて來た。

「ね、おつ母さん！」

さも大事の秘密でもあるやうに母の耳に口を寄せて掌を見せた。

「どうしたつて？」

お久は覗き込んで聞いた。治夫の手には五十錢銀貨と十錢玉が載つて居る。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「呉れたの？」
「私に五十錢呉れたよ。あれでも親と亭主の間に入つて上手くやつてるんだよ。此所ではきまりが惡いもんだからねえ……」
「あたいが十錢貰つたんだ！」
「さう……」
お久は何だか悲しくなつて來た。それ限り何共云はず壁を見詰めてぢいつと考へてゐるうち、目先が熱くにぢんで來るのを知つたのでふいと椽側に立ち出た。
「こんなにまでして機嫌取つてゐかと思ふと可哀想になるよ」
と母はしんみり後で云つた。
お久は柱に寄り掛つて今の姉の老けた貧しい姿を何時迄も頭の中に描き乍ら岐阜提灯の絶えぐな灯のまたゝきを見詰めて居た。
隣りの庭でお迎ひ火をたいて居る。（をわり）

――（四、七、一五）――

青鞜詠草より

その一　日枝みどり

花柘榴緋にもえたてるそのなかにあななつかしや御聲こもらひ
空あふぐそのならひさへうれしさなれる窓べの柘榴緋にさく
おほぞらに光みなぎれりまたれつつ胸おどりつつむかふ緋ざくろ
はれわたる空はうれしもまたれゐてもゆる柘榴にしたしめりけり
汝がすめる家の柘榴の月あかりさそはれいでてすぐかへりきぬ
ひさすぢに心汝にゆくまひる間のざくろ張りきれむばかりなりけり
ふさりゆく柘榴さびしやうつそみにひさささもえし心をおもふ
うつそみにもえてあさなき思ひより青きざくろの日ざしさびしも
青青しざくろの實よりさびしさのわきてすべなく夏ふけにけり

その二　石倉ささ子

ふけし夜のねざめの床のひろびろさなほ戀しさのまさりくるなる
わすられぬ人をばすでにわすれつここさはり顔にいへるはかなさ
小夜ふけてひさり巷にわがたてば星のなくさへきくここちする
名もしらぬ人にはあれどそのをりのやさしきおもはわすれかねつも
はしりさる汽車のなかなるおもかげをおひて果なきわれのさみしさ
雨の音の底にめざめてゆくりなく君さのがれし温泉をなつかしむ

その三　土橋兎子

青きかほ髪のみだれのものすごき鏡のわれにこころをびえぬ
たらちねさわかるるごさきおもひしてさりしは何時ぞ濱の松原

その四　楡木まさを

山ふたつその谷ぞこの停車場に夕日さびしも汽車うごくさき
丘さびし四洋人がくちぶえをふいてすぎゆくをそ夏の丘

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

村の精神病者と生兒——生田花世

此夏は清一と一緒に國に歸らう、かう思つて田舍にも知らしたり、友達にもさう云つたり、自分もその氣でいろ〳〵と準備もしてゐましたのですが、世の中の事は本當に思ふ儘にはなりません。種々の事情から餘義なく延期しなければならなくなりました。でも、私にはその延期がそんなにいつまでも愚痴が云ひたい程に氣に染まない事にも思はれません。無理をして歸つたところであまり好くもない、自然に樂に歸れないのは、寧ろ歸ることが不自然なので、もつと適當な時さへ待合したなら、勞せずとも流れに沿うて降るやうに自然に歸る事が出來ようと私は思ふのです。單純な私は直ぐ樂天家になるのです。

けれども村の事を思ひ浮べずには居られません。今夜も亦さうなのでございます。日が暮れてから打水をしましたので、朝顏の青い葉や撫子の紅い花やコスモスの細長い莖や芝草の若芽等の上に露のきら〳〵するのが見え、それらのものが座敷から照らす電燈の黃ろい光のために巧妙な明暗の曲を奏でるやうに戰いでゐる、と夜風がざわ〳〵と吹いて來て植木棚の端れの硝子製の風鈴をちろ〳〵と鳴らせてゆきます。かうした情景にうつとりと

心を浸してゐると、もうすつかり村の事を思ひ出して居りました。

『村』と云ふ音の出し方が私には非常にしんみりとした夢幻的な快感を呼び起します。村の事をぢつと思つてゐますと、どんな現在の辛い罪でも慰められて來ます。然かも村は私の幼少時の幸福の水を湛へた壺でゞもあるやうな感じがいたします。この壺の蓋を取ると私の幼少時の幸福な事がきら／＼と星のやうに一つ一つ光り始めるのです。

村は私にいろ／＼の物語を蘇生(よみがへ)します、小山の上の土辷り、麥生の中の燕の巣、若宮樣の祭禮、葬式、女をひき殺した水車小屋、さては村の人々の死亡や出産や、疵我や、爭論や、婚禮や、發狂や、身投げや、そんな人生記錄(ヒユーマンドキユメント)が、——然かも都會人には決して味はれさうもないアダム、イヴの原始さをもつて——私の記憶力の前に展開してまゐります。その中の一つの興味のある事を私は今こゝに書き付けようと思ひます。

それは丁度今夜のやうな涼夜でありました。空には唯今のやうにまるい月が——多分今日がその日だつたかも知れないのです——七月の十七日の夜の月が、山峽を照らして、谿の流れが、どう／＼と響いてゐる時でありました。つひ自分の家から十町とは離れてゐな

い母親の里家へ私は遊びに行つてその歸りでありました。女中に送られて馴れてる道の事ですからすた〳〵と道を歩いて、昔は大蛇がゐたと云ふ五抱へ位――當時八歳位であつた私たちの手で――もある若宮神社の松の下の路まで來ました。そこの暗澹とした莊嚴な景色はちよつとどう云ひ現はしていゝか言葉が見付かりません、何でもその松の大木の枝が向ふの小山の頂に伸びて了つて、丁度地獄の入口ででもありさうな巨大な門を造り、根方を這ふ白蛇のやうな道路をふちどつて、隣村の用水がさら〳〵と如何にも山の清水らしい響きを立てて流れてゐました。黑く欝蒼とした森の中の神殿は奥深く見えず時々梟が鳴きました。然しこの暗い門を出離れると眼界が一時にぱつと展けて村で一番廣い田や原が水色に澄み切つて見えるのでした。

少からずそこは怖しい處なので二人とも四方を見ずにすた〳〵と歩いてゐますと、水色に見える田の畔を傳ふて白いもののかげが動いて來るのでした。

「竹さん、何やら來る！」と私は脅えて顫へ聲で云ひました。すると竹さんもちよつと怖さうにぴつたり立止つて眼を凝らしてゐましたが、やがて落着いたやうに云ひました。

「人間ぢやがな。嬢(ちやん)！」

二人は無氣味に自分の足音などに胸を冷やしながら一町ばかりも歩いて小山の端のこん

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

もりとした木群の路の十字路まで來ますと、白いものかげに見えた姿も小畔からそこへ上つて來ました。私たちの草履の音がばた〳〵としました。けれどその女は裸足でしたからもの音もしませんでした。

「孃、お粂ぢやがな」と竹さんはひそ〳〵と袖を引いてさゝやきました。私は化物の正體が分つたと思ひました。けれども決して落着いたのではなかつたのです。このやうな寂寞とした山の蔭で、薄青い狂女に出逢つたのですから。

二人が身を忍ぶやうにして女と行き違はうとした時にぴつたりと女は立留つて二人の道を塞いでげす〳〵と笑ひ聲を立てました。

「丸平の令孃だらうでがな」

「お粂はんでか。今晩は、もうお歸りよるんでか。町へいつとつたんでか？」とお竹は恐怖のために自然と言葉を多くして訊ねました。

「私はなあ、唐太はんくへ手傳に行とつたでわ。」

「忙しいだらうな」

「うんにや、そんな事があるでかだ？」

そして彼女はすた〳〵と歩いて遠ざかりました。せうづかの婆もあんなだらうかと私は

お竹にさゝやきました。するとお竹はしつと叱りました。それが聞えたかと思つたのです、蓬々とした赤毛の髮と、尖つた顴と、ぎら／＼した眼とをもつた中脊の姿がぼうつと月夜の暗がりにすつかり消え去つた時、その甲高い聲と、たえず打振つてゐた首とが、ぞつと物凄く私の手足をびくびくとさせました。

「孃（ちやん）、怖（おそ）ろしかつたでかい」

「えゝ、ほんまに恐（おそ）ろしかつた」から云つて私はお竹と顏を見合して吐息をしました。

狂人（きちがひ）のお粂の家は若宮神社の松の下の路からまだ／＼十町ばかり奥の、和泉寺の下の用水に沿うて細い谷の土手を傳つていつたところの山峽（はざま）の左側の山麓の松林の縁にたゞ一つ建つてゐました。建つてゐると云ふ事が出來ませうか。それは唯荒々しい松の枝を引結んで四方を山土で塗つて、荒莚をしいてあるばかり、土竈（へつつひ）を一つ築いてあるばかりの穴倉のやうなところでありました。私達はせんぶりや（藥となる山草）や茸（きのこ）を取りにその山に入つた時には大抵お粂のこの家へ入つて見るのでした。惡戲（わる）い男の子などは、お粂の留守を幸にして、鍋の中や薄團の中に石や、馬糞や、殺した蛇を投げ込んだりするのでした。

誰がお粂のためにその家を造つたのかは知りません。しかしその地所は西地のものでした。そして西地は私の母の里家であつたのです。お粂には親戚も兄弟も何もありませんで

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

した。殊に阿波の女ではなく、峠のむかふの讃岐の引田港のものでした。

お兼が雜魚賣商や奉公人達とともに峠をこして阿波に來ましたのは彼女の廿五位の時で酌婦をしてゐた事もあつたり、いろんな憂目に逢つてゐる間に、男にひどく欺されたのが元となつた色情狂だと云ふ事が私の村の人によつて傳へられてゐました。病氣が昂じた時には、道路の若い男を追ひ駈けるのでした。病氣の薄らいだ時は上手な、なめらかな優しい聲で歌を唄つたり、踊つたりして見せました。

お兼はとう〳〵讃岐の引田の町よりも、阿波の山峽の村の方がよくなつたものと見え、いつの年よりか歸らなくなり、若宮神社の松と對ひ合つてゐる小山の上の祇園の祉で寢起きするやうになりました。けれどもそれは村の人の嫌がる事でしたから、村の寄合の時の相談で、ずつとあの山奥の水源に近い西地の山の麓にその家を拵へてやつて住むやうにさせました。そして田植や、田草取やいろ〳〵の野良仕事に雇つてやつては、麥や着物を與へました。そのあひまには松葉を掻いて町へ持つて行つて、金にしたりしました。それで病が起らないと、お兼は重寶がられました。

お兼は色は薄靑くなつてゐた――それはもう構はなかつたからで――けれどその皮膚は細かで、眉の濃い、元は中々美い女である事が窶れた顏にも殘つてゐました。寺の庭で每

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

年催される盆踊りには、いつでも眞先になつて踊り狂ひました。すると村の若衆はお兼を笑はせたり押し倒したり抱えたりしては笑ひ興じました。さういふ時、お兼は正體もなく喜んで跳ね上がるのでした。山門のあたりでわあ〳〵と云ふ子供達の喚き聲の起る時にはお兼が、惡戯い若衆の人々に仰向に倒されたりして笑ひ狂つてゐるのでした。

丁度私が九つの時だつたと思ひます。

「お兼の腹のふくれてるのを見いや、孕んだのぞよ」かう村の者が口々に申すやうになりました。その中にお兼の姙娠はもう隱す事が出來ない程臨月に近付いてゆきました。

あの狸の穴のやうな暗いところへ、あの寺の下の暗い用水土手を傳うて、誰がそんな不氣味な色事をしたのであらう。村の若衆の誰か彼かと噂を立てられましたが、流石に盆踊の夜や、祭りの晩には抱いたり倒したりした若衆達も一人として相手らしい證跡をもつてゐませんでした。けれどもお兼はそれを隱しませんでした。

「お兼はん。お前はんの男は誰れ？」

かう云つて訊ねたものがありました、するとお兼は待ち設けたものの樣に云ふのでした。

「私の男でかな。木を樵りに來る人でわな」

それは山峽に入り込んで小屋を造つて働いてゐる隣村の樵夫達の事なのでした。しかし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

多くの樵夫の中の誰であるかは分りませんでした。

「私の處へ來て泊るんぢやけんど、どんな顔をしてゐる人やら私が知るでかな」

それはお粂の云ふ通りでありました。宵暗の間に忍び込んで、朝闇の間に潜りぬけて山に歸つてゆくので男の顔がお粂には分らないのでした。

「お粂が子供を生んだ」

かう云ふ事が村中に知れた時は誰も彼もが見に行きました。私も亦四五人の子供達と一緒に家を覗きに行きました。その穴倉の中からは本當に、赤子の鳴き聲がきこえました、狂女がこわいし子供は見たいし、あちらこちらとうろ／＼してゐた時、丁度山から歸る女連れに見付けられて叱られて連れ歸られました。

ところがお粂の身體が肥立つてからは二三日とはたたない中にその生れた子供はお粂の小屋の中に見えなくなりました。怖れて誰も訊ねませんでした。お粂は產の前後ともに氣が荒くなつて居りました。

すつかりお粂が落着いてから村に出て來るやうになつた時、女達がその子供の事をたづねました。と、お粂は無雜作にげす／＼笑ひました。

「谷に放つて了うたんでわ」

「お兼が子供を谷に投つた」

かう云ふ話が村中に傳はつた頃でした。私たち、七八人の子供は、毎日々々、怖ろしい好奇心から村の谿を下流へ上流へ夢中になつて探し歩いたり、幟が淵とか、天狗が淵とか云ふ青黒い渦の巻く深い淵を岸から見下したり、白い岩の頭をさうかと思つたり、烏の降りてゐるのをさうかと思つたりしたものです。

七重に山の折り重つた山脈は夜露にまつはれ、夜霧はまた、折柄の月にぽつと白い。地球の生物の寢靜まつた深夜に山はかつと眼を見開いて、色情狂とその生んだ兒とを見守つてゐる。

お兼はぼろぎれに包んだものを抱へて、畔を傳つて谿の方へとゆく。そこは二年程まへ粉屋の女房が、水車の齒にはさまれて八裂となつて碎けて吐き出された水車小屋の水口の崖にそひながら、なほも岩を飛んだり、登つたりして幟が淵の方へ、骸骨のやうな尖つた後影と、猿のやうな身輕い素足とをもつて歩いてゆく。

泣聲が起らうとする。その聲の洩れた時、お兼はぼろぎれを、はたと岩に打當てたりさら〳〵と流れてゆく水に浸したり、自分の足が、水苔に辷つて轉んだり……

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

山は上からきちがひとぼろきれとを眺めてゐた。

今から四年前の事でした。私が歸省した時お兼があの小家で病み衰へて死んだといふ事を聞きました。何の病氣で倒れたのだかそれは知りません。お兼の小屋はそのまゝに置かれてありました。

父の墓參りの歸りに西地の前の山から北の方の山峽を見た時、山裾の松林の陰に、便所ででもあるやうにお兼の小屋が灰色に見えてゐました。稻の黄色い實りの輝く中に含まれてゐる山地の秋が身に迫るやうでありました。

今年歸る事が出來てゐたなら、清一と二人で私はきつとあの山峽を見るのでしたが、しかしお兼の小屋は今も猶あるでせうか、それは私に分りません。(八月廿二日稿)

七月末の日記より

濱野雪

手術臺に上つて眼をつぶると、もう頭腦の底がズーンとしてくる。でも〻う今日限りだ――さう思つて、じつと息をつめてゐた。

ほんたうに齒の痛みといふものは苦しいものだ。齒を病んだ事の無い人には、とてもとても想像もつかぬ位堪らないものだ。私はかなりその苦しみに馴れてゐる。けれど、馴れるといふ事が少しも苦しみを減らしはしないで、一層ひどくするやうだ。實にたまらない。

ジー、ジー、と不快な音を立てながらエンジンが齒に觸れる。なんといふいやな音だらう。私はあの音を聽く度に、齒を削るのではなくて、心のそこの神經を削られてゐるやうな氣分になる。ひよつとしてそれを一時間も續けられようものなら、きつと昏倒するかも知れない。堅く組合せた手拳にも、額から背にも、タラ／＼と油汗が滲んで來た。

「さあ拔きますよ、今日は大丈夫ですか」

笑を含んだ先生のお聲がした。私は二度も三度も腦貧血を起した、意氣地なさを思出して恥づかしくなつた。笑はうとしたけれど笑へなかつた。けふでもうおしまいだ――亦さう思つて、三本目の齲齒の神經を拔かれるのをじつと堪へてゐた。

チリチリと微な鋭い音を立て〻、細い曲つた針が喰ひ込んで行く。刺すやうだとも、灼くやうだとも、何とも言ひやうの無い痛みである。私は私の胸が、大きな氷塊でものせられたやうに、重く／＼、冷たく／＼なるのを感じた。さうしてぎゆつと眼を閉ぢてゐるのに、鋼色をした細い／＼神經が、うろの肉からゑぐり出されるのがはつきりと瞳にうつた。――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「さあ濟みました」と言はれた時には、ほんたうにどんなに嬉しかつたらう。私はうがひをしながら鏡に映る面を眺めた。ひどく蒼ざめてゐる。さうしておしろいがすつかりはげてゐる。でも私は嬉しくてたまらなかつた。半月以上も惱んだ齒がすつかり癒つたといふ事は、思ふても／＼うれしかつた。

私はまるでこどものやうに、食べたい物をいろ／＼と考へて見た。

――十六日――

私は毎年きまつて夏まけをする。でも今年は大丈夫らしいと油斷をしたら。さう／＼やられて了つて、今日でもう四日臥つてゐる。時々ひどく熱が浮いて、足の附根がちぎれるかと思ふ程だるくて重い。右のこめかみのまわりだけが疼くやうに痛むで、飲んでも／＼咽喉がかわく。机の上の小鏡を覗いたら、唇が氣味の悪い程まつ赤に干乾びてゐた。

ほんたうに私はよく病氣をする。又虚病かなど〻冗談交りに言はれるくらゐ、病氣をしない月は殆ど無い。時には自分乍ら厭になる事もあるけれど、弱い意氣地のない私のこ〻ろが、ぢき病氣の陰に自分を隱したくなるのだつた。全く病氣をしてる間は可也自由だもの。うるさい周圍から逃れて、全く一人つきりで、好きな物思ひに耽る事が出來るもの。この意味で。むしろ私は病氣を喜ぶ氣味があつた。――それを卑怯だとは自分でも知つてゐる。奈何かして強くなりたいとは自分でも希つてゐる。けれど私はこどもの頃から弱かつた。弱い體は心をまでも弱くして了つたのらしい、私は年中病氣をしつゝけて、ほんたうにみじめな生き方をして行く。だから、見るから強健なからだを持つてる人と對つてる時は、何時も知らず／＼の間に壓迫されて、無意識のうちに輕い反感を抱く事が間々あつた。それが自分の好きだとか、崇拜する人である時はなほの事、寂しいやうなこ〻ろもちになる事さへもあるのだつた。――

私は小さい氷のかけを口にふくむだ。かすかな苦味が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

舌に殘つた。枕をひつくら返して右を下にしながら、障子を二寸ばかりあけて見た。松葉牡丹がいつぱい咲き擴つてゐる。昨年ほんの十株ほど植ゑたのが、ことしはびつくりする程ふえた。所々ひよつこりと、思ひもよらぬ位遠く離れたとこへ、一花二花づゝ咲いてるのが、なんだか哀れらしかつた。紅だの、黄だの、樺だの、紫つぽいのだの、さま〴〵に咲き比べてるのが、かなり生な色をしてると思へた。ちよつと新モスの友染でも眺めるやうな氣がした。

——廿一日——

夕方みんなが行水を使ふ時の騷ぎつたら無い。斯うして臥つてゐる時には(いつもは馴れつこになつてるけど)辛抱しきれぬ程じりじりしてくる。十五を頭に三人の男の子が、勢いつぱいはねまわるのである。私が叱つた位で止めるやうな、そんな生優しいあばれ方ぢやない。私はじつと耳を押へてゐた。と、ふと涙がにじみ出た。莫迦々々しいこつた——さう思ひながらもにじむまゝに任せてゐると、その三人のわんぱくどもが、揃つてまつ黒な顏へ汗しらずをいつぱい刷きつけて、すまして湯殿から出て行く姿が見えた。私は思はず笑ひ出して了つた。

——同じ日——

蚊帳を釣りに來たふさも、やつぱり汗知らずをまつ白につけてゐた。まじ〴〵と眺めてゐたら、浴衣の袂でぐい〴〵擦りながら。「みつともなうござんしよ」と言つて笑つた。その笑ひ方がひどく寂しいものに思へた。私は「いゝえきれいだよ」と言つて遣つた。そして、いくらおつけといつても白粉をつけた事のない、ふさの事を考へてみた。私とはたつた一つしきやちがはないのに。

——同じ日——

熱がすつかりさめたらしいのに安心して、午後から髮を洗つて見た。今日も九十度以上あるけれど、大分風があるので凌ぎよい。私はたゞぼんやりと窓の下に坐つて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゐた。

――丁度五時頃だつたらう、私はだらけきつた姿のまんまで鏡臺の前で髪を梳いてゐると、玄關に案内を求めるけはひがしたので、何氣なく振向いて見た。と、そこに眉の美しい、きれいな人が立つていらした。「あゝNさまだ」さう氣がつくと直ぐ、私は櫛をはふりだして逃げ込んでしまつた。ひどく動悸の打つ胸を押へて、じつとたゞ居すくんでゐたのである。「なんといふはづかしいこと」と思ひながら、聴きたいやうな氣がした。

あんなにもだらけきつたしどけない姿を、初めて會ふ人に見られたのがわけもなく恥づかしくてたまらなんだなんと御覽になつただらうと考へると、このまゝ會はずに濟ませたい氣さへして來た。

ほんとうに私はしよげてしまつた。すつかりあわてきつたのである。そしておづ〳〵と自分ながら厭になる程氣の利かない御挨拶をした。束ねもしない髪がうるさく頬にへばりついた。

その室には、Nさまから頂いた中折畫が掛けてあつた。その側に白秋さまの短册が風に揺れてゐた。もう日はかげつて涼しい風が窓いつぱいにふくらんで吹き入つた。でも私は暑かつた。私は膝ばかり見詰めて、繪だのお芝居だの小説だのゝお話をした。Nさまのお袴のかつきりした縞と、自分の浴衣のはでな絞りとを眺めてゐた。

Nさまはおかきになるお繪の、ひどく才に富んだ輕い厭味のない江戸ッ子らしい氣分をたくさんに含んでゐるのとは少しちがつて、たいへんしんみりとしたなつかしみのある、感じのいゝ方であつた。私はそれが何より嬉しくてたまらなかつた。――斯ういつては失禮だけれど――實際作家だの畫家だのゝ中には、お作ばかり拜見してればよかつたと思ふやうな、お目にかゝつて悔に似た怒じをうける方が少なくないのだから。(私は私の我儘な事を、安つぽい感情に囚はれすぎる事を、愧づべき事だと知つては居る。でもどうしてもしかたがない。)

「お目にかゝつていゝ事をした」と、繰返して考へてゐ

た。夫といつしよに、こんな汚ない面をしてゐるといふ事が、氣になつて〳〵しようが無かつた。私は私の不縹緻なことを悲しい程知つてゐる。だからなるべく白粉を離さぬやうにしてゐる。だのに今日に限つては、碌々手水さへも使はなかつたのだもの。あんまり不意にいらつしやりすぎた――斯う思ふと、少しNさまが憎らしいやうな氣にもなつてきた――。

途中までお見送りして、そのまゝ街の角に佇んだ。今夜の空はたいへん美しい。星が高い高いところにあつた。その星を數へ乍ら、斯うした美しい夜を、もつと〳〵更けてから岐阜提灯一つとぼしたその下で、しみ〴〵とお話が伺ひたかつたのにと、愚痴な心がまだ呟いてゐた。「お莫迦さん」さう言つて、ふつと自分で自分が嗤つてやりたくなつた。

――廿二日――

もう雨を見なくなつてから、彼是半月にもならう、何處も彼處もカラ〳〵に乾ききつて、植込みの八ツ手などの葉裏が白々と光るのも、見るから咽喉のいりつく氣がする。あの私の大好きな雨の日のしめやかな情緒を、すつかり忘れて了ひさうで淋しい。雨が欲しい。ほんとうに雨が欲しい。斯う喰ひ入るやうに思ひながら、コツ〳〵と物を書いて暮した。腕に汗が滲むので、紙の上へインキの跡が薄く散るのを、何だか氣になるので幾度も書直して見た。私は今ひどく疲れてゐる。

夜は花火が美しかつた。妹たちは涼み臺にゴチャ〳〵かたまつて、誰が奈何しやべつてゐるのか解らない程賑いでゐる。でも相變らず妹がいちばん一同を笑はせてゐるらしい。ほんとうに無邪氣な子だと思ふ。いつまでもあの無邪氣のまゝで置きたいとも思ふ。けれどもう十七だ。それを思ふとつい皮肉な笑が唇に上る。この頃奈何かすると、人知れずじつと鏡の前に坐つてるのを見掛けることもある。――そんな事を考へながら私はひとりで中二階にゐた。夜になると一人でゐたい。

また夢でも見たくなつたのだらうか――。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

——廿四日——

夕方Kさんがいらした。「耳が悪いのでれ、首尾よく徴兵をのがれましたよ」と言つてにこにこしてゐる。なんか輕い皮肉でも言つて遣りたい氣がしたけれど、あんまり罪の無い笑ひ顔をしてるので、つい自分まで微笑して了つた。「――これから大いにやりますよ」さういつてKさんは皈つて行つた。いつか歌留多會の時に、まつ赤なトルコ帽をかぶつてゐた事が、いつまでも思ひ出される。

——廿五日——

夜聖天さまへおまゐりした序に、Yちやんのとこへ寄つて見た。例の通りお留守だつたので、をばさんや姉さんとお話してゐた。若い女形のYちやんはドイツ語をやつてるといふ、それが皮肉におもへていけない。私は微笑しながら書棚の上の大理石像を眺めた。その書棚の水色絹と、机のひきての翡翠色をしたのとが、たんへん涼しげに見えた。そして机には久保田さまの雪と講談本とが上つてゐた。「――Yもこの頃はすつかり生意氣になりましてれえ」とをばさんは嬉しさうな面をして切拔通信を見てゐる。昔が偲ばれるほんとうにあくぬけのした面だ。姉さんもそれはきれいな人だ。とりわけて眼と姿がいゝ。さう思ひ〳〵、私はちと膝をくづしてお話した。

そとへ出ると明日十五夜といふ月があかるかつた。私は今戸橋の上から月と水と灯とを眺めてゐた。河岸には黒い影がいくつも動いてゐた。こんなに澄みきつた空よりも、月には少し邪魔にならぬ程のうす雲が欲しいと思ふ。そして、今戸橋といふ名には、たとへ朽ちかゝつてゐようとも、やつぱり元のやうな板橋がふさはしいものをと、少し口惜しい氣もした。

Iさまの二階の障子が明け放してあつた。まだそんな事まで氣になるのかと思ふと可笑しい。

とにかく夏の夜といふものは、ひどく人なつかしいものだ。私には今逢ひたいと思ふ人が三人ほどある。

——同じ日——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

折りにふれて

——日記より——

岡田ゆき

水曜日にお稽古に上つた時Y先生は、

「どうぞ、病氣をなさらない樣にして下さい。私は自分の命をけづられる樣に思ひますよ。御病氣つて事を伺ふと。」

とおつしやつた。

私は默つて歸つて來た。自分でも病氣には決してなりたくないのは知れ切つて居るが、先生がそれ程に云つて下さるのがうれしかつたのである。

その翌日から、また二日ばかり私は、ひどい熱で床に居た。丁度先生の御言葉が何かの暗示でゞもある樣に。

三十九度近くの熱で寢てゐた時、私は自分の臨終を夢にみて泣きながらさめた。涙は頰を傳ふて居た。そして氷枕はなまぬるくさけて居た。私は實に、いやな思ひがした。

生あるもの、總ての終局は死である。

然し、自分は未だ終局に行きつくべき者ぢやない。おそらく誰れしも事實死ぬべき時が來て居ても心に死の翼の音をきゝながら、自己の死を否定するであらう。今、自殺しやうとしてゐる人間でも、心の一隅では「今、自分はこうして死なうとしてゐる。然し、ひよつとして思ひがけない、運命のもとに死なずともすみはしないだらうか。」と考へて居るに相違ないのである。

兎に角私はもつと／＼生きるのだ。しかも生きがいある生活をするのである。

私は日頃から、車の上で本を讀むのが常である。

今朝も四谷に行くのに、いつもの樣に本を讀みながら、赤坂あたり迄行くと、

「車の上で本を見てゐる生意氣な奴だなあ。」

と、誰れだか、大聲に云ふのを聞いた。無智な車力かなんかゞ云つたのであらうが、私は何の氣なしに人から借

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りて來たものを「お前はそれを盜んで來たんだな。」と云はれた樣な感じがした。

私はたゞへ一分時たりとも、空な時間を費さないために、又、あたりが、恐ろしくさわがしく、その上自分の體が動いてゐるにかゝはらず、不思議に意識が一點に集るところから、車上で讀書をするのである。

私はみえで本を讀むのではない。世界の偉人の思想を幾分なりとも、自分のものにし、自己を大きくしたいと云ふ心から、熱心に讀書するのである。

他人の心の根底も知らず、やたらと罵詈する無智な人間は呪ふべきである。

朝、部屋に居た時プロペラアのすさまじい音を聞いた。椽に出て見ると、飛行船雄飛號である。自分の頭の上に奇怪な形の偉大なものが居ると思ふと、何んとなく上から、おさへつけられて居る樣で、精神的に壓迫を感じる。それにあのプロペラアの音は、下界の人間をおどしつけてる樣に思はれる。

そして妙に腹立たしい、いらいらした心持ちになつて來る。こんな氣持ちになるのは、自分ばかりかも知れない。

然しかう、種々な、外界から來る、刺戟に取卷かれて、生活しなければならない都會人を思ふと自分は眞に靜寂を欲するのである。少くも、音響のない世の中はないであらうが、浮世繪に表現された樣な世に憧憬を持つて居る。のどかな駕籠舁の掛聲と、輕い下駄の音と、しめやかな話聲より浮世繪は音を持つて居ない樣な感じがする。

ぼんやり、椽の手摺によつて、こんな事を考へてる内に、雄飛號は漸次遠ざかつて行く。

いやなプロペラアの音は未だ聞えるなあ、と思つた瞬間、思はず袖で耳を掩ふた。

先日から、京都のK氏の編輯してゐられる、雜誌「M」に印度繪畫に就いて、"The Festival of Empire."から譯す事になつて居たので、此の間から書きかけの原稿を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

昨夜書き終つたので今日から始めて見ると、まるで上手にいかない。悲しくなつた。餘り自分が貧弱なので情けなくなつた。

日頃から自分の實力のない、貧弱さは知つて居るが、かう目前にみせつけられると、たまらなく悲しいのである。けれども自分の貧弱さを自覺しない人よりは未だましであると考へるがやつぱり悲しいには、相違ないのである。總てに充實した頭と腕が欲しい。否、必ず得なければならない。努力。努力。此の悲しみを救ふに努力をおいて何があらうか。

千里行つた人も、必ず One Step. から始めたに違ひないのだもの、只徒らに悲しんでゐるひまに、自分は努力しなければならないのである。自分は墓穴に下る迄、努力し、自分を大きくしなければならない。

けたゝましく笑ふかと思へば、そゝられた樣に泣く、狂女の樣なと、でも云つたなら、昨日、今日の時候にあてはまるかも知れない。なまあたゝかい、南の風が吹いて、青葉に照る太陽の光りが、赤銅色に私の目を射たのは、昨日の事であつたのに、今日はまたどうしたのであらう。此の寒さ。襟垢を拭きとつた袷を又、ひき出して著なければならない程である。今朝から雨は小止みなく降つて居る。

ピーエル、ロッティが「日本の秋」に雨の日の事を、何處から、何處迄も泣いてゐる樣に見えると書いてるのを思ひ出した。未だ體の具合がよくならないので、稽古にも出られないので、只ひとり部屋に座つてゐる時、單調な雨の音で、私の頭は、ぼうとしてしまつた。

一週間ばかり、運動しないので、胃も惡くなつたし、頭の具合も惡い。自分のすべき仕事にとりかゝる前に確固たる健康を握らねばならないと、考へる。まとまつた事をする氣でもかう、つまづいてばかり居ては仕樣がない。いつも、自分の體の弱い事を考へると、たまらなく悲しくぢれつたくなるのである。(終)

――(大正四、六、二)――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私信

野上彌生子

野枝さん。この前は長いお手紙をありがたう。久しぶりの故郷があなたに與へた色々な印象を想像してゐます。而して私はそれを本統に近くまで分るに適してゐると思ひます。少女時代の夢の搖籃を、私も丁度あなたの國の近傍に持つてゐる身なのですから。門司を起點として分れてゐる二筋の九州線に依つて上を走ればあなたの村へ行けるのでせう。下へ降りれば私の町があります。去年の旅のことが又新らしく思ひ出されて來ました。私達が一年前の九月に通つた路が、また今度あなた方の旅になつたのですねえ。海峽の岸に建つたあの待居室であなた方も對岸の九州から來る連絡船を待つたのでせう。窮屈な汽車の箱から出て、海峽の笹濁りしたおだやかな波を目の前に見た時には、本統のう〱したいゝ氣持ちになりました。ことに子供達の悦びやうつてありませんでした。一晝夜箱の中に監禁されてゐたやうなものですからねえ。手足は自由になるし、意外な廣い海はあるし、且つその上には大きな軍艦から汽船、帆前船から小さいボートの類まで、おもちや屋の棚をひつくら返したやうに浮いてると云

ふ有樣ですからこの上の愉快はない譯ですとも。私達は旅をしてると云ふ心地も忘れあたりにあわたゞしく動いてゐる人足や、釜山の連絡船に急ぐ船客の群れにも無關心で、子供連れで何處か公園の池の畔へ遊びにでも來てるようなのんきな氣分になつてゐたのでしたよ。こんなことを思ひ出すにつけてもまこさんのことが考へられます。三ツの小さい子供に、初めての旅と云ふものがどんなに印象されたでせう。何かお氣のついたことはありませんでしたか。まこさんには山も海も河も、初めてなんですものねえ。すべてがどんなにお珍らしく、且つ奇怪に感じられたでせうと思はれます。去年の二人の子供の旅も、沿道の光景のあらゆる事が彼等には驚異であつたらしく見へました。考へて見れば無理もありませんわねえ。私達をとなは一と口に山だ海だつて平氣に云つて仕舞つてゐますけれども、その山なり海なりを、今新らたに、子供等の第一印象の如く考へて見るとしたらどうでせう。不思議なものですものねえ。あたり前の土のある地面よりかは何千尺も高いのだと云ふその異形なものは一體何でせう。又土とは色の變つた、柔らかそうな廣々した平面の上に、碧い水見たようなものが一杯動いてゐるのは何でせう。且つこんなものはどうしてあるのでせう。斯んな不審の起きた時、私達に根本的の說明を與へて下さるのは誰でせう。地史學の先生でせ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

うか。そう。私達はその先生から教はつて簡單ではあるがそれ等に就いての一般的智識を持つてゐる筈であります。だからもし子供から尋ねられたら、その智識に依つて彼等に説明しなければなりません。けれども子供の質問はしつこいものです。根堀葉ほりそれから、それからと問ひ進められたら私には答へられない。私は一言に、

「何もかも世界ぢゆうのものは神様がお拵へなすつたのです」

と自信を持つて云ひきる程の、強い宗教的信仰も持つてゐない、同時に自分にも推論し、人にも滿足させられる丈けの科學上の智識を持つてゐない母親を自分から憐むものであります。こゝに例へ口には出さない時でも、彼等のその眼は、あらゆる質問――山や海は云はずとしても、庭の花に樹木に、草に、その葉の上の小さい蟻に對して持つてゐるらしく見えますもの。私は子供が世に出た暫くは盲目であり、聾である事は、造化の巧妙な用心からだらうと考へた事があります。何故と云つて彼等の出來上つた計りの初々しい諸神經や官能が、直ちに自分達の周圍を取り卷く萬有の珍奇、驚異に脅かされるのは、餘りに殘酷な仕方でなければなりませんもの。でなければ生れると同時に氣違ひになる子供があるかも知れません。ねえ、そうはお考へになりませんか。こんな風に思ひかゝるといろ〳〵な問題が考へられますねえ。あなたも又今

度は母親の世界、子供の世界に就いて色々な感じを味ふ機會の多い事と存じます。お歸りになつたらゆつくりお聞きかせ下さいな。私は又まこさんが、今までの青白い、子供のやうでもない憂鬱な表情を、すつかり亡くして、活潑な元氣のいゝ小さいお兄さんになつて歸つてゐらつしやる日を待つてゐます。此の處にゐるまこさんの二人の子供友達は、相變らず元氣よく騷ぎ廻つてゐます。お兄さんこの頃しきりと家の外の世界に興味を持ち出しました。どうかすると默つて染井橋の近所までも出掛けて行つて、

「僕ちよつと散歩に行つて來ました。」

なんて得意になつて歸るのに困つてゐます。妄りに一人で外出してはいけない事、出入にはきつと許可を受ける事と云ふ窮屈な規則の意味が、彼には本統に呑み込めないらしいのです、その上云つたら留められやしないかと云ふ用心もあるし、又それ程深い思考の猶豫もなしにたゞぶらりと門の外に出て見度くなるらしいのであります。庭續きになつてゐたあなたのお家にさへ一人では行けなかつた昨年の夏に比較すると大變な違ひになりました。外界に對する好奇心と一種の自由を愛する心持ちから生ずる、幼年時代の放浪性が現はれかけたのだらうと思つて、よく注意して觀察してゐます。Little vagabond と云ふ仇名まで出來てしまひました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

それから見ると弟の方は依然として赤ん坊じみた顏や、動作を失はないでゐます。お兄さんが善い事にも惡い事にも、人間性の著しい發達をなしつゝあるに對して、それは非常な對照を作ります。本統にこの小さい者のために、私は地上にはなりえない事の如くにさへ考へられてゐた最上級の人道的の道德が、易々と實行されるのを見るのは珍らしくありません。このことだけでも何程この子供に感謝しなければならないか知れないのです。

丁度二三日前の夕方でした。私は勝手に出て煮物をしてゐました。子供達は側で繪本をひろげてゐました。そこへふよが井戸傍から米研ぎ桶を抱へて來ました。而して行きなり嘆美の聲をあげました。

「まあお坊ちやま御覽なさいまし。きれいな雲ぢや御座いませんか。」

彼女も私達もう つ向いて計り仕事をしてゐたので、その時西の空に現はれてゐた夕の美しい光景には氣がつかないでゐたのでした。私達は立ち上つてその夕空を眺めました。瑠璃と金と紅と錯雜し混亂した色彩、それを明るくし、暗くして入り亂れてゐる光と影、それ等のすべてを戰せながら靜かに暮れようとしてゐる目の前の夕空の一片は、松や檜葉やその他の綠樹を前景にして全く見事な有樣でした。私は煮物の箸を握つたまゝ暫く見とれてゐました。お兄さんはもつとよく見ようとして、臺所のまん中に踏臺を持ち出して來てその上に上つ

て見ました。弟も高いところから見たがりましした。私は抱いてやりました。すると彼はこんなことを尋ねました。

「あれ、なアに。」

あなたの知つてゐらしやる通りのおぼつかない、幼なげな云ひ方で。

「あれはね、雲と云ふものですよ。」

私は斯う答へました。

「あすこへ行きませうよ。」

この奇拔な發意には私も一寸と驚かされました。でも私は贊成しないではゐられませんでした。

「えゝ、行きませうねえ。」

「お母さま、お兄ちやま、いゝや、みんなして行きませうねえ。」

「えゝ、行きませうともねえ。」

「明日行きませうねえ。」

「えゝ、明日行きませう。」

彼は私のすべての同意に滿足して腕から下りました。私は日に幾度か彼とこんな會話を交換し得ること、そう云ふ神聖な天上旅行に同行を求められると云ふことを、この上もなく幸福に且つ光榮に思はれます。

野枝さん、あなたも彼のために同行を諾しておやり下さるお一人でせうねえ。

あなたがお歸りになつてからまだ一と月もたちませんが、私達の知つてる人々のまわりには可なりいろ〳〵な出來ごとが起つたらしう御座います。女の內的生活と云ふことが、この頃は殊に意味深く復雜に考へられます。折があつたら又そのことに就いて何か書いて送るかも知れません。

まあどうぞ御大事になさいませ。みな樣へもよろしく。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

病衣を脱ぎて

岡本かの子

生田花世樣に

生田花世さま。あなた樣は、一昨年の十一月中旬の或日、私の不在でした私の家を、わざわざ御訪問下さつたことを、まだ、あなた樣の御記憶のなかに、御とゞめ置き下さいますでせうか。たしか、あの後、間もなく生田樣との御結婚も御座いましたそうで、(私は特に、そうでと茲には云はして頂きます。その譯は、あとで御分りになることで御座いますから。)隨分御心せはしくも居らしつたで御座いませうが、どんな一些事にしても、御自身のかつて遊ばしたあとを、輕々しく紛らはしたり、容易に忘れたり遊ばさぬあなた樣は、きつと、遠い一昨年の、あの日のことをも、はつきり、御記憶下さることゝお信じ申上げます。

けれど、あの日御訪問下さつた御厚志を無に致したばかりでなく、間もなく後に頂いた御書信のお返事をすら差し上げないで、今日まで、御無沙汰いたし續けて居りました私が、いまごろ突然、何を申し出すかとおあやしみにもなりませうが、斯う書きさしましてさへ、もう、私の眼の中には、どつと涙がにじんで參るので御座います。

其に就きましては、とても涙と戰慄なしには居られないあの當時からつい近頃まで私をさいなんで居た悲慘な苦痛の追憶を、申上げなければならないので御座います。けれど、細く申上げましたらきりも御座いません、今はたゞ、御無沙汰の理由を、みとめて頂るだけの程度に致して置きます。一昨年の八月下旬、丁度あなた樣が御訪ね下さつた二ケ月半程まへに、私は產を致したので御座いました。產はかなり安產で御座いました。けれども、どうも、あとの肥立があまり思はしく御座いませんでした處へ、或日、思ひがけぬ刺戟に襲はれたので御座います。其刺戟の內容に就いては、今細か〻申上げませんけれど、とにかく、私がはつと致しました其瞬間、俗に云ふ「產後の逆血」と云ふ奇怪な發作によつて、私の全身の血は、恐ろしい勢をもつて、私の頭へ一途に登り結め、同時に、私は、殆んど正氣を失つて仕舞つたので御座います。まことに、まことに、あの苦痛、あの懊惱を何と形容致しませうか、其は生血を吸ひ取られるよりも、また、黑髮を逆手にからまれるよりも、全身にするどく針を突き刺されるよりも、きりきりと毒蛇にまかれさいなまれるよりも、……眼を据え、齒をかみしめ、慟哭し、悲鳴をあげて、あらゆる手段で、私は苦痛に抵抗しようとし、もがき、訴へたので御座いますけれども、女子のみの病氣、まして其女の中の幾人が知ら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

うかとさへ思はれる奇怪な病氣には、博士と云ふ名を持つた醫師すら、充分な理解を持たれぬ樣に見えました。私は無我無中だつた裡からも、私の激烈な狂亂の炎には一滴の水にも價しない樣な、敎訓のみ試る中年の博士の型の堅い顏立ちと、看護にあぐねて、始終私をあやす樣にして居た世ずれた看護婦の面ざしを、おぼろげながら、覺えて居ります。實際私は、幼少の時から隨分色々な病氣の苦痛を味ひましたが、世の中にあの時の樣な奇怪な病苦の存在して居ることを兼て豫想だに致したことは御座いませんでした。

あなた樣が、青山の家をお訪ね下さつた時には、斯うした私が、下町の或病院の二階の窓から、大きな澄んだ秋の夜の月を見上げて「あれ、お月樣が狂者になつた、いまに私を呑みに來る……。」と云つては泣き、「あれ、あれ、あの女がまた、私の生血を吸ひに來た。私のこの眞赤な戀の若い血をねたんで、あの醜い女が、汚い紫色の唇をして、眞黑な大きな口をあいて、あれ、あれ、あそこへ……。」などとふだんから私の戀をのろうて居る女の名など呼び續けたりして、居た最中なので御座います。こう云ふ凄慘な狀態がなほ幾日幾夜續いたあげく何ケ月ぶりかで、正氣にかへりました時の私は、やうやう、強度の藥液によつて、全身を荒れ亂ふ血を涸らしつくして、からうじて生命ばかりをとりとめ得たと云ふばか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りの、殘骸の樣な私の肉體と、困惑と憐愍の眼を私一つに集めて居る私の家族を私の周圍に見出したので御座います。で、ともかくも、肉體の苦痛からはのがれ得ましたものの同時に私は私の眞の生命を失つたと云ふ自覺によつて、更に更に、大きな心の苦痛を持つ樣になりました。私の眞の生命とは、其は若いにほやかな血液が醸す「歌」の感興や、「戀」のよろこびや、また、わづかながらも私相應に持つて居りました「若き姿」のほこりなので御座います。けれども其等のすべてはことごとく、むごたらしい病魔の手に引きさらはれて、嵐のあとの廢園の樣な殘骸がなんで私に必要なもので御座いましたでせう。淺ましく拔け落ちた私の髮や、無慘に褪せた唇を用捨もなく寫し出す鏡や、戀と云ふ一字を書く熱情さへ失つた、細く力ない手に、筆持つ張合ひは少しもなくなつて仕舞ひました。そして極端に病的な私の考へが、私の肉體も精神狀態も永久に斯して續くべきものであると、獨斷して仕舞つたので御座いました。其結果、私は失望と、嗟嘆に閉ぢられて、むしろ「死」をのみ願つたやるかたない懊惱に、また幾月かを空しく過しました。

けれども、昨年の秋の初め頃、ふと、投げ出された枯木の枝の樣な手足の肉付きや、むしられた人形の頭髮の樣にみじめだつた毛が、少しづゝながらも、とゝのひ始めたのに感付きまして、にはかに、自分の體を、

ながめまわし出しました。いつの頃からか、心の盛衰は、肉體に支配されるものと、信じて仕舞つた私の觀念が、病中殊に強度となり、なほまだ、此時まで續いて居ましたので、わづかながらも、肉體の回復を意識すると同時に、心もやゝ明るくなつた樣に覺えました。しかし其はまだまだ惡夢にさいなまれた夜のあとの、曉の窓に面した樣な、かすかな薄明にしか過ぎませんでしたけれど。其頃から私の家族の者は、追々少しづゝの安心をもつて、私の病中の出來事や、一ケ年あまりも私に秘して居た、知人の消息やを、やうやく語る樣になりました。それから、私の病中、根氣よく青鞜社から送られた「青鞜」を一かかへ、私がのぞいても見なかつた、書棚の奥から出して來たり、私を刺戟することを恐れて、かたく仕舞つてあつた諸方からの書信の一束になつてあつたのを、ほぐして見せたり致しました。そのなかで、平塚明子樣が幾度となく、私の消息をおたづね下さつた御書狀と、小林哥津樣の紹介狀にお添へになつた、まだあなた樣が「西崎」とおなのり遊ばした頃のお名刺と、ほかにまだ一通あつた御書狀とに、何のお挨拶をも申上げなかつたなほざりを殊に心苦しく存じました。で、平塚樣には、あわただしく筆を執つて、お詫狀を出しました。けれどもまだ始めてのあなた樣には、其が何とはなしに、あまり突然の樣で、ついつい今日まで、御無沙汰致し續けて居りました。小林哥津子樣も、今はどう遊ばして居らつしやりますやら、四年前、「青鞜社」の會のかへりの御一緒の電車のなかで、丁度、お人好の姉を世話する氣のはしよつ

た妹の樣な調子で、氣のきかない私に、乘換切符の面倒まで、見て下さつた氣さくなあのお方を、折々おなつかしく思ひかへして居ります。

今、私は、恰好も無く肥えきつて、隨分健者で御座います。歌の感興も、漸く少しはよみがへつて參りました。私はそれによつて、かすかな喜びを覺えつつ詠んだ最初の歌――それはもふ二ヶ月ほども前ので御座いますけれど――を、三年前の御厚情に御むくゐ致すつもりで、あなた樣の御まへにお捧げ致します。けれどもあの大患のために「以前の私」をすつかりなくして、また新に造りかへられた樣な私に對して、なほ、三年以前の私なり私の歌なりにお拂ひ下さつた御厚志が續くものやらと思へば、何となく、心淋しく御座います。（七月下旬）

ひなげしのなつかしさよな青白き病衣をほせる初夏の椽

からうじて博多の帶もひとりして結び得るまで病癒えけり

前髮をかくさへたゆく力なき指もて折りぬひなげしの花

めさむればみとりづかれにまろねする君がうなじに淋しく照る灯

火の海か氷の山か三年ほどうめきて我のさまよひ來しは

我ながら心憎くも肉つきぬまたも病の來ずやねたみて

かにかくに生きてみそばに幾年かまた添ひまつる身となりにけり

紅き花とぼしくなりし我髮にさされていかに淋しくあらん

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

九州より

——生田花世氏に——

野枝

生田さん、私たちは今回三百里ばかり都會からはなれて生活して居ります。

私達のゐます處は九州の北西の海岸です。博多灣の中の一つの小さな入江になつてゐます。村はさびしい小さな村です。私たちは本當にいま東京から大變遠くはなれてゐるやうな氣がしたり、それからまた、でもかうして原稿用紙に向つてペンを運んでゐますと矢張り東京にゐるのだと云ふやうな氣もします。けれども矢張り遠いのです。お友だちのことなんか考へてゐますと夜分にも會へるやうな氣もしますが一寸はどうしても會へないのです、あの窮屈な汽車の中に二晝夜も辛抱しなければならないのだと思ひますと、何だかあんまり遠すぎるのでがつかりします。一寸かへつて見ると云ふやうな自由がきかないのです。

此處は私の生れ故郷なのです。けれども矢張り私たちにはこんな處にどうしても滿足して呑氣に住んではゐられません、かうやつて家にゐますと全で外からは何の刺戟も來ないのですもの。單調な青い空と海と松と山と、と云つたやうな風でせう。此處で生れた私でさへさうですから、良人など

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は都會に生れて何處にも住んだことのないと云つてもいゝ程の人ですからもう乾度つまらなくて仕方がないだらうと思つてゐます。それもこの附近はかなり景色がいゝのですしいろ〳〵な立派な偉大な自然に接觸することが出來るのですからそんな處も歩いて見ると少しはまぎらされるのでせうがいろ〳〵な事でまだそれ程の餘裕を種々な點で持ち得ませんので本當に氣の毒です。私もこちらへ來ましてから半月にもなりますが、まだ本當におちついて物を考へることは勿論書くこともよむことも出來ないしまつです。あなたはどうしてお出になりますか、お忙しう御座いますか。

私は東京にゐる間からかけづり歩いた疲れも旅のつかれも休めると云ふやうなゆつくりした折は少しもないのです。體はいくらか樂ですけれども種々な東京に殘した仕事についての煩はしい心配や氣苦勞で少しも休むひまがなく心が忙しいのです。

大分青鞜が廢刊になるとか云ふうはさも廣がつたやうですが私はどんなことをしても廢刊になど決してしないつもりです。讀者の間には隨分心配なすつた方があるでせうけれど引きつぎの當時にお約束したやうに、どんな困難にあつても、たとひ三頁にならうと四頁にならうと青鞜だけは續けてゆくつもりです。兎角事あれかしと待ちかまへてゐる閑人の多い中ですから一々うはさをとり上げてゐては大變ですけれどあん

まり馬鹿々々しく吹聴されるといやになつて仕舞ひます。

今の處實際雜誌はもとよりも貧弱になつたのは申すまでもなく私もよく承知して居ります。けれども私はまた私の考へで正直な處を云はして貰へるなら、私はむしろいま世間でチヤホヤされてゐる立派な人々の原稿を頂いて讀者の御機嫌をとつて雜誌を多く賣ると云ふことよりも寧ろこれからのびやうとする苗を培ふことにつとめたい、勿論私自身もその苗の一つなのですもの、さうしてお互ひにもつとずつと近しくなつてゆきたいと思ひますの、賣れなくなつては苦しいには違ひありません、私も出來る丈けは賣りたいと思ひますの、ですけれど私はすべてをすてゝ手段に走らうとはどうしても思ひません。いくら目的の爲めの手段とは云へ、そんなことを考へますといやになります。そうして手段と云ふやうな事に向つて事をやり始めますと、私の負けぎらひな向不見な性質がどう走るかしれないと思ひますとぞつとします。折角これまで、一歩一歩にどうにか質素な内輪な歩き方をしてゆかうとしかけてゐる私がどうなるかしれないと思ひますと、嫌やになります。女の世界の速記を御覽になりましたか。可なりぬきさしもあつたやうですが、あんなに馬鹿氣た、いやな私が頭をもたげるのです。私自身にもあれを見ましたときには本當に恥しくなりました。私の心持ではあの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

時に嘘を云ふつもりで嘘を云つたのは一つもありません、けれども卑怯な態度をとつたことは耻かしいと思つてゐます。つまり、いろんな不純な氣持から、こんなことを云へばまた面倒な質問をされると思つたり、煩さいからと云ふやうな横着な氣持からホンの二つ三つのうそをついたことが、その時は當然だと思つてゐました。けれども今では可なり耻かしく思つてゐます。

それもあの場合、向ふの人が眞面目にさうした問をかけてゐると思はれたら私は躊躇なく本當のことを云つたでせう。けれども私はあの野依と云ふ人を厭な人だとは勿論思ひません。どちらかと云へば氣持のいゝ好きな人の方ですが——あの人の態度とか思想とかについては私とは何のつながりもないことを知りすぎてゐました。其處で私の不純な悧巧が頭をもたげたのです。おまけに向ふの問ひ方が少からず不眞面目でしたから私もその氣になつてお相手になつて居りました。けれどもそれは私の卑劣な云ひ譯けに過ぎませんでした。私はまだ本當に嚴肅に自己を保ち得る力がないのをつく〴〵情なく思ひました。私は何故あの場合あくまで私の信實をもつて、眞面目をもつてあの人に當らなかつたらう。と思つたときにかなしくなりました。矢張り少さい時からの惡いくせは何處までも纒りついてゆくものだと思ひました。それは本當に私の惡いくせです、小さな卑怯者とは私のこと

です。私は幼い時から失策をしたときに、その失策をありのまゝに他人の前に持ち出す信實を少しも持ちせんでした。私はその失策に氣がつくや否や、先づそれをそのまゝに持ち出すよりも前に何とかそれが尤もらしく他人に思はれるやうな理由を附けるか、或ひはそれを全くかくして仕舞ふやうな方法を講ずることを知つてゐました。しかしその爲めに、私はどの位自分でも苦しんだかしれません。苦しみながら私は矢張りそれを續けました。もしも私がそのことを平氣でする程になつてゐましたら決して生涯私はすくはれることはなかつたらうと自分でも思ひます。けれども私は幸ひに、平氣でそれを過して續けることは出來ませんでした。けれども何時と云つてそれを改めることは出來ませんでした。何故なら、私の周圍の人たちは皆私のその惡いくせをを知つてゐました。そして私のすべてがそれによつて價値づけられました。勿論他人に、私のその惡いくせがそれ程私自身を苦しめてゐることがどうして解りませう。私はもがき〳〵だん〳〵ふかみへはいつてゆきました。けれどもふとしたはづみで私はすつかりその嘘の皮をぬぎました。私は大變樂になつたのです。本當にそれは何とも云へない輕い氣持になりました。私は本當に、すつかりそれで嘘がきらひになりました。私は思ひます。それは〳〵澤山なうそを私は云ひました。またこしらへました。けれ

ども私はその爲めに自分ひとりでどんなに苦しんだでせう。その苦しみが私にはあんまりよく解りすぎますのでもうそんな苦しみは決して負ふまいと思ひます。

けれども本當に油斷は出來ません。私は一寸、ほんの一寸油斷をした爲めにまた自分に對して不忠實なことをしました。小さな、微かな、ツマラナイ、本當につまらないヴハニテイを私が起したからです。自分でもどうしてそんなつまらない心持を起したかわかりません。「馬鹿にされまい」と云ふやうな野心を起したのです。只それ丈けです。そして私は私の生眞面目があゝ云ふ人にはたゞ馬鹿氣て、子供らしくしか見えないと云ふことを知つて居りました。それは、明日に迫まつた金の爲めに困りぬいてあすこに行つたと云ふことが一番の私の弱味でした。つまり一寸したすきに私が乘せられたのです。私はかうして考へて來ますと、本當に情なくなります。かうした、一寸した機會にすらも乘せられる自分をかなしまずにはゐられません。まだ／＼私にはどんな處に出てもどつちを向いても一歩も半歩も自分の信實は讓らないと云ふ程確實に何時でも自分を賴んでゐると云ふ自信がありません――かなしいことですけれど。向ふが大手をひろげて一杯に正面から向つて來ればそれに向ふことも出來ますがすこしすきを見せて横手から出らるれば直ぐにゆだんをしさうになります。これでは本當

に危つかしくて仕方がないと思ひます。もう少ししつかりしなくてはとても雜誌を一とつ背負つてたつと云ふことは出來ないとつく〴〵考へます。

をとなしい、すなほな調子で出られると單純な私は直ぐその調子に引き込まれさうになります。小さな煩さい感情を失くしたいと思ひますがなか〳〵さうならないものですね。もう少し物事を眞直ぐに、克明に照らす理智を欲しいと思ひます。

自分の愚痴ばかりをなが〳〵と喋舌りたててすみません。私はたつまへにあなたの御本について何か書くことをお約束しました。けれども讀むはよみましたけれどもいま落ちついてあの御本について一々何か申上げると云ふやうなことはとても出來さうにもありませんからあの御本をよみましたときあなたについて感じたいろ〳〵なことをちぎれ〳〵にかいてそれで許して頂かうと思ひます。けれども私の感じたことが直ちに本當のことであるかどうかは私にもわかりません、私の感じたことゝ書くことの間にちがひは勿論ありませんがあなたのお書きになつた心持ちと私の感じ方の間にちがひがあるかもしれないと云ふことなのです。

私はあなたと向き合つてゐますと何時でもろくにお話が出來ないのです。私はどうしてか、此度お目に懸つたらと思つてゐま

すけれども會つて見ますと、どうしてもよくお話が出來ないのです。私は隨分まへからそのことに氣がついてゐて、考へてゐました。そしてそれがどうやら、あんまりあなたが丁寧すぎるので私が困ることに依るのだと云ふ風に思はれます。

あなたはあんまり丁寧すぎるのですもの夫はあなたがこれまで訪問なんかを仕事にしてゐらしたその習慣があるのかもしれませんが面倒な禮儀などにうとい、粗野な私たちにはあんまりあなたが卑下なさりすぎるので、なるべくうちとけてお話したいと思つて無雜作にはなしてゐる自分が何だか傲慢らしく見えて來て直ぐいやになつて仕舞ひますので何時でも默つて仕舞ふのです。私は何時でもあなたが下ばかりむいてゐらつしやるのが氣になつて仕樣がないのです。何故ちやんと向き合つてもつと親しくもつと大きな聲で遠慮なく話して下さらないのだらうと思ひます。私はあなたの或る點では非常に引きつけられながら一方では焦れつたくて仕方のないやうなことがあります。私は時々あなたの手をグン／＼引つばつてドン／＼馳け出したくなることがあります。何を見ても、何たがオド／＼してゐらつしやるやうな處があるやうな氣がして仕方がありません。

私はあなたのあの御本を拜見しながら何處をよんでもさう思ひました。本當にあなたは正直すぎ單純すぎ、あきらめすぎると。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あなた自身は本當に美しい心をもつてゐらつしやるのですけれどあなたの周圍は何時でもあんまりあなたに邪慳すぎたのですね本當にあなたのやうなまじりつ氣のない感情をもつてゐる方もめつたにないと思ひます。その點ではあなたは何人に向つても大威張りだと私は思ひます。

　あなたは何時でも、自分の滿足よりも他人の滿足するのを見て喜んでゐる方だと思ひます。これはあなたのどんな場合にも必す伺はれることで誰にもわかる事ですが。そしてまた私は思ひます。それがあなたにとつての滿足なのだからあなたには立派なことなのですわ、でも、あなたがもし他人の喜ぶかほを見て喜こんでゐる間にでもあなたの足場がひつくりかへるやうなことのないやうに注意してゐらつしやることが出來れば申分はないと思ひます。けれどもあなたは大抵の場合あんまり正直すぎて背負なげを喰はされてばかりゐらつしやるやうに私には見えますのよ、負けぎらひの私には殊さら見えるのかもしれませんけれど。

　さうして、私にはあなたのやうに純な正直な處を澤山にもつてゐる方のねうちを認めずに乘じやすい點を利用して誘惑しやうとしたりひどい目に合はせる奴を憎まずにはゐられません。あなたが最初からそんな奴になんか會はずにずつともつと自由な道を歩いてゐらしたら屹度本當に立派な快活な人なつゝこいゝ方におなりになつたら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

うと思ひます。あなたの步いてゐらした道を私たちは本當には覗いたこともありませんから、どんなに困難であつたかもしかとは分りません。たゞあなたにもう少しエゴイスティックな點がありそしてもうホンの少し許り人の惡い處があればあなたは無事にあの道を通れたのかもしれません、けれどもこれは私の想像ですからあてにはなりません。步いて來て仕舞つた處にはもうたゞ足跡だけです。私たちには步いてゐるその刹那々々に一番たしかな私たちの存在の意義を見出すことが出來ると信じてゐます。あなたの御本はあなたの過去をお書になつたものとして、さういふ過去をお持ちになる現在のあなたがどういふ方であるか過去が何處まであなたに及ぼしたかと云ふことを考へるときにはじめてすべてに價値が出て來るのだと思ひます。

私はあなたの通つてお出になつた過去のことについては本當に一言半句も言葉をさへもさしはさむ資格を缺いて居ります。たゞさうした過去があなたに及ぼしたのであらうと思はれる點をあなたに無遠慮に申上げやうとしたのですけれど、考へて見ますと、私は何にも云へなくなつて仕舞ひます。何だか半分云つてあと半分ひつこめるやうですけれどかうやつてかいてゐるうちにも自分のことに思ひ至りますと決して他人樣に對して口幅つたいことは云へなくなりますからお許し下さい。それでも隨分無遠慮

に年長者のあなたに向つて甚だ潜越なことも書きましたが何卒あしからずおゆるし下さいまし。

お互ひに自分のことは矢張り自分で考へながら進んでゆくより他に仕方はありません。生きる力のびる力をもつてゐる限りのものは自分で勝手に、すきなものを吸收することの出來るやうに自然はいろ／＼なものを豐富すぎる程與へてゐますものね、私たちはいくつ取つても／＼たりないほど澤山のものに惠まれることが出來るのです。どんな醜いやうなものがどんな偉大な肥料になるかもしれませんし、どんなにか美しく見えるものがどんなに害になるかもしれません、他人には本當にわかりませんわ、深く考へ及ぶ程、自然と云ふことを考へる程微弱な自分の力をおもはずにはゐられません、深く内に向つて進む程徒らに手も足も動かせません、今私は物を考へる毎にさう云ふ風に考へ流されてゆきます、これがどう流れてゆくかは自分でもまだわかりません。私は不自然なことはあくまでもしたくないと思ひます、私の眞實が本當の眞實である間は。

つまらないことをなが／＼書きましたねいろ／＼まだ外に書くつもりだつたのですけれども何時まで書いたつてつまらないことばかしですからこれで止めます。

では　左樣なら。

編輯だより

□種々なうはさに幾分不安をお感じになつた方が讀者の間にも多少あつたことゝ思ひます。けれども、どんなことがあつても永久に廢刊するなどいふことはしたくないと私自身は思つてゐます。少々位の困難はもとより覺悟の前ですから何でもないことです。

□今月號から日月社の安藤枯山氏の御厚意で私の留守中丈け雜務をとつて下さることになりました。多事ながら面倒なことをお引きうけ下すつた御厚意を深く感謝いたします。

□今月號から大分いろ〳〵なことを始める計畫をたてゝ居りましたけれども私が七月の末までは東京にいろいろな用をもつて忙がしいおもひをして歩きまはつてゐまして月末になつてこちらへまゐりまして、十日頃までと云ふものきまつた座り場所ももてないやうな有樣でしたし、その間にもなを、東京に殘して來た種々な面倒な用についても始終考へたり、原稿も目を通さればならずと云つた風にどれと云つて一つことに向つてゐることが出來ずに始終片附かない、半ぱな考へで頭の中は混亂してゐますし、體はおちつき先きを見出さずひきつゞく疲勞の爲めに變ですし、實に困りました。それ故何にも考へてゐることは實行が出來ずに日が迫つて來まして諸氏に對しても實に申譯けのない次第とはおもひますが今度こそは吃度、せめて考へてゐる半分丈けでも實現させるつもりです。本當に何時もながら自分の意久地なしが情なくなつてまゐります。

□此度歸京しましたら少しは人なみに働くことが出來るやうにしたいといまから考へて居ります。久しぶりに故鄕にかへつて見ますといろ〳〵おもしろいことを見たり感じたりします。今月六號でこれを書くつもりにして居りましたけれどもつい書けさうもありませんから來月號には澤山一緒にかくことに致して御許を願ひます。

□墮落と避妊についていゝ原稿が可なり集まりましたから出さうと思ひましたけれどこの間の今月號ですからどうかとあやぶまれもしますし少し注意をうけたこともありますので暫く見合はせて玉稿はお預かりいたして置きます、そのうちに折を見て揭げることにいたしますから何卒あしからずおゆるし下さいまし。

□日記は何時でもどんなに少くてもかまひませんからお送り下さいましお願ひいたします。それから原稿は――私は多分十一月までは此處にゐなければなりません――十二三日頃までなら私の處にその以後は東京本鄕區元町二ノ廿五、日月社あてにお願ひいたします。

□滯在中九州地方に近い處の方は何卒おあそびにお出下

さいまし、なるべくこんな機會にお目に懸れる方には懸つておきたいと思ひます。博多驛から三里西の方です。福岡市内は電車の便があります。それからは輕便鐵道で六つ目の停留場で降りればいゝのです。

□かうして東京から遠くはなれてゐますといろ〳〵東京の便利ないゝことばかりが考へ出されます。そうして東京にゐますと此度は田舍のいゝ處ばかりが思ひ出されるのです。人間は何處まで虫のいゝことばかり考へるやうに出來てゐるものかと云ふことにおどろかされます。(野枝)

○岩野清子さんの「別居に就いて思ふ事ども」は私がお訪ねしてお話を聞いて、私の考へでまとめました。この意味の責任は私にありますから一言斷つて置きます清子さん自身の深い考察はやがて御發表になるでありませうし私もそれを祈つて居ります。

○平塚さんは今度お喜ばしい事には御姙娠の御様子とお見受けして居ります。從つて今號の論文は本當に私たらの期待を滿たしてあまりあるものと信じます。第四週年記念號にこの論文を見ることは意味多い事と存じます。

○小林哥津ちやんを向島におたづねいたしました。さつぱりさした新築のお家で、昔のやうに、勝氣なはつきりした辯で、哥津ちやんは笑つたり話したりされました。野枝様はちつとも身體を大事にしないから私心配してゐるのよ、と云つたりして。お見受けしたところでは哥津ちやんも若いお母様におなりになるのではありますまいか。

○青鞜も戀愛のシイズンから移り動いてゆくのですねと野上八重子さまは語られました。かうして段々と青鞜上に現れてゆく女の生活も充實してゆくのが非常に嬉しくも亦貴くも感ぜしめられます。

○私は青鞜の手傳がしたかつた。金があれば金を、手足でよければ手足を、さうして今、長い間の心持が、遂げられたのを感謝して居ります。そしてその心持が私一人の心持ではない事を信じてゐます。

○野枝さんの歸京を待ち望んでゐます。本當に淋しいと思ひます。廣々した九州の山水にあの方のあの生々しさが更に研ぎすまされて歸つて來るのが嬉しうございます。編輯の餘白に一寸かうした感想を書かずには居られなくなりました。

○一二名の方の御寄稿が、原稿輻湊のために、次號にまわりましたことを厚くおわびいたして置きます。(花世)

△兒童の世紀(エレンケイ)は山田わか氏から原稿を頂きながらのせる事ができませんでした、次號から又連載いたします。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

新刊紹介

■行人行歌（若山牧水著）

現在の歌壇で最も多數者にその作風を慕はれてゐるのは著者であらう、著者は二十歳の頃からいゝものを持つてゐた、旅の歌には殊に靜かないゝ歌がある。それから約十ケ年間にその作風が漸々圓熟の境に入つてきた、本書は著者が過去に出した六歌集から自選したものでどの頁からも佳作が見出される。

幾山河越えさりゆかばさびしさのはてなむ國ぞけふも旅ゆく

山山のせまりしあひにながれたる河といふものの寂しくあるかな

此頃齋藤茂吉、北原白秋氏らの新方面開拓のめざましさに壓されてゐる形であるが、なほ著者の厭味のない地味な溫健な歌は歌壇の大勢力として若い人々に渴仰されてゆくに違ひない。和歌選集叢書の二。六〇錢（植竹書院）

■自叙傳（森田草平作）

著者の自序に「今自叙傳を再び世に送るについて僅に自ら慰むることが一つある。之れは兎に角「煤煙」と共に當時にあつては一生懸命にかいたものだといふことである。……一生懸命になる、それは今の自分にとつては容易になれないことである。」と云つてある。この小說は當時「煤煙」よりもいゝと稱せられたもので、終りに近い方の嘗て「未練」と題せられた部分の如きは著者の特長の最もよく發揮された所であらう。まだ讀まぬ方には是非一讀をすゝめたい。木版刷布裝幀、四百頁九十錢（日月社）

■萬葉集選前編（窪田空穗著）

■續編萬葉集選（窪田空穗著）

著者が常に愛誦してゐる萬葉集の名歌玉詠をぬいて之に親切な註釋と批評とを加へた書である。このごろの人々が今更のやうに稱讃するだけあつて、遉に尊い歌が多い。續編の方には附錄として「萬葉集の中心思想」と題する紹介的批評が載せてある。兩編共に中村不折氏の絹地に極彩色の裝幀で感じのいゝ手頃の本である。前編四五錢、續編五五錢（日月社）

寄贈書籍

■黑耀集　前田夕暮氏著

■天理教祖觀　奥谷文智氏著

■子規居士と余　高濱虛子氏著

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雜誌規定

■毎月一回一日發行

■定價一册金貳拾五錢(郵稅壹錢五厘)

■前金購讀料(四ヶ月分)壹圓(六ヶ月分)壹圓五拾錢(八ヶ月分)貳圓(十ヶ月分)貳圓五拾錢(一ヶ年分)參圓

■廣告料(一頁)特三十五圓、一等二十圓、二等十五圓、三等十圓、(半頁)七圓

■振替貯金口座は(東京二一一一六青鞜社)に拂込まれたし。

■郵券代用は一錢五厘切手に限る(但し一割增のこと)。

■編輯事務、補助團會費拂込は青鞜社へ。

■廣告申込、交換廣告は日月社へ。

■圖書、雜誌交換、購讀に關する一切の事務は日月社へ。

■原稿〆切期日は毎月十日限とす。

大正四年八月廿一日印刷納本
大正四年九月一日發行　(特價金三十五錢)

禁轉載

東京市小石川區指ヶ谷町九十二番地
青鞜社內
編輯兼發行人　伊藤野枝

東京市京橋區弓町十三番地
印刷人　柴田紅一郎

東京市京橋區弓町十三番地
印刷所　千代田印刷株式會社

發行所　東京市小石川區指ヶ谷町九十二　青鞜社　振替東京二一一一六番

發賣所　本鄉區元町二丁目廿五　日月社　電話下谷三二〇六番　振替東京二八九一四番

大賣捌　東京　東京堂

昭和44年10月30日発行　【第7回配本】

青鞜第5巻　9月号

編著者　平塚らいてう
発行者　藤原正人
発行所　(株)明治文献
印刷　江明印刷
製本　(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 4,500円

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
L
A56
S45
v.5
no.8

University of Colorado at Boul[redacted]
[redacted]304 6746555

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

明治四十四年八月二十八日第三種郵便物認可　第五卷
大正四年九月一日發行（每月一回一日發行）　第八號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

大正四年十月一日發行（毎月一回一日發行）第九號

第十月號

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

第五卷
十月號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

十月號目次

兒童の世紀（飜譯）……一　山田わか
斷片（飜譯）……六　らいてう
逝く水（短歌）……二四　三ヶ島葭
泣かましきこと（短歌）……二六　原阿佐緒
薄ずみいろ（小說）……三一　長谷川時雨
お小夜（小說）……四一　原田皐月

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

白刃の跡（小說）……五四　荒木滋子
うづ（小說）……七〇　佐藤欽子
初戀のなりゆき（小說）……八五　岡田八千代
世間知らず（對話）……九三　岡田ゆき
靑鞜詠草（短歌）……九八　數名
九月の歌壇より（短歌）……一〇三　諸家
感想より追想へ（手紙）……一〇四　生田花世
消息……一〇七　係員

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

兒童の世紀――エレン、ケイ

山田わか譯

第一章

兒童の兩親を選擇する權利(二)

モーセが有効ならしめた東洋の結婚法を西洋諸國に於ては漸々と廢して來た。けれども東洋のメネス敎徒及びマホメット敎徒の立法者の如きは今猶此の法律に大部分準據して居る。支那に於ても亦同樣な禁令が有力である。此處、彼處に、西洋の學者の中に、ぼんやりではあるが、遺傳の意味の感じが、今、現れて來て居る。サー・トーマス・モーアはプラトーの如く、結婚前の身體檢査を必要とした。此の點に付いての子の權利に關する疑問が注意され始めたのは十九世紀になつてからであつた。一千八百十五年、ロバート・オーエンが着手した研究は子供の利益になる正常な感情を一般に擴めた。同氏の研究によつて、八歲以下の兒童等が一日に十五時間から十六時間、索鞭で打たれながら働かねばならなかつた事、及び、其のために兒童等の四割、五割は不具にされると云ふ事實が明白になつた。一千七百九十八年、マルサスは『人口論』を公にし、そして彼が此の作をなすに至つた、社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

會の狀態に付いて、世人の注意を惹起した。彼は人口過多の結果なる、糧食供給の不足を指摘し、あはせて、食物の不足が正當な結婚に障碍を與へた事を摘發した。又、此の狀態が、一部分は小兒の死亡率の增大となり、一部分は子殺しの增加に結果する事をも彼は示した。そしてマルサスは此の狀態に於ける、自然淘汰の意義、及び、其の結果、人類が退化するに至る危險をも見たのであつた。しかるに彼の此の談は大なる反對を惹き起した。個人としては善良温和なマルサスも、他の道德改革家の如く、敗德、不義と云ふ破廉恥な呪詛をあびせかけられたのである。けれども彼は此等の襲擊を自若として忍受した。ハリエット・マーティノーがマルサスの說を辯護した時に、彼女はマルサスと同樣な經驗を嘗めさせられた。彼女が此の問題に付いての小說を書いた時、彼女は自身が如何なる位置にさらされて居るかを、よく自覺して居た。此の稀代の婦人――未婚のうちに、子を持たずに此の世を去つた――は未だ若年の頃から、兒童の神聖を深く感じて居た。十九歲の時、妹の出生に出會した彼女は、人類の驚くべき發達を其の最初から目擊できた事に對し、跪いて熱心に神に感謝した。此の同じ感情は、彼女の小說中に、人口の任意の制限の義務を說明せしめた。子供等が多過ぎる結果、兩親は彼等を扶養、敎育するに不可能となつた場合に、彼等が遭遇せねばならぬ運命を思うて彼女は苦痛を感せずには居られなかつたのであ

る。兒童の、此の方面に付いての權利に關して、諸國から種々の賛否の著作があらはれた。今は、至る處に、此の問題は論じられて居る。私は此處に兒童の權利の他の方面に關しての諸說の差を簡單に論じて見よう。

人種改良に今日必要なる要件は、フランシス・ゴールトンの名著『遺傳天才』に於て、殆んど云ひ盡されて居る。ゴールトンは旣でに一千八百七十年代に於て、ダーウィンの後天的特性の遺傳說に反對した。此の點に付いて、獨逸のワイズマンはゴールトンに味方し、又英國のダーウィン一派、ロマネスはワイズマンに敵對し、議論はなか〳〵盛んであつた。ゴールトンは人種改良の學問に、善種學と云ふ文字をギリシャ語から發明した。彼は云ふ。今日の文明人は、人種改良の點に付いては、古のスパルタは云はずもがな、野蠻人にさへも劣つて居る。スパルタに於ては、虛弱者、年少者、及び老年者に結婚を禁じて居た。そして種族の純粹、子孫の强壯を誇るために、幾多の個人は犧牲に供せられたのである。と。又ダーウィン、スペンサー、及びウォーレス等と同じくゴールトンは次の事實を指摘して云ふ。人間以外の自然界に於ては、適者生存を實現する、自然淘汰の原則は、經濟上の動機が、不當結婚を金力で可能ならしむる、人間社會には適用されない。と。實に貧乏は適當な結婚をさまたげて居る。其の上に同情心の發達が自然淘汰の原則をみだす一大要

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

素となつた。愛の同情は確かに個人の幸福になる動機に從つて選擇する。けれども其れが人種改良の保證ではない。健全なる子を生み得ぬやうな場合には、人は德義上、自制して結婚を控へたがよいと、或る著者等が望んで居るに對して、ゴールトンは、疾病、惡德、心身の虛弱を遺傳する結果の、人類退化をふせぐ嚴密な制度を主張して居る。彼は後天的特性の遺傳を否定したゝめ、益々自然淘汰に重きを置いたのである。

彼は、又、一方では血統上、立派な子孫を造る見込みのある家系の人々には、あらゆる手段を用ひて結婚を奬勵した。彼は、ニーチエの如く、結婚の目的は强健にして才能ある人物を造り出すにあると信じて居たからである。

文明人は、同情の結果、虛弱者、無能力者の生存をながからしめ、其のために適者の種族繼續を妨げつゝある事をゴールトンは說明して居る。ウオーレス及び他の多くの學者も亦、人類の退化を恐れるならば人は此等の問題に對して無慈悲の心で居らねばならぬと明言した。彼等は、又、下等人種が永存し、過多に增殖して、適者生存の原則を妨げしめる、道德的、社會的、同情的原動力を、新しい道德問題、新しい社會問題の見地に代へ、而して自然法は、愛他主義に、其の進行を阻まれる代りに、其れによつて支へられねばならぬと說いた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

スペンサーの思想は一大眞理を含んで居る。彼は前述の問題に關聯した點に付いて、かう云うて居る『思ひもよらぬ仕方で、後に、發達する多くの幼芽を我々は目撃する。社會のうち、及び個人のうちに意味深い變化が働きつゝあるが、此の變化は直接な結果として は待ち望む事は出來なんだが最後の結果としては信じて求める事が出來たものであつた。人類の進步及び退步を惹き起す自然法を見出すべき盡力は、幼芽に關する此等の理想の一ツである』と。此の方面に於ける科學的硏究に關して此の哲學者のもう一ッの格言――此れは科學には度々見逃がされて居る――を我々は應用する事が出來る。それは『眞理を發見しようとする熱望は、人類の幸福を增進する熱望に伴はれなければならない。』と。けれども人類が眞面目に自己淨化を始むるのを、我々が期待するにさきだつて、科學は一般に受け容れられる結論に達して居なければならない。科學が其の結論に達した時には、前述の自己淨化は必ず始められるのである。人種學及び社會學の著作を繙き、野蠻人は結婚に如何なる制限を置いたか、又迷信的偏見の上に、宗敎的に、如何に其の制限に服從して居たかを讀む時に我々は文明人が未來に於て必ず科學的證據の前には服從する事を望み得るのである。これは決して過度な樂天的考へではない。

ウオーレスはゴールトンの如く、劣等者の結婚をこばみ、優等者に結婚を奬勵するやう

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

な過酷な規定を主張はしなかつた。彼は此の問題が極めて複雜である事を認めて居た。とにかく、男女相互の愛が人種改良に缺くべからざる要素であると云ふ事は明白な事實である。もし人間が懸賞家畜のやうに容易く造られるやうなものならば卓越した人物などの出る筈もない。中世紀の人種が退歩して居たのは、最も優れた人々が寺院に逃れ、最も劣等な人間が子孫を造つたからであるとゴールトンは云ふ。けれどもゴールトンの要求するやうな嚴密な條件がそなはつてから、始めて結婚を許すと云ふ事になれば、結婚の深い意味は失はれるのみならず、猶又種族は最も貴い遺傳をも失ふ事になるであらう。

けれどもゴールトンの原則に嚴密な制限を加へ、彼の要求に質い制限をほどこしても、猶、科學は既でに彼の原則に付いて多くの眞理を證明した。そして彼の要求の全部を是認しなければならなかつた。子供の兩親から遺傳した性質は、兩親の性質とは全く異つた、かたちで現れる事がたび〳〵ある。三百人の白痴のうちで、百四十五人迄は飲酒家の子であつた。癲癇病者も亦飲酒家の子である事が多い。又、外見は全く健全な人が突然、兩親の有つて居た或る病氣に、兩親が冒された年配になつてから、襲はれる事がある。けれども一ツの悦ぶべき事は兩親から遺傳された惡質に人は意志の力によつて抵抗し得ると云ふ證據である。又、一方の親の病的性質が他方の親の健康と中和して子の上に現れると云ふ

事も道理ある事柄である。けれども此等の説、並びに、此の説に含まれた他の多くの諸問題は未だ〳〵最後の斷案には到達して居らぬのである。

モーヅレーは特に精神病の遺傳に關して研究した。そして兩親の神經病及び精神病が子供の上に其の性質を變へて現れる事を發見した。そこで、彼は結婚をする前の健康診斷を要求し、また、結婚後現れた精神病は、正當な離婚の理由とすべしと提唱した。古代の貴族が結婚するに家系を重視したやうに、未來の結婚は、新しい意味に於て、血統の純潔を重じなければならぬと彼は主張した。モーヅレーの叙述の一ツは非常な趣味に富んで居るから、私は此處に其れを紹介して置く。彼は曰ふ。『父が富を得るために、全精力を傾注して居ると、其の人の子は不完全である。何故ならば神經をあらん限り緊張させる事はアルコールや鴉片と同じく身體の組織を破壞するからである』と。もし此の説が確乎たるものならば、富と權力を得るに汲々として居る、今日の社會生活が如何に人類に有害であるかに付いて、旣でに存在して居る諸説に加へて更に又一説を我々は得た事になる。而して、これは、事業及び生産に新しい目的を與へるやうに、生存のかたちを變へねばならぬ證據である。各人は彼の生活を廣く又完全に營むべく要求しなければならぬ。そして各人は自身の全き生活と等しい生活を營み得るに適した子孫を社會へ殘すべきである。こうした時

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

代に人間が到達し得た時、或る畫家が今日の富豪の子の代表者として保存して置いた一少年の肖像を、人が見るならば、彼はその顔に恐るべき間歇遺傳を發見するであらう。

私は文學の方面から、此の問題に於けるニィチエの説を述べて見やう。ニイチエは彼の『超人』の理想をダーウィンの説の上に直接に基礎を置いては居ないけれども、ブランデスが此の頃云ふたやうに、彼の作はダーウィンが未だ豫期しなかつた、ダーウィン主義の大なる結果である。『今日の人間は橋である。動物と超人の間の過渡期にある』と云ふたニイチエの確信は同時代のどの人にも見られぬ强さを現して居る。此の關係に於てニイチエはゴールトンと同じ嚴格な態度で人種改善に對する人間の義務を促した。けれども彼は其れを科學的證明を持てゝなく、詩的、或ひは豫言的態度で云ひ表はして居る。

此の問題に付いての著作は續々と增加する。そして相容れざる諸説が後から〳〵あらはれて來る。此の時にあたつて『人種の退化を防がうとするには、我々は社會上及び人類學上の要素を顧慮せねばならぬ』と云ふた、獨逸の社會學者クレラの警告は我々の注目に價するものである。クレラの論旨の主眼とする處は、ダーウィンの後天的特性の遺傳説と其の反對の説に重きを置かない事である。ダーウィンは、兩親より、子に遺傳される胚種血漿 Germ plasm は一定不變であるから、よい子供を造るには父と母の長所が取り合はされ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

そして又自然淘汰によらなければならぬと云ふ說である。此處で、我々が注意せねばならぬ事は、社會的及び政治的の行動をとる前に、我々は人類的動機、則ち人類改良と云ふ考へを基礎として置かなければならぬ。クレラは又最後に云ふ『我々が人類を文明に導き、向上せしむる計畫に着手する前に我々は、スペンサー、ゴールトン、ロンブロゾー、フエリー、リボー、ラッウルノー、ハブロック・エリス、ヘークラフト、コラジヤンニ、セルギ、リチー等の著作から材料を集め、其れを組織的に修正せねばならぬ。換言すれば、我々が社會學者になる前に我々は動物學者、人類學者、心理學者であらねばならぬ』と。

知的特性に關して、非常な天才は其の特質を母から遺傳されると、主張された。此の事實は、今日に於て、偉人を生んだ母達に對する世人の興味を增加した。これは子が男である場合だが、もし娘が天才であるならば其の娘の能力は父方から遺傳されてあるやうに信じられて居る。更にもう一ッ確かに信じ得る說は『一ッの血統の中に傳はる特質が或る一人の上に、世界的天才の高度に迄、あつめられた時には、其の偉人は大抵子を持たない。もし又持つたとしても其の子は多くは平凡である、ばかりでなく時としては無能力者である。』と云ふのである。これは自然が此の一大人物を造り上げるために其の生產力を使ひ盡したのかも知れない。或ひは又此の天才の智的方面の創造力が生理的方面の創造力を減じ

たのかも知れない。

遺傳の問題と相並んで、種族發達の問題がある。ダーウインは彼の『原種論』の卷頭に於て、高等なる人種を造るためには、如何に血統の純粹を必要とするかを說いた。此の說を論據として、或る近世の排猶太の著者は『血の純粹に關しては猶太人は人種の好標本である』と論じた。最も著しい猶太人の代表者なるデスレリーは次の言葉で此の同じ思想を云ひ表した。

『人種の純粹があらゆるものゝ源である。人種程尊いものはない。故に不注意に他種屬の血を混合する人種は滅亡する』と。けれども又他の專門學者は或る種族と或る種族との血の混合は其の子孫のために大なる利益があると云ふて居る。

ウエステルマルク教授は、戀愛が肉體の美に連繫する意味、及び其の美が人種のために要用である事を正しく說明して居る。曰く『肉體の美は、動物と人間を區別する特性、兩性を區別する特性、及び種族を區別する特性、これ等が充分發達したものである。これ等の特性のある人々は彼等の天職に最も適して居る、のみならず外貌も亦美しく、相手を引きつける大なる力をもつて居る。がこれは自然淘汰の結果である。こう云ふ人は、個人としては身體の完全な諸機關を具へ、性的動物としては彼等の性の任務を果し、人種として

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は彼等の周圍の狀態に最もよく適合して居る。生存競爭に壓倒される者は此の競爭に適合しない個人を愛する愛の本能を持つて居た人間の後裔であるし、又此の競爭に勝利を得る人は此の競爭によく適應した人間の子孫である。こう云ふ風にして、周圍の狀態に最もよく適した者が最も美しいと云ふ、人間の趣味が發達して來た。であるから、健康、則ち外界の襲撃に對抗し得る力は美と同一であり、又人種及び性の純粹のかたから外れて居る者は、外れて居るだけ、それだけ健康も美も其の度が減つて居ると云ふ事になる』と。

又他の著者は此の說を確かめるために足の形を用ひた。恰好のいゝ踝の、小さい、弓形の足は一番美しいと其の人は云ふ。かような足は其の骨格が細くて、強く、そして彈力性を有つて居る。こう云ふ足は彈力性がある計りでなく、扁平形の足よりは、重きにたへる力を有つて居る。そして步む際に又跳躍の際に肺や心臟の活力を增す。故に其の步行を自由に、容易に、確實に輕快にそして嚴かにする。此の足の特色が美であると同じ道理で、肉體の强壯及び安靜が直ちに精神に影響を及ぼして自信を得さしめ、そして生活の喜び及び其の優越の感じを增さしむるのが高等人種の特徵である。

此の說はどの位の程度迄眞理であるかは容易に定め難い事ではあるが、とにかく、此の說は漸々と勢力を得つゝある。則ち此の說に從へば、肉體と精神は其の周圍に適合する事

によつて、相互ひを援けて發達して行くのである。

故に、如何なる條件が人類の淘汰を最も有効に促すか、又如何なる外界の條件が自然淘汰の中に出來た特性を強め、或は弱める事を研究する必要がある。そこで我々は肉體の運動の要用な事を考へねばならぬ。けれども此の肉體の運動に付いて我々が曾て嘗めた苦い經驗は、狂的競技熱の結果を防がねばならぬことを我々に教へて居る。かやうな競技熱の結果は殊に母態に關して婦人に有害である事を證明した。けれども空氣の新鮮な場所で、遊戯體操、徒歩競爭、及び瑞典農夫の舞踏を變型したやうな舞踏なぞは新時代の改造に最も適した手段であらう。

美術が人種改造に影響を及ぼす事は、人のよく知る處である。畫家バン・ジョンスが英國婦人の新しいタイプをつくつた事は爭ふべからざる事實である。彼が婦人の標本として、ゐがいた、温和な高尚なスタイルは漸々と婦人達に適用された。英國の婦人は顏のかたち計りでなく、其の表情迄も彼の理想に似かよつて來たと云ふ事は、彼の畫のうちの若き英國婦人を見ればすぐ分る。彼は、若年者が未だ其の事に付いて、氣付かぬさきに、彼の理想を彼等の心に刻して置いたのである。彼等は、彼等の畫帳の中に彼の理想を見、其の理想を目前に置いて發育した。そして彼等の服裝迄も此の美術家の畫のうちの人物をまねて

仕立てられるやうになつた。これに付いては、他のもう一ッの理由がある。それは希臘婦人の婉麗な容姿は、希臘の塑像の感化を受けて居ると同じやうに、今日の母達はパン・ジヨンスのタイプを子供等に傳へたのだと想像されてゐる。古代に於ては、他の小さい事柄に關してゞすらも、たとへば、彼等の常に慾望して居る金髪のやうなものでも、適當な方法をまもる事によつて、得らるゝやうに信じられて居た。

母の上に及ぼす、かう云ふ種類の外部の影響の意義に付いては、其の結論をひくに適當な材料を我々は未だ持たぬのである。又此の點に付いて、學者等は皆不一致である。であるから私はこれを他の事柄の中に、唯、附帶的に記載して置いた。我々は人間出生の狀態に付いて最後のそして確かな洞察を得る前に此等の事柄に付いての凡ての說を建設して置かなければならない。けれどもこれに對する科學的知識は今の處では全く缺けて居るから、如何に內外の狀態が人間の出生に影響するかを說明する、前世紀に始まつた廣義の研究と文學とを、我々は唯參照するだけである。故にこれ等の事柄に關しての多くは未だ朦朧たる中にあるのである。けれども、これに對する知識を、今や人間の靈は、生まうとして居る。故に、新しい思想は漸々と創造されるであらう。

これに關聯して、これ等の範圍に於ける、法則の新しい觀念の發達を、私は今論じなけ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ればならない。峻嚴な異教の社會に於ては、虛弱な、或ひは不具な子供は棄てられたのであつたが、これに反して基督教の社會は、生理上、心理上、不治の病にかゝつて居る子供でも、又は見苦しい、そして其の見苦しさが當人にも、周圍の人にも絶えざる惱みを與へて居る場合に於てゝすら、さう云ふ子供の生命を長からしむるやうに、つとめる程溫厚である。けれども死刑又は戰爭を實行する社會に於ては、他人の生命を消滅せしむるやうな事を平氣で提言出來る程に、人命に對する尊敬が充分強くないのである。唯死刑囚に憐みが加へられる場合には未來の人類は、一定の取締りのもとに、責任を負うた醫者の手によつて、苦しみのないやうに死刑を執行するであらう。けれども基督教の社會は正出の子と不正出の子とを未だ區別して居る。が此の區別程、兩親の義務に付いての本當の道德の概念を妨害するものはない。凡ての子供が其の兩親の兩方に對し同等な權利を有つて居る。又凡ての兩親が其のどの子供に付いても同等な義務を有つて居る筈である。この道理が認められる迄は、男性女性の共同生活に付いて、未來の道德の基礎はきづかれないのである。いつかは、社會が戀愛關係を個人の責任にかゝる私の事柄と見る日が來るであらう。其の時には戀人等及び既婚者は、彼等自身を全く自由と感じ、又社會もさう認めるであらう。感情に從つて取り交した束縛的な約束、排他的に相手を所有しようとする要求、此等は、

感情の細やかに、充分發達した人には、低級な人間の戀愛的情操の遺物として見られて居る。かやうな感情は、支配權、虛榮、蠻行、及び盲目な情慾に對する欲望から起つた事である。完全な貞節は完全な自由によつてのみ得られ、完全な個性の受授は完全な自由のうちに行はれ、完全な優越は完全な自由のうちに生れると云ふことを人々は理解し始めた。自分の對者に自分の感情、意見、習慣、及び嗜好を强いてはならぬ。各人は自分に對する相手の感情の恒任を自分の幸福と見て居つて、權利と見てはならない。又相手の自分に對する感情の斷絕を自分の不幸と見て、不公平と見てはならない。かくしてこそ、二個の靈の間に充分な、純粹な自由があり、そして兩方が絕對に獨立して居つて、しかも全き和合があるのである。

自由が貞節を危うはしない。敎會及び法律が要求するやうな貞節は、確かに敎育上有力な手段であつた。けれども其の方法は其の目的に相反するものであつた。なぜならば、これは占有と云ふ感情を造つてしまつた。そして戀愛を崇拜する心を失ふやうになつた。腕力に基礎を置く要求は靈性及び官能の愛に敵意を起さしめた。けれども輿論を恐れて、男と妻の間及び彼等を世間の間にあらゆる不信實な行動があつた。强迫の繩が取り去られた時には人の感情は强められる。なぜならば、貞節の外部の支へが缺乏する時には、其れに

對する必要な力は内部から生れて來るものである。たとへ、人間は常に彼等自身に付いて、又愛の目的に付いて重大な誤謬をなしがちなものであるけれども、又たとへ、月日が人間の性質及び感情に變化を與へるけれども、又たとへ、相愛から結果した結婚に於てゞすら『結婚によつて人生が破壞されるよりも、結婚を破壞したがよい』と云ふたニイチエの言を正當とするやうな事情が起ることもあるけれども、猶全體から見て、自由は貞節を奬勵する。して貞節は常に、其の心理學上及び倫理學上の價値の經驗に支へられて居るのである。

大なる愛の幸福のために、人が、準備すると云ふことは、輕々しく男女の關係を結んだり、解いたりするのではない。自由意志の貞節は、高き人格の標(サイン)である。何故ならば、これは人生の意義の中心に其の意志を集中するものと假定するから。そして各人固有の眞の自我の一致を意味するのである。これは愛に於ける貞節と同樣、あらゆる他の眞實と云ふことに付いて眞理である。唯、愛が毎日の實踐的宗教であり、安息日の祈禱であり、又靈の絶えざる監督のもとにある時、又人格の絶えざる發育である時、これが偉大なる愛である。(此の場合に、何故、古いけれども立派な「神聖」と云ふ言葉を用ゐてはならないか。)此の時にこそ、人間は、前時代の結合よりも、高尚な權利を有つやうになる。何故ならば、此の時に於て、始めて、我々の最も高き自我に對して本當の貞節があるのである。けれど

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

も結婚が此の性質を有たない處には、此の權利も存在しない。かゝる場合の結婚は、大なる情熱のために宥恕し得るとしても、それは取るに足らぬ感情である。一時的の結合の結果、生れた子は、其の兩親が不完全であると同樣に不完全である。或る壯年の醫師が嘗てかう云つたことがある。「偉大なる愛は、其の愛の所有者の生命に深く喰ひ入つて居る。だから、もし其の人がその愛の對者を失つた場合には、彼は、最早、自分を全體としての生命として感ずることは出來ないで、二つに裂かれた生命として感ずるのである。けれども自然は一度より以上の戀愛を可能にして、人種の滅絶を防いで居る。併し自然の理想が何であるかは疑ふ餘地はない。若き男女が其の最も深い、初戀で結合したならば、此等の男女が生む人間は最も完全で、强壯で今日の人間とは全く違つたものであるであらう。けれども今日の社會狀態では、若い人々が愛をもつ時には彼等は結合のてだてを缺いて居るし又彼等が其のてだてを得た頃には、彼等は最早、以前に感じたやうな深い愛はなく、唯僅な衝動によつて結婚をする。この衝動はよしんば眞實なものであつたとしても、併し彼の愛の實體は既でに失せて、今の配偶は、唯、以前の愛の代用物に過ぎない。（つゞく）

斷片

らいてう

（エレン・ケイより）

○

戀愛の自由によつて賣淫制度を絶滅せんとする青年の欲望は性的道德のより高き發展の證明の一つであるが、自由離婚によつて姦通を絶滅せんとする現代の欲望も亦その證明の一つである。

○

種族は一夫一婦制のために存在するのではなく、一夫一婦制が種族のために存在してゐるのである。だから人類は一夫一婦制の支配者であつて、自由にそれを保存することも出來ればまた破壞することも出來る。

○

自由離婚の辯護者すらそれがさまざまな弊害を含んでゐることは十分よく知つてゐる。

併し同時に彼等は新しき社會形式から生ずる弊害に對する不安ほど人間精神の信ずべから

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ざる懈怠を證明するものはないといふこと、酷き弊害は無神經極る平穏をもつて默許されてゐるといふことゝを知つてゐる。

自由離婚がいかなる弊害を含むにせよ、それは結婚が生んだそして今なほ生んでゐる弊害以上に決して惡いものではない。現代の結婚は凡そ近代生活が示し得る最大なる自由の侵害であつて、最も粗惡なる性的習慣、最も無恥なる取引、最も苦悶を與へる心靈の虐殺者であり、最も殘忍刻薄なるものである。

○

永遠に對する戀愛の欲求が戀人等を驅つて、永遠に信實な誓をさせるより當然なことはない。またこの約束を補へて、その上に法律を制定する社會の惡魔的計畫より異質なものはない。と同時に人々が相互に戀愛の約束、信實の誓によつて支へられた法律上の權利を廢止するより必要なことはない。

人々がかれ等自身の法則を理解すればする丈、良心あるものは次第に約束することを躊躇し始めるであらう。なぜなら彼等は何時內的要求によつてそれを餘義なく破るかも知れないからである。

結婚の約束をなし、或は戀愛が消滅して、他に對する愛が目醒めた時、結婚を繼續し若

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しくはその繼續を要求することは不可能だと考へる人々の數が次第に多くなつてきた。

○

戀愛的に高尙な現代人は、最も深き屈辱の觀念なくして、自己の愛せざるもの、若しくは自己が愛せられてゐないことを知つてゐる人に從屬することは出來ない。かくして一方の若しくは相方の愛なくして固守せられる結婚はこの屈辱、若しくは一生の獨身生活によつて深き苦痛を結婚者に與へる。

これが問題の心髓なのであるが、このことは子供のことのみに注意を奪はれて、兩親も亦かれ等自身一個の目的であるといふことを忘れてゐる人達によつて閑却されてゐる。子供等のために兩親が種々な罪惡を犯さなければならないと思ふものはあるまい。自分の子供を養育せむがために紙幣僞造の罪を犯した婦人は無論非難されなければならない。然るに「自分の子供のため」に年々その結婚に於て、彼等自身賣淫を感じてゐる婦人は寛大に批判されてゐる。

結婚者にして兩者の戀愛的要求が少い爲め、友としての生活を繼續するものがある。また愛がなくつても共棲の屈辱を感じないものもある。これ等の人々は恐らく家庭を維持することによつて子供等のために最善を盡してゐるのであらう――併しこれは同じ狀態の下

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

にある他の人々をかくして凡る總ての價値を失へる人生の苦痛から遁れさせることは出來ない。そして互遁かさなくば離婚に終るのはこれらの人々なのである。

○

戀愛が消滅した後でも兒童の養育に彼等二人の手が必要なところから離婚しない場合があるとしても、それは只親としての職分が殘つてゐる丈で、眞の結婚生活が續いてゐるのでないのは勿論だから、かういふ心の離れた夫婦は決して新しい生命を更に造り出してはならない。

○

戀愛の永續なき場合に於てさへさまざまな困難、記憶、喜び、悲しみなどが男女を結び付ける、また最も深き意味に於てかれ等は別れ得ない、何故なら一方の性質の大部分が他方に殘つてゐるから――これは實際に於て羈絆となつてゐるので、それが明白であらうが、不明であらうが、堅實であらうが、自由であらうが、少なくとも義務の觀念ではない。若し或る場合に於て結婚生活が夫婦の感情を涸渇せしめ、一陣の風が枯葉の如く彼等を吹き散らすとも、或はまたそれがそれらの感情に深き根を下し、あらゆる葉がひきちぎられ、人生が恰も冬の枯枝の如く空虛に見えても――それはなほ共通に生きてゐる。

かくして最初に於て、官能の愉樂を傳へた男若しくは女が相手の男若しくは女に對して決して忘れられない記憶を保存するといふことは生理的及び心理的事實である。男の死後數年を經て、女が時として最初の男に似てゐる子供を產むといふことさへ云はれてゐる。かくの如き影響は女子の場合に於て一層明かであるから、女子の貞節はまたこの理由によつて男子のそれより一層自然的に必要となつてきた――たとへその程度こそ少いが、同一の影響は男子にも當てはまるにしても。

○

結婚は斯の如く人間の靈肉生活の狀態の中に確固な同盟をもつてゐるから、人は離婚の自由が一夫多妻制と同一になることを恐れる必要はない。この自由が廢止するところのものは唯だ一生に亘る奴隷狀態である。

○

男子がその妻を捨てんとする欲望を制限する强迫に信賴する所の人々は如何なる程度まで、今日に於てさへ精神的の力が法律の强迫にも拘はらず、離婚を容易ならしめてゐるかを忘れてゐる。何人も現代に於てその相手たる男若しくは女の意思に反對してまで相手を保留しやうと主張するやうな倨傲な夫若しくは妻を發見することは、離婚の結果が明に一

方の破滅となることが明である場合の外は稀である。通則としては離婚拒絕の權利を振り廻す人々は狹隘なる人か或は下劣な人かである。若しこの權利が廢せられるとも、これは現今に於てさへ結婚者を結び付ける方の消滅をもち來すやうなことはあるまい。

○

大なる離婚の自由が與へられる時、輕卒に別れる人々は今強制結婚に於て、密に相互を欺く人間と同種類のものである。

眞摯なる人にとつて、離婚は常に眞摯なものである。思想あり、感情ある人は自己を愛した人を、または愛する人を意識的に傷けるまでには彼れ自身まづ大なる苦痛を嘗めたのである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

逝く水

三ヶ島葭

秋風のたちそめにけり目を閉ぢて失せたるもののゆくへ追ふ朝

夕ぐれの野にきて立てば月も見えず耳もきこえずなりし我見ゆ

何ものかたのみてわれの打もだしありしひと日の今暮るるなり

言葉もて戀ひしといふは悲しかり弱き心とあなどらるとも

鉢あまた載せし二つの吊臺に揺られて來る朝顔の花

我として猶明らかに言ひもえぬあきたらなさにみたされてゐぬ

秋立てばまづ涼しさをよろこびぬもの思ふ日のいつかあるべき

わが心よわしと叫ぶ一言になほひと恨む心交らん

看守より少し離れて青草を刈る囚人をみればうれしき

わがたのむ一つの道もときにふと迷はされたる野の心地する

みにくくもことにふれてはいらだちぬおきらめやすき心にも似ず

秋の雨おのれ衣を重ぬれどはた座れども寂しかりけり

一日だに別れてあればたちまちに戀しくなるを飽くとさへいふ

ふけゆけば蛙のこゑも冴えかへる初夏の夜となりにけるかな

今更に男を憎むわれのさが思ひあはせてをののくおのれ

うれひある身さもおのれはおもはねどあやしきまでに默しつゞくる

思ひ出をかたる男の一ことに打たれてものをおもふなりけり

洗ふなさいはるる襯衣をとり出だしうち濯ぐまでおとろへにけり

よろこびもはたかなしみもあらざるかさびしきまでに疲れおぼゆる

このわれが思ふといはばいやさうにうとまれんなど思ふなからひ

相遠くへだたりてのみおもひうる君にかあらん涙流るる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さかいきを半剃りたる幼子を男かい抱く夏の夕ぐれ

わが心今眠れりとおほらかにいふなり何をたのむ心ぞ

眠りたる男の衣にふるるだに今は欺くここちするかな

このままに眠りつづけよ覺めてただ歎くにすぎぬこの身なりせば

かの屋根に光る露すら身に重き心地もぞする男とあれば

たはむれをいひたまふかと思ふまにあまた君の怒りたまへる

はかなかることとおもへど後の日をたのむほかなほすべなかりけり

苦しみを同じうせんと思へども身を忘れなばいかがすべけん

あはれ身の何となりしぞ靜けさに目さへ閉づれどまぼろしもなし

大空の日を仰ぎても口惜しき心なれども老いそめにけん

めづらしく我の心のさやかなる夜とよろこべば蟲の鳴くかな

恨めしき男とともに歩むなり木槿花はな咲く郊外の墓地

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

墓の土しめやかなるを踏めどなほなやましき身は石に裂かまし

恨みつつともにあることそわりなけれ別れなばなほ戀しからんを

ああ心君をば君と思ひえぬ悲しき日なり君の恨まる

束の間のつゆの光となみすれど美くしきこそ泣くべかりけれ

夕空も見ずしてわが子眠るかと眠りそめしを抱きて下り立つ

君もただこの子ばかりが味方ぞといひつつ今日は幼子を抱く

いたましく夏の夜あけぬ子の泣きて君もおのれも睡らざるまに

子守うた謡へるひまにわが心歌ともならず消えうせにけり

とく立てと君兒の手をばとりていふその時われを捨つといふごと

答ふべきわれかと思ひ片言をふといひそめし子にをののきぬ

タオルもて子をば包めどわが濡れしからだに秋の初風ぞ吹く

汗ばみて眠りに飽きし子を抱けば未明の窓に蜩の鳴く

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

泣かましきこと

原阿佐緒

夜晝なくものなやみせる汝が母の乳の涸れなばといとほしみ抱く

兒に頰寄せあれ雨よなど云ひながら涙を流す母の眼を見そ

兒が外を泣きてかへるも見むとせず暗らき沈默にとざされし身は

君吾にかくし忘れし毒の盞のぞきけるより狂ひそめしか

髪も身もひきちぎりたき心地して秋風にたつ吾ぞ魔のごと

あたらわがまことも君に値ひなくうらぎられつつありしかなしさ

ざんげせよ悔いよと人を責むるわが心猛りて雨をみつめし

心よりなさぬ罪にも悔いて泣くわが美くしさわがおろかしさ

新らしき日にのみ待ためいつはらぬ君がまことを君が情けを

ねたみなどよわき子ばかりするものと苦がき笑らひを自らに强ふ
足の指冷えしをおさへ泣かましきことを思へる秋雨の晝
人妻のひとりゐてふにうちさわぐやからの中にありわびにけり
力あまり何にも吾の抗らはん心がまへの今日ぞをかしも
人らみなわれらが生きのいとなみの全からぬをあざめるらしも
戀人の面影も見ゆ銀色の小さき羽蟲の舞へるまなさき
戀しさふささやきの如しのびかに朝けの蚊帳に通ふ秋風
かくひとりいつまであらむ秋の來て肌も荒れなむ君を見ぬ間に
忘れしや思ひいますや知らねども兒を見せまほし君を見まほし
兒がちさき手にも撲たせんおろかなる母よと淚まろぶこの頰を
消息を待つにも勞れ淋しくもなげやりに日のゆくにまかする
さびしなどわぶるいとまのあらぬまで心とらふるもののあらじか

灯もささぬ蚊帳ぬちにねて夕ぐれの秋風をきくひとり病みつつ

わが背子は遠し兒はまだ乳ばなれもせぬにはかなや病みそめし秋

ものを書く指の細りの眼にたちぬ秋の來てかや人戀ひてかや

あな善しと思ひしのみに摘まで來し花をふとこそおもひ出でたれ

肉の破るるばかり病め痛めこころの苦惱しばわすれまく

蒼暗らき晝の嵐に音をひそめ鳴くこほろぎに病む身さびしむ

嵐こそわれの心に共鳴す呪ひごころの荒れすさぶ今日

樹々の葉の生々しきがひきちぎれとぶもここちよ嵐吹け吹け

嵐の中桐の廣葉のうらじろのたまたま光り搖るるさびしさ

夕さりて嵐なごめばものの樹の病ひめきてぞたてるかなしさ

得て後に悔いなとばかりわがのぞむものを與へし君は怖ろし

何事かあせる心につきまとふかなしみに堪へ今日も暮れけり

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

薄ずみいろ

奈々子

私はこんなものをかいておいて、誰に見ていただかうといふあてもありません。親にも妹にもはづかしくつて見せられはしません。これはほんのわたしの心ゆかしでせう。自分と自分に書殘して、魂を慰めてやつてゐるのでせう。わたしの薄墨色のくらしも、まあこんなものでも書いてゐて、自分を悲しがつてやれるように、心にゆとりのできただけが、すこし諦めのついたしるしかと思ひます。何にも云はないで死でしまうといふことは、よつぽど傑い人でなければ出來ないことでせう。わたしは自分と、とはずがたりをするだけでも屹度、汚されぬ靈魂の童貞といふものがあれば甦つてくれることゝ信じてゐます。わたしは廿歲の女ですが、もしも此「薄ずみいろ」が人樣の御目にはいるときに、今時こんな古い思想をもつたり、こんなみじめな自分といふもののゝない暮しかたがあるものかと思はれるかもしれません。けれどもわたしは下町の、大店の藏と藏との間のあんまり現代の風が急にはいつてこない、堅氣一方な場所に生れて、生れたてには大變に長命をした、文化うまれの大祖母さんや、文政何年とかの祖母さんたちがゐて、その方達のお部屋には、行燈をつけてゐましたし、二人　老女は前帶に結んで、おひきすそでゐたほどですから、家內もよつぽど世間とは足並が遲れてゐて女といふものは三界に家なしといふ流儀に育てられてきたといふことを、すこしでも知つてゐていたゞかない

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と、わたしといふものゝ苦しみは、屹度くだらないものに違ひないと思ひます。わたしはまつたくくだらない涙に自分の一生をくらさしてしまつて、名もない小さなお墓の主になつてしまうのかもしれません。あんまり自分が可哀さうなのです。けれども我儘なのかもしれません。何處の國に嫁づいて、自分の身が穢れたと苦しむ女がありませうか。

わたしは寺小屋育ちで、現代の風には吹かれたくつても吹かれることが出來ませんでした。結綿に結つてゐるわたしの髷の下の頭の心には、學問もなければ考へもありはしません。なんにもしらない從順なわたしといふものばかりしかありはいたしません。そのわたしが一人で切ながつてゐることが、もし惡い、ゆるせないことなのならば、わたしといふものはもつと強く苦しんで、早く此世にゐなくなつてしまう方がよいのだと思ひます。わたしは此書きかけを、簞笥の底へかくして見たり、帶上げの中へ入れて見たりしてゐます。もし目つかつたら大變です。あの人に見られたらば、「張り殺すぞ」と怒鳴られてわたしはあの太い腕で一打ちに殺されてしまふのに違ひありません。わたしは死にたくないことはちつともありませんが、あの人に息の音までとめられるのは嫌なのです。あの人が厭はしいばつかりに苦しんでもゐるのです。といつて決してあの人は惡人ではありません。善人すぎるのかも知れません。お金持ちで、ちつとも敎育がなくつて酒呑で、お酒のために眼病みをしてゐる人です。

わたしは祖母さん子に育てられて、年頃の御友達をもたないせいか、ほんとに好き嫌ひがはげしいのです。子供のをりは食べるものも嫌いな方が多かつたと覺えてゐます。豆腐がまつしろでぐにや〱してゐて、冷たさうなくせに折惡く暑かつたので氣味惡がつたり、まつ黑にすつぺりした茄子が大嫌いであつたのだ、飯事の遊びにお齒黑だといつて口に入れられた晩に、急に胸を差込ませたりしたほどでした。よく祖母は、この子

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は妙な子だ、一目見て嫌だ、厭ひださいつた人は、不思議に好い人ぢやないさ云つたりいたしました。私はそれが病氣なのでせうか。女は生涯にたつた一度嫁づくものださ、ちいさい時から言ひきかされて、死んでも歸られないさころださ思つてゐるのに、撰りもよつてさう／＼その病氣がこない前から出てしまひました。

口だけでは親切な出入の人達や、心の病を知らない慈愛の深いみよりの方達は、あの醫者がよいの、この藥がよいのさ云つて下さいますが、私のこの痩れはなんで癒りませう。二六時中心が顫へてゐて、虐げられる弱い魂が、反抗して苦熱を起して惱んでゐるのですもの。

もつさ働けば元氣が出る、考へこんでゐるのが病氣の源ださみんなが云ひます。わたしも働いてわすれられる事ならば、堀井戸の水を日に何十荷くみあげようさ、石垣の石を幾度背負てはこばうさ、靈魂さへ樂に休ませてもらへれば嬉しいさ思ひますが、わたしの寢室はわたし一人の自由にならない牢獄で、わたしを保護してくれるさいふ美しい名の下に、黄金の鍵をもつてゐる人があつて、わたしは妻さいふ名の下に操をたてるこさの出來ない猿轡をはめられてしまつて、見えぬ鎖で足械をかけられた五體は、云ふこさも出來ない屈辱をしのばなければなりません。私は思ひつかれたすこしの間の晝間の眠りにも、胸に蛇が巣ふようで切なさに叫ぶこささへあります。

わたしは自分一人がよいものになつて、あたりの人をみんな惡いものに書かうさは思ひもしません。わたしの心一つが鬼をも生み蛇をも生むのは知つてゐますが、女さいふものは、こんな心持ちをもつてゐるものもあるさいふこさを、誰にも話せないのが可哀さうださ思ひます。廣い世の中のことゆゑ、同じような氣の弱い方が一人や二人はあるでせうに、お互に死ぬまで洩らさないこさですから、泣きあふこさも出來やしません。

わたしは身の廻りに、何か變つたこさがあればいゝさ思ふようになりました。もしひよいさ見て、ちよいさ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

でゝ私の好きさうな人が、もしか鐵砲でうたれでもするやうな場合があつたら、わたしはいきなり其人を突拔けて、身代りになつてやらうと思ひます。たとひそれがわたしを知つてくれる人であらうがあるまいが、氣狂女が出てきたと思はうがかまひはしません。

わたしはどうしてこんな風に思ふようになつたか、ちつとも熱しないで、ありきたりにかうなつていつた私の心持ちを回顧つて見ませう。心の鏡にうつる姿が、わたしに同情するか、わたしの我儘をいましめるか、それは自分にも分りません。

これだけが前書です。本文は前書よりみじかいうちに書きたくなくなるかも知れませんが、もしそのうちに私が消るようになくなつたらば、殺されたのでも、自害したのでもないおしゆんといふ女の書置きだと見て下さいまし。

山茶花が咲いて、爽やかな渡鳥の聲が小春日和のあしたをおとづれるころ、わたしは何とも名のつけようのない、憂欝な、氣の引立たない病氣にかゝつてやすんでゐました。「十九の厄が、輕くつてもおさしになつたのでせう。」なんて、何にも知らない生花の先生などは、見舞にきてさう云つてなぐさめてくれましたが、それにしてもはかばかしくないのが困つたといふように眉を顰めたりしました。

たつたそれだけの事を云はれても、わたしは、何にも知らないのだ、わたしの心持ちは

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

誰にも分らないのだと諦めながら、それでも泪組んでゐました。わたしのなやみを、すこしでも察してゐるのは、妹とお母さんと二人ぎりでせう。妹はたつた一つ違ひでゐてゝ私よりずつと老成(ませ)た姉さん氣取りの人でしたから、枕許に他人のゐないときなんぞは、私を納得させようとして、

「いつまでも考へてゐるものぢやありませんよ。おしゆんちやんが機嫌を惡くしてゐるとお母さんが案じてゐて可哀さうですからね。」と云つたり「そんなに氣にするほど嫌な家ではなささうよ、みんな面白い人達ですとさ。」と、其家のことを知つてゐるといふ樣子を見せて、聽きたければ話してあげませうといふ素振りを見せたりしました。

「お君ちやんは、お母さんにたのまれて、わざと聞かせようとするのだ。」と思ふと、わたしは小夜着を額までかぶつて、どんなことがあつても聞くまいとしました。

　そんなにするとすぐ熱があがつてきて、苦しいので胸まで掛ものを反退けるときには、ほつと息をして汗ばんだ胸や手をきゆつきゆつと拭くと、妹も氣の毒さうにして額に濡れついた髮をとつてくれたりしてだまつてしまひました。

「困つてしまうね。そんなに氣が進まないのなら、聞いたときにはじめつから嫌だと云つてくれゝば好いに。今更どうすることも出來やしない。今になつて、いつもの病氣だと云

へはしません、親がついてゐてさ。」「だけれど、おしゆんちやんも可哀さうね。」

「可哀さうなことはありません。親達が取りきめた、こんないゝ縁談を嫌がるなんて我儘です。親不幸なのですよ。」

うとうとしてゐる枕許で、お母さんとお君ちやんが、わたしに内密（ないしよ）のような、態（わざ）と聞かせるような話をしてゐると、わたしの半眠りの眼からは、熱い泪がだら〱流れて、それから目を開いてお母さんの顔をまともに見るまでには、

「だつてお母さんは、私に返事を一言もさせなかつたぢやありませんか。取きめても好いだらうねとおしまひに嚴敷（きびしく）おつしやつたとき、わたしは大變だと思つて一生懸命に、（どうか待つて下さい、お願ひですからわたしの云ふことも聞いて下さい）と云はうとするとそれを察しないお母さんぢやないのに、私に口をきかせないで（昔つから婿の方でとやかく云つても、望まれて、よく探してから申込れた女の方から、見合まですましておいて、嫌だといふことは出來ないものなのですよ。そんなのは男撰みだといはれます。娘子供が男の容貌（きりやう）を好ききらひするといふのは、親の教育がいたらないからだと親まで笑はれます。あすこの家は羽子板のように、幾人嫁入りざかりの娘をならべておくのかと、お前さんの心得ひとつで、妹達まで縁遠いように笑はれます。今更嫌といつても親が許しはしません

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

から）と壓石で押しつけるやうに云つて、わたしの涓なんか目にも入れないで、とりつきようのない、（好いだらうね）と念をおすにもあたらないほど壓制だつたくせに、（聞いたときに、嫌ならいやといへば好いに）と、あんな人聞きの好いことを仰しやる。」と怨めしさがいつぱいになりました。お母さんはどんな顔をして、あんなことが云へるのだらうと、心のうちで親を睨めながら目をあいて見ると、口で強く云つても、氣苦勞にしてゐるらしい目の色に、わたしの心はまた弱くなつてしまひました。

　其日はまだお晝前で、誰も奥にお客にきてゐさうもないのに、臺所の方で仕出し屋の小僧の聲がしてゐました。ふと氣がつくと、お母さんもお君ちやんも、髮をちやんとさざやの丸髷と島田に好い恰好な結たてでした。わたしの髮といつたらば、先月に島田をほぐしたぎり、それからろく〳〵に櫛の齒も入れてはないのです。自分でもすこし氣分の引立つたときには、結んでおいてもらはうかと思はなくはないのですが、それを云立（いひたて）にお床上げでもされてから、何のかのと嫁かなければならない下ごしらへをされては大變だと思つて、それが胸につかへてきて、わたしは起上つた頭をまた枕につけてしまつたりしました。

「こんな好い時候なのに、私も一枚綿入れを着て、好い恰好に髮を結つて、久しぶりでお茶のお稽古にでもゆきたい。私は嫌なことばかりなので厭（あき）てしまつた。」

わたしの押附けることの出來ない若い娘心は、健康がもとのようになれば、すぐに嫁られてしまふのを恐れながら、柔らかい日ざしの小春日和の町を、青竹の鼻緒の白木の臺の下駄で歩く、裾さばきの輕さや、久しくつけぬ白粉の、頸の肌ざはりをなつかしく思つたりして、妹の島田の出來ばへのよいのを眺めてゐました。すると、手もちなさそうにしてゐたお君ちやんが、

「姉さんも結つて見なくつて」といひますと、お母さんは急立てるように、

「それが好いよ、それが好いよ。さうすれば熱なんか下つてしまひますよ。そんなにしてゐるから逆上るのでさあね」と元氣な聲をだして「だれでも好いから、お六さんが手があいたら歸してしまはずに、此處へよこしておくれよ。おしゆんちやんが御髮をおあげなさるからつてね」

「島田髷でせう」とお君ちやんがいふと、わたしは何の氣もなしに首をふりました。

「島田さあ、結ふくらゐなら島田でなけりや。」

お母さんはそんなことを云ひながら立かけて、「それでもよかつた、髮でも結ふ氣になつてくれて」と、何だか意味があるらしい口ぶりでした。

髮結ひがすぐに來たのは、お母さんがわたしの氣のかはらないうちにと思つて、他のも

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のは結ひかけにでもしてよこしたのに違ひない早さでした。わたしはほんの雲脂をとつて櫛の歯だけいれて巻いておいてもらはうと思つてゐると、

「何時おあげになつたきりでじたらう、」とお六さんが云ひました。

わたしの胸は、はッとするとどきどきとして耳ががあーッと鳴つてしまひました。何ともいへぬ腹立しさに一時耳の根まで赤くなつたのを、お六さんは意味をとりちがへたのでせう、

「あら、おからかひまをしたのぢや御座いませんよ。御免ください、なんてわたしは胴忘れなのでせう」と云ひました。

どう挨拶をしてよいのか、腹立しさいま〳〵しさに口をとぢてゐますと、

「それでも今日は御氣分がよくつて結構でございますね。肝心のあなたがおよつていらつしやつちや、親御さまだつて張合がございませんやね」といつたり、「早くお床上げをなさつて、御當日までにみつしり下稽古をさせて下さいまし。いくら結ひつけても、あたくしの腕に撚をかけなくつてはね」と笑ひながら、鏡のなかのわたしの顔をのぞきこんだりしました。

わたしは耳の底へそんな話はいれまいとして、しまいには目をつぶつてしまひました。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

それでも元結をもつ手がわな〳〵顫へだしたので、お六さんも氣がついたか、「お大事なお體なんですから、今日はお髪だけになさつた方がよいでせう。お湯はおよしあそばせよ」といつて歸つてゆきました。

わたしはいきなり、島田のいちの紫の色元結に手をかけて、鋏を持ちなをしました。それもあてつけがましいと思つてまたやめました。末の子が一花もつてきて、藥瓶のせてある、黑塗りのおぼんの上へおいていつた。お會式のときに買つてゐる、吉野紙でこしらへた山茶花が目につきました。その花は粗末な造花なのに、色なり風情なり生々としてゐるのに、わたしは生てゐながら、自分の云ひたいことの一言すらいえず、こんなみじめな身になるために、今迄生て育つたのかと思ふと自分の心の弱いのがくやしくなつて、髱を搖りこわすかはりに、吉野紙の山茶花の花を引きむしつてしまひました。

「親を憎むのではないけれど」さう言譯をしながらも、其時ばかりは怨みました。それは此前に島田髷に結つたときで、その日より一月ばかり前の袷になりたての時分のことでした。

（未完）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お小夜

原田皐月

五

お小夜は旅の浮いた氣持を錢湯に流して、宵の明星が薄く見え初めた頃停留所に立ち乍ら其處の水菓子屋の苺や夏蜜柑などの灯の光で燃える樣に輝いてるのを眺めてるとやがて電車が止まつた。中は人で一杯で車掌臺までもこぼれて居るのを、お小夜は待つのも煩はしいので鐵棒に手を掛け乍ら片足乘せて振傾くと、其處に立つて居た男の冷笑の下に自分を置いて居た事を見出して跳ね返された樣に降りて了つた。と電車は其儘走つて行つた。

「あの男がとうと私を此處迄落して了つたのだ。親も姉妹もあり乍ら赤の他人で暮さなければならない樣に彼奴がして了つたのだ」

お小夜は引締まつた顏でレールを見つめて居ると不思議にも骨肉に對する愛着の情が犇々と胸に迫つてぢつと立つてる事が出來なくなつた。妹は會社員に嫁いで現に東京に住んで居ると聞いて居る。兩親はもう土になる迄も自分の名などは呼んで呉れ樣とは思はない

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

けど、せめて一人の妹に丈けでも逢ひたい。逢つて妹丈けにでも自分の經歴が決して自分を人の思ふ程傷けては居ない事を知つて貰ひたい。否其麽事は怎うでもいゝ。怎うでもいい。ほんの時たま昔話でも出來ればもうそれで滿足だ……

お小夜は妹の大きな眼を思ひ出した。怒ると其眼が甚しく凄くなるのでよく泥棒眼などと云合ひした事があつた。まだ小學校に通つて居た妹と詰らない事で爭ひ立てをしたお小夜は、自分の意地を何處迄も通したい一方に殆ど妹と口をきかなかつた。人のいゝ妹は遊びから歸つて來た時など何も彼も忘れて姉に話しかけるのを、片意地のお小夜がぷいと横を向いて了ふと妹は極りの惡さうな妙に底淋しい笑ひを口の兩端に見せて手持不沙汰に默つて居た其時の顏を、お小夜は今見る樣に判然り思ひ出すと、今直怎うかして遣りたい樣な堪らない氣になつて來た。そして只ぐん〳〵暗い方へ暗い方へと歩き出した。只足の向く儘に細い通りを幾つも〳〵曲つては歩いて居るうちに妹の事も兩親の事も男の事も考へなくなつて何と云ふ事なしに重い塊りが心臟を押上げて來る樣な氣持丈け殘つて居た。

お小夜は藥屋の明るい店先を曲らうとすると、行手の暗い方から、

「あらお小夜さんぢやなくつて？」

呼び止めた人はセルの單衣に半巾帶を〆めた束髮の女であつた。

「まあ芳江さん」

「何を今時分其麽に考へ込んで歩いてるの。然も此麽處を」

「此處は何處？　私電車を待つて居たんだつたのに彼麽野郎に合つたもんだから……今退けるの」

「誰に逢つたの」

「關よつ」お小夜は役げ付ける樣に云ふと、

「彼奴まだ東京にぶら付いてるのね。一體何してるんだらう。いゝ加減死んぢまへばいゝのに」二人は肩を並べて歩いた。

芳江の兄と關とが友達同志なので芳江も國に居た頃よく逢つて知つて居た。けれどお互に東京に出てからは芳江は兄と別に住んで居たし、芳江が學校を出た頃は兄は任地へ行つて東京には居なかつたので逢ふ事なぞは殆どなかつた。それが一昨年芳江が新聞社の方へ這入つて間もなくであつた。突然關が社に尋ねて來て自分の結婚した女が淺草の斯う云ふ處に店を張つて居るが、怎うせ腸の腐り果てた女に用はないけど、多少でも敎育を受けた女が虛榮の爲に婦德を破つて平氣で居ると云ふ事は風敎上重大問題だし、一般の女の見せしめにも筆誅を與へてくれと云ふ樣な話を持つて來た事があつた。芳江は關がまだ專門學

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

校入學の準備中にもう妻帶したと云ふ事も、其妻君が自分の三級下の生徒で其頃まだ女學校を卒業して居なかつたと云ふ事も兄から聞いて知つては居たが、元より級が大變に下なのでお小夜の事もあの人かもしれない位の外見當は付いて居なかつた。芳江は關を歸してからも二人の中に如何か蟠りのあるらしいのを考へ乍ら、淺草と云ふ事から自分の同窓を其處へ導いた不思議な謎を解く事も興味深い事に思はれて、早速芳江は其方を尋ねたのであつた。芳江は其處の框へ手を着いた潰しに無地お召の羽織を引かけた眼の凉しい口の締つたお小夜を見ると直に昔の幼顏が思ひ出されたのであつた。

「まあ怎して此麽處へ」

と云つた切りお小夜は笑つて許り居て話さなかつた。芳江は相手が窮屈にならない樣にと務めて碎け乍ら關の來たのやら、餘り馬鹿氣て居るので直に追歸して了つた事など色々話しても、お小夜は只笑つて居る丈けで矢張餘り口を開かなかつた。

「お恥かしいですけど私などは恁うせ人樣のお仲間入りの出來る身ぢやなし」

此麽事を繰返して居た。堅つ苦しい人の中で堅つ苦しい話許りに馴れた芳江は、斯うした仇なお小夜から流れる娑婆つ氣の多い空氣に吸ひ込まれては、ちよい〳〵お小夜と逢つて居た。お小夜も日の中なら芳江の來るのを眞から喜んで向へた。二人丈けで郊外へ遊び

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に出かけたりもした。
芳江がよく關の話を持ち出すと、
「あんな意氣地のない奴見て居られやしない」
と云ひ〳〵した。芳江が、
「それでも始めは貴方だつて戀して居たんぢやないの」と云ふと、
「だつて十七やそこらで何が分るものですか、ですから私は自分で失敗つたから自分で責任を負つてるぢやありませんか」と云つて居た。
關は戸籍を握つてると云ふ强みから何かに邪魔を入れるのを、お小夜は其都度金で胡麻化して居た樣だつたが、とうと芳江と芳江の兄が中に這入つて漸々籍丈けは拔く事が出來たのであつた。其後も關はお小夜の直隣の家などで遊び乍らお小夜の監視をして居たりするので、是れには氣味惡がつて居た。
「ね私や今つく〴〵考へたのよ。彼奴のお蔭で私が斯うなつたと云ふよりや、私は何の道斯うなる女だつたのだと思つたの」
「いやに今夜は泌みりしてるのね。夜遲かつたらお家の方に惡いんぢやないの」
芳江は急込んで馳けて來た電車を見送り乍らお小夜に云ふと、お小夜は急に陽氣に笑ひ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

だした。

「私やもう彼處に居ないのよ」

そしてお小夜は芳江の妙に探る樣な顏を見ると、も一度吹き出して了つた。

「芳江さんも飽きつぽい女だつて云ひたいんでせう？　だけど亭主の味ならもう隅で懲りてる私ぢやありませんか。男つ位嫌やな處と好い處を持つてるものはありやしない。自分の男となりや惡い處でも嫌ひな處でも自分のものにしなけりやならないでせう。私には眞平だは、そんな事は」

お小夜は茶化した樣な顏を芳江から離さなかつた。

空には星が綺麗に散ばつて居た。芳江はちら〳〵動いてる星の光を仰ぎ乍ら、

「男が皆隅ぢやないでせう」

「そりやさうですがね。只隅よりや惡い處が少いか多いかの違いよ」

「オホ……人間にさう贅澤云つたつて仕方がないは」

「仕方がない？」

「仕方がないは」

「あつてよ」

「何處に？」

「あのね。斯うするのよ。大勢の男を束にして其處からいゝ處許り皆引抜くの。さうすると立派な一人が出來上つてよ」

「成程凄いはッ」

其處は明るい酒場の前だつた。そして何處か底の方にをかしさを潜ませた樣な二人の顏が其處の萩戸の中に狹まれた鏡の中に照ると、芳江はお小夜に皮肉な眼を向け乍らくつと笑つた。

「私はまだ夕御飯前なのよ」

と云ふとお小夜は鏡の扉の中へ這入つて行つた。

外のぴか〳〵してる割合に中はまるで鐵道の荷物取扱所と云つた風に、巾の狹い頑丈な臺が幾側にも据ゑられて其前に小さな腰掛けがちよく〳〵置かれてある單簡さに二人は思はず顏を見合せた。お小夜はビールを命じてから、

「何かハイカラのお酒を飲まなくつて？」

遠慮もなく大きな聲で云ふと二組の書生が一齊に口を噤むと二人の方に視線を向けた。

そしてお小夜の美貌に征服された樣に白い目を向ける丈けで急に靜かになつたのが芳江も

何となく快く思はれたので、
「何？アブサンて飮んだ事あつて？」
「いゝえ、それを飮みませう」
芳江はちよい〳〵此方を盜み見る樣にして囁いてる書生達を見乍ら小さな聲で、
「男が五人居てよ。まだ束には不束」
「さあ當つて見なけりや」
「どうぞお遠慮なく」
二人はぷつと失笑した。其處へ小さなアブサンのコツプと一緒に持つて來たカツレツのお皿の上に割箸が載つて居るので二人は又笑つた。
「これで食べるの。馬鹿にしてるは」
「御親切に肉が切つてあつてよ」
「打壞しぢやないの？　出ませう芳江さん」
お小夜は眉の間に不快の色を見せ乍らさつさと勘定を濟ますと一箸もつけずに出て了つた。芳江はお小夜の置き忘れた傘を持つて出て來ると、
「こん度いゝ處を見付けませう。束なんか居ない處がいゝは」

快い醉の上つた二人の顏に夜風が氣持よく吹いた。何處か緣日があるらしく行手の空がぼうと明るくぼかされて居た。芳江は、

「だつて束が居なくちやお小夜さんの世は暗ぢやないの」

「なんかつて芳江さんだつて同じ事でせう。もし芳江さんが眞から底から獨りの男に滿足する事があつたら、私や貴方の片方の眼玉は硝子張りだと思ふは」

お小夜は始めて味つた火酒の醉心地に氣も體も輕くなつて、大道の眞中を自分一人ののゝ樣に步いた。そして二人とも無遠慮に笑つたり話したりしてるので行く人を振り返らすのであつた。

「片目硝子でいゝ位なら何にも男なんか好かなくたつて自分獨で結構の筈だは」

お小夜は獨り喋り續けた。

「そりや自分獨りで澤山なのよ。只其自分獨が相手の男に突當つて見ないと中々分らないんぢやありませんか。結局は自分獨りよ。」

「さうでせう? だから大勢に打突かれば餘計いゝ譯ぢやないの。怎んな男だつてピンからキリ迄女の好く樣にや出來て居なくつてよ。私芳江さんはほんとに好きよ。些つとも高尙がつて居ないから。嫌やに學者振つて許り居た處で女は女ぢやないの男が好きな癖に顏許

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りで嘘を云はうたつてねえ、さうは行きやしないは。私は矢張り關の野郎のお陰で仕合せなのよ。親や妹に虫だ獸だと云はれた處で私程誰も女に生れた味を知りやしないぢやないの」
「貴方も親の云ふ事さへ聞いてりや今頃は二三人のおつ母さんだはね」
「さうね。生きてるんだか死んでるんだが忘れて居るうちにお墓の前迄行つちまつて、氣の付いた時は骨になつたなんか人笑はせだは」
お小夜は其處の小さな洋食店を見つけると、
「あゝお腹が空いた」
と云ひ乍ら二階へあがつて行つた。
日本間を造りかへたので天井は低い家であつたが一間々々區切つてあるのでお小夜は緩り腰を下すとウキスキーがいゝと云つた。
芳江はコップにさしたセロクを見乍らこの人も無事に行つて居たら洋酒などの味も知らずに子を育てゝ行つたかもしれないなど〻思つて居ると、
「私の妹ももう兒供が出來たかもしれなくてね」
「逢いたい？」
「女は割が惡いは。お竈の蝶と同じで兒供が出來たらもう女の一生もお終ひなんだもの。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

永生きがしたけりや小供なんか產まない事つたわね」
「でも育てゝる人は其麽もんぢやないでせう。兒供も育つて行けば自分も一緒に育つて行くんだから」
「さう思へる人は無事よ。私は人の事でもさうは思はないんだから。人間は自分のいゝ樣にするのが一等いゝ事なんだは」
お小夜は飲み乾したコップを芳江の前に置くと傍に立つてる小女に、
「ねえ、さうでせう」
と何の事やら分らない事を云つて笑つて居た。
「貴方も今に變つてよ。ほんとのいゝ人に逢ふと」
「さうは行かなくてよ。私の眼は兩方生きてるんだから。私やいつもさう云ふのよ。あばたは醫に見えやしないつて」
「さうぢやないのよ。あばたはあばたなりによく見えるのよ。貴方にだつて其麽時は來るに違いないは」
「私は全く水性つて譯ぢやないのよ」
何か考へて居たお小夜は眞顔に云ひ乍ら急に自分の眞面目さがをかしくなつて失笑して

了つた。

六

二人が外へ出た時は餘り早くなかつた。

「今日は嬉しくて仕樣がないは。闘に逢つたのが嬉しくなつちやつた。彼奴のお蔭で私も幸だし。ね芳江さん世の中は自分の身に降つて湧いたものが仕合せなのね。一寸は不仕合せの樣に見えても矢張りさうぢやないのね。今夜はつく〴〵嬉しいは」

「其麽にして嬉しがつて計り毎日居たら何日待合が出來るかしれたもんぢやないは」

「嬉しがつてりや結構ぢやないの。金が失くなれば又何處かへ藻繰り込む許りよ。其内に又出來るから。私達は男の金を使つてやる樣に出來てるんだから」

芳江はこの美貌がこの女を生かしも殺しもするのだと思つてお小夜の顏を覗くと、

「何を見るの」

「餘り綺麗だから」

「オホヽヽヽこの鼻が一分低くてこの口が一分廣がつてたら、私にも斯うしたお天頭樣は照らなかつたかもしれないと思ふとをかしいはね」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お小夜は芳江が歸りを案じて居るのも構はず、カンテラの油煙や人のいきれの吸呼苦しい迄もや付く緣日の中へ這入つて行つた。仕方なしに付いて行つた芳江は其處の玩具屋の飛んだり跳ねたりの玩具を面白さうに眺めて居ると、お小夜は芳江の耳に何か囁いて急いで行つた。そして前の二人連れの男女の間へ割り込むといきなり男の手を引いてずん〳〵歩き出したので、飽氣に取られた樣な伉者らしい連れの女を芳江は氣の毒さうに眺めて居ると、二三間行つてから男の手を離して、お小夜は連れの女に笑顏を浴せながら獨りで歩いて行つた。そして後から追付いた芳江に、

「面白かつて？」

「女の人が呆然りして居てよ可愛さうに。何してる男？」

「知るもんですか。酔ふと慝麼惡い事がしたくて困つて了ふ」

「貴方まあ知らないの？」

芳江の呆れてる顏を見てお小夜は氣持よささうに笑つて居た。

「もう嫌や貴方と一緒に歩くのは」

芳江が怒つた樣に云つてすた〳〵先へ行くとお小夜は猶更らげら〳〵笑ふのだつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

白刃の跡

佐藤欽子

この月に入つてからも烈しい斜降りがある、かと思へばまた細かい霧雨がしと〳〵と降り續ける。そして墓地の夜のやうな陰氣臭い日が續く、そうかと思へば厭やに蒸し〳〵して黄い塵埃の見える雲の切れ目から燒きつけるやうに日がのぞき込む日もあつた。こうした定まらない氣温は榮の病氣に良くなかつた。殊に此二三日の暑さには健康な人でさへ堪え難い倦怠と疲勞を感せさす程であるから切角持ち返しかけた彼れにはその病狀が再び暗い處へ引き摺り込まれそうに感じられたのである。そして發作前後に襲ひ來る烈しいめまひと動悸と、異常な體温から來る疲勞にすつかり瘦せが見えた。そこで彼女は自分が精神病であると思つてた。薔薇色に輝く可き肌も青白く、愛くるしい目も陰鬱に、弱々しく細い髮の毛を持つた彼女は誰れが見ても病身らしかつた。十八や十九の年頃をあどけなく肥る事も出來ず、暗い影を運命的に脊負はせられて其日其日を生き延ひて行く樣に見えた。然し榮の病氣は常習的のものでなかつた。一年中に一度や二度は必ず斯うした病的發作が襲つた。それも大概二ケ月もすれば拭はれる樣に全快したり、又時には僅々二十日内外で

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

大した發作もなく癒つて仕舞ふ事もあつた。彼女の弱い腦には多數の醜い影が蛆虫のやうにウヨ〳〵と巣くつて居た。形のある樣な無い樣な、色にしたら黑であろうと思はれる。それが時折り特種の命を持つたかの如く能動的に彼女の精神狀態を異常にした。其んな時彼れの氣分は底ひも知れぬ千仞の谷にでも沈む樣に、意識が朦朧となる。萠芽のある時はまづ身體に變調を來して腦味噌が拔き取られたかの如く妙な空虛を感じ、頭の一部が燒き火箸でしごかれた後の樣に激烈な痛みを感ずる事がある。又身體中の血行が一時に止り、死人の如く心底から冷たくなつたりするかと思へば、動悸が急に烈しく息つまる苦しさで居たゝまらぬ樣になる。そして火の樣に身體が燃えほてつて瞼の裏が熱く、目を開いて物の色が解らぬ事もあつた。かうした時彼女は終日濕つぽく暗い一室に閉じ籠つて氷嚢を頭に當てがつたきり身動きもせぬ。又或時は絕えず襲ひ來る異樣な影に附きまとはれて、ひどく苦しんだり、胸に當てた自分の手が三本あると悲しげにさめ〴〵と泣く事さへあつた。何時であつたか、見舞ひに來た從姉の不注意から、桊の病室に拔ぎ捨てた丸帶が、ずた〳〵に鋏を入れられたのを翌日見た事などあつた。然しそんな風の發作は珍らしかつた。普通は譯もなく恐ろしいと云ひ、淋しいと云つて、他愛もなく泣き入る位のものであつた。よほど病狀の烈しい時の外、自分のことは自分一人で仕末をつけた。それは長い間の異常

な自分の身體を取り扱つて其容體に慣れて居たせいもあろうが。一つには醜い病狀を人に見られる事を非常に恐れたからであつた。

榮は常から淋しい孤獨感の强い女だ。殊に病氣の時にそれが烈しい、家の者と一言も口をきかず、たゞ一人で居る事を　み欲した。多くの人を憎み厭ひ同時に自分も憎み厭らはれて居るものとのみ信じた。斯ふして彼女の世界はいつも暗い、明るい人生を離れて暗くしめつぽい道を一人辿り行く樣な頼りない自分を感じて居た。彼女には元より家族もあつた。友達もあつた。女も男も其周圍を取り卷いて居た、それ等多くの人々の中には「わが戀人よ」と人なつかしくも呼びたい氣のする者もないではなかつたが其何れにも自分を置く氣持ちにはなれなかつた。彼女は常に思つた「たゞ一人でいゝ、眞實に自分を愛し、自分を知つてくれる人が欲しい、たゞ一人欲しい、若しそんな人が自分の世の中に一人ゐたならば自分はどんなに幸福だろうか、若しそんな人が求め得られたならば此心の惱みは如那に快く癒されるであろうか、自分は奈何にしても其れを求めなければならぬ」とかうした果敢ない望はいつも不可能の事として破壞されて仕舞つた。「自分は幻影を見て居るのだ、自分はやつぱり一人だ、世の中でたゞ一人生きられるまで生きて行く外仕方がないの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

だ、たとへ淋しくとも悲しくとも自分の賴りない生命と暗い運命とを凝視めて死に際まで生き延びて行くより他に仕方がない。此世の中に眞實自分を理解し、自分の思ふ事を思ひ、自分の生命を生命と思つてくれる人が果して何人あらう。自分には親もある、兄弟もある、彼れ等は自分を親切にしてくれる、勞はつてくれる、然し彼れ等の中に誰れ一人として自分の此苦惱と苦悶と悲痛を共になめてくれ、徹底的に同感同情してくれる者はない。まして自分の悲痛な運命の前に死んでくれる者はない。それは元より自分ばかりでないのだ、世の中の人のすべてが斯那悲しい生き方をして居るのだ。だから自分は諦らめねばならぬ。自分以外に自分と寸分異はぬ人の無い限り、それは到底不可能な事だ。あゝもう一人の自分、もう一人の自分、それは此自分の薄い影を世界中に引いて殘りなく探し歩いたとて見當るものではない」こう思つて淋しく諦らめても見た。では果して眞實自分一人で生き樣とする强盛な明確な自意識が彼女にあつたのであらうか。それは彼女自身にも疑問であつた。彼女がなる可く孤獨に、周圍から自分を引き離そうとし、離れて行くには他に原因があつた。彼女は自分の病氣を悲しむと同時にそれを人に知られるのを非常に怖れた。醜い自分を悟られまい、知られまいとする臆病な心持ちが絕えず鈍く働いて居たのである。彼女は誰れに對しても其心持ちを忘れなかつた。ひどく人に恐怖を抱いてゐたのはそれであつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。殊に彼女自身の心に喰ひ入つて來やうとする樣な或る交渉を感ずる人々には一層烈しい恐れを抱いたのも凡て斯うした氣持ちからであつた。だから可成り親しい間柄の者でも榮にそんな病的心理がある事に氣もつかない。たゞ温和な、靜肅な女としてのみ知つて居られた、かくして彼女は巧みに自分の性格の半面を被ひ隱して居たが長い間の習慣上それが苦痛でもなければ不愉快な事でもなかつた。何日からともなく、何故ともなく、隱さなければならないものゝ樣に思つて居た。それは或意味で立派な罪惡かも知れぬが始終取り詰めた心持ちの彼女には罪だと思ひかへす暇もなかつた。こんな事から不知々々彼女自ら自分の境遇を孤獨的な淋しいものにしたのである。かうして兎もすれば何者にか奪い取られそうな自身の生命を保持せんとする念、或る不可抗的な力に對する苦しい戰鬪が彼女の暗い心にしきりなく續けられて居たのである。

何時ころからなつたものか、彼女は知らなかつた。が決して後天的の者でなく凡て宿命的に作られて居る樣な氣持ちもあつた。榮はそれを悲しくも思ひ又諦らめ安くも感じた、彼女はよく子供の時を思ひ返す事がある。一人々々靜かに古い記憶を呼び起して居るうち今經驗して居る精神上の異常な事實を見出す事が出來た、榮は子供の頃から他の兄弟とは

異つてひよわで青い顔して病氣ばかりする子供であつた。其頃未だ生きて居た大祖母の膝に抱かれてむづかりつつ育てられたのを覺えて居る。これは榮に一番古い記憶であつた。夏の或る夕、彼女は叔母のおゆかさんに連れられて、つい近所の寺の門前で石垣を數へて遊んでた。村の子供等はほこりで白い足に小さな藁草履を引かけて、元氣の良い顔でしきりに馳せ廻つてた。其中の五六人が燕の巣のある大きな軒下で蝙蝠ごつこを初めた。頬の赤いはしつこそうな子が蝙蝠の役に當つたらしく、小さな子供の間から逃れて墓陰に隱れた。殘つた子供等は後からそれを追つかけ廻す、縄を輪の様に結んだのを持つて居た。輪なに掛つた蝙蝠が幾人となく榮の前を通つた。子供等は蝙蝠のまわりをグル／＼取り卷いて大げさに鬨の聲を上げた。一方女の子等は手を繋いでそれを入れる籠を作つた。面白くて堪らぬと云ふ風に、それでも半ば憶病氣に、石垣のそばに小さく蹲くまつて見入つてた。「コーモリ來いコーモリ來い」と子供等が樂しそうにはやし立てる聲は後の山にまで響いた。聲を聞きつけた他の子供等が又一層多く、ゾロ／＼と夕暮れの街道に集つた。其時蝙蝠の逃げ場を見失なつた子が息せき切つて彼女の前に現はれた。榮は、はつとして若い叔母の手に抱かれ樣とした、が、どうしたものか、おゆかさんはもう其處に居らなかつた。グル／＼慄へて恐ろしく勢込んでる子供の動作を見守つた。子供はそれを見つけていきな

り彼女の肩先に輪をかけ「可愛いコーモリヤめんこいコーモリヤー」とはやし立てた。他の子供の一人がそれを手傳いに來たらしかつた。恐ろしさに榮は青い菜の樣な顏して立ちすくんだ。身體は木の葉の樣にワナ〳〵と慄へてゐた。其夜から烈い熱病を病んだ。熱に浮かされた彼女は長い間物の怪に魅せられたもの丶樣に、手足をもがいて泣いた。祖母はつきものがしたのだと云つて水晶山の行者に頼んで魔を拂つてもらつたが、なか〳〵修まらなかつた。「お前の病氣はそれからだ」と母はよく云つた。そう云はれるとそうかとも思はれた。子供の時から他の兄姉の樣に遊び廻る事もなく、何時も温和なしく、乳母が作る紙雛樣などを弄んでゐるのがならひであつた。此子は可愛そうだが長生きはしない」と祖母がよく云つた。母もひよわな榮を始終氣苦勞に思つて居るらしかつた。

榮がまだ田舍に居た時の事であつた。其頃は美和子と云ふ總領の姉もまだ生きて居た。丁度五月頃の樣に雨のふり續く日であつた。野原か山の他に遊び場を持たぬ田舍の子供等は此那日にはきつと芝居の眞似などして遊んだものだつた。兄は芝居をするのだと云つて其日も同じ年頃の子供を連れて來た。不思議なものでも見る樣な心持ちで兄や姉と一しよに暗い土藏の中へ這入つた。兄はふくらんだ懷から蠟燭を握み出して其處等中にともした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

他の子供等は何かの時に使はれたらしい摺り模樣のある古い呉坐などを引き出して見物席を造らへた。姉は「くも井」と云ふ藥の樣に丸まつた白粉を手に解いて顏中塗り立てた。かうして芝居が初まつた。兄姉たちが奈那心算りの芝居をしたものか榮には解らなかつたが兄は澁紙を綴じ合せた鎧の樣なものを着け、條竹を刀の代りに五六本もさして居た。他の子供達も同じ風をして居た。其中で姉ばかりは模樣のある長い着物を引き摺り、人形の樣に美くしい顏をして居た。常にもあまり人足の入らぬ土藏の中は廢墟の如くじめじめと陰氣臭かつた。其土藏の中で子供等は陰慘な人殺しの眞似をした。兄は姉の赤い衿の見える胸元へのしかゝつて譯の解らぬ言を云ひ乍ら喉に刀物を當てがつた。「何と云ふ厭やな事をするのだらう」と思ひながら、それでも凝然と、吸ひ着けられた樣に氣味惡い動作に目を落した。榮の身體は動かなくなつた。唇が烈しく痙攣して、意識がぼんやりして來た。逃げる心算りか、夢中で立ち上つた。然し重い土藏の戸は二重に內から閉められてあつた。苦しさに聲も立て得ず悶へた。其瞬間暗を泳ぐいもりの腹の樣に赤い蠟燭の炎が彼れの目を強く射つた。榮は思はず大聲を上げた。そして強く叩きつける樣に土面を踏んだ樣だが其後の事はちつとも知らなかつた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

彼女の良心は又非常に敏感であつた。内氣で、小膽で、惡戯一つ仕得なかつた、兄姉の間に口爭ひをされるのさへ堪え難い程苦痛であつた。自分の正しくないのを知る時昏倒する樣な氣持ちになるのが例であつた。

確か七歲の頃だつたと思ふ。或日日當り良い緣端で棨は一人つくねんとしてゐた。目の前に竹すだれが靜かに下つてゐたが暫時するとすだれの竹が吐く妖氣で身體のまはりがひつそり靜まり返るのを感じた。その怪異な感に驚いて一心にそれを見守る瞬間彼女の目に映る四角い竹すだれが不思議に圓く細く長く菱形に、果てはそれ等の圓や線がぐる〳〵入り亂れて形なく消え失せた。すると又細くしごいた竹の節のみが搖れて蛇の如くぺろ〳〵火を吐く、火は赤に黃に白に七色に燃えてゐたが、やがてぱつと消えたと思ふと今度はめら〳〵とすだれに燃えひろがる。燒け落ちるとそこには靑い灰ばかりがうづだかくたまる。と灰がむく〳〵と動き出して魚のやうに泳ぎ出すので「おや！」と驚きのあまりそれを眺め、感じてる自分自身が今度は如何にも奇怪な生き者に思へた。やがて彼女は此怪異と不安に、身體を壓し殺される苦しみを感じた。かうして目に映る物の凡てが形あるが如く又無きが如く、それを握まうとすると胸が壓し詰まつて、腦が混亂し、目の上が急に燒ける

樣に思つた。かうした症狀は今でも一人居る時によくあるのだが注意が一點に集注して何か凝視してゐる場合にはきつと起るのである。烈しい時には自分自身の存在すら疑つた。こんな時彼女は自分の呼吸をさへ怪しく感じた。榮は暗い影を引いた、かうした自分の過去を哀れむかの樣に時々そんな事を思ひ出して自分を悲しんだ。

久しぶりで落ち着いて、机の前に坐た。小窓を開けると雨に濡れた空氣が疲れた神經をひやりと心地よく刺した。か細い雨が忍びやかに降つて、紫陽花の花びらにたまつた雨滴が思ひ餘つたらしく溢れた。物珍らしそうにみづ〳〵しいこの外景を眺めた。そうして彼女の重苦しい心は喘息から目醒めて微笑んだ。初めて新らしい氣持ちになれた。逆上した惡血が、押し下げられて赤く美しい血が此優さしい身體中を廻るかとも感じられた。四日も憂惱した後には良く斯那すが〳〵しい氣持ちになる事があつた。勿論長つゞきするものでないのはよく知つてた。暫時病氣をしてる間に家の者とすつかり離れて仕舞た樣な氣がした。病氣の時には母や兄とめつたに口をきかなかつた。又家族の者も成る丈けさからはぬ樣にするらしかつた。苦しんでる間は相手にされないのが反つて良い樣なものゝかうした平靜な時には堪らなく不滿で淋しい。榮は今日も久し振りで家の者と一しよに朝の食事

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

をした。常と少しも變らぬ機嫌で子供等の世話などをした。二三日前から來てゐる小女が彼女の病氣に就いて外の下女から聞きでもしたものか今は平常と異らぬ榮の動作を不思議そうにきよと／＼眺めた。物を尋ねても返事もせずに榮の顏から目を離さない。それが可笑くもあり、又癪にも觸るのであつた。彼女は思ひ出して黑塗りの小切れの箱を取り出した。色々の切れがギッシリ詰まつてる中から赤い縮緬を取り出して小さな妹に遣る心算りで人形の着物を裁つた。白い手が器用に動いて、小一時間もすると人形の着物が出來上つた。それから小さな着物に似合ふ帶を一すじくけ上げた。ホットする程な輕い疲れを覺えたが少しでも仕事の出來る自分を見るのが堪らなくうれしかつた。榮は靜かに雨の滴りを聞きながら斯那時妹でも來てくれれば善いがと考へたが誰れも來てはくれなかつた。榮はふと濕めやかな雨の中を歩いて見度い氣持ちで家を出た。外は暗かつた。霧雨の中に赤く慓へてる町の燈を後にして靜かな高臺の方へ歩いた。煉瓦塀の長い鐵工場の裏を拔けて××坂を上る迄は未だ汚ない、場末の古道具屋や紙漉屋等が見えたが坂の上からは靜かな氣持ちの屋敷町だつた。威かめしい石門や瀟洒な冠木門のある家等が何軒も並んでた。人通りの無い町を一人歩いてるのが何とも云へず良い事に思へた。細い傘の柄で調子を取り乍ら小さく口笛を吹きつゝ歩いた。三四丁も行つたと思ふころ大きな古い寺があつた。其處

から道が別れて右に曲れば鐵工場の表門の方へ其まゝ眞直に行けばずつと效外の方に出られる樣になつて居た。榮は暫時躊躇ふ樣だつたが右へは出らずに其儘往來から大分奥まつた寺の大きな門を入つた。其寺は榮が子供の時分度々遊びに行つた事があるので良く知つてゐる住職の知譚さんは丈の高い立派な坊さんだつた。其お梵妻さんの連れ子だと云ふ脊踞の女の子と彼女は知り合ひだつた。榮はあどけない昔の事を懷しく思ひ乍ら物寂びた境内を眺めた。何時の間にか空は美しく晴れて雨はすつかり止んで居た。正面が本堂で、左に花崗石の敷石を行くと古い觀音堂があつた。そばには可成り大きな池の水の色が青く光つてた。榮は忍びやかに、ぬかるみを踏みながら池の端へ行つて踞んだ。周圍はひつそりとして土の下を這ふ虫の歩みまで聞えそうに思へた。榮は大きな幹に身體を持ちかけて滑めらかな水の色を飽かず眺めた。暫時すると青臭い古池の臭ひがぷんと鼻をついて來た。すると彼女は子供の時の或小さな出來事を思ひ出した。十一か二のころだと覺えて居る。榮は近所の子供や妹達を連れて寺に遊んだ、池に厚い氷が張てゐたから冬の寒い時分らしかつた。霜柱を踏み乍ら木の實を拾ひ合つてた彼女は其池の氷の下に鼠色した犬か猫の死體を見出した。半ば浮いた樣に半ば沈んだ樣に寒く縮つてゐる其醜い屍體を見た彼女はゾツとして目を掩ふた。他の男の子達はそれを見つけては其儘に置かれぬと云つた風に長い

捧切れを持つてそれをつつき初めた。男の子は面白そうに笑つた。一度顏をそむけた榮はどうしたものか急に慘忍な氣持ちになつて男の子と一所にそれを押し轉がしたり、引き上げたりして見た。裂けた腹の中から豆腐のカラの樣な物が澤山にふやけ出したので氣持ち惡くなつて止めたのを今でも時々思ひ出しては悔いる事があつた。が今夜の池はそんな不淨なものではなかつた。水面はビロードを延べたやうに其上には星が一つ光を落として居た。何日かの犬の骨はどうなつたものか、未だに此池の奧深く殘つてるのか、それとも腐つてなくなつたか、且つて此池の中に彼んな小さな出來事があつた、と云ふ事さへ思ひ出してやらなければ池自身にも忘れられて仕舞つた樣に冷たく靜まりかへつて居た。彼女は水に一種の恐怖を持つて居た。人の魂を、そそのかす樣な、おびき出す樣な、一種の不可思議な水の力を恐れずには居られなかつた。一人、人氣もない寺院の池畔に踞つて居ると思ふと急にワク／＼として來る。物凄い淋しさに襲はれた彼女は發作前の樣な沈痛な險はしい目を凝然と水の上に置いた。

平靜な容體が可成長く續いた。青白い顏や色ざめた唇にも次第に血の色が冴えて來た。「病氣はもう去つて仕舞つた」と云ふ確信が榮の心を晴れ／＼と嬉しいものにした。然

し斯那時でも凡てを忘れて脳の隅から隅まで掃き清められた時の様な氣持ちにはなれなかつた。少しでも長く平安な氣分の續く時は後の容體が懸念された。それが落ち着きかけた神經を時々痛めたりした。こうして居る間にも暗い影が壓しつけて來る樣に感じられて焦々する事があつた。そして今度こそは病氣が自分を臺無しにして仕舞ふのではないかと考へたりする。「自分は一瞬間だつて安靜な心持ちになつて居る事は許されない身體なのだ。今にも大きな力がおし來つて自分を卷き込んで仕舞ふかも知れぬ。私は絶えずそれを懸念し、それを恐れなければならない、自分は夜から日に續く烈しい身心の苦悶に打ち勝つて何處まで行く事が出來るのか」と思ふと堪らなく情なかつた。「自分の生活は何時も〳〵暗闇の中にあるのだ。一時でも油斷は出來ない、少しでも隙があつてはならぬ。苦しみの中にも苦しみを見つけ出して行かなければならない。其中に自分の肉體は次第に亡びて行くのだろう。血も肉も靈も凡て濕ひあるものは皆、すすり取られて死んで行く日が來るのだろう」榮は何時もかうした絶望的な心持を持つてゐた。そして時には痛々しくも呪はれた自分の生を自ら呪ふ事もあつた。彼れは今も淋しい氣持ちになつて美くしく燃え上つた唇を強く嚙んだ。銀線の様な細雨が降つたり、父が飼ひ馴らしたカナリヤが鳴いては番のエサヤを溢すのが悲しかつた。榮は緣先きに青く垂れて居るすだれの隙き間から淡く〳〵

何處までも延びて行きそうな空を飽かず見入つたりした。また胸に當てた指をほどいて懷手のまま片手で衿元を開いた。透き通る程白い胸の肉附きを喰ひ入る樣に眺めた。乳首のまわりを血管が細く取り卷いたり、左の乳首から右の肩先まで太い一筋の靜脈が這つて居るのも薄い肌から透いて見えた。彼女は幾筋もの血管の中に流れてる赤い血の色を思ふた。そして其無數の細脈を毒々しく迸流する氣狂ひの血が自分の生命や運命を呪ふて居るのだと思ふと又新たな腹だゝしさを覺えた。其時チラと榮の興奮した目に映つたものがあつた。それを傷あとだと知つた時彼女は名狀し難い厭やな氣持ちになつた。榮は三年前フトした事から恐ろしくも自殺を畫てた事があつた。自分の精神病なることを明確に知つたのは其後だつた。其時分でも年に一度や二度はきつと輕い發作が見舞て來た。美くしく結び上げた前髮の毛をブッツリ切つたり、又折角縫ひ上げた緋の長襦袢をすつかり解いて仕舞つたりした。丁度其とき榮の母方の叔母に當る人に精神病者があつた。不幸な叔母は土藏に隣つた暗い一室に壓し籠められて年中泣いたり笑たりして居た。時には美くしい目を釣り上げて夢中に荒れ狂ふ事もあつた。長い髮の毛をふり亂した其青い顏が銹の樣に榮の目にこびり附いて離れなかつた。榮は自分も今にあんなに成るのだと思てひた泣きに泣いた。何日かは自分もあゝして發狂する時が來るのだと云ふ心持ちが絕えず彼女を苦しめ、そして

其疑念は遂に烈しい强迫觀念となつて彼女を惱ました。榮が小さな短刀で自殺を謀たのは其病狀が極度に達した時であつた。別に原因とてはなかつた。たゞ其强迫觀念から來る烈しい苦悶と恐怖から逃れ樣とする心から殆んど夢中にやつた事だつた。それは果し得なかつた。彼女は今淋しい心持ちでそれをながめた。そして悔いた。「彼の時何故死ななかつた。自分は三年前からの苦悶をこうして今になめて居るのではないか、自分の此生活に何の光がある、希望がある、死ねばいゝのに」とつぶやいたとき冷めたい笑ひが彼女の顏一ぱいにひらめいた。彼女は指先きで紫色に筋を引いた傷あとを何度と云ふことなしなでた。顏は痙攣(ひきつ)つて目には涙がたまつて居た。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

うづ

荒木滋子

『お見合(みあひ)』から歸つて來た米子は、只ニコ〳〵と笑つてゐた。而して初めて着た長い袂の振りを幾度か鏡の前に寫しに行つた。姉の芳子が辛く苦心して塗けて遣つた厚化粧を、ソッと白紙に壓えて見たりして、容易くは晴着を替へようともしなかつた。

『能くお似合に成りましたよ、好いお召でしたね』女中のそよは恁う云つて賞めた。平素なら直ぐに、『何をうぢや〳〵』と叱る母親も同じやうに莞爾して眺めてゐた。

　この縁談が芳子の耳に這入つたのは、もう三月も以前の事である。芳子は人知れず、先方の郷里の事を問ひ合せたり、人物を探つて見たりして、思ふやうな傳手の無いのを歯痒く思つてゐた。が、家の者は誰も知らなかつた。當人の米子すらも、數日前迄知らずに居たのである。只、此頃自分を望んで來た者が一人二人は母親の手許に在る位の朧な推察が仄か乍ら感じられるに過ぎないらしかつた。豈夫(まさか)にそれが昨日今日實現されると云ふ事は思ひ懸けなかつたであらう、芳子に取つても今日の『見合』は意外なのであつた。兄の鐵也は今朝、學校の行懸けに、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『ヤア米子、お前今日見合に行くのか？』と兒戲らしく調戲つてゐた。
其夜、母親は滅多に訪れぬ芳子の部屋へ、落着かぬソワ〳〵しい面持ちで這入つて來た。
『奈何しようね仕度は、孰せもう仕度なんかは揃えて上げられないつて云う事は、繰り返して話してあるんだが…………』
『…………』でも、芳子は平素になく軟かい顏を向けてゐた。
『…………何しろ後家で三人の子供を仕立て上げたんだからねえ、普通大抵の事ぢやないもの』早や母親の眼が何故とも知らず曇つてゐる。五十過ぎて後家になり、借金と資産を併せ殘された母親は、誰に逢うても、奈何な場合でも『後家で三人の子』と云う言葉と自ら涙含む事とを忘れなかつた。三人の子とは鐵也と米子と、他のもう一人とであつた。
『爾麼に仰有つても未だ先方の挨拶も聞かないのぢやありませんか、それに米子の心持ちも奈うだか訊いて見なければ』
『先方は好さゝうだつたよ、米子だつて莞爾してゐるから惡い事は無いんだらう』
『けれど、さうは行きませんよ、ニコ〳〵してゐたつて、今の子供と昔の子供と異ひますから奈何云う事を考へてゐるか分りません、一應は訊いて見ての上でなければ……』
母親は、一寸詰らなさうな顏であつたが、

『ぢあ、まあお前から訊いて見てお呉れな』

こんな時だけ家族の圏内に入れて貰へるのを、芳子は却つて煩はしくも思ひながら、それでも快く承諾した。

『嫌だよ、姉さん私何だか戲談見たやうで、平氣ですの、だから今日も先方の人を熟く見て遣つたわ、先方の人は首低(うつむ)いて而巳(ばかり)居たけれど…………お母さんが首低いて居るものだつて私の袖を引いたりして…………』お米の聲は乾燥いでゐた。

『米子！靜かに考へて御覧、お前の今の境遇と、お前の志した仕事とをね、お前の今の境遇は、これから一年も二年もを安泰にお前の志に添うて行き得るものと思へてますか？』芳子の言葉は儼然としてゐた。米子は首低いて了ッた。敢て乾燥(はしやぎ)に紛らして居た胸の奥底を痛々しく生々と引摺り出されたやうな怖れに、膝に重ねた其手先は細かに戰いてゐる。芳子は語り續けた。

『姉さんの心持ちから云へば、甚麽にしても、米さんをもう少し家に置き度い…………けれども、又思ひ返して見れば、何卒(どうぞ)して米さんの涙の多い、僻心の多い、此頃の紛擾から救ひ出して上げ度い、而してもう少し米さんを柔順にして、大きい幸福が納めさせて上げ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たいと思ふ――そりや神樣ぢやないから、奈うした方が可いのかは確然分るものぢや無いけれど、まあ人の心で、熟く考へて、恁うした方が可いと思つた事を爲るより他はないのだね、米さんには未だ獨立の腕は無し、此間中のやうな厭な事ばかり重つて、米さんが平素思ひ立つやうに、家を出て…………なんて云ふ事は、あれは米さんの年若い空想に過ぎないのだよ、そんなに世間が易々と渡れるものではない、獨り逃げて出た處で立志篇にあるやうな甘々とした事がザラに在る譯のものではないし、畢竟は悲しい事に落ちて行くのだねえ…………雖然姉さんは、決して强つて厭と思うものを無理に嫁かさうとするのでは無いよ、厭なら姉さんが引受けて、屹度破談して上げる。只、米さんは、もう眞面目に少しは考へる事の出來る年だからね、熟く考へて見て、姉さんを氣の置けない相談對手にお爲』恁う云つた芳子は、心持ち笑つて見せた。米子も嫣然して、見上げた眼には堰き兼ねた露が溢れてゐた。

『私はね、嫁くのが厭なのでは無いのですけれど、自分の勉强がしたいの、それで兄さんには獨身で勉强して行くつて決心を話しましたの、だからこの話は兄さんが破談して下さる手筈に成つて居ますわ…………奈何しませうねえ、姉さん』さう云う米子の言葉は、喉咽の邊りに、堪え難げに纎弱く顫へてゐた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

兄弟の中で一番氣に張りの無い此子に、術も無く頒へてゐる其小さい胸に、假りにでも此の解決の重荷を抱へさせるのは、餘りに殘酷であつたと、芳子も悲しい氣分に胸を押された。父親が在つたなら、母親の權威ももう少し重く、却つて此の子には左樣あつて欲しい親の威に保護はれて、親の取捨の許に恁う迄心を痛ませもせずに濟んだらうと悋しく思つた。

――二十年前、護謨の乳管を力無さゝうに啣へてゐた、片手の上に乘りさうな畏縮た小さい赤兒が、乳房の無い芳子の懷から、初めて訪れて來た寛容見える人の好さゝうな小母さんの懷中に移されて行つた時、母親は氷袋に押へられ乍ら、厚い布團の上に產後の幾日かを混頓として眠つてゐた。

里親に可愛がられて、生母に愛せられず、十歲に近づく迄、片田舍に一人つ子として、養双親の愛寵を聚めて居た。其米子は生家に歸つても、言葉激しい實母に對う疑懼は晴れなかつた。狂氣した養父、横死した養母を唯乳のみの緣ある親とは思へなかつた――

左樣した事情が煩ひして、生家に生ひ立つ米子の境遇は何時も苦かつた。

二日、三日、母親方の叔父は幾度か往來して、緣談に就いての調停をした。此の家に遠

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

慮の多い叔父は母親の涙を聽き、鐵也の若い熱誠な反對を聞き、芳子にも意見を求めた。

『米子は何んて申ますの』

『…………姉んに任かせて置いたから、姉さんの儘に、と云ふ事でした。奈うも中々皆さんの頭がむづかしくつて…………』と叔父は輕く笑つた。

『ほんとに、船頭が少し多過ぎますね、かう云う事は限りなく考へれば、限りなく不安になりますしねえ、母親がもうあゝ思ひ込んで居ますし、今後の米子の事情や、あれの性質も考へて見れば、どうも嫁つた方が當人の幸福のやうに思へますから、纒まるやうに願ひませう、鐵也には私から云ひ聞かせませう。其代り、先方の希望でもあり、又當方の希望でもある條件の事を更めて念を押して置いて頂き度う御座います』

米子は繪畫に深い趣味を持つてゐた。米子の志を成させる爲に、今迄の勉强を續けさせ度いとは皆の願望であつた。而て先方も亦、同じ道に努力して居る人で、其生涯を新しい妻と共に、同じ趣味に生きようと希う人なのであつた。

叔父を歸すと、芳子は鐵也を呼んだ。鐵也は緊張した血氣を湛んだ瞳の底に漲らしてゐる。

『鐵也さん、お前莫迦にむづかしく考へちやつたね、物は考へやうだよ、甚麽にむづかし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

く考へたつて、仕合せの惡い時は惡いし、放心してゐても仕合せの好い時は好いものだから、まあ姉さんにお任かせ』と芳子の調子は輕く無雜作だつた。

『ぢや奈何するんです』

『嫁る事にしますの、そりやもう、奈何しても納まらないのなら、又引取る道もあるし、家に居たつて米子はじめ〳〵泣いてばかり居なくてはならず、それよりは家でも持つて、氣の合つた同志になれば、二人で勉强した方がどれ位幸福に、家に居るよりは眞面目な勉强が出來るか知れやしない、其内に鐵也さんも大人――つて、今でも大人ではあるけれどもね、モツト大人になるし、其時には思う儘、具體的にも米子の相談相手に成つてやられるぢやありませんか』と、芳子は微笑した。

『さうだ！こりや好いや姉さんの考へも無雜作で、ぢや姉さんが好いやうになすつて下さい。お任かせして私は默りますから』

額の薄曇る迄に神經を焦立たせて、憂慮に思ひ詰めて居た鐵也は、極に入つて思はず路が展いたやうに、縛しめから俄かに突き放されたやうなケロリとした輕い色を見せた。

『姉さんだつて、鐵也さんだつて考へる焦點は、唯米子の幸福、と云う事一つなのだからねえ、それに不服を云うなら此處まで話の來ない内の事だし、お母さんの氣質と米子の今

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

後の周圍と云う事も考へて見れば、隨分面倒が持ち上るだらうと思はれるし、それに今は昔と道德觀念が違ふ、お叔母さんが、お嫁に被行つた時のやうな、刀にかけても再び我家の敷居は跨ぐな、なんて、そんな事は姉さんも云ひもしないし、お前達も亦思ひもすまい。將來どうしても調和し相もない家庭に、奈何しても壓え付けて置かうと云うのぢやないもの、米子が人の妻として、家庭の人として、女らしい優しい深切と、隱忍とにベストを盡しても猶相入れぬ性格なら、必要と認めた時に、何時でも姉さんは今日の責任を果さう、姉さんも此度の事は隨分心配した。それに鐵也さんは未だ若い、鐵也さんの人生は未だ机の上のものだもの、鐵也さんの其の清純な若さや、赤熱的な生一本の眞面目は、ほんとに幸福な尊いものだけれど、外面のみ滑脫に而も棘々しい世間には未だ何の交涉も持つて居ないのだから、これから世間に對つて行かうとする米子に云爲するは少し早いよ」說き續けて行く芳子の前に鐵也は默して居た。芳子は恁う語り乍も、若しや今、自分が、鐵也や米子に生ひ立つて行かうとしてゐる其各々の個性を蹂躪して居るのではあるまいかとの遠慮が不圖起つて、却つて自分の仕打ちや自分の云う事が惡い事でゝもあるやうに思へて來た。而して口を噤んだ。

然し、話はそれなりに一段落着いて了つた。皆は快く芳子の取り計ひに任かせたのであ

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る。

何事も内輪にと話し始めて、事は大きく成つて行つた。新しい唐草模様油單の釣臺が一荷、華やかな結納の草々が贈られたのである。賑はしい日は朝に夕に近づいて來る。家の人の總てが、迫つて行く緊張した氣分に取り卷かれ乍ら、各自は各自中心の種々な雰圍氣を作つて、二重の忙しなさと張り詰めた氣色とを其眼に、其顏に漲してゐた。

女中のそよは、遠國に在る情人と自分の身の上とを案じ續けた。

『ねえ、お孃さん！』恁う云つて、夜遲く仕事を終つてから、早くから床に就く芳子の眠りを妨げに來た。

『私も此處で斷然意見を附けて早く世帶を持たうかと思ひます。恁うして居ても年はかり取るし、Yさんの方は到底私が女房に成れる譯の者でもなし、兄さんの云う通りに世話して貰つて、分に合つた人と世帶を持つた方が可さ相に思ひます。當に成つて成らぬ人を際限なく待つて居ても仕樣がないし…………ねえお孃さん、奈何しませう？』定まらない心細い自分の分別に、力強い裏書きが欲しさうであつた。

『さうだね、そりやもう、左樣に限るよ、Yさんが歸つて來られた處で、今度お貰ひなさ

る奥さん次第だからね、物の捌けた年増の奥さんでもお貰ひなされば、そりやお前の面倒は一生見て頂けるかも知れないけれど、左樣でなかつたら、豈夫お妾の在るのを承知して來るお嫁さんも一寸無からうからね、まあそよが左樣云ふ氣に成つたのなら、早く左樣した方が可ささうだね』

『さうで御座いますね、ぢや左樣しませうか、他家へ行つても亦Yさんの歸つて被來つた時には、お孃さんから何とか談をつけて頂けば、物の分るやうにも成りますからねえ』

物の分るやうにとは、何を指したのだか、芳子には判然しなかつた。遠國に在るYは、そよがYと呼び捨てに成らぬ程、而してそよが公然とは口に出して語られぬ程、今は立派な地位に在る人であつた。然しそよがYへの愛着は尠いものではなかつた。Yが不自由をして居るだらうと人傳に聞かされた噂ばかりでも、そよは寢られぬ程に心配した。

『お前は莫迦だねえ、お調子者だよ、他人が水に飛び込めと云つたら、へえと云つて飛び込むだらう、火に這入れと云つたら、よし來たと云つて這入つた行くだらう――』と芳子の母親に笑はれるのを辛がつて、内密で二十圓、十五圓と苦しい都合をしては、絹を送つたり、珍らしい食物を送つたりして、自分の額に太い皺の寄つて來るのも知らず、書生時代のYとの馴れ染めを、何時迄も心に藏して、七つか八つ年下の、日毎にお互の位置の隔

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つて行くYの歸りを一向に待つた。

『……………今迄待つたものだから……………もう戰爭さへ濟めば今年の暮には歸つて被來るでせう、どうせ奧樣には成れなくとも、恁うして居さへすれば、歸つて被來つた時に、又面倒も見て頂けますからねえ、あの年の生れの人は、何の女にでも手を出したがるけれども、淡白した、それでゐて人情の厚い人だから――』と濃い未練と深い執着を感じて居た平素の心を、打消すものが可なりに強く萠え出して來たかのやうに見えた。而して其世帶を持つ準備の末端に迄も空想を走らせ、芳子に訴えて力添えを賴むのだつた。米子の縫物を手傳ひ乍らでも、未だ影すらも認め得られない良人を、もの有るが如くに描き出す心に自ら惑はされて、ソワ〳〵と他の話、他の仕事は手にも附かぬらしく、米子の行く後を追ひ、芳子達が內談し、準備する婚禮の話に眼を睜り、耳に入れようとした。

　懇意の人や、近處の人達からの祝物が、一部屋に狹く積み上げられたり、飾られたりした。いろ〳〵な女の人達が挨拶に來て、爾うした物や、米子の仕度を一々出させて展げて見て行つた。母親も亦展げて見せるのが、得意な一つの自分の仕事でゞもあるかのやうな誇りの色にイソ〳〵として、一時も他と談笑せずには居られぬやうな落着かぬ樣であつた。米子には坐つて話して聞かす事もなささうに、買物に外出勝ちで、後家で育てたと云う三

人の子の、其一人の落着きを『ほんとに貴女のお力でねえ』と一人でも餘計に賞めさせずには置かなかつた。鐵也は、深く諦めた者の如く、芳子には柔順であつたが、焦々しく何等かの感情に神經を尖がらせて居る事は蔽へなかつた。彼の耐え難い其憂悶は、母親に對つて棘々しい皮肉の言葉と成つて行つた。

『お母さん、此の家が潰れちややあ可いんですね、面倒臭くなくて』

『莫迦な事をお云でない、潰れたらお前方奈何して食べて行きます』

『食べて行く位、奈何にでも成りますよ、お母さん見たいに慾張つてばかり居たつて仕方がない、米子なんか、家の人數が一人減ると云ふお母さんの慾張つた勘定の犧牲になつて他家へ嫁られるんだ…………可いかい、米子、其積りでおいで』

『莫迦な事を！お前と話すると、お母さんはもう癇癪に觸つて耐らない、厭だからお芳の方へ行つてお呉れ』氣の短い母親の眼には怒りと癇癪が燃えてゐる。

『鐵也さん、お默り、お前が惡いよ、男ぢやないか、齒を喰ひ縛つてもお耐へ』と芳子は窘めたが、自棄になつたやうな其態度の中に、弟の胸底を思ひ遣つては云ひ知れぬ慘ましさが胸を衝いて來る。

鐵也と母親と爭ふ事は今迄に無い事であつた。平素鐵也は、母親に向つて、圓滑に彼女

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の瘤高な權柄を調和して來た。それが米子の縁談以來、母親と鐵也とは地を替へた。母親は他に心を潤ふす喜びの爲めに、平素の激しい小我を出さなかつた。却つて鐵也は愛する妹を奪はれる淋しい心に焦々しさを沸き立てゝ、押へ難さうに見えた。處女を去る――只處女と云ふ二字に奥深い概念的な意義を埋める、初心な青年の心に――妹の上を耐え難く懊惱してゐるやうにも見えた。而して鐵也の妹を愛する心持ちが、非常に深かつたと云ふ事を、今更に感じた芳子は便無い心地に　しまれた。

『處女の尊さ』『純潔なる處女の聖さ』それは時間（タイム）に限定されるものではなからうか、處女は尊い、けれども、四十、五十、又六十の齢を數へる普通の女の處女の二字は、猶且、深奥な意義と神秘を人に與へるだらうか、自らも、我處女なり、と、處女と云ふ名に相應しい華やかな滿足を以つて誇り得るであらうか。一意、神に捧ぐる童貞、稀なる天分に自覺した自己へ捧ぐる稀なる童貞を守る人以外には、恐らくは淋しい境涯に、止むを得ぬ強いられた誇りを感ずるに過ぎなくはなからうか、年老けての處女は、人間として知る可き世間を知らず、潤ひも無き頑なる小さき己れの世界に、花の紅あるを知らず、他人にもぎじちない醜さを與へるのではなからうか。若しさうとして見れば、處女の聖き誇りは、其絕頂を矢張り處女の名に相應しい、血の燃ゆるやうな時代に見出さなければならない。さう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

してこそ凡人としての、處女の尊き誇らしさは、完全に納め得られるのではなからうか。と云つて米子に確に、今、其時が來たと云ひ得るであらうか、米子は未だ燃ゆる緋では無ささうである――けれど――けれど、花の周圍に暴風雨は來さうだ、保護す可き軟かき廂はない。未だ、親の一字の許にある米子には誰の力も及ぼす可くもない。が、愛なき親の一字は風を誘ひ、雨を呼ばせる。力弱き花を其儘措くは傍觀むる人の罪ではなからうかと芳子は思つた。

軟かく、鋭く、巴のやうに渦を卷く人々の心の激しい表現の中に居て米子の乾燥ぎようも一層激しかつた。

『さう皆と一緒にはしたなく乾燥ぐものぢやない、少しは落着いて仕事をなさい』

『え、どうせ私ははしたないのですもの、私は怠け者だから何もしたくないのです』

坐らせやうとする芳子にさへ、不快らしい反撥を見せた。

芳子には、態うして皆が、只キャッ／＼としか云はぬ日送りをして居るかのやうに響いて、母親へは苦々しく、米子へは傷ましかつた。若しや、結婚と云ふ、未だ期待せぬ俄かの驚愕に動搖させれらて燥狂になつたのではあるまいかとさへ案じて見た。而して自分の其年頃の時、緣とか婚禮とか云ふ言葉は、訊いたゞけでも耳を赤らめなければ居られなか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つた羞耻の情を、米子には見出せぬのを不思議にも思ひ、時代の推移を思うても見たりした。

『鐵也さん、米子は此頃奈何かして行つたね…………少し樣子が變つて』

『えエ、もう米子は諦めて居るのですよ、却つて虚心になつたから乾燥るのでせう、まあ姉さん餘り心配しない方が宜う御座いますよ』

それでも心配せぬ事は出來なかつた。一緒にお湯に行つたり、從來になく毎朝髮を撫で付けてやつたり、皆と一つお膳に座る事は珍らしい芳子も、出來るだけ米子等と一緒に食事を採る事に心懸けたりして、襖一枚、廊下一つの大きな隔りは――それは儼しい母親への表面だけのではあつたが――兄弟の間に除られて行つた。

（未完）

「初戀のなりゆき」前號誤植及脱字。
（一）の一行目「その男子」は「その男の子」。次の頁の六行目「氣が付いたのです、早く――」は「氣がついたので、す早く」その次の頁の末から二行目「あの上で」は「木の上で」。それから（二）の二枚目の末行「次郎」は「次郎さん」以上。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

初戀のなりゆき

岡田八千代

三

翌日いつもの通り學校へ行つて見ますと次郎さんは來てゐません。もしや遲刻かとも思つてましたけれども、とう〳〵終りの時間までその人は來ませんでした。私はまた淋しく私の道を歸つて行きました。その翌日もその又翌日も次郎さんは來ませんでした。

その中にいつか私も淋しさに慣れて歸り道を急ぎましたが、しかしどうして次郎さんが學校を休むのかゞ氣になつてなりませんでした。けれども何となく氣の咎める處があるので外の友達に次郎さんの事を聞くのは厭でもあり又、病氣ならば、どうしても家へ診て貰ひに來なければならないのだといふやうな事をやつぱり考へて居たのでした。さうかと云つて次郎さんの家の側へ行つて見るのも何となく恐ろしいやうな氣がして、かなり御てんばだつた私も次郎さんが見えなくなつてから妙にぼんやりしてる日が多くなりました。それに家へ歸つても次郎さんの方へは遊びに行きにくいので、自然家の中でばかし遊ぶやうになつてしまひました。

「歌子、お前はこの頃なぜ家にばつかり引込んでゐるの。」

とよく母に不思議さうに聞かれましたけれど私はたゞ默つて室の中につくなんでゐました。

そんな事が半月も續いたある日の事でした。私が例の通り鞄を下げてブラリ〳〵と誰よりも遲れて家の方へ歸つて來ると、其處の角の處に丁度人でも待ち合してるやうに立つてるのが次郎さんぢやありませんか、私は思ひがけなかつたので思はず、

「まア、次郎ちやん。」

と云つてしまつたのでした。云つてしまつといて私ははつとしました、何故ならば私はまだ次郎さんとは一ぺんだつても口を利いた事が無かつたのですから。

私は自分ながら顏のほてるのを覺えました。それに元より『我』の强い私でしたから、あんな事のあつた後に私の方から口を利くといふ事は口惜しい事でなくちやなりませんでした。私は殘念な事をした念と辱かしいのとが一處になつて、直ぐに走けぬけてしまはふと思ひました。その時、

「僕ね、君を待つてたのよ。」

と次郎さんが云ひました。私は再び思ひがけなかつたので、走け出さうとしたのを止め

て次郎さんの顔を見ました。

「僕ね、病氣だつたの、けれども、もう直つたんですよ、だからね、僕、今日君が歸つて來たら一ぺん遊ばうと思つたの、それで待つてたのよ。」

次郎さんの言葉は女の子のやうでした。それに病氣した故か、少し赤い髮の毛が長目に額にかゝつて、色も前よりは一層白くなつて、頰の處だけがぽつと赤くなつてるのが、まるで人形でも見てるやうで美しいつたらありませんでした。

私の心はこの次郎さんのなよ〳〵しい姿を見ると不思議に柔かく優しくならずにはゐられませんでした。

「ね、いゝでせう君、僕ね、外國の繪端書を深山持つてますよ、それを君に見せやうと思つてるんです、病氣の時お父樣が下すつたんですよ。」

とは云へ私の强情な心はまだ次郎さんに優しい言葉をかけるまでにはなりませんでした。しかし私は默つてうなづいて次郎さんの行く方へ行く事になりました。

「僕ね、病氣の中ね、熱が四十度もあつたんですつて、それでね、學校のうは言ばかり云つてましたつて、それからね、僕君の事も云ひましたつて、君の名歌子さんと云ふんでせう?」

次郎さんは道でこんな話をしました。私はやつぱり無言で次郎さんの美しい顏ばかりを眺めてゐました。

次郎さんの家へは間もなく來ました。けれども次郎さんは何故か玄關からは上らずに、左へ反れて生垣の外を一廻りして庭口から私を庭へ連れ込みました。丁度秋口の事で、そこには種々な草花が花を持つて美しく咲いてゐました。私達はその中をぬけてとある小ぢんまりとした室の前へ出ました。

「此處僕の室なんですよ。」

云ふ通り其處には小さい本箱や小さい机がきちんと置いてありました。私は次郎さんの家が門の處で見たよりも大きくて立派なのに少しどぎまぎした形でした。

次郎さんに云はれても私はちつと其縁の處に立つてゐました。

「お上んなさいな。」

次郎さんは直ぐ上つた足で向ふの机の側へ行きましたが、やがて大きな箱を重さうに抱へて私の立つてゐる縁側の處まで持つて出ました。

四

私はなんだか夢を見てるんぢやないかと思ひました。それでやつぱりぼんやりしてゐま

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

した。

「此繪端書はね、みんな外國のですよ、僕が病氣したんでね、可哀さうだつて父様がみんな下すつたんです。だからみんな僕のです。けれども僕、君にならあげても好いんです。」

次郎さんの云ひ方はまるで、私が考へてゐた次郎さんとは違つてゐました。私の考へてゐた次郎さんはへんくつなお澄しでしたが、今私の前にゐる次郎さんは、ちつとも隔ての無い人なつつこい次郎さんなのです。

次郎さんは私が默つてるのにも搆はず、どしどし箱の中から種々な繪端書を出して見せました。

「これはねナイヤガラの瀧ですつて、隨分大きいのね、僕これ見た時驚いちやつたんですよ。」

次郎さんはさも驚いたやうにその眼を丸くして私を見ました。私はその時次郎さんの黑眼はすつかり眞黑ではなくて少し茶色してるなどゝ思ひました。

「これね印度の美人ですつて、美人つてんでも美人ぢやないのもあるのね。」

かう云つて次郎さんが一枚の繪端書を私に出して笑ひました。その時私は又次郎さんの前齒が度外れに大きいのを見ました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「これはね露西亞のお寺ですつて、隨分とんがつた家根ですね。」

こんな風に次郎さんはそれからそれと繪端書を説明してくれました。やがて次郎さんの出す繪端書が私の袴の膝の上に一ぱいになりました。

その時私はどうしたのか急に悲しくなつて來ました。それでも泣く可き場合ぢやないと思つてゐたので、それとなく顏をそむけて庭を見ました。

庭には私の大好きな鷄頭や萩や芙蓉やが一ぱいに亂れ咲いてゐました、聞きすますと、眞晝を靜かにこほろぎが鳴いてゐます。

「君、もう厭になつたの？」

私の肩に温かい手をおいて次郎さんが私の顏をのぞき込みました。

「いゝえ。」と私ははじめて口を利きました。けれども私の悲しみはまるで滿潮の押へがたい力のやうに私を押へつけるのです。

「いゝえ。」と私は再びいひました、その時私の涙がぱら〳〵と私の膝に落ちました。

「君、どうしたの、君、何が悲しいの、お腹が痛いの？」

と次郎さんが忙（あわ）てたやうに私の腰かけてる前へ廻つてその顏を近くに寄せました。

「いゝえ。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「どうしたの、僕惡い事したの？」

さういふ次郎さんの眼からも今にも涙がこぼれさうに瞳が悲しさうに動きました。

私は急いで着物の袖で眼を拭きました。そして、

「もう好いの。」と云ひました。

「さう？」と次郎さんは私の肩においた手を放して私の膝の上に一ぱいになつた繪端書を取つてくれました。

「もう君、繪端書見るの厭ですか。」と次郎さんは氣遣はしさうに聞きます。

「いゝえ、いくらでも見るわ。」

から私が云ひました。私の『我』は私の今の涙と共に流れたのか、私は今度はちつとも澁らずに口が利けて來ました。

「でも、あんまり一どきに見ると父さんが毒だつて云ひましたからね、あとのは又明日見せて上げませうね、それでね、僕今日は、僕の一番好きなのを見せてよ。」

「さうどんなの？　景色？　人？」

「人なの、それはね、素的に綺麗な人なの、西洋人ですけれどね、綺麗なんですよ。」

大變な巧能書で見せて吳れたのは、米國か英國かの女優の立姿で、洋服にキラ〳〵と硝

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

子の粉末を遣つて彩色してある子供の目には眩ゆいばかり美しいものでした。その女の顔はやゝ丸顔で目の大きな髮の毛の濃い、口付が何とも云へぬ可愛らしいのでした。

私も思はずその繪端書には見とれました。そしていつまでもいつまでも見てゐました。

「僕ね、その繪端書大好きなんですけれど、君は嫌ひですか。」

「いゝえ、私も大好きだわ。」

私はなほその端書に見とれながら云ひました。

「ぢや、君ね、何故その端書好きか知つてゐて?」

「いゝえ知らないわ。」

「そんなら云ひませうか。」

「えゝ。」

「君に似てるからなんです。」

私はびつくりして次郎さんの顔を見ましたが、次郎さんは平氣で、

「噓ぢやありませんよ、ほんとですよ。だけど、その繪端書君に上げませう、僕もう君とお友達になれたんだから要らないもの。」

（未　完）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

世間知らず

岡田ゆき

A——金持の息子。
B——世なれた青年。

A。僕はまだ他人から馬鹿野郎と怒鳴られた事もないが、わざとらしい御世辭にはうんざりする。
B。君はよい身分だ。羨しいよ。
A。他人が僕に對して、尊敬をはらつてる樣な事を云ふのは親の名があるからだ。さう思ふと他人の言葉が皆空虛に聞へていやでたまらない。
B。そんなことを思ふのは、親に對してすまない理だ。世間知らずはよい者だよ。
A。一寸見はよいかも知れないが世間知らずと云ふことは決して誇ることぢやないむしろ悲しいことだと思ふよ。
B。然し君の樣な人を世の中へ突き出したらそれこそどうなるか知れないね。
A。それ程僕が、否、世間知らずと云ふとは弱虫かね。けれどもよく考へて見給へ人間は始めから、さう世の中の波が上手に泳げるものぢやない、打ち寄せる大波に、足をすくはれて倒される。そして再び起き上つた時倒される以前より、きつといくらか大きなものになつて居なければならない理だ。その意味で僕は何度も倒されては、何度も起き上るよ。さうして居る内に、自分がきつと立派な者にな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

れるに相違ない。(輕く笑ふ。)

B。君は强い心を持つてゐるんだね。まあ思ふ樣に世に立ち給へ。僕は影ながら君の前途の幸福を祈つて居る。そして君が倒れたと聞いたら、大きな期待を持つて起き上るのを凝視することにしやう。

A。あゝどうか、さうして吳れ給へ。

アトリエの畫

妹——大村と云ふ洋畫家の實妹。

女——肖像を描かせに來る若い美しい女。

妹。(描きかけの畫布の前に腰かけて、ひとり考へて居る。)

女。(ドーアを開けて入つて來る。)おや大村さんは御留守なの。

妹。今日は。

女。(默禮する。)

妹。私もう少しさつき來ましたの。そしたら兄は此處に居ないのです。これ貴女ね(繪を指す。)

女。えゝ、いつも丁度今頃來て描いて戴くことになつてますの。私が伺ひ始めてから、お留守のことなどないのですよ。

妹。さうでしたね。私もこうして、毎日今頃此處へ來ますと、兄は貴女を熱心に描いてゐるのですわ。まあおかけなさいな。

女。ありがたう。(妹の側の椅子に腰を下す。)

妹。丁度一週前貴女が肖像を描かせに兄の處にいらつしやり始めて二日程たつてから、私が毎日こうして、貴女のおいでの頃を見はからつて、此處へ來るの何故か

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

知つてゐらつしつて。

女。いえ、貴女の御心など、わかりつこないぢやありませんか。それに貴女と只二人きりでお話しするのは今日が初めてですもの。

妹。さうですね。實は貴女がおいでなすつた、三日目に私が何の氣なしに此處へ來ました時に、畫布に向つて畫筆を働して居る兄の目にたゞならぬ光を見ましたのこう何と云つたらよいでせう。丁度闇黑の夜に燃える篝火の樣な輝きでした。

女。まあそんな光を、大村さんのお目に御覽になつたとおしやるの。

妹。えゝたしかに見たのです。それがどう考へてみても兄の心に戀の火が燃えてるのを意味する樣に思はれますわ。そして兄の目があんなに輝いたのを見たのは、義姉が亡くなつて以來始めてです。それから、私はどうかして兄の心を知り、もしも戀する人が出來たなら、どうか其の思ひをとげさせたいと考へる樣になりましたの。それから今日で五日、貴女のいらつしやる時分に來ては、兄の心を探つて居ましたんです。

女。（默つて微笑して居る。）

妹。ところが今朝一寸用があつて此處へ來ますと、兄が此の繪に向つてしきりに獨言を云つて居りますの。そして私が後方に來たのも、氣付かない樣子でした。私はそうつと靜かに立つて居ました。ねえ貴女、兄は貴女を亡くなつた義姉の再生

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の様に申て居りますの。貴女は御存じかどうか知らないけれど、兄はそれは〳〵熱烈に義姉を戀した結果、その望みが、かなつて、漸く添ふ事が出來たのですが滿つればかくる、とはよく云つたもので間もなく義姉はそんなに長くも患はずに、亡くなつてしまつたのです。

女。御氣の毒ですわね。

妹。えゝ兄は隨分可哀想でした。それからと云ふものは兄は、まるで冷い人間になつてしまひましたの、けれど貴女がいらつしやり始めて以來、また義姉が居た頃の兄に返り初めましたのよ。

女。それでは大村さんは私を戀して居らつしやるとおつしやるの。

妹。もうさうに相違ないのですわ。それに貴女が餘りよく義姉に似ておいでなのですもの。

女。ホヽヽ、さう、ぢやきつと他人のそら似とでも云ふのですわね。

妹。そして兄はもう此繪も二三日で完成する。さうすれば、もう彼女に逢ふ機會も無くなる。又僕はもとの淋しい僕になつてしまふのだつて云つて居りました。私は此の言葉を聞いてたまらなく悲しくなりましたの。それで繪が出來上つてしまつて後も來て下さる樣に私がお願ひしやうと思つて。(女をぢつと見る。)

女。私が兄樣の奧樣に似て居ると云ふ事はそれは自然のした業ですわ。奧樣に似て居るから。大村さんの戀人にならねばな

らないと云ふ理はないぢやありませんか。ねえ、さうでせう。

妹。(一寸まごついて。)えゝ、そりやさうですとも。

女。私はね、大村さんにとつて、其の描きかけの繪と同じものですよ。貴女の兄樣の戀しておいでなさるのは、亡くなつた奥樣ですわ。つまり私は奥樣の影法師なのですね。けれどそれは、只、外面の事で奥樣と私は何處迄も異つた二つの個性です。私は影法師になるのはいやですわ。私は只、大村さんに、肖像を描いて戴きに來ただけですから、描けてしまへば此處へ來る用もない筈です。又、私は他人のために自分を犧牲にしたくありませんの。何處迄も私は私の道に行かねばならないのです。

妹。兄は不幸ですわ。貴女はどうしても來ては下さらないのね。

女。大村さんがいくら、私を思つてゐらしつても、私の靈が結ばねば、もうそれぎりですわ。私は他人のために自分を殺したくはないのです。何度云つても同じ事ですわ。大村さんは奥樣の事をそれ程思つて居らつしやるなら、終生心の中に奥樣を描いて他人の私などにさう容易に戀などお出來なさらない筈よ。まあそれにしても、大村さんは何處へおいでなすつたんだらう。(獨言の樣に。)大層おそいこと。

妹。(ぢつと椅子に寄つたまゝ動かずに居る初夏の太陽の光が横顔に影を投げて居る。)

青鞜詠草

畔蒜こと子

生るる子の女なりせば野菊など名づけまほしうおもほゆる秋

ましら菊にほふ頸かや吾子抱き野にたつ我のまぼろしにみゆ

ほのかにも一人うれひて菊つめば夜霧にしめるわれが額髪

ふりむけばげにもみにくくうつろひしわがうしろ手に涙しじなり

以下戀愛巡禮の著者へ

身を砕きあはれ悲しういたましう打さらすべき日を思ひ泣く

こらへかね涙おさへてよみはしつあまりに君のこし方戀し

みづからのかひなき生命みにくくもかへりみらるれ君がみ前に

げにわれのゆく道にしてまづ君のたどり給へる跡のかなしも

まづ君は生命を千々にうち砕きなげきたまひぬいとしいかなや

めさむれば胎兒かすかにうごきをり底冷えのする秋のよふけに

母らしくすなほにわれとわが心ならされてきぬ君知らざらむ

紅き林檎ひそかに頰にあてながらさかしくゑみぬ初秋の風

林檎林檎生るる吾子が頰を思ふあき風落つる草の片かげ

狂ほしさぢつとこらへて吾子がためさかしくただに胸すましゐる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

吉原芳子

戀か名か一つをとるにひた迷ひまよふ心のかなしかりけり
戀に更ふ望みをあまたもつといふ男心はねたしつれなし
なにごともあらがひ給はぬみ性ゆゑ悲しともまた飽足らずとも
うらまるる悲しきことも戀ゆゑとまたかかる身の幸を思へり
なげくこと怨むことさへなき夜はみ前にあるもうらさびしけれ
旅とほく君たつ日なりはつ秋の風ひそひそと鶏頭にふく
しづみゆく心のとほく夕空にもとむるかげを誰か知らまし
ひそひそと冷たき月の光りより胸によりくる秋よみ魂よ

鞆音

川添ひの二階座敷のおぼしまに月のでしほをまつ身うれしも
大川の灯影つづきの君が宿訪はまほしやとおもひ暮らしぬ
やすけさのたえてなきまに玉章は文箱にみちて秋かせふくも
さらさらと秋かせわたる縁に出て足袋はくわれの痩せにけるかな
わがふたり紅指染めしつまぐれのまた忘れなとさきいでにけり
いくたびか胸おどらしし思ひ出の浴衣うとまし初秋の日は

出久智郁子

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

在りし日の君を描けば灰いろの生活のなかにひとつ光れり

念ひ断たんふと別れたるかの君の心うつりも運命として

家出でて一とせたちぬ故郷の海邊の秋のおもはるるかな

口にいづる唄ことごとくわれとわがさだめなりけり秋さめの夜は

たよりせず一とせすぎしわか家を忍べば庭にしら霧のたつ

磐城　浪人

ひとりでに逝く水のごと妻となり母となりゆく姿さびしも

湯あがりの廊下に出でてくろ髪をすける女にひかる濱風

おとなしう一人あることそ堪へられね狂ほしうして今日もねぶらず

妬まれずねたまず男綿うちて小鳥のなかに今日もうたへり

わすれえずその夜枕にかよひたる水のひびきとひとのなげきと

澤田　小鳥

五つとせの深きなさけもわすれはてわがあさましさ君をのろへり

貧しき家冷たき人のなかにゐてはやくも人をのろひそめけり

このごろの空の色こそかなしけれわれ心よりわらふ日もなし

住吉　哀歌

ゆふざれば窓のポプラに風わたりあかき雲さへしづこころなし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

アカシヤの病葉のちる日となりぬわれにもおもふひとのあれかし
ひとしきり樹々に夕日のこもらひて葉裏葉裏に風わたるなり
アカシヤの病葉ひと葉ちりかかるこずゑあふぎて猿まわしゆく

靈 千代

子らはみな釣鐘草をつみにやりしづかにひとり君をおもへる
ひつそりとしばらく君をおもひゐぬ秋海棠の匂ふかたはら
うつつなく手と手かさねぬ秋ばれの障子に影の濃くうつりたる
醒めはててかくあるものを今更にいかなれば君戀をなけくぞ

高橋 てる

さびしさに暮れゆく空をみつめつつ直こひしさの涙ながしき
日もすがら母に抱かれて泣きゐたる秋晴れの日をふとおもひいづ
はるはるとあこがれの地にきつれども悲しや君にあふすべもなし

永井 芳子

あかねさす東の空をおほひなす片面あかるき雲の一むら
わが戀はあさのま白き露の玉ゆふべをまたできえさりにけむ
いづ方にゆきてなごまむ心ぞもあらぬみ空に旅をつづくる
二人づれ流し來ながしゆく音の三すぢの糸にあきのかせ吹く

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

九月の歌壇より

この母と子のい向ふ朝げ夕のけの食ごとに久に遠に君おもふ（朱欒）　若山喜志子

はかなくも術なくもこひ泪涙の長き渚にうつけもとほる

おもひ深めてなくか梟今宵こそ月ののぼらば戸をおしてこむ

朝に夕にくろ手ひく手もたゆたゆのあら木月みつつよりつつこひしく（潮音）

うすぐもる夏の月夜の木がくれに遠なく梟こゑもおろおろ　四賀光子

ほのかなる夏の夕の公園に遊動圓木なりてさびしき

黄さきにわづかにみゆるくもり空鳥だにとばず久しかりつゝも

おそれげもなく日向葵がおす豊深き影さへぬらし日向葵すも　山田邦子

秋立ちぬ子のことよりもたちまさりしみじみおもふ事もつわれは（科學と文藝）　與謝野晶子

天の川白き夜空にかひなあげふれて涼しくなりし掌

たはむれていひ過ぎをして小半日わびしがれるもなほ若きため（萬朝報）

平塚の評にすぎぬが云ふことも身にしみぬさてわれなげくらく（今日）

うしろより賦ぬりながらものいひし叔父などおもふみそはぎの花

死ぬばかりさまむばかりにものおもひしつつ秋草わけてあゆみき

紅椿いのちをかけてさくごとしその眞實のおよびがたかり（反響）　茅野雅子

すてらるろ夢さへあまたかさなれどもだして人をたのむあはれさ

水市場の横の紫陽花まん圓く光りかがやき物おもふごと

水晶のたまとおもひぬやめろ子のきようにやせて眼にれむれば（婦人の友）

青桐の青き葉影にはふ蟲も身もやほそるらむ初秋のきて

運命をしろ日となりてわがままをゆるさるろこそわりなかりけれ（銀響）　三ヶ島葭子

さばかりにわが世たのしとおもはれご夢をおもはぬ心となりぬ（新潮）

生きものの數にもれれば神のごとれてありし子も継におきいづ

あへばみなふるさとびとは唯にわが兒をほめていぬはた寂しかり　原阿佐緒

×

久しぶりに母とならびてみてありぬポプラの丘の夏の夜の月（水甕）　水町京子

善悪のことはりなどたゞおもふには餘りか弱き心なりけり
湯上りの爪のいとしさほんのりと乙女らしさの匂ひするさへ
荒木總子

ゆらゆらと月がのぼれば乙女ゆゑ我幸多き淋しみをしる
よるべなき生命いのちとふれながらかゝはりもなくわかれむとする
長岡さみ

美しき玉をだくてふ愁ひなりくだけやすると靜心なき
うらがなし一人らくしてともす灯にふと秋風のひかりよぎりし（詩歌）
小谷清子

一人寢は銀のごとほの白く悲し冷たし夜もふけにけり
すがれたる棕梠の木ありて夕燒のあかれの空に風わたるらし（アララギ）
築地藤子

夕ぐれのひとすぢ道にあかあかと光はゆるる寂しき光
蜩の高音なきかふ海沿の木々を背にして今かへる子ら
まんまんと海こそみゆれわがいゆく山の笹原かがやくまでに
服部胡頽子

廣葉長葉てりて閑なき黍畑人ひとりきてあゆみさりつも
あかあかと月はのぼれり煙突の上より巾をのぞく人みゆ
夕まぐれ島かげをゆく黑き船はつかり赤く灯をつけにけり
小百合

丈高き玉蜀黍の葉のうごきうすら冷たく月いでにけり
ひそやかに水のながるる草原の茅萱の白穗ふみてきにけり
唐澤うし

ゆふぐれて遙けくもきし世の道向うにひかる星の寂しも
緣しげき家にきたればふかき壷白百合庭にさきゐたりけり
森山よしの

夏深き山の奥がに人をりて草かるらしも馬なくきこゆ
そよろにも梢ゆらげばちらちらと日にうつるなり夏雲のいろ（潮音）
世良田優子

ひと所雲かげろへば空の色けふはわきても秋らしくみゆ
幽かなる日の光こそあはれなれうつつにきよくロベリヤのちる（反響）
宮本一枝

乳よりも白しひかれる實苺の花にあめふる春のあめふる
ダリヤ畑晝ふかくしてたえがたし雌犬の喉のあかあかとみゆ（Ars）
白井英子

朝な朝な寂しき慾に無花果の實が青青と大きくなるも
轟轟ときしりちかづき汽車二つ何事もなく遠ざかりたり
なきぬれし頰をばかくして夕暮の磯より宿の部屋にかへりぬ（早稻田文學）
岡本かの子

圓らかに頸のくくりもうききてみゆきと引きしめし紫の襟
白雲のわくなる里に安らけくすむとしきかばおちゐたまふや（潮音）
天野たつ子

いささかの事もよろこびききたまふみ顏あふげばただにうれしき（水甕）
長谷川清子

おもふ事なげなるさまに海にいりおよぎまはるになれし淋しさ
山本茂登子

たへがてに人のこひしくなりにけり夕影みちのひぐらしのこゑ（アララギ）
山田およう

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

感想より追想へ

生田花世

加藤みどり様。あなたが私のああした愚直な心をそのまま投り出した書物「戀愛順禮」でも御批評下さいましたといふ事を、新聞の豫告で見ましたので感謝いたして居りました。一昨々夜、私は店頭で「婦人雜誌」を見かけましたので立讀みをいたしました。御非難のかどはよく分りました。そしてあなたの忌憚なき御批評を感謝いたして居ります。私に靈の生活の十分に營まれて居ぬことや、性慾に對する自制力の薄かつた事や、頭腦のはつきりして居ぬことや、思想の乏しい事や、何處かしら病的な事やそれは大抵お言葉のとほりのやうな氣がいたします。私にはあのあなたの可成り立入つた一寸お意地の惡いと思はれるやうな點も、それも皆私に對する御厚意からであると思はれるのでございます。

それで私には別段反駁いたさねばならない事はもとよりありませんし、然し御厚意を頂戴いたしましたしるしまでに、この手紙をお渡しいたします。

みどり様。私は今靈にも肉にも生活は充實して、大變幸福でございます。さうして一時は氣拔けがしたやうになつて居りました。ああ、この生活の靜けさ。日毎日毎の穩

かさ、愛する心は花のやうに匂ひ、喜ばしさは私を酔はせます。私は身體を安らかにして柱にもたれて、折々、夕雲を眺めたり、月のまどかな面に見入つて恍惚といたします。狂奔してゐた時代の私がその月の鏡にフヰルムの如く現れるではありませんか。かうして、自然に私は、藝術に入つて行かうとして居ます。從つて、あの生醒(なまぐさ)いやうな感想から、涼風のやうなそよそよした追想へと、私のペンは走ります。「村の精神病者と生兒」はその第一歩のものでございました。

みどり樣。以前の私はかうした靜安を知りませんでした。走馬燈の如く現れ、現れて私を刺戟し動搖させるものに狂奔させられてゐた時代が私の本當の姿か、これからが私の本當の姿かと疑はれます。私の心には日を經るにつれて、過去の生活が鮮かに鮮かに意味多く現れて、私の思索に任せて展開いたしてまゐります。私はそれにぢつと目をつけて二百冊ばかりの記錄帳を相手にして、何かを造り上げて行かうと思ひます。私はこれから本當の生活に入り、これから自分の生活をいとなみ、これから藝術を知り、藝術を造らうといたして居ります。みどり樣、この意味で「戀愛順禮」一卷はあれは藝術品ではありません。あれは人生記錄帳(ヒユウマンドキユメント)です。そうしてあの樣なものは私にはただ一度しか書けないものの一つです。そ

れで私も我ながら、あの書物の貴うとさに打たれて了ひます。

感想から追想へ、追想から小説へ、これが自然に藝術家の歩いてゆく路なのではないでせうか。私は秀れたる表現の仕方をしたいのです。果して私にその才能があたへられて居りませうか。

少しお遊びにお出で下さいませ。御主人樣には二三回お目にかゝりましたが、あなた樣にはまだお目にかゝりませぬ。牛込區天神町五十三番地、田中銀行横町の奥、中村武羅夫樣のお家の裏の家です。本當に小さな隠栖（いんせい）といつた樣な家でございます。唯今椽には下駄箱の上に、コスモスの花を挿した竹筒があつて、その傍で飼猫がやすんで居ります。本當に今日も靜かでございます。

右まで。　（大正四年九月廿八日）

日月社より　▲伊藤さんから「九月下旬どうしても歸京するつもりで、種々歸京後の計畫もたてゝ準備を急いで居りましたけれども、みんな駄目になつてしまひましたので、まぎわになつて原稿をかくことも手紙をかくことも出來ず、雜誌のことも氣にはなりながらどうもすることも出來ませんでした」といふ手紙が參りました。それは五日の晩はじめて本號の校正が出た時でした　▲平塚さん、岩野さん、伊藤さんと揃ひも揃つて、苦しんでゐらつしやいます。本誌は今少し發展しなければならぬのですが、種々の事情で思ふやうにまゐりません。本號は四日ごろには晩くとも出ることになつてゐたのですが、印刷所の都合などで遲れてしまひました　▲青鞜詠草、感想、日記文の投稿を歡迎致します。文章はなるべく簡潔に願ひます。（F　記）

第二回奥村博畫會

今回同會に於て左の方法により奥村氏最近の作品を頒つさうです。

一 取材は風景、靜物(果物、花等)
一 作品は二十枚を限ります(A十枚 B、C各五枚)
□A油繪四號(一尺五寸・一尺一寸)拾　圓
□B同　八號(二尺一寸・一尺七寸)貳拾五圓
□C同　十號(二尺四寸・二尺二寸)參拾五圓
——各金額縁付——
一 入會申込と同時に最初の分を拂込んで頂きます(拂込金は五ヶ月に分ち各一ヶ月A貳圓B五圓C七圓宛)
一 作品は拂込最後の月に、申込順により發送致します
一 尙入會の際全額の二分の一以上拂込の方には一ヶ月以内に作品を送付致します。此場合殘金は作品と引換に申受けます
地方に限り送料は別に申うけます
(中途脫會の場合、既納會費のお返しは致し兼ます)

申込所　東京市四谷區南伊賀町四一　奥村博畫會

藤村會より

目下フランスにある島崎藤村氏を後援するために生れたる同會からかういふものが參りました。

一 本會は島崎藤村氏の友人愛讀者等をもつて組織す
二 本會は時宜に應じたる種々の方法により藤村氏に吾等の友情を表するを目的とす
三 同情をもつて會員たらんとする人々を廣く歡迎す會員には何等規定の義務ある事なし
四 入會希望者は東京麹町區下六番町一〇有島方藤村會宛にて住所姓名の御通知を乞ふ
五 本會萬般の責任は左記の發企者總代之に任す

田山花袋　中澤臨川　戸川秋骨　馬場孤蝶
小山内薰　蒲原有明　有島生馬

藤村會差し向の方法として會員中有志の諸君より思召の御出金を仰ぎ在佛國藤村氏に贈與致し度と存じ候御出金は取扱の便宜上相成べく金五十錢以上に相願度來る十月十日迄に有島方藤村會宛にて御送金願上候

貴　殿　御　中

編輯をへて

こんどは伊藤さんがお忙しかつたとみえ廿日すぎになつても送つて下さらなかつたので、かういふものになりました。御寄稿下さつた方に厚くお詫申しあげます。長谷川さんのは五十幾枚ありましたが都合上約三分の一ばかりしか載せられず、荒木さんのも少し殘さればなりませんでした。演野さんの「夜から朝へ」齋賀さんの「戰禍」岡野さんの「日記」其他はまだ澤山頂いてありますが追々のせてゆくことに致します。廿八日(係F)

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雜誌規定

■毎月一回一日發行
■定價一册金貳拾五錢(郵稅壹錢五厘)
■前金購讀料(四ヶ月分)壹圓(六ヶ月分)壹圓五拾錢(八ヶ月分)貳圓(十ヶ月分)貳圓五拾錢(一ヶ年分)參圓
■廣告料(一頁)特三十五圓、一等二十圓、二等十五圓、三等十圓、(半頁)七圓
■郵券代用は一錢五厘切手に限る(但し一割增のこと)。
■編輯事務、補助團會費拂込は青鞜社へ。
■廣告申込、交換廣告は日月社へ。
■圖書、雜誌交換、購讀に關する一切の事務は日月社へ。
■原稿〆切期日は毎月十五日限とす。當分の間、日月社內青鞜係宛のこと。

大正四年九月卅日印刷納本
大正四年十月一日發行

禁轉載

東京市小石川區指ヶ谷町九十二番地 青鞜社內
編輯兼發行人 伊藤野枝
東京市京橋區弓町十三番地
印刷人 柴田杠一郎
東京市京橋區弓町十三番地
印刷所 千代田印刷株式會社

發行所 東京市小石川區指ヶ谷町九十二 青鞜社 振替東京二一一六番
發賣元 本鄉區元町二丁目廿五 日月社 電話下谷三二〇六番 振替東京二八九一番
大賣捌 東京堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

■婦人の開放■女權の擴張■

思想界の羅針盤 反響叢書 藝術界の基調

■平塚らいてう女史著

〔『青鞜』讀者は定價の三割引〕

第二編 評論集 現代と婦人の生活

▼四六版三百餘頁・定價八十五錢（送料八錢）

土曜新聞評し「て曰く

其容貌に於て、其思想に於て、其文才に於て、所謂、新しい女の中の女として最も優れて居るのは雷鳥平塚明子氏である。單に好奇心の眼を以て見るも明子氏は明治の末から大正の時代へかけて世を騷がした名物女の一人であり、更に之を思想上より見れば來る可き何物かを暗示する日本婦人の先驅である。而して本書は、明子氏が世間の侮辱と賞讃との間に立つて奮鬪せる行進曲を集めたるもの、其言論には未だ徹底せざる所もあり、多少奇矯に走るものもないではないが、其大體に於て惻々人に逼る力の潜んで居る事は爭ふ事が出來ない。世には食はず嫌いの人が多い。一口に新しい女と言ふ誤られた代名詞に咒はれて、思想界に現はれた傾向を見逃す事があれば、後日必ず悔を貽すに違ひない。

發行所 東京本郷元町二丁目二十五 日月社 振替東京二八九一 電話下谷三二〇四六

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

現代和歌選集叢書

■毎篇著者自選の歌一千餘首を收む■

■定價六十錢■郵税八錢■

■襴子と金と小間紙の美しき裝幀■

第一編 **黒曜集** 前田夕暮著

■向日葵は金の油を身に浴びてゆらりと高し日の少さゝよ

■みのこゝし夢をいだきて嫁ぎ來し女の夜の美しさかな

第二編 **行人行歌** 若山牧水著

■いかなれば戀のはじめにかくばかりさびしきことを思ひ給ふぞ

■女あり都にわれを待つと聞く靜かなりけり夜半の山の火

第三編 **萬物の世界** 土岐哀歌著

■人間の立ちて歩るくも悲しけれ眠さむれば先づ背骨のいためる

■大佛殿のやれ板の寄附に筆とりて秋のゆうべのわが名をかけり

第四編 **灰の音** 與謝野寛著

■この男ふかき心のありてなし、ふとせしことにためいきをつく

■我が心ピザの斜塔にあられども光りの中に白くかたむく

第五編 **戀慕流し** 吉井勇著

■一力のおあさにきゝしはなしよな、みにつまさるゝ戀がたりよな

■こゝろよく海も眠りに入りぬらん今すや〳〵と君の眠れば

第六編 **遠樹** 尾上柴舟著

■陽をあふげば少しめまいすこれをただに異なる今日のしるしとやせむ

■またしてもうき旅人となりにけり松生の上を富士の動ける

發行所 東京麹町區三番町八十四 振替東京一二九五三 植竹書院

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雄篇大作 植竹文庫 全譯縮刷

アルツヱバシエフ作
武林夢想庵譯（四版）

第一篇 サニン

■定價九拾錢■郵稅八錢■

原稿紙九百五十枚の大作

アルツヱバシエフの代表的傑作、本書出でて露都の紙價を一時に高からしめ、主人公サニンの思想は忽ち露國青年男女を風靡し、サニン主義を奉ずる男女の秘密結社至る所に出現する有樣なる爲、遂に發賣を禁止せられたるもの、今無想庵氏によつて、完譯初めてなつた。

ドストイエフスキー作
生田長江生田春月共譯（參版）

第三篇 罪と罰

■定價一圓四十錢■稅八錢■

原稿紙千四百枚の大作

フリイドリッヒ ニイチヱ曰く「ドストイエフスキイは吾が就て以て何等かの事を學ばざるを得ざりし唯一の心理學者なりとす、彼は吾生涯の最美なる幸福の事件に屬す」と、然り、偉大なるドストイエフスキイを知らざるものは、これ藝術以上の藝術家を知らざるものなり。

ロンブロゾオ作
辻潤譯（四版）

第二篇 天才論

■定價九十五錢■郵稅八錢■

原稿紙八百枚の大作

科學書にして科學書に非ず、文學書にして文學書に非ず、心理學？、生理學？、形貌學？、否、否、否、是等の全てなり。取材の豐富なるは更にも云はず、凡そ天才を論じてかくまで該博精緻なる科學的研究の根據に立脚し、而も興味湧くが如きものは蓋し空前なり。

トルストイ作
相馬御風相馬泰三共譯（七版）

第四篇 復活

■定價一圓八拾錢■郵稅八錢■

原稿紙千五百枚の大作

復活は單なる小説ではない。大天才トルストイが心血を傾け、藝術の假面を破りトルストイズムを準規として、忌憚なく廿世紀文明を解剖し、批評し、叱咤したる獅子吼である。殆ど翁一代の思想を擧げて悉く其中に包含したと云はれ近代文明の一大經典と云はれてゐる。

近刊 第一 第五篇第六篇 戰爭と平和

全二卷

紙數約二千頁百六十萬字の大冊

發行所 東京麹町區三番町八十四 振替東京一二九五三 植竹書院

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

森田草平氏譯

カラマゾフ兄弟

ドストイエフスキイ

紙装木版七度刷
總頁數約六百餘
一頁六號五百字

定價金九十錢
假綴分冊六十錢
送料各金八錢

本書はドストイエフスキイが永眠前一年（一八八〇）に完成した作で、トルストイの「戰爭と平和」と共にロシア文學の二大平行線だといはれて居る。主人公たる三人の兄弟の中イヴンは西歐羅巴を、ミチアは現在のロシアを、アリヨーシヤは全人類を包括すべき將來のロシアを體現したるものと稱せられてゐるそれ故本書は過現未のロシアを最も大膽に藝術的に表現したものである。日本でもこの書の譯が二三出てゐるがまだ完結してなかつたり、あまりに簡略すぎる梗概譯ばかりである。本書はその中の最も完全なものである。

（諸新聞雜誌及文壇名家は悉く本書を激賞せり、好評三版出づ）

▲著者卷頭に序して曰く。メレシユコフスキーは次のやうにいつて居る。ドストイエフスキイの作はその人自からを見るやうな作である。ドストイエフスキイは人生を苦しんで生きた人である。生きた、苦しんだ、そして泣いた。其自分の苦しい生涯を藝術として現した人である。啻に藝術として鑑賞する許りでなく、讀者はその作物を見ると實際作者の泣いてゐる姿が見える。作者は苦しみを訴へて居る。只讀んで居るのではなくて作者と一緒に苦しみ、一緒に生きるのである。心臟の鼓動を共にするやうな心持がする。ドストイエフスキイに同情するといふだけではどうも物足りない。その生活の中へ捲込まれて、主人公と一緒に生活する。でかくまで讀者を引きつける特長は何かといへばその主人公の心理を描くことが優れてゐるからである。どんな複雜な飛離れた心理でも明細に顯微鏡で覗く樣に描いて見せる。人間の內部生活を其儘擴げて見せる。從てどうしても主人公と一緒にしてしまはなければ置かない。ドストイエフスキイの作がインテレクチユアルだといふのは主として緻密な何處迄行つても止まないやうな解剖にある。尤も只分類したり綜合したりすると言ふ意味ではなく、本當に創造するのである。ドストイエフスキイは單なるインテレクチユアル・マンではない。もそつと眞實に物を見、物を摑まへて來る人である、智的ではあるが同時にクリエテイーヴである。オリヂナルである。

發行所　東京市本郷區元町二丁目二十五番地（振替東京二八九一四 電話下谷三二〇六）日月社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

■生田長江氏の新論文全集

最近の文藝及び思潮

四六版四百頁
布装美本箱入
金一圓税八錢

著者は權威ある文壇の高等批評家である。文壇の巨星森田草平、島崎藤村、夏目漱石、田山花袋、正宗白鳥の大物を俎に載せて手際よく庖丁目を入れて行く冴えは見上げたものである。著者の頭は鋭いがイラ〳〵せず論理的であるがパッションを失はない。加ふるに其筆にデリケートなウィットを滴らしてゐる。尚「不正直なる沈默」以下十數篇は著者の自己及文壇に對する見識の正直且つ大膽なる告白で前の人物評論と合せて最近の文藝及思潮の精髄を窺ふに足る。（世界新聞）

■森田草平氏傑作煤煙續編

縮刷 自叙傳

菊判四百餘頁
布装美本箱入
九十錢税八錢

粗き布のポットリとした装幀なり、此作は云ふまでもなく作者の興味ある生活をさながら打出せるものとして「煤煙」と共に有名なり、安倍能成、阿部次郎兩氏の評を附す。（萬朝）

同じ著者の「煤煙」と共に最も眞面目に一生懸命になつて書いた作で、世をして驚嘆せしめ作者の地位を固めたものである。今や「煤煙特製」と同形同體裁の縮刷となつて現はれた。更に愛讀者を増すことであらう。卷末に著者の友人の評が收めてある。（讀賣新聞）

■江部鴨村氏の新研究解説

タゴールの思想及宗教

四六版二百頁
美装優雅箱入
七十錢税八錢

タゴールの思想を消化し問題の要點を把握して自在に之を説明し去つてタゴールの内生命を紹介せんとしたる所は其の特色なり、タゴールを語るもの、中大體を領せんとするものに手頃の書として推薦す。（朝日新聞）

印度の哲人タゴールの思想と宗教との大體を何人にも解るやうに極めて平易明快に説てやがて來朝の噂ある哲人を迎へんとする我讀書界に資して及我等が思想生活を豊富ならしむる一冊たらしめた良書である。（國民新聞）

■高濱虚子氏作 長編 附録 子規書翰

子規居士と余

四六版三百頁
クロース美本
九十錢税八錢

子規と著者は同じく伊豫の土に生れ同じく俳名を一世に擧げ其交情師弟の如く兄弟の如く親友の如きものあり、著者故人を懐ふ事深く茲に此書あり更に故人の寄せたる書翰百數十通を添へて之に江湖に示せり。（時事）

或時代の生める特異の文學者之を圍繞せる一團の青年と其清き文藝憧憬の念、是等が率直に叙述されてゐる一篇の作品と見るべく子規氏の傳記とも云ふべく而して又一面明治文學史の一部とも稱し得べし。（報知新聞）

發行所 東京本郷元町二丁目二十五（振替東京二八九一四 電話下谷三二〇六）日月社

即位式御大典紀念 法學博士廣池千九郎先生謹著

伊勢神宮と我國體

大隈伯爵閣下補教

文學博士故井上頼圀先生序
文學博士井上哲次郎先生序

四六二倍版總洋布特製三百頁
定價二圓送料内地十二錢臺灣樺太三十錢朝鮮、清國四十錢

廣池博士宗教的信仰を獲得するや忽然我國體の淵源に闘して、大發見をなし先輩の贊同を得て舊著天覽「伊勢神宮」に神宮中心國體論を加へ改題發行するに至れり。

【神宮中心國體論】▲神宮を中心とせる國體論發生の沿革▲我建國の基礎的精神▲神宮皇居の分離▲天祖の御位置と歴代の御聖德▲我國體の淵源と我國運發展の方法

【伊勢神宮】▲伊勢神宮と我國體▲神宮創立の理由▲豐受大神宮創立の理由▲兩宮の御稱號御社格▲内外宮と支那の宗廟社稷▲兩宮神殿の御建築法▲神宮の御威德と敎育事業▲神宮の大祭典と皇室及び國民▲神宮の神聖▲歴代天皇の神宮御崇敬▲明治天皇の神宮御崇敬▲神宮と學校敎育並に軍隊敎育等

【伊勢神宮附說】▲神宮御創立に闘する古書の杄格に就ての考證、神宮古記錄の日本書紀古語拾遺等より確實なる理由▲皇大神宮の宮地の變遷▲神宮の沿革▲古代より維新前に至る神宮官衙の組織▲現時に於ける神宮諸官衙▲兩宮御祭典▲勅使及儀仗兵▲遷宮制度歴史▲大麻及暦▲行幸並皇族縉紳の參拜▲庶民の參拜並御蔭參り▲兩宮相殿の神▲別宮攝社末社等、其他數十項略 【附錄五章】【補說三十六章】 内容見本進呈

神社崇敬と宗敎

地方人に分つて居らぬやうであるから今回之に闘する極めて大體の事を示す事にしたのである尤も此企は各地の神職諸君からも度々要求せられたのが一つの動機と偶つたのである。ほんにこれは通俗的にて且概說に過ぎねど幾分なり神社崇敬の趣意が一般國民に正解せられて其實際上の効果を收め得るやうになる一つの手引ともならば洵に國家の幸であると考ふ。

菊半截總洋布製三百頁定價五十錢
送料六錢(宗敎叢書五篇分)

【緒言】 予は今日まで各地に於て始終神社の崇敬地方自治制青年修養等に闘して講演を爲したのであるが其中にて神社崇敬の事が一番

【目次】 ▲總論▲祖先崇拜と家族制度▲神社の歴史的性質▲國法上に於ける神社の性質▲神の實質と人心の訓錬▲神社崇敬に闘する國民の心得▲神社崇敬實行上の施設參考資料▲宗敎的神道の信仰▲神道敎會の必要▲普遍的宗敎と神社▲予の天理敎敎育部に於ける施設の一斑▲神官神職の神社奉仕法幷に其修養法▲町村長の神社崇敬の心得▲氏子の神社崇敬の心得 【附錄一】官國幣社一覽表【附錄二】神祇に闘する和歌

發行所 東京本郷元町二丁目 宗敎叢書文藝書發行 電話下谷三二〇六番 振替東京二八九一四 日月社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

現代百科文庫

一編に付十錢税二錢

五部以上は郵税不要

宗教叢書

新宗教の暗示

- 宗教の新意義（三編分） 谷本博士
- 神社崇敬と宗教（五編分） 廣池博士
- 宗教入門 江部鴨村
- 神道綱要 西川光次郎
- 救世軍 同
- カラマゾフ兄弟（六編含有） 森田草平
- シヤクンタラ姫 同
- 大聖釋尊 江部鴨村
- 高僧と母 同
- 續高僧と母 同
- 俳聖芭蕉 岡本默骨
- 道元と親鸞（四編分） 村上博士
- 天理教祖觀（五篇分） 奥谷文智
- 金光教觀 和泉乙三
- 親鸞と法然 村上專精
- 立正安國論略解 柴田一能
- 教徒として見たる天理教 廣池千九郎
- 耶蘇基督 前島潔
- カーライルの宗教 淺海學一
- 近代思想と宗教 柏原祐義
- 十六羅漢 山邊習學
- オーガスティン論 小宮豊隆

文藝思潮叢書

名流論作

- 父と娘（小說） 森田草平
- 無用語（評論） 安倍能成
- 銀座の夜（小說） 小宮豊隆
- 藝術家と藝人（評論） 生田長江
- 三十三の死（小說） 素木しづ
- 杏の落ちる音（小說） 高濱虛子
- 一から四まで（小說） 河東碧梧桐
- 文藝評論（評論） 小宮豊隆

梗概叢書

古今名著眞髓

- 神曲 ダンテ 森田草平
- ベル・アミー（發賣禁示） モーパッサン 徳田秋聲
- 懺悔錄 ルーソー 生田長江
- マダム・ボヴリー フローベール 相馬御風
- 死の勝利 ダヌンチヨ 水上齊
- 英雄崇拜論 カーライル 中村古峡
- ドリアングレー ワイルド 相馬泰三
- 女の一生 モーパッサン 廣津和郎
- 春の眼ざめ ウエデキント 生田長江
- 武器と人 ショウ 福永挽歌
- ポオラ（外一編） ヒネロ 加藤朝鳥
- ファウスト（三編分） ゲーテ 森田草平
- オルレアンの少女 シルレル 水上齊
- アルネ ビヨルンソン 相馬泰三
- 決鬪 クープリン 楠田東聲
- ベルグソンの哲學 牛田眞平

日月社

出版圖書目錄進呈
電話下谷三二〇六

十月中特價目錄進呈
振替東京二八九一四

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

拾月號

■體裁整頓■
内容益々充實

科學と文藝

價廿五錢
郵税貳錢

■自然科學者としてのゲエテ……小川政修

■自分の具体的問題……安倍能成

□ダ・ヰンチ（紹介）中山昌樹

□シングの生涯（紹介）喜多村進

□サツコとワシカ　井上芳子

□バンガロー（紹介）西村伊作

■丘の家（アーニン）……西川松子

■豫算表（小説）……沖野岩三郎

■モンマルトルの畫室……よさの ひろし

■Deep Lying……T. Okada

教會存立の
意義及價値に就て
■諸大家

挿繪

岸田劉生　安井曾太郎
西村伊作　ロセツテイ
レンブラント　宮城文子
レビン　又木享三
津田青楓　カミール
木村莊八　椿貞雄

■詩歌■

原阿佐緒
西村伊作
吉田浩助
霜田史光
前田春聲
高野孤龍

□ジプシーの色々　辻潤

□音聲と表情……小酒井學士

□結核の話……M・J學士

□生物と光……藤浪博士

■自己靈の叫び……野村隈畔

■畫家と金と……岸田劉生

■海外消息……

■九月の文壇……美川康

■宗教道德の第一要素（ギユイヨー）内藤濯

■種族の精神と個体の生活……加藤一夫

●本然と表現
▲加藤一夫著▼
▲洛陽堂發行▼
近刊●

東京市牛込區
西五軒町卅五
天弦堂
振替口座東京
貳九五五九番

昭和44年10月30日発行　【第7回配本】

青鞜第5巻　10月号

編著者　平塚らいてう
発行者　藤原正人
発行所　(株)明治文献
印刷　江明印刷
製本　(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 4,500円

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
P4
776
S45
V.5
no.9

University of Colorado at Boulder

[redacted]304 6746563

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

明治四十四年八月二十八日第三種郵便物認可 第五卷

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

第十一月號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

振替東京二八九一四番

四版
萬葉集選
窪田空穗著
中村不折裝
菊半截約三百頁 四十五錢稅四錢
絹表紙木版彩色 頗美本携帶至便

▲愈々日本民族代表的歌集の新選註完成したり▼

新版
續萬葉集選
窪田空穗著
中村不折裝
菊半截三百餘頁 五十五錢稅六錢
絹表紙木版彩色 頗美本携帶至便

▲氏は浩澣なる本集中より殊に自己に興味あり、集中の心核と思はるゝもの三百餘首を選みて簡單なる評釋を施し感想を附す。絹表紙菊半截の瀟洒なる裝幀。從來讀み方意義の難解なりし爲に惟り專門家の玩賞に止まり、偶解釋あるも精細に過ぎ乾枯に流れ頗る常人に遠き憾みありし本集は此書に依つて始めて一般人に愛誦さるゝを得べし。蓋し萬葉集の如き最も平民的色調に富める歌集は決して少數の學者歌人の所有にあらずしてまさに國民全體の所有と謂ふべき也(信濃每日)

▲歌に親しむ人々にとつては萬葉集の歌の眞情を流露した醇朴さと近代の詩にも讓らぬその人間味とは力強い誘惑力を持つてはゐるがさて二十卷四千の歌數とやゝ難解な煩はしさは一寸近く事を許されない斯ういふ不滿を持つてゐる人は本書について其の心核に觸るがいゝ(大阪每日)

▲著者は古典の新鑑賞者として當代に類なしその標準の極めて妥當にして藝術上の權威あることとこの小册をして千金の重みあらしむ(讀賣)

▲萬葉集の佳篇を拔き之を假名交りにわかり易く書下し著者の周密なる註解を附したもので萬葉集の一斑を覘はんとする者に好適な書である、空穗氏の批評は光つてゐるしかも一方に學究的な忠實さを失はぬ所最もよし(新潮)

▲短歌長歌に對して詳細な註を施したもので萬葉集研究者に取ッては缺くべからざる良書である(早稻田文學)

▲今前著の缺を補ふて此續編を成す、集中傑出せる作歌を拔き難解の句には一々解釋も加へまた歌全體の批評を附したれば初學者にもこよなき手引とならう。卷末「萬葉集の中心思想」てふ論文亦有益の文字(秀才文壇)

▲前著「萬葉集選」の便益と眞相とは、既に一部の認めたるところ、此新著亦著者の新しき評釋者としての天才を遺憾なく發揮したり、是には長歌をも採錄せり、附錄「萬葉集の中心思想」はよく情理を盡したり(讀賣)

東京市本郷元町日月社

青鞜

第五卷
第十號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

十一月號目次

兒童の世紀（飜譯）……一　山田わか
母の愛（飜譯）……三　らいてう
薄ずゝみいろ（小説）……一七　長谷川時雨
うづ（小説）……二九　荒木滋子
夜から朝へ（小説）……三九　濱野雪
初戀のなりゆき（小説）……五五　岡田八千代
病床相思吟（短歌）……六二　原阿佐緒

新妻として（短歌）……六四　遠藤琴子
秋思（短歌）……六六　三ヶ島葭子
青鞜詠草（短歌）……六八　諸氏
戀愛の自由と本能（論文）……七二　山田わか
十月短歌抄（短歌）……八〇　諸氏
折りにふれて（日記）……八二　岡田ゆき
智慧子夫人の死（感想）……八五　生田花世
戰禍（感想）……八八　齋賀琴
斷章（感想）……一〇四　野枝
編輯後に（消息）……一一四　係員

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

振替東京二八九一四番

早大教授 片上伸著 (新版)

無限の道

四六版三百頁布製
箱入著者自装美本
金九十錢郵税八錢

内容

運命の中より　ドンキホーテ　生命の培養　活力　無限の道　生きてゐる心持　未知の世界　信ずること　持たぬ寳　天壽　人間の本性　與へる人　二種の新理想家　人間の貴族　思想の力　生みの苦み　破壊と奉仕　何もしないでゐる時　信愛の力　God is the all-fair　純一の詩　ナイヒリスト

自序末節……あらゆる人々は自己を信愛しうる力、人間の本性を信愛しうる力を所有することが出來る。又いかなる人も此力を多少所有してゐない者はない。只人は此力を自ら蔽ひ虐げてゐる。或は自ら所有してゐないと思つてゐる。幸福の泉は實に吾々自らの內にある。生きるといふことは此泉の湧くに任せることである。此泉の水脈の限なきに隨て、湧き立ち溢れゆくことである。私の生命も漸く この限なき道に流れゆかうとするのを感ずる。

▲著者が最近二年間に書いた評論感想を集めたもの、何れも文壇の問題となりたる長編を始め、感想録等何れもよむべきものである。近時論壇の最も注目すべき好著として文藝愛好家の是非一讀すべきものと斷言する(早稲田文學)

▲我等はこの自任ある著者に一片の敬意と信頼の念とを起さゞるを得ない。新文藝新思潮に對する好研究として江湖に推薦したい(ホトトギス)

▲著者の評論の權威に就ては定評がある、眞の生活に憧るゝものは誰れでも讀むべし(東京日々)

▲曾て生の要求と文學の一書に於て、人生と藝術とに對する思索の敬虔誠實なるを示せる著者は、本書に於て一層其歩みを明確に示せる觀あり「生命の培養」「人間の本性」の如き大問題に對する解釋より「南の窓にて」の題下に收められたる斷片的思索に至る迄必ず明瞭なる考察を加へたる所、著者の思想家としての信念を窺ふに足る、廣く一般に勸むるに躊躇せず(萬朝報)

東京市本郷元町日月社

兒童の世紀

山田わか

――エレン、ケイ著――

第一章

兒童の兩親を撰擇する權利（三）

故に社會のかやうな狀態及び人生の眞價値に付いての個人の見解を變更すれば、二十歲乃至三十歲の男女は簡短なる條件のもとに、自身の家庭をつくり、幸福を得る事が出來る。そしてこれは新しい人類を造る最も必要な源であり、又家庭を見る事祭壇の如く、愛の生活を重ずる事、神に奉仕する如き、古代人の感情の復活である。かくの如き狀態になつて始めて社會の最大禍患なる賣婦禁制の實行も期望し得るのである。そして我々は充分なる權利を持つて子孫の完全なる發達に豫先條件である自制を、青年に要求する事が出來るのである。

今日の狀態に於ては結婚をして居ない、本當に不道德な母達があると同時に、又一方では貞淑な、自分の子供の父に對して純潔なる愛を捧げて居る、けれども種々な事情のためは公式結婚の手續きを履んで居ない母達もある。そして、たとへ、結婚法が簡單になつて

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

も、猶其の簡單な結婚法による事なく、母になる婦人は絶えぬであらう。

ブジエルンソンは性的道德の演說に於て『母態は望むが、結婚は不贊成だと云ふ婦人があるならば、それは差し支へない。子供に對し、母たるの義務を全うしさへすれば結婚を無視して母たるの權利は充分ある』と主張した。

一度、獨逸に有名な事件があつた。それは單なる娘ではなく、充分成熟した婦人であつたのだが、彼女は結婚して間もなく、双方の氣質、及び地位は双方の不幸になる事を發見したのであつた。それ故彼女は忽ち離婚した。そして後に彼女は私生兒を生み、公然と獻身的に敎育した。彼女は彼女自身の職業から、及び母たるの喜びから享有し得る平和と共に、又、娘として彼女自身の親に孝養を盡す事が出來た。けれども、もし彼女が結婚生活を選んだならば、子も親も彼女自身も此の平和と幸福は得られなかつたかも知れない。これは人間生活のさま〴〵な樣式の一例であるが、確かにこれは種々雜多な事情のもとにある人類を、一ツの定まつた型にはめやうとしたり、萬人に對して同じやうな義務の範圍を强いたりする、社會の要求の馬鹿氣て居る事の證據である。

兒童の權利に對する義務の範圍はます〳〵擴がつて行く。此の範圍の境界線は、未來に於ては、現今とは全く異つて引かれるであらう。則ち不調和の結婚に於て子を生んではな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

らないと云ふ事が兒童の最上の權利と見られるであらう。故に何よりも先に、先づ結婚は自由でなくてはならない。これは双方合意の上で自由に離婚出來ると云ふ事である。併し結婚するに當つて、或は離婚するに當つても、兒童に對する義務は双方とも負擔しなければならない。かやうな法律上の規定は或る場合には不用であるかも知れない。が又或る場合には最も要用なものであらう。とにかく、此等の規定は、如何なる場合にも兒童に對する義務の發達の障碍にはならない。これに反して今日の强制結婚法は、男に與へられた守護權に關してと同じやうに離婚に關しても、男女共同生活の高尙な發達に障碍物となつて居る。

烈しい力で結婚が成立しても、それが直ぐに兒童養育に適當な家庭とはならない。兒童を保護するに適當な家庭は、誠實な心を持つて結婚する事によつて、殊に兒童に對する深き責任を感ずる事によつて、得らるゝのである。此の責任を感ずることは、結婚生活に不滿を抱いて居る兩親をして、平和なあきらめ、又は高き人格を、保たしむる。彼等は彼等の間に愛はなくとも、兒童の養育に彼等二人の手が必要と感ずる時に、彼等は共同生活を續ける事が出來る。けれども此の解決は眞の結婚生活が續くのではない。唯、親としての職分が殘つて居るだけである。であるから離婚してはならぬと云ふ事は、唯其れが旣でに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

生を與へた子に對し不利益となる場合のみである。心の全く離れた夫婦は決して新しい生命を造り出してはならぬ。

輕卒な結婚は數多いが、輕卒な離婚は少くとも、子供のある處には少ない。此處に制裁力として働いて居るものは、今日に於てゝすら法律の命令ではなく、血の命令である。離婚すべきか、すべからざるかに付いての最後の判決は社會が發言するのでなく、子供が發言するのである。此の子供の利害と云ふ動機は公式の手續きを經た夫婦の間にも亦自由結合の間にも同じやうに確かなものである。もし父或ひは母が子供のために强制的な同棲を續けても、其れは子供のために多大な不利益とはならない。

大部分は、法律によつては定める事の出來ない不文の義務のために要用な事は、父及び母の良心の覺醒を促し、高き道德を創造する事である。恐らくは、これに對して新しい法律が現今に於ては必要である。古びた法律上の概念は取り去らねばならぬ。其れは過去の道德を設立するためには必要であつた。けれども今日猶高き道德を要求する時に當つて其れは邪魔物である。誘惑を事とし、青年子女を墮落に導き、或は他の結婚生活の平和を亂すやうな、かやうな人物は最も憎むべき、最も賤しむべき者として、取り扱はれなければならぬ。相手を征服しやうとする男或ひは女の無情な遊戲的欲望、則ち、全く肉慾的、利

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

己的な要求と、高尚な精神的愛の要求との區別を人が知るやうになれば、其れだけ、道德の概念は、子孫に對する責任の感情と同等なものになる。

本能の刺戟を滿足さす事は、これは自然の本當の深き意志には反して居つて、個人並びに國民を破滅に導くものである。けれども前にも云つた如く、此の本能の刺戟、則ち自然の意志の蹂躙を抑制する事は禁慾主義では出來ない。

責任を離れた、禁慾主義を詩人が攻撃するのは良好な徵候である。けれどもトルストイの如く、肉慾則ち戀愛だなぞと云ふ時には其れは有害である。愛を單なる肉慾に貶下してはならぬ。が同時に、人類を下等な肉慾の抑制から救はうとするならば、愛を唯精神的なものとして靈化してしまつてもならない。であるから此の書の始めに於て、又他の著書に於ても述べた如く、肉慾を眞の愛に迄、美化しなければならぬのである。則ち、肉體美の引力が戀愛に必要な要素である如くに精神的結合、柔和、同情、共同勞働及び友愛が、愛の高尚な情緒及び愛のチャームをつくるに必要な要素である。相互に信賴すると云ふ、豊富な要素が內的に外的に愛の貞節となるのである。

魂の奥の此の靜かな流れは、肉體の美を更にあざやかにする。けれども、公式の手續きを經た結婚であれ、又は自由結合であれ、もし其れが單なる肉慾の引力であり、そして相

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

互に信頼する感情がなかつたならば、其の夫婦は忽ち幸福の泉を涸らし、倦怠をのみ後に殘すやうになる。此の相互を信頼すると云ふ事は靈肉の合致であり、又心靈と同情の結合である。

子供の蒙むる、あらゆる不當な苦痛を除去するのが社會の義務の重なるものであると社會が氣付いた時には、兩親の子供に對する責任及び義務は一層嚴重なものになるであらう。未來の道德は、家庭の神聖を保つと云ふ名のもとに、所謂私生兒を犧牲に供してはならない。其の子供は生來、健康と立派な才能とを具へて居るかも知れない。けれども其の子供は現行法のもとには、不正兒として取扱はれ、其の結果彼は本當の不正兒になつてしまう。そして彼を不正と定めた邪惡な法律に對し復讐の念を燃やすやうになる。子殺し、毒殺、餓死、凡て此等は、此の邪曲な法律上の概念と關係して居る。けれども、あらゆる此等の結果よりも猶一層有害な事は、社會が其れ等の生理的ではなく、心理的に墮落した所謂不正兒から受ける打擊である。彼等は善良な力を失つて居る計りでなく社會的に破壞的な力を發達させて居る。かのエリザベス女皇暗殺事件が全歐洲を震駭せしめた時に、最も私を戰慄せしめたものは、其の兇行者が『私は私の親に付いては何にも知らぬ』と云ふた事である。

たとへ、汚れた感情をもつて人生の神秘に近かづいた男女の間に生れた子ですらも、子供は神聖なものとして見做されるやうな時代が、いつかは來るであらう。其の時には、純なる愛、及び誠實な義務の觀念をもつて子供をもうけた母は矢張り神聖なものとして尊敬されるであらう。

其の時には健康な、相愛する男女から生れ、そして智と愛を加へて育てられた子供は、たとへその兩親が全き自由結合であつたとしても、正兒と呼ばれるであらう。其の時には愛なき結婚の間に生れ、そして心身の惡質を兩親から遺傳して居るやうな子供は、たとへ其の兩親がセント・ピーター會堂に於て、羅馬法皇立會の上盛大なる結婚式を擧げてあるにしても、それは不正兒と見做されるであらう。であるから、たとへ結婚はなくとも輝くやうな健康な子供の優しい母の上には輕侮の影は投げられぬであらう。けれども其の輕侮の影は、祖先の非行の結果、廢頽させられた子(正當であれ、不正當であれ)を持つた母の上にはあびせられるであらう。

有名な『獅子の兒』と云ふ劇のうちに次の對話が老人と青年との間にとりかはされて居る。

老人『此の世紀が婦人の世紀であつたやうに次の世紀は兒童の世紀であるであらう。そ

して兒童が彼等の權利を得た時に道德は完全になるであらう。其の時に各人は、自分等の生む子供に對して、社會及び法律が彼等に課しつける義務よりも、外の義務のある事を知るであらう。子を持つた男は世界の何處の果てへ行つても彼の父たるの義務から逃れる事は出來ない。王國は與へられる事も亦取り上げられる事もあるであらう。けれども彼の父たる事は永久に彼を離れぬものである事を理解せよ』

青年『承知して居ります』

老人『けれども彼が生んだ子の生命を注意深く保育すると云ふ事だけでは、彼が正義を盡したとは云はれない。どんな人も、もう一つの問題に付いては、どんなに早くから考へても早過ぎはしない。其の問題とは、彼に子を持つ權利があるかどうか、又何時其の權利があるか、に付いてゞある』

此の對話が私に此の著作の書名を與へたのである。そして兒童の第一に享有すべき權利は其の兩親を撰擇するにありと云ふ此の私の斷定が此の著作の出發點である。

自然科學(心理學も含めて)を法學及び敎育學の基礎とすべしと云ふダーウイン派の主張を、我々は第一に此處に考究しなければならぬ。人は自然陶汰の法則を會得し、其の法則の精神に從つて行動をとらねばならぬ。人は社會の制裁を人數發達の助けとなり、自然陶

汰の補則となすやうに配置しなければならぬ。そして第一に犯罪の素質の繼續を遮らなければならぬ。犯罪者の特質は專門家によつてのみ鑑定さるべきものだが、併し其の特質が次の時代へ遺傳されぬやうに防止するのは社會の仕事である。さすれば人類は漸々と、かの祖先の惡質が忽然と現れる間歇遺傳の害から救はれるやうになるであらう。これは人類が猿や虎のやうな人間を彼等の中から消滅せしむる進化の第一條件である。然して後始めて、生理上及び心理上、疾病を遺傳されて居るものは、其れを又子孫に傳へてはならぬと云ふ要求が有力なものになるのである。

併し此の遺傳病に關しての諸家の意見は未だ區々である。たとへば結核病に付いて、或る大家は、其れは遺傳病であると主張し、又或る大家は、それは單に傳染するのだと宣言して居る。

故に後者の説に從へば結核病の母が子を生んだ場合に、其の子供を生れるとすぐに其の母から離してしまへば、其の子は安全であると云ふのである。癌腫に附いても結核病と同樣意見は一致して居ない。併しながら癲癇の如き場合に於ては説は確定して居て、既に一定の取締りがもうけられてある。けれどもこれは常に實行されては居ない。瘡毒、あるこーる中毒、及び數多の神經病は確に子孫に遺傳するにも拘らず、未だこれに對する取締り

規則は出來て居らぬ。

生命を授けられたと云ふので兩親に對し、生みの恩と云ふ古い言葉がある。私は私自身の經驗から、私の兩親は强壯な精神と肉體を祖父母からうけついで居た事を知る。が其れは母方の祖先と父方の祖先とが早い正しい幸福な結婚を得て居た事に歸するのである。けれども一般には、兩親は子供を生んだ罪を其の子に詫びねばならぬ場合が隨分少なくはないであらう。

生活難の結果、或は犯罪の結果、沈淪して居る人でも、又は精神病及び其の他の疾病に惱んで居る人でも、或は又精神上の不具者でも其の原因を探つて見れば其れは彼等の出生の當時か又は幼年時代に何にかわけがあつたに相違ない事を我々は信じる。たとへば彼等の兩親があまり若年であつたか、或は老衰して居たか、或は又父か母が病體であつたか、飮酒家であつたか、又は母が烈しい勞働から、或は子供が多すぎる事から過勞して居たか或は愛なき結婚であつたか、それとも亦愛の冷却した後であつたか、とにかく、こう云ふ事情のもとに生み落されたのが彼等の不幸の原因である。則ち彼等は生れる時歡迎されなかつたのである。或は彼等は反抗の感情のもとに、彼等の血の中に人生の不調和と嫌惡とを含んで、生れて來たのである。婦人の嫌人病其の他多くの病的傾向は皆此の原因に歸せ

られるのである。或は又惡い手本の多い家庭、衝突の絶えない家庭で其の影響を受けて育てられた事も其の原因である。

遺傳の此の意味に關する知識は近年大に進歩して、兩親又は祖先より負された惡質を持つ青年は、其の不幸な惡質を子孫に傳へるよりも、むしろ結婚を愼むのが彼等の義務である事を悟り始めた。

私は一人の婦人を知つて居たが、彼女の系統は父方も母方も精神病を遺傳して居たゝめ彼女は、彼女自身は健康であるにも拘らず、愛する男との結婚を抗んだ。もう一人の私の知つて居る婦人は、婚約した男が飲酒家である事を發見したゝめ、彼女も亦其の約束を取り消してしまつた。何となれば彼女は自分の子にかやうな父を持たせたくなかつたのである。婦人が無智の結婚をする結果、世の中に罪を殘すのは殊に此の點に於てゞある。彼等は子供が飲酒家を父にもつたゝめに、癲癇及び其の他の病氣殊にあるこーる中毒症を遺傳する事を知らないのである。若い婦人は、配偶者の特質が自分の子供に遺傳されたのを見る時に其れが大なる喜びであるか、或は非常な苦惱であるかを考へるよりも、むしろ其の配偶者に對して、情が先きだち易いものである。

（未完）

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

母の愛

らいてう

——ツオードより——

私が今論じやうとしてゐるのは親の愛ではなく、寧ろその屬性の一つで、兩性間のかの肉愛の如く、普通——之れは正しくはないが——「本能」と言はれてゐる母の愛に就いてである。本能といふ言葉をここで何故使ふかといへば、それはこの言葉が肉體と切り放すことの出來ない有機的なそして遺傳的な或ものを意味するからで、この意味に限れば、あながちこの見方も間違つてゐるといふ譯ではない。母の情（マターナルエモーシヨン）と區別した場合の母の愛（マターナルラブ）は、全然父の愛とも親の愛とも異つてゐる。併し一般の人々はいつもこの二つを混同してゐる、否、哲學者でさへ、男性中心說を信ずるものは矢張りさうである。スペンサーは次のやうなことを言つた。

「…………たとへ親の本能は、その根本的性質に於て、助けなき狀態に對する憐憫の情だとしても、男女にとつて共通なものだが、同一なものでないのは明かである。幼兒の助けなき狀態を感ずる親の本能の特殊な形は、男子に於けるよりも女子に於て一層有勢

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なのは論ずるまでもない。男子に於けるこの本能は必ずしも常に助けなきものによつて高められるのではなく、寧ろ彼に依り頼む弱者の總べてに及ぶ、もつと一般的な關係を有つてゐる。」

思ふにこれは全く二つの言葉、否三つの言葉――母の愛と親(同族)の愛と同情――の混同である。

母の愛は同情の上に立つものではない、またもし同情がこの中に混じたとしても、それは全く別な、後に附け加へられた要素であつて、その始めに於ては無關係なものである。同情は人間の德性の基礎であり、また他人の苦痛状態を自身の上に再現しうるのみならずなほまた他人の苦痛を實際自身に於ても一つの苦痛として經驗しうる高尚なる理性の生產物の一つである。母の愛はもと適者生存の法則と、種族の存續及び保護を條件とする利益の法則とを通じて婦人の心に植ゑ付けられた一つの能力であつて、決して助けなき状態に對する憐憫の情を含むものではない。この憐みの情は理性あるものによつてのみ經驗される。然るに母の愛は動物に於ても見ることが出來る。

といつて、これは何も人間の屬性なる母の愛の美と純と價値とを傷けることにはならない。實に母の愛は人類の屬する一大動物階級なる哺乳類の特徴の一つで、これはまたこの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

階級を他の總ての階級から區別する主たる作用即ち哺乳といふことゝ直接の關係を有つてゐる。哺乳類の全體系は性的體系の一部であつて、母の愛はもと一つの性的屬性なのである。

乳線の中には性的感情の神經が備へられてゐる、從つて子供が乳を飲めば、その神經は興奮して母は強き性的快感を經驗する。これが、動物が子供に乳を與へる價値ある動機でなければならぬ。斯くして子供の生命は保護されるのである。母の愛はかくも性的感情と深き關係を有し、且つそこから發生したものだから、この感情は哺乳類に限られてゐるのみならず、總ての哺乳類に共通である。

母の愛の科學的意義と詩的美とはヘッケルによつて次のやうに言はれてゐる――

「ひとり哺乳類に於てのみ、母の乳をもつて新に生れた子供を養ふことによつて、子供を世話するといふ注意すべきことが一般に見られる。またこゝに種々なる哺乳類の家族生活並に人類の高き精神生活の上に重大な影響を與へたところの母の愛の最高形式の生理的原因も存する。詩人チャミッソーはそれについてかう歌つてゐる――

自から養へる子供を愛する母のみ、
その母のみひとり知る、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

愛するといふことと、幸福といふことの何たるかを。

若しマドンナが母たるものの子に對する愛の最高至純な典型だとすれば、私共は他方に於て猿の愛の中に、即ち母猿の子に對する烈しい愛情の中にマドンナのそれに匹敵する同じ母の愛を見る。」

母の愛は根本的に保守的原則である、併しかゝる原則も亦活動的、建設的原則のごとく社會にとつて有用なものである。今日まで母の愛は主として種族を保護し、保存する生物學上のものであつて、これを社會力として見れば僅に、消極的な方法に於て働いてゐたに過ぎない。併しそれは時として非常な力を現した。しかも人間のパッションとしての母の愛は多くの悲劇の問題となつてゐる。この力をユーゴーほど正確にしかも力強く描いたものは他にあるまい。彼はその著 Quatre-vingt Treize に於て、次のやうに言つてゐる――

「母たることは何の問題にもならぬ。人はそれを論ずることが出來ない。母をして崇高ならしめるところのものは彼女が獸の一種だといふことである。母の本能は神の如き動物である。母は最早その時一個の婦人ではない、彼女は單に女性である。」

これはいかにも眞理である。このパッションが最高點に達する場合は、女性が、自分自

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

身の最高な保護者であつた動物時代、即ち純然たる女性政治の時代と最もよく一致する場合である。女性は種族であつたばかりでなく、種族によつてなされる仕事の總てをなし、なほその外に男性を選擇した。ひとり母の愛のみならず、母の勇氣、母の能力といふやうなものまでも發達したのは全くこの長い間の訓練の結果であつた。しかも婦人はその後久しく逆境にあつたにも拘はらず、なほ最大な危險に遭遇して、その子供をためらふことなく救ひ出す力を有つてゐる。この母の行爲は屢々奇蹟の如く見える。

思ふにこの母の愛の力も兩性の完全な平等時代の到來と共に、過去または最も進歩せる今日の社會に於けるよりも、更に一層重要な役を演ずべき運命を有つてゐる。そしてもし婦人が藝術に於て、男子と全く平等になつたなら、未來の文學に於て、母の愛はもつとよく描かれ、もつと豐富にされねばならぬといふことを私共は婦人その人に向つて求めねばならぬ。

（大正四、一〇、二〇）

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

薄ずみいろ（二回）

奈々子

通り雲がすると日がかげつて、またぱつと秋の日がさす逆上（のぼせ）る日でした。紫の色がいかにもよく美しく見える日で、高いところを揃つて飛んでゆく赤とんぼをわたしは眺めてゐました。一つ二つ群にはなれたのが、水鉢の水を呑みにきたりして髭に結んだ水玉を頭をふるつておとしながら、ついと飛ぶと、揃つてきた仲間の見當を見失つて、藏の黒壁へぶつかつたり、張板へ戸惑ひをしたり狼狽（あわて）るのもありました。わたしは心持ち張ものの薄のりが、手にこわばつて發つてゐるのを洗はうとすると、つくばゐの水の上を一寸ばかり、飛びもせず動いてもゐないように、羽根のすきだけ細かく風をきつてゐる一羽がありました。ふと子供らしい惡戯心がおこつて、指のさきで輪をこしらへて、水をはじきかけてやると、うすものゝ袖に露のこまかい雫をのせながら、日影を背負て逃げてゆくのが、あんまり美麗なので見ほれてゐますと、お君ちやんが黒ぬりのお盆へまつかな枝柿をのせて、小刀までつけてもつてきてくれました。するとその後から、も一人の妹が何か袖にかくすように抱いて急いできました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「あら私のまで張つて下さつたの、隨分のぼせたでせう。」と云ひながら、お君ちやんはよく熟したのを一つ剝いてくれました。

　わたしが柿をうけとらうとすると、次の妹は、

「おしゆんちやん、もつと好いものよ、もつと好いものよ。」と椽側の板を足踏みして、お君ちやんには見せたくないやように、袖の中の品に氣がつけといふような樣子をしました。

「お君ちやんてしやうがない、おしゆんちやんがどつちがほしいかきめてしまつてから、見せようと思つてゐたのに。」

　二人が二人とも柿の方へばかり氣をとられてゐるので、仕方がなさうに袖のなかからだしたのは、緋鹿子のやかま絞りと、紫の麻の葉絞りの、兩方とも二尺からある巾のままのでした。

「大丸からおしゆんちやんの帶と一所に絞れてきたのですつて。紫の方を半ゑりにしますか、緋い方を根掛けにほしいと思ひますかつて。それとも半分づゝお君ちやんと分けますかつて。私は帶上げにもう買つて頂いてしまつたの。」

　お君ちやんは緋鹿の子の方を手にとりました。わたしは紫絞りの方をとりました。二人とも同じように襟へあてゝお互に眺めあいました。袷の黒繻子の襟にどちらもよく似合ふ

ので兩方半分づゝにわけて、じゆばんの襟にすることに極めました。わたしは十九になつても年弱なので、緋鹿の子の襟をかけても誰も派手だとは云ひませんでした。自分でも赤い襟をかける妹達と、ちつとも違つた心持ちではなかつてのでした。

それからすこしたつと、私とお君ちやんは現金に、長じゆばんを出してきて、半襟をかけてゐました。どつちからさきへかけようかと迷つたあとで、もしお正月に結綿に結ふかもしれないから、緋鹿の子の方はとつておかうといふことに一致しました。緋ぢりめんの襟裏をつけてくけてゐる時には、霜月の芝居と、お稽古などとの納浚ひや納會のことはかりを思つてをりました。わたしの其時の心持ちは赤蜻蛉の群の一つのようで、妹達と一所にゐて、同じに、一つに集つた樂しみでした。自分だけが仲間はづれになつたら、屹度戸惑ひをして狼狽たに違ひありません。

「今日のような日に、栗を拾ひに田舍へ連れてつてもらひたいわね。」

そんなことを云つてゐるときに、お母さんがわたしにだけ用があるとよばれました。

わたしは虫が知らせたのか、其時にお母さんのお供で他所へ出掛けるのを氣が進みませんでした。折角妹達とおんなじことをして、おんなじような氣持になつてゐるのに、わたし一人だけ他所へ連れてゆかうといふのを嬉しくなく思ひました。それにもう午後で、こ

のごろは直に日がおちるのに、何で今頃から盆石の會なんぞへ出掛けるのかと、出不しようなお母さんの日常を知てゐるだけに不思議にも思ひました。小さい末兒までおいて、わたしとお母さんとだけが夕方にかけて出かけるといふのが、何とも云へぬほどお君ちやんたちへも氣の毒でなりませんでした。百方逃れようとしたのですけれど、

「是非私に見てくれと藤井さんの奧さまに賴まれてゐたのだし、井口まで迎ひにおよこしだから行かないわけにもならないし。私にはてんから趣味がないのだから、どうか一所にいつておくれ。」

強てかう云はれると、今までの敎育が嫌と我をはらせないのが習慣になつてゐるので、わたしは意久地なくお母さんの云ふなり次第になつて、納戸色がかつた紫がすりのお召の袷に、黑地でも華やかな大和錦の帶をしめて、前の車にはお母さん、後のには井口が乘つて、私は二人にはさまれて出かけました。

それは盆石の會には違ひありませんでした。が、わたしを連れて出たお母さんの目的は外にあつたのでした。井口といふ出入りの道具屋も迎ひに來たのには違ひありませんが、藤井さんの奧さんから賴まれて來たのでないことが、愚鈍なわたしには察しられました。お母さんと井口とは時間まで極めてあつて、歸りにわたしを知らない人の家に連れてゆき

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ました。

わたしは何といふ正直ものでしたらう。十九といふ年を喰つてゐながら、女は他家へやられるもの、それには見逢ひといふことがあるものぐらゐなことは、知つてゐながら、ちつともお母さんを疑らうとはしませんでした。あんまり御不沙汰をしたし、すぐ御近所だから、門口からよつてゆくといふ家の名は、私のちつとも知らない姓名でした。けれど井口もそれがよろしうござりませう、さぞお悦びでせうと云つてゐるので、何の氣もつかずにゐました。門口からといふのを引上げられて座敷へ通ると、暫くたつてから、其家の主婦とは違つた婦人が出てきて、

「丁度よいところでお目にかゝりました。私もあの會を見物に參りました歸りで、ちよいと寄りましたら」といふような挨拶をお母さんと取りかはしてゐました。

其女はわたしも顔は知つた女でした。わたしの家のちき近所の角店の、何の商業なのですか問屋らしい店附きの家で、古い家柄ばかりそろつてゐる町内では新しい住人なのと、派手な、請負師じみた家なのとで、よく家庭の亂脈なことやなにかが他人の口の端にのぼる家の御内儀でした。

主婦の老女の儀式ばつた物云ひや、お辭義とお世辭づくめの井口の追縦(ついしょう)とに、わたしは

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一刻もはやく歸りたいと思つてゐました。家へ歸つて御飯をお君ちやんや、おつちやんと一所にたべて、先刻の鹿の子の殘り裂れを、紫と緋とはぎあはせにして、三人の銀貨入れをこしらへようと約束したことを、みんなも待つてゐるだらうと考へてゐました。せまい庭の、板塀の方へ幾段にも棚を釣つて、鉢植物を澤山にしたてゝあるのを厭々しながら眺めてゐたりしました。來逢はしたといふ御内儀とお母さんの咄はいつまでたつても果しがなくつて何か耳のはたで云ふと、お母さんが、

「左樣でございますとも、左樣でございますとも」と頷いて、調子ばかりあはせてゐるのに、わたしは私自身の心淋しいより、家に殘つてゐるものの、待遠しがつてゐるのが目についてきて、小さい兒が「母さん」といふのに、お君ちやんがなだめてやつてゐる、夕暮の、まだ燈火のつかない、たど／＼しい室のさまや、早く歸つてきてくれれば好いなあと思つてゐる、皆の氣持ちがひしひしと、黃昏の色とともにわたしの胸にせまつてきて堪られないので、

「お母さん御用があるのなら、私だけ先へ歸つても好いでせう」と云ひますと、

「まあお待ち、私もすぐお暇するから」と云つて、好いからお歸りとはいつてくれませんでした。

其うちに御内儀によく似た、背のひくい、大變横ぶとりのした、赤ら顔で白髪の多い、そのくせまだ若いらしい男が出てきて、お母さんに四角ばつて挨拶をしてゐました。「おしゆんちやん」と、改まつてお母さんが呼んだようでしたけれど、私は歸りたいが一心だつたので、椽側の方からちよいと向直つてお辭儀をしただけで、新來のお客に對しては注意もしなければ好意も惡意も持つてはゐませんでした。時々其男が、妙にいがらつぽいような咳ばらひをするので、私のぼんやりと考へてゐる魂が、威嚇されたようにびつくりして其方を見ると、咳拂ひをしながら其男は自分の正面にあたつてゐる天井の隅の方を眺めてゐました。何か不思議なものでもあるのかと其方を見ても、天井には變つた節穴もなければ壁に大きな蜘も見えませんでした。

いつの間にかお膳が出ました。すると其男は無言つてお辭儀をして下つてゆきました。あの人は歸るのかしら、あの人を殘しておいて、私を歸してくれれば好いにと思つてゐると、また其男が出てきました。こん度は紋附きの羽織をよして、縞の糸織のつッぱつたのを着てきて、また濟ましてお膳の前に座りました。

をかしな男だと思つてゐますと、主婦が私の前へきて、不思議な御緣だとか何だとか妙なことを云ふので、わたしは何といつてよいのか困つてゐると、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「折角ですから、ほかのものは頂かないでも好いから、嫌ひだといはずに、今夜だけはお蕎麥へ、お箸をつけるまねだけもなさいよ」と小さな聲で云つて、「幾久しく」とか、「何分不束ものですが」とか、そんな言葉を二人の老女たちと、お母さんは取代はしてゐました。わたしは「おや」と思ひました。「さあ大變だ」とも思ひました。わたしは山東京山や、戀川春町のくさ草紙から教へてもらつた智識で、花屋敷の茶店に腰かけてゐる男の前を、娘をつれた連中が通りかゝると、伴のものの同志とか、こちらの連れと先方の父親が知己だとか何とか都合よくこしらへてあつて、兩方が落會ふように仕組んであるのを思ひだしました。それでは、今日は何もかもお母さんは知つてゐて、そしてあんな白々しい挨拶をして見たり、何氣ないふうをして私を連れてきたりしたのかと、氣がつくと親子のくせに妙なことをしたものだとへだてられたような嫌な心持ちがしました。それにしても、何にも知らなかつたのは私一人か、それとも妙な咳拂ひばかりしてゐるあの男も知らないのか、知らないのなら御同樣に、傀儡子につかはれてゐる人形のように氣の毒でもあるし、知つてゐるとすれば、私一人がまるで下見でもされるようなもの、知つてゐたなら今迄かうやつて凝としてゐた時間が、耻かしくつて、どんなにか長い切ない時間であつたかもしれない、けれど知つてゐてならば、まるで品物のように、眺められたり心の中で品評された

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りするのを、ぼんやりと的になつてゐはしなかつたらうにと、だまされたといふような腹立しさがこみあげてきて、私の胸はお茶一口入れることも出來ないように、切なさが一ばいになつて涙までがこみあげてくるので、もう一時も座にいられなくなつて、

「さ歸りませう、歸りませう」と急立てました。

それを氣がついた耻かしさから、座にゐたたまらなくなつたのとでも思つたのでせう。主婦が、

「お若いからねえ」と云ふようなことをいふと、お母さんまでがをかしくもないのに聲を合せて笑ひました。

外へ出ると、もう暗くなつてゐたのでわたしは車の上で、拭いても拭ききれないほどにぼろぼろ涙をこばしてゐました。それでもお母さんの仕方をなるたけ好い方にとつて、私にしらせておいてくれなかつたのは、先方が嫌だといつたときに私にきかせるのが可哀さうだとでも思つたのか、私が不承知なときに斷りよいようにと、さう取りはからつたのかも知れない。泣くことはありはしない。家へ歸つたらすぐに、もうお嫁にやられるのならわたしは嫌ですといつてしまはう、直でないといけないと氣をとり直しながらも、お母さんの心持ちが知れかねて心を痛めてゐました。

わたしは聖人ぶるのでも、天乙女のように清淨がるのでも、小町のように思ひあがつてゐるのでもありませんが、老人達が生てゐる時分、その人達の秘藏つ子であつたわたしは、婿をとらせるのだとか、別家をさせるのだとか口癖のように云つてゐました。弟もありますし老人のいつてゐたことを其通りになるのだとは思つてもゐませんでしたが、それでも此家へなりは嫁くかとか、嫌なら嫌といつたがよいといふこと位は聞いてもらへて、嫁られるものと思つてゐました。今夜は屹度兩親の前で返事をしなくつてはなるまい、そのときに何時ものように胸がせまつて、涙がさきへ出てしまうと、つい曖昧な返事になつてしまう、それを思ひちがへなさると取返しがつかなくなる、强かりしなくつてはいけない、强かりしてゐなくつてはいけないと、滅入りこみたがる氣をひきたてて、私はばちんの金具をはがしかけたのをやめて、大祖母さんに守つてゐてもらはうと、お燈明を掻立てて、お佛壇の中へ顔を突きこむようにしておがみました。

歸るとすぐにお母さんはお父さんと秘々おはなしをなさつて、それから私のそばへお出で、わたしが御佛壇から顔を出すまで無言つて待つてゐてから、

「お前も十九だから、おほかた今日の様子はおわかりだつたらう。お父さんも大變氣がむいてお出だし先刻もあの場で先方のお母さんが、せひにとお云ひだから、今もお父さんと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

相談をして、私達はやることにきめましたよ。お前にしても身のきまることだから嫁とはお云ひなさるまい、兩親が望んでゐるとほりに取極めてもよからうね。」

と、きつぱり、それこそきつぱりと壓かぶせるように言渡されてしまひました。十九年の間、強いお母さんだと思つたこともありました。ある時はわたしだけ繼つ子なのかしらと、よくないことを思つたこともありましたが、嚴敷つても何處かやさしみのある懷しいのが、母親だと思つてゐましたのに、取りつく島もない、あんまりはつきりした口上なので、わたしは今迄に覺えのない峻嚴といふ味をお母さんに見出しました。

もうすこしほかに云ひようがあつたら、わたしはお母さんの膝に縋りついて、この次にはどんなとこころへでも嫁きますから、どうか今日の見逢ひの人だけへは許しておいて下さい、私は自分が怖いように自分の直覺を信じてゐますから、とても今日の人と見逢ひをしたとは思つてをりません、わたしとあの人とは、どうしても他人ですと、我儘かも知れませんか、どうしても打消けることのできない、私といふものをわたしは知つてゐますから、さういつてお母さんに謝たに違ひありませんが、さうはさせてもくださらないし、とても私の返事なんぞ聞いて下さりさうもなく、低徊れてゐる私の頭の上から、

「好いだらうね」と念をおして立つておしまひなさいました。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私の長閑な、楽しかつた娘心の華やかな日は、其日の外出までで終りになつてしまひました。手箱に入れた緋鹿の子は、其まゝに見かへられもしなくなりました。半襟にかけた紫鹿の子は、涙がかゝつて伸たところが出來る運命でした。

一日二日、私は堪へにこらへて何氣なくはしてゐましたが、あんまりの愁さに三日目の夕暮、小夜着をだして引被つて泣いて寢てから、ぶら〳〵と寢ついてしまひました。

一月あまりで進められて髮をとりあげさせると、やつぱり魔の日でした。髮結ひさんのいつたことが氣になつて、おつちやちやんにそつときくと、

「御結納がくるのですつてさ」氣にもかけてゐない樣子でさう云ひました。

「おしゆんのは我儘病だ、亭主をもたせれば嫌でも癒つてしまう」とお父さんは云つてゐたさうで、お母さんは、

「あの子はあんまり物を苦にしすぎるので困ります。けれどあんな賑やかな派手な家庭へいつたら、氣が引立つて乾度人が違つたようなおかみさんになるでせう。何の病氣つてありやあしません、年頃の娘をあゝしておくと、妙な氣質になるものです」と云つてゐたとも聞かせました。

（未完）

うづ（承前）

荒木滋子

前の日は來た。押し迫つた心持ちが皆を壓して居る。母親は充溢した誇りと喜びと安心とに、平靜の中心を失つて居るやうに見えた。幾度も往來する仲人や、先方の親戚の人への接待にも平素の母親に似合はずドギマギした。坐敷に坐つて少し落着いて話でも爲て居れば可いのにと思ひ乍ら芳子が、臺處を手傳つて居る時にでも、客人を置きつ放しにして立つて來て、お銚子の出しやうが少し遲れたと云つて叱つたり、果物の出しようが惡かつたと云つては叱つた。

『此方の方は安心なすつて、お母さんは彼方へ行つて被居いませ』

『あゝ、だけども、そよが餘りぶまだから眞にお客樣に赤面する』と斯う云つて手傳うのでもなく坐るのでもなく、迂路々々と當り場のない小言を續け乍ら、用もない小鉢を只右から左へ置き替へたり、鐵瓶の湯を振つて見たりして、又忙しさうに廊下を身づくらひし乍ら坐敷の方へ引返して行く。

『米子、早く着物をお着替へなさい、御挨拶に出るんだから』又、立つて來た母親は米子

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を促した。米子は立溢つてゐた。
『姉さんまたお坐敷へ行くの？』と芳子の方へ意を含めた眼を向けた。
『お母さん、××さんが何か有仰つたんですか』
『いゝえ、何とも有仰らないけれど…………』
『ぢや可いぢや有りませんか今日は、あつちこつちお暇乞だの御挨拶だので米子も何だか落着かないやうですから今日はまあ、誰にも御目に懸らないで濟むように爲てお遣りなすつた方が可くは有りますまいか』
『…………』母親は不平相だつた。
『お母さんは私を見世物にでも爲た氣で被居るのかしら…………』と、後で米子も戯談さうに云つた。
夜になつた。姉は、明日他家の人と成る妹に敎ふ可き事を、只遺憾のないやうにと愛へた。朝の身じまひ、姑への挨拶、三日間に替へる着物、そんな事に迄細かい注意を與へなければならなかつた。
『あつちへ行つたら、あつちの妹さんの事を何て呼ぶのでせう、姉さんつて云ひませうか』と自分よりは二つ年上と聞いて、其呼び方にさへ迷ふおつとりとした此の妹を、せめて暫

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

く女中の一人も附けて遣られるならと、芳子はもう身も世もなく案じられて來た。

夏物、冬物、撰り分けて簞笥へ了い乍ら『能く覺えておいでよ、すぐに着替へる着物は二番目にね』と、敎へても氣ばかり昂奮してゐる米子は、すぐ忘れて行つた。自分で藏つた髮飾りさへ、入れ處を忘れて、鏡臺や用簞笥の抽出を幾度も明けたり閉めたりした。『鍵と紙入の在り處を忘れては大變よ』と態と華やかに語る芳子の胸には、刻々に重いものが押し寄せて來る。仲人の細君――それは決して、氣の利いた、新嫁の介添として遺憾ない取り計ひをする人には見えなかつた。純朴な、未だ都會馴れぬ、好老婦とでも云ひたい人である。母親は米子を膝元に呼んで、靜かに訓す事の出來る人ではない。人出入りの多い客商買はしてゐても、米子は決して人摺れた子ではなかつた。今迄の米子の頭腦に男とか、女とか、結婚とか云ふ事がどれ位の智識で這入り込んでゐるだらう、それが芳子には分らなかつた。さうした事に聊かの暗示も與へなくとも可ささうにも思へるし、そんな事の暗示を與へると云ふ事は却つて餘計な事のやうにも思へる。けれども未だそんな事に立入つた智識を少しも持つて居らぬとすれば、若しや、若しや、米子の其夜の驚愕は何れ程深いものであらう、常から偏頗に感情の高低する妹の胸に、この不用意な驚愕がどれ程に烈しく波打つて、奈何に案ず可き心狀態に成らうも知れぬ、と想ふと杞憂と知りつゝ芳

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

子の胸は平かでなかつた。――何等かを語る可きか、要せざるか、如何にして語る可きか――米子の心は刻々に重く成つて行く。

『米さん、昨日伯母さんの處へ上つた時に、伯母さんは何か仰有つて？』

『えヱ、着物の着かたなんか敎へて下すつたのよ、御挨拶の仕方なんかも、而して後は姉さんにいろ〳〵訊いて行くのだつて仰有つたわ、此話がせめて一と月も前に分つてゐるなら伯母さんの處へでも來て居て、種々覺えねばならぬ事があつたらうにつて有仰つたの』

『それつきり？』

『え、而して餘り私が御飯を食べ乍ら喋つたものだから、御飯を食べてからお話しつて叱られちやつたの』と云つて笑つた米子の顏は仇氣なかつた。芳子は、この子供らしい妹を搔き抱き度いやうに思つた。

――もう少し家に置いてやりたい！もう少し！――

未だ漲るやうな堰き切つた青春の迸りは米子の肉體に眺められはせぬ、と思うと一層に切ない感じが芳子の全身を銜いて環る。

母親達は、米子と芳子二人を殘して床に這入つたらしい。家の中は淋しく靜かだつた。

『米子、明日疲れるからもう休んだ方が可い、後は姉さんが明朝迄に整然として置いて上

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

げるから、お休み、而して緩りとお眠り』

『え、だけど私眠くないの、姉さんと一緒に夜通ししようかしら？』

二人はどちらも休む氣にも眠られさうにもなかつた。

激しく動搖して居る人々の間を縫つて、無頓着に分を守つて働いてゐる言葉のぞんざいな朴訥な爺やは、

『ねえ、お孃さん、今度は貴女の番——だつて云つちや、後前になるが、お孃さんも恁うして居たつて詰らないや、ほんとに今度はお孃さんの番だつて云ふ日が來りや可いね』と芳子の部屋の緣先へ來て、ズルける洋袴を——爺やは何時もお下り物の洋服を着て居た——引き上げて一服し乍ら、恁う云つたりして居たが、今朝は早くから默々として働いてばかり居る。

髮結を返すと、芳子は米子を連れてお湯に行つた。昨夜から米子を成る可く傾はさずに落着けやう、落ち着けようとし乍ら、却つて自分の心が何かに壓し詰められるやうに切なく成つて行つた。

お湯から歸つて來ると、今日の宴席に連る筈の東京に居る僅かな親戚達が集つて居た。

長い時間を費して米子の仕度は出來た。一時迄に米子と鐵也と母親だけは、先に式場へ行かねばならないので、皆は米子と一緒に食べようとお晝のお膳を据えて待つて居た。一人食卓をズッと離れて、別物らしく本膳に坐らせられて居る米子を芳子は見るに堪えなかつた。

『米さんも皆と一緒のお膳に就いたら、今から儀式なんか仕なくとも可からうよ』さう云つて鐵也達の側へお膳を寄せて了つた。米子の顏には、皆の思ひがけない乾燥ぎ切つた昂奮の色が溢れて居る。重い感傷的な氣分は却つて芳子を領して箸も取る氣にならなかつたのに、米子は、

『お腹が空くと可けないから、澤山食べて行く』と聲に出して笑ひ乍ら、喋り乍ら、平常よりも餘計に食を採つた。暗く憂欝で因循であつた米子が、恁うした場合に、かう迄華やいでゐるのを、皆は默つて見て居た。母親は『お轉婆嫁さん!』と云つた。芳子は慘々しいやうにも、苦々しいやうにも、云ひやうのない心持ちで、只感心して居た。

手を引いて車の幌の中へ腰を懸けさせて了ふと、芳子は突き上げて來る涙を呑み込み兼ねて、よろ〳〵とする足許を入口の駒寄にさゝへた。ポーッとした眼先に、二臺の俥を取り圍む見物の人群りが黑く寫つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

殘りの仕事を果す迄、暫くの醉ひを買ひたさに、臺處で冷いコップの酒に口を當てゝ居ると、亡父の妹で東京に居るタッタ一人の父方の親戚である伯母が呼びに來た。仔細ありさうにズン〳〵先に立つて芳子の部屋へ這入て行く。

『何で御座いますの？』

『貴女なア、今日お祝ひに行かん事アあるな』

『…………』

『何故行かんかい？』

『私少し、此頃、いつもの腦が惡くなつて居るものですから、若し又卒倒れでもすると、可けないと思つて、もう初めから、私だけは出ないと云ふ事に皆が承知して居るのです』

略式、略式と云つても相當に飾つた儀式を爲る事に成つた席へ出る爲めに、新調したり、縫ひ直したりして皆な紋服を仕度した。けれども、今の芳子は紋服どころでなかつた。ともすれば必要な小遣にさへ不自由勝であつた。親の膝許に居て、さうした內輪の經濟は他人には云へなかつた。

『爾麼こつ無からう、衣裳の事たらうたい、どうせ、母樣な、貴女にや面倒見てやらつさらんと思つたもんだけん、私の着替へは一張持つて來たばい』と持つて來た包を取り寄せ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て芳子の前に置いた。

『どうも有難う御座いました。けれど、料理屋の方は人數がちやんと定つて居ますから、今に成つて一人增えるなんて云ふ事は大變面倒なんですから、お願です、今日は此儘置いて下さい。其代り三日の日には屹度私も出ますから』

伯母は、凝乎と涙の眼を芳子の顏に据えてしみ〴〵と、

『ほんになア』と云つた。

『ホヽヽ、まあ伯母さん、米子も片附きました、御安心なすつて下さい。濟んでから、夜、久々で御一緒にお酒でも飮みませう』と取つて附けたやうに笑つた。其聲が自分の耳に淋しく響いて、何となしに自分を愍む涙を誘つた。

ドヤ〳〵と皆は出て行つた。手傳ひに來たお崎婆さんは、『サア、これからお芳ちやんの骨休めだ』と云つて盃を芳子に差した。芳子は朦朧して盃を受けて居ると、此頃は餘り飮まないからと云つて、昔の猩々藝者の面影もなくお酒に弱くなつたお崎婆さんは、もうお踊りのやうな裊娜々々した手振りを見せて居た。愚痴の出ぬ内に切り上げ度いと思つても、お婆さんは性根を据えて呑んでゐた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『ねえ、お芳ちやん今度は貴女が嫁かなくつちや可けない、私がそれを骨折らなくつちやお父様に濟まないからねえ、此處でお芳ちやんも分別して、何うかもう少し仕合せに成つて下さい』

『私はお崎さん達が考へるやうな不仕合せではないのよ、人の心つて云うものは表から見ただけぢや分らないもの…………』と云ひ懸けたが、どうせ話して分る事でも無いにと、止めた。

『お母さんも心配して被居るし…………』

『お母さんの心配なんか何處を心配して下さるんだか』

『さう云つちや可けない、お母さんだつて、お芳が早く片附いて呉れゝばつて…………』

『もう澤山!』不輿な忌々しい氣分にお崎の話を遮つたが、其時、自分でも分らない、それは別な意外の涙が頬に流れたので、芳子は袖で顏を蔽ふて了つた。

『お芳ちやん泣かないで下さい、惡く思はないで、貴女のお氣を惡くするとつて云ふんぢやないんだから…………』

芳子の涙を自分の言葉からと合點したお崎は、自分も亦手傳つて來る涙を、齒のない落ち窪んだ口許のあたり迄這はせて、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『お芳ちやん！』と鋭いヒステリカルな聲を上げた。
『貴女は私を信用して下さらない！私はお父樣の味方なんですか？お母さんの味方なんですか？それを貴女、お芳ちやん分つて居ませんか』つと、いざり寄つて芳子の手を執つた。
芳子は柱に脊を凭せた儘で居た。
『ねえ、お父樣の味方でせう、そんならお父樣の可愛がつて被居たお總領の貴女の事を心配しても可いでせう、心配しなければお父樣のお位牌に私が濟まない』醉の爲めに一層鋭くされた感傷を年寄つたお崎は、だらしなく涙に浸して啜り泣いた。男勝りで藝のみを賣つた俠妓の當年の面影を偲び乍ら、漸く宥めて横に成らせて、ほつとした芳子は、自分の部屋に戻るなり、耐えた、耐えた、云ひやうもない、いろんな涙に聲を上げてひいひい泣きに泣いた。

夜から朝へ

濱野雪

雨戸をすつかりしめて了ふと、生々しい木の香がプンとした。やつぱり暑い、明日の引越しは骨が折れよう。と思ひながら、お柳は出窓へ腰をかけて、暫くじつとしてゐた。今日建具屋がはめていつた棧ばかりの障子が、二枚重なつて高麗屋格子のやうな影を、雨戸へ落してゐる。振向いて見ると、この室の蚊帳と葭戸を透して、次ぎの間の電燈が水のやうに明るくとぼつてゐた。

お柳はふつと微笑した。そして立上ると帯を解いて、伊達巻一つになつて湯殿へ歩いて行つた。後ろむきに湯殿の開戸を閉ぢた時、明り取りの窓から、月光が左の肩を斜に流れこんだ。

頬から頸へかけてのひいやりとした、水白粉の香をなつかしみ乍ら、こゝろもち濃く口紅をさして、その指を小桶の水にいつまでもひたしてゐた。おしろいと紅とが溶けて、水面に小さな渦をいくつもゑがいた。白いのは白いまゝに、紅いのは紅いまゝに、別れ〳〵に細い絹糸のもつれたやうな渦を卷くのを、輕い興味をもつていつまでも眺めてゐた。し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

やがんだ爪先きが少しゝびれて、うつむけた耳朶が熱くなつたやうな氣がする。瞳を上げると、丹い唇と、白い頰と、櫛巻にした生へ際の少し亂れたのが、ひどく媚いて鏡裡にういて見えた。

お柳はうれしい氣がした。そのまゝ肌も入れずに、まだ仕上げの鉋の掛けてない、何處かざらつく板敷の上へしどけなく身を投げだしたまゝ、Sの事をじつと考へて見た。

そこはうす暗い雜誌社の二階であつた。三月はじめの暮れ方の鈍い日ざしが、火鉢をはさんだ二人の足許にちろ〳〵と落ちてゐた。灰色の壁には、口繪の原畫が有合せの額椽にはめこまれて、いくつも〳〵こればかりは鮮かな色彩を滲ませてゐた。側のテーブルに上せたコーヒー茶碗の細い湯氣と、對ひ合つた人の指先きに忘れたやうにつまゝれた煙草の烟と、一つになつてゆら〳〵と舞ひ上るのを、お柳はぼんやり眺めてゐる。その眸がその人のうつむけた面に落ちると、その毎に胸が熱くなるやうな氣がした。そしては今讀まれてゐる自分の原稿を、そつと取戻したい程の羞耻を感じた。

ほんとうにお柳は意氣地なしであつた。また、ほんとうに作をする上には、泣いてやりたい程みじめな天分しか考へられてゐなかつたのである。そのからつぽな頭腦を絞つて、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一行二行と溢り勝ちな筆を進める時、一つの心は常に自惚れてゐた。も一つの心は常に赤面してゐた。それがもう書上げられて了つてからは、全てが赤面する心ばかりであつた。時としては、だまつてぼろ〳〵涙をこぼす事もあつた。それ程に、自分ながら愛想のつきるくだらないものしか書けなんだのである。お柳はその物にどれほど苦しんだ事であらう。幾度か筆を捨てようとも思ひ定めて見たけれど、それには余り未練がありすぎた、全く筆に離れたあとの寂しさを思ふと、とてもとてもたまらなかつたのである。それでとうとう最後に、自分は自分の為に作をしよう。よしやそれが、どれほどに哀れな貧しいものであらうとも、自分一人のものは自分一人で育みたい。いとしみたい。そして、遠い〳〵未來に俟ちたい。――斯う決心して、お柳は悲しく微笑するのだつた。

斯うしたお柳にとつては、自分の作を自分の面前で讀まれる位、辛い苦しい事はなかつた。何かでぐい〳〵壓迫されるやうな、とてもじつと落着いてはゐられぬ心持になつて忙しなくあちこちと眸を動かしてゐた。

「ヤ、結構です。どうも御面倒をかけましたねえ」

と、柔かな調子でさう言つて、Iと呼ぶその社の主筆が親しみ易い微笑を見せた。その調子と顔色に依つて、お柳はやつと落着く事が出來て、默つて笑みながら膝の上で指を組

合せた。作の中のある一節などがふと胸に繰返された。

Ｉは身を屈めて、消えた煙草に火をつけてゐる。コーヒーの湯氣はもう立たなかつた。

「――あなたは、あんまり苦しまずに、お書きになるんでせうね」と、微笑を續けたまゝさう言つた。お柳の唇にこんどは淋しい笑が浮いた。苦しんでゐると答へたかつたのである。けど、「えゝ」とだけ答へて、あきらめに似た心細さを味つてゐた。

と、その時、誰かトン〳〵を階段を上つて來た。はつとして顧みたお柳の眸と、ドアの蔭から覗いた面とが、ぴつたりと合つた。お柳は一時に全身の血が逆流したやうな心持になつて、頸えまで燃えるやうに熱くなつた。

ドアは直ぐに閉ぢられた。「失禮」といふ一言を殘して、跫音はとなりの編輯室に這入つて了つた。やがて爽かな笑聲が聞えて來たのを、袂の先をいぢりながらしみ〳〵ときいてゐた。

ほんの一瞬の間であつた。だのに、あんなにもはつきりと印象されたといふのは、思へば不思議な事であつた。あの灰色の暗い壁を脊景にして、かつきりと浮んだ美しい面――それはほんとうに美しいといふより、他には言ひようがないと思はれる面であつた。無造作に刈り込んだ額際と口髭がつや〳〵と濡れてゐた。輪廓の整つた、少し白すぎる位な

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

面に、唇がそれはきれいな色をしてゐた。斜めに見た鼻の形も、刻んだやうに美しかつた。

「ア、S君か——」

Iが獨言のやうに呟いたのをきいて、お柳ははつと再び面を染めた。あれがSさまだつたのかと、烈しく動悸の打つ胸をおさへて、昨日貰つた手紙の文句を思ひ出した。「——いつたい何時まで會はずにゐようと言ふんです」少し茶化したやうな、怨みがましいやうな、皮肉なその文句が、ちら〳〵と眸の前で踊る。でも、でも、まだ會つちやいけない——。

お柳はあわてゝ歸り仕度をした。そして、逼げるやうに戸外へ出てほつと息をつくと、もう日はとつぷりと昏れてゐた。そのくらい中に、Sの眞赤な唇があり〳〵と匂ふてゐた。

それからもう四月にもなる。けれど、まだ會はうとは言はなんだ。お互に妙な意地から言ひ出しそびれて了つて、お互の心の底を探るやうな手紙ばかり書きあつて、そしていら〳〵しい日を送つてゐるのであつた。

だのに——それを思つたら、お柳は急に耳鳴りのする程面が火照つて來た。ふとした氣紛れな、浮わついた心にそゝられて、今日のやうな暑い日に、わざ〳〵遠い溜池まで、S

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の家を見に行つたのであつた。——

ひよつとしたら、Sも見られるかも知れないといふ、仄かな希望と歡喜とが、つよく心の底に動いてゐるのを、强ひておさへつけて氣のつかぬ面をして、眞日に乾いた日盛りの途を、蔭を拾ひ〱歩いて行つた。七月の高い空を、折々烟のやうな雲が走つた。

Sの家は待合の多い、細い横丁の中にあつた。板塀の上から楓の葉末が覗いてゐた。格子戸のそばに、夏水仙の白い小さな花が咲いてゐた。その前で、脊のすらりとしたひとが張物をしてゐる。はでな絞りに靑つぽい博多の半幅帶を貝の口にして、燒桐の庭下駄をはいてゐた。「あゝ奥さんだな」さう思つて、少し急ぎ足に通りすぎた。たいへん御縹緻のいゝ方だと聞いてゐたが、成程さうらしいと思ひながら、折目のしやんとした手拭を姉樣かぶりにしてゐる、ほつそりとした。頸足をふりかへつて見た。そして角を折れると、一寸立止つて思案した。

お柳は、このまゝ行過ぎようか。それとも一度立戻つてみようかと、暫く迷つてゐたのである。けれど、矢張り未練が元來た方へと足を返させて了つた。洋傘を深くかざして足許に眸を落して歩いたがその門邊まで來た時に、殆ど本能的に見上げると、先刻は誰も居なかつた二階の緣側の藤椅子の上に、Sが白地の浴衣を着て寢ころんでゐた。胸の上へ新聞

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

をひろげて、片膝をくの字なりに立てゝゐる。お柳はその少しまくれた素足と、やつぱり美しい横顔とを見てゐる中に、ふと逆上せてくるやうな氣がしたので、袂を頬にあてゝ唾をのみこんだ。でも、こんなに落着いてSを眺めることの出來るのが、不思議なやうな、うれしいやうな、妙な氣がした。で、洋傘を少しかしげて、わざとぐづ／＼歩いてちら／＼とを眺めてゐた。すると、張板を片寄せたひとが、と反身になつて、眉庇して、何か言ひながら優しく笑ふと、Sも體をのりだすやうにして、片手を手すりに掛けて同じやうに笑つた。それを見た拍子に、お柳は如何したのかびり／＼と戰いた。そして急いで歩き出した。今ちらりと自分へ反れたSの眼差しが、何時までもうしろから追掛けてくるやうな心持がして、汗のじく／＼湧くのがはつきり解つた。

Sはほんとうに私を見たのだらうか、と考へて見た。でも、よしや見たとした處で、私の面を知る筈は無いのだもの、ちつともかまひはしない。またさう思つて安心はしたものゝ何處やら擽つたい、きまりの悪い氣がしてならなんだ。お柳は眞赤な面をしてゐた。そして、何時ぞやSの描いたものゝ中に「洗ひ髪を櫛卷にした夏の女」があつたのに誘はれて、櫛卷にして紅ばかり薄く含んだ自分の姿を、少し腹立たしい思に眺めたりした。いつたい自分はどんな氣でゐるんだらうと考へながら、また日盛りの途をかへつてきた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ほんとうに、自分はどんな氣でゐるんだらうと、今更らしく考へて見た。と、お柳は、何とも言へぬさびしい〳〵氣になつた。そして深い羞耻を感じた。「なんといふ不眞面目な戀」さう思ふと、たまらない程耻かしくなつたのである。

併し、それもほんの暫くの間であつた。ぢきにいつもの捨鉢に似た心が湧いて來て、如何だつて成るやうに成れると思ひ捨てた。一日一日を無理からでも華かに塗潰して、儚い夢にもせよ醉はれゝば、それで仕合せなんだからと、自分と自分の心に云譯して、それでもう安心した氣になつて、ふつと笑いたい氣にもなりながら、立上つて肌を入れた、かなり長い間板敷の上に横になつてゐたので、割に肉附きのいゝ胸まですつかり冷へ切つてた。湯殿を出しなにも一度鏡を見ると、先刻と同じに丹い唇が笑つてゐる。

「ほんとうに、Sさんのやうに美しい唇だ」斯う嬉しげに呟きながら、やつと寢間へ戻つて來た。次ぎの間の電燈はやつはり明るくとぼつてゐて、頁を繰るのらしいさら〳〵といふ音が、蚊帳の裡から聞えてゐた。

「あら、まだおよらないの」

さう言つて、後ろむきになつたまゝするりと寐衣を着替へた。そして覗くやうに透して

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

見た。

「えゝちつとも眠れないんですよ。だからねえ、今夜はよつぴて此本を讀んでようと思ふの」

その人の聲や調子には、何處か女性的なところがあつた。とりわけ女と語る時には、まるで女のやうな物言ひをするのが癖だつた。

「さうを」お柳は聲を立てずに笑つた。

「——今どこを讀んでらつしやるの」

「——幻影の盾なの」と、身じろぎするらしいけはひがした。

「クラ、ですか」

また笑つて、蚊帳へ這入りかけたが、ふと思出したやうに「少しあけて置きませうね」と言つて、葭戸を五寸程引きあけた。と、そこから若い男の匂ひが、むつと流れてくるやうな氣がした。じつと眸を凝らすと、弟はもう彼方向きになつてぐつすり寐込んでゐた。

Eは腹ん這ひになつて、煙草を吸ひながら頁を繰つてゐた。この人も色が白い——さう思つて、男の匂ひと煙草の匂でとが入交つた、うす甘い空氣にひたつてゐる中に、ふと輕い誘惑を感じてきた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お柳は急いで蚊帳へ飛込んだ。「ほんとうにおよらないと毒ですよ」と聲をかけて、ぎゆつと胸の上で兩手を組んだ。

奈何いふものか自分もちつとも眠れない。寐返りばかり打つてゐると、今まで忘れてゐた生木の匂ひがまた鼻につく。氣のせいでか疊からも青臭い匂ひが散るやうで、いら〳〵するほどなほ眼が冴え、神經の昻つてくるのがどき〳〵と、胸に上せた手掌に傳はつた。おしまひには、傍にすや〳〵と眠りこけてゐる妹が、なんだか憎らしくも思へて來た。「Cちやん。Cちやん」と搖つて見たけれど、「うゝ」と低く呻いたゞけで亦輕い鼾を立てる。黑びろうどのくゝり枕を半ば外して、ぐつたりと露はに投げ出した二の腕が、緩い曲線を描きながらちよい〳〵お柳の腕の下へ觸るのが、不思議な快感を與へるのだつた。「ほんとうに、今夜はよつぽどどうかしてるよ」とひとりで面を赤くした。そして、近頃めつきり女らしくなつた妹の、むつちりした乳の邊りや、滑つこさうな頸の邊をじつとじつと見詰めてゐたが、いきなり力いつぱいその肩を抱きしめると、火のやうなキスを頰に與へた。――

お柳は深い〳〵吐息をした。少し汗ばんでゐる妹の頰に、捺したやうに口紅のあとが附いたのを眺めて、でもまだ安らかな眠りを續けてるのに安心すると、くるりと脊を向けて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

眼を閉ぢた。

まださら〳〵と頁を繰る音がしてゐた。

寐苦しさに、あがき續けた氣でゐたが、それでもうと〳〵したのらしい。ふと何かの物音に脅かされて、びくりとして目覺めると、まだ半分夢心地で枕を上げた。

その物音は續いてゐる。そしてそれが、誰か雨戸を明けようとして、掛金をこち〳〵やつてるのだと解つた時、お柳はつい微笑して了つた。夢の中でひどく自分を脅かした物音の正體が、あんまり呆氣なかつたのがお笑しかつたからである。で、直ぐに起きて縁側へ出て見ると、Eが細い軀を曲げて、頻りと具合の惡い掛金をいぢつてゐた。

「おはやう。もう起きたの」

さう言つて掛金へ手を遣ると、ついその手と手とが重なりて、若い男女の血のぬくみがお互の指から指へはつきりと通つた。お柳は思はず爪さきまで、ずしんとしびれたやうな心持になつた。Eもびくりとしたらしつた。けれど二人は直ぐ笑ひかけて手を引込めた。そして一寸間を置いて、お柳はまぶしげに眼を細めながら、雨戸を一枚だけ繰りあけた。

「いゝお天氣ねえ」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

てれ隱しのやうに言つて、片足とんと音させて通つた時、白と濃藍との辨慶になつた伊達卷が、しどけなく裾へ流れてゐるのに氣がついた。それがしゆつしゆと爽かな音を立てて、胸へまきついて行くのを、Eは默つて眺めてゐたが。――暫くして、

「柳さん」

と、たゞ呼びかけた。そして二人は並んだまゝ、きれいな〳〵早朝の空を眺めた。

實際美しい空の色であつた。藍でなく、綠でもなく、一寸何と形容していゝか解らぬほど、清みきつた透き通るやうな色であつた。湛へた水が重さうに見える程に、深い地や川ではいけない。といつて、底の眞砂が握れさうな淺い流でもない。影を落す木も草も、みんな若く瑞々しい中をゆく、せつかちな清んだ小川にならば、或はこれに似た色を求め得るかも知れぬと思へた。

二人はそのまゝじつと立つてゐた。あとの二人はまだぐつすりと寢入つてゐた。それを思ふと、お柳はふつと操つたい氣がした。

「――あれからずつと起きてらしたの」

斯う言ひながら、中二階の方へじやれるやうに轉げて行く、鉋屑の塊を見てゐた。

「えゝ。今朝までちつとも寢なかつたの」と笑つて、きものをきちんと直した。そして、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

思ひついたやうに急に「ぢやさよなら。どうもお邪魔さま」と言つてずん〳〵裏口の方へ行きかける。お柳は少し殘り惜しい氣がしたので「まあ御飯でも上つてらつしやいな」と言つたけれど、たゞ笑つたばかりだつた。

女きやうだいばかりの中に生れたせいか、ひどく氣弱な遠慮がちな人で、お柳の弟とは尋常科からの仲よしで、一緒に同じ中學まで出た位なのに、それでもお柳達の兩親などには、碌に口も利けない程だつた。物言ひぶりばかりでなく、字もまた女みたいに優しいきれいな字を書いた。お柳の知つてる限りではうちへ泊つたのも昨夜がはじめてだつた。

そんな事を考へたら、お柳はひとりでに微笑された。

「ぢやあほんとにさよなら」と、後ろから聲を掛けて、ほつそりした姿つきを眺めてゐた。——丁度その姿が、木戸の彼方へ消えるか消えない途端だつた。玄關のガラス戸をどんどん叩いて、お柳を呼びたてる聲がした。それは家中で一番性急な母親が、ちつとも朝すゞの中に片附けようと、いつでも寢坊しがちなお柳をば起しに來たのだつた。すつかり普請の出來上るまではお柳達三人を用心の爲に寢泊りさせて、兩親だの小さい弟達なのは、まだ舊宅の方に住まつてゐたのである。

その癇高な聲を耳にした時、お柳は何故とも知らずひどくどつきりして、本能的に裏口

の方へ眼を走らせたけれど、そこにはもう何物の影も求められなんだ。と、ほつとした心持になつて、直ぐ母親を迎へ入れて、たゞにつこりして見せた。母親は、よく早起きをしたと言ひたさうな上機嫌で、せか／＼とそこいらを歩き廻つてゐる。自分もそのあとにくつついて歩いてたが、ふとその木戸が風にあふられてゐるのに氣がついたので、急いで知れぬやうに錠を下しに行つた。そして、まだ何にも氣附かずに歩き廻つてる母親を眺めてゐると、急にお柳のこゝろのなかに、とんでもないお芝居染みた空想が浮かんで來て、もうもう可笑しくて可笑しくてたまらなくなつた。どう我慢してみても、笑がお腹の底からこみあげて來て、おさへる事が出來なんだ。お柳は涙をこぼしながら、轉げるやうにして笑ひつゞけた。

………………まるで人知れず隱れ逢ふた忍び男を、きわどいところで逃がしてやつたやうなものだ………………

ほんとうにきわどいところだつた。と、お柳はいつまでも／＼笑ひ續けた。呆氣にとられてぼかんとしてる母親には「いゝえ、なんでもないの」と、首を振つて見せながら、でもまだ笑が止まらなんだ。おしまひには、せいせい息を切つて、睫毛を傳ふ涙を拭いて、がつかりした面をした。實際Eを戀人として考へる事が出來ようか、とも思つたりした。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自分より三つ年下のおとなしいひと。始終、弟を見る心持で眺めて來たひと。そのひとを戀の對象とする事は、とても出來さうにもなかつた。しかし、昨夜から今朝へかけての和かい感情のあとを辿ると、たしかにぼんやりと意識される程の愛感が底に動いてゐた。「とにかく、好きは好きなひとだ」と心に呟いて、先刻並んで空を見た時に、「柳さん」と自分を呼んだ事を思ひ出した。Eは、大抵の時は、「姉さん」と呼んだ。奈何かすると弟の呼ぶやうに、「柳ちやん」とも呼んだ。だのにさつきは「柳さん」と呼んだ。それがひどく親しげにきこえたのだつた。――

今お柳のあたまの中を、Sと、Eと、この二つの幻がくる〳〵と渦を卷いてゐる。お柳は蚊帳を半分疊みかけたまゝ、うつとりと考へに沈んでしまつた。忙しいのにと思ひながらも、やつぱり考へずにはゐられなんだ。

この頃の自分はSに對して、たとへそれが不純なものにもせよ、とにかくもうとても抑へきれぬ程の、強い烈しい戀を意識してゐるのである。だのにその最中にさへ、Eに對してもある戀ごゝちを感じたのである。――むろんそれはほんの氣紛れな、いたづら心が生んだ一時の夢みたいなものではあらうけれど――Sを戀ふる心でいつぱいに成つてる時に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

でも、他の男からの誘惑を感じる事が出來たのだつた。――それを思ふと、フヽンと言ひたい氣がして來た。

「浮氣もの」

斯うはきだすやうに言つて見たけれど、自分で自分を嘲るその皮肉の奥には、自分の感情をおもちやにするのを歡ぶ、不思議な興味が強く働いてゐた。少しでも酔へる夢の中に生きて行きたいのだものと、お柳はまた自己の或る心に云譯してみた。そして、昨夜からの感情の動き方を、Sへ書いて送らうと思ひついた。晝間の事はわざと隱して、たゞEの事ばかり書かうと考へた。

面白いおはなしをお聞かせ申しませうか――

お柳は先づかう書かうとした。そして、まだ疊み終へない蚊帳の環をおもちやにしながら、だん／＼暑さのにじんでくる中庭の塀ぎわに、重ねたまゝ凭せかけた梧桐の根を卷いた、泥だらけの荒繩を眺めて、青い帶のすらりとした後ろつきと、美しく笑つたSの唇とをうつとり思ふてゐた。

玄關の邊りがざわめき出して、誰かゞお柳を呼びたてゝゐる――。

初戀のなりゆき

岡田八千代

五

私は夕方になつたのに驚いて、明日(あした)は次郎さんの方から尋ねて貰ふ事を約束しておいて急いで次郎さんの家を出ました。そして家へ飛び込むが早いか母の側へ走けつけました。

「まア遲いぢやないかどうしたの。」

と母は例の通りの冷やかさで言ひました。

「私ね母アさん次郎さんの處へ行つたの。」

「次郎さんて誰さ。」

「學校のお友達なの、それでねこれを貰つたの。」

私は懷中から次郎さんに貰つた繪端書を出して見せました。さだめし喜ぶだらうと思つたからでした。けれども母は一目見たゞけで、

「おやおや、大層しつこい繪ぢやないか。」

と云つたゞけで、又目許の仕立物の方へ氣を取られてしまひました。私はなんだか物足

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

らぬ淋しい心持になりました。それですご〳〵座を立たうとすると、
「無暗に知らないお友達などの處へ女の子のくせにづか〳〵行くんぢやありませんよ。」
と釘をうたれてしまひました。私はせつかく明るかつた場所が急に暗くなつたやうな氣がしました。何もかもが厭なことのやうに思はれました。あれもこれも自分に無かつた方が好いと思ひました。私はそれでも繪端書は離さずに自分の机のある小さな二疊の室へ這入りました。そしてそこへ鞄を投げ出すのが早いか机の上につつぷしてしまひました。沸いて來るやうな温かい涙が、押へた袖と押へられた頰との間をむづがゆく流れはじめました。
「歌子、御飯ですよ。」
かう呼ばれるまで私は泣いてゐました。
「何をしてゐるんです、早く來ないとお汁がさめてしまふぢやないか。」
私は再びかう云はれた時に忙てたやうに立ち上りました。そして泣かない顏をしやうと思つて目をしばたゝいてそこらの何かを見やうとしました。が、その室にはまだ灯もなく、たゞ葦戸を透して茶の間からさす灯が斜めに私の着物ばかりを入れた古箪笥の黒い金具に反射してその上に飾つた人形の顏をぼんやりと照らしました。私はなんだか急に恐くなつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たので急いでその室を出て茶の間へ行きました。茶の間には父は往診にでも行つたと見えて居ず、母が一人まじ／＼とお膳の前に座つてゐました。

「何をしてるんだねえ。」

と私の顏を見ると母は直ぐに疳癪聲で云ひました。私は默つてうつむいて膳の前に座りました。

母は私の泣き顏には氣のつかぬ樣子でその事については何もいひませんでしたが御飯を食べてゐる中、次郎さんといふ子の家は何處だとか、どんな家だとか、どうして遊びに行つたのだとか、しつこく種々な事を聞きました。私はその爲めに御飯はろくに咽に通りませんでした。どうぞして母が次郎さんに惡い感じを持たぬやうに答え度いと思ふ心遣ひで。

けれ共子供だつた上に一體口の重い私の事でしたからはか／＼しい事は云へませんでした、それに母は次郎さんの家はいつぞやS町の醫者の來てゐた家だと私が正直に答えたので反つて心持を惡くしたやうにさへ見えました。

「そんな家へ内の者が出入りして、S町の醫者にとくいでも取るやうに思はれるのは嫌だからね、もう一切行つてはいけません。」

「でも向ふから來るのは好くて母アさん。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「おんなし事ぢやないか、なほいけないよ。」
「なぜ母アさん。」
「患者でもないのに遊びに來てもし又病氣がぶつ返しでもするとS町の△△に毒でも盛られたやうに思はれるのは嫌やだからね。」
私はもうそのまゝ默つてしまひました。そして悲しい思ひを隱して御膳の前を立ちました。そして女中から洋燈を貰つて又二疊へ這入りましたが、明日の下讀をするのを投げやつたまゝ、また烈しく忍び音に泣くのでした。情の強いくせに人懐こくて氣の弱かつた私は、母にかうした事を云はれたのが、もう一生誰とも友達になつてはならぬ程に押へつけられたやうな氣がして、もうもうもうもう悲しくて淋しくて堪らなかつたのでした。それにあした次郎さんの來ることを斷はらなければならぬといふ事も私にはつらい一つでした。その癖、母は直きに自分の云つたことを忘れてしまふ人だと云ふことは私も知つてはゐたのですけれど。

六

私はさうした母の心を恐れてはゐましたけれど、夫にもかゝはらずその後の次郎さんと私との間はます〳〵隔ての無い友達になつてゆきました。――友達といふよりも兄妹――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

兄妹と云ふよりも――さアなんと云つたら好いでせう、兄妹よりももつと深い、何か目に見えぬ糸かなんぞで、二人は生れぬ前から、その糸の端と端とに結がれた二人では無いかとさへ思はれました。そしてその糸はその當時二人の上に立つ神樣の爲めに最も近くたぐり寄せられてゐたのだらうと思ひます。けれども月日の經つに從がつてその糸はまただん〲に繰り延ばされてしまつて、大方今は切れてゝもしまつたのですかいくらたぐらうとしても引かうとしても私の手には何の手ごたへもないやうになつてしまひました。どうせかうなる位ならば、神樣もはじめから私達の糸を引いて下さらねば好いものをと恨めしくも悲しくもなります――あゝ思はず又愚痴になりました。これも病氣ゆゑとお許し下すつてまア後を聞いて下さいまし。

その頃から次郎さんは又學校へ出るやうになりました。しかし次郎さんはもう前のやうな「面の憎い」子では無くなつてしまひました、活潑なにこ〲した心持の優しい子に見えはじめました。それは決して私が次郎さんから美しい繪端書を貰つたゝめの妥協から來た考へでは決してなかつたらうと思ひます。實際病後の次郎さんは、まるで生れ變つたやうに元氣な晴々とした男の子になつてしまつたのでした。ですから私にばかりではなく、次

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

郎さんは前には仲間はづれにされてゐた男生からも次郎さん次郎さんと引張り凧のやうにされるやうになつたのです。

　けれども次郎さんは、學校では兎に角として、授業がひけて歸る時には、以前のやうに兩方でしんねりむつつりと別々に道の兩側を歩いて時々そつと顔を見合ふやうな事は無くどつちかが遲い方を待ちうけて、そして、面白をかしく歌つたり話したりしては一處に歸るのが例になつてしまひました。けれども、やつぱし私には母が恐かつたので、家の側へ來ると私は次郎さんを走けぬけて一人で家へ走け込んでしまひました、そして玄關の小窓から次郎さんの淋しさうに歸つてゆくのを見るのでした。そして次郎さんの姿が見えなくなると大急ぎで復習をすまして外へ遊びに出ます。外へ出た私の足は自然次郎さんの家の方へ行かずには濟みませんでした。けれども小心な私は母の叱言が恐いので、遂に誘はれても次郎さんのお室へは再び這入る事はしませんでした。次郎さんもそれを知つたので、今度は次郎さんの方から繪本とか繪端書とかを家から持ち出して私を外で待ちうけて呉れました。そして二人は一處に二三町隔たつたある野原へ行つてそこでそれを開けて見ては遊びました。こんな時から私の戀ははかない逢瀬をしなければならぬやうに定められてゐたといふのは何といふ不幸だらうと私はつく〴〵思ひます。夏は樹陰に春は日の中にさう

して二人が睦まじく遊ぶ中にも私は家へ歸る時を忘れるほど遊びにほゝける事は出來ませんでした。それほど私の母は私にきびしくそして冷たい人だつたのでした。

やがて春は來ました。私達の級がとある野原へつくし摘に出かけました。處がそんな遊びにやつきとなる事の出來ぬ私には、どうしてもつくしを見付け出さうといふほどの熱心が欠けてゐるので、つくしは一向に見當らず私は人々が手にあまるほど摘む中に、やつと二三本瘦せた短かいのが摘めた位のものでした。その時にも次郎さんは私に優しく、自分の摘んだ澤山のつくしを半分あまりも呉れました。そしてその中の一番長い大きなのも惜しげもなく私に呉れてしまひました。

その頃から私と次郎さんとの間が人々の目につきはじめました。そして私と次郎さんとが一寸でも側へ寄るゞ人々は騷ぎました。私はその度びに母の事を考へて恐れましたが、次郎さんは平氣で私を女生から庇ひました。その上他の男生を立派に征服してゆきました。そんなにも次郎さんは強い立派な勇者になつてゆきました。

（未完）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

病床相思吟

原阿佐緒

うつり香もたえだえのわが夏衣わかれて三月はや着る日なし

初袷襟もさびしくかきあはす木犀(もくせい)の香の寒き雨の日

相見ずて何たのしかろ秋山に果の實みのれど兒はもたくれど

つつましくひとりねをするわが姿よすがらまもる黄なるダアリヤ

子等二人並らびて寐しを見る時にげにほほゑまる戀も老ゆらし

相見む日またなき如く相なげき相思ひつつ遠々に居ぬ

秋の風身にしむ頭を血の洄るゝ病ひもすなれ別れてし間に

蒼ざめてたゆき腕に兒を抱き乳の足らはぬをなげく秋はも

物置きの壁を黄に染めわが心かなしみに染め夕日照り照る

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

こほろぎ鳴く丸木の柵の影おちし月明の庭芒みだれて

珍らかに水の音さへ耳とまるいかに靜かにかなしめる身ぞ

たそがれの狹霧こめたる山の根にげにただひとつ黄なる灯の見ゆ

晝も吊る蚊帳の寂しさわが病める床にしばしば兒の寐ねに來し

戀もなく悲しみもなくうつろなす身を横たへて秋風をきく

乳貰らひに兒の出でゆけばくづをれてわが泣く癖も病みそめしより

例(れい)になく兒はむづからず母ならぬ人の乳房を吸ふもいとほし

うらめしき人もあるなる病める身を吾となだめてあるあぢきなさ

蒼ざめし女の顏を思はせて君が前にも秋ぞゆかまし

豆の畑青ひろびろと月照れば湯槽にありてこほろぎをきく

一ひらの紅き花をば嚙み碎く戀を味ふごときここちに

東京の戀ひしくなりし心をばうちいでかねつなげく雨の日

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

新妻として

遠藤琴子

くちをしくわが病めるをば背の君は熱の口さへ吸ひ給ひける

はね起きて君を抱きて泣かまほし冷き飯を君ひとりかむ

ただひとり家に殘りて病みながら君を思へば秋風の吹く

はるばるとわざはひばかり持て來る女なりけり君が戀人

早すでに君に與ふるものなくて亡びゆくべき日にはあらぬか

わが病むかいないな君を虐げて苦役におくにけだしあらぬか

厨よりもの養るにほひ通ひ來ぬああ脊の君を養る心地する

秋の空いと美しく晴れにけり小鳥のごとく君を放たん

すこやかにまろびゆくべき白玉の石につかへてをしき君かな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

今宵よし出でましものとかこつ君あまりあはれにうらめしきかな
八方に君あるごとく捨てられて野にあるごとく病めば狂ほし
花一つ咲かぬ庭をば眺めつつ病めばわびしき妻と思ひぬ
われ神に君にそむくと思はぬに早くも何のこらしめを受く
何しかもかなしきことを思へるぞ病みても君に抱かるゝ身の
甘えたる心ならねど君見れば病めることなど時に忘るる
父母にそむきてひとりはるばると病みに來つるにあらなくにわれ
キスをして君が出づれば起きがたき身のはらはらと涙流るる
君ゆくをねて送るさへかなしきにつと眼をやれば襖閉さる
君ゆけば忽ち涙あふれ來ぬわびしきすきを身につくりけん
ああ今か君が電車に乗るならんかすかにひびく音のなつかし
ひとりねて待てば見るものことごとく淋しきことをささやくごとし

秋思

三ケ島葭

秋の夜はものおもふこそわりなけれ玉のごと鳴く蟲もきこえず

明るさをいみじくいとふ君のためおのれ盲となりて世を經ん

なやみをばかさぬるごとき心地してまた束の間のよろこびに生く

悔ゆることやうやく稀に恨むこといよいよ多くなりにけるかな

打ちがたきものと一たび悟りたるこのみづからを止まず打つべき

恨まじとすればわが身に力わゞ尊き日なりひとり草刈る

ものの足らぬ心にありて思ふことあまたつもれる心地のみする

かにかくにおのれを強し尊しと思ふに心え堪へうべきか

かねてより願ひしことにあらねども身をそこなひて世にぞ觸れける

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

われいまだ道の半ばと思ふとき思ふことみなはかなくなりぬ

みづからを呪ふにあらずただ人を恨む身となり悲しかりけり

思ひなやみなやみ疲れて一切をなげうたばやと思ひつるかな

たちまちに岩ほどばしる水の音わが心より起ると言はん

かなしきはたまゆらとしてゆるさるる命のほかにいのち無きこと

夕ぐれの窓にかざせばわが手さへ我を覗ける顔のごとかり

しらつゆの玉ちる木かげ風吹けば落葉することそわびしかりけれ

言ひがたきものなつかしさ身にわきぬ野分めきたる風の起れば

樽御輿かつぎて子等のさわぎゆく街を歩めば山のしのばゆ

さらさらと木の葉散るなり風吹けば空もさやかに晴れわたりつつ

子のためにただ子のためにある母と知らば子もまた寂しかるらん

われさわが身のかなしまれ蟲の音も聴くにえたへずなりにけるかな

青鞜詠草

畔蒜こと子

をみなへしすべなく秋の夜の底に泣けるわが頬にさやかにそよぐ

青春のゆくべき秋かくるほしうあふげば夕日大きくしづむ

鈴虫の眞晝をなくはうらさびしさびしさ更にけすよしもなし

をみなへし風もあらぬにゆれゐたり寄邊なき身にしみわたりつつ

おしろいの瓶もさびしくいつしかや埃にまみれわすられにけり

氣むづかしき舅まであはれその嫁のつつがなかれと祈りますてふ

姑よりの消息もまたあらたなる涙をさそふ秋いやふかみ

うねりさく野萩白萩うちもだし踏めばもろくもはらはらにちる

蔦の葉に夕風ながるめづらしく思ひあかるう丘にたつかな

九月盡われいたましう產褥にうつら眠れば虫ほそくなく

われに似て悲しくあはれいたいげの兒をいだきつつ眠る秋の夜

乳の張りに夜半をめざめてあやしくも虫の響きに心さえゐる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

乳をふくむ子の頬の色の匂やかさかろくゆすぶりわれも眼とづる

つつがなく子を生みおとし蒼白き頬を鏡にうつしてもみる

あぢきなき子と添ひ臥の幾夜へて身のすこやかに秋深みけり

やうやうに身もとのひぬ起きあがり髪のしづれを梳く秋の朝

中將湯うすらにがきもうらかなし子のすやすやと寢入れるあした

わが若さ子にいたづらに吸はれゆく心地に悲し秋もふけゆく

吉原芳子

秋の水月夜の野邊をひそやかに思ひにしづみゆくうれひはも

うすぐらきなげかひごとの片隅に小さく咲けるあやかしの花

あな悲し君にまゐらす白菊をつめばこぼるる露のつめたさ

このゆふべうすらなさけも身に泌みてわが指先をなつかしみみる

針とれば先づ大空を見あぐるも佗しき日日のならはせにして

かなしみをつげの小櫛にかきあげてほろほろおつる黒髪をみる

いふは憂しいはぬは苦し砂濱に書けばあだ波うちけしにけり

君がため君みぬひまにうすれゆくわがくろ髪はいとほしきかな

永井芳子

心つよくわかれしものを今はただこゑの限りに呼ばまほしけれ

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

こひしさになやめるものの胸に似む今日このごろの空のかなしき

ほんのりとコスモス咲けばはるばるも清らけき人の思はるるかな

紺青に空晴れわたりしみじみと何か告げたきおもひなりけり

靈　千代

ひそまれる面會室の秋ひかげひとを待つ身のやすけくもなし

鹿の顏追へども逃げぬ鹿の顏この旅びことにさびしかりけり

嫩くさの山むらさきに暮れてゆくしじまのなかに君とわかれき

大根田小夜

ゆるやかに袖を微風にはらませて青葉のもとに歌ひつづけぬ

わがゆかむ一路さびしく絕え絕えに見えてかなしき篝火のかげ

さびしさに一人出て來し逍遙の步ごとに君のこひしかりけり

木暮さゆめ

片こひとあらはに知れてさみしくもかへる夜空に秋をおぼえぬ

久保野清子

秋の日のふとり手さびし土のなかに埋もれはてんその手さびしも

鞆　音

雨ふれば師匠の家の御神燈けぶるがごとく灯影くらかり

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

住吉哀歌

あかしあの身をふるはして病葉をおとすこころもかなしかりけり

木下桂子

ほのぼのと我世は明けぬ太陽のめぐみ親しみふたりあるかな

盡すべき限りをつくすこころだになほわが君にげせぬなりけり

日枝みどり

をちこちの街のさびしき群集のその中にわれもひとりなりけれ

老いまして遠きえにしのわが宿を訪はれぬ夢のごとく淋しき

おもひつめ何時まであるや柘榴葉の光もかげもしづこころなし

日にひかり風になびける柘榴葉のまぢかき窓に一人なげくも

柘榴の葉その實はぢけし柘榴の葉しづかに窓にひかりゐにけり

こひしさに心もえたちうつつなく深夜(しんや)の土をふみにいでつも

ある時は居もゐたまらでごつそりと晝の日なかに緋芥子手折りぬ

ゆふかげに虫さへ鳴ける萩がもと別れかねたるふたりゐるみゆ

わがくらき心にほのと咲きいでし花のやうなる人にこそあれ

あな惜きひとにあるかなさりげなくひと言云ひてはや去(い)にたまふ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

戀愛の自由と本能

山田わか

――鈴木某氏に答ふ――

社會は複雜です。何億萬の人間が皆異つた事情のもとに生れ、異つた狀態のうちに養育され、異つた性格の人となり、そして思ひ〳〵の考を有つて動いて居ます。此の千差萬別な人の行爲を僅か六七頁で論じて見やうとするのは既でに烏滸がましい事です。けれども、大きな複雜な世界に恐れを抱いて唯呆然として居たのでは、きりがありませんから私達は先づ自分の考へる範圍を出來るだけ自分の力に相當する區域に狹めて、そして考へて見ます。そして考へ得たゞけを發表して見ます。發表はするもの丶、名もなき淺薄な一婦人の書いたものを眞面目に讀んで下さる方はあるやなしや誠に疑はしいと思つて居ました。處が計らずも此度鈴木某氏から一應道理ある御非難を得て、もう一度考へる事が出來たのを同氏に感謝致します。

讀んで下さる方に分りいゝやうに此處に同氏の御書面を揭げ、合せて其れに對する御答へを書く事に致します。

『謹曰　靑鞜第四週年紀念號に於て、墮胎に就て、ちよう貴女の說を拜見いたしました。私は次に說はんとする事を除いて貴說に贊意を表するものであります。

「父たり母たる資格を有する迄で抑制云々」と貴女は說かれましたが元來夫婦關係の生ずる根據は戀愛にあるので其の戀愛が自由であり且つ本能の交歡を伴ふものであるならば抑制云々の意義が何所に存立いたしませうか。墮胎とか避姙とかいふものが不自然であるならば既に本能抑制そのものさへも不自然ではありますまいか。人の精神は人の價値の高い所謂でせうが又本能が人の自然性である事は爭はれない事で御座いませう。今貴女の云はれた、下級の人々に就て考へて見るに、敎育の少ない、考へるべく多くの時間を有たない彼等の精神は最も下級な最も本能性に傾き易いものだと思へるでせう。又彼等の戀愛には確たる理想が御座いませうか。今そう云ふ者が共同生活に入つたと假定したら親たる資格なくとも直に本能に陷るでありませう。

貴女の云ふ所は畢竟「事實について論じ事實を忘れた論結を得た」のではありますまいか。

抑制そのものは戀愛の意義を破りは致しませんか、如何に。

敢て本能抑制をなくし、墮胎避姙を否認し而して悲慘なる者の生ずるは「進化」ちよ

う自然的矛盾でもあり又國家社會機關の目的遂行の不完全なるを意味するもので現代としてかゝる悲慘の出生はやむなき事かと存じます。或はそれが社會進步の理由かも知れません。駄文を長々と草し甚だ失禮致しました。

此處に私は自由と云ふ事と本能と云ふ事に就て私の概念を云ふて見ます。人は戀愛の自由、生存の自由を有つて居ます。けれども其れは或る意味に於て、無條件に絕對のものではありません。我々は法律のもとにあつて始めて自由が得られると同じやうに、戀愛の自由も理智の制裁のもとにあつて始めて自由があるのです。法律と自由、理智の制裁と戀愛の自由、これは一見矛盾して居るやうに思へますがそうではありません。

動物界は其の本質に於て本能的で天然のまゝでそして其の程度で完全であるに反して、人間界は理性的で人工的でそして不完全であります。完全である動物界には進步がないのに反して、人間界の不完全なのは、其處に進步の餘地のあるしるしです。動物界と人間界の相違は理智の有無の相違です。絕對の自由をふりまわして居る動物界には進步はありません。自由も亦ありません。人間の理智はそうしては結局損であるから、さしあたり僅な自由を拂つて後に大きな自由を得よと敎へます。そして進步向上の喜びを得よと敎へます。

人間が野蠻狀態から今日迄發達して來たのは此の理智の敎へに、絕對の自由を要求する本能を從へたからです。(便宜上理智と本能を別なもの丶やうに云ふのですが、實は、そう、はつきりと區別の出來るものではりぁません。唯比較的なものです。)人間の本能は固定した動物の本能(とは云へ、動物の今有つて居る居る本能でも、進化論者の說によると、永い間の反射的行爲の結果だそうですが)とは違つて、レファインされて行くものです。動物と大差ないものから、神性に近い迄進化して行くものです。

若い時、本能の命令に從つて行つた事が、後年になつてからは思ひ出すさへも冷汗を流すやうな場合が人には往々あるものですが、其れは其の人の本能が敎化されて行つた證據です。少しも進步して行かない人間はそう云ふ經驗を有たないでせう。

戀愛は自由です。けれども自由に生れた戀愛を生かして行くには其れを養い育て丶行くだけの用意がなければなりません。其の用意のない處に生れた戀愛は丁度石疊の隙間から芽を出した草木と同じて到底長生きをする力がありません。營養をとる事の出來ない新芽は早晚枯死しなければならない運命を有つて居ります。であるから戀愛が眞正な立派なものであればあるだけ、其れをきずづけてはならない、枯死させてはならないから、其の用意をする間、待つのは、本能に計り支配されて居る動物とは異つた理性ある人間のとるべ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

き道です。

私の云ふ『抑制』は云ひ替へれば『待て』と云ふ事なので、今一の幸福を得るために、不自然な手段に心を勞するよりも、待つて十の幸福を得よと云ふのです。貧弱な土地の上に枯死する幼芽を悲しんだりなぞする其のひまに土地を肥して、それから、幼芽を育て花を咲せ實を結ばしむる喜びを得よと云ふのです。

其れは一つの唯理想であつて、此の世智辛い現社會に生きて居つて、そんな悠長な氣持ちになぞなれるものかと云ふ人があるかも知れませんが、併しそう云ふ事を云つて居つて、何時此の現狀を改良する事が出來ますか。こう云ふ社會だから、こう云ふ不完全な社會機關だから止むを得ぬと降參してしまつて、自分の生命の一部である胎兒或は其の胎兒の可能性を殺す人があるとすれば、そう云ふ人は既でに〳〵意氣地のない敗北者です。今の若い人達がそう云ふ弱者であつては、誰が此の不完全な社會機關を改良するでせう。自分が天地に恥ぢざる戀愛の結果生む子供は何物を犧牲に供しても育てる。自分の生命を殺さなければならないやうな社會機關ならば叩き毀はそうと云ふ意氣が多くの若い人の心に起れば其所に始めて、内的にも外的にも、健全な進化が行はれるでせう。

抑制(則ち待つ)と云ふ事は戀愛の意義を破りは致しません。それは戀愛をます〳〵高尚

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なものに致します。今日生れて今日成熟する生命は小さな生命です。生れてから成熟する迄に年月がかゝればかゝる程其れは大きな健全な生命になります。待つ間に枯死するやうな愛なら、其れは本當の意味の愛ではなく、單なる肉慾です。と云つて肉慾を下等視するわけではありません。教養ある人の戀愛にも此の慾は伴ふに違いありません。『けれども、それは、太古に於ける穴居人が岩に彫りつけた彫物のかたちがミケルエンジエロの彫刻物のうちにも現れて居るのと同じ意味である』と現代に於て最も進歩した戀愛觀を有つて居る婦人は申しました。

肉慾が凡てゞある人達の結合は子が邪魔になりませう。けれども精神的の愛が本位の結合は其の愛の結晶である子を要求せずには居られない筈です。のみならず眞正な愛の結合は、自然の結果を避けるやうな手段には不快で堪へられない筈です。第一に其れは自分達を侮辱し神聖な戀愛を汚すものです。

墮胎避姙と本能抑制とを私は同じ性質の不自然なものだとは思ひません。墮胎避姙は將に芽ぐまれやうとする生命或は既に芽ぐまれた生命を破壊するのですが、時を得て居ない本能の要求を抑制する事は、後に健全な生命を造る基なのです。つまり前者は生命の破壊であるに反して後者は生命をたくわへる事になります。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

勿論例外はありますが先づ一般から云ふと、どうも男は戀愛を肉化したがり、女は其れを靈化したがる傾きがあるやうですが私は此處に女の大なる使命を認めるものであります。次の時代を其の胸に抱く責任を有つ女は比較的下等な男の慾を自分等の高尙なレベル迄引き上げねばならぬものだと思ひます。

下級の人達はレファインされて居ないイラショナルな本能に従つて居るから悲慘な生活をひきづッて居るのです。そこで彼等には敎育がない。考へるひまも有たないから、本能性に傾き易いのも無理はない。仕方がないと云ふてあらゆるものに超絶して居る貴重な生命の破壞を許す事が出來るでせうか。思想のある人達が彼等に對し、そう云ふ態度をとつて居たら何時彼等は其の悲慘な狀態から脫する事が出來るでせうか。隨分容易な業ではないには相違ありませんが、彼等の悲慘を救ふには彼等のイラショナルな本能をラショナルに導くより外に方法はないやうに思ひます。先夜米國のス博士の話に『私がシャイアムに居た時、其の地方に流行する劇烈な熱病を癒してやらうとして隨分種々な工夫もし、藥劑も用いて盡力したが思ふやうに効果が現れなかつた。併し今から考へて見ると私の考が足りなかつたのだ。此度私が其處へ行つたら、私は熱病に冒されて居る人々にかゝはるよりも先きに、其の病の根源である不純な飲用水をプューリファイする事につとめるつもりであ

る』と話されましたが實に其の通りです。が云ふは易くしてなか〳〵其れが一朝一夕に思ふやうになるものではありません。と云つて今の間には合はないから不正な事でも不自然な行爲でも肯定してゐゝと云ふ事は不條理です。一ッの理想をたてゝ、たとへ目に見ゆるやうな進歩はなくとも、着々其の方に進んで行かうとするのがラショナルビイングなる我々のとるべき道だと私は信じます。

私は何處迄も、むら氣な本能のために、又不完全な人間がつくつた不完全な社會機關のために、人間以上の力がつくつた、萬物の土基である貴重な生命が殺される事には不贊成を申ます。これが又自然の法則にかなつたラショナルな考へ方だと私は信じます。

三ヶ島葭子氏の論文『私の生活』
五明倭文子氏の小説『最初の家』
右二編は頁數の都合から組置次號廻しとなりました。
餘白で筆者に謝しておきます。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

十月短歌抄

このごろのいちじろきこと何ならむ鏡をみれば顔はしらずも（萬朝報）　與謝野晶子

そびえたちしろき木曾山あふぐにもこの魂のまづしきすがた（潮音）　山田邦子

木曾川の水音にききてききいりてつひに涙のながれけるかな　同

八ヶ岳愈よけだかく落日にそびゆれば汽車は信濃にいりけり　同

赤帽子ふいとかぶりて南洋のはなのおごりをおごりてみたく　同

まめやかにさても巧にものをいふ吾子と泌泌ものいひしかも　同

青白きなれが肌へに日の光まともなればぞたへがたくみゆる　同

旅にして野の遠方にちろちろともゆる焚火はこひしきものを　四賀光子

くれかかる新治(にいはり)小野(をぬ)にともる灯の彌(いや)しじにして遙かなるかも　同

いつの日かまたかへりみむ新治の紫木が丘のゆふぐれのいろ　同

旅つきてかへるゆふべをしみじみと常陸墾原(はりはら)あめふりいでぬ　同

みくさおふる沼尻(ねじり)の水にふる雨を旅のかへりにみらく寂しも　同

汽車にして遠くはるけき道のみゆ雨にぬれゆく道みゆるなり　同

ささおつるつぶてさながら群鳥のいりてさわがぬかの雑木原　若山喜志子

松原のかたかげくらくなるままに茴香は黄ににほひこぼれし　同

ほそみきの赤松原に入日させど奥がはいよよくらくしづけく　同

誰にしもつぐべき事にあらざらむ四方の高嶺に雪ふればさて　同

うまれながらこひし海邊のここにきて猶古里は忘らへぬかも　同

松やまの彼のいただきに海みるときくよりもはや涙おぼゆる　同

わがこゆる青海のかなた故郷の秋かがやかに眼にせまりみゆ（詩歌）　小谷淸子

天つ日の下のあを草さくさくとかられて秋はさみしかりけり　同

入海のなぎさに人をみいでたりわが舟をまつひとみいでたり　川端千枝

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

黒檜嶺（くろびね）にのぼる みちべの白樺のひさ木ひさ木に指ふれゆくも （水甕）　須藤みどり

廊下ゆくひさの足あさ裾さばきほのかに秋のまつはるらしも　同

いくたびかわが心さへ裏ぎりぬ人のこころのなごたのまれむ　井淵はな子

なりもせぬ口笛ふきてこのごろの夕すごすさの たまひにけり　松平みさ子

秋風のさやさ やさなる簾のもさにけふも便をまちたまふらむ　同

快くむすびあげたるけふの髪そさふれてみて 君をしぞおもふ　同

一國の王さなりたるこころもちわれなつかしきこの君をえて　新堀艶子

しみじみと命いさしくなりにけり今宵こひしきこの君をえて　同

うつろなる心の中にちさくしてはた強きものひさつありけり　阪元さち子

君がすむ北の國よりこしさいふ あかき林檎を掌にのせてみる　水町京子

旅にえし友なるためか淋しさのつきまさひたる人さおもひぬ　同

つきぐれのはな點點をちりしける厨のあさのはつあ きのかぜ　同

ひかりやまず水は波うちなみうちてながれゆくなり秋風の中　長岡さみ子

人しれずかくれし罪を身一つになやみつくして秋さなりけり　高橋栞子

汽車の窓縁の木木もあを潮もさびしかりけり 子にはなれきて　小野幸子

秋たちぬ和歌の浦わの歌まくらめぐりてひ さり君をおもはむ （潮音）　南ゆかり

しつさりさぬれたる土 をふむこさもいま慰めの一つなりけり　同

香具山をおりきてこひし一つきの水の つめたさ蠶がひせる家　松平操子

名もしらぬ山奥ふかくまよひきてここに寂しきわれ一人なり　米倉久子

あひがたき夕べはかなしほうづきはわが唇にや ろせなくなる　山田お葉

空をうつし波のあいろのさまざ まにわがのろ船の一路寂しき　鵜本よれ

大日輪のぼりつくせばおはれ又わが寂し さはよみがへりきぬ　同

蜩もかなかな蟬もそれぞれにな きくらしつつあきのかぜふく　世良田優子

豆腐屋は角をまがりてゆき けらしこの秋風にふかろろがみゆ　同

折りにふれて

——日記より——

岡田ゆき

矛盾。此の言は常に私につきまとつて私を苦しめる。自分の心と行爲がまるで矛盾して居る。それは甚だいけない事である。然し矛盾と稱する溝は至る處に横たはつてゐる。そしてやゝもすれば落ち込むのである。此の溝に私は片足でも落したと氣がついたら一時も早く清い水で洗はねばならない。

私は矛盾にとらはれぬやう心がけねばならぬ。

昨夜、床に入つて、ぼんやり考へてゐる時いやに潤んだ星が光つて居る。天空の一端を破れ竹でぴし〳〵とたゝく樣に神樂の太鼓の音が聞える。おうさうだ。今夜は八月十三日だから八幡宮の御祭りなのである。幼い折りに、乳母とよく行つたつけ。

カンテラのあくどい、灯影をうけて顔の輪廓が濃くきはだつてゐる男が咽喉を締められる樣な聲を出して客をよんでゐるのに、木戸錢を渡して、乳母は、私を人込みの小屋に伴れて入り、おどけ者のお揃ひの旗芝居を見せた事もあつた。

歸途、札の辻の氷屋で休むのが例であつた。粗末な匙で氷をつゝつきながら、其の頃札の辻にあつた、電燈會社の大きなアーク燈に澤山、蛾が群らがつてゐるのを、まぢ〳〵と眺めて居たものだ。

幼い時分は總ての、事物について思索する事をしないで只、單に事實として、受け入れるにとゞまつて居た。其の頃から、「何故、自分はかう思ふのか。」などゝと云ふ事に就いて考へつけてゐたら、よかつたらうに。然し幼い人達は野に生へた雜草の樣なもので、心ある人が、其の一本をぬき取つて來て、庭に植へて育てると、美しい花

が咲く樣に、智的な頭を持つた人が敎へ導いて行く必要があると思ふ。そんな幼い日を思ひ出したゝめに、今朝は何時にない神輿を見る氣になつて、行列が聖坂を登る時裏門の處で獨りで見物した。

私は近眼の上に、かなり離れて居たのではつきり見へなかつたが、幼い頃の懷疑的な眼をもつて、心に刻まれて居たものとは、非常に變つたものであつた。

"The tide is out, but it will noon be again."

これは Joaquin Miller が彼の母の死後ある人に語つたものである。Tide とは死をさして居るのである。さあつとよせて來た潮の樣な死（生物の不可抗力。）に老ひたる母を伴れ去られた。彼の其の時の心はどんなであつたらうか。

此言葉を靜かに、くちづさむ時、私の心に、偉大なミラーが、ダイアモンド、ヒルの高丘に座して、血の滴りの樣なポツピイを眺めながら、瞑想にふける樣が描がれる

そして、二度、三度とくりかへして居る内に、何とも云へぬ力が、私の心をぐつと捉へる樣に感じられる。それはたしかに、異常な彼の人格の魅力にほかならない。と考へる。

考へてみれば彼の言にたがへず再び寄せた潮は、彼を伴れ去つたのである。

黒青い空に明日の暑さを暗示して居る樣に星が輝いてゐる夜、TさんとYさんが遊びに來られた。私の部屋の南向きの椽に近く座つて三人で話した。なかに次の樣な事も語りあつた。

T。ひどい、「尼殺し」の犯人がつかまつてれ。

私。大米龍雲でせう。ひどい奴だわ。けれどありや普通ぢやないわれ。病的なんですよ。

Y。さうれ。病的かも知れないわれ。

T。何のために、あれ程の事をしたのでせう。

Y。臆測すればどんなにでも考へられてよ。

私。さう。私はね、かう思ふの。尼さんてものは、裏面に種々の事があつて、所謂女と少しも變つた處はないのに、いやにとり澄ました樣子をして、お高くとまつてゐるから、龍雲が一種妙な衝動にかられて、彼等を普通の女の位置迄引摺り下して一般の女に對して行ふ罪を犯して快感を覺えて居たのではないでせうか。それが尼さんに對して行はれたと思ふと。何とも云へない皮肉な氣持ちがしますよ。

T。そりや面白い考へだわね。けれど恐らく彼はそんな考へはなかつたでせうよ。彼は坊主だつたゝめに、尼さんの弱點をよく知つて居るのよ。その上、内部にも出入しつけてゐたので、あんな事をしたのだと私は思ひますわ。

Y。貴女達の考へが兩方とも、さうだつたとも、さうでなかつたとも云へてよ。どうせ臆測すると云ふ事は不可解を意味するのであつて、眞實はやつぱりやつた當人でなきや、わかりつこないと、思ふの。

T。さうねえ。

三人が三人とも、皆ちがつた事を考へて居る樣に默つてしまつた。

星は相變らず輝いて居る。二三日前に目黑華壇から貰つて來た、ゑんまこほろぎが三人の間にはびこる沈默をかゝり合せる樣に鳴き出した。何となく秋らしい心地がする。

（大正四、九、六）

智慧子夫人の死

生田花世

この宇宙には千種萬樣の音響があり、光線があり、色彩があつても、人間の官能が僅かにその一部しか受け入れる事が出來ないものとすれば、最低と、最高とに對して人間の官能が全く盲目であり聾であるとすれば、また私たちの意識も、至高者、至清者に對して必ずや盲目であり、聾であるであらう事に疑をいれる餘地はないのである。そのため豫言者はその村人に認められず、よき女は人に認められずして、默つて此の世を退いて行つて了ふ。

白い薔薇の花輪が七つばかりそこには重ねかけられてあつた。白木の寢棺に近づいて、私は懷かしい人の遺體に最後の別れを告げようとその上部に嵌められた方形のガラスの上に眼を止めた時、嗚呼！ 何たる驚異であつたであらう！ 私は身體が竦み、胸のあたりの血の高く鳴るのを感じつつ、おもはず顏の赤らむのを覺えるのであつた。それは如何に壯嚴なる美貌であつたらう！ 死の蒼白はほんのりとした匂ひに和らげられ 人にすぐれて輪廓の大きかつた顏は、死の威嚴を盛る二つとはない立派さに輝いてゐた。表情を示す

にいつも生々としてゐた双眼はかたく閉ぢられて靜かに線となつてゐた。鼓動する胸を制しながら、この美しい死顔に無限の哀別を覺えながら、しかも一道の明るさを感じながら私はやがてそこを去らねばならなかつた。けれども私は家の裏の井戸の方にと出て行つて懐から紙を取り出し、鉛筆を押し當てつゝ、瞬間の心の驚異を記錄しようとしたのであつた。

　　われ今御身にもの言はん。
　　この心にまつはれるもののすべてを振ひすて、
　　ただひたすらに御身を凝視して、
　　わが心をば言葉とせん。

故人に對する盈太郎氏の詩集「凝視」はまことに嚴かなる涙痕によつて彩られてゐる。私は一度となく二度となく、三度となくそれを讀んで暗涙に眼が曇つて行くのである。

私はすつかり盲目(めくら)であつた。私の耳は聾(らう)してゐた。私にはお智慧さんのあの「默つた生活」が當時少しも分らなかつたのである。私は何故、お智慧さんはあんなに默つてゐるのであらうと思つた事さへもなかつた。お智慧さんは私なんか駄目でございますわと云つて「穏かに笑顔をするのが癖であつた。文學者の妻になんぞなるものではございませんわとお

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

智慧さんは云ふのであつた。家を持つたら私の事を思ひ出すでせうね、とお智慧さんの云つた聲が私の耳には時々よみがへるのである。

今私はかうした文士の妻となり一歩一歩お智慧さんの生活にと私の生活が類似してゆくのである。そして私には日に日にお智慧さんの生活に對する尊敬の念が增して來る。

智慧子夫人の死に至るまで貫かれたる愛のいとなみが、愚かな私に限りもない敎訓をあたへてくれる。

私逹の過去は
互に肉迫し相搏つた、
私のからだに生えて居るとげが
御身の全身を刺した。

とげがいくら身體を刺しても、血潮が流れつゝも、彼女は愛する夫を永遠にと默つて抱いてゐたのではないか。本當にあの生活はえらい生活であつたと思ふ。

戰禍

齋賀琴

人間の歴史は戰爭の連續であると申します、事實左樣でも御座いませう、人智の發達しない太古のその頃から科學文明の著しい進步を來した今日に及びますまで、幾代幾世紀の間、人類は互ひに血を流し、虐殺し、侵略して參つたので御座います。昔を野蠻と罵り、今日を文明と誇りますものの、その實今日の文明は野蠻だと云ふ昔の虐殺、侵略を一層甚しくするための手段として用ゐられて居ります。勿論これは一面から見た話で御座いますが、併し現在世界の先進國と呼ばれる國々が互ひに干戈を交ふる事一年餘、いつと云ふ平和の見込みもつきかねます今日では、戰爭の殘酷さと、直接、間接に及ぼす災害の莫大な事を考へますと、同時に所謂文明の恩澤とか科學の貢獻とか申すことを疑りたくなつて參ります。恐ろしい戰爭の慘禍は只に幾多の貴い生靈を犧牲にし、その白骨を風雨に曝すばかりではなく、殘された人々の上に負ひ難い苦痛を授けます。一國にとりましても勝敗何れにかゝはらず、損害を齎らすもので御座います。何故に人類は多額の費用と時と知識とを無益にして徒らな殺生に耽るのでせうか!

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人間本來の野性が血を流す事を喜ぶために永久に戰爭が存在するので御座いませうか、眞に人類が向上し、進步したならばこんな馬鹿げた慘事は消滅するものでせうか。それとも戰爭は人間生活の秩序を保つための一手段として神に依て行はれるものでせうか、それとしては餘りに殘忍な事實ではありますまいか。

私は只今戰爭の議論を致そうとは思ひません、實は私自身に可否の理由がはつきりしないので御座います、しかとした考へを言ひ張るだけの深い研究もないので御座います、只私は女性として——殊に女の中でも氣の弱い女としてなるべくならば戰爭を免れたいと願ひます、否絕對になくて欲しいと思ひます。自分が從軍する事は愚か、自分に近しい人々に——惹いては人類一同に——戰爭の禍ひを浴びせたくないと思ひます。

考へても御覽なさいまし、自分の父や夫や子供が地雷火の上に飛行器の下に、危險な瞬間を過す樣を、砲彈の煙の眞暗な中に突貫して行く有樣を、傷いて倒れた塹濠の中に二日も三日も苦しんだあげくたつた一人天を睨んで死んで行くその心持を。

誰で御座いましたか「もし婦人が戰場に立つたらば戰爭は止むであらう、婦人は戰爭の慘禍を見るに忍びない」と申しましたがまつたく左樣で御座いませう、慈悲と愛とを生命とする婦人に何で人が殺されませうか、母たる資格のある婦人は決して戰陣に立つて血を

見る事は出來まいと存じます。

理屈は云はないと申しました、只私は先年日本と露西亞が戰つて居りましたあの頃に私の郷里で起つた事をお話したいので御座います。それはその當時のありふれた事かもしれません、ありふれた事だけに猶一層注意せねばならぬので御座います、戰爭に依て起された悲劇の一つ――とでも申しませうか。

私の故郷――戶數二千戶に足らぬ片田舍の小さな町からも多くの人が軍籍に居ました、そして戰爭が始められると共に續々出征の動員令を授けられました、その頃小學校に居ました私はよく先生に連れられて、出征の兵士を見送りに町はづれまで行つた事を昨日のやうに思ひます、きらびやかな旗を風になびかして、樂隊なんぞではやし立てゝ、黑紋付の人が大勢、赤い顏をしてついて來ます。

「何々君萬歲！」

と旗をふり立てゝ呼びますと生徒は一齊に手を擧げて同じことを聲一杯くり返して叫びます、人身御供にあがる、當の出征軍人はドキマギしたやうな、困つたやうな、讃め立てられて嬉しいやうな面地でお辭儀を幾つも〳〵致します、そして生徒や町の人などに別れを告げて、その屬する聯隊へと向ふので御座いました。その時私は田圃の向ふへだん〳〵小

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さくなつて行く人の後影を見て、子供心にも何となくうら寂しい思ひに打たれたので御座います。

私がお話し致そうと思ひますその主人公はかうして町はづれまで送られて、萬歳を云はれて出征したのではありません、現役の務が終らない中に戰爭が始まりましたので、眼前に迫つた除隊の樂みも仇となつて、隊からすぐ戰地へ參つたので御座います。

それは私の祖母の實家で御座いました、隣村との堺の養老川と云ふ小川のそばに家を建てゝ百姓をして居ました、町にも——私の家のすぐ近所でした——古びた家があつて、兩方にゆきゝをするのでした。

老夫婦——私は叔父叔母と呼んで居りました——の子供は二人あつて、どうもあまり評判がよくありませんでしたが、二人とも兵隊にとられて二人とも戰に行つたので御座います。なんでも野戰砲兵とか云ふ事でした、雲つくばかりの背の高い、がんじやうな人たちだつたと覺えて居ます。

二人の息子を戰爭にやられた親の心！あの當時の叔父叔母の元氣のない、生きてるか死んでるか分らないやうな顏付を思ふと今でも私はぞつとします、人の手前を考へてか、口ではあんまり申しませんでしたが、それだけ一層心の中はたまらなかつたらうと思ひます。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

皆が戰爭熱に浮かされて、氣違ひのやうに騷いでる中に、寢ても覺めても案じるのは自分の息子の事ばかり、勝つても敗けても、只息子さへ助かつたらと思ふのが果して、無理で御座いませうか。

次男の方は幸ひに獨り身でしたけれど、長男は兵役につく一年前に近在から嫁を迎へて居ました、昔からの親類だそうで、まだ十六の少女でしたが人形のやうに、お祭りに招ばれでもしたつもりで、輿入れしたので御座いませう。

私はこの若い何にも知らない花嫁を氣の毒に思ひますと同時にその傷ましい運命を怪しまずに居られません。二十に足らない若い妻は夫の留守に生れた女の子と、老耄した――忘れましたが叔父叔母の父がまだ生きて居りました――舅の世話をしながら、町の家を守つて居たので御座います、日中でも陽のさゝない、陰氣な、椽の低い古い家を私はよく覺えて居ます。

その舅は永年中風を患つて精神も餘程違つて居ました、殊に孫達が出征してからは、よくあらぬ事を口走つて、若い嫁――おかつさんを困らしたものださうです。

「おかつ、おかつ、大變だぞ、露助が攻めて來たぞ」そんな事を叫びながら夜中に家中駈けまわつて、何とすかしてもきかない事が毎晩の事だつたそうです。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「可哀相に、おかつさんも苦勞をする」

近所の人は左樣云つて居ました、いつも束ね髮で盲目縞の筒つぽを着て、お襁褓を洗つたり、裏の畑を耕したりして居た、いぢらしいおかつさんの姿を私もちよい〳〵見かけたものでした。小じんまりとした内氣そうな人で割合に言葉づかひも整つて居ました。自分の家より外の世界を一寸も知らないで育つたおかつさんは一を以て十を推すと云ふ銳敏な感能はありませんでしたが、何處か子供のやうな初々しさが見えて、可愛らしい人で御座いました。川の傍の舅姑の家へもよく手傳ひに行く樣子でした。

その時分、戰爭の經過がだん〳〵進んで行くと共に、愛國心、敵愾心を皷舞させる、種んな方法が行はれました、新聞は盛に書き立てます、誇張的な文字の大きな活字が每日の新聞に絕えません、まだ生死の程もハッキリしない者を名譽の戰死者、光榮ある犧牲者なぞ〻無暗に稱賛してしまひます。冷靜に考へてみたらずいぶん滑稽な間違ひもあつたやうで御座いますが、萬人が萬人、戰爭熱に醉つて病的になつてゐる頭では、そんな事に氣はつきません、來る日も〳〵號外の來る事ばかり樂しみにして、仕事も何もまるつきし手につかない有樣でした。號外の鈴らしい音が聞える、ともう大根を掘つて居た者も麥を打つて居た者も誰も彼もが洗足のまんま、一目散に驅け出して一刻も早くと我先に號外の紙

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

きれを奪ひます「我〇軍大捷至る處敵なし」と云ふ類ひの活字でも見えますれば一齊に歡呼の聲をあげます。本當に萬人が萬人無邪氣な子供のやうにはしやいだので御座います。

小學校でも「戰爭」と云ふ事について特別な注意を以て敎へたので御座います。柔かい純粹な小い國民の頭へ「大和魂」と云ふ事を盛に吹き込まれ、「國體」「皇室」を尊重するやうに、と云ふ訓戒が激しく注入されたので御座います。勿論それは當局からの訓令もあつた事でせうけれど、それよりもむしろ、國民の一人である小學校の敎師には遺傳的にこの熱狂的な大和魂の血が流れて居たからで御座いませう。

生徒はよく戰死者の葬式に參りました、紅白黃、さまざまな旗が寂しく風にひるがへつて、曇り空の今にも降り出しそうな夕暮の、あの悲しい傷ましい葬式は本當に不快な思ひでした。きまりきつた町長の吊辭、譯の分らない坊さんのお經、一時間も二時間もお寺の庭に立たせられたものでした。

私は忘れられない一つの記憶が御座います、はじめは首府の東京で行はれた祝捷會と云ふ御祝が全國に流行り出しまして、私の町でもやつぱりそれを實行する事になりました。近在の村々に機先を越されてちと出し遲れの氣味はありましたが。

町中の人の頭が祝捷會の事より外何にも考へられません、準備の一週間ばかりと云ふも

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の商人は仕入れを休み、百姓は野良を休んで飾り物の製作に夢中でした、私の家は商家で御座いましたが店の者はみんなして萬國旗を染めるために苦心慘憺たるものでした。叔父が英語の辭書の卷頭にある萬國旗の繪を手本に、よく丹念に染めあげたものでした。

當日には町の重だつた處――學校の前とか倶樂部の前とかお寺の前とかに無細工なアーチを立てゝその旗を四方へつるします、紅白だんだらの布を卷きつけた柱が縱橫に組み合はされて軒には「奉祝」と書いた提灯が家並にかけられます、そして商賣家の店先には人形の軍人や軍艦や、城砦などがこれ見よがしに飾られます、私はどうしたものかその少し前から風邪を引いて、熱がありましたので、晝間の旗行列に出る事も出來ませんでした。戸外のざわめく樣子が耳へはいつて、とてもじつとおとなしく床になんぞ居られませんのですけれど、母に叱かれ／＼してやう／＼引込んで居りました。

「一寸位いゝでせう、おぶさつて行けば」

夜になると堪らなくてとう／＼かう云つてせがみました。母もよく／＼可哀想に思つたと見えまして、負さつてならいいと申すので御座いました。寢卷の上に羽織を引かけて店の七間の方へ出ますともう戸外はまぶしいやうに明るくて大勢の人の騷ぎ聲がします、私も何となく興味をそゝられまして、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「早くよう」

と女中を急ぎ立て乍らおぶさらうとしますと——

　覺えず私はギョッとしたので御座います、土間の隅のうす暗い處の腰かけに蹲つて居る小さな姿が——それはおかつさんなのでした。

「あら！」

と云ふと同時に女中も氣がついたと見えまして、

「姉さん、姉さん、」

と呼びかけます、

「どうしたの、あんた、見に行かない？」

と構はずに大聲で云ふ私の言葉が聞えましたやうで、はつとふりむいて見ましたが、燈火を受けたその頰にありありと見えましたのはたしかに涙のあとなのでした。子供心にも氣のつかない惡い事をしたと思ひまして、氣の毒なやうな、氣まりの惡いやうな、何ともしかねてもじもじしますと、同じ樣に當惑した女中がそれでも突差に

「姉さん、一緒に行きませんか、町へ、——如何で御座んす、戰地から便りは——」

「ちつとも——ちつとも來ないんですよ」

やう〳〵聞きとれる程の低い聲で云ふかと思ふと立ち上つて、しひて笑ひながら、
「お桂ちやん、お風邪はよう御座んすか、赤ちやんのやうですね、おんぶなんぞして」
「えゝ」
と私も笑ひましたが、わざと子供らしい調子で、無理に女中をせき立てゝ屋外へ出てしまひました。

丁度提灯行列の人々が上町からおしかける處でせまい道路は一杯に老若男女がつめかけて居ます、三河屋と云ふ呉服屋の涼み臺の上へ下して貰つて、私と女中は行列の通るのを待つて居ました。

勇ましい軍歌の聲を先觸れに男生徒が足袋はだしで進んで來ます、四五名の敎師が同じ樣にほゝづき提灯を高くあげて「討てや懲らせや」を叫びます、背後からは町の人々がめい〳〵思ひ〳〵なりで、中には千鳥足ひよろめき乍ら無暗に「萬歲々々」とどなるものや、とりとめもない事を口走る者もあります。

行列が通つてしまつたあとは寂然（ひつそり）して町の明るいのが殊更に淋しいやうに思はれます。女中は疲勞れたのか涼み臺へぺつとり腰をすゑて、なか〳〵負つてくれません、私も何となく變な心持になつて默つて空をみつめて居ました。する中に後ろの方で話し聲がするの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

です。

「内地ぢやこんなに騒いでるがなあ、戰爭あしてる者の身になつてみろ、祝捷會どころぢや無えんだ」

びつくりしてそつとふりかへりますと町では誰知らぬ者のない、あの不具の爺なのでした。日清戰爭の時に片腕を失つたと云ふあの意地つ張りの老兵でした。

「左樣だらうねえ、お爺さん、お前さんなんざ身に覺えがあるからねえ、私なんぞも息子の事を考へると、こんなお祭りなんか、本當にいま〳〵しくなつて來るよ」かう云つて調子を合はせますのは一人息子を召集された近所の疊屋のおかみさんでした。

「今夜一晩の中に何千つて人が死ぬか分ん無えだ、樹も草も無え廣つ原によ、血だらけになつてゴロ〳〵して、呼んだつて、呻吟つたつて誰も來てくれるぢやなし末期の水も飲め無えで、もがき死に死んぢまふんだ、なあおかみさん、自分の息子や兄弟がそんな樣だと考えたら、こんな馬鹿騒ぎが出來るかい！たらふく飲みやあがつて、擧國一致も無えもんだ、それよりやあ、國のためだ。鞋でも造るがいゝ！」

お爺さんの聲は段々高く銳くなつて、今にも打つてかゝりそうな氣合なので、私は何だか恐くなつて來ました。

「歸らうよ、ね、お母さんが待つてるから」

さゝやく樣に女中を促して、もう見殘した飾物はそのまゝに歸つて來たので御座います。その晩の記憶の中にあの傷ましいおかつさんの姿と、激昂したお爺さんの聲とだけはいつまでも忘れられぬので御座います。明るい灯の中の暗い心が鋭く幼ない心に刺し込まれたので御座いました。

さておかつさんは――その後のおかつさんの話は世にもあはれなもので御座います。身に引受けて看病した老舅はとう〳〵戰爭中に死にました、亡くなる一週間ばかり前は人の見界ひも失せてしまつて、

「あゝ露助が露助が――國次(息子の名)が――殺される、殺される――」

とばかり云ひつゞけて箒をかついて馳け廻つたり、家中に水を撒くやら、手當り次第に物を投げるやらして、隨分困つたさうでしたがそうしてとう〳〵暴れ〳〵て死にました。お葬式の時は私も白い着物を着て見送つたやうに覺えて居ます。

おかつさんはやはり町の家に今度は子供と二人ぎりで暮しました、時に姑が見まつてはくれましたけれど夜は屹度歸つてしまひます。たゞつ廣い陰氣な家に子供相手に夜を更かすのがどんなに切なかつたでせう。

戰爭はなか／＼止みません、一月二月と月日は人を僞はるやうに過ぎ去つてしまひます。祝捷會は二度も三度も行はれます、旅順が落ちて、遼陽、沙河、奉天、と味方の軍勢は到る處大勝利の報が聞えます、けれど出征した者は一人として歸つてまゐりません、否今日は何處の息子が死んだと云ふ報せが來た、彼處では葬式だそうだ、と云ふやうな恐ろしい噂ばかり聞えます、そして一層怖ろしい事は――なほその上に召集令が下るので御座います。豫備も後備も免れた、年老つた人までが撰出されるので御座います。

戰爭はいつ止むだらう、――左樣云ふ疑問が人々めい／＼の心に暗然と浮んでまゐります、そして只絶望の嘆息を人しれず洩らすのみで御座いました。

おかつさんの若い心はどんなにか夫の凱旋を待ちあぐねた事でせう、冷淡な舅姑の心が悲しかつた事でせう。併しそれを一言でも口にするおかつさんではありません――そしておかつさんはつひに氣が狂つたので御座います。

最初は發作的に頭腦が亂れるばかりでしたがだん／＼病勢が進行して、平常の意識に歸る事が少しもなくなつてまゐりました。幾度か自殺を計りましたのを近所の人々から救はれました。實家からは心配して看護人をよこします、子供はお祖母さんに世話をして貰ふ――と云ふ事になつて、川の傍の家へやられました。

そうしておかつさんは町の家に看護人と二人で居たので御座います。お醫者は過度のヒステリイだと申すきりで、何の手當もしてくれません「一氣違ひ」と云ふ事に怖氣を起して肉親の者さへよりつきません。狂ひに狂ひ悶えに悶えた果におかつさんはとう／＼變死したので御座います、看護人の目を盗んで井戸へ投じたので御座います。

「可哀想に、よくお念佛をしてあげなさい」

お燒香をする時に母はかう申しました、可愛らしいおきぬちやんがお祖母さんに手を引かれて笑つてるのを見ると私も涙がこぼれました、そして何とはなしに母の袂にすがりついたので御座います。

おかつさんは死にました、それから二三月經ちますと講和の噂が立て、やがてあのポウツマス條約が結ばれていよ／＼休戰となりました、そしておかつさんの夫――國次さんも目出度く凱旋したので御座います。

歡迎の日、大勢の迎ひ人にとり卷かれ乍ら、町へはいる時の國次さんはどんな心でしたでせう。急造りの凱旋門の下に立つて私は破れた軍服を着けたその姿を見ました、滿州の風雨に曝されてやつれはてたその顏を見ました。そして「あゝおかつさんが居たならば！」と心の底から熱い涙が湧き出たので御座います。

まだ子供だつた私はこみ入つた內輪の事情を何にも存じませんでした、聞く折もありませんでした。大人の心持もよく分りませんでした。けれどこのあとの國次さんの家が如何なるだらうかは幾らか氣になる事でした、そして、十才にもならない母なし子のおきぬさんがいぢらしくて堪りませんでした。

其後一年ばかりたつて、おきぬさんには新らしいお母さんが來ました、やつぱり近在の、これも親類からだそうでした。そしておきぬさんは叔父さん――國次さんの弟――と二人で町の家に住んで、お祖父さんお祖母さん、とお父さんと新しいお母さんは川の家に住ひました、それはおきぬさんが學校へ通學する便宜上定められた事でした。

やがておきぬさんには弟と妹が生れました、けれどその子供達は大きくなつても川の家から離れませんでした、おきぬさんは相變らず陰氣な家でその頃流行つた內職のまようぢ細工なんかして居ました。そして成人してまゐりました。

ついこの頃そのおきぬさんが死んだので御座います。丈夫な、殺しても死なぬやうながんじやうな子で御座いましたが、急に十日ばかり患つて苦しみぬいて死んだそうで御座います。

何と云ふ可哀相な子だらう。私は左樣思つて胸が一杯になりました。いつも寂しさうな

顏をしてロク〳〵物を云つた事もない、いぢけた子供で御座いました、東京へまゐりましてから私は歸省するたんびに簪のやうなものをお土産にして喜ばせてやりましたが、今年はもうそんな樂しみもなくなつたので御座います。丁度新盆で御座いますから、好きだつたお菓子でも供へてやりませうかしら。

十年前の戰爭の名殘りが今日まで續いたので御座います、夫が出征の留守中に狂ひ死んだ若い妻、その形見の子の薄幸な運命を考へますと、あの大きな戰爭の影響の極めて小さな一部分さへも誠に恐れられるので御座います。そして私は國家と國家との關係を離れた、自由な大きな美しい人間の世界を、まぼろしのやうに思ひ浮べるので御座います。「汝等互ひに愛せよ」と敎へた基督の言葉が懷かしくなつてまゐります。

何故人は互ひの幸福をはからぬのか？左樣思つて、悲しむので御座います。

――八月四日――

斷章

野枝

○

何をしても何を見ても一つ〳〵それを考へ批判せずにはゐられない自分が時々煩さくなつて來ることがある。見まはすと今私たちの周圍にはそのやうな複雜な内的生活をもつてゐるやうな人は見當らない。そして皆呑氣に樂しさうに働いてゐる。

お仲さん――私のゐる家の直ぐ前の礦泉場の女中の名――は何時でも呑氣で快活な人だ何時でも何の苦勞もない樂しい日を送つてゐるやうだ。私はもう丸三月毎日彼女の顏を見ない日とてはない位だけれども且つて一度もその不快な顏付を見たことがない。どうしてあゝしてゐられるのか知らと思ふ位だ。彼女は大ぜいの人の中にゐて忙しい仕事をしてゐる。そしておなじ雇人仲間の者からさへつけ〳〵口をきかれたりずゐぶんつらさうなことも幾度も見かける。けれど彼女は何時でも旦々としたおなじ調子で物を云ひおなじ態度で仕事を續けてゐる。しかも何かつけ〳〵小言らしい口ぶりを洩らされても「ウムさうかさうか」と云つたやうな調子で私たちの目から見てゐるとお仲さんの態度は小言を云ふ位置

の人よりもずつとたちまさつたやうに見えて、私は何時でも感心する。彼女は無意識の間に何時でも相手のコセ／＼した感情からはるかにぬきんでゝ遠くから小言でも惡口でも受けてゐる。他人に使はれてゐると云ふやうな卑劣な根性はお仲さんにはなさゝうだ。何時でもゆう／＼として自分の仕事をしてゐる。體もいゝ體をしてゐる。どんな嵐の日にどんな處に使に出されてもいやさうな顏をしてゐない。何時でもおなじ調子で鼻歌かなんかでゆつくり大きな體を運んでゆく。恐らくこの人は今私たちが此處らで接する人では一番氣持のいゝ人の一人であらう。私はお仲さんを見てゐるとつく／＼羨ましくなつて來る。お仲さんが私たちの家の前を通る度びに私たちは顏見合はせて微笑する。

「呑氣さうですね」と私が云へば、

「英雄だね」と後姿を見送りながら良人が答へる。私たちは本當にたまらなくお仲さんののびやかな心持が欲しくなつて來るのだ。

それから矢張り直ぐ傍の貯炭場に働いてゐる仲仕たち――仲仕と云へば非常に荒くれた人たちを想像せずにはゐられないけれど此處に働いてゐるのはこの土地の人たちばかりでそんなに素情の惡いやうな人たちは少しもない。その人たちは皆めい／＼のちやんとした家庭をもつてゐてぢみちな暮しをしてゐる人たちばかりだ。そしてその中には女もまぢつ

てゐる。その人たちのうごかすショベルの音が絶え間なく私の家の中まで聞こえて來ます。それは夜私たちが眠つてゐる間も續けられて居る。私たちが何時目をさまして見てもその炭をすくふ音がしんとした空氣を動かして居る。私たちにはどうしてさうも働けるのかと不思議に思はれる程だ。二十分間位ひに炭車が小さな機關車に引かれて二輛三輛づゝ一ぱいに掘り出されたばかりの石炭をつんでは持つて來る。それをうつしておいては此度は其處の棧橋についてゐる船の中にその石炭をかつぎ込むのが彼の人達の仕事なのだ。私たちの目からはそれは〳〵過激すぎる程の勞働だ。けれども彼の人達はそれを樂しさうにしてゐる。ショベルの姦しい音にまぢつてその人たちの自由なのびやかな笑聲や話聲が絶え間もなく聞えて來る。お天氣のいゝ日などはわけても長閑かな氣持ちで眺められる。いろんな噂ばなしがつぎ〳〵に一人々々の口から洩れてゆく。さうして皆が單純な感激をもつて一つ〳〵にそのうはさのかはる度にちがつたそれ〳〵の興味に引き込まれてゆく。さうして休みなく働いてゐる。話も亦休みなく流れてゐる。私は何時でも青い海と眞黑な石炭の山を背景にして一生懸命に働きながら何の苦悶もなささうに他人のうはさに沒頭しながら其日々々を送つてゐる人々を見る度びに如何なる差異が安易な彼の人たちの生活と苦澁のの多いもがいてゐるやうな自分たちの生活との間にあるかを考へずにはゐられない。

○

小さな眠つたやうな村にも矢張り事件と云ふやうな物が怠屈な人々にいゝ話柄を與へる。

私たちが此處へ着くと間もなくの事であつた。長年肥前の山中にゐて木挽をしてゐた七十にあまる老人が廿あまりも年のちがつたその妻君と私の村はづれに來て住んでゐる。その老人は長年つましい生活をして千圓に近い金をためてその金を樂しみに抱いて生きてゐたのらしい。處がその妻君と云ふ婆さんが何を思つたかその金をみんな、そつくり出して石とつめかへて持ち逃げをしてしまつた。氣の毒な老人は、氣を脫かして泣いて死を願ふ位に泣みぢめな境遇におかれた。人々はこの老人に同情して手を分けて老婆の行衛をさがしたが皆目わからない。「おぢいさんが可愛想だ」とは皆が皆思はぬ人はなかつたであらうがどうすることも出來ない。四五日もすると人々はもうあんまりその話をしなくなつた。それでも氣の毒な老人にとつてはこれは實に「いのち」にも關する重大事件なのだ。私たちはその話をきいたときに先づその千圓と云ふ大金が無責任な人々の頭で考へても可なりな多額な金であるのに、毎日々々老人が何十年と云ふ間かゝつてあの大鋸をかゝへては僅かに得る金の中をさいてためた金である。老人にとつては他からの同感よりも幾倍幾十倍か

も尊いものでなくてはならないと思ふと涙ぐましい程老人が可愛想になつた。

他人は漸々忘れかけて來る頃になつても老人の涙はかはきはしなかつたであらう。處が十日あまりもすぎた頃に或夜ひよつくり老婆はその金を背負つたまゝ歸つて來た。人々は吃驚した。老人はどんなに安神したであらう。けれども誰にでも不思議に思はれるのは老婆の心中である。彼女は持ち出す時には勿論それを自分ひとりのものにするつもりであつたのであらう。併し一たん出て人目をさけながらその大金を――それは悉く現金であつたさうだ――背負つて歩くと云ふ事を確實に自分で考へたとき彼の女は種々な恐怖で一杯になつた。併し彼女は出かける間際までのいろ／＼な計畫やまたは手段、それから後のさはぎなどのことを考へると出來る丈けその恐怖と爭ひ通したのらしい。しかも彼女はその背負つてゐる金をどうしても使用することも出來ないやうなはめになつて來たと思つたときにとう／＼その抵抗に負けて仕舞つたのだ。それは極めて自然な心持であるに相違ない。私はけれども彼女が出かけるまでの周到な用意と手段を聞いて想像したのとはちがつて案外たやすく抵抗にまけた意久地のなさを不思議に思ふ。けれども一方から考へるとそれは極めて當然なことでもある。何故と云ふに彼女に實際それ程の大金の必要があつたか？と云へば決してなかつた。今切に欲しい何の理由もない。たゞ漠然とした欲に動かされて發作的

に持ち出したい云ふ一心になつて兎に角持ち出す迄の計畫は綿密にやつておいたが彼女はそれから先は考へなかつた。持ち出すと云ふこと丈けで彼女はもう自分のものにしたつもりであつた。それから先きのことはさまで考へなければならないやうな氣もしなかつたのらしい。それは彼女が必要にせまられてゐなかつたせいでもあらうか。彼女の目的は持ち出すと云ふこと丈けであつたのだから。若し反對に何か目的があつてその千圓の金がなくては生きてはゐられないと云ふやうな切に〳〵欲しい場合には持ち出す位が問題ではなくはやくその金を役立たせると云ふ事の爲めに全力を傾けるであらう。そしてそれは恐怖を長くつゞけて持ちこたへてゐるやうな餘裕を持つことは出來ない程迫つた氣になるであらう。金は消費する時に丈けしかそれ自身の價値はないものだ。消費の方法を知らないものにとつてはこれは明かに一つの重荷でなくてはならない。金を使ふ爲めに持ち出すのならば徹底した意味があるけれども、漫然と使ひ道のない寶を自分が持つより他人が持ては一層有益に使はれると云ふことを知りつゝ背負つてゐることはこれはたしかに恐ろしいことである。厄介な荷だと云はれなければならない。しかもその有がた味を知つてゐる者程恐怖はひどいに相違はない。彼女はそれ程深くは考へなかつた。「持ち出しさへすれば」と思つて出たけれども彼女は自分にその大金を保つ力のないことを知つたのだ。そしてとうと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

うそれを再びもとの場所に迄持つてかへつて來た。老人に幾日かの間はげしい苦痛を與へたと云ふ點から見れば老婆の行爲は全くよくはない。惡むべきだ。併し一方から見れば自分でよく〳〵しつかりした根據もなしに大事を決行したのは一寸した欲望の發作である。彼女がその爲めに自分もまた老人とはちがつた心持ちでどの位大きな苦痛と戰つたかしれない。そして彼女は本當にいゝ經驗をしたことになるのだ。そして老人とは同じ程度に矢張り苦しんだに違ひない。すればそれですべてが償はれて仕舞つたことになる。あの人たちはそれでもうおさまつたのだ。老婆もまた可愛想な小さな善人だ。老人もさうだ。

私はその事のあつた暫く後でその老人夫婦が私たちの家の直ぐ前の湯に這入りに來てのかへりに二人で棧橋を往復して船の中に石炭をかつぎ込んでゐる仲仕たちの目ざましい勞働をボンヤリ眺めてすべてを忘れてゐるらしい姿を見かけたときにそんな理屈を考へてゐた。

○

「Sさんが子供を生んだ。」と皆が物珍らしさうに話をしてゐる。Sとはこの村の東のはづれの山の根に小屋の中に住んでゐる女の名である。

「誰の子だらう」と云ふ者がある。それはSは父親と二人で住んでゐるからだ。彼女はも

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とは相當にチャンとした家に住んでゐた。もう三十をこした女だ。私が子供の時分私たちの家のある海岸からすこし山の方にはいつたAと云ふ處にその女はゐた。そして私たちはたしかに氣狂とか狐つきとか云つてゐた。其後私が時たま歸郷するやうになつて私たちの村の中に菓子屋などをはじめて氣狂はなをつてゐた。けれども矢張りうす氣味のわるい氣狂めいた處は失せなかつた。此度かへつて見ると彼女はとう〳〵小屋の中にまで起臥するやうになつたらしい。私は直ぐとあの小さなこはゞつたやうな感のする黄色い顏を思ひ出した。私も矢張り他の人のやうに、

「誰の子だらう？」と云ふ疑問を眞先きに持つた。そして始めその問を出した時まで私のこの心持には他の人々と同樣にふまじめな好奇心が多分に手傳つてゐた。けれども私の心は少したつと他の方に向つて動きはじめた。それにはさもしい卑しい欲望ばかりからさうした女を誘惑した男に對する憤りの心であつた。人々は單純な心から現に私自身すら女に對してまた子供に對して他人に加ふべからざる侮辱を與へてゐる。けれどもこれは不當な侮辱でなければならない。何故なら最も侮辱を加へられなければならない子の父親は誰であるか？彼が自分の子の上に、また子の母親の上にふりかゝる嘲笑と侮蔑を知らぬ顏をして濟ましてゐ、その上に自分の子であることまでも否認しやうとしてゐる何と云ふ破廉恥

な事であらう。私は男のこの仕打に對して憤りを覺えると共に多くの人々がその父親の誰であるかを知らうとしてゐるその心持ちには彼の許しがたいその罪を誰も責めてはゐないのだ。多くの若い者は皆こんなことをするは當然だと云ふ默許が見える。私たちの目からはそれすら許しがたいことに見える。そして可愛想な母親と子供だけがあらゆる嘲笑と侮蔑をうけるとは何と云ふ不公平なことであらう。若しもそれは委しくたゞしたら全く女は男を愛したかもしれない。併しそれは男の誘惑にまけたのに相異ない。眞に男が女を愛したのならば母と子の受ける侮辱から自分ひとりがのがれると云ふ法はない。それは極めて卑劣な行爲でなければならぬ。眞實の愛は如何なる場合にもそんな卑劣な心を含んではゐない筈である。私はひとりこんなことまで考へてゐた。

「ぢいさん父親も知れないやうな子供なのに『私は孫をひとりもうけました』つて大元氣であるいてゐるのさ」と云ふ言葉を聞いたとき私は人のいゝ顏をしたひげを長くのばしてうすぎたない姿をした老人を思ひ出した。

私は老人の人のいゝそのよろこびを人々と一緒に矢張りいゝ笑草のやうに聞いた。けれども直ぐその輕い侮蔑の心は失せた。そのおぢいさんによつて母と子はとにかく慰められるだらう。私は自然のまゝな人のいゝおぢいさんが孫に對する愛の微笑を快く思ひ浮べ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。

けれども私の心はそれでさつぱりとはしなかつた。私がもうその事を考へ止めやうとした時には、すべての人々の盲目な心に對する輕い不滿と反感が吐息になつて出たのである。物倦い氣持が一杯に私をとりまいた。

(大正四、一〇、二〇)

編輯餘事

▲伊藤野枝さんは廿日頃歸京される筈、次號或は新年號には、新しい計畫をして大に發展される旨書信がありました。

▲平塚さんは四谷南伊賀町四十一に轉居されました。最近の感想として「將來は勉めて讀書と思索に耽り度い、從來はやゝもすれば否定と破壞に傾き過ぎてゐた。これから更に思索を深めて積極的建設に努めればならない。

私共の智識は、時として、不意の出來事に當つて、其れを解釋し批判することの出來ない場合がある。種々なる事變に際して一一批判し得られる樣に智識を廣くして然も深める必要がある、私は近頃、切實に思索を深める必要を感じ出しました。

岩野さんの事件に就いて未だ何も語りません、各方面からいろんな批評が既に出てゐて、私はあとへ殘された樣です、最後に申すとすれば餘程考へればならぬ。何れ、次號か新年號で、精しく書くつもりです」といふてゐられました。多少の聞き誤りがあつたかも知れません。(二十七日係員)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

■原稿募集 (毎月十日締切)

紙面の許す限りは新しい方のために紙面を割きたいと存じますから御遠慮なく御送り下さい。次號及新年號は早く出したいと存じます、編輯の都合で掲載の遲れることがありますからよくおふくみおき下さい。

青鞜詠草(歌數無制限)。感想及日記(なるべく簡結にすること二十五字詰)。其他。

■伊勢神宮と我國體　廣池千九郎氏著

この書は廣池博士が永年伊勢神宮に奉職して東洋史實を根本的に研究して、我國體の淵源は天祖の御聖德に存する事を證明せられたものである。著者の立場は學術的若しくは宗教的であつて頗る眞面目な教育家必讀の名著である事は兩井上博士等の賞讚の辭でよくわかるが、學者以外の我々が讀んでも何かうる所のある興味の深いものである。

天照大神は御正統を繼がれる事になつて素戔嗚尊の反對をうけられ、其再三再四の迫害も皆先方の善いやうに宣まひ殊に神殿に大小便をまり散らしたのなども是は素尊が醉うておいでになるのだと仰せられた程慈悲寛大な御心であらせられた。かうして其迫害の極まつた時天祖は自分の不德のためだと御謹愼の御心で天の岩戸におこもり遊ばした。この慈悲寛大自己反省の御聖德が我國體の淵源であるといふ。お籠りに付いて日本書紀にある「是に由て慍を發して天石窟に入る……」といふのは支那思想を交へたもので、古事記の「是に於て天照大神畏れて天石屋戸を閉ぢてさしこもります」の見畏とあるのは恐怖の意ではない。正しく祝詞や宣明に見える「かしこみ」と同一の恐惶謹愼であると思はれると著者は云つてゐる。この外「御祓祓」「我家族制度の特質」「祖先崇拜の國風」「天祖に對する國民的崇拜」等やすべて神社神宮の事は誰が讀んでもよく解る重要記事である。丁度御大典も近づいた今日我婦人の間にもかういふ書の弘く讀まれることを望むものである。總拌布製四六二倍版三百頁、二圓(日月社)

■縮入歌集　竹久夢二氏作

すべて私の記憶にある歌で好きなのだけ百首撰んだのでした。歌だけおぼえてゐて、作者を忘れたのもあるのです。或は歌も原作と違つて覺えてしまつたものもありはせぬかと氣遣はれるので、わざと作者の名は書くことにしました。といふ序がある。

夕暮の取り集めたる霞のうち靜かに人の泣く音聞ゆる

頰に傳ふ涙のごはず一握の砂を示しし人をわすれず

あしびきの山の雫に妹まつと我たちぬれぬ山の雫に

何故に戀の初めにかくばかり戀しきことを君は宣まふ等歌と繪と共にみれば殊に面白い。一圓廿錢(植竹書院)

雜誌規定

■毎月一回一日發行

■定價一冊金貳拾五錢（郵稅壹錢五厘）

■前金購讀料（四ヶ月分）壹圓（六ヶ月分）壹圓五拾錢（八ヶ月分）貳圓（十ヶ月分）貳圓五拾錢（一ヶ年分）參圓

■廣告料（一頁）特三十五圓、一等二十圓、二等十五圓、三等十圓、（半頁）七圓

■郵券代用は一錢五厘切手に限る（但し一割增のこと）。

■編輯事務、補助團會費拂込は靑鞜社へ。

■廣告申込、交換廣告は日月社へ。

■通信、雜誌交換、購讀に關する一切の事務は日月社へ。

■原稿〆切期日は每月十日限とす。當分の間、日月社內靑鞜係宛のこと。

大正四年十月卅一日印刷納本
大正四年十一月一日發　行

禁轉載

東京市小石川區指ヶ谷町九十二番地
靑鞜社內
編輯兼發行人　伊藤野枝

東京市京橋區弓町十三番地
印刷人　柴田杠一郎

東京市京橋區弓町十三番地
印刷所　千代田印刷株式會社

發行所　東京市小石川區指ヶ谷町九十二　靑鞜社
振替東京二二一一六番

發賣元　本鄉區元町二丁目廿五　日月社
振替東京二八九一四番

大賣捌　東京堂

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

婦人の開放・女權の擴張

想界の羅針盤　反響叢書　藝術界の基調

平塚らいてう女史著

第二編　評論集

現代と婦人の生活

〔『靑鞜』讀者は定價の三割引〕

▼四六版三百餘頁・定價八十五錢（送料八錢）

土曜新聞評して曰く

其容貌に於て、其思想に於て、其文才に於て、所謂、新しい女の中の女として最も優れて居るのは雷鳥平塚明子氏である。單に好奇心の眼を以て見るも明子氏は明治の末から大正の時代へかけて世を騷がした名物女の一人であり、更に之を思想上より見れば來る可き何物かを暗示する日本婦人の先驅である。而して本書は、明子氏が世間の侮辱と賞讃との間に立つて奮鬪せる行進曲を集めたるもの、其言論には未だ徹底せざる所もあり、多少奇矯に走るものもないではないが、其大體に於て惻々人に逼る力の潛んで居る事は爭ふ事が出來ない。世には食はず嫌いの人が多い。一口に新しい女と言ふ誤られた代名詞に兇はれて、思想界に現はれた傾向を見逃す事があれば、後日必ず悔を貽すに違ひない。

發行所　東京本郷元町二丁目二十五　日月社　振替東京二八一九　電話下谷三二六〇四

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

■生田長江氏の新論文全集

最近の文藝及び思潮

四六版四百頁
布装美本箱入
金一圓税八錢

著者は權威ある文壇の高等批評家である。文壇の巨星森田草平、島崎藤村、夏目漱石、田山花袋、正宗白鳥の大物を俎に載せて手際よく庖丁目を入れて行く冴えは見上げたものである。著者の頭は鋭いがイラ〳〵せず論理的であるがパッションを失はない。加ふるに其筆にデリケートなウィットを滴らしてゐる。尚「不正直なる沈默」以下十數篇は著者の自己及文壇に對する見識の正直且つ大膽なる告白で前の人物評論と合せて最近の文藝及思潮の精髓を窺ふに足る。（世界新聞）

■森田草平氏傑作煤煙續編

縮刷 自敍傳

菊判四百餘頁
布装美本箱入
九十錢税八錢

粗き布のポットリとした裝幀なり、此作は云ふまでもなく作者の興味ある生活をさながら打出せるものとして「煤煙」と共に有名なり、安倍能成、阿部次郎兩氏の評を附す。（萬朝）

同じ著者の「煤煙」と共に最も眞面目に一生懸命になつて書いた作で、世をして驚嘆せしめ作者の地位を固めたものである。今や「煤煙特製」と同形同體裁の縮刷となつて現はれた。更に愛讀者を増すことであらう。巻末に著者の友人の評が收めてある。（讀賣新聞）

■江部鴨村氏の新研究解説

タゴールの思想及宗教

四六版二百頁
美装優雅箱入
七十錢税八錢

タゴールの思想を消化し問題の要點を把握して自在に之を説明し去つてタゴールの内生命を紹介せんとしたる所は其の特色なり、タゴールを語るもの丶中大體を領せんとするものに手頃の書として推薦す。（朝日新聞）

印度の哲人タゴールの思想と宗教との大體を何人にも解るやうに極めて平易明快に説てやがて來朝の噂ある哲人を迎へんとする我讀書界に資して及我等が思想生活を豊富ならしむる一冊たらしめた良書である。（國民新聞）

■高濱虚子氏作長編附錄子規書翰

子規居士と余

四六版三百頁
クロース美本
九十錢税八錢

子規と著者は同じく伊豫の土に生れ同じく俳名を一世に擧げ其交情師弟の如く兄弟の如く親友の如きものあり、著者故人を懷ふ事深く玆に此書あり更に故人の寄せたる書翰百數十通を添へて之に江湖に示せり。（時事）

或時代の生める特異の文學者之を圍繞せる一團の青年と其清き文藝憧憬の念、是等が率直に敍述されてゐる一篇の作品と見るべく子規氏の傳記とも云ふべく而して又一面明治文學史の一部とも稱し得べし。（報知新聞）

發行所 東京本郷元町二丁目二十五（振替東京二八九一四 電話下谷三二〇六）日月社

十一月特別號

本號に限り

科學と文藝

特價卅五錢

評論

物質的と精神的と……田中王堂
個人主義者の苦痛……長與善郎
盲目の世界……野村隈畔
獨逸人の頭と日本人の頭……三宅博士
科學の立場より見たる東西兩洋の差異……二木博士

無明（長篇小説）加藤一夫
笑（アルツィバーセフ）高野孤龍
浮浪（デクイシイ）辻潤
金彌（小說）岡田八千代

科學

解剖學上に於けるグエテの業蹟……山川博士
人生と黴菌……羽太ドクトル
宇宙の構造(附錄)……兒玉呂
鳥の哺育時代と其教育……ジョン、クイ
食慾と醫學……小酒井博士

各展覽會批評……
海外思潮……
シングの戲曲……喜多村進
ジプシイの話……辻潤
前月文壇……美川康

挿畫

□各展覽會出品畫
石井柏亭、小杉未醒、中川一政、安井曾太郎、正宗得三郎、佐藤春夫、三井文二、鍋井克之、木村莊八、岸田劉生、田邊至、南薰造、白瀧茂之助、藤島武二、寺崎廣業、池田蕉園
三色版—莊八、西村伊作

詩歌

冬日……よさの、ひろし
雪の國……與謝野晶子
彼等……西村伊作
露景色……長瀨先司
麗白……小林弘
油虫……山野虎市

府下東大久保町二 交響社發行　牛込區五軒町卅五 振替東京二九五五九 天弦堂發賣

本然生活（新刊發賣）（定價壹圓）
加藤一夫著
洛陽堂發行

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一編に付 十錢税二錢

現代百科文庫

五部以上は 郵税不要

新宗教の暗示 宗教叢書

- 宗教の新意義（三編分） 谷本博士
- 神社崇敬と宗教（五編分） 廣池博士
- 宗教入門 江部鴨村
- 神道網要 西川光次郎
- 救世軍 同
- カラマゾフ兄弟（六編含有） 森田草平
- シヤクンタラ姫 同
- 大聖釋尊 江部鴨村
- 高僧と母 同
- 續高僧と母 同
- 俳聖芭蕉 岡本默骨

- 道元と親鸞（四編分） 村上博士
- 天理教祖觀（五篇分） 奥谷文智
- 金光教觀 和泉乙三
- 親鸞と法然 村上專精
- 立正安國論略解 柴田一能
- 教徒として見たる天理教 廣池千九郎
- 耶蘇基督 前島潔
- カーライルの宗教 淺海學一
- 近代思想と宗教 柏原祐義
- 十六羅漢 山邊習學
- オーガスティン論 小宮豐隆

文藝思潮叢書

名流論作

- ▼父と母と娘（小說） 森田草平
- ▼無用語（評論） 安倍能成
- ▼銀座の夜（小說） 小宮豐隆
- ▼藝術家と藝人（評論） 生田長江
- ▼三十三の死（小說） 素木しづ
- ▼杏の落ちる音（小說） 高濱虛子
- ▼一から四まで（小說） 河東碧梧桐
- ▼文藝評論（評論） 小宮豐隆

古今名著眞髓 梗概叢書

- 神曲 ダンテ 森田草平
- ベル・アミー（發賣禁示） モオパツサン 德田秋聲
- 懺悔錄 ルーソー 生田長江
- マダム・ボヴリー フローベール 相馬御風
- 死の勝利 ダヌンツイヨ 水上齊
- 英雄崇拜論 カーライル 中村古峽
- ドリアングレー ワイルド 相馬泰三
- 女の一生 モオパツサン 廣津和郞

- 春の眼ざめ ウエデキント 生田長江
- 武器と人 シヨウ 稲永挽歌
- ポオラ（外一編） ピネロ 加藤朝鳥
- ファウスト（三編分） ゲーテ 森田草平
- オルレアンの少女 シルレル 水上齊
- アルネ ビヨルンソン 相馬泰三
- 決闘 クープリン 橋田東聲
- ベルグソンの哲學 中田長平

日月社

出版圖書目錄進呈 電話下谷三二〇六

十月中特價目錄進呈 振替東京二八一九四

振替東京二八九一四番

森田草平作

（好評再版）

縮刷 自叙傳

入箱菊半截四百頁
布装幀木版七度刷
金九十錢郵税八錢

本書に對する著者の親友諸氏の合評

安倍能成氏
阿部次郎氏

著者の出世作たる煤煙の姉妹編!!

自序より‥‥今「自叙傳」を再び世に送るに就て僅に自ら慰むることが一つある。それは兎に角「煤煙」と共に當時に在ては一生懸命にかいたものだと云ふことである。一生懸命になる、それは今の自分にとつては容易に成れないことである。

▲彼の名作「煤煙」に續くべきものとして著者の畢生の力を籠めし當時の内生命の赧白の表現なること今更言ふまでもなし「兎に角煤煙と共に當時にあつては一生懸命に書いたものだ」と著者の言ふ所は僞りなき告白（朝日新聞）

▲世をして驚嘆せしめ、作者の地位を固めたものである。今や「煤煙」と同形の縮刷となつて現れた、更に愛讀者を増すことであらう（讀賣新聞）

▲粗き布のポツトりとした装幀なり、此作は言ふまでもなく作者の興味ある生活をさながら打出せるものとして「煤煙」と共に有名なり（萬朝報）

▲「煤煙」と相並んで文壇を騒がしたる作者得意の作である主人公要吉が山から歸つて女と別れて仕舞つた遣瀬なさに段々と自墮落な生活に沈んで行く徑路が、讀者を壓し付けるやうな、生一本の力で鮮かに畫かれてゐる、「煤煙」に見えてゐる主人公の芝居がかつた遊戯的の氣分が（主人公自分に取ては勿論眞劍なことであつたらうが）次第に無くなつて、いぢらしいほど人間の弱さ果敢なさが現はれてゐる、其れだけ讀者の共鳴をそゝる力が強くなつてゐる、素裸になつた人間の眞實性がしみ〴〵と味はれる、此の意味に於て吾々は「煤煙」よりも「自叙傳」の力が藝術品としても、ヒユーマンドキユーメントとしても、より内容がありより親味があるやうに思はれる（世界新聞）

東京市本郷元町日月社

昭和44年10月30日発行　　【第7回配本】

青鞜第5巻　11月号

編著者　平塚らいてう
発行者　藤原正人
発行所　(株)明治文献
印刷　江明印刷
製本　(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 4,500円

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
PL
756
S45
v.5
no.10

University of Colorado at Boulder
U18304 6746571

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

振替東京二八九一四番

森田草平譯

カラマゾフ兄弟

（附ドストイエフスキイ小傳）

（好評三版）

菊半截六百頁箱入
優雅木版畫七度刷
金九十錢郵税八錢

露國の文豪ドス氏の最大傑作にして千古萬人必讀の最高不朽の文學也!!

『カラマゾフ兄弟』はド氏の大傑作たることは言ふ迄もない。有史以來人類の所產として十指を屈すべき最高の文學で寧ろ經典である。一面露西亞に於ては、カラマゾフ一家の名は、近代の靈肉ともに墮落した陰森な家庭の代名詞とも成つてゐる。譯者の自白に曰く「此書は創作と飜譯とを問はず、從來自分の名に依つて公けに爲れた文學中一番偉大なる味ある作物である」と。

▲人間の心を最も異常なる狀態に置て機一髮の事件を描寫するに巧なる人だけに誰が讀んでも非常に面白き、又貴重なる藝術品なり、譯者はド氏崇拜者なるだけに最適當なる譯者を得たるものと云ふべし（萬朝報）

▲ロシヤ人の心理に深入りして宗教的心境を取扱つたところに於てこの作なぞは宗教家に親しい感じを與へる、かのトルストイが家出のときに携た一書としてもその値打が推される、譯者の手になつた原著者の小傳はこぢんまりとできてる、且つその文學者としての地位と特色とをしのばせる（中外日報）

▲文豪ドストイエフスキーが獨創的な深刻な心理解剖は遺憾なく寫し出されて居る、而して變轉曲折に富む構想は彼れが獨得の擅物であつて飽くまで讀者の感興をそゝらねば止まぬものがある、ドストイエフスキー研究の世界的に盛行する今日この大譯を得たることを喜ばねばならぬ（國民新聞）

東京市本鄕元町日月社

明治四十四年八月二十八日第三種郵便物認可　第五卷

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

大正四年十二月一日發行（毎月一回一日發行） 第十一號

青鞜

第十二月號

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

第五卷
第十一號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

十二月號目次

傲慢狹量にして不徹底なる日本婦人の公共事業に就いて（論文）……一　伊藤野枝
兒童の世紀（飜譯）……一九　山田わか
短歌十首（短歌）……三〇　與謝野晶子
初戀のなりゆき（小說）……三二　岡田八千代
薄ずみいろ（小說）……三六　長谷川時雨
たゞ一人（小說）……四八　加藤みどり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

最初の家（小說）……五四　五明倭文子
戀の誇り（短歌）……六九　原阿佐緒
私の生活（感想）……七三　三ヶ島葭
未成品二章（小品）……八四　生田花世
二つの心（對話）……八九　岡田ゆき
青鞜詠草（短歌）……九二　諸氏
祝歌　畔蒜こさ子　月光　望月れい子
燒跡　山の井峰子　長詩　無門照子
別れた友へ（手紙）……一〇一　山の井峰子
らいてう氏に（手紙）……一〇五　伊藤野枝

四版

萬葉集選

窪田空穗著

中村不折装

菊半截約三百頁
四十五錢稅四錢

絹表紙木版彩色
頗美本携帶至便

▲愈々日本民族代表的歌集の新選註完成したり▼

新版

續萬葉集選

窪田空穗著

中村不折装

菊半截三百餘頁
五十五錢稅六錢

絹表紙木版彩色
頗美本携帶至便

▲氏は消辯なる本集中より殊に自己に興味あり集中の心核と思はるゝもの三百餘首を選みて簡單なる評釋を施し感想を附す。絹表紙菊半截の瀟洒なる裝幀。從來讀み方詮議の難解なりし爲に惟り專門家の玩賞に止まり、偶解釋あるも精細に過ぎ乾枯に流れ頗る常人に遠き憾みありし本集は此書に依つて始めて一般人に愛誦さるゝを得べし。蓋し萬葉集の如き最も平民的色調に富める歌集は決して少數の學者歌人の所有にあらずしてまさに國民全體の所有と謂ふべき也（信濃每日）

▲歌に昵む人々にとつては萬葉集の歌の眞情を流露した醇朴さと近代の詩にも醸らぬその人間味とは力强い誘惑力を持つてはゐるがさて二十卷四千の歌數とやゝ難解な煩はしさは一寸近く寄を許されない斯らいふ不滿を持つてゐる人は本書について其の心核に觸るがいゝ（大阪每日）

▲著者は古典の新鑑賞者として當代に類なしその標準の極めて妥當にして藝術上の權威あることとこの小册をして千金の重みあらしむ（讀賣）

▲萬葉集の佳篇を拔き之を假名交りにわかり易く書下し著者の周密なる註解を附したもので萬葉集の一斑を覗はんとする者に好適な書である、空穗氏の批評は光つてゐるしかも一方に學究的な忠實さを失はぬ所最もよし（新潮）

▲短歌長歌に對して詳細な註を施したもので萬葉集研究者に取りては缺くべからざる良書である（早稻田文學）

▲今前著の缺を補ふて此續編を成す、集中傑出せる作歌を拔き難解の句には一々解釋も加へまた歌全體の批評を附したれば初學者にもこよなき手引とならう。卷末「萬葉集の中心思想」てふ論文亦有益の文字（秀才文壇）

▲前著「萬葉集選」の便益と眞相とは、既に一部の認めたるところ、此新著亦著者の新しき評釋者としての天才を遺憾なく發揮したり、是には長歌をも輯錄せり、附錄「萬葉集の中心思想」はよく情理を盡したり（讀賣）

東京市本郷元町・日月社・振替東京二八一九一四番

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

傲慢狹量にして不徹底なる日本婦人の公共事業に就て

伊藤野枝

現在の日本に於いて上中流階級に屬する敎養ある多數の婦人連に依つて組織される團體が可なりある。その何れも權力ある後援者並びに多數の會員と相當の財源をもち等しく公共事業の爲めに働くことを目的としてゐる。而してそれ等の各團體の存在は鮮かに各人に認められてゐる。併しその目的とする事業は？

甚だ鮮明に事業に向つて注がるべき力の團結は認められながらその事業はすべて誠に微々たるものである。憐れむべき不完全なる狀態に在る。これは何と云ふ不合理な事であらう。私は今の處それ等の諸團體は事業など云ふことは唯だ單に社會的な信用を得る口實の一つであつて何れも婦人連の虛榮心――言葉をかへて云へば、彼女等が相當の婦人としての價値を贖ふ爲めの一交際機關としてより他に存在の理由を認め得ない。世の多くの人もまたこの理由を無意識の間に認めてゐるのである。何故ならそれ等の婦人の團體の會合について、その華やかさを、または名譽ある貴婦人連の列席を諸新聞、諸雜誌は筆を揃へて

報導する。併し私は、その會合が如何なる趣旨によつてなされたか、或は如何なる用法がなされたかについて且つて内容ある報導に接したことはまあないと云つてもい丶位である。會合に於ける餘興についての委しい報導はあるが會の事業とか或はその事務の内容について洩されたことはない。會長、幹事、或はその他の職員の改選とか或は會計の報告がそれ等の會合の唯一の事務報告である。それ以上のことについては何事も洩されたためしはないやうである。

偶々、何かの機會に多少目立つ仕事がそれ等の團體に依つてなされるといふことがないでもない。併しそれはそれ等の團體が存在する以上手を束ねてゐることを許されないやうな場合――即ち手を束ねて傍觀してゐると云ふことは彼女等の一番大切な名譽と云ふもの丶價値を割引されるやうな場合――なのである。だから決してその團體の事業としてのみ見らるべき性質のものではないと私は思ふ。例へば戰爭がはじまる、慰問袋を造つて兵士達に送るとか金を出すとか飢饉に際して金をとか品物を送るとか云ふことは普通の人にも氣のつくことであつて敢てそれ等の團體がこと〲しく大騷ぎをしなければならない程のことではない。これ等は一つの臨時の仕事としての價値しかない。戰爭がはじまつた時に綳帶を巻いたり慰問袋をこしらへる爲めにのみ、ふだんからさういふ團體の用意をしておく

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と云ふのは手まはしがよすぎて無駄なことだとしか私には思はれない。

若しも眞實にそれ等の婦人連が公共事業と云ふものに對して興味をもち働く心があるのならば寧ろさういふ臨時の慈善事業は自家のそれ〳〵の仕事として充分である。もつと社會には暇と金とを持つ人が眞意をもつて無酬で働かうと思へばどのやうな仕事でも待つてゐる。眞實に彼女等が自分たちの暇と金とを利用して社會の爲めに働かうと思へばぢつとしてゐられない程いろ〳〵な處から手招ぎされるのが見えるに違ひない。

處が彼女等の第一の自己に對する信條は貴婦人だと云ふ自負の心である。彼女等は自から高く社會の上位にあるべきものだとの心をかつて忘れたことがない。彼女等が多くの人に向つて與ふるものとはたゞ物をほどこすと云ふこと以外の何でもない。彼女等はそれを自分の位置に附屬する一の義務として——税を拂つてゐるつもりなのである。この場合彼女等の所謂慈善は彼女自身をも他の者をも侮蔑する最も傲慢な態度である。彼女等は教養あり思慮ある人々と見做されてゐるがその實は彼女等は社會と云ふものに就いての——もつと深い意味で云へば人間の生活と云ふものゝ根本義について全く無智である。傲慢と無智とは何時も道連れである。彼女の場合もまた左樣である。彼女等のわづかな物質的の補助がそれ程多くの人を幸福にしてゐるか？　彼女等は得々として如何にも大なる善行をし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たかのやうな顔をしてゐる。併し肉體的の一時の滿足が人間の幸福のすべてではない。あまりにそれは複雜な人間の生活を無視しすぎる。

私は可なりの立派な後援者と會員と財源をもつた一公共團體の事業が行はれてゐるのを知つてゐる。其處には幾人かの兒童が引きとられて養育されてゐる。併し私はそれ等の子供達の生活を他所ながら見る度びに子供たちの爲めに悲しまずにはゐられない。もとより出資者たる團體は慈善を標傍してゐるのではあるがたゞ例によつて會員は會費をおさむると云ふことをもつて慈善が完全に行はれてゐるかの如く考へてゐる人達である。時々は華々しいバザーや音樂會も催す。そして彼女等はその團體の一員であることを誇として得意になつて働いて金を儲けて基本財産をふやす。もとよりその役員なる婦人たちは一かどの立派な世の讃美の的になる、彼女たちは自分の仕事に對して充分滿足である。そしてそれ等の金によつて若干の子供たちが養ひ育てられる。けれどもその金の功能が子供たちの上に果して和らかに注がれてゐるであらうか？　子供等の保姆は雇はれた事務員である。彼女等は月給を貰ふ爲めに、子供の世話をする。彼女等は雇主の恩を讃美する。雇主と雇人の間には相變らずな傲慢と媚以外の何物もない。雇主の傲慢に對する無智な雇人の反抗は小さなみぢめな子供たちの上にもたらされる。「他人の慈悲によつて育てられる」多くの可

妄想な子供たちの上にあらゆる侮蔑が降りかゝつて來る。成程彼等は慈善家の手に救はれなかつたら或は満足な着物であつさ寒さをしのぐことが出來なかつたかもしれないし、三度々々御飯にありつけなかつたかもしれない。併し乞食をしてひもじい目にあつても彼等はいたましい涙をより少く流したであらう。若しもこれ等の可憐なる子供達の保護者をもつて任ずる貴婦人達に、眞實に子供に對する憐憫の情があるならば子供はさまで不幸ではないかもしれない。もう少し周到な保護者の注意があれば子供はもつと丁寧にあつかはれなければならない。不徹底な婦人連の態度は慈善が却つて子供たちには呪はしいものと思はしむるであらう。

彼女達は悧巧らしく自分達の兒女の教育だとかその幸福については立派な意見を述べてゐる。しかし不幸な同情すべき子供たち――自分たちの保護の下に育つてゆく子供たちの上にまで同じ考へを向けてやつてゐる人か果して一人でもあるであらうか。恐らく彼女等はその子供たちがどんな待遇をうけつゝ育つてゐるかさへも見に行くひまは持たないであらう。

要するに彼女等の慈善は虚榮の爲めの慈善である。事業の如何は問題ではない。自分の存在がすでに彼女等の満足であり誇りである。その上にその財産の一部をもつて仕事をする

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と云ふことは更に大した仕事でなくてはならない。彼女等は眞實に自己の心の中に起る憐憫や慈悲の心によつて仕事をするのではなくてたゞ外見の爲めに、自分の位置の爲めに、この讃美と尊敬を強いるべくひまにまかして事をするのである。その最後まで意志が徹しないのは無理もないことゝ云はねばならない。まして傲慢な彼女等にその方便としての事業に興味や熱情を求むることは愚に等しい業でなくてはならない。彼女等には、すべての事をなすに尤も大切な誠意と云ふものの缺けてゐることがそれ等を救ふことの出來ないものにする。彼女等が所謂名譽職の爲めに内訌を起したり種々な紛亂をおこしてゐるのは無理もない話である。私は寧ろ彼女等が外見の爲めの慈善などを看板に集まるよりももつと彼女たちにふさはしい氣のおけない集まり方をして彼女の最も手近かな事柄からさきに考へたり研究したりしてもつと眞面目なそして自然な立場から日常生活の形式やその他婦人の手にまつべき種々な家庭の仕事について社會に模範を示すことがどの位立派なことか知れないと思ふ。不徹底な表面的の仕事はやゝもすれば虚榮心を誘き出したり傲慢にする。事業と云ふものは誠意と熱情とを缺く、ことに狹量なものには出來ない筈である。現在の我國の上流婦人にして多くの婦人達の團體の首腦にならうとするやうな人の間には眞實に事業に興味をもつてやらうと云ふやうな人は先づないやうに思はれる。何時もこれ等の公

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

共事業は献身的な熱情をもつたすべての事に向つて飛び込んでゆくやうな婦人でなくては出來ない。

前に述べたやうな種類の團體とは少々色彩を殊にした婦人の團體が他に一つ二つ存在する。それは宗教に依つて――信仰によつて團結を一つにする團體である。そしてその宗教の信條によつて公共的な事業をしてゐるのである。

これは前述のに較べては誠意も熱情も充分に持つて他人に對する情緒も美しいものが見られるし事業と云ふものにも眞面目であり徹底的であるらしく見える。然るに、現在のどの宗教にも同じ弊として見られてゐる缺點は教義の固定――云ひかへればその教義が極端に形式化し、惰化してゐることである。これが爲めに、眞の教義が往々教職にある人々にさへ誤解されて傳へられる場合すらあると云ふ一事である。その教義をもつて社會に起る百般の事柄にあたつて行かうとすれば必ず矛盾を見出すことになる。もし眞にその教義の主點を理解してゐる者にとつてはさまで困難も窮屈も感ずることはないがやゝもすれば形式化した寺院や教育會の空氣はそれ等を異端視するものである。彼等はたゞ形式によつてのみ行かうとする。だから彼等は不自然なことにばかりゆきつく。そしてその不自然を取

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ぶ大なる苦痛をもつて教義に對する忠實の證明にしやうとする。

　右のやうな傾向をもつた宗教の中にあらゆる信を、熱誠をもつてかけてゐる婦人の心はその形式に向つて寧ろ頑迷に見ゆる程度にまで固執する。この宗教家の婦人の偏狭はやがてその社會的の事業に向つたときに著しい缺點となつて諸人の反感をかふことになるのである。

　基督教徒たる婦人の大半は教養ある人々である。そしてもつとも「高尚な精神」と云ふやうな事を口にする婦人たちである。しかるに私の目から尤もキザにして輕薄な僞善的階級に屬する婦人はこれ等の人の中に最も多く發見する。彼女等は謙遜らしく振舞つてはゐるが實は非常に傲慢で寛大らしく見えて實はもつとも狹量で偏屈で苛酷である。一番彼女等が不用意にさう云ふ缺點を現はす場合をあげて見ると彼女等がその宗教の教徒以外の人に對する時である。彼女等は、先づこの宗教の有がた味を知らぬ者に對して可愛想だと云ふ。不幸だと云ふ。そして導き入れやうとする。それが未だ宗教を信ずることを知らぬ者であつたときには當然のことではあるが反對に既でに何等かの信條を自分で把持して立派に宗教をもつてゐる人に對してすら彼女は彼女たちの神様をしらぬ者はかあいさうだと云ふやうなことを云ふ。併しこの場合は彼女は自省を缺いてゐる。そして相手を侮辱してゐるの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

である。既でにそれさへ他人の信仰を侮辱するものであるのに猶その信仰をすてさせて自分の信仰に絶對の權威を認めさせやうと努力する。もしそれに反對し、多少ともに彼女の虛をでもつかうものなら彼女は全く思慮を失ひ教義も忘れ、相手に充分の敵意を含んだ輕侮を示して冷笑する。而も彼女は表面丈けはきはめて寛大さを示さうとする。併し彼女の心は決しておだやかではない。何かにつけて彼女たちは神様を讃美しては序でにきつと異教徒の惡口を云ふ。彼女たちは異教徒の惡口は寧ろ當然で自分の神様を賞めてさへゐればそのつぐのひはつくやうに思つてゐる。これは婦人丈けでなく男子にもさうであるのは事實である。併しこれは萬人を等しく愛する神の目からは許しがたい事實であるに相違ない。しかもこれは基督教徒の人々のみの場合でなくすべての教徒に等しく云ひ得ることであるが最も教養あり見識ある基督教の婦人たちの著しい半面であることも爭はれない事實である。

さてかういふ婦人連の團體として尤もその偉なるもの丶一例を擧ぐれば「婦人矯風會」さ云ふ會である。この會は人道とか、社會道德とか云ふ方面に向つてその事業を發展さして行と云ふ主義の上から可なり社會の表面に出てゐて事業と云ふものも他の所謂貴婦人連の團體から見ればずつと實際的である丈けに會員の多くが興味も持ち力も主としてその方面

に注がれてはゐるらしく見える。併し實際に於いては決してさうではない。貴婦人達の單純な誰にも分る虚榮心からの事業經營とは非常にかけはなれて立ちまさつて見えながら彼女達が事業經營といふものから得やうとするものは同一性質のものであつてやゝ一般の目からは複雑に見える丈けのものである。彼女達も矢張り事業そのものに興味をもつのではなく事業經營者としての自己を、より多くの人に知らしめたいと云ふ名譽心で、さう云ふ團體の存在を社會に認めさせるやうな經營方法をとつてゐる點に於いて他の團體と少しの差異をも認められない。若し彼女自身の名譽心と云ふ言葉が彼女を侮辱するものであるならば彼女の宗教の爲めに——と云はうか それでも少しもちがひはないけれど。要するに事業の爲めの事業ではなくて手段の爲めの事業である。殊にこの團體により多くの同情を失はしめる理由は彼女等の宗教的偏狹である。彼女等は殆んど人間性と云ふものには全く盲目であると云つてもよい位である。彼女等は形式化した愚劣な魂のない宗教の信者の常として全く融通のきかない杓子定規の上に凡ゆる信をおく迷信者である。彼女等の信仰が度を高むる程彼女等の人間らしい情緒は削がれ狹められ壓しつぶされて行く。さうして次第に彼女等は神の最も尊き本然の意志——乃ち愛から遠ざかり寛容を忘れて遂に小さく狹き高慢なる最も神に遠い人となるのである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一例は此度の御大典にあたつて可なりの問題となつた藝娼妓の奉祝と云ふが如き事も彼女等の態度を遺憾なく現はしてゐる處に私は可なりの興味を持つ。

「賤業婦」と彼女等は呼んでゐる。私はそれ丈けで既でに彼女等の傲慢さを、または淺薄さを充分に證據だてる事が出來る。

社會百般の事象がたとへどんな微々たる事象にもせよ、それが表面に現はれて來るまでには必ず確たる根を持ちある立派な自分丈けの相當なプロセスを持つてゐるものだと私は思ふ。殊にそれが人々の間に一つの社會問題として認められ取り扱はれる事柄のすべては僅かばかりの力では動かすことの出來ない根を持つてゐるものと見なければならない。また歴史を持つてゐるものと私は思ふ。時間とか空間と云ふことについて私達は間々その僅かな斷片の價値しか目前には見えない爲めに可なり馬鹿にするやうな心持を持つことがないでもないが、實は偉大なる自然力の最も力強い支配の下にある不可抗力である。それは到底わづかな人間の意力や手段では誤魔化せない正眞正銘のねうちを失ふことのない力である。そしてこの位の事柄は誰でも百も承知の上でなくてはならない。若しも彼女たちの云ふまゝにあの花柳界の女たちのしてゐる事が賤業であるとしてもあゝした業が社會に認められてゐるのは誰でもが云ふ通りに矢張り男子の本然の要求と長い歴史がその根を固いもの

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

にしてゐる。それは必ず存在する丈けの理由を持つてゐるのである。彼女たちがたとへ六年間をちかつたとて十年間をちかつたとてそれを全廢すると云ふことがどうして出來やう？　けれども彼女たちはかう答へる。「ですからさう云ふ種類の商賣を全然なくしやうとしたつてそれはとても駄目だと云ふことは知つて居ります。ですから私たちはそれを根絶させやうと云ふのではありません、ただ公然とあゝした商賣があると云ふことは日本の國家が外國に對してはづかしい事ですから公娼だけを廢止させたいのです。」と。私はこの不徹底なお悧巧な議論をとても眞面目で「左様ですか」と云つて感心しては聞いてゐられない。公娼は外國人にみつともなくて私娼はみつともなくないと云ふ理屈が果して成り立つであらうか？　理屈はとにかくとしてみつともないとか見つともなくないとか云ふことがあの婦人達の唯一の論據であるなら私はその愚を笑ふよりも寧ろかなしまずにはゐられない。彼女は外國人に對する外見の爲めに事業をしてゐるのであらうか？　公娼制度が恥かしく私娼制度が何故に恥かしくないか？　私はかゝる些々たる彼女達の辯解に多くの矛盾がまづはりついて彼女を苦しめてゐることを感じないではゐられない――若しも彼女が本當にそれだけの理由で云ふのならば――。だが彼女達のこの問題に對する態度をたゞこれ丈けの根據を持つて觀ることは出來ない。彼女たちは所謂「賤業」を營んでゐる人達の「賤

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

業」が社會の風俗を亂すからと云ふことを一方に何時も云つてゐる。で私は思ふ。もしもそれをも彼女たちのモットーとして見るときには前の辯解との間に何をもつて連關させるか？　私の考へでは公娼よりも私娼は一層その社會の風俗を亂すことになるであらう。不幸なこの商賣につきものゝいまはしい恐るべき病毒の傳染と云ふこと、それから世間の士女をたやすくさういふ商賣に導き入れると云ふこと、一寸考へた丈けでもよほど社會に惡影響を及ぼす力は私娼の方にありさうに私には思はれる。これは私の粗笨な頭で一寸かんがへた丈けのことでその實もつと公娼の方にたいした惡いことがあるのかもしれないけれど、其處で此度は私の頭には社會に貢獻すると云ふ趣旨からまたは矯風會と云ふその名前の意義にまで遡つて考へて見て外國人にみつともながられてゐるのを――實は外國人はみつともないとも思つてゐはしないのかもしれなくてあの婦人たちが推察でさう思つてゐるのかもしれないけれど――さう思はせないやうにするのと、それを第二の問題として先づ日本の社會の內味をなるべく奇麗にするのとは社會の爲めにどちらが本當の貢獻でせうねと聞いて見たい。蟲のいゝ婦人達は私たちは雙方いゝやうに働きますと答へるであらう。そして私は冷笑を捧げるであらう。矯風會の會長は明らかにこの事實を承認してゐるのである。私はそれを知つてゐる。彼女は私娼がより多くの害毒を流すと云ふ事實を認むること

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を人に語りながらなをかつ吉原の存在が――吉原と云ふ一廓をなして公然と商賣をしてゐると云ふことで――外國人に對する屈辱として全廢を主張してゐる。猶も彼女たちの心理を疑はしむるものは、賤業を營む分際として普通の家なみに軒をならべて附近の士女によからぬことを數へると云ふ不都合をなしながら、それも外見の爲めには忍ぶべしとするにいたつては私は最早云ふべき言葉を持たない。彼女等の事業は徹頭徹尾虛榮の爲めであると云ひたい。社會への貢獻とは社會に認めることを強ひる爲めの誤魔化し手段と見做すより他はない。彼女等は殊更に六年間をちかつて公娼廢止を實現させると社會に公表した。それが果して出來得るか否かは甚だしい疑問である。社會がその公表に一時にしろ耳をかたむけた事だけで會の存在を認めさすと云ふことには成功したのだ。併し私はそれで濟めは笑つてもゐられるけれども若し彼女たちの六年の努力が公娼を廢止さした場合に彼女達の努力はえらいにちがひない、そして社會はそれに眩惑されるだらう、矯風會の功勞は感謝されるであらう。併し私は眩惑されはしないつもりである。彼女達は知りながら自分達の爲めに、自分たちの力を信じさせてほこる爲めに社會に貢獻すると口にしながらまちがつた努力は社會の幸福を犧牲にするのだ。勿論私は公娼の存在も私娼の存在も決していい事だとは思はない、けれどもこのやうな日の來ることを願はない。若しも彼女たちが眞實

に社會の爲めを思ひそれに貢献しやうと思ふならばそして功利的な心がないのならばそのやうな表面に出て不徹底な理屈をならべるよりもむしろ長い未來の爲めに土臺石となる堅實な意志と謙讓な心持を持つてその目的に向つての生き甲斐を見出すのが當然の態度であらうと私には思はれる。すべての社會問題にたづさはる人はこの志がなければ到底駄目だと私は思ふ。目前の功利にばかり汲々してゐるものに本當にその人が渇仰してゐるやうな永遠の名譽は決して與へられるものではない。併し私は何方を向いてもこの謙遜な態度を持して眞に自分を把持して仕事をしてゐる婦人をあまり見かけない。婦人丈けでなく男子でさへもさうではあるが。私が先づ彼の矯風會の人たちに望みたいことは、さうした大きな問題として現はれたものを對象にするよりももつと根本的なたとへば第一に教育と云ふやうな方面に閑却されてある大切なことが可なりあると思ふ。さう云つた方面から眞實に貢献して欲しいと思ふ。社會に貢献することを看板にしながら社會の幸福をぬすむやうな誠意を缺いたことをして貰ひたくないと思ふ。公共事業と云ふからには本當に公共の爲めにやつて欲しい。

　傲慢な者は何時でも自省力を缺いて居る。併し彼女たちが考へることの出來ない程ブアな頭をもつてゐるのではない。彼女たちは充分總明であり思慮もある。何が彼女をそんな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

にも傲慢にするか？　それは彼女等の間違つた自負心である。彼女達が物を觀たり考へたりするときに彼女たちは何時の場合にでも自分を標準にして考へたり觀たりする。その癖彼女たちのすべての事象に對する智識が申し分なく行き屆いてゐるかと云ふに彼女等は決してさうではない。一人の女が生活難の爲めに「賤業婦」におちてゆく。それを彼女たちに云はせると何時でも考へ方が足りないとか、無智だからとか云つてゐる。成程それに相違はないが彼女たちはその可愛想な女の無智な苦悶やそこにまで考へのおちてゆくプロセスも考へず、一概にその無智を侮蔑するやうな傾きをもつてゐる。もしも彼女等が本當に「賤業婦」たちを可愛さうに思ふならば、今それを「止めろ」だなど丶云ふよりもその無智な女たちが物を正しく解することの出來るやうな方法を講じてやるがい丶、その方がどの位立派なことだかしれない。若しも私が彼女たちに向つて私の純な個人主義的立場からこの問題を論ずるならばその私の議論の前では團體とかその事業とか云ふことさへ存在の價値を失くして見せることが出來るのだが私は、今それ程までには論せずに置く。「賤業」と云ふ言葉に無限の侮辱をこめて彼のバイブルウーメンが「一人々々の事情については可愛さうに思ふが――」など丶他聞のよささうな事を云ひながらまだその「賤業」と云ふ迷信にとらはれて可愛さうな士女を人間から除外しやうとしてゐる。それ丈けでも彼女たちの身の程知

らずな高慢は憎むべきである。まして彼女たちは神の使徒をもつて自から任じてたつ宗教婦人ではないか？　博愛とは何？　同情とは？　友愛とは？　果してそれ等のものを與へ得る自信が彼女たちにあるか？　恐らく彼女たちの全智全能の神キリストは彼女等が彼の名を口にしつゝかゝる偏狹傲慢の態度をもつて人の子に盡すことをかなしんでゐるに相違はないと私は思ふ。

いくら繰り返しても限りはない。私はもう筆をおかう。たゞ最後に、もう一度云ひたい。私達日本婦人が何故かう高慢で、偏狹であるかと云ふことだ。「それは深く物を考へないから」と私は答へたい。彼女等は自分のわからない事に出會すと自分でそれを考へやうとは決してしない。直ぐ他人の處に相談として持込んで他人のいゝ加減な意見をきいて批判も何にも一切ぬきにして直ぐそのまゝそれを自分の考へとして取り入れてしまふやうな輕々な風がある。そうして自から考へ處決しやうとするけなげな者に向つて却て高慢だとか生意氣だとか云ふ嘲笑をあびせる。これが一番大きな缺點だと私は思ふ。本當に物の根本をひとりで考へる程人間はずつと謙遜にならずにはゐられない。世間に起る出來ごとのすべての背景をなしてゐる大自然の偉力と云ふやうなものに目をつけるやうになれば如何なる人間でも自分の微少な力をふりかへらずにはゐられない。そうして最も眞面目な自分の道

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と云ふやうなものが見えるやうにならねばうそだと私は思ふ。

願はくば我日本婦人の一人でも多くがこの境地にまで自分を引き出してゆくことを切にいのる。そうして私はさうした日の後にはじめて起る一人々々の心の底からしみ出した立派な意見のもとに堂々たる事業のはじまるのを待つ。現在の日本の婦人の公共事業はすべての點において最も明かに日本婦人の缺點を露はしてゐるものであることを公言するに憚らないのである。

まだ私としては充分に何物をも云ひつくせない不滿があるが他日また稿を改めて詳しく書いて見るつもりで一と先づ筆を措く。若しもこの不充分なる一感想に對してゞもお氣づきのことがあれば私は何時でも喜こんで御說を拜聽するものであることを附加して置く。

――(四、一〇、六)今宿にて――

兒童の世紀

山田わか

—エレン、ケイ著—

第壹章

兒童の兩親を選擇する權利（四）

男は大飲する事によつて次の時代へ大なる罪惡を殘すのみならず、其の他多くの關係に於て多大の破壞的素質を殘すものである。

けれども婦人計りでなく、男子の良心も追々目醒めて來たに違ひない。これは男子等が惡質を遺傳する恐れがあるのを知る時には結婚を避けるやうな傾向がある處にも現れて居るし、又次の例に於ける如き道德の範圍內にも、よく現れて居る。

或る一人の醫師が自分は健康體であると信じて結婚をした。けれども彼は後に其れが誤りであつた事を發見した。で、彼は、其のまゝ結婚生活をつゞけて、清廉な妻を害するか、或は愛する彼女と別れるか二つに一つを選ばねばならなかつた。彼等は深く相愛して居た故に、別れるより外に方法はなかつた。そこで彼は死を選んだ。けれども彼は怪我で死んだと、妻に信じさせるやうな方法をもうけて遂ひに自殺を遂げたのであつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

又或る一人の人は結婚をして三人迄も子を持つた後に、其の妻は自分の腹違ひの妹であると云ふ事が解つたので此の人も亦自殺をした。

けれどもこれ等の出來事は、前述した二婦人の場合と同じやうに極めて稀に見る例であつて、一般婦人が、心身の不健全な男子は我が子の父にはせぬと云ふ意氣を彼等の押へきれぬ本能と迄、發達させるには未だ何代かを要する事であらう。此の方面に關する男子の本能は婦人のよりは遙かに強いものである。けれど、それも古い法律上の概念のために大分鈍らされて居る。其の概念に從へば、婦人は心のうちでは全然背いて居る要求でも、義務として服從しなければならぬのである。此の點に付いてこれからの婦人は一つの明白な義務を持つて居る。則ち彼女は我が子を、純潔な愛、健康、相愛、完全な意志の一致、完全な共通の幸福のうちに、生まねばならぬ。このうちの一つでもが缺けて居れば彼女は德義上の罪を犯した事になるのである。これを婦人が婦人の義務として認める迄は、此の地球上には、一時の快樂のために生涯の幸福及び効力を破壞するやうな人類で滿される事が續くであらう。そう云ふ人類は時とすると既に幼年時代に於て墮落或は不調和の徵を現すが又時とすると、彼等は永い間完全なる健康體で強壯な人類の標本であるやうに見ゆる。が或る危急な場合に出逢つた時に、彼等は彼等の出生の折りに原因して居た心身の活力の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

不足がもとゝなつて再び起つ能はざるやうな事になるのである。

健康な活動的な個人の間に取り結ばるゝ結婚には法律は無干渉である。唯倫理のみ人類改善のために或る影響を與へる事が出來る。

兒童は幼少の頃から、彼等の存在に付いて、又將來に於ける、彼等の男子としての、女子としての義務に付いて教へられて居らねばならぬ。父母は兒童の良心の上に、純潔と云ふ無形な概念ばかりでなく、のつぴきならぬ方法を用いて、貞節に付いての確かな命令を與へて置かねばならぬ。かくして、彼等は自分を愛する人のために、又其の愛から生れる子供のために、彼等の健康と純潔、及び牽引力を保つ事が出來る。

モーパサン、トルストイ及び他の詩人等が全く別々な見地から描寫した如く、種族繼續の衝動は人類を下等な、矮小な、笑ふべきものとする。

けれども其れは其の刺戟が自然の與へた目的に無關係である時、則ち健全な子をもうけると云ふ事に關しては何等の思慮もなく、偶然に其の目的に達した場合に於てゞある。生命の創造者としての個人の價値を貶すやうな種類の愛は人生を攪亂するものである。かやうな愛は實に人類を破滅に導く。そして生命の增殖を歡迎し、人類の絕えざる向上を希望する近世の人生觀から見ても、其れは大なる不德である。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

若き人々は彼等の未來の義務を尊敬するやう學ばねばならぬ。もし、彼等が責任の價値を認める事もなく、貞節の心掛もなく、無考へに、結婚をしたり、離婚をしたりして、心身の本分を浪費するならば、彼等は此等の義務には無感覺になつてしまうのである。彼等が又忘れてはならない事は、たとへ世間普通の動機の上に出來た結婚であれ、或は又不調和を子供に遺傳するやうな舊道德によつて維持さるゝ結婚であれ、彼等が冷淡な心で子を持つなら彼等は彼等の義務の大なるものを犯したのであると云ふ事である。

若い時の空想及び理想的確信を度々破られたゝめ、冷淡に、無頓着になつた母は、彼女の子供の愛の純粹な本能、貞節、强き感情及び高遠な目的などと度々衝突する。さう云ふ母は子供に敎ふるに、愛は規則として結婚に終るものであるから、結婚するに愛はなくとも差支へはないなぞと云ふ。此の考へ方は、丁度、船は海の上へ出れば、どうせ何かしら破損を受けるものであるから、いくらかの缺陷はあつても出帆するに差し支へはない、と云ふのと同じ事である。

彼等は官能の不純に付いて、又友情及び道理に基礎を置く結婚の利益に付いて、或は又苦情を抑へる義務の力に付いてよく論じるが、これは凡て冷やゝかな理論の過程であつて、生命の溢れる魂を殺すものである。娘等は輕率な行動を避けるために、又彼等の感情

が不確かである時其れを識別するために、彼女達の母から拔目なく精細に躾けられねばならぬ。もし、相互の愛からでなく他の理由の上に彼等が結婚するならば彼等は最早堕落したものだと云ふ事を彼等は彼等の魂の上に、又精神の上に燒付けて置かねばならぬ。此の信仰が出來て始めて現代の道德の標準に大變化が起るであらう。人は次のやうな事を考へがちのものである。結婚はどうしてゞも出來る。動機の如何を問ふ必要はない。義務の觀念からでもよし、約束があるなら其の約束を履行するためでもよし、又以前の何かの罪を贖ふためでもよい、或は又家庭生活がして見たいのなら、愛はなくとも結婚する權利はあるなぞと。こう云ふ事柄を正當と見る人の道德の標準は、以前に盜みをしたから人殺しをする、空腹であつたから盜んだのだと云ふのと大差ないものである。人生の最も感じ易い範圍、則ち無數の玄妙な勢力が子孫の運命を支配する其の範圍を、人が專斷に處置し得ると信じる時、其れは子孫の神聖に對して大なる罪惡である。

義務と云ふ冷たい空氣の中に、又不和と云ふ荒れた空氣の中に、子供の生まるゝ事が續く間は、又かやうな結婚を人が道德にかなつたものと思ひ、毀損された智識と不完全な肉體とを子供に遺傳して、そして其等の兩親が誠實な人として尊敬されて居る間は、世界の上に新人類を造り出すやうな新道德の概念は少しも現れぬであらう。

此の舊道德は今猶一般には稱揚されて居る。けれども今日の若い婦人は無意識のうちに結婚するやうな事はない。私の若い時分には、花嫁の無意識は彼女の精神錯亂に結果したり、自殺になつたり、生んだ子を冷淡に見るやうになつたり、病的な心理狀態の子を生むやうになつたりした。けれども婦人が彼女等の目前に迫まつて來る事柄が何であるかを一般に知るやうになつたからとて、其れで美しい理想的結婚に、又調和ある子供を生む事に充分ではない。『大抵の男子は彼の最初の愛を墮落した婦人に經驗して、そしてそう云ふ所願の婦人の見解と習慣とをもつて新妻に對するから、大抵の結婚は其の始めに於て既に損はれて居る。であるから夫婦の間の最も細やかな愛情なぞは永久に滅絶して居る。そう云ふ男子は相互の感情に於ける最も美しい要素なぞは破壞してしまつて居るのである』と或る青年が私に話した事がある。實に男子は尊敬と忍耐を持つやうに修養しなければならぬ。私は此の尊敬と忍耐を或る男子に見た事があるが、其の人はその妻が官能の目覺めのない前に彼女の靈と心を彼に與へて居つた事を知つて居たからである。唯絶えず接近して居ると云ふ事のみが、彼等に完全な結婚の慾望を起さしむるものである。此の完全な結婚則ち共通の衝動を通じてのみ、子供は生るべき筈のものである。多くの子供は恰も公娼に於て、又法律の保護を受けた强姦に於て生れて居る。多くの男女の良心のうちには人生の最も大

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なる神秘に對して少しの宗教的の尊敬心も、審美的感情もない。人は道德の名のもとに、青年に對して自然の本當の姿を秘して居る。そしていつかは人生の神秘を成就さすべき祠としての彼等自身の人格に對して、彼等に獻身的の感情を靈感せしむる事を、人は等閑に付して居る。

此の神秘のうちには直覺でなくては分らない處がある。深奥な詩人は此處其處に無數の親和力及び反撥力を推量して居る。此の親和力と反撥力は、變りつゝある精神的、物質的の性質及び變りつゝある輿論のもとに、現代人の愛の生活を變更する。そして此の親和力と反撥力は、時としては永久に時としては一時的に最も深い感情を變へて行く神秘的な勢力である。此等の精緻な織き緯、則ち此等の神秘的勢力が子供と云ふ生きた織物の一部分となるのである。此の玄妙な過程が、外界からは全く同じ狀態のもとに同じ兩親から生れて養育された子等の間の大なる性質の差を説明して居る。

本能の凡てのこれ等の鼓舞に、又神經と血のこれ等の直言命令に、人類は柔順に服從しなければならぬ、と同時に又其等に對して嚴格な支配者であらねばならぬ。愛の未來の幸福は此愛から始まり、幸福な未來の人類はこれより來るのである。

現代人は傳來道德と其の道德を破壞して得た新道德のもとに生活して居る。愛に於ける

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

靈性及び官能が一致する前に、換言すれば男女間の唯一の道德的基礎として此の一致が認められる前に、人は此の新術の道德に超越して居なければならぬ。

才能のある人、並びに婦人の權利を偏頗に左袒する人々は、愛の基底である低級な衝動が科學的に分析され赤裸にされたならば愛の發達は全く異つた進行をとるであらう、と考へて居る。彼等は云ふ。優れた人々は彼等の感情を飾る事なく無遠慮に、動物的に、彼等の衝動を滿足させるであらう。さもなければ彼等は其の衝動の影響からは獨り離れて、愛によつて消盡される其の活力及び情緒の力を、他の高尙な目的のために專心用ひるであろうと。

此の見解のうちに不可能と思へるものはない。婦人は母たるの作用を行ふために多大の生理的、心理的の精力を費す故に彼女の智的產物は重きを置かれるものではない事を、私は幾度も〳〵指摘して置いた。私が若年の頃直覺的に假定して置いた其の事を後に專門家が證據立てた。或るフインランドの醫師が、如何に下等動物の活力は生殖のために集中されるかと云ふ事、けれども高等人類は彼等の活力の大部分を生殖に計りは用ひないと云ふ事、又此の子孫を造る事に費されない力は智的產物のために保存し得ると云ふ事、人間活力の此の二方面の生產力の各々が或る範圍迄は他の一方面の發達の力及び能力を制限する

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

事、等を明瞭にした。又彼は、これが文明人の生殖力の減少した自然の原因である事、悲觀論者の說に從へば、これが預言された戀愛衰微に於ける有力な要素である事、等を論じた。

けれども此等に反して、私の愛に付いての概念に從へば衝動を比較的弱くする事によつて、又其の衝動を科學的に分析する事によつて却つて愛は勝利を得るものである。人は最早や愛と衝動を取り違へるやうな事はしない。勿論愛のうちには始終此の衝動が存在する。けれども其れは、大古に於ては穴居人の岩に彫つた彫物が、ミケルエンジエロの彫刻物にも現れて居ると同じ意味である。愛が、トーローの趣味ある言葉をかりて云へば、唯赤い光でなく、ものを輝す光になつた時、人は彼の全力をもつて愛する事が出來る。人が有つて價値ある幸福と其の愛がなつた時、何となれば愛は審美的創造であり、宗教的崇拜であるから、又相愛する二人の完全な結合が一ツの新しい生命となつて現れた時、そして其の子供が後に生を受けた事を眞に感謝するであらう時、其の時に於て、人は始めて、如何なる富を人生は愛を通じて持ち得るかを知るであろう。人類の改善を計るには、習慣及び感情の變化が根本的に必要である。法律の影響は其れに比較すると甚だ僅かなものである。けれども前にも云つて置いた通り、法律は又法律の役目を有つて居る。殊に惡質が確かに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

遺傳されるやうな場合には社會は其の結婚を妨止する權能を有たねばならぬ。獨逸及び亞米利加に於ては、此の方面に關して既によき發案が出來て居る。其れば結婚の義務的條件として兩當事者の精密なる健康證明書を法律が要求するのである。勿論個人は選擇の自由を有つて居るのだけれども、今日の習慣であるやうに、事情を知らずに結婚して、彼等自身、並びに後に生れる子供が不幸に陷らないやうに法律は干渉するのである。徴兵に身體檢査が必要であると同じやうに結婚の資格に關して健康證明書を得る事は社會のために要用である。徴兵の場合は命を棄てるためで、結婚の場合は生命を造るためである。徴兵の場合は今日迄は結婚の其れよりも嚴粛なものとして見られて來た。けれども漸々と目覺めつゝある社會良心は此の方面の進歩を要求すべきである。これより新しい習慣が追々發達して行く事は考へられる事である。其れ以上の法律の干渉は無益であらう。人類は、あらゆる自由の中の最も危險なる自由、則ち自己の滿足を得るために不具な子供を生むと云ふ、此の自由を斷念しなければならぬ。けれども結婚禁止によつては不健全な子を持つ事を制限出來ない。何となれば群集は結婚外に親となつて、子供から可能な健康と幸福を奪ふであらう。彼等は心身の惡質を子孫に負はす事を、猶、續けるであらう。

婦人を知らない故に、從つて戀愛の經驗などを有たないニイチエの此の問題に關する說

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は注意する價値の少ないものであるが、それでも彼は兩親の義務に關しては同時代の誰よりも深刻な意見を發表して居る。彼は、結婚の名のもとに如何なる不純、如何なる貧弱がかくされてあるかを見た。彼は教育が如何に無主義で卑劣であるかを見た。彼は彼の述作の中に、豫言的な詩的な言葉で親たる目的、又眞の親とは何であるかを說いた。

我は望む。汝の勝利、汝の自由が子のためにあらん事を。汝の勝利、汝の自由の生きた紀念碑と汝の子をなせ。

汝は汝以上の子を造らざるべからず。されど我汝に云ふ。かくなさんには先づ第一に汝の心身を確實なる基礎となさゞるべからず。

汝は單に人種の繼續者たるなかれ。汝によつて人種を向上せしめざるべからず。眞の結婚をして此の目的の援助者たらしめよ。

汝は自ら廻る車の如き、自動力ある、一層高尙な人物を造れ。則ち汝は創造者を造れ。一ツを創造する二個の意志を我は結婚と云ふ。創造された一ツは其の創造者なる二個よりも偉大なるべし。相互ひの尊敬、則ち相愛すると云ふ一ツの行爲により二ツの意志を結び付けるに適する尊敬を、我は結婚と云ふ。（第二章終り）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

短歌十首

與謝野晶子

大阪の人某氏延若と改名せんとする俳優延次郎に贈る歌を代りて詠めと云ひければ。

わが若き延次郎の名の惜しきこと限りもあらずきはまりもなし

戀男紙屋治兵衛の頬かぶり治兵衛が惜しや名をば變へやる

加茂川の夕涼みにも千鳥きく冬座敷にも延次郎話

西京の舞子のむれの美しさそれに適へる役者延次郎

延次郎ののぼりなびかぬ南座はすさまじかりき圓山のもと

木屋町の宿屋はよしや延次郎の樂屋太皷の音のひびけば

聲いろに延次郎出せばその顔をすだれかかげて覗く舞姫

とことはに京の舞子に見はやされ老ゆることなくあれ延次郎

福助になまめかしさの及ばずと舞子はしらずよしや延次郎

かの人もいかにかなりし延次郎に顔の似たりし女ともだち

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

初戀のなりゆき

岡田八千代

七

けれ共多勢に無勢で、ともすると私達はよくうつかりと運動場に立つてゐる處を女生の一團と男生の一團とが手をつなぎ合したうづまきの中などに取り圍まれる事などがありました。そんな時には次郎さんは直ぐにいつかの櫻の大木の處に走けてゆきました、そしてその木につかまつて倒されないやうにしつかりと立つてゐました。いつも逃げてしまはふと思ふ私も大きなうづまきの爲めに遂には其處まで追ひ込められてしまつて余儀なく二人は人々の嘲りの的にならなければなりませんでした。けれ共次郎さんも私もその爲めに泣くといふやうな事はありませんでした。二人は互ひに櫻の幹を支へにして面白がつて叫き散らす人々の顔は見ずに、ひし／＼と人のくさりに取り巻かれて痛いのに堪へながらもぢつと一ト處を見詰めて立つてゐるのでした。さうする中には人々もやがて興がさめて散つてしまふのが例になつてゐたのですが、私は何となくその苦痛を逃れた後は本意ないやうな心持でした。次郎さんも時折「またうづまきがあると好いねえ。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

など丶學校の歸りに云ふ事などがありました。そのくせ二人共に、よくその爲めに頰や手などを櫻の幹の荒い皮の爲めにすり剝く時などもあるのでしたが、そんな事は互ひに只苦しくて樂しい一つの思出になるのみでした。その頃はよく學校の便所の羽目や通學の道の板塀などにも私達二人の名はみだらな文句とともにたえず記されてありました。次郎さんと私とはよくそれをたんねんに消してあるきました。そして二人はさうした卑しい誘惑には少しも犯される事なしに只淸らかな細かい友情の中に一年の年を經てしまひました。

その時、突然次郎さんは町の中學校へ移つてしまつたのでした。私はどんなにがつかりしたでせう、丁度夢中になつてつきかけて居た手鞠を不意に取り上げられたやうなあつけ無さと恨めしさとに暫くはたゞ呆然と氣ぬけがして、無暗ともの悲しい淋しさの中に日を暮しました。

それにしても何うしてあれ程仲の好かつた私に一言の話もなしに轉校してしまつたのかしかも噂に聞けば學校が代ると同時に次郎さんは寄宿をしてしまつたらしく、夕方になつて時折その人の家の近所をさ迷つて見ても夫らしい姿も見かけず、只裏さびしい街燈の光が薄白い黄昏の門のとぼそを力無く赤黄ろく染めてゐるばかりでした。

私は學校から歸ると其儘ぢつと自分の室にばかり引き籠るやうになりました。古机と古

簞笥と古人形とが僅かにその後の私の友達でした。机は東京へ出てゐる兄の使ひ古しで、簞笥は母の嫁入當時のもの、その中でもたゞ古人形のみが私には懷かしいものでした。

その人形にはもう古けた白茶地へ朱が剝毛染になつた上へ黑い鳥を染めた縮緬の小袖が着せてありました。髮のおちごもいつかそゝけて、狹くしりた糸錦の帶もいつその結び目を解いたとも聞かず塵埃にまみれてゐるのでした。

「お袖ちやん。」これが人形の名でした。

この人形はいつの誰が持つたものか、もう昔から家に傳つたものだとの事でした。

私は此人形についてこんな夢を見ました。それは忘れもせぬ私が七ッの時の御節句の晩でした。甘いとも思はず過した白酒に醉ひ倒れて私は雛壇の前に眠つてしまひました。近所から呼びあつめた子供達は私が寢てしまつたので一人二人と時の間にみんな歸つて行つてしまひました。

私はフッと目の覺めた心持になりました。そして起き上つてあたりを見ました。父や母は茶の間に居るらしく、私の着た新らしい友禪の着物の腰から白足袋の先へまで、荒い糸織の父の丹前が被せかけてありました。——私はその紫つぽい縞までもまざ／＼と見たのでした。——ふらりと立ち上つた私は何の思慮もなく雛壇の前に立ちました。座敷に洋燈

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

はありませんでしたが、緋の毛絨にちら〳〵とうつるのは黒塗に牡丹唐草を蒔繪にした可愛い燭臺にともる蠟燭(らうそく)のまたゝきでした。拔けるやうに色の白い内裏樣奥樣の頰にも、艶々と灯火の影の明滅して、三色に重ねた菱餅、たかつきに盛つたハゼの花やかに飾られた上段から、中段の月の卷、箪笥長持、お歯黒染の耳だらひ金だらひ、絹行燈や化粧道具、とずつと見下して來た私は、下の段の膳部に並んださいひの側の、大きな花瓶の桃とれんぎやう、室咲は何となくひそやかに花をつけたその下に、誰が持つて來て置いたのか、お袖さんが昔ながらの古小袖に、亂れた髮を梳きあげられもせず、投げだしたやうに置いてあるのに氣がつきました。

八

私は不思議な憐れみの心でお袖さんをぢつと見ました。その憐れみの中には、嘲りの心も悲しみの心も、はた笑ひの心もいつくしみの心も含んでをりました、どの人形にしてもこの雛壇に飾られたものは、みな、髮も顔も衣も艶々と美しいのに引きかへ、お袖さんばかりは髮はそゝけ顔は汚れ衣(きぬ)は色あせて、品こそあれ、見る影もないやつ〳〵しい姿なのです。私は幼な心にも氣の毒さと笑止さに、思はず手を延ばしてお袖さんの艶はあるが薄汚れたその冷たい頰ぺたをちよいと突いてやりました、（お袖さん、お案じでないよ、私が

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

愛にゐるよ）と云ふやうな心持で――

するとまア如何したと云ふのでせう、堅い木彫から塗り上げてある筈のお袖さんの頬が私の小さい指の幽かな力に、押されるまゝにソィと凹みました。私はアッと聲を立てました。その時私の目がほんとに覺めたのでした。けれども、糸織の丹前も、蠟燭の燈も、そして花瓶の下のお袖さんも、夢の中の氣色と少しも變らず私の眼に寫つたのでした。私にはどちらが夢か判斷する力がありませんでした。そして恐さに思はず、

「母アさん。」と怒鳴りました。

「何だねえとんきやうな聲を出してさ。」

と母は相變らず叱言を先に、それでも直ぐに私の側へ來てくれました。

「お袖さんをしまつて、お袖さんをしまつて――」

と私は云ひつゞけました。それから一週間ばかしと云ふもの、私は熱の爲めに苦しみました。けれどもかう〳〵とその時の事を云ふのは恐ろしいのでつい誰にもお袖さんの話をする氣になれませんでした。病氣が癒つてからも私は暫くの間、夜になると（寢るのは厭だ、夢を見るから厭だ）と云ひつゞけて人々を困らしたさうでした。それを少しも覺えてをりませんですが、お袖さんの頬の凹んだ時の恐さはいまだに思ひ出してさへ氣味が惡く

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

どうしても夢では無かつたやうな心持がするのです。

節句もすんで雛壇が片付けられる時になると、お袖さんはまた私の室の簞笥の上へ載せられました。私は恐いから一處にしまつて貰ひたいとは思つたのですけれど、さう云へば譯を聞かれて、その譯を云へば必ず笑はれてしまふ事を知つて居た私には、どうしてもお袖さんを私の室から除つてしまつて貰ふことはむづかしい仕事でした。その癖、私はどこへ行つても、どんなに遲く歸つても一度お袖さんの顏を見なければ安心が出來ませんでした。私は夜きつと寢る前には燭臺などつけてはゞかりへ連れて行かれるついでにきつとお袖さんの顏を見にゆかなければ氣がすみませんでした。そうして母でも下女でも從いて來て貰つたものに高々と燈をかゝげて貰つてそしてよくしつかりとお袖さんの顏を見て――その頰の凹んで無いのを見　――からでなくては決して眠る事はしませんでした。これには母も私の强情に負けて何とも云ひませんでした。强いて拒んだならば、また私が熱でも出しはしないかと云ふ懸念の爲めに弱くなつてゐたのではないかと後になつて私は思ひました。

思はず私はお袖さんの事ばかりを長くお話してしまひましたが、次郎さんに別れた後の私の唯一人の友達としては此お袖さんがあるばかりでした。私は學校から歸ると直ぐ此室に這入りました。そして夜食が濟むと又此室に這入りました。そして一言の斷りもなしに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

次郎さんに捨てられてしまつた口惜しさと悲しさとさみしさとの思ひを籠めた私の眼をちつとお袖さんのその瓜ざね顔に投げかけるのでした。

「なぜこの頃はお前はちつとも運動に出ないのだい、毒ぢやないか。」

以前には私が學校をしまつて歸ると直ぐに次郎さんの家の方へ遊びに行く私をやかましく〳〵云つた母は、この頃になつて、打つて變つたやうに私を遊びに出さう出さうとつとめました。そして夜の御飯の折などに父が居ると、

「あなた歌子はこの頃どうかしてゐるのですよ、默つて室にばかり居るのです、ろくに私にも口を利かないのですよ――ほんとに厭な子だよ。」

などゝ云ひました。父は例の通り無關心でたゞ母の言葉の毒々しいのを笑つて、

「内に居るも好いが身體を惡くしちや不可ん。」と云ふ位のものでした。

私の心はだん〳〵と沈んでゆきました。母を信ずる事が出來ずに淋しいと思つた私は、次郎さんに逢つてどんなに私の心が柔らいだかは知れなかつたのです。それがまた次郎さんのあまりにすげないやり方に逢つて、私の心はまたやう〳〵荒んでゆかうとしました。

その時私は計らず次郎さんの手紙を受けとりました、そして私は思ひがけぬ事を知りました。（未完）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

薄すみいろ（三回）

奈々子

私の此日頃は、眠つてゐるのでなく目ざめてゐるのでもないような日が續いてゐるので、神經ばかり高じてゐました。間をへだてゝゐても、誰かしら語つてゐることが自分の身についてのことだと、すぐに心に響いて、すつかり聞逃すまいとするように聞きとりました。それでいつとなく私といふものは、此度嫁られる家から望まれたのは初てでないことも知りました。跡取り息子の方へと云つたときもあつたさうでしたが、それが纏らなかつたので、此度は次男にもらふのだといふのでした

それから次男の品行の惡いことも、わたしの兩親は知つてゐるといふこともお君ちやんが洩らしました。横濱の方の大店へあづけてあつたのが、松代から惡い遊びをおぼえて幾度父親から勘當されたか知れないのを、母親のとりなしで、堅氣から嫁をとつてそれを規模に別家させて貰ふのだといふことや、おしゆんちやんを貰へは堅くなると云つたからと、先方の親達が云つてゐたそうで、お父さんもお母さんも滿足してゐるといふことも聞かせてくれました。

家内のもの丶なかにも私に味方をしてくれるものもあれば、出入りの人のなかにも氣の毒がつてくれる者もありました。けれど其人達は表向きから、わたしの爲になるようなことは云つてくれる資格がありはしません。わたしの枕許へきては小さな聲で、なぐさめるつもりで何やかと聞かせてくれたりしました。其人達の云ふのによると、わたしの兩親は婿の氣質なんぞはすこしも知らないで、すつかり先方の兩親にまるめられてしまつてゐるのだと云ひました。手のつけようのない懶惰者へは、賣人上りではいけない、すこしは押のきく實家をもつてゐて、順從な子をといふ注文に私が撰りだされたといふことや、親さへ承知すればすむからと井口が骨を折つて仲へはいり、話の進むようなうまい事ばかりお母さんの耳へ入れたり、面白い御酒の席へ度々お父さんをお招きしたりして、とう／＼結びつけてしまつたといふことを、大概見當のつくだけによせあつめて、話してくれました。

それに裏書きをするようなことを、時々お母さん自身からも洩しました、あの派手者の内儀はお前が死んだ末の娘と同い年なので、以前からほしがつてゐたのだとか、實の娘だと思つて、これからは二人連れで諸方へ出かけるといつたの、私のもつてゐるものはみんなやりますの、新調(こしらへ)るものはみんな態(わざ)と派手好みにしてあるのも其つもりだからのと、わたしがそれを悦ぶかとでも思つてでせう、

「好いぢやないかね、そんな姑が鉦太鼓で探したつてありやあしないよ。私もどうかさういふ氣になつて嫁が探したいよ、さうしたら、來たがるものは降るほどあるだらうね」

子供だましといふばかりでもなく、信實さう思つてゐるらしい口振りなので、惡くとるのぢやない、お母さんは長い間二人のおばあさんを姑に持つて、いつまでも嫁あしらひにされて鬱屈してゐたので、姑の氣さくなのに何もかもあとのことは大目に見てしまうのだと好い意味に母の云ふことは解釋しても、わたしの耳にはちつとも心地よくも響かなければ、それで嫁く氣にもなれはしませんでした。

お母さんはかうも云ひました。「あすこの家風はちつとも好いとは思つてゐやしませんよ。好んでやらうとは思はなかつたけれど、お前さんは別になるのだし、何もかも此方ではあすこの家の成立を知つてゐるから、乾度お前さんを大事にしてくれるに違ひないから、私のように姑で苦勞をさせまいと思つてですよ。」

さうかと思ふと、跡取りの方のお嫁さんがそれ者あがりなので、假親をして花嫁らしく來はしたものゝ、あんまりばらがきで困ると云つてゐたが、私の娘とくらべて見てもらひたいといふようなこともほのめかしてゐました。私はお母さんの、そんなつまらない意地張り見たいな野心の爲にやられるのも、お母さんが姑が氣さくだからといふ、自分の滿足

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の足しにされるのも、みんなお母さんが今迄押つけられてゐた反動だと思ひました。さうして嫁られるわたしの、此思ひの反動はどうなるのだらうとも思ひました。

わたしにもしか戀人があつたら――。わたしはそんな大膽なことまで思ひついて見ました。

そのをりに、わたしに戀人があつたら、私の心はもすこし張がついたであらうと思ひました。わたしはこんな心を朽らせて病氣してゐることはない、わたしはいくら親不孝になつても好いから、乾度連退いてもらはうにとも思ひました。戀人でなくつても好い、わたしの心一つで思つてゐるだけの人でも好い、さういふ方さへあれば、わたしの心はどんなにか強いだらう。其方の方ばかりを一心に見詰めてゐて、わたしはどうしても嫌ですと死ぬような目に逢ふまでも、強情を張りとほさうに、わたしには一心に縋つてゐたいにもさう云つた縋りどころがありませんでした。わたしは自分の涙に體も心も朽させてしまうほど血の涙を絞つてゐても、どうしていやなのかといはれては、自分の心の厭つた、自分の魂の許さない男に、大事な操をよごされるのは、死ぬより嫌ですといふことが、どうしてもお母さんに分るように云ふことも出來ないし、自分自身にもどう解釋をつけてよいのかさへわからなかつたのでした。

私はつくづく、戀人がほしいと思ひました。かういふ果敢ない思ひを抱いて、自分と自分の成行きを憎み、生てゐたくもない體と心をもつてゆくものを、助けてくれるのは戀人ばかりだらうと思つてゐました。女の魂などといふものは自分のものぢやない、自分のものだと思つてゐても、ちつとも自分で大切にしてやることも、撫恤つてやることも出來はしない。救つてやることも出來はしない。といつて親のものでもない、親は自分の所有品と同樣に、どうにでも扱かへると思つてゐるかも知れないが、さう手安く取りあつかへるものでもない、まして同胞の自由にもならない。預けておくのは信じきつた戀人の胸ばかりであらうに、わたしには確かりと預けておくところがない、縋つてゐたくても投げあたへられた綱がない。

わたしは自分の運命を、自分でつくることの出來ない意氣地のない女でした。さうしてあせりながら、富士の山の須走りといふところを辷りおちるように、ずるずるずると、引おろされてゆかなければなりませんでした。わたしは一日生てゐるのは、一日だけ自分の心の墮落だと知りながら、どうすることも出來ない、死ぬだけの決心もつきかねて、すこしでも生を樂しまうとする見えない慾のために苦しんでをりました。

わたしの戀は自分の心の領地に自由でした。わたしは異性の人に逢ふをりが多くなかつ

たので、わたしの戀の根を植ゑつける人には逢ひませんでした。わたしの戀の自由境には、わたしの空想につくりあげた人が時折往來するばかりでした。時代は、室町時代の武家のこともあれば、鎌倉の殿原になつてゐるをりもありました。わたしも徳川の末の屋敷娘になつてゐる氣の時もあれば、下髪の大時代の妻になつてゐるときもありました。それはほんの、解物をしてゐる、縫糸を如く間だけの短い戀もあれば、ふと庭の面などを見てゐて、涙ぐんできた眼に、五彩の虹がまぶしすぎるほどの強く燒きつくような幻影を眼瞼の裏に見ることもありました。櫻を生けて寐た春の夜の夢が、明けてもさめぬことがあつて、その夜降りだした春雨のように、二日も三日もつゞいて、たれこめて思ひこんでゐる時もありました。日が出るとともに心の帳の影から戀人は歸つてしまつて、さういふ時はわたしもはれ〳〵と氣が輕くなるのでした。さうした私の思ひ人は、幽雅で、思ひやりの深い勇氣のある、一面に豪放な町奴式のところもあれば、大宮人のような雅やかな趣きもあり、義理がたい武士の血潮もふくんでをりました。

その何もかもを持つた人でなければ、わたしは妻にならないといふのではありませんが、せめて斷片だけも持つ人と認めてから、取極めてもらひたかつたのでした。それはこんどの人もお腹の底の方には、すこしばかりさういふところはおるかも知れませんが、たつた一

度とはいへ、はじめて逢つたときが一番其人の心持ちがよく知れるものですのに、決して私にはあの人と融けあふような心地にはなれないと、どう考へて見直して思はれるのでした。それでもこれも我儘なのだからかも知れません。けれども、我儘なのならば、たとへどんな悪い噂を聞いてゐませうとも、自分であの人ならと思へば耳にもかけはしません。そして私といふものはちつとも斟酌なしに自分を押通して、兩親の心持ちなんぞを酌んで、病うような弱虫にはならなかつたらうと思ひます。お母さんは顫へてゐる私の魂の吐息を聞いて下さるには、あんまりありふれた推量のしようでありました。

「男撰みをするような、そんな浮氣な娘ぢやあない。」

さういつた信念がお母さんの胸にはありました。固くさう信じてゐてくださるのは有難くつても、顔かたちが氣に入らなかつたばかりで、いつまでふててゐるのだらうと思ふただけでは、生の親でも子の悩みはしれないものなのかと、泣くより胸が痛みました。

これまで縁談の申込みのあつたことも、耳にしたのはすくなくもありませんでしたが、さう何時も顔を赤らめてばかりはゐませんでした。さうして親を信じてゐる心安さは、どうせどれか一つに極るのであらう。其時は乾度改めてなんとかおつしやる。わたしは親も許し、自分の耳にもとまつて反感をもたないほどの人ならその時はいといへば、よいので

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さういふ人のあるまでは返事をしなければならない都度、微笑つて座を立つてしまうか首を振つて斷はつてしまへばよい、かりにも私を生んで下さつたお母さんが、私を育てながら氣質も知つてゐてくださるのに、私の嫌いなものぐらゐは知つてゐらしやるからと、平々凡々に淡い考へをもつてゐて、太平無事な日をおくつてをりました。それがどうでせう私は信じてゐたお母さんから、地獄の底へつきおとされるような氣がして、縋りつかうとするご惡鬼のような顏をして睨められるような悲しさを、現にも夢見るようになりました。

一度かういふことがありました。ある時ある男がたづねてきて歸つたあとで、お母さんがわたしにむかつて「あの人がお前がほしいのださうだよ」と云はれた時に、わたしは家中に疾風を起すほど駈出して藏の二階へとぢこもつてしまひました。お君ちやんが來ようがおつちやちやんが來ようが、二階へはあげさせませんでした。さうして御飯もたべずに泣いてゐたので、

「さつさと下りてこないか、お母さんの云つたことは極まつたことではない、戯謔なのだ。」

父親に下から怒鳴られてことがありました。私はそのとき一心になつて、四つ谷怪談のお岩樣みたいな方に願つたら、此緣談はやめになるだらうと思ひついて、簞笥へ顏をぴつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たり押つけたまゝ「どうか破談になりますように」と、膏汗が出るほど一心になつて祈つたときに氣のせいかぐらぐらと二階が動いたように思ひました。それゆゑ親が聲をかけてくれた時に、戯謔だといつたのを疑いませんでした。お父さんが戯謔にしてしまつてくれたのは、みんなお岩様のおかげだと信じてゐましたから。

　そんな事もあつたので、なまじ私に知らせると、調ふものも破れると思つて親の慈悲で取極めてしまつたのかも知れません。專斷な、壓制な親だと怨むのは重々濟まないことでせう。けれど、けれど、けれど、子だとて別の魂をもつてゐます、私だとて親のお影で生て育つてゐる外に、わたし自身といふものも生てゐます。悲しいけれど、親不孝といはれても私自身も可愛さうだと思ひました。（未完）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たゞ一人

加藤みどり

弓子は不圖眼が醒めた。每晩消して寢る筈の電燈が其の夜は薄く淡く六疊の室内を照らして居た。雜誌を讀みながら眠つた事に漸く氣づいた。床に就いたのが十二時頃であつたのを思ふと既う夜は餘程更けて居るらしかつた、例も夜半に眼を醒ましても直ぐ安眠を續ける事が出來るが、其の夜に限つて何うしたのか頭腦が妙に引きつつたやうに悩み出して而して胸元が押しつけられるやうに苦しくなつた。さん〳〵思ひ悩むだあとのやうに種々の苦痛が一杯小さい胸に押し込められてあるやうな重い息苦しさを感じた。

一體何うしたんだらう。胃の惡い故か知らんと自分でも考へて見た。矢鱈溜息が出る。胸に詰められた其の蟠を溜息をする度に吐き出されるやうな心持がする。後頭部の筋がピクピクする程痛む、その痛苦が押しつけて居る括枕に響いて、胸の高い動悸と一緒に何とも云へない不快の波を全身に傳へる。弓子はどうかすると斯麽夜のある事を思ひ浮べた。其のうちに五體の苦痛ばかりではなく云ひ知れぬ心の悲哀が夜の寂寞の裡に自分一人を襲つて來るやうな氣がして來た。斯う云ふ心持の押しよせて來た時は丁度黒汐が滿ちて來る

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

やうに弓子は自分で其の厭な氣分をどうする事も出來ないのをよく知つて居る。孤獨――何とも云へない寂しさが蟲もなかなくなつた秋の暮の寂しい夜の聲と交つて犇々と弓子の身體を取り卷いて來る。良人はと見ると後向になつて平和な眠をつゞけて居る。子供はと見るとこれも一日遊び疲れて長い靜かな呼吸を規則正しくして眠つて居る。何か知らんすべての者から忘られ、捨てられ、かけ隔たれて、一人ぎり人生の荒寥たる砂漠の中に捨てられてあるやうな氣がする。弓子は折々冷かな人の眼を白眼視して事につけ、物に觸れて自分の此の世に生れて來た運命を呪ふ事がある。親も兄弟も、果た良人も、我兒も、友人も皆自分一人を苦しめ虐む爲めに存在して居るやうにさへ極端にさう思はれる時もある。それは弓子を一層病的にさせる原因となつて來た。それと云ふのも弓子は妊娠中なので、さうしたヒステリカルになる時は良人の雄二郎は只啞然としてなす事も知らない程である。

然し弓子が人一倍に人生を呪ひ人一倍に孤獨を感ずると云ふのは幼い頃からの境遇に依るので、全く弓子は眞に愛されて居ると云ふ自信を持つて居る一人をも世に持たないので、從つて弓子自身も誰一人眞に愛して居る者もないのである。十歲の時慈愛深い母に死に別れて以來、只一人の父親からも、又弟妹からも一種の變屈ものとして取り扱はれて來た。雄二郎と結婚して以來も其の頑ななな心は充分に良人の愛情をうけ入れる事は出來ない程に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

拗ねてしまつて居た。其の寂しさは男の愛情の薄らぐと共に極端にまで烈しくなり身も世もあられぬ程に孤獨と悲哀に身を泣きくづす事があるやうになつた。病的なのだと自分でもさう思ひながら弓子はどうする事も出來なかつた。

弓子は又襲つて來た厭な氣分を凝乎として待ちうけねばならなかつた。過去も、現在も未來も只眞暗な運命に卷きこまれて行く。細かに自分と云ふ者も考へて見ると快樂もなければ、希望もない、それを自分で斷念める程に弓子の心は單純ではない、其れに對する反抗心と不平が世の中と周圍の者に對して火のやうに燃えて來る。それを爆發させたら大變な事になると知つて居るので弓子は凝乎と其の苦悶を自制して居た。

此の時突然ユサ／＼と氣味の惡い程家が搖れて來た。漸々其の搖れが烈しくなつて來た、弓子は初めは自分の氣の故にして居たが直ぐ地震だと氣づいた。天災――、怖ろしいあの洪水のやうな大天災が起つて此の世の中をむちや／＼にしてしまつたら何のやうに心持がいゝだらう。何のやうな學問も人力も及ばない天災が、即ち自然の力が蠢めいて居る此の世の穢い動物を一掃してくれたらあゝ何のやうに痛快であらう……其麽事を考へて居る間もなく地震は事なくて止むだ。

『大きな地震だつたね。』

眠つて居ると思つた雄二郎は夢のやうに斯う云つた。子供は不意に半身を起した。

『地震だね、母ちやん。何故(なぜ)動くの。』

私の返事も待たずに子供は直ぐ又顔を臥せて眠つてしまつた。

再び沈默が續く。弓子も夜の沈默の中に引き入れられて行つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

まあ厭だ。先程の地震ですつかり家が壞れてしまつた。雨漏り(あまもり)が古疊を一面に濡らして居る。見上げると天井はガランスで、土壁が何處も此處も皆崩れ落ちて居る。田舍の大きな弓子(じぶん)の實家のやうな氣もするし、又現在の住居のやうな氣もする、良人は其の壞れかかつた二十疊もあらうかと思はれる座敷の眞中で誰か明瞭と判らないけれど友人らしい人と語つて居る。まあ斯様に崩れかかつた家に一寸の間だつて居られりやあしない、早く家を探して移らねば、雨がポタ〳〵頭の上から落ちて來る。何とかしなければ………何とかしなければ………さう弓子が焦れば焦る程雄二郎は悠々と友人と話して居る。女中のお梅はと見ると疊の上に雨が降り注ぐのも知らないやうに子供に繪を書いてやつて居る。焦れつたいと思ふけれど仕方がない。そのうちに雄二郎は子供と女中の傍へ來て同じやうに子供

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を相手に綸を書き初めた。弓子はむか〳〵する程腹が立つた。遂に自棄になつて、どうでもするがいゝ。呑氣つて程があると思つて弓子は外へ飛び出した。其の時は只良人も子供も女中も誰一人として自分の心持を察して與れない、自分は只一人である、只一人で何處へでも行つて見やうと弓子は外へ逃げ出したのであつた。

外は夜であつた。星も見えない眞の闇である。何でも竹垣らしいものが家を取り圍むで居る。庭の方から狹い竹垣の外の道へ出た。何處にも家らしい影も見えない。庭の中からさし出した樹々の眞黑い枝葉と、小路を挾むだ何の樹か判らない小木が黑い垣をなして居る。其の間を弓子は歩いて行つた。すると十歩も行かないうちに眞白いものが目の前にぶら下つて居る。ハッと思ふとそれは女中の入れ忘れた乾し物らしかつたので、弓子はそれを取り入れねばならなかつた。道を遮つて渡してある棹に手をかけて何思はず空を見上げると同時に、月の光とも、日の光とも判らない光線はさつと地に流れた。同時に兩側の木立の葉影が道の上に落ちた。黃ろい弱々しい秋の日の光のやうでもある、空の暗いところから考へると不思議な月の光かとも思つた。其の時、垣の中の廣い〳〵庭に大勢の人が集つて居るのが目に止つた。其處には弓子の知つて居る人々の顏が集められた。勿論良人の雄二郞も居れば、女中のお梅も居る。親しい友人の誰彼（たれかれ）、それに田舍の父親も、弟も妹も居る。

『私は今何處かへ出て行くのだ。それだのに誰一人私を止めて呉れる者はない。』さう思ふと弓子は手に持つた白い布を抱いて聲をあげて泣かうとした。刹那、庭の入口のところに我子の影が見えた。さうだ。芳坊だけは母ちやんの味方だと弓子は急に泣き聲を止めて我子の方へ馳つて行つた。ほんの五六歩だと思つた間が隨分遠い。急に芳坊が大きな聲で泣き出した。

『母ちやんが、僕を殺すよ。母ちやんが……』と云つて庭の中の群集の方へ馳つて行く。

『ゝゝ母ちやんが、何故、何故、芳坊を殺さう。』と口に出さうとしたが出せない。子供迄がと思ふと弓子は口惜しく胸が引き締つて來た。すると前後から良人の雄二郎と故郷の父親とが刀を拔いて自分に向つて來る。

『大事の、大事の芳坊を殺す者は殺してやる……』其の聲が弓子の前後から押しよせて來る。弓子は子供の姿を見失ふまいと唯後を追つて行く。壞れかかつた大きな古家の石段の前に立ち並むだ弓子の友人達は手を叩いて笑つて居る。子供が逃げまどう聲と良人と父親の迫つて來る聲とが弓子の頭を攪亂する。弓子は叫ばうとした。子供の名を呼ばうとした。何で芳坊を母ちやんが殺す事が出來やうお前までが母ちやんを捨てるのか……芳坊や、芳坊や……………力一杯に叫ばうとした時、……………………あゝ其の時弓子は良人の大きな手で

揺り起されたのである。

「かあちやん……」

傍に眠つて居た子供は飛び起きて弓子に縋つて泣いた。弓子は良人の腕の上に夢の名殘の悲しみの涙をハラ〲と落して胸の動悸を兩手でおさへて居た。

女中も女中部屋から起き出て來た。

弓子は良人の手と、我子の肩を抱いて何時迄も〲泣いて居た。

左の人々の集りなる「ボクノ倶樂部」は今月「僕等はどうなるか」と云ふ月刊雜誌（一部三錢）を日月社から出すさうです。

一、編者より	同人
二、のたれ死まで	武林夢想庵
三、僕等の闘ひ	淺海孚一
四、そむける心	藤井黎白
五、無我苑解散後	安藤枯山
六、未定	江部鴨村
七、師友より	生田長江
八、雜話	外數名 同人

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

最初の家

五明倭文子

一

「みーさん、よく來たね、僕どんなに待つてゐたろう！」

淳は恁ふ云つて、美穂子のきやしやな身體を抱きよせた。美穂子は蒼白い顏を淳の胸にふかく埋めて、咽ぶように泣いた。黑いサラ〳〵とした髪の亂れが優しく男の手首にふれて、熱を持つた身體のかすかな顫えを感じると、淳はふかく心の奥にまで、そのいぢらしさが食ひ入るように覺えて、知らず〳〵強く抱きしめるのであつた。そしてわなゝく赤そうびの莟のような唇に、自分の頰を近つけた時、廊下に人の來る足音がしたので、二人は靜かに身を離した。

足音は直ぐ隣りの部屋に這入つた。卵色に銀の青い襖地を左右に、幾つかの部屋が續いてゐるが、客は隣りの部屋と此處丈であるらしい、椽先の早や朝夕は涼し過ぎる雨戶を通して、中庭の高い常盤木の間から快い薄藍色の空が、靜かな夏の午後を偲ばせてゐる。

美穂子は強い抱擁の後の、上氣した頰に淚の痕の、泣き濡れた、はれぼつたい瞼を伏せ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て大儀そうに白い腕を臥臺の隅についた。一夜をまんじりともせず、トンネルの多い汽車に搖られて今朝早く東京へ着いた、まだそのまゝの黒つぽい御召の單衣に帶丈取つて、赤の多い伊達卷を、細い胴にきゆつとしめたのが下卑てゐずに、艶めかしくて可愛らしい姿である。

「とう／＼來て了つた、とう／＼家を出て了つた」

恁ふ云ふ悔ひと悲しみとが心の底の何處かに潜んでゐて、それが絶えず美穗子のあどけない表情を奪つて了ふように見えた。淳は美穗子がその悔ひを決して自分に見せまいと、つとめてゐるのがよく解つてゐた。それ丈に淳はまた一層に美穗子が可憐しくてたまらないのである。

男の烈しい情慾の衝動にかられて、抑えがたないその念を僅かに筆に綴つて、いとしい美穗子に送りやつたのであつたが、それが怜悧な美穗子の心を恁ふまで動かそうとは全く思はなかつたのである。

此度上京する前に、淳は美穗子の家のある町へ、人知れず立ち寄つて來たのだつた。松井と云ふ美穗子の從姉は淳には一番好意を持つてゐる女で、その時も、淳との關係が知れて父親が上京して俄かに美穗子を連れ歸つてからは、一人では外出も許されぬ程にきびし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

い監督の中にゐる美穂子を二時間許り呼び出して、淳に逢はしてくれたりした。暑い盛りの八月の午後で、松井の離座敷に淳が一人で待つてゐると、美穂子は一人で這入つて來た、一月程見なかつた間に、美穂子はいたくやつれた姿になつてゐた。うすもの丶荒い縞の單衣が、その痩せた小さな身體を一層いた〳〵しげに見せた。美穂子が自分に別れて、どのように淋しい悲しい朝夕を送つてゐるかを、よく察する事が出來た。美穂子もまたその再會の嬉しい涙の中に、可憐な胸の中をかくさず展いて見せた。その夕べ、別れのきわに淳は、いつそ二人は暫らく何處かへ逃れて了ふではないか、と、云つた。併し美穂子は割合に落ち付いてゐた。愛する男と自分との他にまだ〳〵幾多の眼が輝いてゐることを彼女は忘れなかつた。

「貴方と私と二人限りの世の中なら………」

之は美穂子のいつも云ふ言葉であつた。美穂子には何故か親しみがたい、たゞ冷淡だとのみ思はれる父親と、母親の生前から父親とは關係があつたのだ、と云ふ繼母と、意地の惡い祖母と、その上に美穂子には許嫁の男があつた。その男を美穂子は最初から嫌つてゐた。

「私、あんな男は大嫌ひ、それは先方では私を可愛がつてはゐませうけれど、私はどうし

ても否ですの」

美穗子はいつも父親の壓制なやり方を、淳に訴えるように云つたりした。其男は中學を卒つた時分から、美穗子の家で一切世話してやつたので、來年はもう大學の醫科を卒業するまでになつてゐた。淳は美穗子に接する度にその背後には一つの、まだ見ぬながら黑い影法師が絕えずつき纏ふてゐる、不快さを自ら打ち消すことにつとめて來たのであつたが、其影の主は今、歸鄕して美穗子と一つ家に朝夕を共に送つてゐるのだ、と思ふ時、彼は云ひしれぬ或るさびしさと、さゝやかなる嫉妬とを感ぜずにはゐられなかつた。

「彼女に限つてそんなことはない、斷じてない」と、思ひながら尙彼は怪しい念に日夜なやまされた。

美穗子がその男に無理に手籠めにされたり、魔醉劑をかけられて死人のようにさせられたり、そのために美穗子が狂氣して入水しようとする、淡い幽靈のような姿を夢に見ることなどもあつた。淳はまるで捕はれたる人のような、たゞ懊惱の中に幾日幾夜かを送つてゐた。勉强、努力、忍耐、之等のことは今自分に取つて最も大事な務めである、と思ふ思ひながら、淳はもう自分で自分をどうすることも出來ないような心の狀態になつた。そして美

穗子が思ひ切つて家を飛び出すと、云ふようなことは、とてもなし得ないであらうと諦めてゐたのであつた。

「美さんはこれからどうしやうと云ふつもりで、出て來たの？」

淳は何氣なく云つて、横になつてゐた細い身體を起した。

「どうするつて……それは貴方のお考へ次第ぢやありませんか」

美穗子は涙に濡れた黑い大きな眼を上げて、男の心をさぐりたい、とのようにその顏を見ながら云つた。

淳は紙卷の靑く煙の中から、白いきれいな齒を見せて笑ひながら、

「そんなに直ぐおこらなくてもいゝじやないか、それは僕にだつて思慮はあるよ、まア安心して、もつと氣を落付けるがいゝね」

と、云つたが自分にも今どうしやうと云ふ纒つた考へは浮んでゐなかつた。

やゝ暫らく二人は沈默のまゝで互に何か打ち案じてゐるらしかつた。ゆふべおそく電報を受取つて、今朝早く兄の家を拔け出して來た淳は懐中にも、少しの貯へがなかつた。

「今頃兄は心配してゐるだらう」

淳は一人でそう思づて見た。此兄と云ふのも、美穗子と自分との關係は早くから氣付い

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

てゐて、そのためにいろ〳〵心配もかけた。つい此間もわざ〳〵遠方まで行つて、例の松井と云ふ美穂子の從姉にも逢つて、互にその親達を說いて見ようなど丶、相談をしてくれたりした。此兄の他にまだ多くの緣者が淳にはある。そしてそれ等の人達の眼がいつも注意ぶかく、自分に注がれてゐることは淳自身もよく知つてゐるのであるが、今恁ふして自分のために總べてを放擲つて了つた美穂子に對して、自分もまた何の他に觀るところもない、美穂子の望みとならば何事も敢えて辭すまいと考へたのである。

「ネ、美さん、恁ふして二人で逢つてゐる時はもう何にも考へないでおもしろく談さうじやないか」

淳が優しく云ふと、美穂子も可愛らしい笑顔を見せて、二人は小窓の傍へ行つて長くなりながら、靜かな中に云ひしれぬ樂しいタイムを味ふてゐた。

長い夏の陽足も西に傾いて、やがて秋立つことを偲ばせる凉しい風が音もなく吹き入ると、淳の白い指から垂れた手紙の端が靑い疊の上にサラ〳〵とうねつてゆく。彼は今、是迄に二三向逢つたことのある美穂子の繼母へ宛て丶手紙を書き送るのである。どう書いてやらうか、先方の感情をなるべく傷めないように、恁ふ思ひながら何度も書いては破き破

きした。

ゆふべ美穗子から電報が來たので、今朝早く停車場へ出て見ると美穗子は一人で上京した、兎にかく停車場附近の〇〇館に憩んで、よく話をきいて見れば美穗子は御兩親には無斷で家出して來た、そして私を一途に頼つてのことであると云ふ、それを聞いて私も一方ならず驚いたのであるが、併しもふ來て了つたのであるから、そこは何事も先づお含みの上で、お許しを願いたい、美穗子がこんな大膽なことをしたのも、その責めは全く私にあるのだから、幾重にもおわび申上げる。

兎にかくこんな風に書いて、自分から一度は通知もし、斷りもして置くがよい、と淳は考へたのであつた。此手紙が届いたらきつと、繼母か誰か迎ひに來るだらう、でなくば父親自身來るかも知れない、それだと自分にも好都合である、徒に他人の噂などによつて自分を父親が誤解してゐるのは、ただに不快なばかりでなく、自分の將來にも損なことである、美穗子は父親が大變冷酷な人間のやうに云ふが、そこはまた親一人子一人の中だもの、心の中ではどんなにも案じてゐるのだらう、早く此の手紙も出して美穗子の無事なのを知らせて置かふ………

淳は恁ふ思つて、封筒へ卷き納めた時、美穗子は湯上りの美しい姿になつてそこに這入

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つて來た。

「家へ出して下さるお手紙？」

お白粉の匂ふ、かたばみを染め出したしやれた手拭ひを下げて、淳のいかつい肩の横から机の上をのぞき込んで美穂子は訊いた。

「うむ」と、淳は艶めかしい強い女の香に包まれて、ぼーつとしたように、その桃の花とも云ひたい、美穂子の顏に見入りながら、ソツト柔かい温かい手を握つて、

「もふ陽が暮れる、みーさんと二人で、幾日振りの夜だらう！」

二

榎町の床屋とパンやの間を左へ折れて、坂を登り切つた處は立派ではないが、それでも兩側揃つた邸町である。

淺井と、四角な門燈の出てゐる角から、靑々とした要垣に添ふて七八間奧へ這入つてゆくと、そこに廣い空地があつて新らしい貸家が二軒並んでゐる。向つて左の見晴らしのよさそうなのが、淳と美穂子の隱れ家である。

家は芝居の道具のようなガタ普請で、それに疊數も僅かしかない狹い小さな家であるが、周圍の靜かさ、長閑かさ、隣の邸に萩や芙蓉の秋草が手入れせぬまゝに亂れ合ふてゐるな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ど、恁ふした若い二人には全く誂え向きの隱れ家である。大家は淺井と云ふ宮内省の官吏で、もう五十の坂を越えたらしい人の好さそうな主人と、痩せた色の黒い、見るからに神經の强そうな細君とが、代る〳〵來ては、親切にいろ〳〵敎えてくれたりした。

二人が此家に越して來たのは丁度廿日許り前である。それまで二人は〇〇館に泊つてゐたが、美穗子の家からは何の音信もなかつた。

「一體どう云ふ譯だろう！」

淳は自分の親の情深いに比較して見て、たゞ不思議にのみ思はれた。けれども美穗子はもう何もかもあきらめて居るらしかつた。

「いつまで恁ふしてゐても仕方がありませんから、貴方は兄さんのお家へおかへりなすつて勉强して下さいましね、私？私はまた杉本へでも暫らく置いて貰ひますから……いゝえ私、田舍の家へはどうしても歸りたくありません」

美穗子は自分のために、淳の大事な務めが一日〳〵と遲退してゆく事を何よりも氣にしてゐたのであつた。が、淳には却つてそれがおもしろくなかつた。

「みーさんはなぜそんなことを云ふの？恁ふして親の許しも得ず上京して來た者が……今更別々になつてゐる位なら初めから田舍に、おとなしく父さんの云ふことを守つてゐた

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

方がましぢやないか、」

「…………ぢやどうすればいゝのでせう?」

「いつそ二人で一軒小さな家を借りたらどうだろうね、たゞ僕に今、金の持ち合せがないから、それが問題だ、併し此んな處に一日でも多くゐる程不經濟だからね」

全くそれはさし迫つての心配な事の一つであつた。美穗子が上京の際、否な思ひもして調えて來た尠なからぬ金は、二人の小遣ひに使ひはたしてはや若干も殘つてゐなかつた。此宿の拂ひ、それも二人の氣になつてゐた。美穗子は兎にかく心をきめて、母親が殘して逝つた衣類道具を金に替えてある、その三百餘圓の貯金を引き出したのであつた。

「みーさんの金を貰つては全くすまないけれど、今どうしても僕には都合がつかないから…………」

「貴方はそんな事許り云つて……私のものは貴方のもので、貴方のものは亦私のものぢやありませんか、ぢや是で世帶を持ちませうね」

二人は恁んな言を云ひ合つて、遂に人知れず最初の家を持つたのである。

世帶と云つても、もとよりそれらしいものはなかつた。初秋の霧にかすんだ或る朝に、二人はたゞ一つのトランクを車に乘せて移つて來たのである。引越しと云ふに誰一人手傳

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ひに來るでもなく、荷物とても全くない自分達に、人はどんな眼を持つて觀察し、斷定するだろう、と、美穗子はたゞ果敢ないような、心細いような云ひしれぬ感に打たれたのであつた。併しその日は美穗子に取つて忘れがたないことのみであつた。兎にかく、直ぐにも要るべき釜や七輪、茶碗に箸、と云つたようなものは美穗子が近くの店へ行つて買ひ調えた。

瓦斯やが來たり、電燈やが見えたり、美穗子は一人いそがしい思ひをして、新らしい疊へ雜巾までをかけ、ほつと一息した時分、外はもふ眞暗に暮れて淋しい豆腐賣りのラッパの音が、彼方此方に響いてゐた。四疊半の椽の柱に身をよせて、美穗子は淳の歸りを待つてゐた。淳は午後から兄の家に出かけて自分の荷物を取り纒めたり、美穗子の親類に預けてある夜具ふとんなどを車夫に取りにやるべく出かけたのであつた。

何處からともなく魚の燒けるような強烈な油の匂ひがして、晝もまだな美穗子の食慾を俄かにそゝり出すようであつた。

「あゝ淳もさぞ疲れて歸ることであろう！何か食事の支度をしなければ……」と、思つたが、さて勝手にはまだ米も味噌も、食べるものとては何一つ調つては居ないのだ、ほんとうにまだ〳〵足りないものだらけだ……

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

此時、暗にもそれと要垣の外に男のきゝ馴れた足音がして、淳は大きな包みを下げて歸つて來た。
「大變奇麗になつたね、よく働いてくれた……一人でさびしかつたつて！　その代りお土產があるよ」
淳は部屋の眞中に胡座をして、包みを解きにかゝつた。中からは茶器や菓子皿が順々に取り出された。
「是でも京燒の上等だよ。此方は備前燒、それから是は二人の湯呑、美ーさん、いくら位だか宛てゝごらん」
美穗子もニコ〳〵してそれ等を一つ一つ手に取つて眺め乍ら、
「まアいゝのね、貴方なか〳〵お上手ですわこれが貴方の、こちらが私のね？」
「あゝ、これを女夫湯呑と云ふんだね」
夕飯には淳の誂らへて來たうなぎ飯に、その新らしい女夫湯呑で熱い番茶の香を嗅いだ。
その翌朝はさびしい秋の雨がそぼ〳〵と降つてゐた。美穗子が床を離れて、先づ表の戶を啓けて、時計を見ると早や九時に間もない頃であつた。建付けの惡い椽の戶がいくら押しても引いても動かなかつた。其度に淺い庇に掩はれた、柿の枝から青い葉を傳うて冷た

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

い雫がぽた〳〵と美穗子の肩先や襟首に落ちた。柿の實は大きく鈴なりに、形もよくて美事に色づき初めてゐた。美穗子はこんな小さな家にも恁うして秋の木の實のこのましさを見ることが出來るのだと思つた。自分の、田舍の家では母親が死んでからいろ〳〵な木の實の樹や、美しい花の樹が多く枯れてゆくことを、近所の人達は何か凶事の前兆のように云ひふらしたが、全く家でも此先どうするのだらうと、美穗子は考へた。

「ネ、お起きなさいな、家許りよ、まだ寢てゐるのは……」

何處が頭だか足だか分らない寢樣の、紫の更紗模樣の夜具の上から搖ぶつて見たが、淳は曉方になつてグッスリ寢込んでゐた。

晝食にはやう〳〵米や、酒やと間に合つて淳が土釜の前にうづくまり乍ら、無器用な手つきをして葱を一本〳〵丁寧に切れば、美穗子はフライパンで肉をてらすなど、二人はかたのように新世帶のまゝごとを初めたのである。

「甘い〳〵、恁ふして美さんの料理を食べてゐると、他處では全く食べる氣にならないね」

淳は恁う云つて、心から樂しそうによく食べたり笑つたりした。美穗子はそれを亦何よりのたのしみにて、毎日習つた料理を代る代るこしらへて見た。そうして、テンピだとか、洗米機だとか、割に高價な品までもいろ〳〵と買ひ込んだ。晝間は恁うして他愛なく食べ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たり寢たりして送つた。夜には揃つて神樂坂や江戸川邊りへ散歩に出かけた。

救世軍の感謝祭に獻金を募る樂隊や、本屋のせり賣りや、活動寫眞、バーのかゞ／＼しい光り、飴やの蓄音機など夜店はいつも賑はしかつた。殊に商家の子供達はワッショイの祭りさわぎが澄んで、池上のお會式に信徒の眞似をする群が幾つも／＼、ドンドコ／＼と、太鼓を叩き、燈籠を振り廻して此方、彼方にうねり歩いた。美穗子はそれを何よりもおもしろく感じた。二人は肩もすれ／＼にして人眼にも羨ましそうに歩いてゐた。若い書生の群がわざと美穗子の身體を押しのけて通り過ぎたりする時、淳は馬鹿らしい程憤慨してそれを庇ふようにした。二十六七の艶やかな丸髷が素袷の黑繻子のゑりに、震ひつきたいような白いうなじを見せて、ごつてり粧つた半玉と連れ立ちながら、淳に會釋して、直ぐ後に續く美穗子を振り返り／＼、して行くもあつた。美穗子は何とはなしに淡い嫉妬を覺えて、歸つてからもそれをとがめずには居られなかつた。

「貴方は、ほんとうに私に逢ふ前には何をして被入つたか分らないのね、あんな者にお馴染があるなんて……」

そんな時、淳はおもしろがつてわざと美穗子をすねさせるような言を云つた。そして互にものを取つて投げ合つたりした。けれどもしまいには、きつと淳から折れて僞りなき愛

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の習ひを見せるのが常であつた。

　朝々に秋の深さを偲はせる冷たい風が吹き増さつて、庭に下り立つ美穗子は白い素足を萩の下葉や、秋海棠の露にいとゞ濕らせた。

　彼女は身體のために裸足のまゝで庭の掃除をするのであつた。柿の實は赤く熟して、葉は黄に凋んで、淨く掃かれた後からバサ／＼と黑い土の上に落ち重なつた。柿好きな大家の細君は毎日それを取りに來て、中によさそうな實を二人の前に置き、落葉は廣い空地へ持ち出して風のない日にたくのであつた。其藤紫の煙の末が、灰色の定めなき雲の彼方に消えてゆくまで、二人は云ひ合せたように沈默の、淋しい面をして見送つてゐる事もあつた。

　二人は只管、郷里からのたよりを待つた。美穗子はやがて自分の讓り受くべき財産の一部を今貰つて、それによつて淳との生活の安定を得たいと、松井を賴んでそれを父親に訴えた、その返事を待つてゐるのである。淳は兄を通じて、これも自分の父親に美穗子との關係を打ち明け、一日も早く美穗子の實家へ交渉して貰ふべく、その父親の許しを待つてゐるのである。

　恁うして若い二人はたゞ自分達の勝手氣まゝな望みを、譯なく遂せられるものと思つて居るのであつた。（未完）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

戀の誇り

原阿佐緒

白菊に姉の娘の病むときくかなしき心なげかけて居ぬ

忘られぬひとつのことにたへずわがいらだてるこそあはれなりけり

文ひとつ書きて負債を果したるごとき安さに居る今日ぞよし

涙ぐむ日の照る畑をひそやかにわが白猫の行くを見つつも

くちづけをあたへむ來よとおほらかに吾めす人のある世ながらに

かちえたる戀の誇りも何ならぬ母とはなりてわが若さ逝く

あたたかさ肩に落ち來る小春日に物をぞ思ふ畑の細道

頬にふるる亂れし髮のそよぎにも愁そそらる秋風の中

いつまでかかなしき歌に倦まぬ身ぞとつぶやきはてず筆を投げ捨つ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

病床相思吟の二

あな寂しわがわすれゐる誰よりか文も來よなど思ふわりなさ

うす寒き秋の光を感じつつ白きわが頰にあつる剃刀(かみそり)

山の霧草土堤に生ふ桃色のきのこに降るを見て過ぐる朝

秋風に身も魂も冴え冴えと醒めゆくこころあなや寂しや

一輪のしをれし花の誘ひける愁ひに君のまなざしも見ゆ

暗らきわが心に君が唇の灯のごと見ゆるわりなき日かな

捨てばちの心のまへに兒らの顏清げに笑めば涙おちぬる

きちがひの笑ひさびたる秋の日の光に心ふとおびえける

このいく日吾の心に笑みささず白らけてぞ居るはた泣きもえず

倦み勞れし身を起すべくいと强き刺戟のほしと思ふこのごろ

風のごと跡をのこさずわが無爲の日は逝くかなし若き日はゆく

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わが心知らぬ顔にも見すごせる母恨めしとかこつ秋かな

病みあがり壁をそがひに夕されば白き槿の散るをいたみぬ

朝草を踏めば露散り素足(あし)の爪ひるがほいろに濡れて光れる

おしろいも手にとらぬこと二三月ありがひもなき山住ひかな

わが背子もけぢかくあらず見るものに山ばかり身の若さいとしも

捨てもえず保ちもあへぬものひとつわが持てる故かくもなやめる

金泥に描き出されし如くにもかの夕榮にたてる樫の木

馬の鼻撫でて語れる叔父とわが美くしと見る秋の夕月

水色の帳(とばり)に金の輪を繡ひしごとき月見る秋の夕に

ふるさとをのがるるすべを思ふより他なき日頃のわが身かなしも

豆太皷ひとり振りつつ遊ぶ兒を見つめて思ふ遠きわが背子

文(ふみ)一つ得ればその日は足るといふはかなきままに秋も暮るるか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私の見た生活

三ケ島葭

――らいてう氏の所論をよみて――

紀念號に於て發表されたらいてう氏の「個人としての生活と性としての生活との間に於ける爭鬪」を私は大へん面白く拜見いたしました。そして今迄それほど深く考へてゐなかつたことをいろいろ考へることが出來ました。私は今、氏によつて自分の考が少しでも引き出されたことを感謝するとともに自分の思つたことを少し書いて見ようと思ひます。

昨年の春まで獨身でゐた私は當時どうしても自分で衣食して行かなければなりませんでしたから、自分としては極めて不適當な職業と知りながら小學校の敎師をしてをりました。その前、女中奉公をしてをつて新聞を見る暇も無かつた私は、その當時は敎授書を讀むのも生徒の氏名を記すのも自分の「孤獨な魂の要求」――即ち自分のための勉强の一部分としての――でしたから、はじめは敎師となつたことを自分の生活の向上だと思つて滿足することが出來ましたが、私の慾望が增加し、發展するに從つて、その生活は丁度、破らなければならない卵の殼のやうなものになると同時に、さうしてゐるうちに新らしく動き出した一方の生活、氏の言を借りて言へば「人間としての個人としての私の內部生活、私の孤

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

獨な魂の要求に基く仕事」即ち自分を敎養するための讀書と執筆との邪魔をする、たゞ食べるための生活になつてしまひました。尤もその時、私に、敎師としてどこまでも立ちうるところの自信があつたら、それを自分の全生活として繼續したにちがひなからうと思ひますが、さうで無かつた私は、明かに所謂二重生活をしたのであります。一つは自分の魂の要求のために、一つは自分の職務に對する責任のために。

併し、かうは言ひましたもの丶この二つの生活はかう單純に、「要求」だの「責任」だのといふ言葉で區別出來るものかどうかといふことを考へて見ますと、私が食べるためだからまことに仕方が無いと思つて、自分に不適當な敎師をしたのも、食べるといふことが自分の要求——それが間接か直接かは後で言ふことにして——である。

以上、やつぱり自分の要求でその職にたづさはつてゐたと言はぬわけにはいかないやうに思はれます。尤もそれはちよつと考へると極めて間接なものであつたやうに見えますけれども、已に食べるといふことが缺くべからざる要求であり、さうして、食べるためにはその職業が最も適したものである以上、さうして又、私が當時撰ばなければならなかつたし、又撰んだといふ意味で、それはまた正しく私の直接の要求であつたと言ふに何の差支へも無いやうな氣がします。即ち私としてはその仕事が唯一最勝の生活であつたに違ひな

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いのです。けれどもその當時と雖も私にはなほそのほかの要求、具體的に言へばらいてう氏の所謂「魂の要求」もあつたのは事實です、そしてこれらの各々が各々の瞬間に於て私の生活の全部であつたと見なければなりません。事實に於て私の生活が、かういふ風であつたとすれば、私の前に卑めた食べるための職業も、また、私の直接の要求と言はなければならない。精神と肉體――それらを區別するのはあまりに卑屈な考であらう――とを具備してゐる人間にはその瞬間にはその何れも絶對の要求でなければならない。もし、さうで無いとしたら私たちは、眞面目な生活は出來ないわけである。だから自分たちが、一國なり一村なり一家なりに於て、その一人として生存してゐる以上、それらに對して、又、絶對の責任を持たなければ、人間としての價値は認められないわけである。それ故、自分に少しでも眞面目な人間としての素質があつたなら、自分の眞面目な要求に應じて與れたものに對しては、それが社會であつても、個人であつても、同じく絶對的の責任を感じるわけである。

かう思つて私は自分が二重生活をしてゐたやうに見えた時の心もちを思ひ合せて見ますと、自分が一時も早くなげうちたいと思つてゐた仕事に對してすら、自分が人としての自覺の前に、それに對して絶對の責任を感じないといふことは出來ないし、又それに對して

自分は否應なしに絶對の價値を奪はれてしまつたのであることに思ひあたります。けれどその責任が自分に充分果せるもので無いことは自分の本能的な全力を傾注しえないことによつて明らかであり、そしてその價値はその立場に於てのみ絶對といふまでのことでありますから、私としてまことに苦しい、いたましい、恥づかしいものであり、その苦しさ、いたましさ、恥づかしさは前からわかつてゐるのでありますからこれがもし一分間でも他の生活と並立することが出來るものであつたなら、幸福を求め、名譽を欲する私として、わざわざそんなつまらぬ生活を撰びはしなかつたらうと思ひます。けれどもそれは已に自分によつて現はれた唯一の實人生であると思つてをりましたから、その義務的な外部的な醜い生活——自分が無意識にさう思つて輕蔑してゐた——すら、それを自己の生活であると思ふと同時に、それが新たに來るべき自己の生活の內容であると思つてをりましたから愛人のため、愛兒のために、外面的に見れば分裂した生活、即ちエレンケイの所謂「美しき生活の二形式ファミリーライフとソールライフ」に於ては猶のこと數量的に之を見ればさういふ風に、自分が二つも三つもの生活をしなければならない、否、してゐると思ふ時も、實際に於ては、それが相互に爭闘してゐるといふ感じは致しませんでした。それ故か、私は氏のあの感想をはじめて拜見した時、自分が、氏の考へてをられることゝ同じやうな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ことを考へなければならない境遇、具體的に言へば、自分の勉强もしなければならず、子供の養育もしなければならない境遇にあるにもかゝはらず、生活の爭鬪といふ意味の言葉に接するたびに異様な感じを與へられたのであります。

そこで私はまづあの命題に掲げられた「個人としての生活」と「性としての生活」といふ二つの言葉によつて表はされた、各のものゝ内容について考へさせられたことを申します。何故さういふことを考へさせられたかともう一度反問すれば、それは私が自分の實生活に對して前に述べたやうな考を持つてゐるからで、それが又、氏と違つた考であるからであります。こゝで端的に私の考を言へば、私たちの生活はそれが如何なる種類のものであつても、必然に、それが性としての生活でもあり同時に個人としての生活でもあります。それ故、前者が個人としての生活であり、後者が性としての生活であるといふことは、その眞の内容に於て同一のものを、形式的に、たゞ修辭の上で對立させたに過ぎないことになります。言葉を代へて言へば、性としての生活で無ければ、個人としての生活でも無いのですから、なほ分けて言へば、個人といふものと性といふものとを別々に考へることは出來ませんから、個人としての生活と言へばそれが同時に性としての生活であつて、單に個人としての生活だの、性としての生活だのいふものは、實際に於てありうべきものと考へ

られませんから、その間の爭鬪といふことも詩的な、情趣的な考としてよりほかには考へられないのであります、更に言へば生活はそれを內的に見れば常に一體でありますけれども、それはまた、時々刻々に交代變化して行くものでありますから、それに對して各異なつた立場から、各異なつた名稱を付することも出來ます。そこで氏の擧げられた「個人としての生活」と「性としての生活」とをもし、この意味に於ての二個の生活であると强ひて推斷すれば、その二つを並べ稱することが出來ます。けれどそれであつたら、もう少し具體的な命題を與へられなければならないと思ひました。そしてこの二個の立場と言へば、それは已に前にも述べた通り、空間的に並立するもので無く、時間的に交代連續するものであるから、その瞬間に於ては必ずその何れか一つの生活でなければならないから、そこに又爭鬪なるものはありえないことになる。それを爭鬪するものと考へるのは、或る瞬間の生活と、他の或る瞬間の生活とを、各固定的のものと見なして、その概念を無理に並立しうるものとして、それを無理に爭鬪させるので、爭鬪と考へる頭の中の事實は否定することは出來ませんけれども、この事實は、上述の理由から、實際に於てはありえないものであるから卽ち、客觀的根據を持たない、單なる幻影に過ぎないものと認めねばならない。それを氏がかういふ風に考へられるのは、實人生の波動に飛び込まず、一步退いて瞑想す

ることから來てゐるのではあるまいか？

私はこんなくどくどしいことを、氏のあの命題に對しての不審を晴らすために、思はずにはゐられないのでした。けれど氏のあの本文の中に書かれてあるところの具體的事實としての「個人としての生活」と「性としての生活」とは、私があの命題に對して抱いた不審を氷解させるものなのでしたから、以上は單なる私の考として書いたのに過ぎないのでありますけれども、私には氏があの中で述べられてゐるところの「種族に對して有つて生れた女性の使命と個人として又は社會の一員としての婦人の魂の生活や仕事や、職業などの間の矛盾」といふのや、氏があの中へ引かれたことによつて知つた、そして殆ど氏の思想の根底をなすと見られる、エレンケイの「ソールライフとファミリーライフとの間に存するものだ」といふ鬪爭といふのなどは、それほど重大な問題として考へられないばかりか、實際に於て、それらの矛盾爭鬪といふことは考へることが出來ないのであります。それからその「色々な方面や部分をいかに選擇し、いかに統一し調和し行くべきか」と考へる餘裕も無い、それだけいたましい生活――いたましいと言つて、それをどこまでも歎くのでは無い、いたましいものであると知つたことを尊く思はずに居られない――にあるのだと思ひます。何故といふに、私たちの己に打つ突かつてしまつた現實は、それが遇然であつて

も必然であつても、それはもう人生内具の不可抗力と見るよりほか仕方が無いのだと思ひますから。今まで一方の生活をしてゐたのが、俄かに、或は漸次に、二方の生活をしなければならないと氣が付く時は、その生活が已に事實として、二方面に擴がつてゐるのであるから、私は今更「私自身の生活の中に存する色々な方面」をいかに撰擇すべきかと考へるのはむだなことゝ思ふのです。二つになつたら二つを三つになつたら三つを交互に取らざるをえないばかりでなく、事實に於ては已に取りつゝあるのであるから、私たちは自分の實生活を一刻も早く自覺して、その各方面各部分について、努力しなければならないと思ひます。

しかし、氏は、「人が持ちうる時間と精力には元來制限があります。そして人は同時に二つ若しくは二つ以上のことに自分の魂の總てを與へることは出來ません、餘程特異な人でない限りは。ですから或る一方の生活を深め且つ擴めやうとすれば、勢他方の生活に何等かの制限を加へなければならなくなるのは當然のことであります。またよりよく生きる上に必要なそして賢い方法ではないでせうか」と言はれました。けれどもまた、この時間と精力とに限りのあるといふことは、果して事實に合してゐることでありませうか？それは多くの人の生活を外部から見て、一方に無制限な時間と精力とを有するものを假定した時、

その一方即ち多くの場合を常識的に考へた一面觀ともいふべきもので、私たちがともすれば、理解といふ心理のものと誤解し曲解し易いことでありますが、更に深く考へて見るとこの説明は事實を具體的に説明したものとは言はれません。それは、もし、私たちの時間や精力に、本當に限があるとすれば、私たちの生活は或る一定の場所に於て固定し死滅して了はねばならぬことになりますが私たちの生活は決してそんな心細いものではないと思ひます。即ちこの時間といひ精力といひ、それはみな、外的には計量すべからざる私たちの生活の眞の内容を形成するものにほかならないのでありますから。

そこで、もう一度氏の言はれたことを具體的に推しはかつて見ますと、例へば今までは子供が無かつたから、十時間なら十時間といふものを全部自分の仕事に使ふことが出來たがこんど、子供が出來るとそれがために、五時間なり六時間なりを奪はれる。すると自分の仕事をする時間がそれだけ減らされることになる。兩方へ十時間づゝ與へたいのであるが、それは人として出來ないことであるから「何に價値をおき、何を選擇し、何を抑へ、何に制限をおくか」といふ意味にとれるのです。そしてこのやうに、時間を外的に計量すれば、いかにもさういふやうに思はれますが、私たちの生活そのものが、外的には計量すべからざるものでありますからして、この常識的區分は全然無意味なものになるのではな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いでせうか。その自分の仕事又は子供のための仕事といふのが機械的なものであつたら、即ち眞の生活で無かつたら、一方の仕事が他の一方の仕事をすることによつて、それに費す時間々制限されると同時にその仕事も制限されると考へられますが、少くともそれが精神的の仕事であり、私たちの要求するほんたうの生活であるなら、それらは互に爭鬪せず毀損せず制限せざるは勿論、むしろ相互に補充するものでなければならない、即ち一方の生活は他の一方の生活から新らしい意味を酌み來ることによつて擴大され深化されるものと思ひます。例へば私が今一つの婦人問題を考へてゐる時、どうしても戀人のことを思はなければならなくなつたとします。すればその時私の生活は已にその戀人を對立者としての生活で前の婦人問題を考へてゐた時の生活とは變つてしまつたものであることは言ふまでもありません。するとこの二つの生活、(或る瞬間と或る瞬間といふ意味の二つの生活です。そしてこの瞬間は外的に見ると長短のある瞬間です。)はその何れにも絶對値の存することを認められます。そして、前者を經、後者を過ぎることによつて、次の瞬間には更に、より意味深い生活に入ることが出來るのだと思ひます。現在の新らしい生活の經驗によつてえた新らしい力を持つて、言葉を代へて言へば、より優勝な位置に立つて、その婦人問題なり何なりを考へることが出來ます。即ち制限されるのではなくつて擴大されるのだと

思ひます。さういふ場合に時間の制限といふことは果して考へられるでせうか。それはなるほど前者を固定的な有現的なものとして見れば、それはさうとも考へられますが、しかしそれはあるがまゝの實人生ではなくて、頭の上で想像した空影に過ぎないと思ひます。そればかりでなくこゝで私は時間といふものに對する今までの自分の考について疑を起さないわけにはいかなくなりました。

考へて見ますに、時間を十時間なら十時間二十時間なら二十時間と、初めから一定の長さあるものゝやうに考へるのは、どうも私たちの考へとして間違つてゐるやうな氣がします。よし、そんなことは考へられるとしてもそれはほんたうの時間では無いと思ひます。何故なら、私は、私たちの生活の內容となる時間のみを眞の時間だと思ひますから。そしてその生活なるものは常に一體であると思つてゐますから。そこでその生活の內容を形成するところの時間もそこに一つよりほか無いわけでありますから。

生活の內容となる時間といふのを、もう少し具體的に言へば、特定的の生の動向が特定的の境遇にあつて發展する唯一の經過なのであつて、それが眞の時間であると思ひますから、その他の時間は、概念としては考へられますけれども、それが果して私たちの豫想する特定的生活の內容となるかどうかといふことは、生活が刻々に變化するといふ理由から

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

して豫想出來るものでは無いと思ひます。即ち私たちが漠然と考へてゐる時間が眞の時間となるかどうかといふことは、私たちの生活の本質から、分らないのだと思ひます。それ故私は一方の生活に何時間を與へ、一方の生活に何時間を割かうと考へ悶えるのは無意味なことだと思ひます。私は私の經驗上或る一日が或る一ヶ月よりも尊い時間であつたとゝもに或る一ヶ月がある一日よりも短く思はれたことを考へますと自分が今後に於てどれだけの時間を所有してゐるかといふことは、たとへ、自分の死ぬ時期がわかつてゐるとしても到底考へられないのであります。それだけ私は自分の生活に對してなみなみならぬ不安と、なみなみならぬ期待とを持つてをります。それで私は自分の生活に對する、より深い自覺によつてその生活にともなふ眞の力ある時間を感じたいと思ひます。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

未成品二章

生田花世

○

或夜不圖眼の覺めた繁子は暗い天井を凝乎と眺めてゐる間に、奇怪な印象が泡の湧き起るやうにぶつぶつと意識の表を掠め、ものがなしい快感と、それに伴ふ恐怖とが胸と云はず手と云はず足と云はず、肺臓の柔かな膜の裏迄も蜘蛛のやうに匍ひ廻るやうな感觸を覺えて、我知らず身を顫はせた。

「私はまたどつかで彼の男に出逢ふのに違ない。私が逃げても匿れても、よしんば世界の隅まで走らうとも、あの物凄い顔は青白い微笑を湛へて追隨けて來るに違ない、あの怖い、あの幽靈のやうな、あのアラビアンナイトの中にせゝら笑つてゐる妖鬼のやうなあの男は、私を惱まして思ふが儘にしたあの男は一體何物であつたらう。あの妖鬼は私の身體に、宛も魚の口に釣針を懸けるやうに、烙印を捺していつた。假令私が何萬人の群集の中に居ようとも、それを彼の目が直ぐ分るやうに………………」

繁子は再び身を戰かして蒲團の襟に頬を埋めて嘆息を洩らした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

何だつてあんな奇怪しい出來事に逢着かつたのだらう。あの男は夕闇の底から宮守の樣に黒い姿を現し、びろうどの樣な蒼白い顏の、肉樂に荒んだ樣な滑な顏の橫から見える輪廓を、私の眼の前に思はず見惚れさせる程の距離に置いて靜かに「自分の方を見よ」と云はんばかりに歩いてゆくのだつた。唇は光澤よく濡れて光つてゐるやうに思はれ、眼は泥醉の前の瞑想に落ちてゆく快さにたへぬもの丶やうに半眼に開かれ、口より頤の筋肉は淫靡な廻舞に顫へてゐるやうに見えた。何か話しかける事があるのを唇で輕く抑へてゐるやうな表情をする爲に男は時々首を仰けたり、すつかり眼を閉ぢたりした。然し何も云はずに痛ましいびろうどのやうな青白い橫顏を見せながら、「俺を見よ」と云つた風に歩いてゆくのだつた。その男の足のあげる靴の音はねばり強い密蜂のやうな囁に似通ひ、無雜作に歩いてゆく私の下駄の音を抱き締めるやうに、感じを縫ひ合し、心持を一つのものとするやうな好い調子に合奏せて來るのだつた。「俺の後から追隨いて來ずには居られまい」靴の音はさう呟く樣に思はれた。その音は確かに快く、又確かに調子好く、追隨いて行くに從つて甘美くなつてゆくやうに思はれ、不知不識私は其の後に從つて歩いて行かずには居られなつたのである。

行手には黒い林が縱り上つたやうに見えて、灰白色の街道は吸はれる如くその黒い林の

中に消えてゐた。男は一株の柳の木の下まで來た時そつと横を向いた。再びそつと垂頭いて以前と同じやうに歩いたが、また暫くすると横を向いた。三度さうした時には愛を頬の筋肉によつて女にさとらせようと努めるらしく思はれた。私は一つの足數をも見落すまいと後から拾つて歩いて行かずには居られなかつた。そして男が振返る毎にくすぐられでもするやうな奇怪な戰慄と泥醉とに逢つた。

「何處まで？」

男は親しい低聲で聞くと共にその白い蛇の樣に思はれる手を私の肩に置いた。ぱつと温かさが常に涸渇いた肉體に傳はり、血液に交つて來た。私はどうする事も出來なかつたのである。

○

それは私が十二位の時だつたと思ふ。おしの叔母さんは私の母に絹糸を繭から取る座繰を敎へて貰ひに毎日來てゐた事があつた。おしの叔母さんは小柄の眼のくるくるした圓い顏をした利發な娘であつた。其頃繭を蒸す竈の火を焚くのは毎朝私の祖母の仕事であつた。私は隔日位に夕方になると風呂場で風呂の火を焚いた。その火が燃えてる間の惡戲に、果樹園の南境の土手の蜂の巣を、火を焚く竹片で突いては刺されたりした。大きな聲を上げ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て泣き出すと痛い所へ祖母は毒けしの膏藥をつけてくれるのが常であつた。

其頃私の家は養蠶で忙しかつた。村の人の出入も繁く日傭人は四五人もゐた。蠶糞の匂のする内庭で捨てられた屑繭を拾ひ集めて菓子折に入れて方々に持ち廻つて桑をあてがつた事もある。暗く暮れてゆく夕方には私は弟と一緒に自分の家の棟數を數へたりした。母家、離家、西の倉、西の納屋、東の倉、東の納屋、前の養蠶室、馬屋、灰屋、番小屋等が廣い庭を圍んで並んでゐた。

それから半年とは經たぬ頃おしの叔母さんの婚禮の日があつた。其の日私は弟と一緒に母に連れられて叔母さんの家へ行つた。母は臺所で手傳をした。父は帳場で村の人と話をしてゐた。私は叔母さんの妹の龜さんと一緒に遊んでゐた。祖母さんが(おしのさんの母)二人のところにお膳を持つて來てくれた事を覺えてゐる。

おしの叔母さんが愈々家を出る少し前、午後二時頃であつたやうに思ふ、栗の實のまだ青い秋の初め方であつた。紫縮緬の裾模様の振袖に白絹のやらうと云ふもの(角隱しの事)を掛け、繻珍の丸帶を胸高く結んだおしの叔母さんの姿はまるで人形芝居の初花姫の様であつた。鼈甲のぴらぴらする簪の房が頰紅さした白い頰に觸れたり離れたりするのが格別美しかつた。盛裝したおしの叔母さまは母親に連れられてお宮とお寺とへ別れの參詣にゆく事となつた。私と龜さんとはいそ〳〵して追隨いて行つた。神社では廣い境内に赤い枯

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

松葉が一杯に落ち散つてゐた。鳥居の傍へ刈つた早稲を幹したほとりには十羽位の雀がばら／＼と飛び降りて實を啄いてゐた。頭の上に見える何丈といふ松の高い枝には鳥が止つて鳴いてゐたし、宮の裏の谿谷の流れはさら／＼と聞えた。おしの叔母さんは丁寧に頭を下げて拜んだ。

四人はそこを出てお寺の方へと歩いた。「嫁さん、嫁さん」から云つて傍の小山の松林の中で松葉を掻いてゐた子供等は叫んだ。子供心にもさう呼ばれるのが自分の名譽のやうに思はれて龜さんも私も嬉しがつた。

お寺の山門の前におげんの家があつた。家の前にはおげんの母が立つて見てゐた。おしの叔母さんと叔母さんを連れた祖母さんとは挨拶をした。丁寧に頭を下げたおしの叔母さんの紫の振袖が其時土の上に觸つた。私はつい後にゐてこれを見て思はずその振袖の袂を上げて持つてゐると、つとおしの叔母さんは眼を私の方につけて耐へ切れないやうな悲しげな叱嘖の表情をした。私も淋しい氣持が胸に込み上げたので、直ぐ手を離して了つた。それから追隨いて行かず、龜さんと二人でとぼ／＼と引返しておげんの家の裏の谿谷に入つて、岩から岩を濡らして流れてゆく山清水を手に掬んで飲んだり、紅葉の枝を折つたり、山野菊をさがしたりして遊んだ。おしの叔母さんの眼は其後長い間忘れられず、何故あんなにして私を見たらうと思ひ悩む事が多かつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

二つの心

岡田ゆき

A――ある紳商の妻
B――Aと同窓の女

A。ほんとうに、好く來て下すつてね。久しぶりでお話しが出來てうれしゆ御座んすわ。

B。え、何年か前の樣に、お互ひに話しませう。よくあの校庭を歩きながら、何にも世の中を知らない、お人形さんの心の樣な事を話し相つたものですね。

A。お人形さんの心とは、まあ面白いわ。然し眞實のお人形さんが幸福なのかも知れませんね。

B。世間見ずのお人形さんが幸福ですつてまあいやだわ。人間は世の中に出て來たからには、生き甲斐のある事をしなければ、生れた意義がないと思ひますわ。其の意味でお人形さんはつまりませんよ。私は自分がお人形さんの影から、日に、日に、脱しやうと、つとめてゐるのです。そして、少しづゝなりとも、眞實の人間になつて來る事を知つた時に、幸福を感じますの、ときに、此頃御良人樣は御變りないこと。

A。え、ありがたう。丈夫ですの。そして二三日前から商用で關西へ旅行して居ます。

B。さう、それぢや御寂しいわね。

A。え、ひとりで居ますとね、種々の事を

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

考へるのですよ。それに、今度關西へ行きましたのにも、新橋の馴染の女が一所なんださうですの。ですから私つまらないのですよ。

B。まあ、そんな事誰れが云ひましたの。貴女が御自分で御覧になつたの。

A。いえ、他から聞いたのよ。私口惜しくて仕様がないのです。

B。ホヽヽヽ。他から御聞きになつたのをさう直ぐに眞實になさる貴女の氣が知れないわ。自分がまのあたり見た事でなければ眞に信じる事は出來やしないわ。ね、さうでせう。貴女がそんなに御良人を恨んでゐらつしやる。しかも御良人は眞面目に商用で苦勞をなすつておいでだとしたら、ほんとうにすまない理ぢやありませんか。他人の言葉に迷はされないで、御自分を力になさいね。

A。さうおつしやればさうも思はれるのですけれど、私が來てから、もう一年の餘になりますが、始終それは面白くない事ばかりあるのよ。

B。貴女の御言葉に僞がなければ、貴女は眞の愛と結婚を握つてゐらつしやらないからですよ。御良人は貴女との間柄が純であれば、其の新橋とやらの女は云ふ迄もなく自分の妻以外の女に心をひかれる理はない筈ですからね。(微笑する。)

A。(感傷的に。)私は決して眞の結婚はして居ない。ねえ貴女二人の間には少しの愛

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

もないのに、他人の手によつて結びつけられたゞけなのですよ。只の一度も理解しあつた事もない二人の人間が、一處になつたつて、幸福にゆかれないのが當然ですね。

B。そんなに考へてゐらつしやりながら、どうして貴女はつまらない結婚をなすつたんでせう。

A。けれども、あの場合さうするより仕方がなかつたのですもの。

B。世の中には仕方がないと云ふ事はないと私は思ひますわ。貴女が其の時にもつと自己を尊重なすつたら。決してこんな結果にならなかつたのですよ。貴女は御自分の事を餘り他人本意に取扱つてゐらつしやるわ。殊に結婚などは他人本意のものぢやありませんよ。けれど、普通今日夫婦と云つてる者は大抵貴女と同じ道を歩いてゐるのですね。だから夫婦間のいざこざが、ざらにあるのですよ。

A。けれども、私はもうこうなつてしまつたんですから、これから後どうすればよいか考へなければなりませんわ。

B。さうですね。貴女は御自分をもつと育てる樣になさらねばならないわ。御良人に對するつまらない感情など放擲して御自分のために努力なさいよ。ね、そしたらきつと御良人との仲も、眞に理解なさる樣になるかも知れませんわ。

A。(ちつと考へて。)え、さうしませう。貴女に暫くでお目にかゝつてよい事をしましたわ。

B。此の次にお逢ひする時の貴女の御心の變化を期待してゐますよ。(四、六、二四。)

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜詠草

ほぎ歌　畔蒜こと子

おごそけきわがおほぎみのみのりの日いく千代かけてえやはわすれめ
にほはしくやほじほめぐるあきつしまねけふのみのりにいやかがやくも
しきしまのもろもろたみのよろこびのうたにはえあるけふのみのりよ
聖天子いまか踏みますたかみくらはたてもしらずかがやきわたる
ましらぎく吾もぬかがみにかざしてんわがおほぎみのみのりほめつつ
大君のみのり尊くあげたまふいまかなみだのおごそかに湧く
大君の千代をことほぎたぐふなきけふのみのりをひたあほぐかも

×

物河鈴子

恨みある男をゆるし春の夜の雨にまくらき道を横切る
素直にも物縫ひをれば春日ざしわかきわが背を撫づるなりけり
いと鈍きわが神經に彈力をあたふる如きドアの手ざわり

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

娘らしく我も甘えて見る日あり機嫌よき母と雛をかざりつ

春くれば空にも地にもあこがれのつきぬがためか涙多けれ

大うねり小うねりうねり荷橇ゆくそのもどかしさいかにすべきぞ

新聞の如く今朝わが君の戸の外に投げもおかまほしき此心かな

公園を一人あゆめば木蔭より出でくる風も君おもはする

桐の花遠くに匂ふゆふやみを別れてあるがことはりと泣く

ひた悲しわが枕べに電燈の灯が被ひよりこぼれゐる見ゆ

いささかの悶えも時に堪へがたく敷居に油ひくはわびしも

水捨つればころがり落つる夏の月濡れし砂の香ふと身に沁むも

熱ある日くるるに遅き白壁に額あてつつ君戀ふるかな

何となきよろこび一つもたらすと云ふがごとくに光る朝つゆ

嫁入り仕度に養蠶せむと思ひ立ち今宵ひそかに微笑みにけり

×

永井芳子

ひたもえし君がみ胸にわが身をば投げかけてこそ咽び泣きしか

まぼろしの消えゆく前に投げ出され今泣き沈む醜（しう）のむくろは

一人ゐのさびしさよはた嬉しさよ心の限り人をおもへる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

静けさはまぼろしの國に遊ぶこと現し世もなしはた我もなし
天地はすみ渡れどもただ一つ曇りはてなきわが心はや

×

本山かじか

何事もしらざる君の靴の音と思ふにはやも頬のほてりくる
行く道の遠かたにして肉色の包みかかえし君のみゆるも
にくいろの本包もつ人みれば悩み狂ふとする心かな
いくちたび一人忍びて泣きにけむあまりに強き君のうらまし
きはまりて君こふる日は温表に青線高く標されにけり
一人ゐてしのびまつればいつしらず庭いちめんに蟲の啼けるも
わが君よ温度の表も五枚ほどここにかさなりなほひとりなり

×

濱小路浪子

あきらめて別れしことも迷ひなり懺悔をすればなほ迷ふべし
おもひわび力も失せて緣側に娃の玩具をもてあそぶなり
君かへしひとり果なくなげきゐぬほの暗き間の壁のかなしさ
ゆふまぐれ思ひみだれしその果に放ちやりたる人のかなしさ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

えくぼ　畔蒜こと子

しろがねの月のおもてをかすめゆくあまつかりがねなくこゑさやに

しづやかに霧にぬれつつかりがねを恍ときききいる秋くれつがた

みどり子の乳の匂ひに泌み泌みとひたりてあれば愁ひあかるし

ゑくぼある吾子のいとしやあやしつつかたみにかろくいだくなりけり

紅き灯をとらへんとしてみぢろぎす吾子すこやかに生ひたちて來ぬ

さかしげなぱつちりとした吾子が眸に聖くさびしくそよぐ水仙

乳欲しと眸にいつぱいに涙ぐみ吾れをさがすかいとほしき子よ

千鶴子千鶴子とくとく汝れがすこやかに少女とならん日のおもはるれ

夕月の仄照る野風呂さらさらにあれわびしくもそよぐコスモス

ゆめのごとみどり子いだき恍りと我がたつ影のやややせてみゆ

ふくよかにげにやはらかに我が乳はや子の唇にあまく匂ふ夜

すこやかにはぐくみてまし我が千鶴子片言などをはやくききたや

何はなくさりとめしらぬよろこびをまつここちにて吾子をあやすも

おもはゆきここちに胸乳くつろがせ吾子が唇にぞそとふくませぬ

おくれ髪をかいあげつつも横抱きに吾子にふくますましろき乳房

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

燒あと

山の井みね子

はるばると越後の國に來りつつここにまつかな花を見てゐる

燒あとの寺の柱の横たふしそこにカンナがまつかに咲けり

見も知らぬ人のうしろにのび上りぐるりと見たり寺のやけあと

白木の端學生座りゐたりけりその瞳は何かかなしかりけり

走る人みなふりむけりここだくにカンナは咲けど燒炭の原

おちつかぬ旅の心もこの渚五智の濱べにたてらくよしも

綱を引くと忙はしかる心にて裾かひたぐり吾も走り來つ

堂庭の百日紅のかへり咲き人めづらかに見てゐたるかも

鹿の子はパンをひきよせ旅人の吾が眼の前に食ひ終りたり

これかこの姿を見んとまそ鏡清き水邊に鹿の立てるも

ひねもすをのたりくねれる波の中はね上る魚がひそむものかも

鷄頭の重りたれし丹の莖のその下枝はもいよよ細りぬ

打たれし鷄頭はみな押しだまり風は吹けども動きもやらず

鷄頭の花のつづきにほのゆるるコスモスの花見てゐたるかな

てらてらと赤く光れるどうがらし傘さしながら今日も來て見る

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

月光

望月れい

よもすがら心づかひしわが爲にねずの番する人はなきかな

いづかたにいねたまふ夜もかくばかりよくぬる人かあさましきまで

さだまれる戀はなかりき橋も水も白き月夜にたてるをとめに

戀と云ふ戀ならなくに下駄の緒の橋のたもとにきれてはかなし

わが大事もとをたゞせばその君のひとことよりぞはじまりにけり

この上はわれにかがやく健康をあたへたまへと云はまほしけれ

しかすがにわれをはぐくむ心根のうせざるものか筆を捨てざり

ひとすぢの筆のいのちもわが君のかたへにねむる日までつゞかむ

鉢の花もすそにふれぬ霧白き月の露臺に君とのぼれば

足許の水の上にもくだけちる月の光よ見れどあかずも

月かげは君とねむれる石づかをおほふ大木の葉にもふるらむ

原稿募集

青鞜詠草及其他の原稿を募る、十日締切、但、編輯の都合により掲載の遅るゝことあり

本號に掲載すべかりしもの數編はすべて新年特別號に掲載すべし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

乙女椿零るゝ時

無門照子

鸚鵡（ばあちやん）よ、
あの椿の樹を見ては、
その胸の赤いいろを丸い眼に見せる鸚鵡（ばあちやん）よ
いつでも、あの樹の雀の群は
ひとりぼつちのお前の胸をそそる。

今日もまた
鮮かで新しい綠葉の
あの籠つた枝が柔かに搖れ、
名も懷しい乙女椿の花が
ぱらぱらと散つた……三つ、四つ、
……………………
二羽の雀の
奔放なその羽ばたきに——。

おお、その時、
お前は麻の實を嘴みやめて、
古い言葉の血を吐く叫びで、
かなしさに堪へかねた聲で、
一聲、たつた一聲鳴いたぢやないか……。

ばあちやんよ、
お前もひとりぼつちですね。
……………………
わたしも、ひとりぼつちの私も、
乙女椿の散つた時、
ふと指先は震へ、
握りしめたペン軸を
急につめたく感じました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夕陽

ふとしも見れば、
軒下のかげらふ、
あたり靜かに照りみてる斜陽、
…………………………
圓かなる夢みごころに………
赤きばら音もなくこぼれゆく。

流れ

しづかなる流れの胸に、
起る輪波は眞白なり………
わがひややかなる淡蒼き唇には、
たださびしき旋律のみただよへる………
…………………………
今しも、射し入る月にめざめつつ
わが心の流れの凄然として澄みゆくよ。

抑壓

のぼれ、のぼれ、
白金の月よ。
うら寒き冬の夜の
白金の月よ。
斷けたるは、見入る間に
滿ち來るごとき………

叫ばまし、聲高く、
綠の歌を。
また、抑壓の呻吟を。
…………………………
今し、うら若き女の摘み採れる
冬の野の道の芝くさは、
その胸にもの柔かう
うす青き愛し芽をもつ。

高須光治畫會主意書

自分の内心の要求に從つて生きて行くといふ事はこの世の中の要求の中最も尊い要求だと思ひます。けれども世の中に生きて行くのはかういふ要求のある人には苦しい事であると思ひます。今の世の中には餘裕がありません、貧者の多い飢える人の多い世の中であります。だから物質的な要求のみに從へない人はどうしても物質からはめぐまれる事を拒まれ勝ちです。尊む可き要求は出來るだけは生かしたいと思ひます。自然は何と命令するか知れません、しかし人間である私どもは、出來るだけは、さういふ要求をこの世に守りたいと思ひます、出來るだけは眞面目な尊む可き要求を持つ人に苦しい目を與へたくないと思ひます。これが私が高須君の畫會を皆様に一應御すゝめする事の理由であります。

高須君の繪は未來の多いものだと思ひます。しかし、それは現在のものに或る肯定を與へても否定を與へる事にはなりません。今の高須君の繪は内心の要求から眞面目に描かれたものだと思ひます。高須君の繪は今年の春の巽畫會に二點出て居ました。銅賞を得られました。皆さんの中でそれを御覽になつた方は高須君の繪について皆さん自身の批判がある事と思ひます。兎に角私は一應皆さんに同君の畫會を御すすめいたします。若し御入り下さる事が出來ましたら同君の爲に幸だと思ひます。（劉生）

規　則

△會費は一ケ月金五十錢とし一ケ年間毎月事務所へ御出金下さい。

△御頒ちする作品は油繪六號カンバス（額緣なし）大のものとして風景或は肖像、靜物等會員の任意でよろしいのです。

△會費拂込は毎月二十日迄とし、事務所より集金郵便を差しつかはします。都合で他の方法をとる事も會員の隨意とします。

△事務所は府下代々木中山谷一四六高須光治畫會事務所とします。

右發起人

木村莊八
高村光太郎
岸田劉生
北山清太郎

別れた友へ

山の井みね子

君江樣。ほんとに私は泣いてゐます。お別れと云ふものはこんなにつらいものでせうか。お立ちになるあなたは何もかも諦めてお出での御樣子でした。そう思ふて見るせいか尙いた〱しい思がこみ上げて來ました。今朝は旅出のごた〱に紛れていらつしやいましたわね。只頭許り下げていらつしやつたあなたを私ははがゆく思ふてゐましたわ。私の目は涙に曇つてゐましたけれども決してあなたを見失ひはしませんでした。もう馬車が一走りに霧の中にかくれて行くのを恨めしくぢつと見送つてゐましたあのお姿がぼうつと朝霧にかくされて行つた時私の目からは熱い涙がはら〱と流れました。見送りの方々に挨拶もろくに出來ない程とめどもなく涙が流れました。せめてあなたのおかあさんに丈けと思ふてふりむいた時又こみ上げて來る涙がたまつてはつきりしませんでした。ぐるりと後むきになつて涙を拭つてむきかへりました。「是非御飯を上つていらしつて下さい」とあなたのおかあさんがおつしやつてそこにゐられました、あなたのおかあさんもやつぱりとめどなく泣いていらつしやいました。私は何か申上げ樣として頭を上げるとあなたのおかあさんのお目からはら〱と涙がこぼれました。その時はほんとに苦しうございました。どなたにも挨拶もしないで北をむいたまま私は家へ急ぎました。一人になつても泣けて泣けてたまりませんでした。私の歸つた時私の妹は私をまつててくれました。私の泣いてゐたのを妹は知つてゐてくれました。だまつて妹の先にたつて家に入つたまゝ私は自分の室へ入つて戸をたてこめてしまひました。自分の室に入つて始めて自分にかへりましたけれどもまた〱泣きました。私は大事なく友と別

れたのですもの。私はだん〳〵おちついて來て寒さを覺えました。その朝は大變に強い霜でしたものね。

　どんなに遠くはなれたつて心と心とは決してはなれるものではありませんわね、そう思ふと全く失はれた樣に思へたかなしみはだん〳〵うすれて行きました。それはどうせ一所に生涯をくらすことの出來ない私等であつて見れば別れると云ふことは當然のことですもの。泣いて〳〵お別れしたことを靜かに思ふてゐます。お別れつてこんなにもつらいものでせうか。

　せきたてられて御仕度をなさつて取り急いで馬車にお乘りになつたあなたを思ひ出しては見ます。あなたはそは〳〵してゐられましたわね。安曇野をはなれていらつしやる頃思ひ出しなされて別離のかなしさをはつきりとお思ひになつたでせう。私は何故御一所に馬車で少しでもお送りしなかつたかと悔いてゐます。あの時はそんなことをするのが人目に恥しいとの樣に思はれましたのですものゝほんとにはかないお別れでしたわね。そう〳〵一言も云ひ得なかつたと思ふとそれさへかなしいことの樣にも思へます。何も彼も云へない程私等は充奮してゐましたのね。何も云ひ得なかつたことがかへつて二人の別れをもつと深くもつと強く尊いものにして呉れたのかも知れません。やす〳〵と云ひ得る程の心安さではなかつたのですものね。「御大事に」とも云はなかつたと思ふと遣せなくなります。それでもお見送りのために第一番として私が參つたことが私等のために尤もよろこばしいことであつた樣に今も思はれます。それで二人きり居る時間があつたのだと夫丈けでも私は自分の心を慰めてゐます。あの時あなたのお目のふちが赤くはれてゐました。髮をお結びになる時障子のかげですゝり泣いてゐられるのがどんなにいた〳〵しく私の胸をさしたでせう。その時私も泣きました。二人はたんとお話ししたいことがあつたのですわね、私はあなたの樣に動亂してゐました。髮結の紐がないとおつしやつた時もそれを見付ける術も知りませんでした。結上げとおつしやつた時も私は見付

け得ませんでした。帯締めさおつしやつてもさつき見た襦袢の袖を二度もひき出して見た程さんまばかりしました。S先生もK先生もよく仕度をなほして下すつたのに私はぼかんさしてゐたのです。今更に恥しくてたまりません。何てさんまでしたらう。融通のきかないさんまさ私はくすぐつたい樣な思がします。

さう〳〵あなたは遠くへ行かれたのね、私は獨になつちまつたのよK先生はね「大事な友をなくして」さ皮肉におつしやつたのよ。私は情なくなつてしまひましたわ。私はだまつてざきまぎしてゐました。「人が惡い」さ思はれても仕方ない私はほんさにしやべるこさが出來なかつたんです。K先生の前では泣くまいさつさめたのによわくも私はこらへられなかつた。「かなしいこさです」さ云ひながらほろ〳〵さしました。わらはれたかも知れない。

君江樣、君江樣、

あなたも獨ぼつちなのね。お互にこふして獨ぼつちなのね、こうしてゐてもやつぱりあなたのための幸福を祈る私ださ思ふて下さいね。

あなたのお出かけの時にK先生はおつしやいましたの澄子さんは早く○學校へ入りたくつてあなたを世話したんだつて。いまはしい惡口を腹立たしく私はきゝすてましたの。人なんていゝ加減なこさしか言はないものね。○町はあなたの後任のためにいざこざが持ち上るでせうよ。澄子さんはK先生の樣な不正な人間には組しないのですからね。又暗闘がはげしく行はれるのださ思ふてゐます。そうして○町も改革されて行くでせう。私は澄子さんの來られるのをよろこびます。

御大切になさいましね、京は賑やかでせうよ。殊に今度は私の姉は「君江さんは幸福なんだ」さ申しましたよ。一概に腹立たしく思ふたのは私の間違ひですわ。誰にも心持ちまで知る人でなければあなたが幸福に見えるのは當然ですもの。むしろあなたが可愛いさうださ考へてゐる私なんかゞさんまに見えますわね。只結婚のよろこび

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

や哀の驅かさな外見上から評する人達が憎くも思はれます。どんなかなしみがその人の内部に存在するかを知らない人ほど殘酷な評を下すものはありますまいね。誰にもその人一ぱいの苦しみはあるものだとお考へなさいまし。そして自分をひきしめて自分の現在を進めて行つて下さい。徒になげき徒に嘆つ人はほめられませんわ。その人の不幸がその人の幸であるかも知れませんものね。いくらでも潜ぎぬけて行つて下さい。御からだをいとほしんで下さい。さよなら。

光子

新年特別號豫告

新年號は特別號として豐富な内容にしたいと存じます。伊藤野枝さんも近々に御かへりになる筈です。

論文に　らいてう　山田わか　伊藤野枝
小説に　長谷川時雨　岡田八千代　生田花世
　　　　原阿佐緒　加藤みどり
飜譯に　山田わか　齋賀琴　伊藤野枝
詩歌に　與謝野晶子　三ヶ島葭　原阿佐緒

等の諸氏は屹度書いて下さるでせう。

なほ右の外にも　野上彌生子、岩野清子、小林哥津、荒木滋子、荒木郁子、山田邦子、伊藤あさ子、遠藤清子、原田皐月、

等の諸氏も多分何か書いて下さる事と思ひます。

らいてう氏に

伊藤野枝

らいてうさま、

お體の工合はどんなですか、私は一週間目から產褥をはなれて居ります、この邊は御大典奉祝の「ドンタク」で大變です、東京もさぞ大變でせう。

漸く歸京が出來るやうになりました。けれども子供の事では隨分迷ひました。けれども結局矢張り同じ他手をかりるにしても自分の近くでないとどうしても安神が出來さうにもありませんので連れてかへることにしました。「里子にやるとにくむやうになるから、それではどちらの爲にもいけないから」と澤山の例をひいて誰も彼も不賛成をとなへますし、其人も此度は本當に父親らしい愛をもつて子供に對してゐて、矢張り不賛成なのです。私も隨分氣づよくなつて、たとへ三四ヶ月でも、留守中の停滯してゐる仕事を片づける間丈けでもおいて來やうと思つたのですけれども一日一日とだん〲にさう云ふ決心もいろいろ考へて見ますと不安になつて來ますので捨てました。そして連れてかへることにしました。その代りになるべく時間をとられないやうにしつけやうと思つてゐます。幸ひに、今度の子はおどろくほど手がかゝりませんので、これならと云ふ氣もします。一日中下にれてゐますので、おむつの世話とお乳を與りさへすればそれでいゝのです。

今まであがきがとれないやうに苦しむでゐましたけれども全くあれは體のせいだつたと思ひます。長い間働けなかつた反動でこれからはどんなにでも働けるやうに體も氣持もかるくなりました。かへりましたら新年號の編輯に全力をつくさうと思つて居ります。長い間留守にした東京の珍らしいこともたのしみの一つです。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

　まだお話も云つてゐませんが岩野さんの「愛の爭鬪」が丁度私のお産した朝、四日につきました。皆がはら〳〵するのをその日から三日かゝつてよみました。そしていろ〳〵な事を考へさゝれました。全體としてはあの方の和らかな感情が可なりよくにじみ出てゐるのを一番うれしく感じました。始めから終りまでの苦悶に本當に淚を誘はれるやうな個處がいくつもありました。他人の生活と云ふものは全く他からは幾分も本當には解らないものだとしみ〴〵思ひました。私はあゝした苦悶をつゞけながら六年間も一緒にゐらした淸子樣の辛抱づよさをおどろかずにはゐられません。私は他の種類の苦悶なら自分の氣の持ち方一つではどんなにでも或程度までは堪え得ると信じてゐます。けれども夫婦の間の愛についての苦悶は一番たまらないと思ひます。私はあゝした一貫したあの方の苦しみがたゞそれより他の何でもないのにひどくおどろきました。さうしてお二人の辛抱づよいのに感心しました。私も可なり淸子樣にはお近しく願つた方ですが、時たま何か不快なことがおありになる位は思つてゐましたけれどもさうした種類の苦しみがそんなにも永く續いてゐるとは思ひもよりませんでした。矢張り私たちが一寸した口のきゝやうや物のしかたでひよつと感情を害しあつて一日口をきかなかつたとか四五日氣持のわるい顏を合はせてゐるとか云ふのとおなじことなのだとばかり思つてゐましたが、あの日記で拜見しますと、淸子樣の苦悶は本當に何時でも愛についてなのですもの、私はあれをよんでから六年も一緒にさうしてゐらしたことがむしろ不思議に思へる位です。淸子樣にあの位の苦悶があれば同樣に泡鳴氏もどの位お苦しみになつたかしれないと云ふことは直に誰にでもお察しが出來ると思ひます。私はお二人がさうして長い間苦しみながらあの時まで離れずに生活していらしたのはお二人とも無意識のうちにあゝした機會を待つてゐらしたのだと思ひます。人間の執着つて本當に妙に强いものですものね、他人の家に同居してゐて多少不快な事があつたとして他へ移ら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

うと云ふやうな場合さへ妙な執着が出て何だか出るのがなしいやうな氣もしますし、その家の人に向つて何か尤らしい理屈をつけなくては、または機會が來なくては出ると云ふことは云へないものですもの、それと大したちがひはないと思ひます。まして夫婦としてたとへ一年でも半年でも一緒に生活すればどうしたつてさう手輕に別れられる譯のものではありませんもの、まして岩野さんの場合にはお互ひに愛を持ちながら主として、私は泡鳴氏と清子樣の肉體の不均衡が根になつてゐるとしか思へません、もしさうならばお二人ともおきのどくな譯だとおもひます。生田先生はあの序に「泡鳴氏の態度が非難に價することの少いものとして見えて來ると一緒に清子さんの地位があまりお氣の毒なものとして見えないやうに――」とお書きになりましたが、私にはお二人ともお氣の毒に見えることにもなり、またお二人ともお氣の毒ではなくむしろあたりまへな成行になつて行つたのだとも思へます。現に角あの日記では、お二人とも全く六年間を幸福におくらしになつたとは思へない氣がします。泡鳴氏がさうした生活に堪へないで新らしい生活を求めてあゝおなりになつたのなら清子樣ももつと本當に御自分の爲めに幸福な道をおさがしになるといゝのですれ、お二人が長い間苦しみながらさう〳〵本當にぴつたり抱き合はずにあんなことになつたのは最初の出かたが不自然だつたのだと私は思ひます。最初からたゞ友人關係として丈けの條件で同居なすつたのならあの理由丈けで立派ですけれども、第二の條件を清子樣はお斷はりになつても泡鳴氏はそれを決して撤回してはゐらつしやらないのを知りながら、同居なすつたのは、私には少し不思議に思はれます。無責任な想像かもしれませんが若し同居してゐらつしやらないで、あゝした要求を持ち出されなすつたのなら、あんなにまでお苦しみにならなくても濟んだでせうしあんな不幸なと云つては失禮かもしれませんが結婚をなさらずともすんだのではなかつたかと思はれます。けれどもこんな事はもう清子樣自身でさうに御承

知の事なのを私がことさらしく云ふにもあたらない事でした。私は本當にあの日記を發表なすつた事をいゝ事をなすつたと思ひます。あれをよんだ人はきつといろいろな誤まつた猥雜な新聞の記事やなんかを信用したりしないで、本當にお二人の關係がどんなものであつたかと云ふことを知りそしてこんどの事が決して偶然なことでもなく不自然なことでもない正當の結果として解釋が出來るでせう。その意味で最もいゝ事だと思ひます。

何だか書きたい事が澤山あるやうな氣がしますが何れもくだらない事ばかりですからお目に懸つてからにします。もう直にかへれるのだと思ひますとうれしくて仕方がありません。四月ばかりの間ですがもう一年も東京からはなれてゐたやうな氣がします。かへりには彼處にもこゝにもよりませうなんて云つてゐましたけれども此の頃ではたゞ一心に東京にかへりつく事ばかり考へてゐましてもう特別急行で何處にもよらないつもりに二人ともなつてゐます。何しろ道中が長いのですからいやになります、下の關からは特別急行で廿六七時間でつくとしてもあそこまでにざつと六七時間かゝりますからどんなに急いでも卅時間以上かゝるのですものね、こんどかへりましたら本當に働きますわ、何時もいつも豫告ばかりでちつとも目ぼしい仕事が出來ないのがはづかしくて仕方がありません。せめて新年號は少しはいゝものにしたいと思つて居ります。お目にさへかゝればどんなにでもおしやべりは出來ますからこの位にしておきませう。

さう／＼あなたはお氣がつかなかつたかもしれませんが補助團の方で青鞜に短歌をよく出して下すつた名古屋の方で山田澄子つて方の名を覺えてゐらつしやいますかあの方が自殺なすつたさうですね、私は十一月號の女の世界で青柳氏のかゝれたものを何氣なくよんで本當にびつくりして仕舞ひました。お序でがあればよんで御覧なさいまし隨分お氣の毒な方のやうです。そんな方ならばもつとよくわかつてゐれば何とかしやうがありはしなかつたかとしきりに考へられます。それから水上粂と云ふ丸龜の方も矢張りお逝くなりなすつたやうです。少しでも交渉のあつた方が逝くなりなすつたなんて聞くと寂しい氣がするものですね。（大正四、一一、一七、）

雜誌規定

■毎月一回一日發行

■定價一册金貳拾五錢（郵税壹錢五厘）

■前金購讀料（四ヶ月分）壹圓（六ヶ月分）壹圓五拾錢（八ヶ月分）貳圓（十ヶ月分）貳圓五拾錢（一ヶ年分）參圓

■廣告料（一頁）特三十五圓、一等二十五圓、二等十五圓、三等十圓、（半頁）七圓

■郵券代用は一錢五厘切手に限る（但し一割增のこと）。

■編輯事務、補助團會費拂込は靑鞜社へ。

■廣告申込、交換廣告は日月社へ。

■購讀に關する一切の事務は日月社へ。

■原稿〆切期日は毎月十日限とす。當分の間、日月社内靑鞜係宛のこと。

大正四年十一月卅日印刷納本
大正四年十二月一日發行

禁轉載

東京市小石川區指ヶ谷町九十二番地
靑鞜社内
編輯兼發行人 伊藤野枝

東京市京橋區弓町十三番地
印刷人 柴田杠一郎

東京市京橋區弓町十三番地
印刷所 千代田印刷株式會社

發行所 東京市小石川區指ヶ谷町九十二 靑鞜社 振替東京二一一一六番

發賣元 本鄕區元町二丁目四九 日月社 振替東京二八九一番

大賣捌 東京堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

■生田長江氏の新論文全集

最近の文藝及び思潮

四六版四百頁 布装美本箱入 金一圓税八錢

著者は權威ある文壇の高等批評家である。文壇の巨星森田草平、島崎藤村、夏目漱石、田山花袋、正宗白鳥の大物を俎に載せて手際よく庖丁目を入れて行く冴えは見上げたものである。著者の頭は鋭いがイラ／＼せず論理的であるがパッションを失はない。加ふるに其筆にデリケートなウイットを洒らしてゐる。尚「不正直なる沈默」以下十數篇は著者の自己及文壇に對する見識の正直且つ大膽なる告白で前の人物評論と合せて最近の文藝及思潮の精髓を窺ふに足る。（世界新聞）

■森田草平氏傑作煤煙續編

縮刷 自叙傳

菊判四百餘頁 布装美本箱入 九十錢税八錢

粗き布のポットりとした装幀なり、此作は云ふまでもなく作者の興味ある生活をさながら打出せるものとして「煤煙」と共に有名なり、安倍能成、阿部次郎兩氏の評を附す。（萬朝）

同じ著者の「煤煙」と共に最も眞面目に一生懸命になつて書いた作で、世をして驚嘆せしめ作者の地位を固めたものである。今や「煤煙特製」と同形同體裁の縮刷となつて現はれた。更に愛讀者を増すことであらう。卷末に著者の友人の評が收めてある。（讀賣新聞）

■江部鴨村氏の新研究解説

タゴールの思想及宗教

四六版二百頁 美装優雅箱入 七十錢税八錢

タゴールの思想を消化し問題の要點を把握して自在に之を説明し去つてタゴールの內生命を紹介せんとしたる所は其の特色なり、タゴールを語るものゝ中大體を領せんとするものに手頃の書として推奬す。（朝日新聞）

印度の哲人タゴールの思想と宗教との大體を何人にも解るやうに極めて平易明快に説てやがて來朝の噂ある哲人を迎へんとする我讀書界に資し及我等が思想生活を豐富ならしむる一冊たらしめた良書である。（國民新聞）

■高濱虛子氏作長編 附錄子規書翰

子規居士と余

四六版三百頁 クロース美本 九十錢税八錢

子規と著者は同じく伊豫の土に生れ同じく俳名を一世に擧げ其交情師弟の如く兄弟の如く親友の如きものあり、著者故人を懷ふ事深く玆に此書あり更に故人の寄せたる書翰百數十通を添へて之に江湖に示せり。（時事）

或時代の生める特異の文學者之を圍繞せる一團の青年と其清き文藝憧憬の念、是等が率直に叙述されてゐる一篇の作品と見るべく子規氏の傳記とも云ふべく而して又一面明治文學史の一部とも稱し得べし。（報知新聞）

發行所 東京本郷元町二丁目 振替東京二八九一四 日月社

現代百科文庫

一編に付十錢 税二錢
五部以上は郵税不要

宗教叢書

新宗教の暗示

- 宗教の新意義（三編分） 谷本博士
- 神社崇敬と宗教（五編分） 廣池博士
- 宗教入門 江部鴨村
- 道綱要 西川光次郎
- 救世軍 同
- カラマゾフ兄弟（六編分含む） 森田草平
- シヤクンタラ姫 同
- 大聖釋尊 江部鴨村
- 高僧と母 同
- 續高僧と母 同
- 俳聖芭蕉 岡本默骨
- 道元と親鸞（四編分） 村上博士
- 天理教祖觀（五篇分） 吳谷文智
- 金光教觀 和泉乙三
- 親鸞と法然 村上專精
- 立正安國論解 柴田一能
- 教祖として見たる天理教 廣池千九郎
- 耶蘇基督 前島潔
- カーライルの宗教 淺海孝一
- 近代思想と宗教 柏原祐義
- 十六羅漢 山邊習學
- オーガスティン論 小宮豊隆

文藝思潮叢書

名流論作

- ▼父と母と娘（小說） 森田草平
- ▼無用語（評論） 安倍能成
- ▼銀座の夜（小說） 小宮豊隆
- ▼藝術家と藝人（評論） 生田長江
- ▼三十三の死（小說） 素木しづ
- ▼杏の落ちる音（小說） 高濱虛子
- ▼一から四まで（小說） 河東碧梧桐
- ▼文藝評論（評論） 小宮豊隆

梗概叢書

古今名著眞髓

- 神曲 ダンテ 森田草平
- ベル・アミー（發賣示） モーパッサン 徳田秋聲
- 懺悔錄 ルーソー 生田長江
- マダム・ボヴリー フローベール 相馬御風
- 死の勝利 ダヌンチオ 水上齊
- 英雄崇拜論 カーライル 中村古峽
- ドリアングレー ワイルド 相馬泰三
- 女の一生 モーパッサン 廣津和郞
- 春の眼ざめ ウエデキント 生田長江
- 武器と人 シヨウ 福永挽歌
- ボオラ（外一編） ピネロ 加藤朝鳥
- ファウスト（三編分） ゲーテ 森田草平
- オルレアンの少女 シルレル 水上齊
- アルネ ビヨルンソン 相馬泰三
- 決闘 クープリン 楢田東聲
- ベルグリンの哲學 牛田眞平

發行所 東京本郷元町二丁目 振替東京二八一九四 日月社

曹洞大學教授　忽滑谷快天先生評釋

和漢名士參禪集

四六判假名附
定價壹圓
郵稅八錢

和漢の聖帝賢臣名僧碩學が參禪の佳話悟徹の美談を蒐めて一々これに辛辣の批評を加へ以て學道の正路を示し在家參禪の資糧に供す讀者これに依つて先德の鉗槌に接し古聖と禪を商量することを得む

加藤咄堂先生
高島米峰先生　推讃

笛岡凊泉先生著

美人禪

四六判假名附
定價壹圓
郵稅八錢

加藤咄堂先生曰はく「戀に泣く美人が嬌態を寫して佛々祖々の玄機を語る文に艶冶の趣ありて想に超脫の旨を存す孰れか禪孰れか戀「美人禪」の一書讀み了りて轉た恍惚たり」と

東京小石川區原町
府東京一五六八六
丙午出版社

東京小石川原町
府東京一三五三
鷄聲堂

十二月號

科學と文藝

價廿五錢

■ミユンヘンに於けるイプセン……榎本安三郎

□金彌のために……岡田八千代

□赤い鍵(戯曲)……高倉輝

□海への騎手(シング戯曲)……陶山務

□感想……清浦明人

□人生と淋菌……羽太鋭治

□英詩……岡田哲藏

□宇宙の構造(附錄)……兒玉昌

□ゲエテと植物學……小川博士

■純粹藝術に於ける形象の意義……小笠原秀實

發行所　東京牛込矢來町三　交響社

■本然生活

再版發賣　定價壹圓

加[illegible]著

これ新人の宗教である。これ彼が信仰の破壞と懷疑の暗黑との中より堀り出したる眞理の黑光である。血と涙とを以て創り出したる新信仰新生活新宗教の第一聲である。眞の光と眞の力と眞の生命は玆に輝き且つ湧いて居る。今や著者は新しい生活の第二の階級に入らんとして居る、そして第三の生活を想望してそゝろに胸の血の湧くを覺えて居る。この書はその爲めの第一階級である。現代の苦悶に惱める者、新しき世界と光と力とを渴望する者は著者と共にこの第一階段を蹈まねばならぬ。

洛陽堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

本号の作製にあたり内容の

森田草平作

縮刷 自叙傳

（好評再版）

入箱菊半截四百頁
布装幀木版七度刷
金九十錢郵税八錢

本書に對する著者の親友諸氏の合評

安倍能成氏
[illegible]次郎氏

[illegible]出世作たる煤煙の姉妹編!!

自序より・・・今「自叙傳」を再び世に送るに就て僅に自ら慰むることが一つある。それは兎に角「煤煙」と共に當時に在ては一生懸命にかいたものだと云ふことである。一生懸命になる、それは今の自分にとつては容易に成れないことである。

▲彼の名作「煤煙」に續くべきものとして著者の畢生の力を籠めし當時の内生命の赧白の表現なること今更言ふまでもなし「兎に角煤煙と共に當時にあつては一生懸命に書いたものだ」と著者の言ふ所は僞りなき告白（朝日新聞）

▲世をして驚嘆せしめ、作者の地位を固めたものである。今や「煤煙」と同形の縮刷となつて現れた、更に愛讀者を増すことであらう（讀賣新聞）

▲粗き布のポツトりとした装幀なり、此作は言ふまでもなく作者の興味ある生活をさながら打出せるものとして「煤煙」と共に有名なり（萬朝報）

▲「煤煙」と相並んで文壇を騷がしたる作者得意の作である主人公要吉が山から歸つて女と別れて仕舞つた遣瀬なさに段々と自墮落な生活に沈んで行く徑路が、讀者を壓し付けるやうな、生一本の力で鮮かに書かれてゐる、「煤煙」に見えてゐる主人公の芝居がかつた遊戯的の氣分が（主人公自分に取ては勿論眞劍なことであつたらうが）大節に無くなつて、いぢらしいほど人間の弱さ果敢なさが現はれてゐる、其れだけ讀者の共鳴をそゝる力が强くなつてゐる、素裸になつた人間の眞實性がしみ〴〵と味はれる、此の意味に於て吾々は「煤煙」よりも「自叙傳」の力が藝術品としても、ヒユーマンドキユーメントとしても、より内容がありより親味があるやうに思はれる（世界新聞）

東京市本郷區元町日月社・振替東京二八九一四番

本号の作製にあたり内容の一部について天理図書館の御厚意により同館所蔵の原本を使用いたしました

青鞜

昭和45年6月15日発行　【第10回配本】

青鞜第5巻　12月号

編著者	平塚らいてう
発行者	藤原正人
発行所	(株)明治文献
印刷	江明印刷
製本	(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 4,500円

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
PL
1756
S45
V.5
no.11

53 126CO 406
XL
04/09 30016-162 UR
HFGroup

University of Colorado at Boulder
U18304 6746589

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PL
756
W6
S45
v.5
no.7-11
1915

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER